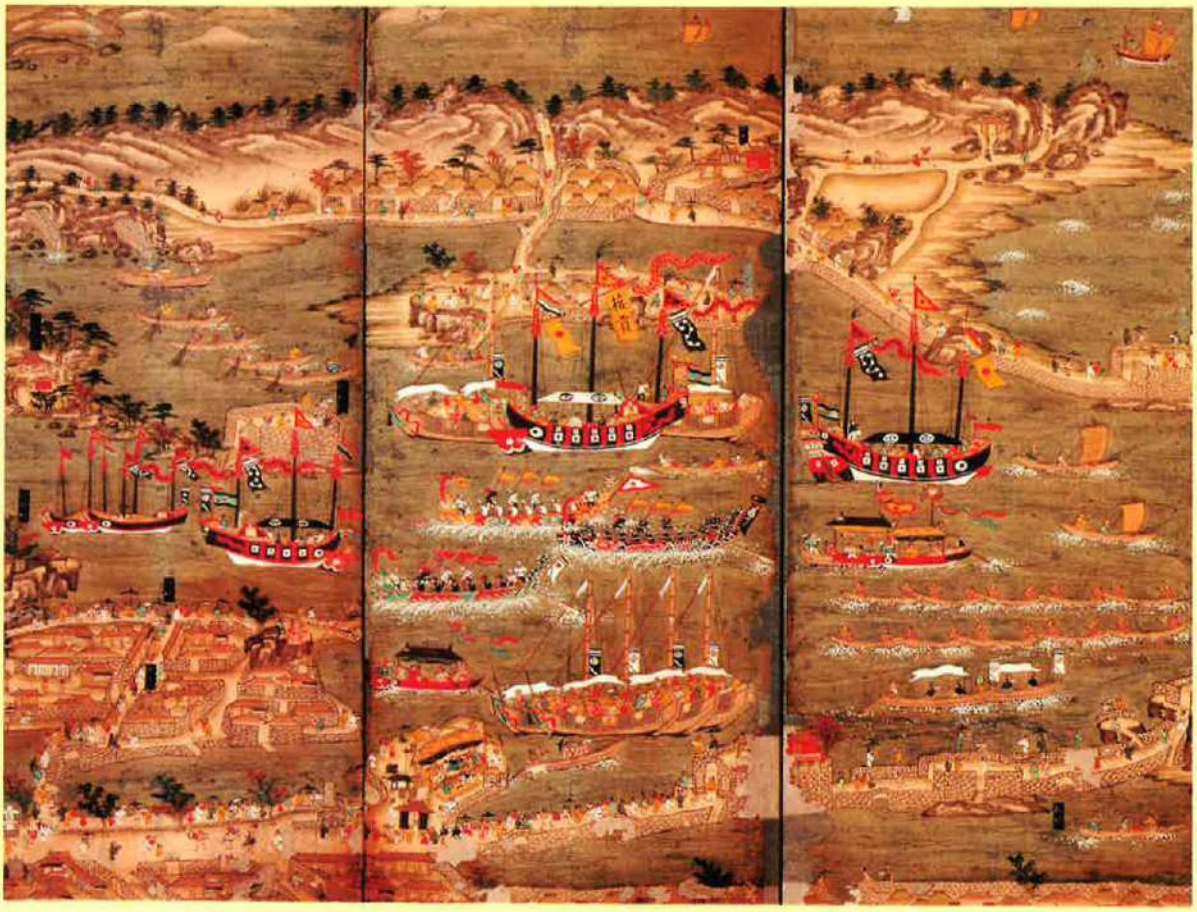
南歯の歩み



浦添市美術館所蔵

沖縄県

社団法人 南部地区歯科医師会

南歯の歩み

20世紀の南部地区歯科医師会の歴史

沖縄県

社団法人 南部地区歯科医師会

社団法人 南部地区歯科医師会

〒901-2134　沖縄県浦添市港川１丁目36番３号
ＴＥＬ　098-876-7364
ＦＡＸ　098-876-6085

南部地区歯科医師会の区域

那覇市	浦添市
豊見城村	糸満市
東風平町	具志頭村
玉城村	知念村
佐敷町	与那原町
大里村	南風原町
渡嘉敷村	座間味村
粟国村	渡名喜村
具志川村	仲里村
南大東村	北大東村

会長挨拶

社団法人南部地区歯科医師会の前身が昭和43年沖縄の本土復帰とともに沖縄県歯科医師会南部支部から、南部地区歯科医師会として組織化されました。あれから30年の歳月が流れようとしています。

当時の会長与那城勇先生の一方ならぬご努力で、今日の会の基礎となる支部組織及び規則が制定され、南部の『和』の精神が昭和61年の法人化へと受け継がれていきます。

一方、市民の口腔衛生意識普及や啓蒙活動について、組織揚げての活動を実践してまいりましたことは、行政も等しく認めるところであります。しかしながら、行財政改革の大きなうねりの中で、この歯科医師会も新たな組織体制で臨むべき段階に入ってまいりました。

この度、会史発刊にあたり写真をふんだんに掲載し、各方面からのご協力ご支援ですばらしい資料として、体裁を整えることができましたことに満腔の謝意を表します。温故知新という箴言に改めて思いを巡らせますが、30年の発展経緯を振り返りまた、更なる飛躍を遂げるためにも、節目となる2000年を迎えるにあたり、ここに改めて過去の業績を踏まえて本会のあるべき姿を顧みる好機かと存じます。そのような折、当会史編纂事業によって過去の歴史を紐解くことで、新に『まあるい南歯』を合言葉としてきた当会を蘇生させていく原動力が生まれるものと期待します。

最後に編纂委員を始め会員の皆様の御協力のお陰をもちまして、ここに会史を発刊できますことに深く感謝申し上げます。

平成11年12月吉日

社団法人南部地区歯科医師会

会長　太田 正昭

―― 目 次 ――

第1章 社団法人南部地区歯科医師会の歩み 3

A. 20世紀の南部地区歯科医師会の夜明け 4
Ⅰ. 日本の歯科歴史の概要 4
Ⅱ. 沖縄県の歯科歴史の概要 10
Ⅲ. 南部地区歯科医師会の歴史の概要 14

B. 社団法人南部地区歯科医師会の法人化の流れ 20
Ⅰ. 社団法人とは 20
Ⅱ. 社団法人の発足 21
Ⅲ. 定款の成り立ち及び定款 22
[1] 社団法人沖縄南部地区歯科医師会定款(昭和47年制定) 23
[2] 社団法人南部地区歯科医師会定款(昭和62年制定) 26

C. 南部地区歯科医師会の事業計画 30
Ⅰ. 事業計画とは 30
Ⅱ. 各年度の事業計画書 30

D. 南部地区歯科医師会の事業内容 35
Ⅰ. 行政機関との連携(行政における歯科分野の協力) 35
[1] 那覇市学校歯科保健大会の足跡 38
[2] 学校歯科及び高校検診 54
[3] 1才半児健診 60
[4] 各市町村及び地区医師会との関係 62
Ⅱ. 南部地区歯科医師会会員の厚生福祉 70
[1] 共済会事業 70
[2] 家族忘年会 72
[3] 南部地区ゴルフ・球技大会 74
Ⅲ. 沖縄県歯科医師会との連携及び協力 76
[1] デンタルフェア事業の連携 76
[2] 沖縄県口腔衛生センターへの協力 87
[3] 沖縄歯科衛生士学校への協力 87
Ⅳ. その他 88
[1] 地区歯科医師青色申告会 88
[2] 南部地区歯科医師連盟 90
[3] 九州八市歯科医師会役員連絡協議会 91

第2章 南歯誕生までに至るよもやま話 93

第3章 南部支部、南部地区 “あの日あの時” 127

A. 歴代の南部地区歯科医師会会長の就任挨拶 130

B. 歴代会長の座談会 141

C. 女性会員の座談会 153

D. 戦前戦後の思い出 160

E. 各事業の思いで 186

F. 夫人部の活動を通して 198

G. 戦後の通貨交換と当時の歯科治療費 201

H. 帯環金属冠等の製作法 206

第4章 各会員・各支部の活動及び比較年表 209

A. 各種比較年表 211

B. 会員の住所録及び歯科医院所在地図 278
Ⅰ.会員名簿及び住所 278
Ⅱ.南部地区歯科医師会会員の医院地図 289

C. 各支部の変遷と活動状況 297

第5章 南部地区歯科医師会の資料編 309

A. 南部地区歯科医師会の財務について 311
Ⅰ.南歯財務の歩み 311
Ⅱ.一般会計決算 312

B. 年代別執行部の役員等の変遷 314
Ⅰ.沖縄県歯科医師会の歴代会長一覧表 315
Ⅱ.南部支部の歴代役員一覧表 315
Ⅲ.南部地区歯科医師会の歴代役員一覧表 316
Ⅳ.南部支部時代の会員の動向 318
Ⅴ.南部地区歯科医師会の会員の動向 319
Ⅵ.支部会(支部長)及び委員の変遷 322

C. 南部地区歯科医師会の各種事業一覧表 325
Ⅰ.那覇市学校歯科保健大会 325
Ⅱ.家族忘年会 327
Ⅲ.デンタルフェア 328
Ⅳ.その他 330

D. 歯科医師数の変遷 338
Ⅰ.南部地区歯科医師会会員数の変遷 338
Ⅱ.沖縄県の歯科医師数の変遷 339
Ⅲ.明治・大正生まれの歯科医師一覧表 341

付録 南部地区歯科医師会会史編纂委員会の概要 345

第 1 章

社団法人南部地区歯科医師会の歩み

A. 20世紀の南部地区歯科医師会の夜明け

Ⅰ.日本の歯科歴史の概要

1. 口中医の誕生の初期(平安時代以前)

2. 口中医の変遷(平安時代以降～江戸時代)

3. 入歯師と歯抜き(江戸時代)

4. 西洋歯科医学の伝来及び先駆者達(明治の初期)

5. 歯科医療制度の確立(明治時代)

6. 歯科医師国家試験(明治時代～昭和時代)

7. 初期の教育機関の設立(明治時代～昭和時代)

8. 歯科大学機関の設立(昭和時代)

9. 日本歯科医師会に至るまで(明治時代～大正時代)

10. 社団法人日本歯科医師会(昭和時代)

1. 口中医の誕生の初期　（平安時代以前）

今日ある歯科制度の歴史をさかのぼれば、中国の制度まで尋ねる事になるが、基本的には中国の唐の時代の制度を模倣した制度であった。718(養老2)年藤原不比等は元正天皇の命で養老律令を作った。養老律令は国家の根本法典であり、その中の律は刑法に当り、令は国家に必要なすべての条項を規定している。この令の中に医疾令があり医療制度を規定している。その医疾令によると、内務省に内薬司があり、宮内省に典薬寮があった。各々の省に薬と医療を担う事が規定され、その役職にたずさわる医師の定員が40名と決められていた。医生(医学生)は40名の内、24名は体療(学習年限7年)、6人は創腫(学習年限5年)、6人は少小(学習年限5年)、4人は耳目口歯(学習年限4年)を学び専門医になった。卒業後はさらに式部の試験に合格したのち医師になり、その地位は進士と同格であった。

このように医療制度は奈良時代以前にでき、口歯の専門医が出来たのもこの頃であろう。しかしながらその制度に従って医療に従事する者は極わずかであり、庶民の大半は民間療法に頼っていた。今日のように寿命が長くない事および甘い食べ物等が少ないため、口の疾患の状態は、現代とは多少異なっていた事が推察される。

2. 口中医の変遷　（平安時代以降）



昭和３年第１回ムシ歯予防デーのポスター

平安時代984(永観2)年に丹波康頼が『医心方』を著わした。これは我国の医学書の中で一番古い書籍で、隋の『諸病源候論』に基づいて編纂された。その第5巻には耳・目・鼻・口・歯・咽喉の各科が扱われている。その中の歯に関しては『諸病源候論』をそのまま引用し、治療術式として薬物の他に、灸法、烙鉄及び祈祷等を挙げている。

丹波康頼の14世紀の子孫に丹波冬康がいて、1314(永和3)年5月3日の花園院御記に『今日、歯が痛くて、それで冬康を呼んで歯を抜いてもらった。痛みがなく非常に上手であり、名歯科医である』と記録されている。この花園院御記から冬康が口歯医として長じていた事が推察できる。冬康の孫の兼康は典薬頭、左京大夫に任ぜられ、また口歯科医としても名高かった。このように丹波康頼以来その子孫、兼康--頼定--頼豊--頼慶--頼元は共に施薬院使典薬頭になった。頼元の養子玄棄は口歯科にすこぶる長じていた。彼は徳川家康の頃幕府に召され、姓を金保と改め長い間その職にあった。江戸時代に口中医として幕府に使えた医官は、兼康、親康両家の他に、金元休庵、福山道安、本康宗寿、本賀順昌、安藤安貞、松本善甫、堀本一甫、佐藤道碩等がいた。このように口中医は長い間世襲として続いてきた。

3. 入歯師と歯抜き　（江戸時代）

一方一般庶民の間では起源は明らかでないが、口の中を治療する者として、口中医の他に、医師でない施術者で伝統的な民間療法を行う人達がいた。彼らは俗に入れ歯師、歯抜きと呼ばれていた。元来、口中医は義歯等の補綴はせず、それらは町の入れ歯師と、香具師に属していた入歯渡世者、歯抜き等によって作られていた。入れ歯師と歯抜きは共に口中治療の全てを行い、区別ははっきりしてないが、入歯を主として標榜したものが入歯師であり、抜歯を主としたものが歯抜きであった。入れ歯師では小野玄入が名高く、江戸時代を通して数代にわたり小野玄入を名乗る者がいた。柳生宗冬の入れ歯は玄入が作ったと言われる。又元禄の頃には小野玄入以外に佐藤文仲と兼康祐元がいた。文仲も代々これを襲名し、7代目文仲は徳川家斎の入歯を作ったのが縁で、天保2年11月幕府医官になった。現在でもこのような人々が作ったといわれる義歯が保存されている。また歯抜きで名高い人として松井源水、長井兵助らがいた。大道や辻盛り場で人を集め、剣道の居合いから出た気合いで歯を抜くのである。歯抜きは抜歯だけでなく歯薬、眼薬も販売していた。このように庶民の間でもある程度の歯科治療が行われており、入れ歯師等が看板を掲げ営業を営んでいたことが文献等で確認できる。

4. 西洋歯科医学の伝来及び先駆者達（明治の初期）



戦時中のポスター

江戸末期には蘭学が盛んになり、シーボルト等の西洋医学が長崎を通じて紹介されていた。その中に口腔外科等に関するものはあったが、歯科全般に関しては時間を待たなければならなかった。日本に最初に来た欧米の歯科医師は、ウイリアム・クラーク・イースト・レイク（アメリカ人）で1860（万延元）年であった。彼は横浜入港後間もなく日本を離れ、香港に根拠地を起き、上海、北京などに出張しながら西洋歯科医学を普及させた。彼は明治元年（1868）再来日し、長崎、次いで横浜でも開業した。さらに横浜開業当時入門した長谷川保兵衛を助手として共に中国、アメリカ、ドイツに渡り、そこでも歯科界に多大に貢献した。イースト・レイクの診察を受けた当時の駐独代理公使であった品川彌二郎は、1875（明治8）年長谷川保兵衛を同伴して帰国した。1879（明治12）年イースト・レイクは再び香港に渡り開業した。この時は安藤二蔵が助手を勤めた。1881（明治14）年イースト・レイクは安藤二蔵を伴って再度横浜で開業した。そこでは長谷川保兵衛の高弟佐藤重が入門し助手を勤めた。イースト・レイクは享年53才1887（明治20）年で病死した。彼は外人歯科医の先駆者であり日本の歯科界に与えた影響は大なるものがある。その後米国人、ヘンリー・ウイン ,エリオット ,マンソン・パーキンス,T.グリクおよびフランス人のアレキサンドリアが来日した。彼等のもとには多くの日本人が入門して西洋歯科医術を習得し、日本の歯科界の黎明期である明治時代に、歯科界の先頭に立って活躍した。

その日本人達の門弟がさらに多くの門弟を養成して日本の歯科界の基礎を作っていった。その中でエリオットの元で学んだ小幡英之助は、1875（明治8）年東京医学校で歯科医師試験を受け、我国で初めて歯科専門の試験に合格して免状を交付された。この免状は医籍の第4号であるが歯科専門では最初のものであった。

1887（明治20）年小幡英之助一門は、学術の研究目的で『歯科交詢（こうじゅん）会』を結成した。翌年解散したが1899（明治32）年同門の人達で『温交会』を結成した。

一方派閥の殻に閉じこもる事をよしとしない榎本積一、在野三郎、本庄郁馬等は各派の同士を集め1888（明治21）年東京に知識の交換を目的とした『歯科談話会』を設立した。この会は更に歯科研究会、後に歯科学会と改名して継続された。しかし明治35年には自然解散となり、日本歯科医会に付設された歯科医学会へと纏められていった。1903（明治36）年日本歯科医会は大日本歯科医会に、歯科医学会は日本歯科医学会に改称し独立した学術団体となった。

5. 歯科医療制度の確立　（明治時代）

明治政府は医療行政近代化の為に西洋医術採用の方針を決めた。当時は医師・歯科医師の区別はなく『医制』ではすべて医師であり、その中で産科・眼科・整骨科・口中科は専門医という扱いであった。明治政府は西洋医学を医療制度の手本としたので、今までの漢方を主とした旧医師から激しく抵抗を受けた。しかし1896（明治28）年第8回帝国議会で漢方医存続案が否決され、従来のように漢方だけ学んでも医師になることは出来なくなった。歯科においても同様で新しく歯科医術開業免許を受けたものは西洋医術を身につけた者でなければならなかった。当時は入れ歯抜歯口中療治営業者といったいわゆる『旧歯科医師』が多く、新しい歯科医師との軋轢は時とともに増大する傾向にあった。政府は1886（明治18）年内務省から『入歯抜歯口中療治接骨営業者取締方』を全国府県に通達して旧歯科医師を取り締ることにした。旧歯科医師の数は新しい歯科医師よりもはるかに多かったので、新歯科医師は業権を確保・伸展し、旧歯科医師に対して優位を保つ為に団結が必要となり、歯科医師団体結成への動きが次第に高まってきた。

6. 歯科医師国家試験　（明治時代～昭和時代）



昭和24年のポスター

1875（明治7）年文部省から近代医療制度の根本を示した医制が東京、京都、大阪の3府に伝達された。また明治8年（1876）医事衛生に関する行政区分が文部省から内務省に移管され、教育と衛生行政とが区別された。1884（明治16）年医師免許規則及び医術開業試験規則（歯科医術開業試験を含む）が公布され、制度上で医業と歯科医業の区別がはっきりと規定された。試験場としては1885（明治17）年本願寺浅草別院と慈恵医院とが割り当てられた。 歯科医籍の第1号は1885（明治17）年登録の青山千代松であった。また1890（明治22）年芝区愛宕町に専用試験場が作られた。これは1897（明治30）年には麹町区永楽町1丁目に移転した。1899（明治32）年永楽町1丁目2番地に医術開業試験付属病院を付設し、それは永楽病院と呼ばれた。1903（明治36）年試験規則が改正され、開業試験の所管も内務省から文部省に移った。それと同時に試験場及び付属病院も小石川雑司ケ谷に移転したが、その後も永楽病院の名称で呼ばれていた。1893（明治26）年までに歯科医術開業免状を取った歯科医籍登録者は219名であった。

1906（明治39）年歯科医師法が制定され、この法律に基づいて歯科医籍が備えられた。1913（大正2）年には医術開業試験規則は医師試験規則ならびに歯科医師試験規則と改められた。小石川雑司ケ谷の医術開業試験付属病院の歯科医長は、当初は東大歯科教室の石原久教授が兼任し、高橋直太郎が医長代行をしていた。その後大正4年にドイツから帰朝した島峯徹が歯科医長となり、大正6年8月には文部省歯科医術開業試験付属病院（通称文部省歯科病院）の院長に就任した。

大正5年10月から医師試験規則が実地されるに伴い、1917（大正6）年に永楽病院は東京帝国大学付属病院（小石川分院）となった。同時に歯科は同病院内に独立した形を取り、文部省歯科医術開業試験付属病院となった。これは大正7年神田区錦町3丁目14番地に病院を建て移転した。歯科医師法に基づく歯科医師試験が大正10年から実地された。大正11年に文部省歯科医術開業試験付属病院は文部省歯科試験付属病院と改称した。大正12年には隣の東京帝国大学地震測定所の敷地を合併し鉄筋3階建の病院が完成した。この試験は昭和21年7月まで続いた。同年8月からは歯科医師国家試験予備試験をもってこれに代えることになった。この予備試験は未指定の歯科医学校（京北、日大夜学）等を卒業した受験生がこの予備試験に合格した後、さらに1カ年のインターンを受け、改めて正規の歯科国家試験の受験資格が認められるというものであった。

7. 初期の教育機関の設立(明治時代～昭和時代)

我国の歯科の教育は明治初期の政府の方針で西洋歯科医学の導入に始まり、それを基本とした中で叙々に私立専門学校を中心に歯科教育が始まった。明治前半までは歯科教育機関がなかったため、西洋歯科医術をもった開業医に師事し、修業後に歯科医術開業試験の受験準備をするにすぎなかった。歯科医術が普及、進歩するに従い今までのような徒弟制度では多くの歯科医を養成する事は難しくなってきた。このような事情から私立の歯科専門学校を設立する必要性が高まってきて、明治後半には次々と私立の歯科専門学校が作られるようになったのである。

1889（明治22）年高山紀斎は芝浦に知事の認可を受けて高山歯科医学院を設立し、修業年限を4年として1895（明治28）年第一回卒業試験を行った。同校出身者には歯科医術開業試験に合格するものが多かった。1899（明治32）年高山から全権を託された血脇守之助は高山歯科医学院を東京歯科医学院と改称し、芝浦から神田区小川町の東京顕微鏡院内に移転した。 1900（明治33）年9月には大成中学校内に移り、更に水道橋の現在の東京歯科大学所在地に移転した。1907（明治40）年専門学校令により、私立東京歯科医学専門学校として設立を許可された。これが現在の東京歯科大学の前身である。

1907（明治40）年中原市五郎校主、原田朴哉を校長として、共立歯科医学校が設立された。同校は1909（明治42）年6月に日本歯科医学校に改称し、8月には私立

日本歯科医学専門学校となり1911(明治44)年から中原市五郎が校長になった。これが日本歯科大学の前身である。

官立の歯科専門学校の実現に関しては、ドイツから帰朝した島峯徹等が、各方面に対して欧米の歯科教育の沿革から今日に至るまでの事を話し、日本でも歯科教育を現状のように私立学校のみにまかさず、模範を示すべき官立の学校を作らなければならない事を説いていた。しかしこれは政治的事情もあってまことに困難であった。1919年(大正8年)臨時教育委員会の最後の会議で、諸懸案の付帯決議として「政府は速やかに歯科高等教育機関を設置すべし」という一項が全会一致をもって可決され、政府はこれを他の諸案件と共に一括上程した。議会では反対もあったが、創立案とそれに伴う予算案は大正11年春の議会を通過した。大正12年9月には関東大震災があったため実現化不可能になったが、昭和天皇御成婚の年、昭和3年10月にようやく東京高等歯科医学校設立の官制が勅令をもって公布せられ、初代校長に島峯徹が任命された。昭和19年、医師養成の急務から医学科が併設され校名が東京医学歯学専門学校と改められた。

1906(明治39)年私立歯科医学校規則が定められて以来、上記の3校を含めて下記のように相次いで歯科医学専門学校が相次いで設立された。これらの歯科専門学校は初期の頃は修業年限は3ヵ年であったが、大正8年以後は4ヵ年に改められた

	校　名	設置認可日
1.	東京歯科医学専門学校	明治40年 9月12日
2.	日本歯科医学専門学校	明治42年 8月12日
3.	大阪歯科医学専門学校	大正 6年
4.	日本大学専門部歯科(旧東洋歯科医学専門学校)	大正 9年 4月
5.	九州歯科医学専門学校	大正10年 7月19日
6.	東洋女子歯科医学専門学校(旧明華女子歯科医学専門学校)	大正11年 1月7日
7.	日本女子歯科医学専門学校(旧東京女子歯科医学専門学校)	大正11年 7月
8.	東京高等歯科医学校(現東京医科歯科大学)	昭和 3年10月12日
9.	京城歯科医学専門学校	昭和 4年 4月

8. 歯科大学機関の設立　(昭和時代)

1945(昭和20)年敗戦後、歯科教育は大幅に改正された。男女同権となり従来男子だけ入学を許可していた歯科医学専門学校にも女子が自由に入学できることになり、東洋女子歯科医学専門学校及び日本女子歯科医学専門学校が廃校になった。昭和21年4月には歯科教育審議会が発足し従来の歯科医学専門学校の大学昇格問題が協議された。旧制大学に昇格した学校は1946(昭和21)年東京医科歯科大学、東京歯科大学の2校で1947(昭和22)年には日本歯科大学、日本大学歯学部、大阪歯科大学、昭和24年には九州歯科大学が昇格した。1947(昭和22)年6月には教育刷新委員会でプリデンタルコース(教養課程)2ヵ年を含む新制歯科大学(修業年限は6ヵ年)の設立が決定された。1951(昭和26)年には上記の旧制歯科大学は、全部新制歯科大学となった。新制歯科大学として認可された学校は下記の通りである。

昭和40年～50年代にかけてこのように急激な歯科大学の設立がなされ、それまで恒常的な歯科医師の不足が叫ばれて来たものが、逆にその後は年間3000名余りの歯科医が誕生することとなり、歯科医師過剰の問題がでてきたのである。

	大　学　名	認可設立年
1.	東京医科歯科大学歯学部	1951年(昭和26年)
2.	大阪大学歯学部	1951年(昭和26年)
3.	東京歯科大学	1952年(昭和27年)
4.	日本歯科大学	1952年(昭和27年)
5.	日本大学歯学部	1952年(昭和27年)
6.	大阪歯科大学	1952年(昭和27年)
7.	九州歯科大学	1958年(昭和33年)
8.	愛知学院大学歯学部	1961年(昭和36年)
9.	神奈川歯科大学	1964年(昭和39年)
10.	岩手医科大学歯学部	1965年(昭和40年)
11.	新潟大学歯学部	1965年(昭和40年)
12.	広島大学歯学部	1965年(昭和40年)
13.	東北大学歯学部	1965年(昭和40年)

14.	北海道大学歯学部	1967年(昭和42年)
15.	九州大学歯学部	1967年(昭和42年)
16.	明海大学歯学部(城西歯科大学)	1970年(昭和45年)
17.	鶴見大学歯学部	1970年(昭和45年)
18.	日本大学松戸歯学部(日本大学松戸歯科大学)	1971年(昭和46年)
19.	朝日大学歯学部(岐阜歯科大学)	1971年(昭和46年)
20.	日本歯科大学新潟歯学部	1972年(昭和47年)
21.	奥羽大学歯学部(東北歯科大学)	1972年(昭和47年)
22.	松本歯科大学	1972年(昭和47年)
23.	福岡歯科大学	1972年(昭和47年)
24.	徳島大学歯学部	1976年(昭和51年)
25.	昭和大学歯学部	1977年(昭和52年)
26.	長崎大学歯学部	1977年(昭和52年)
27.	鹿児島大学歯学部	1977年(昭和52年)
28.	北海道医療大学歯学部(東日本学園歯学部)	1978年(昭和53年)
29.	岡山大学歯学部	1979年(昭和54年)

9. 日本歯科医師会に至るまで（明治時代～大正時代）

1894(明治26)年伊沢道盛、小幡英之助、高山紀斉の3名が発起人となり、歯科懇談会が開かれた。懇談の結果、団体を結成することが決まり、ここに最初の歯科医師団体発足への足固めがなされた。この懇談会のメンバーにより歯科医会結成発起人会がつくられた。その中の歯科医会規則草案起稿委員が仮規則並びに仮規約を作成した後、京橋の大日本衛生会において歯科医会発会式(出席者34名)が行われた。発会式では役員選挙が行われ、常議員8名、監事5名、書記1名が選出されたが、会長は置かなかった。 地方会員も多くなり1897(明治29)年の歯科医会通常総会において『日本歯科医会』と改称することを決定した。1903(明治35)年の臨時総会で会規則の大改革を行った。これにより各地方支部を設置する事を定め、執行部は会長、副会長、理事、評議員という構成に改められた。この総会で会長に高山紀斉、副会長に富安晋が専任された。全国組織であったが、東京を中心とする団体としての性格が強かった。

その後、全国各地を合同した組織を作る必要が叫ばれ1903(明治36)年11月京橋地学協会において、大日本歯科医会設立の発会式が行われた。出席者は116名で選挙の結果会長に高山紀斉、副会長に榎本積一が選出された。引き続き開催された日本歯科医会解散総会において、これに付設されていた『歯科医学会』は『日本歯科医学会』として独立した組織になった。この日本歯科医学会の会長には伊沢信平、副会長に富安晋が選出された。

1907(明治39)年5月2日『歯科医師法』公布となり、10月1日から施行された。これにより歯科医師の身分と業務が法律により裏付けされた医療制度が確立した。(その為に5月2日は歯科医師記念日とされている。)歯科医師法及び関係令規の公布に基づき各地に歯科医師会が設立されるようになった。

大日本歯科医師会はこのような事態に対応して1907(明治40)年4月に『日本連合歯科医会』、その後1918(大正7)年には『日本連合歯科医師会』と改称し会則は全面的に改正された。さらに1925(大正14)年4月12日公布の法律第45号によって従来の任意団体としての日本連合歯科医師会は解散し、法人としての『日本歯科医師会』が設立された。

10. 社団法人日本歯科医師会 （昭和時代）

日本歯科医師会は実質的には昭和に入ってからその活動が本格的になる。その後第二次大戦が始まり、昭和17年には国民医療法が制定され、その勅令634号により医師令及び歯科医師令が発せられた。その結果、戦時体制の中で歯科医師は全員強制的に歯科医師会に加入させられた。会長は内閣任命となり、役員の権限は強化され、医療全てが国家によって統制された。

1945(昭和20)年敗戦後、医師会及び歯科医師会令の改正が行われた。これにより1946(昭和21)年に日本歯科医師会の執行部ができた。1947(昭和22)年には日本歯科医師会定款が、総司令部の事前承認を受け厚生省から認可を受けた。また旧日本歯科医師会は同年11月29日総会を開催して解散し、決算終了後に残りの財産は新しく出来た社団法人日本歯科医師会に譲渡された。新生歯科医師会の事務は新役員が選出されるまで旧役員が代行した。

1948(昭和23)年3月25日第一回代議員会が開催され、初代会長に佐藤運雄氏が選出された。このようにして社団法人日本歯科医師会は発足し現在に至っている。

Ⅱ.沖縄県の歯科歴史の概要

1. 沖縄県初期の医療状況(明治時代)
2. 沖縄県歯科医師会誕生(大正時代)
3. 第二次大戦までの歯科界(昭和時代初期)
4. 第二次大戦後から本土復帰まで(昭和時代中期)
5. 国費留学及び歯科介輔制度(昭和時代中期)
6. 本土復帰から今日に至る沖縄県歯科医師会(昭和時代後期～平成時代)

1. 沖縄県初期の医療状況 (明治時代)

沖縄県には1873(明治6)年外務省出張所医局が設置され、その後、明治12年に沖縄県医局と名称が変更された。明治18年に沖縄県医局の付属養成所として沖縄医学教習所がつくられ、これは明治22年に医生教習所と改称した。また沖縄県医局も明治22年には沖縄県立病院となった。さらに明治23年には産婆養成所も付設され、明治34年沖縄県立病院は那覇市久茂地に移転した。この付属の医生教習所の学生の中から4人のメンバーが沖縄県歯科医師会発足に参加して歯科界に貢献した。尚当時は地方においては医者は患者の全ての訴えを聞いて処置を行っており抜歯等もあったと伝えられる。現在の沖縄県歯科医師会員の中にもその関係者の子孫がいる。この医生教習所は大正元年に閉鎖された。 1915(大正4)年の調査によると、県内医師総数は98人中61人が医生教習所の出身であった。また教習所の卒業生の中には、国会議員や県会議員等の政治家として活躍する者もいたようである。沖縄県でも明治30年に本会員が1人卒業という記録はあるがその詳細については定かでない。明治36年に大日本歯科医会が設立された当時の資料を見ると、全国の歯科医師数700名に対し沖縄県は2人の歯科医が登録されていた。沖縄県で初めての歯科開業は1902(明治35)年首里区鳥堀における楊長積(後に永井長積改名)であった。翌年久茂地では大阪出身の松本和三郎が開業している。

2. 沖縄県歯科医師会誕生 (大正時代)

沖縄の歯科医師達の最初の頃の活動としては、1916(大正5)年4月10日に那覇市で開催された沖縄県衛生展覧会において、初めて歯科の部が設けられ多くのポスターや模型が陳列されたという報告がある。

当時は歯科医師の数も少ない時期であり歯科医師会を組織したくても、規定数に達しない為、医生教習所を卒業して医術開業試験に合格した医師の中で歯科の分野も扱う人々の協力を得て、沖縄歯科医師会が大正9年11月18日に認可された。1920(大正9)年12月4日沖縄歯科医師会の設立総会が行なわれた。場所は那覇区天理教会内で、会員は13名であった。当時の役員は選挙の結果、会長に佐々木義一、副会長に楊長積、理事に山城正忠、久高将旺が選出された。

翌年、那覇市制施行祝賀行事の中で、歯科医師会は自動車でパレードし、ムシ歯デーの旗をひるがえし、集まった人々にビラを配布した。大正12年になると役員改選を行い新会長に山城正忠を選出した。大正14年3月には歯科医師法の改正案が成立し、道府県の歯科医師会設立が義務づけられるようになった。

3. 第二次大戦前までの歯科界（昭和時代初期）

歯科医師法の改正の為、改めて1926(大正15)年7月全国で26番目に沖縄県歯科医師会が設立された。会長には楊長積を選出した。歯科医師会は第二次大戦で壊滅するまで、楊長積が会長に就任し歯科界に足跡を残している。

1927(昭和2)年1月7日健康保険法が実地され、医療給付の為の嘱託歯科医として昭和3年に沖縄から友寄英彦が発令されている。昭和5年11月に楊会長は沖縄から日本歯科医師会議員として総会に初めて出席した。それ以後、毎年総会に代表を送ることになる。

昭和13年1月には厚生省が設置され、それと並行し国民健康保険法が制定され県歯科医師会から佐々木節雄が保険委員に任命されている。ちなみに昭和13年の歯科医師数を警察管轄別に見ると、那覇市19人、首里1人、与那原3人、糸満1人、嘉手納6人、名護4人、渡久地2人、宮古2人、八重山2人の合計40人になっている。戦時色も近くなった昭和13年になると歯科軍医制度の発足があるが、当時はその定員が少なく、歯科医は歩兵として召集される者が多かった。1941(昭和16)年12月8日第二次大戦に突入し、歯科医師会にも昭和17年8月21日歯科医師会令が公布される。昭和18年1月26日勅令により沖縄県歯科医師会が改めて設立された。会長永井長積以下50名の会員はこの規定に基づいて事務所を会長宅より那覇市上之蔵町に移転し、改めて事務局長を採用することになった。

昭和19年10月10日沖縄は初めて米軍の空襲をうけた。午前6時40分頃に200機余りの米艦載機が沖縄本島上空に現れ空爆をはじめた。当時は沖縄守備軍も全く予期していなかった為、この空襲で壊滅的な打撃を受け歯科医師会事務所だけでなく、会員の診療所及び治療器具器械等も失うことになる。

4. 第二次大戦後から本土復帰まで（昭和時代中期）

1945(昭和20)年4月1日米軍は54万8000の兵員と1500隻余の艦船をもって沖縄本島の中部西海岸に上陸を開始した。この激戦は第二次大戦最後の戦いであり、制空権を失った日本軍は圧倒的な米軍の力に持久戦法を取る事になる。我々歯科医師も戦闘に巻き込まれて10名の戦没者を出した。米国は沖縄本島上陸と同時に布告第1号を公布しいわゆる米国海軍政府の法の下に沖縄を置くことになる。

布告第9号「公衆健康及び衛生」の中で「占領地域における免許状を有する医師、歯科医師、薬剤師、看護婦、産婆、その他の者に対して病人を治療し病気の予防治療をなし又は薬剤を配付する者はおって軍政府から命令あるまでは各自その業務を継続し軍政府は占領地域において病気の治療及び予防又は公衆衛生に関する業務に従事する人々に免許状を交付し又はそれを停止或いは廃止又はそれらの人々の行為を取り締まる機能を有する」とある。すなわち米軍は大きな収容所に米軍医を配置して治療に当たらせ、また地方においては日本人の医師や歯科医師に機具や薬品等を与えて治療に従事させたのである。

1945年日本が降伏した8月15日石川市において米軍は15人の代表を選び諮問委員会を発足し、沖縄の行政に当たることになる。その中で公衆衛生の委員なった大宜味朝計が最初に手を付けたのが生き残った医師、歯科医師、薬剤師等の医療関係者の確保であった。1946年になると沖縄民政府が誕生し、その発足と共に貨幣制度がスタートし、病院診療所に配置された医師・歯科医師などの医療人にも公務員として暫くは給与が支払われるようになる。しかし一般の住民は現金収入がないので医療費は一時無料診療が行われていた。当時の治療はコザ中央病院が中心になっており、各地区には病院・診療所が設置された。歯科医師も主な診療所に配置されいたが、医療器機・材料が不足の為、抜歯や痛み止め程度の治療しか出来なかった。1947年中央病院の歯科部長だった平良進が中心になり沖縄歯科医学会が結成された。

1951年1月19日布令31号により今までは認められなかった自由開業が許されるようになる。しかし絶対数が少ない為、開業医師・歯科医師の配置制が導入された。この制度も約2年で終わりその後にやっと本格的な自由開業ができるようになった。



復帰前の役員等

戦後の沖縄歯科医師会の設立は、自由開業が認められた1951年の3月である。1952年4月1日各群島政府を統合する機関として琉球政府が誕生したが、それに伴い沖縄群島歯科医師会（喜納宏会長）が結成され、群島歯科医師会を統合する組織として琉球歯科医師

会(平良進会長)が結成された。戦後から復帰前までの沖縄歯科医師会の歴代会長を列記すると平良進(3回再任)、喜納宏、高江洲義光、小那覇全孝、山川文雄、登川正樹の6名である。これらの会長のもとで、歯科医師会は沖縄の戦後復興に貢献し発展に寄与して来た。

1959年になると沖縄の医療事情もかなり復興され、在沖米軍歯科医師会との交流も始まり、第一回米琉歯科医学会が開催された。1960年代になると歯科医師会も口腔衛生の啓蒙に取り組むようになる。街頭検診や僻地での検診もするようになった。特に1970年代になると米軍がヘリコプターを出動させ、伊平屋、伊是名、渡名喜島などでの検診診療を行い辺地の住民からフライング.ドクターと呼ばれて感謝された。この離島診療は、現在では厚生省派遣の巡回診療班に引き継がれている。

戦後から復帰前までの医療保険に触れてみると沖縄は米軍の占領と同時に日本の法律の枠から完全に切り離され、間接統治の形で施政権を行使されてきた。その為本土とは異なる医療保険制度の導入が検討された。戦後間もない頃は治療が無料だったこともあって医療保険は必要ではなかったが1948年頃から診療費の徴収がおこなわれるようになると、住民の中で医療保険の必要性が認識されるようになる。当時の琉球政府社会局は1955年医療保険制度の作業に着手し、翌年各界の意見を聞く公聴会を開いた。しかしこの時できた制度案は、より優れた制度に改定すべきだと言う多数の意見により見送られることになる。1958年再び医療保険法案を作成したが、市町村長等と医療担当者との意見が折り合わず、1959年再度審議会を開催した。1960年に原案を再び手直しして立法勧告を行ったが、立法院議会の会期切れで、審議未了のまま廃案となってしまう。

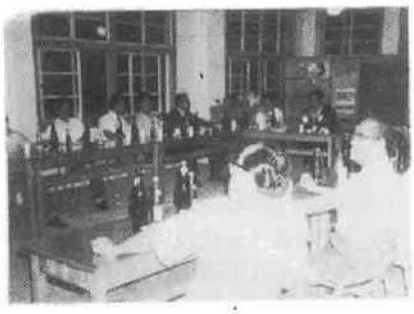
しかしこのような紆余曲折を経ながらも保険制度の制定に着手してから11年目の1965年に沖縄独自の医療保険法が琉球政府主席の署名を経て公布されることとなった。保険料徴収が開始されたのは1966年7月1日からである。このように長期間の審議になってしまったのは本土の保険法(現物給付)の欠陥が取り上げられたり、又沖縄において現金給付医療保険を適用するにしてもまだ行政基盤が整わず、琉球政府の財政的な問題もあり、さらに各界の意見が一致しなかったからである。この保険制度は開業医にとっては事務的な煩わしさも無く、受け入れやすい制度であったが、患者にとっては不評であった。この現金給付医療保険も、その後数年で訪れた本土復帰に伴い本土並みの現物給付医療保険へと変わっていった。

5. 国費留学及び歯科介輔制度(昭和時代中期)

戦前戦後を通じ沖縄は医師、歯科医師の少ない県だったので、1949年3月から医療界の人材育成の為、本土に留学生を送りだす事になり、歯科では伊禮迅と比嘉良有が第1回留学生として本土に派遣された。その後、国費学生と名称は変ったが、そのおかげで本土の国立、公立歯科大学で学ぶことができ、留学制度は沖縄の人材育成に多大な貢献をした。

沖縄の歯科医師は第二次大戦前には69人もいたが戦後昭和22年には32人に減少していた。その後増加傾向にはあったが、医科も歯科も絶対数が足りず医介輔、歯科介輔制度が取り入れられた。この歯科医師助手廃止に伴う制度は米国民政府布令42号(1951年)によるものである。この歯科介輔とは免許歯科医師と共に、或いは直接監督指導の下に少なくとも1年以上の訓練を受けた者、歯科応急手当、適当なる予防及び処置、技工処置等の服務訓練を受けた者、布令発布当日までに引き続き3年間歯科助手として勤めた者、布令発布以後は、正当に資格ある免許歯科医師又は保健所長の監督のもとにのみ利用せられる者という制度であった。1951年当時は8名の歯科介輔がいて僻地離島で主に免許歯科医師のいないところで開業し、沖縄の特殊事情による歯科の分野をカバーした。 年輩者が多く昭和60年までいたが、その後は免許歯科医師による開業の増加のためしだいに見うけられなくなった。

6. 本土復帰から今日に至る沖縄県歯科医師会(昭和時代後期～平成時代)



泡盛会館当時の会議

1972(昭和47)年5月15日沖縄の施政権は日本に返還され27年目にして悲願の沖縄県が誕生した。県歯科医師会はそれまで組織としては発展をしてきたが、歯科医師会館がなく那覇市泊の泡盛産業ビルの3階を借り、そこを事務所として歯科医師会の機能を果たしてきた。しかし復帰前後にかけて会館を建設しようという事で登川正樹会長のもと、昭和50年3月30日待望の沖縄県歯科医師会館が落成した。総工費2億3424万3267円で4階建て総面積1714.55平米の素晴らしい規模の建物で、その後増築もあり、南部地区歯科医師会の事務所も現在その中にある。

同年4月1日から沖縄県歯科衛生士学院が設置され、その後現在の歯科衛生士学校に移行している。又同時に沖縄県口腔衛生センターが併設され、軽度の心身障害者の歯科治療も行い、昭和54年6月からは全身麻酔の導入による重度身障者の歯科治療も実施した。現在では休日診療も会員の輪番制で行い、県民の歯科治療に貢献している。

沖縄学校歯科医会は昭和42年3月26日設立総会が開かれた。しかし昭和50年代になると会員も次第に増加し、内容も多様化してきた為、昭和57年に県歯科医師会が学校歯科医会をその組織に組み入れた。

昭和51年に、3期6年間の登川正樹会長の後を引き継いだ玉城信徳会長は2期4年の間復帰後の歯科医師会の発展に寄与することになる。昭和52年第1回デンタルフェアが開催され現在も各地区の主管の下、盛大な催しものになっている。同年11月には現在の沖縄歯科医学会の前身である第1回臨床談話会が開催された。昭和53年には一才半の歯科健康診断がスタートした。

昭和55年、比嘉良有会長は2期4年会長として会員をリードしていく。昭和59年2月11日沖縄県で初めて第36回九州歯科医学大会が開催され復帰後10年目にして本土との一体感を味わった。沖縄県の力を充分に発揮した大会だった。昭和58年には沖縄歯科医師会青色申告会が発足した。

昭和61年になると全国的に歯科開業医が増大し、歯科界の冬の時代と囁き始められた時期であった。その中で西平守廣会長は会員の先頭に立ち、団結と協力の下に、2期4年を安定した会務運営に努力した。対外的には昭和62年第一回歯科保健図画、ポスター展を開催し、平成元年には沖縄県歯科医警察協力会が発足する。これにより今後の大規模災害事故に対処できる基礎を作った。特に第42回「保健文化賞」の受賞は公衆衛生活動のノーベル賞と称される程大変名誉ある賞を会として頂いた事は我々会員の誇りと喜びである。

平成3年から8年まで2期6年は又吉達雄会長が県歯の先導役を引き継ぐことになる。就任早々第44回九州歯科医学大会がコンベンションセンターで開催され、平成7年には第1回「歯ッピーファミリー劇場」が始まり、現在も何千人という観客に口腔衛生の啓蒙を行っている。平成8年になると全麻酔下歯科治療も1000症例を超える事になる。

平成9年から現在までは喜屋武満会長が就任し、平成10年11月に初めて沖縄県で「第62回全国学校歯科保健研究大会」及び「平成10年学校歯科保健研究協議会」を開催し、全国から学校歯科関係者が1800名余も参加して盛大に挙行された。

沖縄県の歯科の活動を振り帰ってみるとその時々の社会状況と密接に関連している。
明治以前の歯科に関する資料がなく記載できなかったが、初期の頃は医師が歯科を含む全ての処置にあたっているか、民間療法的な対応をしていたと推測される。明治生まれ、大正生まれの歯科医師の名簿を見ると、相当数おり又他府県出身者の活躍も目立っている。彼等の対社会啓蒙活動は、少ない人数で如何に目立って活動ができるかに知恵を絞っていた。

また第二次大戦後の特殊事情により激減した歯科医師を補う意味で歯科介輔の制度ができたのも沖縄独特の制度であった。それに国費留学制度が現在の人材を育んで来たことも忘れてはならない。また私立の歯科大学を卒業して活躍している歯科医師も多かった。全国的傾向であるが、歯科大学が29校もでき毎年約3000人余が卒業しているため、歯科医師過剰時代になり開業場所が段々少なくなっているのが現状である。

Ⅲ. 南部地区歯科医師会の歴史の概要

1.与那城勇執行部時代	1970年(昭和45年)～1973年(昭和48年)
2.高良政利執行部時代	1974年(昭和49年)～1975年(昭和50年)
3.嶺井浩執行部時代	1976年(昭和51年)～1977年(昭和52年)
4.高江洲旭執行部時代	1978年(昭和53年)～1979年(昭和54年)
5.玉木史朗執行部時代	1980年(昭和55年)～1983年(昭和58年)
6.友利政三執行部時代	1984年(昭和59年)～1987年(昭和62年)
7.高江洲正勝執行部時代	1988年(昭和63年)～1989年(平成2年)
8.新城啓和執行部時代	1991年(平成 3年)～1993年(平成5年)
9.新垣元洋執行部時代	1994年(平成 6年)～1996年(平成8年)
10.太田正昭執行部時代	1997年(平成 9年)～1999年(平成11年)

ここでは南部地区歯科医師会がいつ頃誕生し、どのような歴史を経て、今日の社団法人南部地区歯科医師会となったのかを紐解いてみたい。第2章[4]南部地区歯科医師会の誕生に至るよもやま話の第二十五話「南歯誕生」にもあらましは記されているが、ここでは各執行部毎のトピックを採り上げて流れをみていく。大筋は総会資料に記載されている会務日誌を基本とし、さらに各種の資料等を元に歴史を整理した。



沖縄県歯科医師会南部支部臨時総会(幸楽にて)

戦後の混乱期を経て沖縄県歯科医師会の名称が定まった1954(昭和29)年頃から、南部支部の文字をその当時の資料に散見することができる。そのときの県歯の会員数は70名に満たないものであった。それ以後1969(昭和44)年まで、南部は県歯の一支部である南部支部として存在していた。しかしそれは、あくまでも学術団体・親睦団体という任意団体としての存在であり、支部長は県歯の会費の集金係兼メッセンジャーボーイ的役割を担っていた。ここで言う支部長は今の南部地区の会長に当る存在である。ところが時代が進み、1966(昭和41)年には現金給付方式医療保険が発足し、さらに1972(昭和47)年祖国復帰に伴う現物給付方式医療保険のスタートを控えた状況で、会務が徐々に増え、対社会的な活動もしだいに増加の一途をたどるにつれ、支部長一人、副支部長二人の僅か三名の役員では会務がこなしきれなくなってきた。このような流れの中で南部支部から、より組織化された地区歯科医師会への脱皮がなされたのである。

1. 与那城勇執行部時代



臨時総会終了後

1970年5月29日南部支部総会がもたれ、支部長に与那城勇、副支部長に富本盛弘と上原斉が選出された。これらの先生方は南部支部最後の役員となった。31日には前支部長金城一史の自宅で事務引継ぎが行われた。当時の会員数は64名であった。同年7月18日料亭幸楽での南部支部として最後の総会において、会名を「沖縄南部地区歯科医師会」と改称している。その際、富本副支部長は県歯役員に転出のため、松村政昭が副会長を引き継いだ。副会長2人制はこの時限りであった。



昭和四六年歯の衛生週間

与那城勇執行部の時代は復帰前後の慌ただしい世相に対処しなければならない厳しい時代であった。復帰に際しての新たな現物給付制度保険への取組みに日夜となく勉強会や行政との折衝が行われた。そのような社会状況の下で、1970年6月9日那覇地区・南部地区各小中学校「良い歯の王様・王女様」表彰の会を実施するなど、活発な公衆衛生活動が行われ、それまでの単なる親睦団体から社会的活動団体への歩みが始まっていた。組織的には会務伝達経路や分会組織編成を決めた。会務伝達経路は、今も学校などで使われているような緊急連絡網である。事務局のなかった当時の会員への情報伝達手段としては最適なものであった。分会組織は三分会・六班で編成された。これは現在の南部地区歯科医師会の支部組織のスタートである。

1972(昭和47)年3月17日の臨時総会において「社団法人南部地区歯科医師会定款」が制定された。社団法人と銘打ってあるものの正式な登録は行ってはいなかった。当時の社会状況では黙認されていた。しかしこのような成文化した定款を一地区が持ったということは、その後の南部地区歯科医師会の活動・発展に多大な影響を与えることとなる。すなわち現在の社団法人南部地区歯科医師会の原型が作られたのである。この頃は代議員会組織がなく、その代わりに、運営委員会が設置され、執行部へのアドバイス等が行われていた。

1972年度の総会(昭和47年4月30日)ではこの年度の事業計画として「県歯会事業に順応してこれを推進する」ことと、早くも「法人登録にする検討」が事業計画に上がっている。さらに「現物給付制度保険及び医業経営に関する諸準備と対応」、「公衆衛生に関する事業の推進」も事業計画に含まれていた。またこの総会において分会組織を発展させて6支部(牧志・松尾・開南・崇元寺・城南・南)を編成することとなった。この総会で三役以外に初めて理事2名、監事2名が誕生した。

1974(昭和49)年1月には那覇市医療協議会が設立された。同年2月には日歯及び県歯からの依頼で「歯科助手認定講習会」を実施した。その後、この講習会の講師陣はそのまま県歯が計画していた歯科衛生士学院の講師となり、多いに活躍することとなった。この当時は口座引落としによる会費徴収もできず、何らかの会合時に会費を集めたり、時には個別に集金に回る事もあった。文書もガリ版刷りで制作する時代で、手当もなく無報酬、今で言うボランティアである。彼ら役員の苦労は計り知れないものがあった。役員理事手当が僅かながら支給されたのは1978(昭和53)年からである。



定款制定記念謝恩会　昭和47年度定期総会

2. 高良政利執行部時代

高良政利執行部の時代は、1974(昭和49)年会員数81名でスタートし、同年に南部としては最初の事務員を採用して事務局を会長宅に設置した。会費の口座引落しもこの当時に始まった。また会を新たに6つの支部(名称は同じ)に分け、それぞれに支部長をおいた。執行部には新たに専任理事として保険・学術の役員が任命された。1975年には県歯が泡盛産業ビルから現在の県歯会館に移転したことに伴い、南部地区歯科医師会事務局も新会館に移転した。

当時の会員数は91名、会費月2,500円、年間予算額は300万円程度であった。予算上は委員会費が計上されていたが、執行部役員・運営委員の先生方の手当はまだなかった。この当時の会合は殆どが復帰に伴い施行された現物給付医療保険の勉強会となっていた。1975年からは高校集団検診がスタートした。同年9月29日には第1回那覇市立病院建設基本構想審議会が開催され、高良会長、与那城前会長が委員として参加した。

この当時、1日100人前後、夏休みには1日150人にも上る患者の多さに、忙しすぎるという理由で診療拒否をする会員が出始めた。南部地区歯科医師会は、文書により会員に注意を促すこともあった。また歯科医師の少なさにつけこんで、無資格診療をする者も現れたので、会としてその取締りを警察にお願いした。しかしそのような社会現象も歯科界の潤った時代の幕開けを告げるものであろう。



沖縄県歯科医師会館工事前



昭和53年3月沖縄県歯科医師会館

3. 嶺井浩執行部時代

嶺井浩執行部の時代には支部会活動の強化が事業計画として採り上げられ、支部会再編が行われた。会員数は97名で、会員を10支部(首里・泊・糸満・浦添、松尾・南・若狭、安里・牧志・開南)に分け、会員間の親睦と意見交換の場が提供された。この頃は南歯の基本である支部会活動の揺籃期であった。委員会費総額はこれまでの10万円台から25万円に増えたが役員理事手当はまだ支給されていない。また「政経文化パーティー」への参加など政治的な活動も行われ始めた。

1976(昭和51)年9月には那覇市医師会から那覇準看学校講師の派遣依頼があり、宮城正廣を派遣した。この講師派遣は今でも数年毎の交代制で行われている。当時、生活保護の指定医療機関は歯科医院全体の60%にも満たなかった。又この頃、自由診療である金属床・ポーセレン・金の三種が保険に組み込まれると言う動きが中医協の場で出たため、これを「最悪事態」として会員の間でこの件に関する議論が盛んに行われた。また非歯科医師が開設する歯科医院の歯科医師の入会問題が持ち上がった。当時の歯科医師会には営利目的の診療所は馴染まないとして入会を断った。

この頃はまだまだ患者が多く、いかにして多くの患者を診るか悩む時代であった。そのような状況の中から、患者を減らし、病気の元、むし歯の元を絶つためには、啓蒙活動が重要であるとの認識で会員の考えがまとまった。そこで当時の歯科研修同好会が中心となり、1977(昭和52)年6月2日に県歯主催で第1回デンタルフェアが那覇市内の旧デパートリウボウ(現在のベスト電器那覇店)6階催事場で開催された。同年9月28日には那覇市立病院の起工式が行われ、南部地区歯科医師会の役員が出席した。

4. 高江洲旭執行部時代

高江洲旭執行部の時代は会員数102人でスタートした。支部会活動では、この頃も模合を利用して出席率を高める努力がなされていた。1978年(昭和53年)12月に会員相互の親睦を深めるため第1回家族慰安会が開催された。場所はハーバービューホテルで、費用は参加者負担であった。これはその後発展し、現在の家族忘年会として受け継がれている。会員内部の交流の機会と同時に、日頃お付き合いをしている方々をお呼びして、対外的な親睦の場としても、有意義な忘年会となっている。



高江洲会長は就任当初から那覇市に対し、デンタルフェアの補助金の要請を行った。何度も行政との交渉が行われた結果、その努力が報われ、1979年第3回デンタルフェアに那覇市から補助金50万円が出た。これは金額の増減がありながらも現在まで継続されている。最も今(平成10年)はバブル崩壊による不況の煽りを受け、補助金は減少の一途をたどっている。この頃、那覇市内での歯科医院増加傾向が高まりつつある事から、適正配置を意図して開業相談委員会も作られ、資料収集、金融機関との交渉が行われた。また夫人部の発足にも着手した。

1978(昭和53)年から1才半児歯科健診が、国の事業から市町村の予算事業として実施されることになり、地区歯科医師会が健診医を派遣することとなった。しかし予算事業であるため、南部の全ての自治体が1才半健診を行ったわけではなく、南部地区歯科医師会に健診医派遣を依頼した市町村は10ヶ所に満たなかった。南部地区歯科医師会では、その健診料をプールして、福祉共済事業に役立てることになった。

5. 玉木史朗執行部時代

玉木史朗執行部の時代も精力的な活動が目立つ。会員数は121名でスタートした。これまでの十支部を十日会(首里・泊・糸満・浦添)、15日会(松尾・南・若狭)、三水会(安里・牧志・開南)の三つのグループにまとめて会合を持つようになった。



1980(昭和55)年には那覇市教育委員会との懇談会を持ち、これは現在も形態・規模を変えて継続している。新たに公衆衛生理事、広報担当理事が置かれ、南部にとっては初めての定期刊行物としての会報「南部地区歯科医師会だより」第1号が1980年5月25日に発行された。これまで資料収集に当っていた開業相談委員会も体制が整い、新入会員への活動を開始したが、歯科材料店等からの新規開業者の情報が少なく、数年で委員会は解散した。

1982年に支部会の再編を行い、12の支部が誕生した。これらの支部はそれぞれ3支部が三水会(首里・松川・浦添)、15日会(与儀・泉崎・寄宮)、十日会(安里・牧志・松尾)、一日会(若狭・小禄・糸満)を形成して会合を持った。福祉共済金の運用のための整備も着々となされていった。また定款・諸規則の整備も行ない、組織充実を推進した。

1984(昭和59)年1月には那覇地区・北那覇地区の歯科医師青色申告会が発足、2月には両地区歯科医師青申会主催の税務指導会が開催された。同年2月10日には第2回九州八市歯科医師会役員連絡協議会が沖縄で開催され世話役を務めた。学校の養護教諭の方たちとの懇談会も開催され、この中から後の那覇市学校歯科保健大会の話が芽生えてきたのである。歯科医師過剰問題が那覇市において身近に感じられるようになったのもこの頃からである。

6. 友利政三執行部時代

ブルドーザーと呼ばれた友利政三会長の時代には会員数158名となっていた。理事会以外に支部長も含めた拡大理事会がもたれるようになったのは1984(昭和59)年6月19日が最初である。現在行われている幾つかの事業がこの時代にスタートしている。また委員会組織が確立したのはこの執行部のときである。



1984年に第1回南部地区ゴルフ大会が開催され、現在(平成11年)では第56回を数えるまで継続されている。1985年には第1回球技大会と第1回那覇市学校歯科保健大会が開催されている。球技大会はソフトボールとバレーボールの2種目で、かなりの熱戦が繰り広げられた。また当時の幼児達に顕著に見られるようになった「噛まない・噛めない・飲み込めない」現象を憂い、それに対して警鐘を鳴らすために始まった那覇市学校歯科保健大会は、平成11年10月で第15回となり、那覇市教育委員会との共催事業として、各方面から多大な評価を受けているものである。この大会については別項で詳しく記す。

この当時支部会の機能が沈滞していた状況があったため、1986年には支部の再編を行なった。3地区9支部とし、それぞれの地区に地区担当理事をおいた。これは将来の南部地区内における分離独立を想定しての

理事配置であった。この時できた9つの支部組織は今(1999年)でも変わらず続いている。この頃、那覇市立病院に一般歯科のテナントを作る話が持ち上がったため、友利会長以下数名で那覇市立病院および那覇市と交渉し、公的病院への口腔外科の設置を実現してもらった。これは市民にとっても喜ばしい事であった。

さて、この執行部の最大の業績は南歯の法人化である。1985年8月23日に法人設立準備委員会を持ち、当時の行政との対応など様々な困難を乗り越えて社団法人南部地区歯科医師会が設立認可されたのは1987(昭和62)年1月27日であった。これまで単なる親睦団体として扱われた南部地区歯科医師会が法人格を持つことにより、デンタルフェアや健診業務など会としての対外的な活動が、あらゆる面でよりハイレベルに展開されることになった。また同時に、県歯を補完する地区としての対応もより充実したものとなった。

さらにこの時成立した定款により顧問制が発足し、南部地区歯科医師会の会務の継続と発展に貴重な意見を提言していただけることとなった。1987年には第1回デンタルフェア浦添が開催された。同年6月事務職員が採用され事務局は2名体制となり、法人としての会務運営と会員増加に伴う事務局の仕事増に対応した。

7. 高江洲正勝執行部時代

高江洲正勝執行部の時代は、社団法人としての基礎を築く時代であり、前執行部の開始した事業の継承発展の時期であった。会員数は当初180名であった。執行部の任期も3年に延長され、那覇市学校歯科保健大会をはじめ、ゴルフ大会、球技大会等内外に活発な事業展開が繰り広げられた。



1988(昭和63)年の事業計画には「子どもまつり健診相談」が示され、地域団体の催すイベントへの協力体制を整えた。同年6月17日南部地区歯科医師会諸会費銀行口座振替業務が開始された。

1989年には「会員相互及び関係諸団体との親睦」が事業計画に明記され、家族忘年会の充実が図られた。ゲストは琉球大学口腔外科をはじめ数十人に上り、さらに子ども連れの多数の会員が会を盛り上げた。1990(平成2)年には「首里りうぼう」において第1回デンタルフェア首里が実施された。那覇市内で2箇所のデンタルフェアの拠点ができ、地域密着型のデンタルフェアが推進されていった。

1991年2月17日の第5回南部地区球技大会からは種目をボーリングに変えて開催し現在に至っている。1991年3月には第1回那覇市教育委員会懇談会が持たれている。これは三師会を含めた会合で、従来あった歯科医師会と教育委員会との懇親会が発展したものである。また執行部・事務局・会員の間の連絡をスムースにするため、希望者にFAXの共同購入をして頂いた。これにより会内部の通信事務の時間短縮がなされ、また伝達内容が正確に伝わるようになった。

8. 新城啓和執行部時代



新城啓和執行部は会員数197名でスタートした。初年度(1991年)5月には事務局にパソコンを設置し、新しい情報化時代への対応の第1歩を歩み始めた。事業計画には学校歯科医の資質向上を掲げ、歯科校医のレベルアップを目指した。5月20日には那覇市制20周年式典において(社)南部地区歯科医師会が特別表彰を受けた。同年11月には第10回九州八市歯科医師会役員連絡協議会が那覇市で開催され、その世話役を務めた。

1992(平成4)年10月には第1回那覇市健康フェスティバルがパレット久茂地で開催され、開会式には新城会長が出席し、歯科健診相談コーナーには会員4人が参加した。また豊見城村、糸満市、浦添市で次々と健康をテーマとした祭りが開かれ、歯科コーナーに南歯から会員を派遣し協力した。行政が歯科保健に対し次第に理解を深め、行政レベルでの歯科保健の実践を始めた時期であった。

1993(平成5)年のデンタルフェアでは那覇市保健センターに小禄会場が新設された。以後、南部におけるデンタルフェアは那覇市内3ヶ所、浦添市1ヶ所の計4つの会場で開催されて現在に至っている。

1994年3月28日「那覇市学校歯科保健大会講演録」が発刊され、第1回から第8回までの大会の講演内容が保存されている。また那覇市教育長も交えた座談会も掲載し、歯科保健活動として評価の高い本大会の流れを纏める事ができた。

9. 新垣元洋執行部時代



新垣元洋執行部スタート時の会員数は215名であった。この執行部では、前年度まで理事会と拡大理事会の月2回の会議を持っていたものを、支部長を交えた拡大理事会のみとして会務運営を行った。但し、予算編成期には理事会を開催し、事業の見直し等執行部としての見解をまとめた。またFAX・電話による役員間の意思疎通を図り、一堂に会しての時間的・空間的な物理的

拘束を最小限にする努力をした。この形を支えたのが支部会組織である。支部会における会員相互の意見交換が十分に行われ、会員のコンセンサスを得る事ができることは、南歯の会務を円滑に進めていく基本である。この南歯の支部会機能は、これまでの会員の理解・協力及び執行部の努力が生んだ南歯の財産であろう。

1980年から発行されてきた「南部地区歯科医師会だより」は1994(平成6)年8月号から「綾羽(あやば)」と改名した。「あや」とは「美しい、きれい、希望」という意味の言葉である。1995年1月には那覇市学校歯科保健大会が第10回記念大会としてシンポジウム形式で開催された。同年3月に開催された平成6年度の総会はハーバービューホテルで合同支部会を兼ねたものとなり、出席者が100名を超える多人数の総会となった。しかし一人5,000円の支部会費を集めて行ったので、一部の会員から苦情が出た。翌年は、総会といつも同時に行う歯科医師連盟の大会を予算化してそれを使ってハーバービューホテルでの総会開催を実施した。

1995年4月には四役、広報理事、各地区担当理事による会史編纂準備委員会が開かれ、会史作りの第1歩を踏み出した。翌年5月には渡口進一会員を委員長とする会史編纂委員会が発足した。

1996年1月第32回沖縄県学校保健研究大会で学校歯科保健優良団体として学校保健功労賞を授与された。これは南部地区歯科医師会の社会活動が評価されたものである。各市町村での健康をテーマとした催しもますます盛んになり、南歯からの会員派遣も頻繁に行われた。この頃から新入会員の減少が特に目立つ様になり、平成8年度の一般会計の予備費が10万円を切ることとなり、会員拡大が至上命題となった。

10. 太田正昭執行部時代



太田正昭執行部スタート時の会員数は234名である。この執行部では理事・委員会の再編があり、地区担当理事は浦添のみを残すこととなり、地域歯科保健・健康づくり推進・学術・学校歯科が独立した委員会組織となった。しかし経費節約のため委員の総数の増加はなかった。これまで長年親しまれ活躍した公衆衛生委員会はその役目を終え、地域歯科保健委員会として保健所法に替わる地域保健法に対応した組織編成となった。

会史編纂が事業計画に明示され、これまでの資料収集の段階から本格的な編集作業に入った。本執行部では各理事・委員会の垣根を低くし、合同委員会をもって各事業に協力して当るようになった。是により縦と横の糸が緊密に絡み合い、より強力な執行体制を作り上げた。1998年1月に南部地区歯科医警察協力会が発足した。また大容量のパソコンが導入され事務作業の本格的な効率化が推進された。この頃から新入会員の減少のみならず退会・休会者の問題も出始めた。

以上が平成11年3月までの南部地区歯科医師会の歴史の概略である。一地区歯科医師会の歴史にも連綿とした流れがあり、様々な興味深い側面がある。21世紀を迎えるにあたり、内部的には会務運営の財政基盤・未入会者対策・会員の福利厚生等の問題、また対社会的には地域歯科保健対策や『かかりつけ歯科医』、介護保険への対応等に対し、これから社団法人南部地区歯科医師会としてどのような歩みをしていくかは、今後の諸会員の責任において決定される事である。先輩諸氏が築いてきた素晴らしい歴史を更に発展・飛躍させ、地域社会になくてはならない歯科医師会としてその歩みを進めていきたいものである。

B. 社団法人南部地区歯科医師会の法人化の流れ

Ⅰ．社団法人とは

公益法人とは

公益法人とは一見難しいことのように思われがちであるが、実にみじかなものであり世の中を見渡すかぎり沢山ある。それでは公益法人とは？広辞林によれば宗教、慈善、学術など社会公共の利益を目的とし、営利を目的としない法人のことと書いてある。すなわち公益法人とは民法を元に公益または公益に準ずる事業をする法人格をもった団体のことをいう。そのため公益法人の事業（収益事業を除いて）に於いては課税される事はない。このように言われてもなかなか理解するのが難しいのではないかと思う。もっと別の方向から見ると、公益法人は各業種にあり、その要点を次に挙げて見る。

1. 公益法人は行政と業界を橋渡しする行政の補助的役目をし、そのため諸外国に比較して公務員の数が少ない。
2. 公益法人は業界の声を如何に国の政策に反映推進していくかの役目もになっている。
3. 公益法人にして初めて法人同士の付き合いができる。
4. 公益法人にする事により社会的認知を受け補助金等を得る事が出来る。
5. 公益法人にする事により金融機関からの借り入れが可能になり事業ができる。
6. 公益法人は個々の会員が出来ない事業をする事が出来る。
7. 公益法人は憲法で認められた信仰の自由である宗教活動がおこなえる。
8. 公益法人は慈善事業等の寄付金およびボランティアで運営、活動ができる。
9. 公益法人は学術的な団体等には活動が促進される。

公益法人には

1. 社団法人：構成員（会員）が会費を支払い運営している団体。
2. 財団法人：基本財産（寄附財産等）を運用して運営している団体。

この二種類がある。これらは民法からできており公益会計の形態をとっている。商法からできている一般の企業会計とは違った形態をとっており、且つ監督官庁に報告する義務がある。

公益法人の利点

1. 社会公共の事業を継続維持できると同時に、容易に合意形成を得やすい。
2. 業界の声として政治、経済への提言が効率的に行なえる。
3. 個人で出来ない事でも、法人を通して実現が可能になる。
4. 社会的認知のもとで、事業活動（補助金、非課税）が円滑に運営される。

公益法人の欠点

1. 業界の事業の利権に執着し時代の流れに反する事もある。
2. 法人トップの収支を考えない経営姿勢により赤字体質を生みやすい。
3. 財務の情報開示がなされていないため、度々問題がおこる。
4. 公益法人会計が企業会計に比較して理解しにくい。
5. 天下りの受皿になりやすく、問題がおこりやすい。

Ⅱ. 社団法人の発足

第1章A「20世紀の南部地区歯科医師会の夜明け」からも感じ取られるように対社会的活動をする場合は、必ず社団法人を作り活動しなければいろいろ支障をきたすことがあった。その為にいろいろな困難を乗り越えて大正時代から歯科医師会は小さいながらも法人の体裁を整えつつ形態的には継続して来た。昭和43、44年頃には沖縄県歯科医師会の執行部は泡盛会館に事務所を構え、総会等は他の場所を借り開催していた。また県外からの来客接待の折りはいつも肩身の狭い思いをしていた。当時の執行部の夢は他府県同様に自前の歯科医師会館を如何にしてつくるかという事であった。そのため執行部は会館建設の為の土地取得に関し行政と接触を続けていた。西銘順治那覇市長の時、当初予定の安謝埋立て地の話も内定はしていたが社団法人としての書類的体裁が整っていなかった為にウヤムヤになってしまった。昭和45年当時の沖縄歯科医師会の執行部登川正樹、玉城信徳等は自らの生活をも省みず、会館建設のために東奔西走した。その甲斐あって各種団体、金融機関から私財を担保にし資金を集め、ついには現在の沖縄県歯科医師会館ができたのであった。

このような経過を踏まえつつ時の南部地区会長与那城勇は1970年7月18日南部支部の臨時総会を開催し、法人化の為の定款、運営規定作成を決議した。1971年6月29日第1回定款策定委員会の草案委員に与那城勇、知花朝敏が任命され、その後度々定款、規定策定委員会が開催された。

1972(昭和47)年4月30日定款制定記念謝恩会並びに昭和47年度定期総会が安里のオリオン会館で開催された。この定款の名称は「社団法人沖縄南部地区歯科医師会」となっており本土復帰で沖縄県になる前の状況がうかがい知れる。しかし社団法人と定款には付けたものの法人としての法的手続きがなされず今後の課題として残されていた。南部地区会長が与那城勇、高良政利、嶺井浩、高江洲旭、玉木史朗、友利政三と移り変わるにつれ、補助金の受け皿等、法人でないための不自由さが表面化してきた。そのため社団法人としての形態をとる必要がますます高まってきた。さらに1984(昭和59)年11月に南部地区医師会が社団法人となったことも、南部地区歯科医師会の法人化に刺激を与えた。地区歯科医師会の法人化には賛否両論があったが、時の執行部玉木史朗、友利政三会長等は将来を見据えて法人設立準備委員会を設けた。その委員会は復帰前にできた社団法人沖縄南部歯科医師会の定款と施行細則を再度検討し、社団法人南部地区歯科医師会の定款を完成させた。

社団法人南部地区歯科医師会として法的手続きの元に1986年11月に会が発足した。1986年12月11日臨時総会及び社団法人設立総会が開催された。そのような組織の変化に伴い1才半健診料の収入は会員自身の健診収入に変更し、その代わり共済負担金を新たに創設することになった。以後は組織としての内部充実に力を入れ、健診事業、那覇市学校歯科保健大会、デンタルフェア事業等の各種事業に取組み、対外的評価を受けながら今日の執行部に至っている。また常に組織の運営で支障をきたす施行規則は、何度も改廃しながら、現在の定款施行細則が出来上っている。次にその経過及び定款を記載する。



昭和48年度　沖縄県南部地区歯科医師会定期総会

Ⅲ. 定款の成り立ち及び定款

Ⅰ 社団法人沖縄南部地区歯科医師会の定款の成立ち

年月日	会務内容
1970/7/18	南部支部臨時総会(幸楽にて)定款、運営規定案作成委員の委任。会名沖縄南部地区歯科医師会と改称、分会組織案の建議承認
1970/9/30	常任委員会　議題　(イ)分会組織、編成　(ロ)定款規則参考文を集める事について
1971/2/1	本会の組、分会組織発足
1971/3/11	第二分会　定款ならびに料金表検討　定例日:第二木曜日(二木会と称す)
1971/3/16	第一分会　定款ならびに料金表検討　定例日:第三金曜日(三金会と称す)
1971/3/18	第三分会　定款ならびに料金表検討　定例日:第三木曜日(三木会と称す)
1971/4/23	常任委員会　議題　県歯会に定款案、慣行料金案に関する報告書立案
1971/5/28	71年度定期総会(於　幸楽)定款運営規則の制定の件の事業承認
1971/6/20	定款、規則研究に着手
1971/6/29	第一回定款策定委員会　草案委員会に知花朝敏、与那城勇委任さる。
1971/7/10	第二回定款策定委員会
1971/8/5	定款草案小委員会9/21、10/7、10/18、11/3、12/7、1/30、2/5、3/13、3/16
1972/3/17	本会臨時総会に於いて定款・運営規則制定、之を記念して本会歴代会長及び貢献者に謝恩の会を持ち、本会の記録に綴る。(知花朝敏ら定款草案委員として活躍)
1972/4/30	定款策定記念謝恩会並びに昭和47年度定期総会、安里オリオン会館　会長与那城勇、副会長高江洲旭、専務山田勲、理事兼浜政勝、阿嘉昭宗、監事上原信雄、高良政利

以上が社団法人と名前は付いているが法的社団法人以前の定款の成立ちである。

年月日	曜日	会務内容
1981/6/8	月	理事会　南部地区法人化移行の件について
1981/12/18	火	理事会及び支部長会、定款整備及び印刷の件
1982/2/27	土	臨時理事会　定款の件
1984/7/11	水	定時理事会、1.定款改正について
1984/11/23	金	南部地区医師会、社団法人移行祝賀会(4時フジホテル)
1985/6/7	金	社団法人化について　理事会6/7、拡大理事会6/28
1985/8/7	水	運営委員会　準備委員会結成、支部巡り
1985/8/8	木	法人設立準備委員会の件、理事会8/8、臨時理事会8/9、臨時理事会8/19
1985/8/9	金	法人設立準備委員の件　8/9理事会、8/19臨時理事会、8/23拡大理事会
1985/8/23	金	法人設立準備委員会発会式
1985/10/8	火	法人設立準備委員会(拡大理事会)各分会検討会10/8、11/19
1986/2/28	金	法人設立準備委員会2/28、4/9、5/9、5/30、6/27、7/25
1986/7/31	木	法人化について7/31臨時理事会、8/8運営委員会、9/8定例理事会、9/20臨時理事会
1986/9/26	金	法人設立準備委員会9/26、108定例理事会、10/20
1986/11/13	木	法人設立申請書類提出、県庁医務課に
1986/12/3	水	法人設立準備委員会　社団法人南部地区歯科医師会定款について
1986/12/8	月	定例理事会　法人設立許可から61年3月31日までの収支予算書の件。臨時総会及び設立総会の運営について
1986/12/9	火	運営委員会　同上
1986/12/11	木	臨時総会及び社団法人南部地区歯科医師会設立総会
1986/12/16	火	法人設立申請一件書類提出、県庁医務課へ
1987/1/8	水	法人設立祝賀会内容検討1/8、祝賀会運営について1/15
1987/1/17	土	社団法人南部地区歯科医師会設立許可となる。
1987/1/20	火	拡大理事会　社団法人設立祝賀会の件1/20、1/30
1987/2/5	木	社団法人南部地区歯科医師会設立登記完了届(医務課に)
1987/2/6	金	法人設立祝賀会及び趣意書、沿革と概要等の書類届を那覇税務署へ
1987/3/13	金	法人設立準備委員会　解散式
1987/4/18	土	昭和61年度第一回社団法人南部歯科医師会定時総会
1987/7/8	水	定例理事会　定款(規則、細則)の制定の展開と進め方
1988/4/7	金	定例理事会　定款。諸規則の検討4/7、5/26、7/10、8/25、9/8、9/29
1990/1/26	金	定款一部変更に伴う支部長への協力依頼、全国公益法人協会加入について
1990/2/8	木	定款改正点確認　定例理事会2/8、2/23
1990/5/8	火	定款諸規則の件　理事会5/8、7/9、8/8、10/8、11/8、12/10
1990/6/22	金	定款諸規則の件　拡大理事会6/22、11/22
1991/1/8	火	理事会、　定款諸規則検討会、代議員会、総会の日程について1/8、2/14
1991/3/8	金	理事会　定款施行規則『修正資料』の件

1992/4/8	月	法人組織法律相談会(4役、3顧問)琉大教授仲地博、市町村議会議長会主査　石垣安秀)
1993/11/13	土	定款諸規則検討会(三役、市町村議会議長会主査石垣安秀)
1997/1/8	水	拡大理事会　定款諸規則の一部改正の件1/8、2/4、2/12
1997/4/25	金	理事会　会長挨拶南部基本方針 「公益法人とは『公益事業の推進と会員の資質向上』を『まあるい和』で形成していく。」
1997/6/11	水	拡大理事会　定款変更承認　県医務課6/3受理
1998/2/2	月	臨時理事会　定款諸規則の一部改正案の点検
1998/3/26	木	平成9年度通常総会にて社団法人南部地区歯科医師会の定款諸規則集を各会員に配付

[1] 社団法人沖縄南部地区歯科医師会定款(昭和47年制定)

昭和47年3月17日

目次

第一章　総則
第二章　会員
第三章　役員
第四章　委員・顧問
第五章　表彰
第六章　会議
第七章　会計及び資産
第八章　団体契約
第九章　解散
第十章　雑則
定款施行規則
第一章　総則
第二章　選挙権及び被選挙権
第三章　選挙人名簿.選挙及び選挙管理
第四章　役員の選挙
第五章　定款.運営規則の準用
諸事協定委員規程
福祉共済暫定規程
入会、変更、退会届様式
あの頃の沖縄歯科界
会務一覧表
医療保険表
歴代会長並び会務貢献者

定　款

昭和47年3月17日

社団法人沖縄南部地区歯科医師会

第一章　総　則

(名称)

第1条　　この法人は、社団法人沖縄南部地区歯科医師会という。

(組織)

第2条　　本会は那覇市浦添市及び島尻郡を区域として、その区域内における歯科医師で組織する。

2 会員の分布区域に応じて支部を設ける。

3 前項の承認基準並びに支部に関する規則は定款施行で定める。

(目的)

第3条　　本会は、医道を昂揚、歯科医学、医術の進歩発達及び公衆衛生の向上を図り社会並びに会員の福祉増進に寄与する事をもって、その目的とする。

(事業)

第4条　　本会は、前条の目的を達成する為に、次の事業を行う。

(1　歯科医学の振興に関する事項)

(2　医科医療の向上に関する事項)

(3　医療保障の向上に関する事項)

(4　歯科医師の補修教育に関する事項)

(5　歯科公衆衛生学校歯科衛生の普及指導に関する事項)

(6　医療医業経営の改善合理化に関する事項)

(7　会員の福祉共済に関する事項)

(8　会報その他の刊行物に関する事項)

(9　その他本会の目的を達成するためのに必要な事項)

2　前項各号の事柄を実施するに必要な規則は別に定める。

(事務所)

第5条　　本会は事務所を那覇市に置く。

第二章　会　員

(資格)

第6条　　本会の会員は、日本で歯科医師の免許を受けた者でなければならない。

(入会)

第7条　　本会に入会しようとする者は本会所定の入会申込書に入会金を添えて本会に提出し理事会の承認を受けるものとする。

(変更届)

第8条　　会員が住所氏名就業場所又は所属支部を変更した時は、本会所定の変更届を速やかに本会に提出しなければならない。

(選挙権.表決権)

第9条　　会員の有する選挙権及び表決権については委任及び書面による行使は認めない。

(研究.発表)

第10条　　会員はその研究又は調査を本会に報告し発表する事ができる。

(刊行物)

第11条　　会員は本会から発行する刊行物の頒布を受け又は購入する事ができる。

(意見陳述)

第12条　　会員は本会の事業又は会務に関し、本会に意見を述べる事ができる。

(会費.負担金)

第13条　　会員は本会所定の会費及び負担金を本会に納入する義務を負う。

2 前項の会費及び負担金の額並びに納付の方法は総会できめる。
3 既納の会費、入会金及び負担金は返還しない。
4 会員が疾病災害その他の理由により会費又は負担金の納付が困難と認められるときは理事会の議を経て会費又は負担金の徴収を猶予又は減免する。
(退会)
第14条　本会を退会しようとする者は本会所定の退会届を本会に提出しなければならない。
(資格喪失)
第15条　沖縄県歯科医師会若しくは日本歯科医師会の会員たる身分を失った者は当該歯科医師会の通知があったときから本会の会員の身分を失う。
2 本会は会員が会費又は負担金を1年以上又は1年分に相当する額を納付しない時は催促し、なお支払わない時は理事会の議を経て退会させられる。
3 前項により会員の資格を喪失した者が6ヵ月以内に当該未納額を納付した時は理事会の議を経て会員の資格を復活させることが出来る。
(除名)
第16条　会員であって次の各号の何れかに該当する者は総会の議を経て除名することができる。
(1)本会の名誉を損し又は目的に反する行為があった者
(2)本会の定款に違反し又は秩序をみだした者
(3)会員としての名誉を損し又は義務を怠った者
(4)犯罪を犯した者
2 前項により除名したときにはその氏名及び事由の概要を主務官庁、日本歯科医師会、沖縄県歯科医師会、会員並びに除名を受けた者に通知する。
(終身会員)
第17条　本会の会員にして通算25年を経過し年令70才を越えたものは終身会員に推薦する
2 終身会員の推薦及び処遇に関する規則は別に定める。
(名誉会員)
第18条　本会に名誉会員を置くことができる。名誉会員は本会に特別功労があった者につき理事会の議を経て会員が推薦する。

第三章　役　員

(役員の種別及び定数)
第19条　本会は次の役員を置く。
(1)会長1人
(2)副会長1人
(3)専務1人
(4)理事(会長、副会長は民法第59条の理事とする)
(5)監事2人
(選出)
第21条　会長副会長理事及び監事は総会で会員から選挙し、専務理事は理事の中から互選する。
(職務)
第22条　会長は、本会を代表し会務を統括する。
2 副会長は会長を補佐し、会長に事故ある時はその職務を代行する。
3 専務理事は、会務を処理し、会長及び副会長ともに事故ある時はその職務を代行する。
4 理事は、会長の旨を受けて会務を分掌し、会長、副会長及び専務理事ともに事故あるときは予め理事会で決めた順位に従いその職務を代理し、ともにかけたときはその職務を代行する。

註　民法第52条『理事』法人には1人又は数人の理事を置く事を要す。理事数人ある場合において定款又は寄付行為に別段の定めなき時は法人の事務は理事の過半数を以て之を決す。
5 監事は、民法第59条に基づき事業及び会計、財産を監査する。
6 理事及び監査は相互にこれを兼ねることができない。
(専決処分)
第22条　会長は総会の決議を要する事柄でありながら緊急必要ありと認めた時は専決処分する事ができる。
2 前項により専決処分した事柄は次の総会で承認を得なければならない。
(任期)
第23条　役員の任期は2年とし、4月1日に始まり翌々年の3月31日をもって終わる。ただし再任を妨げない。
(補欠)
第24条　役員の定数を欠いたときは会長が会務の執行に支障がないと認めた時を除くほかこれを補充しなければならない。
2 補欠役員の選挙は第20条第2項の規定による。
民法第59条『監事の職務』監事の職務は下記のに如し
(1)法人の財産の状況を監査すること
(2)理事の業務執行の状況を監査すること
(3)財産の状況又は業務の執行につき不整の廉あることを発見したるときはこれを総会又は主務官庁に報告すること
(4)前号の報告を為す為必要あるよきは総会を召集すること
3 補欠により就任した役員の任期は前任者の残任期間とする。
4 役員はその任期が満了した場合でもその後任者が就任するまでその職務をおこなう。
(報酬.費用弁償)
第25条　役員は無償とする。但し費用を弁償することができる。
2 費用弁償の額及び支給方法は総会の議をへて別に定める。

第四章　委員　顧問

(委員会及び委員)
第26条　本会に委員会を置くことができる。委員は総会の承認を得て会長がこれを委嘱する。
(顧問)
第27条　本会に顧問を置くことができる。顧問は総会の議を経会長が委嘱する。
2 顧問は会長に諮問に応え、会議に出席して意見を述べる事ができる。但し表決に加わることができない。顧問の任期は第23条の規定を準用する。

第五章　表　彰

(表彰)
第28条　本会は本会の事業目的達成に特別功労のあった者につき、理事会の議を経て会長がこれを表彰する事ができる。
2 前項に関する規則は別に定める。

第六章　会　議

第1節　総　会

(総会の種別)
第29条　総会は、定期総会及び臨時総会とする。
2 定期総会は毎年1回開催する。臨時総会は会長が必要と認めた場合に、開催する。
(召集)
第30条　総会は会長が召集する。
2 会員の3分の2以上から会議の目的とその理由とを書いて臨時総会の召集の請求があった場合は会長はできるだけ早く

臨時総会を召集しなければならない。
3 総会の召集は緊急の場合を除くほか開催前10日までに会議の目的である事柄日時場所を記載した文書を会員に発送して通知しなければならない。
(成立)
第31条　本会の会議は会員の過半数の出席により成立する。委任状は出席とする。
(議事事項)
第32条　次の事柄は総会で議決又は承認を得る事を要す。
(1)定款の変更但し第5条を除く。
(2)諸規則の制定改廃
(3)会費及び負担金額の決定並びに納付方法
(4)重要な財産の処分
(5)事業計画
(6)予算及び決算
(7)記載に関する事項
(8)寄附された金品の収受及び使途
(9)基本金の構成及び処分
(10)その他理事会に於いて重要と認めた事項
(議長.副議長)
第33条　総会の議長及び副議長はその都度出席した会員の中から各1名を選出する。
(表決数)
第34条　総会の決議及び承認は過半数で決める。但し定款の変更に関する議決は、出席者の3分の2以上の同意を得なければならない。
(会員への通知)
第35条　会長は総会で議決した事柄を速やかに会員に知らせねばならない。

第2節　理　事　会

(召集.議長)
第36条　理事会は会長が必要と認めたとき召集する。
2 理事の過半数又は監事から理事会の要求があったときは会長は出来るだけ早く、これを召集しなければならない。
3 理事会の議長は会長とする。
(議事事項)
第37条　次の事項は理事会の議決を経なければならない。
(1)総会の召集及びこれに附議する事項
(2)会務執行に関する事項
(3)その他重要なる事項
(理事以外の者の出席)
第38条　監事は理事会に出席して質問し又は意見を述べることができる。但し表決に加わることはできない。
(定足数及び表決数)
第39条　理事会の定足数についてはそれぞれ第31条及び第34条の規定を準用する。

第3節　委　員　会

(委員会)
第40条　本会に委員会を置くことができる。
2 委員会は委員をもって組織する。委員及び委員会の構成及び職務に関する事項は定款施行規則で定める。

第4節　支　部　長　会

(支部長会)
第41条　本会に支部を置く。支部長会に必要な事項は定款施行規則で定める。

第七章　会計及び資産

(会計年度)
第42条　本会の会計年度は4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。
(財産の構成)
第43条　本会の資産は、次に掲げるものよりなる。
(1)財産台帳記載の財産
(2)会費
(3)入会金
(4)財産から生じる収入
(5)事業に伴う収入
(6)寄付金
(7)繰越金
(8)その他の収入
(経費の支弁)
第44条　この法人の経費は、資産をもって支弁する。
(資産の管理)
第45条　本会の資産管理は会長が管理しその方法は理事会の議を経て定める。
(予算及び決算)
第46条　本会の毎年度の歳入、歳出予算は年度開始前に理事会の認定に付し、総会の承認をへて定めるものとし歳入歳出の決算は年度終了後45日以内にその年度末財産目録とともに監査を経て理事会の認定に付し総会の承認を求めなければならない。
(剰余金)
第47条　年度末に剰余金を生じたときは繰越金として次年度の収入に編入する。
(予備費)
第48条　本会は予算超過の支出又は予算外の支出に当てるため予備費を設ける。予備費は総会で否決された事項に支出する事はできない。
(寄附金品)
第49条　使途を決めて寄附された金品はその使途に充て、使途が決められていないものは総会に諮つて使途を決める。
(継続費)
第50条　数年を期して行う事業の継続費として総額費を決めたものは毎年度の支出残高を事業が完成する年度まで逐次繰越し使用する事ができる。
(特別会計)
第51条　本会に理事会の議をへて特別会計を設けることができる。
(規則への委任)
第52条　この定款に規定するもののほか資産及び会計に関し必要な規則は総会の議を経て別に定める。

第八章　団体契約

(団体契約)
第53条　本会は歯科医療並びに公衆衛生活動に関し必要な事項につき団体契約を、締結することができる。

第九章　解　散

(解散)
第54条　本会を解散しようとするときは総会で会員の3分の2以上の賛成を要する。但しこの場合は第9条の規定に係らず書面による表決権の行使を認める。

第十章　雑　則

(諸規則)
第55条　この定款に定めるもののほか、この定款の施

行に関し必要な規則は総会の議決を経て別に定める。

付　則

第56条　第6条の規定に係らず琉球歯科医師免許取得者は法令の許す期間本会の会員となることができる

[2] 社団法人南部地区歯科医師会定款(昭和62年制定)

社団法人　南部地区歯科医師会定款諸規則集

昭和62年1月　制　定

目次

【本会関係】
(1)社団法人南部地区歯科医師会定款
(2)社団法人南部地区歯科医師会定款諸規則集
(3)社団法人南部地区歯科医師会　支部会規則
(4)社団法人南部地区歯科医師会　選挙規則
(5)社団法人南部地区歯科医師会　殊遇規則
(6)社団法人南部地区歯科医師会会費及び入会金に関する規則
(7)社団法人南部地区歯科医師会財産管理及び会計に関する規則
(8)社団法人南部地区歯科医師会　監査規則
(9)社団法人南部地区歯科医師会　表彰規則
(10)社団法人南部地区歯科医師会　除名規則
(11)社団法人南部地区歯科医師会　旅費規則
(12)社団法人南部地区歯科医師会　文書取扱規則
【共済関係】
(1)社団法人南部地区歯科医師会　共済会規則
(2)社団法人南部地区歯科医師会　共済会運営規則
(3)社団法人南部地区歯科医師会融資共済金取扱内規
【事務局関係】
(1)社団法人南部地区歯科医師会職員就業規則
(2)社団法人南部地区歯科医師会　職員給与規程
(3)社団法人南部地区歯科医師会　職員旅費規程
(4)社団法人南部地区歯科医師会　職員退職金規程
【青申関係】
社団法人南部地区歯科医師会北那覇・那覇地区歯科医師青色申告会規則
社団法人南部地区歯科医師会北那覇・那覇地区歯科医師青色申告会運営細則
【医師連関係】
南部地区歯科医師連盟規則

社団法人南部地区歯科医師会定款

昭和62年1月　制　定
平成2年3月　一部改正
平成9年3月　一部改正

第1章　総　則

(名　称)

第1条　この法人は、社団法人南部地区歯科医師会と称する。

(事務所)

第2条　この法人は、事務所を沖縄県浦添市港川1丁目36番3号に置く。

(目的)

第3条　この法人は、医道を高揚し、歯科医学医術の発展と公衆衛生の向上普及を図り、社会福祉を増進し、もって地域医療に寄与することを目的とする。

2　この法人は、社団法人沖縄県歯科医師会の会務に協力するものとする。

(事業)

第4条　この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

(1)医道の高揚に関する事項
(2)歯科医療の普及及び充実に関する事項
(3)歯科公衆衛生及び学校歯科保健に関する事項
(4)歯科医学振興及び歯科医師の生涯教育に関する事項
(5)医療保障の向上に関する事項
(6)医業経営の合理化に関する事項
(7)歯科医療の向上に関する事項
(8)会員の福祉,親睦及び相互扶助に関する事項
(9)1才半児健診及び学校検診に関する事項
(10)その他この法人の目的を達成するために必要な事項

第2章　会　員

(資格)

第5条　この法人の会員は、南部地区に就業所(診療に従事しない者については住所)を有する歯科医でなければならない。

2　本会の会員は社団法人沖縄県歯科医師会会員とならなければならない。

(会費等)

第6条　会員は、総会において別に定める入会金,会費及び負担金を納入しなければならない。

(入　会)

第7条　会員として入会しようとする者は、理事会の議決を経て会長が別に定める入会申込書により、会長に申し込まなければならない。

2　入会は総会が別に定める基準により,理事会において,その可否を決定し,会長が本人に通知するものである。

3　入会を認められた会員は、一ヶ月以内に入会金を納入しなければならない。

(会員の資格喪失)

第8条　会員が次の各号の一つに該当する場合は、その資格を喪失する。

(1)退会したとき
(2)禁治産又は準禁治産の宣告を受けたとき
(3)死亡し、若しくは失踪宣告を受けたとき
(4)除名
(5)正当な理由なく一年以上にわたり会費及び負担金を滞納し、かつ、勧告に応じないとき。

(退　会)

第9条　会員は理事会の議決を経て会長が別に定める退会届を会長に提出して、任意に退会する事ができる。

(処　分)

第10条　会員が法令,本定款に違反し,また、本会の名誉を毀

損した場合は、代議員会において4分の3以上の議決に基づき、次の制裁を課すことができる。
(1)戒告
(2)退会勧告
(3)除名
2　会員を処分しようとするときは、その会員に対し代議員会において、弁明の機会を与えなければならない。
(拠出金の不返還)
第11条　既納の入会金、会費及びその他の拠出金品は、返還しない。

第3章　役　　員

(役員の種別および定数)
第12条　この法人に次の役員を置く
(1)会長1人
(2)副会長1人以上2人以内
(3)専務理事1人
(4)理事10人以上15人以内(会長、副会長及び専務理事を含む)
(5)監事2人
(役員の選任等)
第13条　役員は総会において会員の中から選出する。
2 理事及び監事は、相互にこれを兼ねることができない。
3 選挙に関する事項は別に定める。
(職　務)
第14条　会長は、この法人を代表し、会務を統括する。
2　副会長は,会長を補佐し,会長に事故あるとき又は会長が欠けたときは、会長があらかじめ指名した順序によって、その職務を代行する。
3　専務理事は、会長及び副会長を補佐し、この法人の常務を統轄する。
4　理事は、理事会を構成し、会務を執行する。
5　監事は、次に掲げる業務を行う。
(1)この法人の会計を監査すること。
(2)理事の業務執行状況を監査すること。
(3)会計及び業務の執行について、不整の事実を発見したときは、これを総会及び主務官庁に報告すること
(4)前号の報告をするため必要があるときは、総会の招集を請求すること。
(役員の任期)
第15条　役員の任期は3年とする。ただし、再任を妨げない。
2　補欠又は増員により専任された役員の任期は、前任者又は現任者の残任期間とする。
3　役員は、辞任又は任期満了後においても、後任者が就任するまでは、その職務を行わなければならない。
(役員の解任)
第16条　役員が次の各号の一つに該当するときは、総会において出席会員の3分の2以上の議決により、解任することができる。ただし、その役員に対し、議決の前に弁明の機会を与えなければならない。
(1)心身の故障のため職務の遂行に堪えないと認められたとき。
(2)職務条の義務違反その他役員としてふさわしくない行為があると認められるとき。
(費用弁償)
第17条　役員は有償とすることができる。
2　役員には費用を弁償することができる。
3　前2項に関し必要な事項は、代議員会の議決を経て会長が別に定める。

第4章　総　　会

(総会の種別)
第18条　この法人の総会は、通常総会及び臨時総会の2種とする。
(総会の構成)
第19条　総会は、会員をもって構成する。
(総会の権能)
第20条　総会は、この法人の最高の意志決定機関であり、この定款で別に定めるもののほか、この法人の運営に関する重要な事項を議決する。
(総会の開催)
第21条　通常総会は、毎月3月に開催するのを常例とする。
2　臨時総会は次の各号の一つに該当する場合に開催する。
(1)理事会が必要と認めたとき
(2)会員の4分の1以上から会議の目的を記載した書面により開催の請求があったとき。
(3)第14条第5項第4号の規程により、監事から開催の請求があったとき。
(総会の招集)
第22条　総会は、会長が招集する。
2　会長は,前条第2項第2号及び第3号の規定による請求が合ったときは、その請求のあった日から30日以内に臨時総会を招集しなければならない。
3　総会を招集するときは、会議の日時,場所,目的及び審議事項を記載した書面をもって,少なくとも7日前までに通知しなければならない。
(総会の議長)
第23条　総会の議長は、その総会において出席した会員の中から選出する。
(総会の定足数)
第24条　総会は、会員の過半数の出席がなければ開会することができない。
(総会の議決)
第25条　総会の議事は、この定款の規程するもののほか、出席した会員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
(書面表決)
第26条　止むを得ない理由のために総会に出席できない会員は、あらかじめ通知された事項について書面をもって表決し、又は他の会員を代理人として表決を委任することができる。
2　前項の場合における前2条の規定の適用については、その会員は出席したものとみなす。
(総会の議事録)
第27条　総会の議事録については、次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。
(1)日時及び場所
(2)会員の現在数、出席者数及び出席者氏名(書面表決者及び表決委任者にあってはその旨を付記すること。)
(3)開催目的、審議事項及び議決事項
(4)審議の経過の概要及びその結果
(5)議事録署名人の選任に関する事項
2　議事録には、議長及びその会議において専任された議事録署名人2人以上が署名押印をしなければならない。

第5章　理　事　会

(理事会の構成)
第28条　理事会は理事をもって構成する。
(理事会の機能)

第29条　理事会は,この定款で別に定めるもののほか、次の事項を議決する。
(1)総会に付議すべき事項
(2)総会の議決した事項の執行に関する事項
(3)その他総会の議決を要しない会務の執行に関する事項
(4)代議員会に付議すべき事項
(5)その他重要な事項
2　会長は、理事会の議決を要する事項であっても、緊急を要し理事会の招集する暇がないと認めるときは、これを先決処分する事ができる。
3　前項の場合は、会長は次の理事会で、その承認を受けなければならない。
(理事会の招集)
第30条　理事会は、会長が必要と認めたとき招集する。
2　会長は、理事の3分の1以上から会議の目的である事項を記載した書面をもって招集の請求があったときは、その日から14日以内に理事会を招集しなければならない。
3　理事会を招集するときは、会議の日時,場所,目的及び審議事項を記載した書面をもって、少なくとも7日前までに通知しなければならない。
(理事会の議長)
第31条　理事会の議長は、会長がこれにあたる。
(理事会の定足数等)
第32条　理事会には、第24条から第27条の規程を準用する。この場合において、これら規程中「総会」及び「会員」とあるのは、それぞれ「理事会」及び「理事」と読み替えるものとする。

第6章　代議員及び代議員会

(代議員)
第33条　この法人に代議員を置く。
2　代議員は、総会において別に定める方法により、会員の中から選出する。
3　代議員は、役員を兼ねることができない。
4　代議員は、代議員会を組織し、総会から委任された事項及び緊急に処理すべき事項を議決する。
5　代議員会については、第15条、第16条及び第17条の規程を準用する。この場合、「役員」とあるのは、「代議員」と読み替えるものとする。
(代議員会)
第34条　代議員会は、代議員をもって構成する。
2　代議員会は、次の場合に開催する。
(1)毎年通常総会の前に開催する
(2)会長又は理事が必要と認めたとき
(3)代議員の4分の1以上から招集の請求があったとき
3　代議員会は、会長が招集する。
4　会長は、第2項第3号の請求があったときは、その日から30日以内に代議員会を招集しなければならない。
5　代議員会において議決した事項は、総会に報告し、その承認を求めなければならない。
6　代議員会については、第21条第2項第3号、第23条、第24条、第25条、第26条及び第27条の規程を準用する。この場合においてこれらの条文中の「総会」及び「会員」とあるのは、それぞれ「代議員会」及び「代議員」と読み替えるものとする。

第7章　支　部

(支　部)
第35条　この法人に支部を置く。
2　支部規則は別に定める。

第8章　委　員　会

(委員会及び委員)
第36条　本会に委員会を置く
2　委員は、代議員会の承認を得て、会長がこれを委嘱する。
3　委員及び委員会の構成及び職務に関する事項は別に定める。

第9章　顧　問

(顧　問)
第37条　この法人に顧問を置くことができる。
2　顧問に関する事項は、代議員会の議決を経て会長が別に定める。

第10章　表　彰

(表　彰)
第38条　この法人は、本会の事業、目的達成に功労のあった者につき、表彰することができる。
2　表彰に関する事項は、代議員会の議決を経て会長が別に定める。

第11章　財産及び会計

(財産の構成)
第39条　この法人の財産は、次に掲げるものをもって構成する。
(1)財産目録に記載された財産
(2)入会金及び会費
(3)寄付金品
(4)財産から生じる収入
(5)事業に伴う収入
(6)その他の収入
(財産の管理)
第40条　この法人の財産は会長が管理し、その方法は代議員会の議決を経て会長が別に定める。
(経費の弁償)
第41条　この法人の経費は、財産をもって支弁する。
(事業計画及び予算)
第42条　この法人の事業計画及びこれに伴う予算書は、会長が作成し、毎会計年度前に、総会において3分の2以上の議決を経て、沖縄県知事に届け出なければならない。これを変更するときも同様とする。
(暫定予算)
第43条　前条の規定にかかわらず、やむを得ない理由により予算が成立しないときは、会長は理事会の議決を経て予算成立の日まで、前年度の予算に準じ収入支出することができる。
2　前項の収入支出は、あらたに成立した予算の収入支出とみなす。
(事業計画及び収支計算)
第44条　この法人の事業報告及び収支計算は、毎会計年度終了後、会長が事業報告書、収支計算書、財産目録等として作成し、監事の監査を受け、総会の議決を経て、資産の総額に変更が生じた場合には2週間以内に登記し、登記簿の謄本を添え、その会計年度終了後3ヶ月以内に沖縄県知事に報告しなければならない。
(会計年度)
第45条　本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり翌年3月

31日に終わる。

第12章　事務局及び職員

(事務局の設置等)

第46条　この法人の事務を処理するため、事務局を設置する。

2　事務局の職員は、理事会の議決を経て会長が任命する。

(備え付け帳簿及び書類)

第47条　事務局には、常に次の帳簿および書類を備えておかなければならない。

(1)定款

(2)会員名簿

(3)理事、監事及びその他の職員の名簿及び履歴書

(4)許可、認可等及び登記に関する書類

(5)定款に定める機関の議事に関する事項

(6)収入・支出に関する帳簿及び証拠書類

(7)資産及び負債の状況を示す書類

(8)その他必要な帳簿及び書類

第13章　定款の変更及び解散

(定款の変更)

第48条　この定款は、総会において会員総数の4分の3以上の議決を経、かつ、沖縄県知事の認可を得なければ変更することができない。

(解散)

第49条　この法人は、民法第68条第1項第2号から第4号まで、及び同条第2項第2号の規定によるほか、総会において会員総数の4分の3以上の議決を経、かつ、沖縄県知事の認可を経て解散する。

(残余財産の処分)

第50条　本会の解散のときに有する残余財産は、総会において会員総数の4分の3以上の議決を経、かつ、沖縄県知事の認可を得て、この法人と類似の目的を持つ団体に寄付するものとする。

第14章　補　　足

(委任)

第51条　この定款の施行について必要な事項は、総会の議決を経て会長が別に定める。

附　則

1　この定款は、この法人の設立許可のあった日から施行する。

2　この法人の設立当初の役員は、第13条の規定にかかわらず別紙役員名簿のとおりとし、その任期は第15条第1項の規定にかかわらず昭和63年3月31日までとする。

3　この法人の設立年度の事業計画及び予算書は、第42条の規定にかかわらず設立総会の定めるところによる。

4　この法人の設立初年度の会計年度は、第45条の規定にかかわらず、設立認可のあった日から昭和62年3月31日までとする。

5　平成2年3月一部改正(第21条)

6　平成9年3月一部改正(第4章章名、第21条)



平成9年度から平成11年度の代議員

C. 南部地区歯科医師会の事業計画

Ⅰ. 事業計画とは

事業計画書とはその時の執行部が、どのような事業をするか計画を立て、組織の総会でその構成員の合意を受けて実行される案件である。さらにこの事業計画書を元に予算書案が執行部から提案され、総会等で審議決議承認して初めて予算の執行が行なえる。もし承認が得られなければ暫定的な予算を組んで対応して行かなければならない。

この項の中で祖国復帰の昭和48年度の事業計画書が資料として見当たらないのは、当時の役員数は少なく、諸雑用に追われ、事業計画の提示ができず対前年同様に予算決算を作ったからである。このように初期の段階ではいろいろ不手際がおこる可能性はあるが、逐次変革をして、組織を充実させることが大切である。

この事業計画を会計年度内に事業として執行し終えたら、年度末を以て収支計算書、貸借対照表などの整理をして決算が終了し、決算報告が総会等で計られるのである。このような理解の下に、後に列挙する事業計画書を見るならば、時の執行部が、組織としてどこに重点を置いて事業をしてきたかがわかる。又時代の移り変わりを反映しながら少しずつ事業計画がかわっていく様子も確認できるのではないだろうか。

このように過去から現在の事業計画を見ることで、21世紀に法人としてどのように価値ある事業を展開できるかという課題への解答を導き出せないだろうか。別の見方をすれば、これらの事業計画書を見て逆に無駄はないか、今後縮小すべきものはないか等を考えていく必要もある。事業の達成には必ず財政的裏打ち及び会員の理解と協力が必要である。現在の会を財務的に見れば、収入の部では会費の値上げや新入会員の加入による収入増加はあまり期待はできない。また行政からの補助金等も減少はすれ、増額は期待できない社会状況にある。このような中で事業の拡大は難しく逆に減少を余儀無くされる可能性さえある。

この事業の他に組織として大事な事にシステム構築がある。そこにはそれなりのノウハウを持った人材が如何に関るかも重要な事である。システムをステップアップしてこそ組織としての発展が見込まれるのである。その事により組織の円滑な運営ができ、執行部が変わっても組織としての働きを維持していけるのである。いわば事業とシステムは組織における両輪である

Ⅱ. 各年度の事業計画書

昭和46年度(1971)事業計画書 会長　与那城勇

1.県歯会計事業計画に順応して之を推進して行きたい
2.当会独自の分野として特に
　(イ)定款運営規則の制定
　(ロ)公衆衛生に関する事業の推進
　(ハ)秩序と融和の面から歴代支部正副会長及び功労者への謝恩行事を持ちたい

昭和47年度(1972)事業計画書 会長　与那城勇

1.県歯会事業に順応して之を推進する
2.本会独自の分野として
　(イ)現物給付制度保険及び医業経営に関する諸準備と対応
　(ロ)会務運営に関する内容の整備
　(ハ)法人登録にする検討
　(ニ)公衆衛生に関する事業の推進

昭和49年度(1974)事業計画書 会長　高良政利

1.県歯会館建設事業の推進
2.保険診療及び医業経営に対する対応(情報交換、研修、助手養成)
3.会務処理能力の向上推進
4.その他県歯事業の推進

昭和50年度(1975)事業計画書 会長　高良政利

1.時局対策強化
2.会員相互の連帯強化
3.其の他県歯会事業の推進

昭和51年度(1976)事業計画書 会長　嶺井浩

1.県歯会事業への協力
2.支部会活動の強化

昭和52年度(1977)事業計画書 会長　嶺井浩

1.支部会活動の強化
2.県歯会活動への協力

昭和53年度(1978)4月事業計画書 会長　高江洲旭

1.支部会活動の強化
2.県歯会事業への協力

昭和53年度(1978)9月臨時総会事業計画書
会長　高江洲旭

1.学術事業の振興
2.支部活動の強化
3.保険指導の強化
4.婦人部の発足
5.執行体制の強化

昭和54年度(1979)事業計画書 会長　高江洲旭

1.学術事業の振興
2.支部活動の強化
3.保険指導の強化
4.婦人部の発足
5.執行体制の強化
6.1才6ヶ月児健診の実施

昭和55年度(1980)事業計画書 会長　玉木史朗

1.学術事業の振興
2.支部活動の強化
3.保険指導の強化
4.婦人部の活動充実
5.執行体制の強化
6.1才6ヶ月児健診及び福祉共済金運用のための整備

昭和56年度(1981)事業計画書 会長　玉木史朗

1.学術事業の振興
2.支部活動の強化
3.保険指導の強化
4.婦人部の活動充実
5.執行体制の強化
6.1才6ヶ月児健康診査の強化充実
7.福祉共済金運用のための整備

昭和57年度(1982)事業計画書 会長　玉木史朗

1.学術事業の振興
2.支部の再編成及び活動の強化
3.保険指導の強化
4.婦人部の活動充実
5.執行体制の強化確充
6.1才6ヶ月児健康診査の強化充実
7.福祉共済金運用の実施充実
8.定款及び施行規則の一部改正

昭和58年度(1983)事業計画書 会長　玉木史朗

1.学術事業の振興
2.支部活動の強化
3.保険指導の強化
4.婦人部の活動充実
5.執行体制の強化確充
6.1才6ヶ月児健康診査の強化充実
7.福祉共済金運用の実施充実
8.定款及び施行規則の一部改正

昭和59年度(1984)事業計画書 会長　友利政三

1.学術事業の振興
2.医療経営の整備
3.支部活動の強化
4.保険指導の強化
5.婦人部の活動充実
6.執行体制の強化拡充
7.学校歯科及び検診業務の強化充実
8.福祉共済金運用の実施充実
9.定款及び施行規則の改正検討

昭和60年度(1985)事業計画書 会長　友利政三

1.学術事業の振興
2.医療経営の整備
3.支部活動の強化
4.保険指導の強化
5.婦人部の活動充実
6.執行体制の強化拡充
7.学校歯科及び検診業務の強化充実
8.福祉共済金運用の実施充実
9.定款及び施行規則の改正検討

昭和61年度(1986)事業計画書 会長　友利政三

1.社団法人設立
　法人格の取得による会務の進展
2.学術事業の振興
　那覇市学校歯科保健大会開催
　県歯科医師会主催の学術講演会への参加
3.医療経営の整備
　地区青申会に係る税務署による講演会
　税理士による講演会
4.支部活動の強化
　新支部の編成に伴う連携の強化
5.保険指導の強化
　保険講習会(中央)への派遣及び普及伝達
6.婦人部の活動充実
　時局講演会及び勉強会
7.執行体制の強化拡充
　組織の充実を図り会務執行を推進する
8.学校歯科及び検診業務の強化充実
　校医の配置、1才半健診への協力
　デンタルフェア開催への協力
9.福祉共済金運用の実施充実

昭和62年度(1987)事業計画書 会長　友利政三

1.法人執行体制の整備充実
　組織の充実を図り会務執行を推進する
　諸規則の整備
2.学術事業の振興
　那覇市学校歯科保健大会開催
　県歯科医師会主催の学術講演会への参加
3.学校歯科及び検診業務の強化充実
　校医の配置
　1才半健診
　市町村、教育委員会等関係団体との連携
4.医療経営の充実
　地区青申会に関る税務署による講演会
　税理士による講演会
5.支部活動の強化
6.保険指導の強化
　保険講習会(中央)への派遣及び普及伝達
7.婦人部の活動充実

時局講演会及び勉強会
8.福祉共済金運用の実施充実
9.県歯科医師会事業への協力
障害児(者)歯科治療
衛生士養成の講師派遣
デンタルフェア

昭和63年度(1988)事業計画書

会長 高江洲正勝

1.法人執行体制の整備充実
組織の充実を図り会務執行を推進する
諸規則の整備
2.学術事業の振興
那覇市学校歯科保健大会開催
県歯科医師会主催の学術講演会への参加
3.学校歯科及び検診業務の強化充実
校医の配置
1才半健診
子どもまつり健診相談
市町村、教育委員会等関係団体との連携
4.医療経営の充実
地区青申会に関る税務署による講演会
税理士による講演会
5.支部活動の強化
6.保険指導の強化
保険講習会(中央)への派遣及び普及伝達
7.婦人部の活動充実
時局講演会及び勉強会
8.福祉共済金運用の実施充実
9.県歯科医師会事業への協力
障害児(者)歯科治療
衛生士養成の講師派遣
デンタルフェア

平成元年(1989)事業計画書 会長 高江洲正勝

1.法人執行体制の整備充実
組織の充実を図り会務執行を推進する
諸規則の整備
2.学術事業の振興
那覇市学校歯科保健大会開催
県歯科医師会主催の学術講演会への参加
3.学校歯科及び検診業務の強化充実
校医の配置
1才半健診
市町村、教育委員会等関係団体との連携
子どもまつり健診相談
4.医療経営の充実
地区青申会に関る税務署による講演会
税理士による講演会
5.支部活動の強化
6.保険指導の強化
保険講習会(中央)への派遣及び普及伝達
7.婦人部の活動充実
時局講演会及び勉強会
8.福祉共済金運用の実施充実
9.県歯科医師会事業への協力
障害児(者)歯科治療
衛生士養成の講師派遣
デンタルフェア
10.会員相互及び関係諸団体との親睦

平成2年(1990)事業計画書 会長 高江洲正勝

1.法人執行体制の整備充実
組織の充実を図り会務執行を推進する
諸規則の整備
2.学術事業の振興
那覇市学校歯科保健大会開催
県歯科医師会主催の学術講演会への参加
日歯生涯研修会事業の推進
3.学校歯科及び検診業務の強化充実
校医の配置
1才半健診
市町村、教育委員会等関係団体との連携
保育園、幼稚園健診相談
4.医療経営の充実
地区青申会に関る税務署による講演会
税理士による講演会
5.支部活動の強化
6.保険指導の強化
保険講習会(中央)への派遣及び普及伝達
7.婦人部の活動充実
時局講演会及び勉強会
8.福祉共済金運用の実施充実
9.県歯科医師会事業への協力
障害児(者)歯科治療
デンタルフェア
衛生士養成の講師派遣
10.会員相互及び関係諸団体との親睦

平成3年(1991)事業計画書 会長 新城啓和

1.法人執行体制の整備充実
組織の充実を図り会務執行を推進する
諸規則の整備
2.学術事業の振興
那覇市学校歯科保健大会開催
学術講演会への参加
日歯生涯研修会事業の推進
3.学校歯科及び検診業務の強化充実
校医の配置
1才半健診
市町村、教育委員会等関係団体との連携
保育園、幼稚園健診相談
学校歯科医師資質向上のための研修会への参加
4.医療経営の充実
地区青申会に関る税務署による講演会
税理士による講演会
5.支部活動の強化
6.保険指導の強化
保険講習会(中央)への派遣及び普及伝達
7.広報活動の強化
8.婦人部の活動充実
時局講演会及び勉強会
9.福祉共済金運用の実施充実
10.県歯科医師会事業への協力
障害児(者)歯科治療
デンタルフェア

衛生士養成の講師派遣
11.会員相互及び関係諸団体との親睦

平成4年度(1992)事業計画書 会長 新城啓和

1.法人執行体制の整備充実
組織の充実を図り会務執行を推進する
諸規則の整備
2.学術事業の振興
那覇市学校歯科保健大会開催
学術講演会への参加
日歯生涯研修会事業の推進
3.学校歯科及び検診業務の強化充実
校医の配置
1才半健診
市町村、教育委員会等関係団体との連携
保育園、幼稚園健診相談
学校歯科医師資質向上のための研修会への参加
4.医療経営の充実
地区青申会に関る税務署による講演会
税理士による講演会
5.支部活動の強化
6.保険指導の強化
保険講習会(中央)への派遣及び普及伝達
7.広報活動の強化
8.夫人部の活動充実
時局講演会及び勉強会
9.福祉共済金運用の実施充実
10.県歯科医師会事業への協力
障害児(者)歯科治療
デンタルフェア
衛生士養成の講師派遣
11.会員相互及び関係諸団体との親睦

平成5年度(1993)事業計画書 会長 新城啓和

1.法人執行体制の整備充実
組織の充実を図り会務執行を推進する
諸規則の整備
2.学術事業の振興
那覇市学校歯科保健大会開催
学術講演会への参加
日歯生涯研修会事業の推進
3.学校歯科及び検診業務の強化充実
校医の配置
1才半健診
市町村、教育委員会等関係団体との連携
保育園、幼稚園健診相談
学校歯科医師資質向上のための研修会への参加
4.医療経営の充実
地区青申会に関る税務署による講演会
税理士による講演会
5.支部活動の強化
6.保険指導の強化
保険講習会(中央)への派遣及び普及伝達
7.広報活動の強化
8.夫人部の活動充実
時局講演会及び勉強会
9.福祉共済金運用の実施充実
10.県歯科医師会事業への協力
障害児(者)歯科治療
デンタルフェア
衛生士養成の講師派遣
11.会員相互及び関係諸団体との親睦

平成6年度(1984)事業計画書 会長 新垣元洋

1.法人執行体制の整備充実
組織の充実を図り会務執行を推進する
諸規則の整備
2.学術事業の振興
那覇市学校歯科保健大会開催
学術講演会への参加
日歯生涯研修会事業の推進
3.学校歯科及び検診業務の強化充実
校医の配置
1才半健診
市町村、教育委員会等関係団体との連携
保育園、幼稚園健診相談
学校歯科医師資質向上のための研修会への参加
4.医療経営の充実
地区青申会に関る税務署による講演会
税理士による講演会
5.支部活動の強化
6.保険指導の強化
保険講習会(中央)への派遣及び普及伝達
7.広報活動の強化
8.夫人部の活動充実
時局講演会及び勉強会
9.福祉共済金運用の実施充実
10.県歯科医師会事業への協力
障害児(者)歯科治療
デンタルフェア
衛生士養成の講師派遣
11.会員相互及び関係諸団体との親睦

平成7年度(1995)事業計画書 会長 新垣元洋

1.法人執行体制の整備充実
組織の充実を図り会務執行を推進する
諸規則の整備
2.学術事業の振興
那覇市学校歯科保健大会開催
学術講演会への参加
日歯生涯研修会事業の推進
3.公衆衛生活動の充実
デンタルフェア
4.学校歯科及び検診業務強化充実
校医の配置
1才半児健診
成人健診
市町村、教育委員会等関係団体との連携
保育園、幼稚園健診相談
学校歯科医師資質向上のための研修会への参加
5.医療経営の充実
地区青申会に係る税務署による講習会
税理士による講習会
6.支部活動の強化
7.保険指導強化
保険講習会(中央)への派遣及び普及伝達
8.広報活動の強化
9.夫人部の活動充実

時局講演会及び勉強会
10.福祉共済金運用の実施充実
11.県歯科医師会事業への協力
障害児(者)歯科治療
歯科衛生士養成の講師派遣
12.会員相互及び関連諸団体との親睦

平成8年度(1996)事業計画書 会長 新垣元洋
1.法人執行体制の整備充実
組織の充実を図り会務執行を推進する
諸規則の整備
2.学術事業の振興
那覇市学校歯科保健大会開催
学術講演会への参加
日歯生涯研修会事業の推進
3.公衆衛生活動の充実
デンタルフェア
地域歯科保健対策強化
4.学校歯科及び検診業務強化充実
校医の配置
乳幼児健診
成人健診
市町村、教育委員会等関係団体との連携
保育園、幼稚園健診相談
学校歯科医師資質向上のための研修会への参加
5.医療経営の充実
地区青申会に係る税務署による講習会
税理士による講習会
6.支部活動の強化
7.保険指導強化
保険講習会への派遣及び普及伝達
8.広報活動の強化
9.夫人部の活動充実
時局講演会及び勉強会
10.福祉共済金運用の実施充実
11.県歯科医師会事業への協力
12.会員相互及び関連諸団体との親睦

平成9年度(1997)事業計画書 会長 太田正昭
1.法人執行体制の整備充実
組織の充実を図り会務執行を推進する
諸規則の整備
会員獲得による組織強化
2.学術事業の振興
那覇市学校歯科保健大会開催
学術講演会への参加
日歯生涯研修会事業の推進
検診精度の向上とその研修及び新入会員の研修
3.地域歯科保健対策の充実
地域歯科保健活動の推進
4.健康づくり推進事業の充実
デンタルフェア
5.学校歯科及び検診業務強化充実
歯科校医の配置
児童生徒及び学校職員の歯科保健の向上
市町村、教育委員会等関係団体との連携
保育園、幼稚園健診相談
学校歯科医師資質向上のための研修会への参加
6.医療経営の充実
地区青申会に係る税務署による講習会
税理士による講習会
7.支部活動の強化
8.保険指導強化
保険講習会への派遣及び普及伝達
9.広報活動の強化
10.夫人部の活動充実
時局講演会及び勉強会
11.福祉共済金運用の実施充実
12.県歯科医師会事業への協力
13.会員相互及び関連諸団体との親睦

平成10年度(1998)事業計画書 会長 太田正昭
1.法人執行体制の整備充実
組織の充実を図り会務執行を推進する
会史編纂の推進
諸規則の整備
会員獲得による組織強化
2.学術事業の振興
那覇市学校歯科保健大会開催
学術講演会への参加
日歯生涯研修会事業の推進
検診精度の向上とその研修及び新入会員の研修
3.地域歯科保健対策の充実
地域歯科保健活動の推進
4.健康づくり推進事業の充実
デンタルフェア事業
5.学校歯科及び検診業務強化充実
歯科校医の配置
児童生徒及び学校職員の歯科保健の向上
市町村、教育委員会等関係団体との連携
保育園、幼稚園健診相談
学校歯科医師資質向上のための研修会への参加
6.医療経営の充実
地区青申会に係る税務署による講習会
税理士による講習会
7.支部活動の強化
8.保険指導強化
保険講習会への派遣及び普及伝達と諸問題の対策
9.広報活動の強化
10.夫人部の活動充実
時局講演会及び勉強会
11.福祉共済金運用の実施充実
12.県歯科医師会事業への協力
13.会員相互及び関連諸団体との親睦

D. 南部地区歯科医師会の事業内容

南歯は古くから会員相互の和を重んじる流れを脈々と受け継いでいる。沖縄において最も大所帯の地区であり、浦添以南の広い範囲をその管轄とする組織でありながら、昭和57年から理事会以外にも拡大理事会を持ち、理事だけではなく、各支部長をも含めた会議の中で、個々の会員の声を聞きながら会務を執行している。南歯の基本は支部会活動にあると言っても過言ではなかろう。理事会で決定できる案件の中で、重要な議案に関してはほとんど全て、支部長が拡大理事会から支部に持ちかえり、支部の考えや意見を取りまとめて拡大理事会で報告し、そこでさらに審議することで結論を出している。また総会で議決すべき事項に関しても、何度も支部会での議論を積み重ねた上で総会を開催するため、これまで特に紛糾することもなく総会が運営されてきた。これらの事がなされるためには、会員が支部会に出席することが大切である。会員にとって支部会は情報の宝庫であり、自分の意見を表明し、また他の会員の考えを聞く事のできる貴重な会合である。このような支部会を基礎にして南歯はこれまで多くの事業を展開してきた。この章では南部地区歯科医師会の事業を色々な切り口で紹介したい。

「Ⅰ.行政機関との連携」では「那覇市学校歯科保健大会」を最初に取り上げた。南歯の事業の中で対社会的にも、歯科医学的にも最も価値のある事業だからである。「学校歯科・高校検診」では大正年代からの南部における学校歯科関連の資料を整理し、校医配置、高校検診料の流れ及びグループ検診の源流も調べてみた。「1才半児健康診査」では実務上のトラブルの生々しい記録も、行政とは如何なるものかを知る上での良い経験談として掲載した。「各市町村との関係」では会務日誌に基づいて各市町村ごとに南歯との交流を整理した。

「Ⅱ.会員」関連 では共済事業を筆頭に南歯で一番華やかな事業である家族慰安会(家族忘年会)、さらにゴルフ・球技大会についても掲載した。

「Ⅲ.沖縄県歯科医師会との連携及び協力」では県歯の長年の継続事業に対する南歯の対応について取り上げ、主に南部におけるデンタルフェアに関することを整理した。

「Ⅳ.その他」では青申会、連盟など南歯の側面を彩る活動と、九州八市歯科医師会役員連絡協議会ついて纏めた。

資料が足りないため物足りない項目もあると思うがご勘弁頂きたい。60ページ足らずの内容であるが、できる限り将来の会員が南部地区歯科医師会の歴史を振り返るときの参考になるようにまとめたつもりなので、お付き合いの程をお願いしたい。

Ⅰ. 行政機関との連携(行政における歯科分野の協力)

南部地区歯科医師会はその地理的・政治経済的環境のため、古くから行政との付き合いが密であった。また南部地区歯科医師会の会務日誌には、県歯の動きに連動した会務が数多く見られる。さらに復帰前後の慌ただしい流れの中で、当時の県歯会員の2/3を占める南歯は地区歯科医師会としての立場から、公衆衛生(地域歯科保健)の推進・向上に努力してきた。この章では、南部地区歯科医師会と行政との関係の歴史を振返ってみたい。漫然とした事柄の羅列ではなく、4つのテーマを設定して整理した。

南歯と那覇市教育委員会の共催事業として各方面から評価され、14年間も続いている「那覇市学校歯科保健大会」、歯科保健の基本であり、南部の各教育委員会と関わりのある「学校歯科・高校検診」、地域住民と直接触れ合う歯科保健教育である「1才半児健康診査」、最後に「各市町村との関係」で南部の抱える広範囲の各行政機関との連携の流れをまとめた。長い年月の間、常に穏やかな関係であろうはずがなく、時には波風の立つこともある。行政との数少ないトラブルの経緯についても敢えて記してある。今後の行政との対応の参考になれば幸いと思うからである。各テーマに入る前に、平成10年度の時点で、社団法人南部地区歯科医師会が関っている対行政活動・各協議会等を、会務日誌及び理事会議事録に基づいて整理し、今までご苦労をなさった先輩諸氏へのご報告と感謝に代えさせて頂きたい。

平成10年度 社団法人 南部地区歯科医師会活動

Ⅰ.部外協議会等委員　　平成11年2月現在

部外協議会等	所管	委員	氏名	備考
那覇市医療協議会	那覇市福祉保健部			
1.学童健診部会	（市民健康課）	委員	山川 修	
		委員	友利 隆俊	
2.保健部会		委員	玉城 均	
		委員	平良 浩	
3.救急部会		委員	嘉手納一彦	
4.予防接種部会		委員	長濱 正	代理 友寄 清順
那覇市学校歯科保健大会実行委員会（第14回大会）	那覇市教育委員会（学事保健課）南歯共催	副会長	太田 正昭	
		監事	山川 修	
		実行委員長	嘉手納一彦	
		顧問	玉木 史朗	
			友利 政三	
			高江洲正勝	
			新城 啓和	
			新垣 元洋	
		委員	長濱 正	
			友寄 清順	
			仲本 友久	
			玉城 均	
			平良 浩	
			友利 隆俊	
			小禄 真	
			玉城 斉	
			徳田 安成	
			湖城 秀久	
かかりつけ医推進委員会	那覇市医師会	委員	太田 正昭	代理 平良 浩
中央保健所運営協議会	中央保健所（総務課企画情報班）	委員	太田 正昭	
中央保健所保健事業連絡協議会	中央保健所（総務課企画情報班）	委員	太田 正昭	
小児成人病対策委員会	那覇市教育委員会（学事保健課）	委員	友利 隆俊	
那覇市母子保健連絡協議会	那覇市福祉保健部（市民健康課）	委員	玉城 均	
那覇市高齢者保健福祉計画及び介護保険事業計画策定委員会	那覇市福祉保健部（老人福祉課）	委員	玉城 均	
那覇地区学校保健会		理事	太田 正昭	
浦添市市民憲章推進協議会	浦添市市民部（市民生活課）	委員	湖城 秀久	
浦添市てだこまつり実行委員会	浦添市市民部（市民生活課）	委員	湖城 秀久	
浦添市青少年健全育成市民会議	浦添市教育委員会（青少年育成課）		湖城 秀久	
浦添市学校保健会		理事	湖城 秀久	
浦添市母子保健連絡協議会	浦添市福祉保健部（健康推進課）	委員	湖城 秀久	
浦添市社会福祉大会	浦添市社会福祉協議会	大会役員	湖城 秀久	
南部地区保健医療協議会	南部保健所（総務課）	委員	太田 正昭	
南部保健所地域エイズ対策推進協議会	南部保健所（健康増進課防疫班）	委員	太田 正昭	
那覇市国民健康保険運営協議会	国民健康保険課庶務係	委員	城間 三男	
沖縄県歯科医警察協力会	県警		太田 正昭	
			山川 修	
			長濱 正	
南部地区歯科医警察協力会	那覇署		太田 正昭	
	浦添署		山川 修	
	豊見城署		長濱 正	
	与那原署		松本 真志	
	糸満署		湖城 秀久	
			金城 秀男	
			諸見里 亮	
			前川 一彦	
国税モニター	国税事務所		安村 庸	
那覇地区税務団体協議会			新垣 元洋	
			太田 正昭	
北那覇地区税務団体協議会			高江洲正勝	
			新城 啓和	
九州八市歯科医師会役員連絡協議会		委員	太田 正昭	
			長濱 正	

Ⅱ.部外協力

部外協力事業等	所　管	氏　名	内　容
那覇市保健大学校	那覇市福祉保健部（市民健康課）	山川　修	講師
那覇市歯科健康講演会	那覇市福祉保健部（市民健康課）	山川　修	講師
那覇市かみかみ講演会	那覇市福祉保健部（市民健康課）	玉城　斉	講師
那覇市成人歯科健診助言会	那覇市福祉保健部（市民健康課）	玉城　均	講師.データ解説
那覇看護専門学校	那覇市医師会	嘉手納一彦	講師
糸満市健康まつり	糸満市市民部（保健予防課）	玉澤 吉弘 上原 智也 大西　満 上原かんな	健診・健康相談
南風原町歯の健康フェアー	南風原町（環境保健課）	金城 史明 前川 清春 赤峯　健 村田 恵一	講師・健診 ３才児歯科健診
那覇市学校保健懇談会	那覇市教育委員会（学事保健課）	太田 正昭 山川　修 長濱　正 友寄 景淳 友寄 清順 屋宜　優 嘉手納一彦 玉城　均 大西　満 平良　浩	意見・情報交換 教育委員会 小中校長会 養護会 三師会
浦添市２才児歯科健診	浦添市福祉保健部（健康推進課）		健診
与那原町２才児歯科健診	与那原町（福祉課）		健診
１才６ヶ月児歯科健診	那覇市・浦添市・糸満市 南風原町・与那原町・玉城村・豊見城村		健診・一部ブラッシング指導 那覇市のみ歯科衛生士を２人南歯から配置
那覇市成人歯科健診	那覇市福祉保健部(市民健康課・老健基本検査係保健センター)		健診・健康相談 （重点健康相談）
浦添市成人歯科健診	浦添市福祉保健部 （健康推進課）		健診・健康相談 （重点健康相談）
那覇市学校歯科保健大会当日係 （第１４回大会）	那覇市教育委員会 （学事保健課）南歯共催	支部長 班長 各委員会委員	
豊見城村教育委員会懇談会	豊見城村教育委員会	金城 秀男 友利 隆俊 赤峯 悦生 大見謝 健 小禄 真 竹尾 孝明 仲本 友久	意見・情報交換
南風原町環境保健事業関係者懇親会	南風原町環境保健課	前川 清春	意見・情報交換

[1] 那覇市学校歯科保健大会の足跡

那覇市学校歯科保健大会は1985(昭和60)年11月28日に第1回が開催されたが、そこに至るまでの様々な準備に2年6ヶ月をかけている。直接の事の発端はTBSの報道特集「噛めない子が増えている」において「噛めない子、噛まない子」の問題が報道されたことである。日頃我々が感じていた子ども達の口腔の異常な変化が全国的な話題として取り上げられたものであった。むし歯罹患率が全国的にも高い沖縄の子ども達に、さらに噛まない、噛めない子が増えていけば、この子達の健康はどうなっていくのかという危機感が我々歯科医師にはあった。そのような状況を背景に那覇市教育委員会と南部地区歯科医師会とが共催で「噛むこと」をテーマにした大会を実施する話が纏まったのである。大会開催に当っての会員の説得、那覇市への予算折衝等当時の執行部(玉木史朗会長から友利政三会長時代)の大変な苦労があった。その時の詳しい経緯はぜひ座談会を読んで頂きたい。また各大会のメインテーマ、サブテーマ及び参加人数等は開催一覧表(第4章)に掲載した。

昭和60年3月4日に大会の最初の打合せ会が、みやぎ歯科(宮城正廣会員の診療所)でもたれており、講師や会場との交渉等に宮城正廣学術担当理事を中心に精力的な努力がなされていた。会務日誌によると養護教諭等も含めた第1回の大会実行委員会も昭和60年10月18日、場所はみやぎ歯科3階となっている。以後10年間みやぎ歯科は本大会の作戦本部(場所代無料)となった。第1回開催要項には実行委員は全て会員の先生方となっているが、仲本鈴子先生などの養護教諭も実際には実行委員会に参加していた。大会会長として南歯会長友利政三を筆頭に、実行委員長 玉木史朗南歯顧問、副委員長 高良政勝、委員20名の陣容で、マスコミへの対応、新聞広告のスポンサー集め、看板・舞台幕の発注、受付、舞台進行等をこなし、ほとんど会員による手作りの大会となった。

第1回大会のテーマは「かむことは、なぜ大切なのでしょう」であり、これは今でも本大会のメインテーマとして受け継がれている。大会の趣旨は以下の如くである。

「児童生徒の口腔の健康について学校歯科保健活動が関係各位の永年の努力により指導、管理され、学童が自らの健康を守る考えは地域社会に浸透しつつある。本大会は現代社会の中に育成される児童・生徒の健全な口腔機能の確立と、またこのことが全身の健全な発育および健康の増進にどのように関与しているのか家庭と地域社会とともに考察し歯科保健の原点をふまえ、これからの学校保健のあり方を学習して、真の健康な市民の育成をめざすものである」

この大会趣旨も第14回まで変わっていない。

第1回大会(1985年)は那覇市東町の労働福祉会館で開催され、入場者は1,150人と立ち見が出るほどの盛況であった。後援は16団体であった。講師は井上直彦東京大学医学部助教授、二木武東京都立母子保健院院長と一流の先生をお迎えした。井上直彦教授は『今、子供の口の中で何が起こっているか』と題し「近年軟らかくて食べやすい加工食品の普及で食生活が大きく変化し、噛まなくなった子供は顎の発達が遅れ、歯並びが悪くなる。それがむし歯を生み、いわゆる歯槽膿漏(歯周病)につながりかねない。ひいては子供の情緒や知能発達にも影響を及ぼす恐れがある」と注意を促した。二木先生は『かむ子は育つ』と題し、医師の立場から噛まない子の増加の原因について「離乳期を適切に対処していないと、食品が全体的に軟らかくなり、かまなくても栄養摂取ができる現状と密接に関連があり、一種の文明病である」と指摘した。講演の詳しい内容は第1回から第8回までの特別講師の講演録が平成6年に発刊されているのでそれをお読み頂きたい。第1回大会の開催要項の表紙写真については著作権の問題が持ち上がったが、知らずに使用した事を著作権者である写真家(安田淳夫氏)に説明し了解してもらった経緯がある。安田氏にはその後第8回大会までの表紙写真を依頼した。大会要項に記載された参加者は次ぎのとおりである。これは第10回大会まで同じであった。

1.学校歯科医　2.歯科医師　3.県市町村教育委員会関係職員　4.学校の教職員　5.学校医
6.学校薬剤師　7.PTA役員　8.歯科衛生士
9.歯科技工士　10.栄養士　11.保母
12.その他の歯科保健に関心のある人

第2回大会(1986年)は場所を那覇市民会館に移した。この年、那覇市教育長は稲嶺盛国先生から山田義良先生に替わった。この大会から実行委員に那覇市教育委員会関係者および養護教諭が正式に参加しており、また地元の講師が登場する。特別講師は河村洋二郎大阪大学名誉教授で『人間らしく生きるために……全身の健康のために口の健康を……』との演題で生理学者としての立場から次の事について詳しく述べられた。

①高齢化社会で年寄りが何でもおいしいものを食べる為、または会話をする為にも、口の健康が必要であり、その為には小さい頃からの注意が重要である事
②人々が意欲をもって生きていくためには、口が大切である事

さらに口腔の機能、咀嚼のメカニズムについても、わかりやすく講演された。

「かめない」とは、口腔に障害等の病的変化がある場合にいうのであって、「かまない」とは異なるので混同しない様にとの指摘があり、更に「かむ」事の重要性が強

調され過ぎた場合の弊害についても同時に述べられた。また軟食等の食生活の嗜好の変化は、生後の学習によってもたらされるものである事をネズミの実験結果をもとに説明された。

南部地区歯科医師会会員高良政勝は『いま沖縄の子供の口の中になにが起こっているのか？』として、診療現場や学校検診で見られる子ども達の口腔内の異常について報告した。「河村教授の話はちゃんとした歯がある状態での正常な生理の話であるが、私の話は正常とは言い難い子ども達の口の中の話である。哺乳動物は長い食生活の結果、その動物に適した口になっている。同じ草食動物でも水中の草をすくって食べるカバと、陸上の草をむしって食べる馬では、歯の形が違う。また肉食動物では、食べるだけではなく、敵を倒す為の歯の形をしている。人間は色々な物を食べるので、歯も色々な形をしており、前歯・小臼歯・大臼歯それぞれに役目がある。歯が1本抜けただけでも、病理変化が起こり、歯の傾斜などが現れ、よって噛む能率が変化してくる。人間の口の働きには、栄養摂取以外に、話すこと、すなわちコミュニケーションもある。話すことが仕事の人にとって、歯は商売道具の一つである。またスポーツマンにとっても歯は大切である。沖縄にはボクシング世界チャンピオンの具志堅用高氏がおられるが、1本むし歯になってもパンチ力が落ち、打たれた時も非常にダメージを受けやすくなるそうだ。歯を食いしばって我慢しなさいと言われることがあるが、今の子ども達に食いしばる歯がどれだけあるのだろうか。ギリシャ時代の奴隷売買では、歯でその奴隷の価値を決めたそうだ。口を開けさせてその奴隷の体力を見たのである。「歯は力なり」とは、古今東西を問わず言えることだと思う。また、歯は生きている時だけ役立つものではない。トラは死んで皮を残すが、人間は歯を残す。去年の日航機の墜落事故で、指紋がなくなった固体の識別に歯が役立った。

私達は非常に恵まれた時代に生まれてきたことを感謝する。確かに加工食品は災害時の救援物資等には大きな力を発揮する。しかし、これが私達の食生活の主流になった時にどうなるか。この事は問題にしないといけないと思う。昨日の新聞に、ある小学校の教頭先生が書かれていたが、小学校4年生の子ども達にまな板を見せても、何をするものか分らなかったそうだ。これ程までに加工食品が浸透してきている。昭和35年を1とすると、昭和58年には冷凍食品は178倍になっているそうだ。我々人類の歴史は200万年とも300万年ともいわれており、その間、体の機能とか生理作用は殆ど変わっていないのに対し、このように短期間の急激な生活環境（食生活）の変化は人類史上無かったのではないか。はたしてこの食生活の激変に体がついていけるかどうか。子ども達の体は今、悲鳴を上げているのではないか。調査能力世界一といわれるアメリカ上院の栄養問題特別委のレポートには「現代っ子の無気力・学力の低下・暴力・登校拒否は現代食が関係している」とある。現代食が色々な面で我々の心と体を蝕んでいることは否定できないのではないか。長寿国日本の中でも長寿村と呼ばれていたところが、最近では長寿と言われなくなってきた。明治生まれの父母が、息子や娘の葬式を出すのが増えてきた。しかもこの現象は、食事の変化に比例した形で現れている。現代食が寿命も縮めているのである。日本は長寿国であり、我々も70才、80才は当たり前に生きるものだと思い、それを人生のゴールとして生活している。しかし我々の子ども達、これからの子ども達は、今のお年寄りのように長生きできるか疑問である。学校給食の残飯の状況を見ると、噛まなくてもよい物はよく食べているが、噛まなくてはいけない物は大量に残っている。元来色々な物を食べる人間が、食べられる食物の種類が減少していくという事は、人類の滅亡にもつながるのではないだろうか。学校の給食時間は45分となっているが、そのうち15分は準備の時間で、15分は片付けの時間であり、実際に食べる時間は15分と決められている。お家で食事に1時間かかる子が、たった15分の給食時間でよいのか。きれいな歯並びで咀嚼効率の高



河村先生　来沖記念

い子にとっても15分はどうなのだろう。小学・中学の時代は、人間の一生を左右する大切な体をつくる非常に大事な時期である。15分ではエネルギーの補給どころか、情操教育もできないのではないか。給食は車のガソリンを補給する事とは違うというのは、皆様も百も承知でしょう。「衣食足りて礼節を知る」という言葉もある。疎遠になりがちな先生と子ども達のコミュニケーション、その時間を給食に求めるのは望みすぎなのか。私は、楽しく食べて、健やかに育てていく事が、学校教育にとっても大切ではないかと思う。学校では教室の掃除の時間はあるが、給食後の自分の体を掃除する時間はない。勉強は大人になってからでもできるが、体は子どものうちから作らないといけない。健康であるべき口をドブ川の様にして何が教育かと言いたい。口の中が悪いということは、口の中だけの問題ではない。社会現象（加工食品の増大等）として捉えなければならない。歯科医は歯をいじくっているだけではいけないのである。この大会を開催した南部地区歯科医師会の本意もそこにある。沖縄の未来を背負う子ども達に、私達ができる最高のプレゼントは健康だと思う。」

識名小学校養護教諭の仲本鈴子先生は『識名小学校における歯磨き実践について』と題して発表した。「識名小学校の児童数は1470人、職員数は64人で、昭和58年から歯磨き実践をしている。歯磨き実践を始めた動機は、児童のむし歯の処置率を高めても、それを上回るむし歯罹患率が続いた事であった。学級指導における保健の時間における歯の指導は年間で2時間だけである。継続的かつ効果的な歯の指導をするため、歯磨き実践をしようという職員の強い希望が生まれた。教師と児童が一緒に歯磨きをする事の指導効果も期待された。最も継続できる方法として、給食後に歯磨きができる様に、学校の時間表を改定してもらった。歯磨き実践の4本柱として、職員への啓蒙、資料の作成、PTAへの啓蒙、施設・設備の充実を図った。それぞれに対し歯科校医の関わりが大きかった。今ではむし歯の罹患率も減少傾向にあり、歯磨きアンケートでは、朝の歯磨き91%、夜の歯磨き81%となり家庭における歯磨きも定着してきた。マンネリ化対策としては、むし歯予防に関する週間行事・月間行事の実施、募集した作文・ポスター・標語をPTA新聞・保健便りに掲載、染め出しによる意識高揚、校内での歯磨きのビデオや音楽の変更等を行っている。」

第3回大会(1987年)では実行委員は50人に増えた。できるだけ多くの会員に大会に携わってもらう意図があった。特別講師の伊東学而鹿児島大学歯学部矯正学教授は、『噛むことと口の発達』と題して講演され、「手足をよく動かさないと筋肉が発達しないのと同じ様に、顎をよく動かしていない為に、その筋肉や骨の発達が不十分な子どもが増えている。その結果、齲蝕または歯周疾患、顎関節症などの歯科疾患の多発を生む。その原因は人工哺乳の増加、離乳期における固形食への移行不全、幼児の軟食・液状食、児童・生徒の食教育の不足などが起きていることにある。食教育は従来栄養学的な観点からのみ行われてきたが、子どもに充分な咀嚼習慣をつけなければ、機能的にも形態的にも十分な口の発達が望めない。食教育の要点は、食事の規則性・摂取食品・とり方の3点である。つまり規則的な生活リズムによって食欲を安定させ、偏食をせず、水の助けを借りずに、両側の臼歯を使ってゆっくりと咀嚼する習慣を付けることが大切である。また、学校検診の中でも、噛み合わせの検診を入れることも必要である。」と示唆した。

この頃には大会終了後すぐにもたれる慰労会で講師を交えてのなごやかな時間を過ごすのが恒例となっていた。今回の慰労会で山田義良教育長は得意の短歌を披露した。

「噛む程に　味の出るなり　干しだこよ
噛めば良くなる　顎も頭も」

地元からは高良政勝会員が『いま沖縄の子供の口の中になにが起こっているのか？』PARTⅡとして、昨年に続いて沖縄の子ども達の、口腔内の現状を報告し、真和志小学校養護教諭の仲間ヨシ子先生が『むし歯を予防するための指導と実践』を発表した。

第4回大会(1988年)は旧称「労働福祉会館」改め「那覇東町会館」に戻った。特別講師には大国真彦日本大学小児科教授を迎え『子どもの成人病と食生活』と題してご講演頂いた。大国教授は「最近子どもに成人病とその予備軍が増えている」と指摘。10歳代でほとんど全て（98%）に動脈硬化の初期病変が認められ、小児にも糖尿病、胃潰瘍、高脂血症、肥満が増えているというデータを示し、「これらの原因は、幼児期・小児期の悪い生活習慣（食生活の乱れ・運動不足）に基づいている。よって、これからの子どもの食生活は将来の成人病予防の観点からなされるべきであり、そのためには家庭の食事、保育所・幼稚園・学校の給食、間食のあり方を考えると共に、家庭の母親および次に母親になるべき人達に成人病予防の観点にたった保健教育を行うべきである。」と講演した。この頃には実行委員会もパート別に責任者が決められ、〔会場〕〔受け付け〕〔広告〕〔投稿〕〔マスコミ〕〔来賓〕〔講師〕〔設営〕〔写真〕〔スライド〕となっていた。

会員による講演では宮城正廣が『噛めない噛まない子の将来はどうなるか』と題して、次の様に講演した。「食べるということは、ただ単に歯や顎や筋の働きで行われているわけではない。食べると言う行為は、食べ物をこね回す舌、さらにはこれから起こる食べ物の味や歯ごたえなどの感覚情報を、運搬・処理する神経や脳などから構成された、一種のコンピューターシステムともいえる総合的な働きである。このシステムを『咀嚼システム』と呼ぶ。また、咀嚼システムの良・不良は、体のほかのシステムの発達にも強い影響を及ぼすことが、文部省特定研究『咀嚼システムの基礎研究』で次々と実証されて

いる。噛まなければ脳の活動が悪くなるという動物実験モデルもその一例である。学童期は咀嚼システムの重要な発達期であるが、現在の子どもは正常な発達がなされる環境にあるだろうか？子ども達の食べ物は、食べやすいように軟らかく加工され、親たちは何の抵抗も感じずに、子どもにそれを与えている。さらに、口腔内に発現する異常、種々の疾病が放置され、歯並びの悪い子や、食べ物を正常に咀嚼できない子どもが増えてきている。このことは大人に何を問題提起しているのか。」

母親による体験発表としては、饒波房枝さんが『ニンジン運動のすすめ』を発表した。保健婦の饒波さんは「こんなに一生懸命歯みがきをしても、なぜむし歯は減らないのか」という疑問を抱いていた頃、“歯と顎の不調和が不正咬合を生み、むし歯を増加させている要因であるという、歯と顎骨の不調和（Discrepancy）の問題を研究している東大の井上先生に出会った事がきっかけで、自分の子供の子育ての目標として「ニンジン運動」に取組んだ経験を話された。

第5回大会(1989年 平成元年)は再度那覇市民会館で開催した。特別講師には斉藤滋神奈川歯科大学教授を迎え『噛む回数と子どもの健康…メカノサイトロジーとは…』と題してご講演いただいた。斉藤教授は「一家団欒による食事から個食（好きなものを一人で食べる）、家庭料理から外食、和食から洋食など食環境が非可逆的（昔の状態に戻れない）に変化する傾向となっている。その結果、肥満・虚弱・成人病低年齢化などの全身的疾患と共に歯周炎、顎関節障害、歯列不正などが増加している。最近は軟食の時代と言われ、グルメ食の追求および外食依存による咀嚼機能の低下（噛まない）により顎・顔面組織の未発達や全身組織への影響が非常に心配されている。神奈川県下の小学生1～3年生114名の学校給食を1週間にわたって噛む回数を測定した結果、児童の平均咀嚼回数は689回（一食当り）となり、大学生の620回と比較しても大差はなかった。これら現代人の咀嚼回数は弥生時代（卑弥呼）と比較すると約1/6程度であり、戦前食（昭和10年ごろ）の1/2以下に減少している。小学生の4人に3人は『噛めない』かあるいは『噛まない』子ども達であった。『噛む』ことは、食物を細かく砕き、唾液を混ぜることにより、消化・吸収を促進するだけでなく、知能発達や『ぼけ』にも関係する。さらに『噛み締める』という物理的な力は顎および顔面組織に存在する細胞の新陳代謝を活性化することも明らかになった。このような学問分野は『メカノサイトロジー』（力の細胞学）と呼ばれ、生命科学の新しい分野として注目されている。」と講演した。また斉藤教授は「卑弥呼の歯がいーぜ」ということで、「よく噛む8大効用」を説明された。

「ひ」：肥満予防	「み」：味覚の発達
「こ」：言葉の発音はっきり	「の」：脳の発達
「は」：歯の病気予防	「が」：ガン予防
「いー」：胃腸快調	「ぜ」：全力投球

会員による講演では前回に引き続き宮城正廣が『口の健康と全身のかかわり』を発表した。「最近の学童の口腔状況を考えた時、果たしてこの子ども達が将来にわたって、健康で豊かな生活を営むことができるか、疑問と危機感さえ覚える。厚生省歯科疾患実態調査の結果では、全国的に幼小児を中心に齲蝕の量的な減少が認められると同時に、質的軽量化も起こってきており、また処置率も増加してきている。しかし、歯周疾患・不正咬合は年々増加傾向にあり、上間小学校における昭和63年度の6年生の前歯部の簡単な叢生を除いた不正咬合の発現率は18%もあり、5.5人に1人は不正咬合であった。不正咬合の原因として、先天的な形態異常や乳歯齲蝕、乳歯の早期喪失、晩期残存による永久歯との交換異常、小帯異常、悪習癖等の放置が考えられる。不正咬合の放置は顎口腔系の健全な発達に重大な影響を与えるだけでなく、重度の歯周疾患（歯槽膿漏）、永久歯の喪失、顎関節症等の複雑な疾患を惹起する。最近の食生活の軟性化傾向により、食物を噛むことや呑み込む事が下手な子ども、いわゆる咀嚼機能の未発達な子どもが多く見られ、そのことが一層子どもの口腔環境を悪化させている。このような顎口腔系の崩壊は口腔内にとどまらず、全身的にも影響を与えるものであり、そのような沖縄の子ども達の口腔内の現状を紹介したい。」

今回は那覇市以外の学校にも参加を呼びかける動きが出てきた。

また県内講師として初めて学校長が登場し、沖縄市室川小学校の嘉手苅喜郎校長が、『お母さん方に望む子どもの歯の保健指導』と題して話された。嘉手苅校長の発表の項目は下記の通りである。

「1.歯と健康
- 口は健康の窓口であり、歯は一生の守り神である。
- 歯は健康のシンボルであり、人を明るくする。

2.児童・生徒のむし歯の現状
- 昭和63年度、沖縄県と全国の統計から見るむし歯の罹患率と処置率の現状についてと今後の課題

3.学校におけるむし歯指導の現状
- 学校保健法からくる保健管理指導としての取り組みについて(健康診断と保健指導)
- 特別活動における学級指導の中での保健指導
- 保健体育課の中での保健学習としての取組み
- 何が学校における指導上の問題点か

4.これまでの私のむし歯指導と対策の実践例
- 習慣形成が大切であり、そのためには、むし歯予防の重要性の認識とやる気のある方々のチームプレーが大切。

5.健康な歯を保つための今後の課題として
- 学校側の協力　・三師会の指導助言
- 父母の努力　・教育委員会の援助体制
- 学校保健管理指導体制から地域保健管理へと守りの指導から攻めの指導への転換等が重要である。」

第6回大会(1990年)では船越正也朝日大学歯学部教授を特別講師としてお招きした。この大会までは第3回の900人を除き毎回1,000人を超す入場者があった。この年から新任となった嘉手納是敏那覇市教育長も第13回大会まで積極的にこの大会を応援してくださった。また、那覇市以外の浦添市から南部地区一円の各市町村の教育委員会にも共催をお願いし、共催は15団体となった。船越教授は『噛むことと脳のはたらき』と題して講演され、「咀嚼は先天的に備わっているものではなく、離乳期に一定の順序に従って学習するものである。乳児から幼児になっても普通食が咀嚼できない原因として、哺乳瓶による授乳・離乳食の選択過誤・普通食の軟食化・偏食があげられる。ネズミを使った実験で分ったことは、硬い固形飼料で飼育した群の方が軟らかい粉末飼料で飼育した群より学習成績が優位に優れていたこと、また同一個体の左右の脳では噛まなかった側の脳細胞の成熟が遅れたこと、さらによく咀嚼すると脳の血液循環が増加し脳細胞の代謝が亢進することなどである。咀嚼は単に食物を粉砕、臼磨して嚥下可能な食塊を形成するのみでなく、口腔諸組織の健全な発育を促し、健康を維持する上にきわめて重要な機能であり、発育期の子どもの能の発達に影響を及ぼしている。従って、この観点からよく咀嚼できない子どもの口腔状態と食生活を十分に再検討し、治療と生活指導に新しい方法を導入する必要がある。」と提言した。

今回は会員の渡口進一が『顔を見よう・口の中を見よう(歯がおりなす表情)』と題して講演した。要旨は次の通りである。「日頃私達は、相手を知る手段として、まずよく顔を見合わせる。その際、主に目を中心に顔全体をながめ、全身的に把握しようとする。しかし、一部分だけを見つめていると、相手に違和感を与えることも多々ある。私たち歯科医師は職業柄、相手の(患者あるいは人の)顔や口の中を集中的にみている。その中で疾病を見出し、診断をするわけだが、その際思いもかけない特徴を見つける事がしばしばある。例えば、指しゃぶり、鼻の疾患からくる口呼吸、舌の悪い動きなどである。そのような特徴は一般の方でも注意深く観察することによって、見つけることができる。もう一度、自分や子ども達の口の中を見て頂きたい。特に唇を中心に下顔面に目を向けてほしい。顎が左右対称になっているか、噛み合せが片側的になっていないか、前歯部の噛み合せはどうなっているか等、他にもいろいろある。噛む事はなぜ大切なのでしょう。噛むことは歯だけの問題ではない。歯をとりまく歯周組織や筋肉、骨等が大変大きな関係を持っている。特に成長発育の段階での子ども時代は歯を使い、筋肉を使い、顎の働きが充分に発揮できるか否かは、発育段階における生活習慣がとても重要になっている。その為には、正しい食生活、母子衛生、口腔衛生の確立が大切である。今回は口の中をみながら、歯列が顔にどのような変化を及ぼすか、又顔を見ながら口の中がどのようになっているのか、スライドを通して皆様と考えてみたい。」

また泊小学校栄養士の仲宗根房子先生が『何を食べると歯が丈夫になるの』と題し次のような発表をした。「最近の子どもは「かめない子」「かまない子」が増えているという事をよく耳にする。食べ物は全般的にソフトフード化されて物をかむ必要がなくなっている傾向にある。子ども達が好きな献立はと聞くと、ハンバーグ、スパゲティ、カレーライス……等、軟らかいものを次々とあげる現状である。どうして硬い物を好まなくなったのだろうか。学校給食で軟らかいものばかり食べさせているからだという方もいる。それも一部あると思うが、食べ物がソフト化されているのは現代の食生活の特徴で、給食のせいばかりではないと思う。「よくかむ」ということは丈夫な歯をつくるのにつながるのである。では、どうしたらかむようになるのだろうか。この解決法はとても簡単で、咀嚼力がつく食べ物を食べるだけでよいのである。しかし、この簡単なことが、なかなかどうして難しいことなのである。本校における残量調査、好き嫌い調査の結果をふまえ、日頃、どんなことに現場にいる者が悩んでいるのかをご理解頂きたい。丈夫な歯をつくるためには、噛むことはもちろんのこと、どんな食べ物を食べたらよいのか、それをどう子どもに指導するかが大切である。一人でも多くの子どもが自分自身で考えて食べられる子に育つことを願ってやまない。そのためには、学校だけの力ではうまくいかない。家庭、地域の協力をあおぎ「21世紀を担う健康な子ども」の育成に努めたい。」

第7回大会(1991年)は場所をパレット久茂地の那覇市民劇場に移して開催された。標語は8020運動を反映し「GO！GO！8020食べる楽しみいつまでも」であり、8020の実践者松本完正さん(84歳で27本残存歯)が一般発表として『よい歯と健康』の演題で話された。松本さんの食生活をみると、次のような状況であった。毎日の様に朝は、パン食、昼は麺類である。晩酌は毎日で、泡盛(30度)100cc位にみかん2個の搾り汁と水で割って飲んでおられる。おやつは殆ど食べない。たまに生菓子などを少し喜んで食べている。コーヒーは無糖でスキンミルクを入れて、たまに飲む。献立は、できるだけ多くの種類の食品が好き嫌いなく組まれており、繊維質のもの、カルシウム、蛋白質を特に取るようにしている。ご飯はできるだけいろいろな穀類を混ぜており、加工食品は少なめで、できるだけ自然のまま食べる様にしておられる。

また県歯がデンタルフェアで行っている「親とこの良い歯の表彰」平成3年度優勝者 新 洋子さんが『むし歯予防---我が家の場合---』を発表した。内容の一部は次の通りである。「母親として、我が子に期待するもの—思いやりのある子・賢く逞しい子・物事に意欲的に取組む子等ーいろいろありますが、基本は健康であるという事だと思います。好き嫌いなく、何でも食べて、思いきり体を自由に動かして、すくすくと伸びやかに育って欲しい。それこそ心身共に、健康な子にと願うのです。成長期に体を作る基となる大切な食事。そして、その食事

をよく噛んで食べ、充分に栄養が摂れる為にも、むし歯のない丈夫な歯を持っているという事は大切だと思います。上の子を妊娠した時点で、丈夫な子に育てよう、もちろんむし歯にもしないと決心し、食事・その他いろいろと気をつけて無事誕生。歯が生えてからは、そのケアーに親としては、できるだけの事をしてきました。歯の定期健診、フッ素塗布、食事やおやつの与え方に気をつけ、そして何よりも力を入れたのは、毎日のブラッシングです。」

会員講演では渡口進一が前年に引き続き同じ演題で講演し、乳歯から永久歯への交換をみながら、乳歯がむし歯になった時、歯列や口の中の状態がどの様に変化してゆくのかをスライドを用いて説明した。また、悪習慣の代表である指しゃぶりや口呼吸・舌癖などの問題を取り上げながら、舌の動きによる発音の問題にも触れ、「8020はすでに子どもの時代から始まっている。」と強調した。

特別講師にはこの大会のきっかけとも言える報道番組を担当した元TBSニュースキャスターの堂本暁子参議院議員をお招きし、司会はRBCの比嘉京子アナウンサーにお願いした。堂本議員はTBSの報道特集において初めて全国ネットのテレビを通じて、子どもたちの口の中の変化、食生活の変化の影響に警笛を鳴らした方である。堂本議員がお持ち頂いた咀嚼中の口腔内の動きを捉えた映像を、当時最先端の日立のビデオデッキでクリアに見ることができた。残念な事に会場が狭く500人の入場者であったことが悔やまれる。堂本議員は『良い歯がつくる元気な子ども』と題して講演した。「咀嚼力の弱い子どもは、他の行動または意欲の点にも問題がある。食べ物が溢れている日本で『噛めない子ども』の問題が出てきた。これは単に歯の問題に限定して捉えるよりも、私達の生き方、文化、特に大量消費経済との関連で考えるべきである。以前は母親のいない戦災孤児は、噛むことを母親から教えてもらえず、咀嚼力のない状態で乳児院に入ってきたため、保母達は一生懸命に、子ども達に噛むことを教育した。ところが、最近は親のいる子どもの方に噛めない子が出現するようになった。小児歯科医による保育園での調査の結果、一つのタイプは、噛めても噛まない子ども達、空腹感がなく、一生懸命食べようと言う気力がなく、食べながら居眠りをする子達、つまり食べることに関心がない子ども達と、二つ目のタイプは、食べたくても、噛みたくても噛めない子ども達に分けられることが分った。一つ目は心理的な原因、二つ目は構造的・機能的な原因と考えられるが、二つの原因が相互に作用して咀嚼力の低下を招く、そうしたケースが最も多いようである。子ども達の咀嚼力の低下という深刻な現象が起こっているのは、わが国の戦後の高度経済成長と無関係ではないのではないか。急激な変化の一つである核家族化は、前の世代から次の世代に、つまり祖母から母に、母から娘にと、育児方法および生活習慣を伝える機会を極端に減らした。ベビーフードは栄養があっても硬さがなく、ハンバーグなどをはじめ、軟らかい食品でないと売れないのが今の日本の食品業界である。食物が全般的に軟らかくなる原因としては、栄養信仰（食べ物の物理的性状を考慮しない）、食物・味の画一化（親の味の喪失）、育児書通りの子育てによる子どもの食欲の減退（赤ちゃんの個人差を無視した育児）などが上げられる。小児科の二木先生はいつも「お母さん達はどうして子どもの表情よりも育児書を信用してしまうんだろうか」と嘆いておられる。」

第8回大会(1992年)から第14回までは那覇市民会館での開催が続いている。第8回では一般発表としてはPTAの立場から神原小学校PTA副会長座安英明さんが『学校と地域の連携の中で』と題し、学校保健委員会の意義、歯の健康に取組むためには意識の改革および地域と学校の二人三脚が必要であると話された。

会員講演は久米島でフッ素洗口に情熱を燃やし、大きな成果を挙げている玉城民雄が行った。「歯科校医としての願いは、治療を完了させたむし歯のない子を一時的に増やし、処置率を上げることではない。1本のむし歯もない子ども達を育てることが最終目標でなければならない。具志川村では平成2年度の後半から、村当局と教育委員会の協力を得て保育園から中学校まで、フッ素洗口を取り入れたむし歯予防を順次地域及び学校歯科保健活動の中に取り入れている。『先生なんで毎日歯みがきしているのに、またむし歯になるの？』子ども達のこの素朴な質問に、胸を締め付けられる思いがした。『治療の必要のない健康な真っ白い歯を』の思いは、歯科校医として村医としての悲願である。保育園から幼稚園へと継続してフッ素洗口をしてきた新1年生の6才臼歯は約80％が健全歯であった。この事実はこの村の新しい健康な村づくりの夜明けを感じさせた。フッ素洗口はむし歯予防の手段としては最も有効であると、WHOではその普及に力を入れている。しかしブラッシングがきちんとしていなければ、歯科の2大疾患の一つである歯肉炎、歯周病の予防はおぼつかない。ブラッシングは口の中の健康を保つ一番の基本である。きれいな歯並びの子どもでもプラークを完全に取り除くブラッシングテクニックを習得させるには、時間と根気が要る。ましてや歯並びの悪い歯列不正の子ども達はなおさらである。顎が小さく歯並びが悪い不正咬合の子ども、大人並みの歯肉炎の子ども、噛まない・噛めない・飲み込めない子ども、発音がしっかりしない子ども、落ち着きがなく疲れやすく不定愁訴を訴える子ども、これらは学校歯科保健と決して切り離して考えてはならない問題である。私達歯科医はどう対処していけばよいのか。もう問題点は十分に提起されている。これまでの本大会でも、その症状や病態は、歯科医師会の会員の発表の中で示された。子ども達の口の中の病気はむし歯だけではない。歯肉炎・歯列不正・不正咬合・咀嚼不全・発音障害・顎関節症など、これらの症状は一連の疾患として捉えなければならない。私達歯科校医は、その解決策を検討し、実施する時期に来ている。学校歯科保健にお

いて、きめ細かいブラッシング指導はどうすればいいか。フッ素洗口の普及はどうしたら良いのか。顎の発育を促進させる為のチューイングトレーニングをどう取り入れるのか。これらの具体的な方策までたどり着かなければ、いつまでたっても足踏みを続けることになる。子ども達の口の健康は、学校歯科保健のみならず、行政と手を組んだ0才からの地域歯科保健活動を通じて解決していかなければならない問題と考える。私達は、歯科校医としての責任を果たす為にも、これらの諸問題の重要性を、国や県や市町村行政や関係各機関に強く訴え、21世紀を担う子ども達の健康を守って行かなければならないと思う。」

この大会の開催要項から要項の最後に歯科保健の一般向け資料の掲載を始め、啓蒙活動の一助とした。特別講師は鹿児島大学予防歯科教室の坂下玲子先生で、『咀嚼器官の初期発達』と題して講演した。「咀嚼器官の初期発達には三つの重要な時期がある。第一段階は哺乳期である。母乳哺育により、咀嚼筋群の基礎的な力がつき、咀嚼行動の前段階となる時期である。母乳は乳児からの刺激が乳房に加わると、ホルモン分泌が高まり、射乳反射の機構によって分泌される。このとき乳児は咀嚼運動と共通の活発な咀嚼筋群の活動と顎運動をする。沖縄の親達が『おっぱい食べるか』と言いながら乳を子どもに含ませていたが、まさにそんな動きをする。一方、哺乳瓶用乳首は、重力と口腔内陰圧によってミルクが流出するしくみで、顎運動は必要ない。したがって哺乳瓶に慣れるに従って顎運動や咀嚼筋群は不活発なものとなり、吸引による哺乳に置き換えられてしまう。第二段階は固形食の移行期である。乳歯の萌出と共に咀嚼嚥下行動に習熟し、食べられるものの範囲が飛躍的に広がる時期である。第三段階は食習慣形成期で、乳歯が生え揃い、これまでの食生活を通じて身に付けた咀嚼嚥下パターンに力強さを加え、規則正しい食生活を身に付ける時期である。どの時期で落ちこぼれても咀嚼器官の正常な発達は望めないが、これらのことは、戦前までは育児の中でごく自然になされてきたことであった。育児学は現在、一部見直しが必要な時期に来ていると思う。」このように坂下先生は母乳哺育の大切さを強調された。また宮古島をモデル地区とした、永年にわたる健診、食生活指導の強化、それらの保健活動のすばらしい実績も示された。

第9回大会(1993年)の開催要項の表紙を飾ったのは歯科保健図画ポスターコンクール優秀賞受賞のポスターであった。この平成5年から実行委員会はみやぎ歯科と那覇市教育委員会会議室の2箇所を利用する様になった。特別講師は桑原末代子藤田保健衛生大学医学部歯科口腔外科助教授である。演題は『噛むことと歯科保健』で、噛むことは単に顎骨の成長を誘導するのみでなく、口腔保健の重要な柱となる課題であるとし、咀嚼の効用の一部として、自浄作用・唾液の分泌・運動機能の賦活・顎骨の成長・舌機能の獲得などをあげた。また子どもの咀嚼機能の向上のための要項を次の様に説いた。

1) 離乳食開始までに、摂食機能のリズムを習慣づける。
2) 味覚の発達に注意する。できる限り家族の味を早期に教える。すなわち、子どもに特別食を作らないことである。
3) 果汁については、毎日飲む習慣を与えないこと。飲み物の習慣除去はまず不可能である。
4) 野菜などの食物繊維を十分に取らせること。子どもの野菜嫌いが目立って多い。
5) 硬い物を与えることも重要であるが、軟らか過ぎる食べ物に注意を要する。牛乳の栄養価はたしかに高いが、牛乳は液体であることを忘れてはならない。牛乳で唾液腺発達を促すことはできない。
6) 食品の温度、物性などを考慮する。また、やや乾燥した食品を食べると、唾液と混和するため咀嚼する。

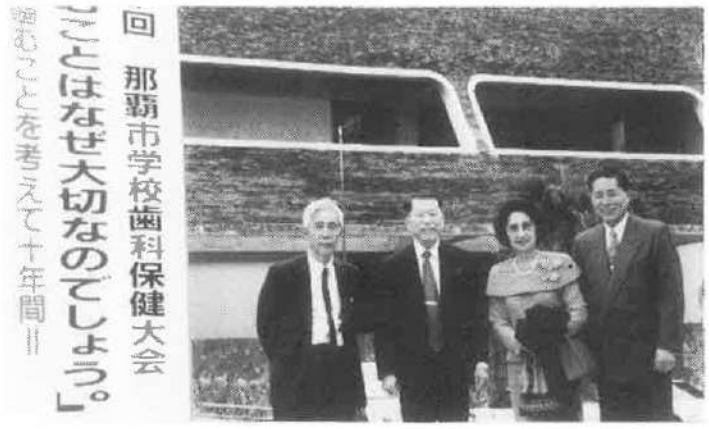
桑原助教授は、咀嚼障害によって引き起こされる疾病などもスライドで紹介し、あらためて咀嚼の重要性を示された。



第9回ポスター　各関係機関にポスターを毎年配布している

今回は山川修が『歯科健康相談をふりかえって』と題して会員講演を行った。「昭和57年から5年間、産婦人科の母親教室で歯科保健の話をさせて頂いた。その時に妊産婦及びその父親に強調した事は、赤ちゃんが生まれてくる前に、むし歯予防の環境づくりを家庭内で実行してほしいということ、例えば両親や祖父・祖母の甘い食べ物の摂食習慣の問題、家族全員の口腔清掃の習慣付の問題である。さらにもう一つは母乳の大切さ、つまり母乳保育による赤ちゃんの機能的・精神的な発育の重要性についてであった。産婦人科でも母乳による免疫の授受の大切さを説いていたが、母乳と噛むことに関しての私の話には半信半疑の様であった。そのような頃、昭和60年に那覇市学校歯科保健大会が『かむことは、なぜ大切なのでしょう』をテーマに開催された。それから今に至るまで、毎年噛むことの大切さを社会に訴え続けてきたこの大会で、今年は自分が話をする事になって嬉しく思う。平成3年5月から、那覇市内の某デパ

ートのベビー休憩室で歯科の無料健康相談会を月1回持つ事になり、私にその担当依頼がきた。対象は3才以下の子どもで、毎月第1日曜の午後2時から4時までであった。これまでの2年半で190人の乳幼児の相談を受けた。質問内容のトップは『歯並び』についてであり、次に『歯みがきについて』、続いては、歯の萌出時期・歯の色・むし歯・指しゃぶり・外傷・あまり噛まない・フッ素について・歯の形などであった。中には『自分の周りでは、母乳をあげているのは自分一人であり、母乳を与えていて歯並びに悪影響はないのか』という母乳少数派ゆえの不安からくる悩みを訴える母親もいた。歯科相談と知りつつも、おねしょの問題・夜泣き・髪の毛が未だ生えてこない・頭の形が気になるなど、説明に窮する質問を投げかける母親もいた。核家族化と情報過多のため、子育てに悩む母親がいる事を窺い知ることができた。これらの母親に対し、個々の質問に答えながらも、基本的に3つの事を説明するよう努めた。それは『食事の管理(母乳・離乳食)・口の中の清掃法・フッ素の利用』であった。耳のないパンに人気が集まり、人参5本分のジュースが宣伝されている今の時代では、『噛むこと』を強調するのは時代に逆行しているのか。決してそうではないことはこれまでの本大会が証明している。病人食とか一昔前の宇宙食を健康人が常食としていること、飽食の時代を謳歌する日本人の食べ残す食料と世界中の餓死する子の問題。私達は噛むことの大切さを考えることにより、現代社会の抱える矛盾・問題を知ることができた。それらの問題を解決するために、これから私達がやらなければならない事は、私達が本大会で学んだ情報を正しくかつわかりやすく、さらにより広く一般市民に伝える事であると思う。」



平成7年第10回大会　那覇市市民会館大ホール前にて(講師の先生方)

また一般講演は久米島小学校養護教諭の糸数啓子先生が『フッ素でむし歯予防』として、久米島小学校におけるフッ素洗口によるむし歯予防の成果を発表した。「昭和59年から年2回の歯科検診を実施した。その結果、治療済みの歯が増え、重症のむし歯が減り、治療に要する期間も短縮し、子ども達の治療に対する不安も減少した。そして治療完了者も年々増加したが、歯科校医はまだこれではだめだとし、無傷の真珠のような歯を残してあげたいと言い出して、フッ素洗口に取組み始めた。平成1年7月に児童・生徒のむし歯予防にフッ素洗口を行うことを行政に要望し、それが認められて平成2年6月からフッ素洗口を開始することとなった。事前準備として父母へのアンケート調査を行ったり、学校職員の理解を得る努力をした。歯みがき時間も設定していなかったため、たった1分で済むことが、なかなか困難であった。それで45分の休み時間に実施すること、担任教師は関与しないことで話がまとまった。フッ素洗口水を口に含み、両方のほっぺでブクブクし、さらに前の唇でブクブクするのに、約1分かかる。小中学校で週1回法、幼稚園で週5回法で実施した。このようにして、むし歯のない子を育てる努力をし、乳歯でだめならと、永久歯を目標にした。その成果は、平成5年の全生徒146人中、永久歯のむし歯のない者が34人となって表れた。給食後の歯磨きに関しては、教師の意識調査を実施した結果、大多数の教師が自ら歯磨きを行っていることが分り、それなら子ども達と一緒にやってはどうかと提案し、給食後の歯磨きが行われるようになった。また職員の歯科健診でむし歯または歯周病が指摘された担任教師が治療を受け、その治療体験をクラスで話したところ、それまでなかなか歯科治療を受けなかった子が治療を受ける気になったり、歯科医院への交通手段がなくて治療に行けなかった子達が、職員の協力で歯科受診ができるようになったりと、治療完了者を増やす為の色々な応援があった。」

平成6年6月には第1回から第8回までの特別講演をまとめた「那覇市学校歯科保健大会特別講演録」が500冊編纂された。この講演録には最初に述べた座談会も掲載されている。

第10回大会(1995年1月26日)は記念大会としてシンポジウムの形式を取った。第1回大会から9回まで、「かむ」ことに関するスペシャリストをお招きして、あらゆる角度からこの問題を採り上げてきた。今回はそれらの一応のまとめと、今後の方向性を探るためのシンポジウムであった。この前年から記念大会に向けての実行委員会は開催されていたが、平成6年5月27日がみやぎ歯科での最後の実行委員会となった。10年間にわたりこの大会のために会議の場所を提供してくれた宮城正廣会員の功績は忘れてはならないことである。基調講演は井上直彦元東京大学助教授、大国真彦日本大学総合科学研究所教授、斉藤滋神奈川歯科大学口腔生化学教室教授の三氏であった。シンポジストには宮城正廣先生も加わり、コーディネーターは高良政勝会員がつとめた。開催要項には広告スポンサーもお願いし、13社が協力して下さった。この大

会から要項およびポスター・チラシはプラニングオフィス グレートベアが担当となった。またアトラクションとして与儀小学校合唱部が出演した。さらに今回初めて大会宣言文を発表した。

【大会宣言】

わたくし達は、子ども達の健やかな成長を願い過去十年間一貫して『かむことはなぜ大切なのでしょう』をメインテーマに『那覇市学校歯科保健大会』を開催してきた。

かむということが単に栄養摂取にとどまらず、心と体の発育、脳の発達、さらには老化予防にも大きく関与することを過去の本大会で学んできた。

そして、全国に先駆けてこの大会を開催し、継続してきたことを誇りにするものであり、社会に与えた影響は計り知れないものがある事を確信した。

『わたくし達は本大会を継続、発展させることにより、幼児児童生徒が心身ともに逞しく成長することに寄与し、明日の明るい沖縄を作るため努力することを決意するものである。』

上、宣言する。　　平成7年1月26日



ポスターも毎年奇抜なアイデアで

基調講演で井上直彦先生は『かむことを考えて10年間』と題して講演された。この10年間で最も印象に残っていることは、まず、食生活の改善についてどんなに働きかけてもそれに対応できない子どもがいることに気がついたこと、および、咀嚼器官の発達の原点が生まれてすぐの新生児期、乳児期にある事がはっきり分ったことであるとし、それらを中心に話をされた。また未解決の問題として次の4つを示された。

1.哺乳瓶保育児の固形食移行をどうするか。
2.固形食移行期以後のキャッチアップ。
3.学齢期以後の指導方法。
4.急増しつつある顎関節症への対応。

次の基調講演は大国真彦教授が『小児成人病と噛まない子』の演題で話され、小児成人病の背景として、食事の問題、間食と夜食のとりすぎとともに運動不足と過保護が挙げられるが、食事と間食を子ども達が「よく噛まない」ことが問題であるとした。「よく噛めない背景としては、噛む力がないことと不正咬合が少なくないことが挙げられる。その原因としては幼児期に噛みごたえのある食べ物を与えられていないこと、食物繊維の多い食品が避けられていることが指摘できる。さらにそれらの原因の背景として、子ども達と親を含めて手抜き料理の増加と洋風食好みの普及、スナック菓子の普及がある。噛まない影響としては、それが早食い、過食につながり、またハンバーグ・カレーライス・スパゲッティなどのやわらかい料理で動物性脂肪が高いものを好むことにより、肥満児、高コレステロール児、高中性脂肪児の増加に至るのである。また噛むことの効用としてはいろいろあるが、高脂肪血症の予防にもなり、食べ物のおいしさを知ることにより味覚が発達し、言葉の発育もはっきりし、胃腸の状態もよくなり、脳の発達にもよいとされる。ゆっくり噛むことを習慣づけるためには、幼児期に緑黄食野菜・小魚・海藻類など噛みごたえのある食品を十分に与え、ゆっくり十分に噛む習慣をすり込むことが大切である。また、よく噛ませることにより成人病予防にもなることを母親によく教えるべきであり、さらに間食にも噛みごたえのあるものを与えるように工夫すべきである。」



第10回大会　アトラクションも楽しく

三人目の基調講演は斉藤滋教授が『食べる喜び噛みしめる幸せ』と題して行った。「最近は料理そのものや食事の仕方が何か変わってきている。『ぐずぐずしないで早く食べて、学校へ、塾へ、会社へ……』といった傾向や、グルメ趣向による軟食化傾向が、近年の日本では特に目立ってきた。食物は大切な栄養源であると同時に、食物となる野菜・穀類や魚・肉類などにはそれぞれ独自の『歯ざわり』や『噛みごたえ』つまり食物固有の物性がある。この物性そのものには栄養的価値は全くないが、子どもの顎や顔の発育成長や各種の歯の病気の予防、さらには、赤ちゃんからお年寄りの全身の健康の維持・向上に非常に大切である。口や顎そして顔面の筋肉や頭骸骨全体などが正常の大きさに発育・成長するためには、歯を使って食物をよく噛むことが大切である。よく噛むことが最も効果的な運動刺激として歯を支える歯周組織だけでなく、顔全体に伝えられ、それらの細胞の活発な代謝を促進することが明らかになった。さらに噛むことは全身の皮膚や血管の細胞を

活性化する唾液腺ホルモンの分泌を促進したり、脳の働きなど前身の健康維持の向上に密接な関係があることが研究されている。最近の子どもや若者の顔立ちが『ソース顔』とか『しょうゆ顔』といわれるような細見の顔が注目されるようになっているが、これも軟食により咀嚼しないことによって発生した顎の運動不足による未発達が原因とされている。毎度の食事の『栄養』と『歯ごたえ』が子どもの発育成長だけでなく、老齢期における活力ある生活を獲得するためのライフスタイルに非常に重要である。そして、それは料理が提供する栄養価と調理方法に依存する食物の物性に全てがゆだねられていることを私ども歯科医から強調させて頂きたい。」

第11回大会(1995年12月14日)では大会標語を那覇市内の小中学校から募集し、165点の標語の中から選ばれた最優秀賞「よくかむと　あごのきんにく　いいきもち」(那覇市立真地小学校2年生やら　とものり君)を開催要項の表紙に掲載した。また最優秀賞、優秀賞(2人)、優良賞(2人)は舞台上で表彰された。アトラクションは那覇市立神原小学校合唱部が担当した。大会標語募集と表彰、アトラクションは今後も続くことになり実行委員の仕事が増えることとなった。今大会から実行委員に那覇市PTA連合会も加わった。大会要項記載の参加者の順番も一番目にPTA会員、次が県市町村教育委員会関係職員、三番目が学校の職員で、前回まで一番目であった学校歯科医は四番目になり、参加してもらいたい対象を明示した。特別講師は食生活ジャーナリスト砂田登志子先生であった。『噛む子、みがく子、元気な子、丈夫な歯は一生の宝』の演題で講演された砂田先生は、学校教育の中における何を選ぶ(選食)、どう食べるかの「食育」の重要性を訴えた。「欧米諸国では20～30年前から幼児以降の食の安全教育を交通安全教育以上に重視している。今、世界一長生きの日本社会で育つ子どもをめぐる健康問題でとても気になるのは、減らないむし歯、低下する視力、増える肥満である。深刻な現実は人生80年以上の時代が到来しているのに、歯の寿命は50年のまま、格差は縮小しないで広がっている。年齢の齢の字に歯がついていることでも分るように、歯ほど年を表現し健康度を実感させるものはない。歯は外に出ている骨、外から見える骨である。かつて体という字は骨が豊かで體と書いた。いい歯は国際化、ハイテク情報化、健康序列時代のステイタスシンボルだ。歯が悪いと入学できない有名私立学校があり、採用されない企業も多い米国社会でも、to be seen(見られること)を重視する生活価値観から、いい歯は健康美のステイタスシンボルである。いい歯の維持管理には、バランスのとれた食生活と、よく噛み、よくみがくという歯の体操が不可欠。欧米諸国の幼稚園、託児所、小学校では楽しいイラスト、カラフルな食育教材が揃っている。長年『治療より予防』のウエルネス運動を提唱している私は、一生自分の歯で食べ続けられる人が日本でも増え、6月4日(むし歯の日)に代わって11月8日(いい歯の日)になるよう願っている。」歯科医師の講演では宮城正廣会員が『あごの関節の病気と全身への影響』と題して講演した。この年平成7年から学校検診に於いても「歯列・咬合・顎関節の検査」が導入され、まことにタイムリーな講演であった。また一般講演として那覇市立城西小学校栄養士の幸喜市子先生が『さとうきびと歯の健康』と題して、日常の歯磨き指導と並行して、カミカミメニューを取り入れた給食で、さとうきびなどによって噛むことへの動機付けをおこなっていることを発表した。



講師の先生方も幅広く、やわらかく


第12回　「標語」の表彰式

第12回大会(1996年)は歯科関係者の講演はなく、他の分野の方にお願いした。料理評論家・エッセイストの小林カツ代先生、エッセイストのゆたか　はじめ(本名石田穣一)先生のお二人である。ゆたか　はじめ先生は『こわくない歯医者さん』の演題で、ご自分のこわくない歯医者さんとの出会いや、歯科を通しての沖縄の食文化との出会いなどをとてもユーモラスに話された。小林カツ代先生は『元気と料理と噛むこと』と題して、料理と食生活を、大切な生活習慣と捉え、料理を通した子育ての話を楽しく聞かせてくださった。今回は司会を那覇市教育委員会の上原武先生が担当し、また実行委員数は66名になった。大会のサブテーマとして募集した標語は651点が集まり、厳正な審査の結果、最優秀賞には「よくかんで、今からここから、ガンジュー人生」(那覇市立泊小学校5年生野波正太郎君)が選ばれた。アトラクションは那覇市立真和志小学校・真和志幼稚園が合唱を披露した。

第13回大会(1997年)から準備のための実行委員と大会当日係とを分けた。また実行委員会運営要領が平成9年4月1日から施行された。これにより大会会長と副会長を南部地区歯科医師会会長と那覇市教育委員会教育長が交互に務めることとなった。大会サブテーマの標語募集には794点が集まり、最優秀賞は「かむほどに、輝く笑顔　きれいな歯」(那覇市立首里中学校3年生 浦崎博史君)に決まった。アトラクションは那覇市立神原中学校合唱部による合唱が行われた。特別講師は虫歯説法師こと沖 義郎高知県立総合看護専門学校講師で、演題は『かむ子　つよい子　かしこい子　～幼児期、学童期に「なぜ」かまねばならないか～』であった。沖先生は昭和23年開業以来、診療のかたわら「虫歯は、生えてきません」・「虫歯予防は、0才から」・「虫歯は、治すものでなく、予防するもの」のスローガンを掲げ、「公衆衛生活動の基本は、健康教育なり」を信条に健康教育ひとすじ50年歩み続けた方である。この大会のメインテーマ「噛むことはなぜ大切なのでしょう」の総まとめのような話から歯科保健全般にわたる話まで実にわかりやすく講演された。今回の講演者は沖先生お一人だけにしぼり1時間40分の長時間の講演となったが、誰一人席を立つものはなかった。(演者は「むし歯」を「虫歯」と表示)



第13回　中学生も参加して(合唱)

第14回大会(1999年2月4日)の実行委員の参加団体は那覇市教育委員会、那覇地区養護教諭研究会、那覇地区学校栄養士研究会、那覇市公立小中学校校長会、那覇市PTA連合会、南部地区歯科医師会となっている。特別講師はスポーツ歯学に関して北海道医療大学歯学部歯科補綴学第1講座の石島勉助教授にお願いし、演題は「スポーツ選手は歯が命」の予定である。大会サブテーマである標語は511点の応募の中から、松島小学校3年生謝名元けい君の「よくかむ子　強い体と　じょうぶなは(歯)」が採用された。会員講演は玉城斉の予定である。

以上、那覇市学校歯科保健大会の足跡を開催要項・南歯広報等の資料を元にまとめた。演者の講演記録がなく、演題のみの紹介となった場合もあること、また筆者の筆力の不足はご勘弁いただきたい。これまでこの大会を継続できたのは、歴代の会長はじめ執行部の方々及び那覇市教育委員会その他関係団体の働き、さらに南部地区歯科医師会会員諸先生の理解と協力のおかげである。中でも特別講師への講演依頼等で苦労し、最も心理的・肉体的にストレスを受けた大会担当理事は第1回から3回までが宮城正廣、第4回から9回までが真境名由守、第10回から12回までが友利隆俊、第13回から14回は嘉手納一彦となっている。第1回大会から大会予告・啓蒙のため新聞に投稿を続けて来たが、投稿担当者にはご苦労をおかけした。第3回(昭和62年)から第5回までは、大会前にマスコミを招待して懇談会を開き、事前PRを依頼したこともある。しかし期待はずれの感があり、その後はマスコミとの会合はもたれていない。第10回大会からは担当理事をはじめとする実行委員が個別にマスコミを訪問し、協力依頼をしている。毎回大変なのが新聞広告のスポンサー依頼である。歯科関係業者、生保会社など、また時には個人的なつながりでの広告掲載もあった。最近では栄養士会の働きかけで広告を出してくださる業者も出てきた。第1回大会から第13回までの実行委員の延べ人数は735人である。

第10回記念シンポジウム大会でそれまでの総まとめをした後、第11回・12回と歯科の専門家ではない講師をお招きして、その方々が「かむこと」と、どのように関っているかをお聞きすることができた。第13回大会では虫歯(むし歯)予防の専門家から、歯科保健教育において「かむこと」を如何に教えるかを話して頂いた。「かむこと」に関しては、14年前と比べ、今では多方面からの研究が進んでいる。第14回ではいよいよ「スポーツ歯学」の分野における「かむこと」の重要性を学ぶこととなった。「かむこと」をメインテーマに掲げ、歯科保健教育の推進を目指すこの大会が、今後どのような展開をするかは、私たち(社)南部地区歯科医師会が真剣に取り組むべき課題である。これからも那覇市教育委員会と手を組みながら、関係団体の協力を得て、大会を継続・発展させて行かねばならない。那覇市さらに沖縄の子ども達の未来のために、この大会がさらに役立つことを希望して、那覇市学校歯科保健大会の足跡の紹介を閉じることとする。

平成10年12月31日

那覇市学校歯科保健大会　特別講演録　第１回～第８回　から

座談会「那覇市学校歯科保健大会の経過と展望を語る」

平成6年1月9日(日)　レインボーホテル

［出席者］　新城　啓和(南歯会長)　嘉手納是敏(那覇市教育長)
玉木　史朗(南歯顧問)　友利　政三(南歯顧問)
高江洲正勝(南歯顧問)　宮城　正廣(前学術理事)
司会:真境名由守(学術理事)

○ 新城啓和　この大会は昭和60年に南部地区歯科医師会と那覇市教育委員会が共催して子供たちの健康を守っていくために、「噛むことはなぜ大切なのでしょう」とういうテーマで発足しました。全国に先駆けて「噛むこと」をメインテーマにした大会をスタートさせ、しかも行政と地区歯科医師会の共同事業という形で9年間も続いているのです。日本咀嚼学会が発足したのはやっと平成2年です。最近、噛むことと全身の健康との関わりが医学的に解明されてきました。たとえば、しっかりゆっくりと噛むことが肥満の防止につながること、また視力についても食物の軟性化のため咀嚼回数が減少し、そのために水晶体を調節する能力が落ち、それが視力低下につながることなどです。厚生省と歯科医師会が勧めております8020運動は、幼児期あるいは児童生徒の頃から自分の健康は自分で守って行くという躾をし、きちっとした健康管理ができる子どもを育てていかなければ達成できません。そのための環境作りまたは、意識を植え付けることができれば、この歯科保健大会の意義は高まっていくと思います。しかしながらこの大会の成果が出るにはかなりの時間を要するわけですけれども、教育委員会と私ども歯科医師会が手を取り合って粘り強く努力をしていくことによって、将来8020運動が夢ではなく現実のものになることを私は確信しています。

○嘉手納　南部地区歯科医師会の皆様には、9年という長い年月、子供たちの歯・口の衛生にいろいろご指導頂きましたことは、子供たちの心身ともに健やかな成長を期待し、そのためにがんばっている私どもにとっては大変ありがたいことで、心から敬意を表します。この大会を末永く続けていき、子供たちの口腔衛生及び健康を保持できる環境がますます整い発展していくことを期待しています。

○ 司会　この大会は昭和60年に第1回大会が開催されました。その2年前から大会に向けて苦労なさった当時の南歯会会長の玉木史朗先生にお話を伺います。

○ 玉木　昭和58年4月1日に、那覇市教育委員会と南歯会との懇談会がありました。それには小中学校の校長先生、養護教諭の先生方も出席されていました。その会の第1の議題は「学校歯科医の適性」、第2は「歯科校医の配置」でした。当時は既に南部地区歯科医師会が浦添を含めた南部一帯の歯科校医の配置をしていましたが、養護教諭の中から「どうも歯科校医の先生方の指導の仕方に疑問がある」とか、「検診の仕方がお粗末である」というような声が聞かれました。その件に関してアンケートをとりましたら、ひどい例としては、学校からいくら催促しても指導はしない、検診も歯科校医の都合によってダラダラと半年も続く、検診の仕方では1本のミラーで何百人も診たなどがありました。そういうことで養護教諭の先生方から何とかなりませんかという要望があったため、歯科校医の適性とか指導力、健診のあり方を見直すことになりました。その結果かなりひどい校医の先生方には積極的に辞めて頂きました。

このような経過があって養護教諭との結びつきがまた一段と強くなったのです。懇談会では、歯科校医、検診の問題は私たち歯科医師会も努力しますので、教育委員会もぜひ協力をお願いしますという話し合いをやりました。その席上、話題がTBSで放映された噛めない子供たちのことに移り、宮城正廣先生から歯科医師会と教育委員会がタイアップして子供たちの噛むことに対する啓蒙をしようという提案が出されました。宮城先生は提案者としての責任上、南部地区歯科医師会の理事をもう一期引き受けることになりました。

この大会の芽生えが昭和58年4月で、それから2年半の準備期間を経て昭和60年11月に第1回大会を持ちました。振り返りますとこの大会には世界的に有名な川村洋二郎先生をはじめ、日本の優れた学者の先生方にわずかな講師料で来て頂きました。これは私たちにはとても幸せなことです。この事業に対して、南部地区歯科医師会の多くの若い先生方が第1回から関与しており、しかもほとんどの先生方が継続して協力しておられることは喜ばしいことです。10年間この大会を続けたことにより、昭和58年4月に話し合われた、歯科校医のあり方、検診のあり方というものはもう悩む必要がないほど認識が高くなりました。神原小学校が文部大臣賞を受賞したのもその現れでしょう。

今後この大会のテーマは検討する必要があろうかと思いますが、「噛むこと」については、これからは臨床的にも、高齢者の噛むことの問題、特に入れ歯のことも含めて問題提起をすべきだと思います。今までは赤ちゃんから小中学校までの若い発育盛りの皆さんを対象として「噛むこと」の大事さを述べてきましたが、これか

らは高齢社会に向けて「噛むこと」の重要性をこの大会でアピールする方向も考えられると思います。

○ 司会　第1回から3回までの大会に南歯会の会長として携わりました友利政三先生にお話を伺います。

○ 友利　私は第1回から第3回までの産みの苦しみを皆さんと共に味わってきた者の1人として、9回まで来られたということに非常に感無量なものがございます。私どもの会員は専門家ですから「噛むこと」の問題提起がなされたときは、とても早く深くご理解をしていただきましたので、その意味での苦労はありませんでした。一番悩みましたことは予算のことです。当時南歯会の予算が1千万円で、この大会にはどうしても250から260万はかかる、すなわち年間予算の約3割近いお金が必要でした。それで副会長 高江洲正勝先生と、専務の新城啓和先生の3人で各支部会をまわってこの必要性を説くと同時に、ほとんど毎日のように個人的な説得に当たったわけです。なぜ今こういう事業をやらなければいけないのだというご意見もありました。しかし現実に「噛めない」という問題が起こっていることが明らかになった今だからこそ必要であり、私たち専門家はこの事業によって社会に貢献するのだということを申し上げました。それで丸1年かかりましたが、予算の件はどうにかクリアしました。しかしながら会の予算だけでいつまでも続けることはできません。行政の協力を得るため、私たち執行部で那覇市役所に押しかけて、親泊市長に要請書を手渡したり、教育委員会の先生方に第1回の大会を見て頂いてご理解を求めました。

そのかいあってマイナスシーリングで非常に厳しい状況であったにもかかわらず、第2回大会から大会予算の半額を出して頂けるようになりました。これは行政側のご理解と、私たちの情熱が一つになれた結果だと思い、感謝いたします。

また学校現場の先生方、養護教諭の先生方がこの大会に参加するには学校長の許可が要るわけですが、その為にはこの大会に対するご理解を校長先生にお願いしなくてはなりません。それで教育委員会のご指導で校長研修会において少し時間をいただいて趣旨説明をさせて頂くことになりました。しかし1回目、2回目と断られ、やっと3回目に恩納村の白雲荘で20分程度時間が取れることになり、私と宮城正廣先生が診療所を閉じて説明に駆けつけました。このような努力の積み重ねがあって、学校長の理解が深まり、養護教諭の先生方が動きやすくなり、大会に参加しやすくなったのです。

○ 司会　この大会の提案者であり、第1回から3回までの大会を仕切りました宮城正廣先生にお話を伺います。

○ 宮城　玉木先生をはじめ、私が担当理事を務めた南歯会の執行部の先生方は、積極的に会を運営し、子供たちの健康を考え、なおかつ教育現場の先生方の苦情を聞き、それを会務に反映するという姿勢をとっていました。校医問題にしましても、玉木先生は「このような非協力な校医は辞めさせなさい」と発言しけじめを付けました。但し南歯会としても専門職として学校現場に要求すべきは要求するという姿勢でした。

当時の沖縄の子供たちの口の中を見ていて、専門家の立場から少しおかしいのではないかという話が私たちの勉強会または集会で出ていました。　ちょうどその頃TBSで噛めない子の特集があったのです。東京都立母子保健院院長の二木武先生、東京大学医学部助教授の井上直彦先生、鹿児島大学矯正学教授の伊藤学而先生、日本大学の小児歯科医の赤坂先生という方々が出まして、今の子供たちには噛めない子、噛まない子、まともに咀嚼ができない子供たちが非常に多くなっているという特番でした。それを見たとき、まさしく沖縄にも同じことが言える、これは将来子供たちの健康にいろんな面で害が出てくるのではないかと、私たちは専門家として危機感を持ちました。この危機的状況をわれわれ専門家ばかりでなく、学校現場および父兄にも知らせる場がほしいということになり、この那覇市学校歯科保健大会ができたということです。大会実現までの苦労はいろいろありましたけれど、当時の玉木会長、友利会長から「後の責任はわれわれトップが持つから君たちはどんどんやりなさい」という励ましがありましたので、私たちは思う存分現場で仕事ができたと考えます。

○ 司会　今のお話で、現場の先生も上のほうの先生も本当に一緒に一丸となってこの大会を開催してきたということが良く御分かりになったと思います。では、教育長に行政側としてのお話を伺います。

○ 嘉手納　玉木先生をはじめ御三人の方々からこの歯科保健大会を開くに当たっての苦労話をお聞きし、これらの先輩方に対して非常に感謝をしているところです。行政としては当然子供たちの体を健やかに育てていくというとても大きな任務、役割を持っています。しかし、えてしてそういうふうな問題を行政サイドでは見えにくくしている面があると思います。そのようなことが適切にフォローされて、9回までこのような大会が持たれたということで、大変心強く思い、感謝をしています。私ども行政は、先生方のご指導を得て、学校現場で歯を磨くということを中心にして、歯および口の衛生についての指導を、養護教諭を通してやっています。この事はこれまでの積み重ねが、広く先生方の意識を変えることにつながったし、さらに実際に現場で実践される背景になっていると思います。そういう意味でこの問題は今後末広がりで、那覇市の小中学校50校に広げていかなければならないと思っています。

先ほど玉木先生が、これからの問題として高齢化社会のことをいわれましたが、今まさに教育委員会では生涯学習社会をどう作り上げていくかを検討しています。この生涯学習社会の一部は基本的なところで生き甲斐ということと結びつきます。この生き甲斐はやはり健康がベースになって花開くわけです。そういう意味では、この

生涯学習社会を作るにあたって市民が健康を持続するためには、口から始まって体全体が健康になることが大切であり、そうしますと生涯学習社会でも学校教育と同じように「噛むことの大切さ」を広げていく必要があると思います。これまでは子供たちを対象にしていたものを、これからは市民にまで広げていくということに具体的に取り組んでいくことが新たな課題になると思います。

○ 司会　次に第4回、5回、6回と中身を充実させるとても難しい時期を、南歯会の会長 として乗り切りました高江洲正勝先生にお願いします。

○ 高江洲　この大会の実行委員会はこれまで宮城正廣先生の診療所の研究室を使い、養護教諭の先生、教育委員会の担当の先生方と夜遅くまでいろんな案を練って、講師の選定、タイトルの付け方などで喧喧がくがくと討論したのを覚えています。私は宮城先生の診療所の研究室と、宮城担当理事がいなかったらこの大会はこのようにうまく行かなかったと思います。月に何回も研究室を使わせてもらい、しかも夜食には美味しいラーメンが用意されていましたし、さらに部屋の使用料も無しということでした。このような私財をなげうつような宮城先生のご苦労をこの際皆さんに分かって頂きたいと思います。私の会長時代に宮城先生のご苦労に対し何も答えてないことを、非常に失礼なことをしたと反省しています。私は副会長時代に実行委員会に出ており、皆さんの苦労を見ていましたので、自分が会長になったときはまた宮城先生に理事を頼む予定でした。ところが宮城先生もお疲れになっており、もう勘弁してくれということで、宮城先生の下で委員をしていた真境名先生が後を引き継ぎました。真境名担当理事のおかげで私の会長時代の3回の大会をうまくできたと、真境名先生に非常に感謝しています。真境名先生はその後も担当理事をなされ、私の次の新城会長も心強いと思います。
この大会は名前に学校歯科保健とあるものですから、それにとらわれた大会になりがちです。先ほどの教育長のお話で、要するにこの大会を生涯教育の一環として位置づけたいという力強いお言葉を聞きしまして、ますますこの大会を発展させなければいけないと思います。今回真境名担当理事のもとでこの大会の記録をまとめて過去の歴史が集大成され、その中から将来どういうことを目指していくかを示唆するようなものができる様がんばって頂きたいと思います。

○ 司会　第1回から9回まで南歯会の専務、副会長、会長と3年づつこの大会に関わってきた新城現会長に、これまでを振り返り、この大会が今まで一般社会にどのような影響を 与えてきたかというのを伺います。

○ 新城　ものを作っていくということは本当に大変な苦労、人に言えないような様々なご苦労があると思いますが、玉木先生、友利先生、高江洲先生はその苦労を微塵も出さずにこれまでの素晴らしい大会を開催してこられました。それで既にレールが引かれていたわけでございますから、会長として関わりました7回から9回までは本当に私が苦労することもなく、すべて担当委員を中心に実行委員の先生方だけできちっとした運営ができました。やはり組織というものは、過去の積み重ねが大事だなと思います。

社会に対する影響ですが、この大会以後、3歳児の齲蝕罹患率が沖縄県において減少してきております。就学時検診でも齲蝕罹患率は90％ですが、1人あたりの所持する齲歯数は少なくなっています。そういった意味で私どものやってきた行為が徐々に地域社会に浸透してきていることを実感しています。またこの大会などが先駆けとなり、全国的に噛むことの重要性が認識され、日本咀嚼学会が発足しており、本県からは宮城正廣先生がその学会の委員として大学の教授とか高名な先生と共に全国的に活躍なさっています。この歯科保健大会が生んだ成果というものは、県内だけにとどまらず、全国的に波及し、その輪が広がっていったと実感しています。

○ 司会　この大会の講演の中で警鐘したことで実証されている事柄について宮城先生に伺います。

○ 宮城　全国的に噛むことの重要性が認識されてきて、現在日本咀嚼学会ができています。この学会は歯科医だけでなく、いろんな分野から咀嚼に対するアプローチ、研究がなされ、内容の濃い素晴らしいものです。また平成5年12月には噛むことと全身の関わりを究明しようと日本全身咬合学会が発足し、歯科医だけでなく内科および耳鼻科、整形の先生方、また整体とかカイロプラクティックの分野からも参加しています。その第1回大会のテーマを列挙しますと『咬合異常による全身症状と精神症状』『咬合と姿勢』『全身咬合と子供の健康』『噛むこととストレスについて』『噛むことと精神的不定愁訴』『カイロプラクティックから見た咬合と体のひずみ』などです。このようにトータルで全身を診る人たちが、噛むことと全身との関わりを具体的な症例を挙げて発表しました。噛むことがいかに重要であるかということが全国的に各分野で認識されているのです。そういった意味で、全国に先駆けて沖縄県の南部地区歯科医師会が噛むことに対する大会を企画して実現させたことは、非常に時期を得たものであったと思います。将来どうするかということに関しても、現在のいろんな学会の誕生を見ていますと、そこから自ずと展望が開けるのではないかと考えます。

○ 司会　この大会が9年間も続いた要因は何かを友利先生にお聞きします。

○ 友利　私は保育園の健診をしているときに、顎の発育が悪いために既に乳歯の段階で歯並びが悪くなっているのを見て、本当にこういうことがあるのだということを仲間の先生たちと話し合いました。そしてこれはどうにかしなければならないというのがスタートでした。続いてきた理由としては、まず噛めない、噛まない、飲み込め

ないという問題が現実に起こっているということ。咬合と全身疾患との関係、咀嚼機能とボケとの関係などがしだいに明らかになってきたこと。この問題に対して歯科医師会、教育委員会が深い理解を示し、強い危機感を持って取り組んできたこと。講師の先生方の講演の素晴らしさ。行政、教育委員会の協力があったこと。以上に集約されると思います。それから会員の若いエネルギーを執行部が吸い上げて、一つの目標に向かって動くことができたことも要因としてあげられると思います。

○ 司会　大会の参加者の動員に関して新城先生にお聞きします。

○ 新城　南部地区歯科医師会の会員は現在217名ですので、会員だけの動員では限界があります。それで那覇市の50の小中学校の養護教諭、関心のあるクラス担任の先生方、さらに父兄の方々の協力がいただければ、会場を埋め尽くすぐらいの人数は動員できるはずです。しかし学校現場は歯科だけではなく、視力の問題、肥満の問題などいろいろな事項を抱えているので、歯科だけに重点的に力を注ぐということはできません。それでも第8回大会に神原小学校 PTA 会長の座安英明さんに講師をして頂いたこともありましたし、回を重ねる毎に PTA の方々の協力も頂けるのではないかと思います。

○ 司会　この大会は歯科医師、子育てをされている PTA の方々、学校の先生などいろんな分野の方々が協力しないと、この大会の求めている意義が薄れますので、学校関係者の協力を得ながら充分な啓蒙をしていきたいと思います。私は以前に高江洲先生から次のようなことを言われました。「この大会は地味な大会であるがとても重要なことなので、参加者の数など気にせずに、とにかく継続することに意義を見出してがんばりなさい。」私たちは参加者数のことを気にして悩む時期もありました。このへんのことを高江洲先生にお話頂きます。

○ 高江洲　確かにこういう意義のある大会は参加人員が多ければ多いほど、啓蒙活動の効果も出るでしょう。しかしその時々の人数に一喜一憂するのではなく、9回まできて社会に対する啓蒙がスタートラインを少しは越しているのが実感されている事が大事です。教育委員会の歴代の担当の先生も、歯科医師会が講師とかいろいろセッティングをして一生懸命児童生徒の保健のためにやっているので、動員が少ないと申し訳ない、ぜひ大勢の方に参加して頂きたいという意思を持っておられました。担当理事としては開演間際にも人数のことを気にしているのが多々見受けられましたので、非常に大変な仕事だと思います。本当にご苦労様でした。

○ 司会　最近は小児科の先生方も噛むことに対して関心を持ち、積極的に動いています。そのことと、将来のこの大会に対する期待とか展望について、玉木先生お願いします。

○ 玉木　教育長が話された生涯学習の問題をこの大会と絡めれば、老人クラブとかいうものもその管轄にあるのですから、中高年にも関連のあるテーマを設定し、その方たちの啓蒙も兼ねてやれば動員の件も心配がなくなるのではと思います。それから、小児科の先生が意外と歯科の歯や口のことに関心があります。一昨年、小児科の研究グループに私達歯科医が4,5人程呼ばれて、60項目ぐらいの質問に答えてきました。小児科医は口のことだけはよく分からないので、いずれは歯科の先生方とタイアップして共通の話題で何かやりましょうというところまではきています。テーマが噛むこととなると非常に狭い様に思われますが、宮城先生の学会の話とか、今の小児科医の先生方の話、生涯学習社会の問題だとか、そういった諸々を集めれば、まだまだたくさん話題にすることがあると思います。

○ 司会　最後に嘉手納先生にこの大会に対しての行政の今後の取り組みについて御聞きいたします。

○ 嘉手納　私は噛むことと脳の発達が非常に関係が深いということを知らなくて、この大会であらためて歯の大事さ、噛むことの大事さを知ったわけです。この問題に関しては親がそれなりの対応を幼児の段階からやってあげる必要があると感じています。しかし私ども教育委員会の管轄は幼稚園の5歳児以上中学校までなので、もっと幼い子を育てている父母の方々にこの大会への参加を呼びかけることが困難な状況です。そこで教育委員会の内部だけではなく、所管以外の分野まで広げることにより、幼稚園に就園していないまだ小さい子供たちの母親に対し、噛むことの大切さを理解させ、その情報を提供して大会に参加してもらえるのではないかと思います。

噛むことと姿勢とか、噛むことと健康の問題とか、やはり人間全体の健康を守るために、口あるいは歯の役割が非常に大きいということを、もっともっと多くの人に認識させていくことは、これからの教育委員会の重要な PR 活動だと痛感しています。また生涯学習という中でもこの問題を広げていけば、口あるいは歯に対する市民の認識もかなり啓蒙できると思います。今後この大会は、ますます大きく、多くの方々に参加してもらうことを図ることにより、成果も大きくなるでしょう。私ども教育委員会は、南部地区歯科医師会の皆さんと手を取り合って、この大会をますます発展させるように努力をしたいと考えています。

○司会　この大会は歯科医師会、行政、それと学校現場が三位一体となって子供の健康を守っていくという重要な大会です。これからも今日の座談会を参考にして、より充実した大会に持っていく様がんばっていただきたいと思います。

（要約文責　山川　修）



第12回大会　那覇市学校歯科保健大会は未来に羽ばたく子ども達のために





[2] 学校歯科及び高校検診

☆南部における学校歯科の歴史

「1982(昭和57)年発行　日本学校歯科医会誌 第47号『社団法人 日本学校歯科医会五十周年記念』第五編 都道府県学校歯科保健略史」及び「沖縄県学校歯科医会15年史『あしあと』」を参考に沖縄、主に南部関連の学校歯科の歴史をふりかえってみた。

○　1926(大正15)年及び1929(昭和4)年の調査では、沖縄において学校歯科医のおかれているところはない。1934(昭和9)年の調査で8人の学校歯科医が委嘱されていると報告あり。

資料から分る南部における学校歯科の歴史の概略を纏めた。

昭和10年(1935年) 10月11日	日本聯合学校歯科医会(昭和7年設立)に沖縄県学校歯科医会として加盟。その時の会員は13人である。
昭和18年(1943年)	この頃まで那覇市(人口7万人程度)に20人の歯科医師が開業しており、学校の検診は心ある歯科医師が学校長の依頼で実施していた。また那覇の公会堂を使用して交代で簡単な乳歯抜歯・治療処置を実施したこともある。
昭和21年(1946年) 4月	沖縄民政府が作られ、医師、歯科医師の極端な不足から「歯科医輔(歯科介輔)」という職種を認め、それを充足した。その後、沖縄本島を中心に一種の公営医療が行われていた。終戦から昭和25年までは軍の雇用関係の下に勤務医師の形態に置かれ、その間の学校対策には見るべきものがなかった。
昭和26年(1951年)	自由開業が認められてからは歯科医と学校長との個人関係で、学校長の依頼により学童検診を行ってきた。この年琉球政府が成立。
昭和37年(1962年) 8月	沖縄で学校保健法ができたが、ここでは学校医も、学校歯科医も必置制ではなかった。(本土では昭和33年4月30日学校保健法公布)
昭和41年(1966年)	4月18日～6月27日第1回本土派遣医師団による学童検診実施。
昭和41年(1966年)	第1回沖縄学校歯科医会設立準備委員会にて「学校歯科医の配置は学校歯科医会を通じて行う」ことを討議。
昭和42年 (1967年) 2月2日	文教局保健体育課との交渉において、本土派遣医による学童検診の今回の実施地区である那覇教育区小学校へ歯科校医を完全配置することが議題となった。
昭和42年(1967年) 3月26日	沖縄県学校歯科医会が設立、設立総会には21人が参加(入会者38人)。会長:山崎友太郎、副会長:西平守廣、会計:嘉手納憑一、南部地区委員:瀬底正俊・富本盛弘
昭和42年(1967年)	4月13日～6月27日第2回本土派遣医師団による学童検診実施。対象は那覇連合教育区(久米島、南・北大東島を含む)内34校の児童42,937人
昭和42年(1967年) 9月11日	学校保健法(昭和37年公布)一部改正により学校歯科医が制度化される。 ①大学以外の学校には学校医、学校歯科医、学校薬剤師を置くものとする。 ②学校医、学校歯科医及び学校薬剤師はそれぞれ医師、歯科医師、薬剤師のうちから任命し、または委嘱する
昭和44年(1969年)	日本学校歯科医会(昭和29年設立)の加盟団体となる。しかし『あしあと』では昭和43年(1968年)正式加入(会員38人)となっている。
昭和45年(1970年) 5月11日	～6月30日第5回(最終回)本土派遣医師団による学童検診実施。対象は那覇連合教育区(久米島、南・北大東島を含む)内の39校の児童28,695人
昭和47年(1972年)	5月15日本土復帰
昭和50年(1975年)	6月2日に高校検診実施について割り当て表を発送。6月4日～10日「歯の衛生週間」会員全員による県立高校検診実施。本年から県立高校に学校歯科医を配置し、検診班による高校検診をすることになる。
昭和57年	沖縄県学校歯科医会は解散し、沖縄県歯科医師会学校歯科医会となり、県歯科医師会長が学校歯科医会長となった。それまでの事業の執行は県歯公衆衛生担当理事が引き継いだ。昭和62年からは県歯学校歯科担当理事が置かれた。

現在の学校歯科の状況をみると、沖縄県歯科医師会学校歯科医会の支部である地区歯科医師会の学校歯科関連の仕事は、小中高校歯科校医の配置及び高校検診班の編成が主である。高等学校は県教育委員会が直接管轄しており、小中学校に関しては各市町村の教育委員会が窓口となっている。南部においては(社)南部地区歯科医師会として各市町村教育委員会に対応し、小中学校の歯科保健に関っている。

☆南部地区歯科医師会が校医を配置している市町村

(平成10年4月1日現在)

	小学校	中学校	高等学校	合計
①那覇市	34	17	11	62
②浦添市	11	5	5	21
③糸満市	10	5	2	17
④佐敷町	2	1	0	3
⑤東風平町	2	1	2	5
⑥南風原町	4	2	2	8
⑦与那原町	2	1	1	4
⑧豊見城村	6	3	3	12
⑨知念村	2	2	0	4
⑩玉城村	3	1	0	4
⑪大里村	2	1	0	3
⑫具志頭村	2	1	1	4
⑬具志川村	2	1	1	4
⑭仲里村	4	3	0	7
計	86	44	28	155



復帰前後の歯のコンテスト

☆校医適正配置について

歯科校医は法的に学校長が指名して、教育委員会が任命するのであるが、沖縄県では歯科医師会が推薦して、教育委員会が任命している。南部地区歯科医師会では入会年月日及び学校所在地に開業場所が近い順を加味して、学校歯科担当理事が候補をあげ、教育委員会に推薦している。しかしながら、歯科医師会が推薦する以上は、その歯科校医の管理・指導も責任を持って行わねばならず、学校側から歯科校医に対する苦情が出た場合には、仲介役としてその処理にも当らねばならない。それで本人の顔もよく知らないでは問題があるので、支部会または同窓会に問い合わせて、支部会への出席状況、評判等を調べてから、推薦する場合もある。

昭和62年4月学校歯科校医配置に関する会員アンケート調査を実施した。その結果に基づき、まず歯科校医一人一校制を進めることになり、昭和63年1月に南歯の友利政三会長名で協力依頼が出された。複数校を受け持っている歯科校医に対し、どちらか一校を選択してもらう方式を取った。そのおかげで、状況はかなり改善された。例外としては、地域との関係(出身地)で兼務されている方、学校からの特別な要請があって兼務されている方が数名おられる。また、支部内の学校は支部会員のみで担当するという糸満支部では複数校を持っている方が多く見られる。アンケートで多く見られたもう一つの意見は、校医配置のローテーション方式であった。これに関しては今後の課題である。

☆高校検診料移行の流れ

高校検診に関し、検診料及び校医手当は沖縄県教育委員会から県歯に振り込まれていた。検診料の2/4が県歯一般会計、1/4が学校歯科医会、1/4が各地区歯科医師会に配分され、校医手当の1/2は県歯一般会計、1/2が高校校医に配分されていた。しかし平成3年11月18日沖歯発第315号により、これまで県歯に振り込まれていた高校検診料及び校医手当収入を、平成4年度から各地区歯科医師会に全額還元するとの通知がなされた。これにより校医手当は直接行政から校医に振り込まれることになった。検診料の取扱に関しては、会員が検診班を構成して検診を実施しており、また南部地区歯科医師会には高校検診料480万円程度の内、1/4の120万円と私学検診料50万円で、合計170万円程度が一般会計に繰り入れられていた。そのため検診料の全額を検診担当者に配分すると、それによる一般会計への影響は避けられないことから、その解決策が求められた。南歯では早速各支部会での説明・意見収集を行い、次なる方策を決定した。まず、『170万円検診料補填方法』については、南歯が一旦全額収入し、170万円を一

般会計へ、残額を各高校単位で検診実情（生徒数・検診班人数）に合わせて各検診担当者に振り込む。『検診方法』に関しては従来通りグループ検診方式とし、検診様式の統一を図るため日学歯で実施している別紙3号様式に従って検診することになった。これは暫定的な措置であったが、平成11年度まで8年間も同様の措置を行っている。

☆検診料増額要請の動き

平成7年7月7日糸満支部から学校歯科検診料の増額を行政に要請してほしいとの要望が出された。他の島尻地区の支部も同様の要望があることが確認されたので、南部歯発第80号平成7年9月18日付、南歯の新垣元洋会長名で検診料の増額を下記の各教育委員会教育長宛に要望した。
糸満市・東風平町・与那原町・佐敷町
南風原町・豊見城村・具志頭村・大里村
玉城村・知念村
増額要望額は現行160円～180円/1人を250円/1人であった。
増額要望理由は
①従来の項目に加え顎関節症診査の新しい要領が増え、これまでも細かな要点チェックが多いところに、一層の所要時間と密度を要するようになった。
②過去十数年来単価が据え置かれている
の2点であった。
要望の結果、佐敷町・豊見城村は180円、東風平町・玉城村は200円、具志頭村・知念村は250円にそれぞれ増額となった。しかし、糸満市・大里村は160円、南風原町は170円、与那原町は180円のまま据え置きとなった。増額のなかった市町村には平成8年度に再度増額要請を行い、大里村は180円、南風原町は178.5円（現行単価に消費税分上乗せ）となった。

☆学校保健功労賞（団体）受賞



沖縄県学校保健大会を終わって―表彰状を前に―

平成8年1月18日第32回沖縄県学校保健研究大会において（社）南部地区歯科医師会が学校保健功労賞を授与された。大会には三役と友利理事が出席した。この賞は、学校歯科保健の普及・向上に功労があったものに与えられるもので、毎年行われる小中高校の歯科検診、校医による歯科講話、健康相談及び学校保健委員会への参加等の会員の地道な努力、さらに11回を数える那覇市学校歯科保健大会の開催などによる学校歯科保健に対する貢献が沖縄県の教育界に認められたのである。

☆那覇市学校保健懇談会の流れ

昭和55年（1980年）9月9日（火）那覇市教育委員会との懇談会（玉木史朗・渡口進一・兼浜政勝・高良恒己）をスタートに、那覇市教育委員会とは毎年の様に懇談会、懇親会を持っている。昭和60年から毎年開催された那覇市学校歯科保健大会を南部地区歯科医師会と共催するなど、那覇市教育委員会との関係は深いものがある。平成に入ってからは那覇市学校保健懇談会として、南歯・那覇市医師会・那覇市学校薬剤師会も含めた会合となり、さらに那覇市小学校校長会・那覇市中学校校長会・那覇地区養護教諭研究会も参加する懇談会に発展していった。いつ頃からか、懇談会の終了後に、三師会持回りで二次会を担当することになった。懇談会、2次会において、学校保健に関する様々な意見交換が行われ、行政と各団体、また各団体間の交流を深める良い機会となっている。

☆全国学校保健研究大会への歯科校医派遣

那教指学大2132号（平成7年8月4日付で）那覇市教育委員会から、第45回全国学校保健保健研究大会（徳島）に学校歯科医を派遣することになったから、1名を推薦せよとの通知が南歯会長宛に届いた。こちらから要請もしていないことであったので、棚からぼた餅と思いきや、よく調べてみると、参加費6,000円と旅費のみを那覇市が負担するというもので、その間の休診による収入減に対する休業保障等は何も考慮されていなかった。行政としては補助をしてあげたつもりであろうが、貰う方としては何の前触れもなく予定外の減収が生じることになってしまった。しかしながら、財政緊迫のおり、行政からのせっかくの補助金であるので、僅かばかりの日当を南歯が予備費から出して、誰かにがんばって行ってもらうしかないということになった。そこで白羽の矢がたったのが、那覇市学校歯科保健大会で那覇市教育委員会とも関わりのある友利隆俊学術理事であった。友利理事にとっては、診療所を休まねばならずまことに大変なことであったろう。翌年からは出張先を歯科がメインとなる全国学校歯科保健研究大会に変更してもらうことになり、平

成8年度は再び友利隆俊理事に東京まで出張してもらった。平成9年第61回全国学校歯科保健研究大会の開催地が福島になり、東京よりも遠隔地への旅費は出せないという条件があるとのことで、旅費の不足分は南歯で予算化した。福島には小禄真先生(学校歯科保健委員会委員)に出かけてもらった。平成10年度は全国学校歯科保健大会が沖縄で開催された為、派遣費はなかった。



戦後間もない頃の検診風景



歯のコンテスト表彰式(復帰前後)





☆ 那覇市医療協議会学童検診部会

昭和49年から発足した那覇市医療協議会は、当初年2回の開催もあったので平成10年には26回目の開催となった。この会の部会の一つである学童検診部会では、那覇市教育委員会・那覇市医師会・南部地区歯科医師会からそれぞれ議題を提出して協議が行われる。南歯には第15回からの資料が残っているので、その中から歯科に関連する議題を紹介する。

	協議事項	提出機関
第15回	1.学校保健委員会の設置と機能化について、三師会の積極的な参加と協力をお願いしたい。 2.学校医(小中学校)の研修出張費を予算化してもらいたい。 3.定期健康診断の委託費を増額してもらいたい。那覇市学校歯科保健大会共催金を増額してもらいたい。	那覇市 医師会 南歯会
第16回(昭和63年)	1.学校医(小中学校)の研修出張費について 2.那覇市学校歯科保健大会共催金の増額について:児童・生徒の健全な発育と口腔機能の確立をめざし学校歯科保健を共催しているが、自己資金が100万円以上もかかるので共催金を現行の77万2千円から22万8千円増の100万円にしてもらいたい。 3.要保護・準要保護の歯科治療範囲について	医師会 南歯会 〃
第17回	1.歯科検診における看護婦の配置について:歯科検診における記録は専門的な言葉使いのため、教師では対応が難しいので、看護婦配置をお願いしたい。 2.那覇市学校歯科保健大会共催金の増額について	那覇市 南歯会
第18回(平成2年)	1.学校定期検診料の増額について:現在540円(内科・耳鼻科・眼科)はここ10年間据え置きとなっている。国保の内科再診料は現在810円である。よって検診料を810円に増額して頂きたい。 2.那覇市学校歯科保健大会共催金の増額について :772,000円を1,000,000円に増額して頂きたい。 3.定期健康診断における看護婦の配置について 4.歯科検診における衛生士の配置について	医師会 南歯会 那覇市 〃
第19回	1.検診に帯同する看護婦の手当について 2.那覇市学校歯科保健大会講演録資料編集費の要請 3.定期健康診断の検診医への研修会について:時間をかけた信頼ある丁寧な検診をしてほしい。	医師会 南歯会 那覇市
第20回	1.那覇市学校歯科保健大会講演録資料編集費の要請 2.学校保健委員会日程の事前連絡について 3.定期健康診断の検診医への研修会について:時間をかけた信頼ある丁寧な検診をしてほしい。	南歯会 〃 那覇市
第21回(平成5年)	1.小児成人病委員会の設置について 2.要保護・準要保護医療券を新学期4月に間に合わせてほしい。 3.那覇市学校歯科保健大会第10回記念シンポジウム大会予算について 4.定期健康診断いついて (1)定期健康診断の時間帯について (2)個に応じた検診について:個に応じて、時間の取り方、対話等丁寧な検診を心がけて頂きたい。 (3)検診医の研修会の充実について:検診医によって異常の判定に大きな差が見られる。 (4)検診結果の報告について:特に異常のあった児童生徒については早く報告して頂きたい。	医師会 南歯会 〃 那覇市
第22回	1.小児成人病対策委員会の設置について 2.学校医研修のための費用の助成について:平成5年度までは予算が確保されていたが、平成6年度は0査定となっている。 3.学校歯科検診予定日程は歯科校医と相談の上調整してほしい。 4.那覇市学校歯科保健大会第10回記念シンポジウム大会の特別予算要請について	医師会 〃 南歯会 〃
第23回(平成7年)	1.小児成人病対策委員会の設置について 2.定期健康診断に伴う事務手数料について:1人につき12円を50円に増額して頂きたい。 3.定期健康診断の改善について (1)開始時間は1時45分であるが、開始時間の連絡の徹底をお願いしたい。 (2)大規模校が減ったので、各学校の校医のみでも対応できるのではないか。 (3)ある学校では割り当てられた医師ではなく、代理の方がみえ(3日間違う方)学校側が途惑った。事前の連絡・調整をきちんとしてほしい。 4.学校歯科検診の検診結果を提供して頂きたい。 5.学校職員へのアンケート調査協力依頼:歯科保健に対する意識を把握したい。 6.那覇市学校歯科保健大会予算増額について:実行委員会の委員は手当もない状態で活動している。交通費3,000円を会議回数(10回)人数(20人)として600,000円の増額措置をお願いしたい。	医師会 〃 那覇市 南歯会 〃 〃

第24回（平成8年）	1.数年前、小中学校の学校保健委員会設置の促進を呼びかけた。その後状況はいかがか。下記の調査をお願いする。 ①設置率と活動状況→未設置校　小学校7校、中学校8校 ②平成8年度学校保健委員会を開催した学校の数と活動内容 2.学校歯科検診時における記録係帯同費設定について→前向きに検討 3.学校歯科検診時の治療勧告書様式統一について→統一したものを検討 4.那覇市学校歯科保健大会に対する共催金交付について→検討 5.検診開始時間の厳守を 6.大規模校が減ったので、各学校の校医のみでも対応できるのではないか。 7.検診事前の連絡・調整、事後の反省をきちんと進めることにご協力を	医師会 南歯会 〃 〃 那覇市 〃 〃
第25回	1.教育委員会、養護教諭、学校医からなる三者連絡協議会の設置を希望する。 2.学校歯科検診時における記録係帯同費設定について→次年度予算獲得に努力 3.那覇市学校歯科保健大会に対する共催金予算について 4.大規模校が減ったので、各学校の校医のみでも対応できるのではないか。	医師会 南歯会 〃 那覇市
第26回（平成10年）	1.学校検診時における記録係のあり方について 2.那覇市学校歯科保健大会に対するご協力について 3.検診医師から当日の検診の様子をうかがいたい 4.学校医および学校歯科医は校区内の開業医にできないか 5.校医、歯科校医の心得および仕事内容について、ご指導、研修の実施を 6.検診開始時間の徹底を	南歯会 〃 那覇市 〃 〃 〃

☆日本学校歯科医会会員推薦について

日学歯に関しては、まだ沖縄県学校歯科医会が県歯と別組織であった頃には、沖学歯会員全員が日学歯会員として登録されていたが、県歯に吸収されてからは、全員登録とはならなかった。沖学歯の活動費を捻出する為、最小限の人数を日学歯の会員として登録したのである。そのため沖学歯の会員は同じ額の会費を納めていながら、日学歯会員の資格を持つ者と、持たない者が併存することとなった。日学歯会員の選出は、沖学歯運営委員会で行われ、県歯役員、沖学歯運営委員、高齢の学校歯科医、各地区役員等が選ばれた。平成8年8月県歯から日学歯会員30人の地区推薦をしてほしいとの通知があり、南歯は下記の三つの基準に従い、平成9年8月に30人、平成10年4月に41人を推薦した。

①同額の会費を納入しながら、日学歯会員である先生と、そうでない先生がおられるので、できるだけ平等にするため、推薦会員の一部を毎年交替する。（毎年入替えが可能なことは県歯に確認済み）
②推薦は、現学校歯科医で、すでに文部大臣表彰受賞者を除き、年令の上の方から順に推薦する。
③60歳以上の方は交替せず、60歳未満の方は、毎年、年令順に交替する。

☆那覇市小児成人病対策委員会

平成8年那覇市教育委員会が「那覇市小児成人病対策委員会」を設置し、12月19日第1回の委員会が開催された。この対策委員会は、近年、児童・生徒の健康上の問題で、体調不良や発達不全が進行している状況があるため、児童・生徒の健康管理及び健康教育の充実に資する為、組織的な調査・研究を行い、小児成人病（生活習慣病）対策指導書を作成するため設置された。委員の構成は、学校医・学校歯科医・養護教諭・栄養職員・保健主事・給食主任・教委事務局職員の総計16人からなる。学校歯科医として、（社）南部地区歯科医師会学校保健担当理事の友利隆俊が委員委嘱を受けて参加した。平成9年2月に、小児成人病（生活習慣病）対策実態調査を実施し、10月には「結果考察」の冊子を完成した。平成10年6月には「小児成人病（生活習慣病）指導の手引き」を完成し、那覇市立の各小中学校に配付した。手引書の内容は〔食事〕〔睡眠〕〔運動と休養〕を柱に、各項目とも小学校低学年・高学年・中学校用に学習指導案を作成し、授業に活用できる資料をふんだんに織り込んだものとなっている。この対策委員会は平成10年6月30日を持って役目を終えて解散した。

☆学校表彰

・1988（昭和63）年那覇市立真和志小学校が、学校挙げてのむし歯予防の取り組みを日学歯に認められ、全国の模範校の一つとして全国表彰を受けた。歯科校医は 宮里修会員である。

・ 1993（平成5）年那覇市立神原小学校が、「第32回全日本良い歯の学校表彰」（日学歯など主催）で、最優秀賞に選ばれ、文部大臣賞を受賞した。歯科校医は新里叡会員である。

・ 1996（平成8）年具志川村立清水小学校が、「第35回全日本良い歯の学校表で最優秀賞に選ばれ、文部大臣賞を受賞した。歯科校医は玉城民雄会員である。

[3] 1才半児健診

1才半児健康診査については、1977(昭和52)年厚生省児童家庭局通知として、市町村に実施が通知され、厚生省児童家庭局母子衛生課長通知として、歯の疾病および異常の有無を診査するよう指示されていた。しかしこれは予算事業としての扱いであったので、実施していない市町村も見受けられた。1997(平成9)年度からの改正により、1才半児健康診査は市町村の事務として法定化された。また1才半児健康診査に要する費用は、当該市町村の支弁とし、都道府県及び国がその3分の1をそれぞれ負担するものとした。

南歯では1978(昭和53)年6月20日の理事会及び支部長会において行政と1才半児健康診査について打ち合わせを行っている。行政側からは南部地区保健衛生事務所研究会員、南風原町福祉課長花城氏、豊見城村保健衛生課長大城勝盛氏他2人となっている。1才半児健康診査を希望する市町村に対しては、できる限り当該市町村で開業している会員を派遣し、会員がいない、または足りない市町村には那覇市からも派遣して対応した。現在、南歯に1才半児健康診査を依頼している市町村は、那覇市・浦添市・糸満市・南風原町・与那原町・豊見城村・玉城村・知念村の8ヶ所である。

昭和53年10月30日公衆衛生委員会では、1才半児健康診査については(各市町村との契約54年3月31日まで)暫定契約期間とする、また54年4月以降の実施に関しては医科、歯科、市町村との三者協議会を持つことを話合っている。

☆昭和54年1月11日理事会及び支部長会では、1才半児健診料に関し、南部地区の予算にプールしての有効適切な資金の運用法について討議されている。

☆昭和61年度までは西原町の1.6才児健診は南部地区歯科医師会が行っていたが、翌62年度からは中部地区が行うこととなった。

☆那覇市においては平成4年までは、那覇市が1才半児健康診査のブラッシング指導要員として歯科衛生士を2名確保していたが、被験者の母親と歯科衛生士とのトラブル等が相次いだ為、那覇市は歯科衛生士の管理ができなくなり、南歯に歯科衛生士の確保を依頼してきた。それで平成5年度から那覇市の1才半児健診に対し、南歯が歯科衛生士を2名派遣した。翌6年には南部地区歯科医師会がブラッシング指導の重要性を訴えて、指導要員を1名増員して3名とし、衛生指導の充実を図った。平成6年第22回那覇市医療協議会で、衛生士手当の増額を要請し、平成7年度から1,000円アップの6,000円になった。南歯では歯科衛生士の管理・指導の為、「那覇市1才半児健診歯科衛生士ミーティング」を実施している。また平成5年からは記録係として母子保健推進員2名がついて、健診歯科医の手伝いをすることになり、担当医がわざわざ記録係を同伴する必要はなくなった。母子保健推進員が記録係をすることにより、彼女たちが歯科保健のよき理解者となってくれることが期待された。

☆平成に入った頃から、健診担当日時を失念する会員が出てきたので、南歯としては早々に手を打ち、会員に対して、健診日時の再確認と公的責務の自覚をお願いする文書を送付した。

☆1才半児健康診査の歯科医師の手当は、玉城村が28,000円、那覇市・浦添市・南風原町・知念村が25,000円、豊見城村は健診料23,000円と交通費2,000円、与那原町は23,000円(歯科衛生士7,000円)、糸満市が20,000円である。

☆平成6年行政監査の結果、南風原町の1才半児健診に関し、源泉徴収義務違反が判明。その事後処置で平成6年8月から前年度に遡って、町職員が1才半児健診を担当した会員の診療所を直接訪れ徴収を始めた。本会に事前の事情説明と本会の了解のないまま、しかも、受付窓口の患者のいる前で『先生の税金が未払いです。』などの不当な発言があった。町の不手際であるにもかかわらず、適切な処理を怠った町の姿勢と町職員の不遜な態度、源泉徴収率の高さ(日額表の乙欄)に会員から疑義・不満の声が高まった。本会の調査によると、過去数年にわたって源泉徴収のある年とない年があり、しかも源泉徴収率が年度によって変わるといった一貫性のない状況にあることが分ったため、同問題の解決に向けて、改善申し入れと、町側の一方的で不当な徴収方法に対し抗議をした。しかし当初、本会からのそうしたアクセスに町側の反応は非常に鈍かった。そうした最中に、南風原町から平成7年度の1才半児健診歯科医派遣依頼文書が届くが、内容が高圧的な文面であったため、上記の問題の解決をみないままに健診歯科医を派遣することが危惧された。よって平成7年2月25日の臨時理事会にて平成7年度の健診委託を受けないことを決定し、町側にその旨通知した。その後、数回に及ぶ話合いでも、南風原町は態度を変えず、4月24日の新垣南歯会長と金城南風原町長とのトップ会談に至って初めて、町側から正式に陳謝があった。その結果、平成7年度に限り、1才半児健診歯科医師配置業務は、本会の了承を得て、南風原町が個々の会員に直接お願いして行うこととなった。平成8年度からは以前同様、本会で歯科医師配置業務を行っている。

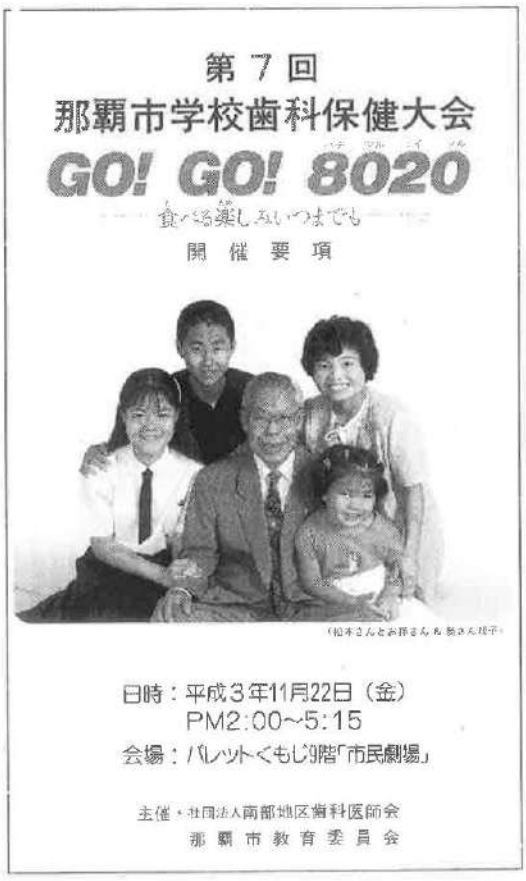
☆1才半児健診が始まった頃は、健診医の送り迎えに公用車を出すなどの丁寧な対応をした市町村もあった。しかし、時が経つにつれて、我々歯科医師の協力を当然の如く考え、1才半児健診が歯科医師の義務であるかのごとく対応する市町村が出てきた。駐車場の設備もなく、タクシー賃もない状態での協力をしなければならなくった。駐車場がない会場で健診を終えて出てきたら、駐車違反で車がなくなっていた会

員もいた。しかしながら、歯科医師会としての社会的責務を考えると、行政の態度を正しながら、この健診を続けることが大切なことは言うまでもない。1才半児健診は幼児の口腔内診査と同時に、母親への啓蒙がその目的となっている。母親の意識・育児態度が改善されない限り、幼児の口腔内環境は向上しない。ところが行政の中には口腔内診査の統計処理を重視するあまり、健診医と母親の対話する時間を惜しむ傾向がある。できるならば、健診担当医を増やし、母親への保健指導が十分にできる環境を作る事が望まれる。

それにより、地域住民さらに行政にとっても多大な恩恵がもたらされる事を、行政は理解して頂きたい。また最近では、1才半児歯科健診の際に、母親自身の口腔内診査も行う自治体も出てきた。これにより一層母親の自覚が高まり、歯科保健の理解が深まるのである。

自治体に対し、1才半児健診の効果が高まる方法を提言し、さらに『かかりつけ歯科医』として地域に根ざしていく努力を続け、地域住民の健康を保持増進していく責務が、我々歯科医師会にあると考えるがいかがなものだろう。





[4] 各市町村及び地区医師会との関係

☆(社)南部地区歯科医師会所管市町村〔3市4町13村〕

市:那覇市・浦添市・糸満市
町:南風原町・与那原町・佐敷町・東風平町
村:豊見城村・知念村・玉城村・大里村・具志頭村・粟国村・具志川村
仲里村・北大東村・南大東村・座間味村・渡嘉敷村・渡名喜村

南歯会務日誌には各市町村との関わりとして1972(昭和47)年国民健康保険協議会委員を推薦したことが記されている。

与那城勇:那覇市　　瀬底正俊:知念村・佐敷村・玉城村
金城征男:浦添市　　仲村義宣:大里村・南風原町
比嘉良有:与那原町　　上原斉　:豊見城村
西平守廣:西原町

また1978(昭和53)年12月19日南部地区歯科医師会と南部13市町村健診担当者との話合いがもたれており、南部地区歯科医師会からは、各市町村に対する要望その他が出され、各市町村からは補正予算の議会に対する予算措置の説明がなされた。
南歯会務日誌を基に各市町村との関わりをまとめたので御覧頂きたい。

☆西原町

1986(昭和61)年度まで西原町からの依頼により1才半児健診及び高校検診を継続、その後中部地区の管轄となる。

☆座間味村

平成8年までは南部保健所の歯科医師が学校検診をしていたが、保健所法の改正および公務員の二重給与問題(会計監査で指摘された)のため、南部保健所から学校検診を断わられたとのことで、平成9年4月22日　座教委第50号で、平成9年度の座間味村内学校歯科検診を南歯に依頼。しかし時すでに遅く南歯では対応できないため、平成9年度までは南部保健所が学校検診を行うこととなった。平成10年3月3日　座教委第666号にて平成10年度学校歯科検診依頼が南歯にあり、4日の理事会にて平成10年度単年の学校検診を受諾し、座間味村教育委員会に承諾文書発送す。しかし座間味村からの依頼文書には保育園児の健診は記載されておらず、直前になって子ども達の内訳の中に保育園児が入ってきた。保育園は管轄が違うことを説明し今回は座間味村の意向に沿って保育園児まで検診することとなった。

平成10年6月25日座間味村学校検診(友利隆俊理事・宇根良会員)座間味小中学校57人・幼稚園11人・保育園年少13人・年中16人、阿嘉小中学校33人・幼稚園2人・保育園年少5人・年中4人、慶留間小中学校15人・保育園年中2人、合計158人　予算11万4千円(交通費込み)、検診用具携帯

☆粟国村

平成2年4月9日	月	粟国小中学校歯科校医派遣依頼(粟国村教育委員会)

☆大里村

平成8年3月26日	木	大里村総合保健福祉センター落成式典(新垣元洋会長・玉城均公衆衛生理事)

☆豊見城村

昭和53年6月20日		1才半児健診について打合せ
昭和62年6月 8日	月	定例理事会:豊見城村環境保健課から村内幼稚園において父兄を対象とした講演会への講師派遣依頼
平成4年10月10日	土	豊見城村健康まつり開会式に新垣元洋副会長出席。翌11日の健康まつり歯科健診に歯科医師派遣。
平成5年10月10日	日	豊見城村健康づくりフェスティバル(歯科コーナー)歯科 医師派遣。
平成6年10月 8日	土	～9日(日)豊見城村健康福祉フェスティバル歯科医師派遣
平成7年10月14日	土	豊見城村保健福祉スポーツまつり歯科医師派遣。このまつりは翌年まで歯科医師派遣依頼があったが平成9年からは依頼なし。
平成7年11月22日	水	豊見城村教育委員会・豊見城支部懇談会。教育委員会から は垣花幸雄教育長・上原学校教育課長・当銘係長ら6名、豊見城支部会員は9名、さらに玉城英人島尻地区担当理事 が出席した。この会合は翌年の12月3日(水)にも行われた。

平成8年9月10日	火	拡大理事会:3才児健診対応アンケートに、豊見城村は小児保健協会に依頼すると回答との報告。
平成9年12月3日	水	豊見城村教育委員会懇談会(友利隆俊理事・金城秀男支部長)



平成七年豊見城村教育委員会との懇談会

☆玉城村

平成1年10月21日	土	玉城村まつり健康歯科相談コーナー歯科医師派遣

☆南風原町

昭和47年6月20日		1才半健診打合せ平成4年12月3日 (木) 南風原町保健事業関係者懇親会(南風原町中央公民館)この会には平成5年度、7年度、8年度、9年度と招待されている。
平成7年度		この年は前年の南風原町のミスによる源泉徴収問題の結果、平成7年度に限り、1才半児健診歯科医師配置業務は、本会の了承を得て、南風原町が個々の会員に直接お願いして行うこととなった。平成8年度からは以前同様、本会で歯科医師配置業務を行っている。(この件に関し詳しくは1才半児健康診査の項目に記してある)
平成8年9月10日	火	拡大理事会:3才児健診対応アンケートに、南風原町は小児保健協会に依頼すると回答との報告。
平成8年9月26日	木	南風原町「歯の健康フェア」(南風原町社会福祉センター) 歯科医師派遣3名
平成9年10月30日	木	同上
平成9年 5月29日	木	南風原町表敬挨拶訪問(三役・玉城均理事・友利隆俊理事)

☆与那原町

平成9年5月29日	木	表敬挨拶訪問(三役・玉城均理事・友利隆俊理事)

☆糸満市

昭和49年2月22日	金	理事会にて糸満市国保協議会委員に上原亀次先生を推薦
昭和55年3月11日		1才半児健診実施協力依頼
平成4年11月22日	日	糸満市健康福祉まつり歯科健診に歯科医師派遣。以後毎年派遣
平成8年 9月10日	火	拡大理事会:3才児健診対応アンケートに、糸満市は小児保健協会に依頼すると回答との報告。
平成9年 2月21日	金	糸満支部と糸満市医師会との懇談会



平成七年糸満市健康福祉まつり

☆浦添市

昭和59年8月29日	水	浦添市外人国保調印式(県歯会館会議室)
昭和61年1月25日	土	浦添市新年会
昭和62年6月7日	日	第1回デンタルフェア浦添(マチナトショッピングセンター)「よい歯の表彰」で浦添市長賞・浦添市議会議長賞・浦添市教育委員会教育長賞・南部地区歯科医師会会長賞を設ける
昭和63年2月8日	月	定例理事会:浦添市にデンタルフェア運営費補助金予算計上要請。平成元年から補助金50万円が(社)南部地区歯科医師会におりる。
平成1年5月15日	月	デンタルフェアご案内で浦添市長に面会(浦添市役所)
平成1年6月12日	月	浦添市保健相談センター落成祝賀会
平成2年5月21日	月	デンタルフェアご案内で浦添市長に面会(浦添市役所)高江洲正勝会長・山川修公衆衛生理事・当間淳司支部長
平成2年12月5日	水	浦添市成人歯科健診打合せ(浦添市役所予防課)
平成3年 7月4日	木	浦添市成人歯科健診　県内で初めて、地区歯科医師会と行政との連携で成人歯科健診が実施された記念すべき日である。以後毎年、実施されている。健診料は2万円である。
平成3年10月25日	金	浦添市国際交流課から海外子弟技術研修生(技工士)研修先斡旋依頼(12月～平成4年3月)
平成4年7月		浦添市てだこ祭りに12万円を浦添支部が寄付。以後毎年寄付をし、平成8年からは15万円を寄付している。
平成5年6月 6日	日	第7回デンタルフェア浦添　以後、浦添市保健相談センターにて開催
平成6年1月29日	土	浦添市福祉健康まつりに歯科医師派遣
平成6年4月 8日	金	拡大理事会:浦添市保育所園児の定期歯科健診嘱託医推薦 依頼(屋富祖・宮城・牧港・小湾・内間・大平　計6ヶ所) 以後毎年推薦依頼を受ける。
平成6年6月 7日	火	浦添市保健計画策定委員会(島袋進支部長)
平成6年6月30日	木	浦添市・浦添支部懇親ゴルフ(新垣元洋会長・太田正昭副会長)
平成7年7月 1日	土	浦添市25周年記念式典(新垣元洋会長・富島浦添地区担当理事)地域功労賞:島袋進先生
平成7年12月9日	土	第8回浦添市健康まつりオープニングセレモニー(太田正昭副会長)第8回浦添市健康まつり2才児健診歯科医師・衛生士派遣
平成8年1月5日	金	浦添市新年祝賀会(新垣元洋会長・浦添支部)
平成8年5月8日	水	拡大理事会:在宅歯科医療推進モデル地区選定について
平成8年5月23日	木	浦添市保健相談センターにデンタルフェア挨拶訪問(玉城均理事)
平成8年5月23日	火	浦添市保健相談センターにデンタルフェア挨拶訪問(富島理事・島袋支部長・本永班長)
平成8年9月10日	火	拡大理事会:3才児健診対応アンケートに、浦添市は南歯に依頼すると回答との報告があった。
平成8年11月 9日	土	第9回浦添市健康まつり2才児健診歯科医師・衛生士派遣
平成9年 1月 8日	水	浦添市新年会(富島修浦添理事・島袋進支部長・本永尚司 班長)
平成9年 4月17日	木	浦添市長・教育長表敬訪問浦添支部:湖城秀久理事・豊岡幹世班長・金城敬補佐
平成9年 5月 2日	金	浦添市市民憲章推進協議会(湖城理事)
平成9年 5月25日	日	浦添市市民憲章推進協議会(湖城理事)
平成9年 7月12日	土	浦添市庁舎行政棟落成祝賀会(会長・湖城理事)
平成9年 9月 8日	月	浦添市地域健康講演会(茶山団地自治会事務所)金城敬先生
平成9年 9月25日	木	浦添市母子保健連絡協議会(湖城理事)
平成9年11月 8日	土	浦添市2才児歯科健診(浦添市保健相談センター)
平成10年1月 7日	水	浦添市新年会(浦添支部)
平成10年2月12日	木	浦添市学校保健理事会(湖城秀久理事)
平成10年2月26日	木	浦添市学校保健研究大会(湖城秀久理事)
平成10年4月27日	月	第1回浦添市健康づくり推進協議会(湖城秀久理事)
平成10年5月12日	火	拡大理事会:浦添市老人保健事業に関る歯科医師の派遣
平成10年5月25日	月	「市民健康の日」制定10周年記念ウォーキング(湖城秀久 理事・豊岡幹世班長・金城敬補佐)
平成10年6月11日	月	浦添市学校保健会理事会(浦添市学校給食センター)湖城理事
平成10年6月30日	火	浦添市学校保健会総会(浦添市ハーモニーセンター)湖城理事功労賞受賞:友利清一先生・下地隆之先生

○浦添支部は浦添市との関係がうまくいっており、浦添市の各種の催しに関ってきた。それも日頃の浦添支部の先生方の努力の成果である。平成9年度からは浦添支部だけ地区担当理事・班長・班長補佐の3人体制で活動して頂いている。平成9年度の浦添市関係の対応は以下の通りである。

浦添市市民憲章推進協議会(浦添市市民部市民生活課)	委員	湖城秀久理事
浦添市てだこまつり実行委員会(浦添市市民部市民生活課)	委員	湖城秀久理事
浦添市青少年健全育成市民会議(浦添市教育委員会青少年育成課)		湖城秀久理事
浦添市学校保健会理事		湖城秀久理事
浦添市母子保健連絡協議会(浦添市福祉保健部健康推進課)	委員	湖城秀久理事
浦添市社会福祉大会(浦添市社会福祉協議会)	大会役員	湖城秀久理事
浦添市地域健康講演会(浦添市福祉保健部健康推進課)	講師	金城敬補佐

☆那覇市

○ 那覇市国民健康保険協議会

1972 (昭和47) 年11月13日那覇市国民健康保険協議会委員に与那城勇先生を推薦。以後毎年委員を派遣。

○こどもまつり歯科相談コーナー

昭和60年第1回那覇市学校歯科保健大会に向けての準備が活発に行われていた頃、那覇市内の無認可保育園で組織している那覇保育推進協議会の園長会で、TBS 特別報道番組「かめない子が増えている」のビデオを見て頂いた。この番組は那覇市学校歯科保健大会発足のきっかけとなったものである。園長会の反響は大きく、大会への動員の協力も得られた。さらに歯科保健の大切さを認識して頂いた結果、那覇保育推進協議会が計画している「第5回こどもまつり」(12月1日)に、歯科相談コーナーを設けたいという申し入れが南歯にきた。11月28日の学校歯科保健大会まで1ヶ月もなく、理事会でも対応ができないとのことで、大会の実行委員会の先生方が担当することになった。与儀公園の一角に張られたテントに設置された歯科相談コーナーでは、午前・午後それぞれ7人づつの先生方が相談にのり、隣のテントでは「かめない子が増えている」のビデオを放映した。この祭りにはおよそ4万5千人が参加し、歯科相談コーナーには250人の相談者が訪れた。この祭りには昭和63年まで4回にわたり歯科相談コーナーが設置された。地域の団体の催しに歯科医師会として参加した貴重な経験であった。

○那覇市制70周年記念特別表彰受賞

大正10年に市制施行した那覇市は、平成3年に市制70周年を迎えた。その記念式典が5月20日(月)那覇市民会館大ホールで行われ、(社)南部地区歯科医師会は(社)那覇市医師会、那覇市学校薬剤師会などと共に、教育・スポーツ部門で那覇市制70周年記念特別表彰を受けた。式典には新城啓和会長、新垣元洋副会長、太田正昭専務理事が出席し、栄えある表彰に今後一層の地域医療への貢献を誓い合った。

○那覇市健康フェスティバル

平成3年10月26日(土)那覇市健康フェスティバル開会式テープカット(新城啓和会長)

10月 27日(日)那覇市健康フェスティバル歯科相談・講演(山川修公衆衛生理事)

以後平成8年まで毎年歯科コーナーに健診相談担当歯科医・歯科衛生士を派遣。平成9年には後援依頼のみとなり、平成10年には健康フェスティバル自体が行われなかった。



平成6年那覇市健康フェスティバル　新垣元洋会長挨拶

○那覇市高齢者保健福祉計画策定委員会

平成4年(1992年)12月16日(水)第1回那覇市高齢者保健福祉計画策定委員会が開催され、山川修理事が委員として出席。以後平成6年の第4回まで開催。その間、那覇市高齢者保健福祉計画策定地域懇談会が那覇市内公民館など4ヶ所で開催され、山川修理事が出席し、地域住民の意見・質問を聞いたが、歯科に関

する話は全く出なかった。また那覇市高齢者保健福祉策定会議が3回開催された。しかし最終的な那覇市高齢者保健福祉計画には歯科関連の事項は、歯科衛生士による訪問口腔衛生指導を平成11年度には年間73回を目標にしている以外には、具体的に見るべきものがなかったのは残念である。またその訪問指導に関しても、文面上は南歯との連携をうたってあるが、未だに那覇市からの具体的な話はない。

○那覇市歯科保健講演会

那覇市では平成4年度から「かみかみ教室」を開き、母子歯科保健の啓蒙を行っている。講師は(社)南部地区歯科医師会が派遣している。平成4年度2回、平成5年度4回は真境名由守学術理事が担当し、平成6年度、7年度の各4回は友利隆俊理事が担当した。平成8年度から10年度は年2回の開催となり玉城斉が担当している。平成6年からは那覇市健康講演会に歯科保健が入ることとなり、年1回の講演を山川修が担当している。平成6年2月8日(火)には那覇市学校給食研究会から講演を頼まれ、山川修が、同じく7年2月8日(月)には高良政勝が講演した。また平成9年6月30日(月)には壷川老人福祉センターの教養講座で「高齢者の歯科衛生」について山川修が講演した。同じ平成9年7月23日と10月3日さらに平成10年11月13日には「那覇市保健大学校」での歯科講義を山川修が担当した。平成10年以降は、那覇市は健康講演会を沖縄県公衆衛生協会に委託し、名称は「中高年健康セミナー」となった。平成10年度の担当は山川修であった。

○那覇市医療協議会

この協議会は昭和49年1月に発足し、数年間の空白があるが、年2回開催の年もあって、平成10年で26回を重ねるに至った。この協議会の目的は、協議会要項によると「医療の整備および医療行政の円滑な執行ならびに公衆衛生の向上を期し、もって那覇市、那覇市医師会および南部地区歯科医師会との意思の疎通を図るため那覇市医療協議会をおく」となっている。協議会は、学童検診部会・予防接種部会・救急医療部会・保健部会の4部会からなる。南部地区歯科医師会は予防接種部会を除く3部会に委員を出している。各部会での審議の後、各部会毎の審議結果の報告があり、その後に懇親会に入るのが通例である。平成8年には協議会要項を改正し、医師会・歯科医師会とも会長は出席せず、副会長以下が出席することになった。また協議会の副会長を2人制にし、医師会・歯科医師会の副会長がその任に就き、那覇市保健衛生部長を協議会会長とすることとなった。平成9年には南部地区歯科医師会の参加人数5人以内を6人以内に改正し、協議会の定例会開催を「年2回8月・2月」を改正して「年2回以内」とした。

保健部会のこれまでの協議事項の中から歯科に関係のある議題を紹介する。那覇市・那覇市医師会から出された協議題は歯科にも関連があるものを掲載した。尚、昭和63年からの資料しか残されていないので、それ以前の内容は不明であるので期日だけを記しておく。学童検診部会については学校歯科の項で紹介しているのでそちらを御覧頂きたい。

第1回 (昭和49年1月31日)	木	那覇市医療協議会設立総会(ゆうな荘) 学童検診部会:山田勲理事・兼浜政勝理事 保健部会　　:高江洲旭理事・与那城勇理事
第2回 (昭和49年 9 月27日)		高良政利会長・中里治通副会長・高良政勝専務・上地健一理事
第3回 (昭和49年10月28日)	月	特別部会:高良政勝専務
第4回 (昭和49年12月10日)	火	学童検診部会:高良政勝専務・上地健一理事
第5回 (昭和50年12月2日)	火	高良政利会長・中里治通副会長・高良政勝専務・上地健一理事
第6回 (昭和51年 3 月3日)	水	本庁3階
第7回 (昭和51年11月29日)	月	自治会館
第8回 (昭和52年 2 月23日)	水	予算説明会、学童検診部会
第9回 (昭和52年11月15日)		
第10回(昭和54年 7 月18日)		
第11回(昭和54年12月12日)		
第12回(昭和55年11月21日)	金	
第13回(昭和58年11月25日)	金	
第14回(昭和60年 2 月26日)	火	

保健部会協議事項

15回(S63)	1. 国民健康保険から社会保険加入等により被保険者に医療費の返還が発生した場合、医療機関で他保険に請求をしてほしい。　→現行通りを希望する(南歯会返答) 2. 保育所(園)児童の健康診断には、時間帯を調整し、問診票等も活用してほしい。健診の結果は、後日保母及び父母を対象にその結果説明会を実施してほしい。 3.デンタルフェアに対する運営費補助金の増額について	那覇市 〃 南歯会
第16回	1.交通事故によるレセプトに「丸交」表示をすることについて 2.デンタルフェア運営費補助金の増額について(50万円→100万円)	那覇市 南歯会
第17回	1.保育所児童の健康診断について(午前中に実施してほしい) 2.「健康セミナー」事業の医師会との共催について 3.デンタルフェア運営補助金の増額について	医師会 〃 南歯会
第18回	1.デンタルフェア運営補助金の増額について(50万円→100万円)	南歯会
第19回(平成3年)	1.健康教育・健康相談について (1)老健法に基づく健康教育・健康相談について、今後は充分連携をとって活動できるよう態勢を作るための協議会の開催を提案したい。 (2)「那覇市健康展」の企画の段階から参画させてほしい。 2.デンタルフェア運営補助金の増額について(75万円→100万円)・視聴覚教材充実費(位相差顕微鏡及びディスプレイ借用、ビデオソフト購入)・健診用器材充実・8020表彰商品代 3.成人健診等の資料提供について	医師会 那覇市
第20回	1. 老人保健法の健診に関る健康教育、健康相談について、医師会としても協力して実行したいと考えているので、事前に協議打合せのミーティングの開催を希望する。 2.那覇市健康展への参加について 3.デンタルフェア運営補助金の増額について(75万円→100万円) 4.1才半児健康診査時における記録係配置要望	医師会 〃 南歯会 〃
第21回	1.1才半児歯科健診時のブラッシング指導要員の増員について 2.デンタルフェア運営補助金の増額について(75万円→100万円)	南歯会 〃
第22回(平成6)	1.受診結果把握について 2. 国保及び老人医療における診療報酬の請求に伴うレセプトへの第三者行為(交通事故・産業事故・傷害)の表示及び他の診療分と第三者行為分との分点表示のご協力について 3.母子及び父子家庭等医療費助成事業について 4.1才半児歯科健診歯科衛生士手当の増額について(5,000円→6,000円) 5.成人歯科健診の日程を木曜日の午後にして頂きたい。	那覇市 〃 医師会 南歯会 〃
第23回(平成7年)	1.老人健康診査再受診後の結果(返書)を送り返してほしい 2.1才半児健診の時間の厳守をお願いしたい 3.保健センター建設構想について 4.市役所職員の職場検診に参加させてほしい 5.地域保健法に基づく各種検診に参加させてほしい 6.第20回デンタルフェアの補助金増額について 7.成人歯科健診の日程について 8.成人歯科健診の市民への広報について 9.1才半児歯科健診時の首里公民館の駐車場について 10.成人歯科健診と1才半児歯科健診の結果の集計データを公表してほしい 11.かみかみ教室講師謝金の増額について 12.那覇市高齢者保健福祉計画における訪問口腔衛生指導について	那覇市 〃 医師会 〃 〃 南歯会 〃 〃 〃 〃 〃 〃

第24回（平成8）	1.平成6年の地域保健法改正により、平成9年4月から那覇市が行う保健事業に医師会も協力したいので、ご検討をお願いしたい → 小児保健協会に委託	医師
	2.寝たきり老人訪問診療の推進の為、行政のご協力をお願いしたい	
	3.老人保健法の総合健康診査の歯周疾患健診に協力したい	南歯会
	4.那覇市に歯科衛生士を採用してほしい	〃
	5.保健センター建設構想に口腔保健室を加えて頂きたい	〃
	6.デンタルフェアの補助金の継続をお願いしたい	〃
第25回（平成9）	1.『かかりつけ医』推進モデル事業への協力願い（紹介窓口の設置、広報誌）	医師会
	2.高齢者の口腔ケアと訪問歯科診療について	南歯会
	那覇市は口腔ケアサービス提供の計画はあるか	
	那覇市・那覇市医師会・南部地区歯科医師会による訪問診療についての協議をしていく場づくりができないか	
	※削除された協議事項	
	那覇市の歯科保健推進に対する取り組み方について	南歯会
第26回（平成10）	1.老健法に基づく健診の受診率アップへの対応策は、いかが計画されているか	医師会
	2.3才未満児の医療費の無料化をお願いしたい	〃
	3.本協議会と他協議会との枠組はどの様に位置付けているか	南歯会
	4.那覇市の歯科保健に対する意識の後退が感じられるが、いかがか	〃
	5.寝たきり者等の往診や健康相談の現状報告を受けて、ねたきり、障害者等の在宅ケアの強化について協議したい	那覇市
	6.糖尿病発症、合併症予防における保健と医療の連携のあり方について	〃

○那覇市成人歯科健診

那覇市では浦添市に後れる事2年、平成5年から成人歯科健診が実施された。これは平成4年の老人保健法の改正よって重点健康相談に「歯の健康相談」が入ったことに基づくものである。実際には健診した結果を基に相談に応じる形態を取る為、「成人歯科健診」と名づけられている。歯周組織検査では CPTIN が採用された。健診料は36,000円（税込み）である。

○那覇市健康都市宣言策定審議会

平成6年那覇市健康都市宣言策定審議会委員に新垣元洋会長が委員を委嘱され、宣言文の検討に参画した。ネーミングについては一般市民からも広く応募があり、最終的に11の候補作が残り、投票の結果、南部地区歯科医師会提案の"あけもどろ健康都市づくり宣言"が採択された。11月11日（金）那覇市民会館大ホールにて、「あけもどろ健康都市づくり宣言」のセレモニーが開催され、新垣会長と玉城均公衆衛生理事が出席した。

○那覇市保健センター建設基礎調査委員会

那覇市の保健センターを新築して、新たな市民サービスの拠点づくりをするために、平成9年1月から3月にかけて開催された委員会である。南歯からは地域歯科保健担当の玉城均理事が委員として出席した。策定された報告は平成10年スタートの那覇市第3次総合計画に盛り込まれた。那覇市民の健康づくり・健康保持のためには、『かかりつけ歯科医』の位置付け、口腔保健室の設置、歯科衛生士の配置の必要性が求められた。

○那覇市母子保健連絡協議会

平成9年4月の母子保健法・地域保健法改正施行に伴って、地域の母子保健事業を推進することを目的にして、保健・医療・福祉・教育等関係団体の連携を図るために設置された。具体的には母子保健計画の策定をその主な協議事項としている。協議会は平成10年2月23日にスタートし、委員の任期は平成12年2月22日までである。南歯からは地域歯科保健担当の玉城均理事が出席した。サービス受益者からの意見聴取を基に、実務者会議、作業部会の検討・整理を経て、協議会で検討・討議をする作業ラインをとる。策定された母子保健計画は市長に報告することになっている。

☆医師会との交流

那覇市医師会とは年末懇親会、懇親ゴルフコンペ等でもお付き合い頂いており、那覇市医療協議会においては、那覇市の医療・保健に関する諸問題に共に取り組んでいるところである。昭和49年1月歯科助手認定講習会の会場として、那覇市医師会の準看学校教室を貸して頂くことになった。歯科助手認定講習会は2月2日（土）から24日まで延べ7回にわたり実施された。講師陣は伊禮迅・又吉達雄・西平守廣・中里治通・中村義宣・銘苅清・上地健一・高良政勝・山田勲・兼浜政勝・阿嘉昭宗・高江洲旭・与那城勇の13名であった。昭和49年2

月那覇市医師会の那覇高等看護専修学校から歯学講座の講師派遣依頼がきたので、22日の理事会で人選し、高良政勝先生を推薦した。以後毎年、講師を派遣している。

南部地区医師会は昭和59年に法人化し、浦添市医師会は平成4年に法人化している。南部地区医師会とは年末懇親会、合同ゴルフコンペ等のお付き合いを続けており、平成5年には南部地区医師会会館落成祝賀会に招待を受けている。浦添市医師会とは特に南部地区歯科医師会浦添支部の会員が交流を深めている。



平成7年那覇市医療関係者との協議会



家族忘年会　来賓を囲んで



Ⅱ．南部地区歯科医師会会員の厚生福祉

ここでは歯科医師会に入会する事により、どのような安心と幸せが得られるかについて述べてみたい。最近は歯科医師会に入るのをためらっている若い会員が増えているようだが、歯科医師会に入る歯科医師は、決して社会的義務を背負った活動のみに追われているわけではない。歯科医師会としての対社会的活動の中にも、歯科医師としての喜びや充実感を味わう機会も多くある。そのような歯科医師会の活動をしながらも、我々会員は多くの権利も持ち、それによって様々な楽しい時間も手に入れているのである。会に入る事により得ることのできる貴重な経験は、その人の人生に多彩な色取りをつける事になる。とにかく入会してみなければ分らないこと、他人の話を聞くだけでは知り得ない事が数多くある。同じ会員でも、支部会や各種の催しに出て楽しく会活動を続けている方もいれば、会費を払いながらも他の会員との交流を苦手として輪に入らない会員もいるが、それが自然な人間社会である。しかしながらどのタイプの人から歯科医師会の話を聞くかによって、未入会者が歯科医師会に抱くイメージは全く異なってくる。南部地区歯科医師会では200人を超える会員の相互の扶助、親睦を図るために、共済会事業・家族忘年会・ゴルフ大会・球技大会などいろいろと事業が展開されている。会員として地域の歯科保健に奉仕する喜び以外に、歯科医師会に入る一つの楽しみとかメリットが、このような事業に凝縮されているのではないだろうか。ここではこれらの事について歴史を紐解いてみたい。

[1] 共済会事業

○ 我々会員にとっての福祉共済は、万一、死亡.廃疾.火災等に遭遇したとき、お互いの会員相互の扶助によって、助け合うことができる制度で、これにより福祉の増進を図る事を目的としている。残されている最も古い総会資料によると、1970(昭和45)年度決算報告に福祉共済費予算＄200(慶弔費＄100、親睦費＄100)とあり、会員一人逝去のため83ドルが慶弔費として使われたとある。また会務日歯には、1973(昭和48)年10月29日支部長会で福祉共済暫定規則の修正案が審議されたとある。昭和49年4月総会では議事事項で福祉共済金設置に関する件が審議された。

昭和52年度までは毎年3万円から9万円の福祉共済積立金が一般会計から繰り入れられていた。昭和50年度までは福祉共済金としての出費はほとんどなく、昭和51年度から53年度にかけて60万円の福祉共済金が執行されたため原資に影響が出始めた。それで昭和53年度の当初予算では計上していなかったが、昭和53年9月7日の臨時総会において、補正予算を組み、福祉共済積立金として2,730,000円を積み立てることになった。これが本格的な福祉共済金積み立ての始まりである。昭和54年からは1才半児健康診査料と一般会計の剰余金の一部が繰入金として福祉共済特別会計に入ってきた。昭和59年度以降は一般会計の剰余金から特別会計に繰り入れはなく、1才半児健康診査料のみが繰り入れられた。

○ 昭和60年度に1千万円の福祉共済金融資金支出予算が立てられた。昭和60年5月には融資共済金取扱内規が制定され、昭和62年には一部改正がなされた。この頃は法人化のことで会全体が激動の中にあり、融資金1千万円が機能したのは昭和62年度になってからである。[1986(昭和61)年12月11日(社)南部地区歯科医師会設立総会]平成2年には融資金予算枠が2千万円になり、平成4年には4千万円となった。

平成3年3月の取扱内規の一部改正で、融資利率を当該会計年度開始4月1日の公定歩合を適用することになり、また平成4年3月の一部改正では、これまで会員一人に対する最高融資限度額が100万円であったものが、一口100万円で会員一人あたり二口までとした。

○昭和62年度第2回臨時総会(昭和63年3月31日)に第3号議案(2)1才半児健診の共催負担金への移行に関する件が提出され成立した。昭和62年度までは、共済会の負担金は健診料、その他とするとなっていた。これにより、1才半児健診料は担当者各自の収入となり、共済会運営細則第1条2項により、負担金は一人の共済会員につき共済負担金として月額2,000円とし、一旦納入された負担金は返還しないこととなった。また、健診は従来通り全会員であたるものとし、各市町村の健診割当及び受託業務は(社)南部地区歯科医師会を介するものとなった。

○現在の共済会事業は、次の様になっている。

(1) 死亡共済金の給付
(2) 廃疾共済金の給付
(3) 火災共済金の給付
(4) 災害共済金の給付
(5) 疾病共済金の給付
(6) 融資事業
(7) 共済祝金の給付

福祉共済金支給状況表

年度	疾病共済金		死亡共済金		火災・災害共済金		共済祝金		合計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
S50	4	400,000	0	0	0	0	—		4	400,000
51	2	200,000	1	100,000	0	0	—		3	300,000
52	0	0	1	100,000	0	0	—		1	100,000
53	2	200,000	0	0	0	0	—		2	200,000
54	0	0	1	100,000	0	0	—		1	100,000
55	0	0	0	0	0	0	—		0	0
56	8	800,000	0	0	0	0	—		8	800,000
57	0	0	0	0	0	0	—		0	0
58	4	700,000	2	600,000	0	0	—		6	1,300,000
59	0	0	2	500,000	0	0	—		2	500,000
60	2	400,000	1	300,000	0	0	—		3	700,000
61	1	200,000	2	600,000	0	0	—		3	800,000
62	4	770,000	2	700,000	0	0	—		6	1,470,000
63	3	595,000	0	0	0	0	—		3	595,000
H1	3	680,000	0	0	0	0	—		3	680,000
2	3	480,000	0	0	0	0	—		3	480,000
3	3	860,000	0	0	0	0	—		3	860,000
4	5	1,370,000	1	500,000	0	0	5	250,000	11	2,120,000
5	6	1,650,000	1	500,000	0	0	0	0	7	2,150,000
6	3	740,000	0	0	0	0	0	0	3	740,000
7	5	1,570,000	0	0	0	0	1	50,000	6	1,620,000
8	4	760,000	1	500,000	0	0	1	50,000	6	1,310,000
9	1	600,000	1	500,000	1	100,000	0	0	3	1,200,000
合計	63	12,975,000	16	5,000,000	1	100,000	7	350,000	87	18,425,000



かっての立法院（御成橋よりのぞむ）



アメリカ世時代の崇元寺（後方は図書館）



[2] 家族忘年会

平成10年で家族忘年会も第22回を迎える。今でこそ、(社)南部地区歯科医師会の一大イベントに定着しているが、当初は、昭和53年12月23日(土)ハーバービューホテルで、家族慰安会としてスタートした。これは、昭和53年4月から就任した高江洲旭会長の執行部によって企画されたものであった。7月22日の理事会で「夫婦同伴忘年会実施計画について(夫人部会発足の準備)」が議題となり、その後着々と準備が進み、名称も「家族慰安会」となって開催の運びとなった。会費は7,000円、参加者は、会員及び奥様方で90余名であった。司会者は友利政三専務理事が務め、宮本盛弘・嘉手納憑一両先生の尺八、琉舞の余興で始まった。高江洲正勝御夫妻、八木茂御夫妻のデュエットや、福引の抽選会もあり、招待出席者は故登川正樹前県歯会長、県歯五役、松田芳樹技官であった。



昭和56年　フラダンスで楽しく

翌54年からは会場を沖縄グランドキャッスルに移して開催された。会費は会員が6,000円、同伴が8,000円であった。第4回(昭和56年)家族慰安会は、子ども達も参加することとなり、参加人数は238名(大人154名、子ども84人)でまさに大パーティーとなった。永井長秀先生が乾杯の音頭をとり、嘉手納憑一先生の「かぎやで風」が披露されるという形式ができあがったのもこの頃である。十日会、15日会、三水会の各支部ののど自慢大会、石渡研介先生扮するサンタクロースによるプレゼント配り、合唱、ダンスと楽しく和やかな雰囲気で会が進行し、最後は福引で盛り上がって閉会となった。サンタクロースによるプレゼントは子ども達の人気の的となったので、それからずっと続くことになり、今ではサンタクロースを4人も必要とする程になっている。

第5回家族慰安会(昭和57年)からは、招待客の数も増え、ますます賑やかな会となっていった。このときの会費は、会員が10,000円、同伴が15,000円であった。しかし受益者負担の会であるため、参加予定の方が欠席すると、時には赤字になることもあった。昭和58年には家族慰安会の費用を積み立てる意味合いも含め、会費が値上げされ、安定した慰安会の運営がなされるようになった。このため参加者も増加の一途をたどることとなり毎回400人を超す会に発展した。また第10回(昭和62年)には名称が「家族忘年会」に改められた。

第11回家族忘年会では、参加者が435人(来賓65人・会員200人・子ども80人・幼児90人)という大盛況であった。この年から、琉球大学口腔外科医局員による余興が出る様になり、ビンゴゲームが加わって、福引と共に景品をもらうチャンスが増えることになり好評を得た。

第12回家族忘年会(平成元年)からは、開催場所がパシフィックホテルに移り、現在に至っている。この頃から参加者が500人近くなってきた。翌年の家族忘年会では、大城一乃先生の創作舞踊が披露され、赤嶺和昭先生の紹介により大ヒット曲「Stay with me」で有名なプロの歌手の友情出演もあった。第14回(平成3年)には、テレフォンカード「南歯会エコロジーテレカ」を販売し、収益の12万円をリュウキュウアユ蘇生会に贈呈した。この年から、小禄真先生が所属するビッグバンドの演奏が花を添えた。このバンドは平成5年の家族忘年会まで3回出演してくれた。

平成4年の第15回家族忘年会では、支部長を中心とした執行部によるエイサーが披露された。平成6年からは、瀬底正司先生率いる「シーウォークバンド」が出演し、平成9年の第20回までオープニングを彩ってくれた。第19回には執行部によるダンス「踊ろうマカレナを」が余興に加わり、子ども達も一緒になって楽しんだ。第20回では、太田会長を含めた執行部の余興「マミドゥーマー」をやることになり、5回程度の全体練習であったが、各自のパートを家で練習したり、模範ビデオを見たりして練習に励んだ。指導は上地智弘先生のお母様にお願いし、会館まで足を運んで頂いた。上地先生のお母様は実に丁寧に教えてくださり、おかげでどうにか600



昭和58年　来賓も多勢

人近い観衆の前で披露することができた。

家族忘年会は会を重ねる毎に参加者も増え、会員同士の年に一度の家族ぐるみの交流の場、師走の慌ただしい中での骨休めの場、さらに親子のコミュニケーションの一つとしても大事な会となっている。また先輩の先生方の元気なお顔を拝見する機会でもあり、会員の団結にも一役買っている家族忘年会である。この会の、今後ますますの隆盛を願うものである。



第20回　こんなに大勢の家族が



昭和58年　親子揃って壇上で合唱



平成8年　奥様方も和気あいあいと



平成9年　内容も充実して

[3] 南部地区ゴルフ・球技大会

南部地区歯科医師会では厚生事業の一環として、会員相互の親睦を深めるためのゴルフ大会、及び会員診療所スタッフ、技工士会、歯科関連業者、南歯事務局員を含めたパラデンタルスタッフとの親睦を深めるための球技大会を開催してきた。

第1回ゴルフ大会は1984(昭和59)年7月29日(日)に琉球ゴルフクラブで開催された。以後、第5日曜日を定例日とし、平成10年8月で第54回を迎えるに至った。ゴルフ大会の世話役である厚生担当理事は、ゴルフ場との交渉、参加者の募集、景品の準備、大会の進行等で、毎回裏方の仕事を続けてきた。観光客優先のゴルフ場の経営方針のため、地元のゴルファーはあらゆるコネを使って予約をしなければならず、担当理事の苦労は大変なものである。玉木史朗先生と友利政三先生は、南歯会報平成3年6月号から平成6年1月号までに「シロー&マサミのGOLF One Point Lesson」と題して16回にわたって原稿を書いてくださり、会員のゴルフのレベルアップに貢献して頂いた。平成3年11月10日には第1回那覇市医師会&南歯役員懇親ゴルフコンペが開催され、その後も続いている。平成5年5月5日には三師会ゴルフコンペが行われ、那覇市医師会、那覇市学校薬剤師会、那覇市教育委員会も交えて交流を深めた。以下に資料に残っている南部地区ゴルフ大会の優勝者名を一覧する。第16回以前の資料には、参加者名はあるが、優勝者の記載がない。

	優勝者	開催場所		優勝者	開催場所
第17回	西平守廣	琉球ゴルフ	第38回	友利政三	パームヒルズ
第18回	長嶺和弘	琉球ゴルフ	第39回	長濱正	カヌチャ
第19回	島袋進	大京カントリー	第40回	上原淳	サザンリンクス
第20回	友利政三	大京カントリー	第41回	宮里良雄	那覇カントリー
第21回	儀保邦泰	大京カントリー	第42回	友利政三	海邦ゴルフ
第22回	友利政三	大京カントリー	第43回	長濱正	パームヒルズ
第24回	中里治通	大京カントリー	第44回	本永尚司	琉球ゴルフ
第25回	村田恵一	大京カントリー	第45回	友利政三	国際ゴルフ
第26回	友寄喜樹	琉球ゴルフ	第46回	太田正昭	琉球ゴルフ
第27回	友利政三	大京カントリー	第47回	台風中止	
第28回	長嶺将秀	パームヒルズ	第48回	玉木史朗	パームヒルズ
第29回	松茂良茂登	嵐山ゴルフ	第49回	玉城吉康	サザンリンクス
第30回	新城啓和	大京カントリー	第50回	大西満	パームヒルズ
第34回	友利政三	パームヒルズ	第51回	太田正昭	那覇カントリー
第35回	島袋進	大京カントリー	第52回	太田正昭	国際ゴルフ
第36回	玉木史朗	パームヒルズ	第53回	宮良修	パームヒルズ
第37回	徳山清宗	大京カントリー	第54回	宮良修	パームヒルズ



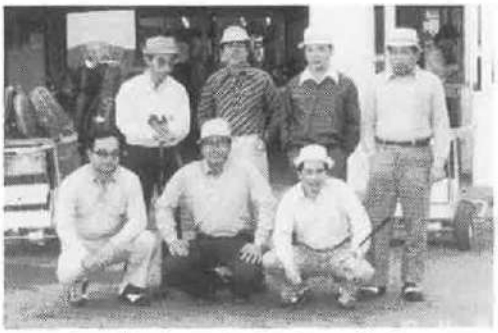
ゴルフは健康と親睦(那覇市医師会との合同コンペ)



広々とした芝生の上で



いつもこのように晴れていれば良いけれど（サザンリンクスにて）



1977年　南部地区のｺﾞﾙﾌ歴は発足以前から

南部地区歯科医師会第1回球技大会は、1985（昭和60）年5月12日（日）浦添市の当山小学校で開催された。バレーボール（9人制）とソフトボール（7回戦）が行われ、支部別のチームの他、歯科材料店チーム、琉大チーム、技工士会チームが参加し、熱戦が繰り広げられた。参加者には熱中するあまり、けがをする者もでるに及んで、平成2年の第4回球技大会からは、内容を変えてボウリングをすることになった。最初のボウリングの会場は那覇市東町の国際ボウリングであった。第9回球技大会からはサラダボウルに会場を移し、現在まで続いている。ボウリングの賞品は豪華さを誇り、歯科用品商組合も賞品を提供している。賞品はできるだけスタッフ全員にあたるように数を増やし、当たらなかった者にも参加賞が配られる。休日の午前中の開催にもかかわらず、毎回120人を超す参加者がいるので、厚生担当理事および厚生委員も賞品の準備、大会進行、順位の決定等で細かい気配りが求められており、彼らの努力には頭が下がる思いである。但し、順位を決めるのに1時間以上も参加者を待たせるのは、今後解決しなければならない課題である。会員の診療所に勤める多くのスタッフが楽しみにしているこの球技大会がますます発展、継続することを願う。



さあー　今度こそ　（ボウリング大会）



1997年　すごい賞品を前にして（ボウリング大会）

Ⅲ. 沖縄県歯科医師会との連携及び協力

(県歯事業への参加)

南部地区歯科医師会は、他の地区同様、沖縄県歯科医師会の各事業を支えるという重要な役割を担っている。しかしながら南部地区歯科医師会は県歯の中でも最大の地区組織であるため、県歯の事業を後押しして進めるその責務はより大きなものがある。

県歯はこれまでも沖縄県の歯科医療、歯科保健に関し、様々な活動を積極的に推し進め、離島県である沖縄のマイナス条件を克服しながら県民の為に尽くしてきた。県歯の継続事業の中でもデンタルフェア、衛生士学校、口腔衛生センターは、県歯の顔とも言うべきもので、先輩方の強い意志によって始まり、弛まぬ努力によって継続されてきたものである。これらは社会的にも大きな評価を得てしかるべき事業であると思う。ここではこれら3つの事業について、南部地区歯科医師会としてどの様に関ってきたかについて述べてみたい。特にデンタルフェアに関しては、地区会員全体での取り組みがその成功を左右するものであり、また地区の個性も出せるものであるだけに盛沢山の内容となった。那覇市という県都を中心とし、浦添市や糸満市及び島尻地区を含めた地域での予防歯科活動は、地域歯科保健として、今後も地域に合った形で展開されることであろう。

衛生士学校、口腔衛生センターに関しては会員個人が担当者として関っており、南部地区歯科医師会としては地区会員に積極的な協力を呼びかけている。衛生士学校はこれからも新たな衛生士を世に送る貴重な役割がある。口腔衛生センターにおける障害者歯科は、将来は行政による確固たる組織化が望まれるところであるが、現在の処、我々開業医の手による対応を続けなければならない。それぞれの事業が今後もより発展することを願い前書きとする。

[1] デンタルフェア事業の連携

a.南部地区におけるデンタルフェアの流れ

デンタルフェアとは、昭和33年から始まった「歯の衛生週間」(6月4日から10日)への対応として昭和52年から県歯が取り組んできたイベントである。当時、むし歯の洪水と言われたほどの齲蝕罹患率の高さに対し、予防の必要性を痛感した先輩会員達が考え出した方法で、会員全員が取り組むという、全国的にも画期的なものであった。

デンタルフェアの歴史についてであるが、今回は県歯レベルの話は、いずれ県歯の会史でまとめられると思うので、ここでは必要最小限に止め、南部地区としての立場から書かせて戴く。また手元の資料も充分ではないので、あの事もあったではないかというご指摘もあろうかと思うがご容赦願いたい。

第1回デンタルフェアは昭和52年6月2日から6日までの5日間、那覇市内のデパートリウボウで開催された。開催場所は1ヶ所であったが、開催にこぎつけるまでの苦労話は第14回デンタルフェアオリエンテーションの稿で詳しく述べられているので御覧頂きたい。第1回から第8回(昭和59年)までは中部地区の会員も那覇まで出向いていただいてデンタルフェアに参加なされていた。第1回からコーナー別の活動がなされ、コーナーの種類はブラッシング(歯ブラシ)、位相差顕微鏡、フッ素、パノラマレントゲン、食事指導(おやつとむし歯)、視聴覚(映画)の6つであった。コーナー名は第1回の資料で複数の表現がされている。パノラマレントゲンコーナーは第2回目からは姿を消した。法的な問題があったようである。**第2回**では相談コーナーが設置され、これは第3回では予診コーナーと改称されて第9回(昭和60年)まで続いた。**第3回**からは那覇市から南部地区歯科医師会に50万円の補助金が下りた。これは高江洲旭南歯会長以下当時の南歯役員の努力の結果であった。**第4回(昭和55年)**からは栄養士会の協力で栄養相談コーナーが加わった。当時のデンタルフェア会場の設営には県歯公衆衛生委員があたったが、各歯科材料店、技工士会も協力してくれた。デンタルフェアを地区が主管している現在は県歯公衆衛生委員が会場設営等に関る事はなくなった。当時のパネルは木製で重く、見栄え良く壁に貼るのにはコツがあり、中村義宣先生は道糸を使いパネルの位置を定める要領を心得ておられた。その中村先生が県歯公衆衛生の委員長をなされていた**第6回デンタルフェア**では会場からRBCが1時間近くテレビ生中継をしてくれた。その



昭和57年　テレビの生中継を1時間近くも

時の県歯の公衆衛生担当理事は渡口進一先生であった。渡口県歯理事の発案で、**第7回(昭和58年)**から幼稚園児の動員が行われ、会員が関係する幼稚園に声をかけて親子共々参加してもらった。幼稚園児にはむし歯予防の劇をリウボウ屋上の暑いテントの中で演じてもらった。この演技は翌年も行われた。第7回には親と子の良い歯の表彰が開始され、デンタルフェア参加者の中から該当者を選ぶのが予診コーナー担当者の仕事となった。**第9回(昭和60年)**からは中部地区でもデンタルフェアが開催されることとなり、那覇会場は南部地区の先生だけの参加となった。会場の流れを考え歯みがきコーナーとフッ素コーナーをワンルームにしたのはこの年からである。**第10回**ではコーナーの編成替えがあり、①歯の健康相談　②顕微鏡検査　③歯みがき指導　④フッ素塗布　⑤栄養相談⑥映画と人形劇になった。

第11回（昭和62年）は南歯が法人化された年である。この時に浦添会場が新設され、リウボウ方式を採用してマチナトショッピングセンターにも会場の無料使用、ポスター・チラシの無料提供をお願いして了解を得た。浦添会場はフッ素、歯みがき、相談の三つのコーナーでスタートした。また浦添独自で「良い歯の表彰」を実施し、浦添市長賞・浦添市議会議長賞・浦添市教育委員会教育長賞・南部地区歯科医師会会長賞が設けられた。この年のデンタルフェアは県歯から地区に移行するテストケースとして県歯の指導のもと南部地区が主体となって運営した。



昭和62年　第1回デンタルフェア浦添

第12回(昭和63年)からデンタルフェアは地区の主管事業となった。材料・消耗品等の一覧表が作成され、予算の無駄使いが除かれる努力がなされた。この年（昭和63年）11月にはデンタルフェアンケートを実施し、南歯会員のデンタルフェアに関する意見を聞いた。「パネルの新製、成人向けの歯周疾患コーナーの新設、ブラッシング指導時のスタッフの姿勢に無理があるので改善を、各会員のコミュニケーションを図るため弁当・飲み物は従来通り支給してほしい、半日担当の人には弁当なしで、今の場所で良い、会場を増やして地域分散型に」など多種多様の意見があった。

第13回(平成元年)から浦添市より50万円の補助金が交付されることになった。受け皿は（社）南部地区歯科医師会である。

第14回(平成2年)には首里会場が新設された。場所は「首里りうぼう」である。首里会場が初めての開催にも関らず1,000人を超す入場者がいた事は、今後デンタルフェアが地域密着型に進む方針にとって明るい展望をもたらした。5月29日（火）には南歯主催でデンタルフェアオリエンテーションをもち、歴代担当者によるデンタルフェア四方山話では、高良政勝先生、大山日出男先生、渡口進一先生、下地規一先生にデンタルフェアの初期の頃からの話をして頂いた。また山田勲先生、中村義宣先生にはデンタルフェア以前の公衆衛生活動についてもお話頂いた。このオリエンテーションの内容は後で掲載するが、山田先生、中村先生から後の部分はテープの操作ミスで録音されておらず非常に残念なことである。復帰前には1号線（現国道58号線）沿いにテントを張り、そこで埃をかぶりながらの啓蒙活動がなされたとの話もあり、歯科医師会の先輩方のまことに誇り高い遺産である。

第15回(平成3年)には那覇市からの補助金が25万円増額となり75万円となった。これは首里会場が昨年度新設されたためである。リウボウのパレット久



第4回　先生も一所懸命

茂地への移転に伴い、デンタルフェアの那覇会場もパレット久茂地6階・7階に移った。コーナーは6階に「かしこく食べようコーナー」「お口の細菌観察コーナー」「歯みがき練習コーナー」「子ども健診相談コーナー」「フッ素で強い歯元気な子コーナー」「大人健診相談コーナー」、7階には「お口の健康百科コーナー」が設けられた。デパートリウボウは従来通り会場の無償提供、コーナーの間仕切り、壁紙張り、1台1万円以上もする長椅子(13台)の作製、表看板・各コーナーの看板の作製、会場で使用する机・イスの提供、社員食堂の使用など全て無料で協力して頂いた。これは第18回を最後にリウボウを離れる時まで続いた。また第6回からリウボウのデンタルフェア担当であった美底清順氏は今回を最後にリウボウを退職し、翌年「プラニングオフィスグレートベア」を設立した。

美底氏の協力でややもすればマンネリ化しそうなデンタルフェアを活気付けることができた。グレートベアは後にデンタルフェアの強力な助っ人として活躍することになる。この年の会員の参加は昭和10年生まれ以降の先生方にお願いした。会員の増加に伴う対応であった。しかしこの対応は成人コーナーと8020への対応にとって年配の先生の力が必要であることからすると失敗であった。ただ先輩方の中に



第4回　おばあちゃんも一所懸命

は、担当を外れてもわざわざデンタルフェアの会場まで足を運び、現場の会員を激励してくださる方もおり、嘉手納憲一先生のように今でも毎年ご夫婦でお見えになる方もおられるのである。

第16回(平成4年)は当初6月4日(木)から6日(土)までの予定であったが、開催間近になってからデパートリウボウから7日(日)もやってほしいと要望が出た。それでやむなく4日間の開催となった。そのためリウボウ・浦添・首里の3会場同日の開催となり器材の準備が大変であった。久米島では仲里村主催の第1回デンタルフェアが開かれ、南歯に協力依頼がきたので会員の派遣と位相差顕微鏡・パネル等の貸し出しをした。この時猪原商会の安次嶺学氏が久米島に泊まり込みで仲里村デンタルフェアの顕微鏡コーナーを手伝っている。安次嶺氏は1987年(昭和62年)の第11回から南部地区の顕微鏡コーナーの世話をしてくださっている。仲里村デンタルフェアは県歯主催ではなく行政独自の催しである。

コーナー担当者の配置については下記のような配慮がなされている。

①昭和13年生まれまでは除外
②病気などの為学校検診などを免除になっている人は除外
③口腔衛生センターでの診療日の担当者は別の日に設定
④衛生士学校の講師はその授業時間を避ける
⑤スタッフの動員数の多い先生を衛生士学校の学生が参加できない時間帯に担当
⑥欠席がちの人をどこに配置するか
⑦学校検診とかち合う先生は支障のない日
⑧前年度の午前と午後を入れ替える
⑨前年度平日の人は日曜日に、またはその逆
⑩年配の先生は大人相談コーナーに。

この年南歯では位相差顕微鏡を猪原商会から購入した。あとは猪原商会から2台、沖縄歯科器材から1台、ハマダ歯科商店から1台を借り受けて対応した。オートクレーブは沖縄医療器、沖縄歯科器材、県歯から借用して3会場に配置した。



昭和53年　視聴覚コーナーで

那覇会場7階リウボウホールではパネル展示・予防商品販売・技工物展示を行った。この年初めて那覇会場と首里会場で昼食を無くし、そのため不評を買ったが、午前と午後の引継ぎは一部のスタッフを除いてはスムースにできた。回を重ねる毎に新入会員が増えデンタルフェアの当初の情熱もなかなか伝わらない状況が徐々に出てきた。デンタルフェア指導指針を全く読まずに参加される会員または、コーナーの内容(指導指針に明記)を知らないスタッフ、はては自分がどのコーナーに配置されたかを知らないまま参加する会員も見受けられた。

第17回(平成5年)には小禄会場が那覇市保健センターに新設され、浦添会場はマチナトショッピングセンターから浦添市保健相談センターに移設した。

両方とも行政施設で客の集まる要素に乏しいため、その対応として小禄・浦添両会場にアドバルーンを揚げ、そこまでの道沿いにのぼりを立てて目立つようにした。のぼりはサンスターがスポンサーとなって製作したものである。那覇会場、首里会場にものぼりを立てた。浦添会場においては浦添市の多大な協力があり、保健相談センターの提供、セレモニーにおける音響設備、テープカット用具一式の準備、また教育委員会にはチラシの制作・配布までして頂いた。浦添支部の会員と行政とが良い関係を保っている事がわかる。今回は南部地区歯科医師会としては過去最高の6,725人の入場者を記録した。久米島では第2回仲里村デンタルフェアと第1回具志川村デンタルフェアがそれぞれの村主催で開かれた。今年も昨年同様南歯のパネル・位相差顕微鏡の貸し出しをし、顕微鏡の管理・担当として猪俣商会の安次嶺学氏が泊まり込みで協力してくれた。後日、具志川歯科の玉城民雄先生から礼状とともに久米島の両デンタルフェアの資料も送って頂いた。それを見ると具志川村デンタルフェアは主催が具志川村で共催として沖縄県歯科医師会・具志川村教育委員会・具志川村健康づくり推進協議会が加わり、仲里村デンタルフェアは主催が仲里村となっている。南歯から派遣された仲里村出身の安村庸先生はその報告書の中で「これは今までの歯科医師会主導のデンタルフェアに比較して本当に地域の人々が主体になり、開催した事に意義があるのではないでしょうか。」と書いておられる。当然のことであるが南部地区歯科医師会では行政が主催しているデンタルフェアは歯科医師会の主催するデンタルフェアの入場者に加えていない。

第18回(平成6年)ではデパートリウボウが今までの6階催事場の使用を断ってきたため、他の場所13箇所（ジャビー・久茂地公民館・県庁1階ホール・那覇市役所庁舎・琉球新報ホール・RBC ホール・那覇市民会館・沖電プラザ・沖銀本店ホール・三越・山形屋・真和志農協ホール・パレット久茂地8階新設ホール）に当ったがいずれも予約済み、借用料金、警備上の問題で使用できず、パレット久茂地2階の美栄橋郵便局のホール（37坪）を借りた。しかしメイン会場としてはあまりにも狭いのでその隣の空き部屋（65坪）を貸してもらうよう久茂地都市開発に問い合わせたところ、その場所は6月1日からデパートリウボウに貸す予定であるとの事で、急遽デパートリウボウの比嘉社長に直接面会し、借用をお願いした。天井も壁も剥き出しの状態だがそれで良ければどうぞとの事で貸していただき、2箇所合わせて102坪を確保した。やはり旧リウボウ系の方はデンタルフェアに理解がある。また小禄会場もジャスコに移設し前年の3.5倍にあたる2,610人の入場者を記録した。小禄会場には小禄・豊見城・糸満の各支部と東支部の一部の会員を配置した。小禄支部会の先生方は自分達で金を出し合いそれぞれの支部会員の広告入のチラシを作り配布したが、他の支部会の先生方からは不公平だとの意見が出てこの試みは以後取りやめになった。那覇の3会場は6月4日５日の同日開催となり、さらに3交代制を初めて採用した。この時の南部地区歯科医師会公衆衛生担当理事の玉城均先生は報告で次のように書いている。「南部地区の入場者は6,371人。各会場に入場者のバラツキがあります。駐車場が確保できて、ファミリーで気軽に出かけられる会場と、都市型の少しあらたまった雰囲気のする会場、行政施設を利用した会場によって、入場者数の違いが出てくるのでしょう。また、来場の動機、目的も会場の特徴によって違いが出てきたように感じられます。今後、このような地域、会場の違いによる入場者の動向を考慮したデンタルフェア運営を模索していく必要があるかと思います。小禄のジャスコ会場の様に集客力のある会場で、比較的年令層の若いお客様に数多く接していく場合と、那覇の中心部で、成人を含めて幅広い年令層のお客様の健康相談がゆっくりできる場合とでは、おのずとお客様へのアプローチの仕方も違ってくるでしょう。デンタルフェアのコンセプトは共通であったとしても地域密着型の催し物（デンタルフェア）を指向していくのなら、各会場にあった内容にしていかねばと考えます。」またこの年に那覇市からの補助金が100万円となった。これは昨年から小禄会場が新設となったことに対する25万円の増額である。那覇市としては内容の改善等に対しては補助金の増額はできないが、開催場所が増えれば増額できるということであった。



第５回　デンタルフェア首里

第19回（平成7年）の那覇会場は那覇市出資の第3セクター方式による泊ふ頭開発株式会社の運営する施設で【泊ふ頭旅客ターミナルビルディング】愛称【とまりん】となった。隣接して600台収容の駐車場がある。この会場の設定に関してはグレートベアの美底清順氏に並々ならないお世話をいただいた。泊ふ頭開発株式会社 業務部企画販促担当部長の富盛

次夫氏が美底氏のデパートリウボウ時代の上司ということで、美底氏が仲介役をしてくれたおかげで、まだ工事中のとまりんの内部を見せていただいたり便宜を図って頂いた。今回から県歯のポスター・チラシ・新聞広告、南部地区のデンタルフェアの会場の装飾・設営等はグレートベアにお願いしてもらうことになった。10年以上にわたりデンタルフェアの裏表を知り尽くし、一般市民にアピールする方法の専門家である美底氏だからこそできることである。首里会場は首里りうぼうの都合により2階から地階に会場が移動し、食料品売場と外食店に囲まれた喧騒の中でデンタルフェアが行われた。会員およびスタッフばかりでなく、お客様からも苦情が続出した。県外企業と合併したリウボウ側もそろそろデンタルフェアとの付き合いに潮時を考えているかも知れず、次回からは新たな場所を見つけなければならなくなった。

今回はデンタルフェアの「フェア」という「お祭り」を意識し、お客様が楽しく健康作りに参加していただき、なおかつ我々会員も楽しめるデンタルフェアにといくつか新しい試みをした。まず会員の服装を自由にし、白衣の着用を義務付けなかったことである。常識的な普段着であることは当然であり、グローブ・マスクを使用するのは差し支えない。お客様と区別するため、木製の動物（ウサギ・象・ワニ・鯨）の形をした名札を作った。この名札は毎年使う予定である。気軽な雰囲気を作り出すためのこの作戦は、会員の中には拒否反応を示す方もいたが、結果的にはポロシャツまたは白衣の会員が適当に配置され、お客様にも好評であった。玉城理事の報告によると、首里会場の開会式にご出席頂いた中央保健所所長の吉田先生がアロハシャツでお出でになり「デンタルフェアという名なので気楽な格好できましたよ」と言われたそうである。吉田先生の柔軟な発想に大変感激したとのことだった。スタッフ（歯科衛生士・歯科助手）は歯みがき指導やフッ素塗布があるので従来通り白衣・エプロンを着用した。またこれまではむし歯・処置歯のない子を誉めるだけであったが、デンタルフェアの全てのプログラムを終えた子ども達全員に参加賞としてオモチャを配った。消しゴムとかささやかなプレゼントだったが子ども達には喜ばれた。5歳以上でむし歯・処置歯共にない子には県歯の予算で1,000円の図書券が配られ、これも好評であった。さらに、とまりん・ジャスコ・浦添市保健相談センターの看板を新しく作り替え、各会場の連絡を取り易くするため、会場毎に携帯電話を配置した。衛生士学校の学生にとってデンタルフェアは貴重な実習の場であり、学生からも「勉強になった」「来年またがんばりたい」という声が多い。しかし彼女達のデンタルフェアの感想文には次のようなことも書かれている。「現場の歯科衛生士を見て、勉強するつもりでいたが、自分の理想の衛生士とは程遠いものを感じ、残念でした。」「たくさんの歯科衛生士が来てくださったのに、何もしないでしゃべってばかりいました。学生はまだ分からない事がいっぱいあって困っているのだから積極的に指導してほしかった。」 我々の仕事が、理想の職業として若い人に伝わるには、日頃我々が行っている歯科医療をスタッフがどのように捉えているかを再考する必要があろう。


第4回デンタルフェア小禄　ごった返すジャスコ

第20回デンタルフェア（平成8年）では首里会場が、駐車場も便利で集客力も期待できるコープ首里3階に移設され、新たな展開がスタートした。南部4会場のお客様は合計9,164人で過去最高であった。各会場の基本的なコーナー編成は「お口の健康相談・健診」「歯みがき指導・フッ素塗布」「位相差顕微鏡」で組まれており、那覇会場だけは「栄養相談」が置かれた。「栄養相談」では沖縄県栄養士会のよる「釣りゲーム」で栄養素を知る企画と劇「噛むことがだいじ」が人気を博した。


栄養士会による釣堀ゲーム

またお客様から会員の名前などの質問が多いのに対応し「歯科医院名」と「歯科医師名」を目立つ様に表示した。これは浦添会場では以前から実施していたことである。各会場毎の会場案内用のチラシを南部で作り、会場施設の入り口などでお客様に配った。さらに「おともだちチケット」をご招待券として30,000枚用意し、南部の公衆衛生委員が会場近

くの小中学校・保育園・児童館・会員の診療所に配り、校長・園長には直接会って趣旨説明をし協力をお願いした。今回の特徴は「食育」という考えから「歯に信頼」マークのお菓子を紹介したことだ。むし歯になりにくい賢い甘味料の取り方を基本にし、砂糖に替わる甘味料を使って作られ、検査に合格したお菓子にこのマークがつけられている。東京歯科大学口腔衛生学講座の松久保助教授と日本トゥースフレンドリー協会の協力でリーフレットとお菓子の3,500セットを無料で提供してもらい、南歯公衆衛生委員がひとつひとつビニール袋に詰める作業をした。各メーカーから歯磨剤・歯ブラシの提供があり、株式会社沖縄花王からはデンタルフェアのロゴ入り風船3,500個も提供された。ここ数年目立つことは、会員のスタッフの参加が減少していることである。専門職を生かしたボランティアの絶好のチャンスをみすみす逃すのはいかがなものだろう。院長が積極的に社会奉仕をする姿に今の歯科に勤めるスタッフは何も感じないのだろうか。今後の重要な課題である。ある会員にはお客様から苦情が出た。「あの人、手を洗ってないのですけど」と訴える母親がいたのである。医療人としての基本を祭りの最中であれ忘れてはいけない。お客様も学生も見ているのだ。1人のいいかげんな行動で、デンタルフェア全体が評価されてはたまらない。

第21回デンタルフェア（平成9年）は昨年同様4会場で開催された。「歯に信頼」マークの啓蒙も行った。「とまりん」では「かみかみコーナー」が設定され、「栄養相談コーナー」では昨年の「釣りゲーム」と劇「噛むことがだいじ」に加え、「噛みごたえのある食べ物の展示、そのレシピ」が実施された。沖縄花王販売株式会社、ライオン株式会社、サンスター株式会社の協力で歯ブラシの展示を行い、さらに歯磨剤などの配布も行った。今回は全会場1日開催となったが、今後のデンタルフェアの流れとしてこの方式が続くのではないだろうか。



平成九年　さあー　これから頑張りましょう

第22回デンタルフェア（平成10年）は各会場1日開催にもかかわらず7,085人という歴代3番目のお客様を確保した。「おともだちチケット」の配布範囲を広げ、那覇市・浦添市内の全小学校・幼稚園に配った成果が上がったものと思われる。まさに足を使ったローラー作戦である。今回南部地区歯科医師会のデンタルフェアへの取り組みは、前回同様合同委員会方式で対応した。各委員会が状況に応じて、垣根を越えて協力し合い、一つ一つのイベントに立ち向かっていくやり方は南部地区歯科医師会ならではのスタイルである。「良い歯の表彰」ではインスタントカメラによる記念撮影が好評であった。

以上、デンタルフェアの22年間をかいつまんでご紹介した。尚、このデンタルフェアの流れを裏から支えてくれた歯科用品商組合、歯科技工士会、歯科衛生士会の方々に心から感謝をし、これからも協力してくださることをお願いしたい。歯科用品商組合と技工士会は第1回デンタルフェアから会場の設営・撤去作業に献身的に参加協力してくれている。またこの設営・撤去には、会員の抱える技工士で技工士会に加入していない方も会員の好意で派遣されている。歯科衛生士会はブラッシング指導・フッ素塗布のコーナーで活躍し、歯科衛生士学校の生徒たちに良き手本を見せてくれている。ところで沖縄歯科衛生士学校の生徒たちは、常にデンタルフェアの花として、会場で精一杯の活動をしている。彼女達の参加があったからこそデンタルフェアは今日の盛況を見ることができるのである。彼女たちを指導する学校の先生方の苦労も大変なものであろう。素人で入学して2ヶ月足らずで、良くぞあそこまで生徒を鍛えて、デンタルフェアに送り出してくれている努力には頭が下がる。また県歯事務局、南歯事務局の職員の方々も、受付、備品等の整備その他で、頑張って頂いている。職務と



平成九年　子どもも大人も一所懸命

はいえ、本当にありがたい事である。

デンタルフェアは長年、個々の会員や多数の方々の協力によって運営され、発展してきた。今後も世の中の情勢を見極めながら、時代に合った歯科保健啓蒙活動を繰り広げていく必要があり、その責任は我々歯科医師会の会員が担っているのである。20世紀が終わろうとしている今に至っても、相変わらず学童生徒の齲蝕罹患率は90%を下らず(乳幼児は60%台)、デンタルフェアが始まった頃の齲蝕罹患率をどれほど改善できたかと問われると、答えに窮するところであるが、少なくとも悪くはなっていないことが救いであろう。ある先輩から聞かされたことであるが、「公衆衛生の啓蒙活動というものは、自分の生きているうちにその成果を見られるものは極僅かである。何十年もかかって初めて、世の中は変わってくるのだ。」という、気の遠くなる話がある。21世紀において、どのような歯科保健が展開されるか、その鍵を握っているのは、やはり地域の歯科医師会である。歯科医師一人がいくら頑張っても社会を変えることには限界がある。しかし微力な我々が集まって作った団体(歯科医師会)が動けば、社会も徐々にそれに反応してくれるのである。(社)南部地区歯科医師会がどのようなビジョンをもって21世紀の歯科保健を押し進めていくか、我々が考えるためにに残された時間はあと僅かだ。

平成10年(1998年)10月



デンタルフェア　良い歯の表彰　記念撮影



小禄会場　相変わらずの長蛇の列



デンタルフェア　8020 表彰



デンタルフェア　琉大生による人形劇

b.第14回デンタルフェア オリエンテーション

主催　（社）南部地区歯科医師会
日時　平成2年5月29日　（火）
場所　沖縄県歯科医師会館講堂

○ 司会（公衆衛生担当理事 山川修）　始めに開会の辞を副会長にお願いします。

○ 副会長（新城啓和）　先生方には診療でお疲れのところ、また月末で保険の請求でお忙しい中をご出席ありがとうございます。先日文部省が発表した学校保健統計調査では、むし歯の罹患率が幼稚園児で80.8%、小学生で90.34%、中学生で90.43%、高校生94.15%と高率となっています。むし歯の処置率は小学生では半分以下、高校生でかろうじ52%でほとんどの子ども達は処置を受けていない状況です。かなり時間はかかると思いますが、我々が組織として公衆衛生活動（デンタルフェア等）を継続的に行っていくことにより、子ども達の口腔内状況も改善されるのではないかと思います。
今日のオリエンテーションにおきましても、先生方のご意見を拝聴し、改善すべきところは改善してより良いデンタルフェアにしていきますので、ご協力お願いします。ただ今からデンタルフェア・オリエンテーションを行います。

○ 司会　続きまして会長にご挨拶頂きます。

○ 会長（高江洲正勝）　本日はお疲れのところありがとうございます。これまで県歯のもとでリウボウが14回、マチナトショッピングセンターが4回目ということで、公衆衛生活動の「歯の衛生週間」をかなり重要視して活動して参りました。しかしデンタルフェアの歴史が沖縄県に与えた影響というものが若い先生方に理解できていない面もあるのではないかと思いまして、今日のオリエンテーションを持った次第です。担当理事が支部を回ってデンタルフェアの協力依頼をお願いしています。その中でマンネリ化しているのではないかとか色々な意見を担当理事は聞いているようです。

事業といいますのは、過去から継続して一生懸命やってきたので、マンネリ化とかいう意見が出るのです。何もしていなかったらマンネリという言葉は出てこない訳です。ただ支部会等の意見を聞きましても確かにデンタルフェアの価値は会員の先生方、執行部、そして県民の皆様から認めてもらっています。また歯科医師会のデンタルフェアそして南歯でやっている那覇市学校歯科保健大会は、医師会の先生方からかなりの評価をいただいております。会員数が少ない時には、まとまって地域医療のためにやらなくてはいけない場合は、一致団結して事業ができました。会員が200名を超すようになるといろんな会員の意見を聞きそして合意を得ることが必要になるかもしれません。ですから今日、このようにお集まり戴いて、デンタルフェアの意義、先輩方が携わってきた今までのデンタルフェアに関してのご意見を拝聴し、そしてこれから進むべき道を考える機会をもてたことは、非常に意義あるものだと思います。先生方は冬の時代で厳しいとか、お互いの業界は厳しいと言いますがこれは事実だと思います。ただ専門団体として歯科を通して地域医療に貢献できなかったら存在価値はあり得ないだろうと思います。厳しい中で会員が協力し、地域医療に貢献することは専門家としてやるべき使命だと思います。それを全うしていけば将来は、自分の子どもや孫が歯科医になった時に、今自分達ががんばった歯科界に対する貢献は必ず評価されると思っています。取り巻く環境は厳しいかも知れませんが、先生方にはぜひ歯科医師としての自覚をもって戴いて、専門団体としての活動を寄り一層協力してやっていかなければいけないと思います。今日は先輩方から貴重な御意見も聞けます。その後に先生方の忌憚や遠慮のない御意見を頂き、このデンタルフェアの在り方、歯科医師会の在り方を先生方と一緒にまとめていきたいと思います。

○ 司会　オリエンテーションの趣旨説明を専務理事にお願いします。

○ 専務理事（太田正昭）　会長のお話にもありましたが、先輩の先生方のお話をいただき、その中から新しいデンタルフェアの在り方を模索しようということでこのオリエンテーションを企画しました。第1回デンタルフェアの昭和52年に会員数は県歯で150名、南歯で97名、今現在県歯が310名程度になっていますので約半分の先生方で発足しています。南歯も190名程度になりましたので当時の97名からすると約倍、発足当初のエネルギーが倍の先生で逆に失われているかも知れません。15回目となるとリウボウの会場も久茂地の再開発ビルに移転します。継続していけばリウボウの会場が3倍の規模になる。そうするとイベント自体再認識しなければならない事態になるのでこれを機にオリエンテーションで何か方策ができればということです。諸先輩のご証言を頂きながら若い先生方に充分納得して戴こうという企画です。高良政勝先生、大山日出男先生、渡口進一先生、下地規一先生、山田勲先生、中村義宣先生の先輩方にお話頂きますがその中から何かお気づきになったことがあれば、是非次回のデンタルフェアに向けてお話頂きたいと思います。

○ 司会　次は歴代担当責任者によるデンタルフェア四方山話です。デンタルフェアをやり始めた頃の

爆発的なパワーを若い我々が引き継いでいかなければなりません。沖縄での歯の衛生週間の形はどのようなものであるか、先輩からお話を受けながら新しい活動を見つけたいと思います。まず第1回デンタルフェア（昭和52年）責任者高良政勝先生にお願いします。

○ 高良政勝　デンタルフェアは毎年恒例となり、今はたいした事無くやっていますが。当時のデパートを借りて対社会的なことをやるのは大変でした。昭和51年から下準備をし又吉達雄先生がリウボウ側との根回しをしていました。3月から5月まで計19回の会合を開きました。最初ですから何もなく、パネルなどはどういうものを作っていいのか分かりません。それで大阪で行われたときの写真を送ってもらい参考にしました。実際はなかなか上手くいかず、担当の先生方にパネルの原案作りを宿題としました。2回目の会合で名称を決めて3回目に資料を揃える予定でしたが、資料を携えてきたのは大山日出男先生のみでした。その後皆それぞれに手書きで資料を作り、それから看板屋さんに頼んで仕上げました。第1回目のデンタルフェアのポスターは私の所の衛生士が書いたものを使いました。ところがリウボウが会場を貸すのを渋りはじめました。医者とか弁護士の催し物は本当につまらない、理屈だけでお客が集まったためしがないということで、「半分は先生方でお使いください。半分はバーゲンをします。バーゲンにつられてお客がくるはずですからその流れがデンタルフェアにも行くでしょう。」との話。我々の企画では全フロア必要でしたので何回も診療を休んで足を運び、ようやく全フロアを借りることができました。このようにリウボウの反対を押し切ってやりましたので、お客を是非集めなければいけないと、伊礼迅先生と中心にそれこそ一生懸命に策を練りました。また費用を計算しますと最低限150万円はかかるのに予算は20万円しかない。県歯会長の玉城信徳先生からは「ここまで来て後に引く訳にはいかない。沖縄県歯科医師会は金のことは言わないからジャンジャンやれ」と激励してもらい毎晩12時まで1週間準備してやりました。この間の事情は日本歯科医師会雑誌昭和53年6月号に掲載されています。第1回目は会員の先生方が智恵と時間を出し合ってやり遂げました。例えば渡口進一先生は紙芝居の舞台を、スタッフ全員で鋸やハンマーできれいに作りました。ブラッシングコーナーの鏡付の洗口台は宮城正廣先生がお父様や弟さんと一緒に作った物です。数え上げればきりがないのですがほとんどが手作りでした。第1回目はレントゲンコーナーがありました。金城竹治先生が担当で写真に写っています。レントゲン撮影をして乳歯列を写し顎骨内にある永久歯の説明がしやすいのです。直接子ども本人のプラークを取って位相差顕微鏡で見せて動機付けするように、乳歯がむし歯になると永久歯がむし歯なることをパノラマを撮って「これが貴方の子どもの口です。乳歯がありその下にこのように永久歯があります。その乳歯がむし歯になると永久歯がむし歯になります。」と説明しやすいのです。ところが2回目以降レントゲンコーナーはなくなりました。そのわけはレントゲンを置くということは放射線を使うといくことになるので診療所の開設届けを県庁に出さないといけない。レントゲン機材を運び込んだ状態で届を出さないいけないという事がわかって非常にあせって県庁に届を出した覚えがあります。そういう色々煩雑なことがありまして、あの時はどうしようもないということで、ある程度県庁も目をぶってパスさせてくれたような点もありました。今考えてみましてもやはりレントゲンコーナーはあってもいいんではないかと思います。「デンタルフェア」という名称は第2回目に決めましたが、名付け親は与那城智先生です。

○ 司会　続きまして第２回、第３回の責任者大山日出男先生にお話を伺います。

○ 大山日出男　もう月日がこんなに流れたのかと改めて昔を思い起こしています。あの当時はまだパネルも少なくもっと追加しようと会合を持ちました。その頃ヤクルトですか乳酸菌飲料が世間で槍玉にあがっている時期でして、それをパネルにするかもめました。その甘味食品で生活をやっている企業もあるし、公の場所で我々学術団体がそうおおっぴらに攻撃するのは穏当じゃないということで、結局飲み方を注意しようだとか穏やかな書き方に変わった記憶がございます。その時の私は４月に県歯の執行部にはいったなりたてで、会のゴルフの帰りに高良政勝先生がよって来ました。「これから俺に付き合ってくれ」「どこへ行くんだ」「リウボウへ行く」リウボウ側の担当者と何回か打合わせをしましたが、リウボウ側は非常に協力的でした。第１回目で予想以上に人が集まってくれたのでそれだけお金が多く落ちるものですから、リウボウとしては何回でも多くやってほしいという意向でした。できるだけ宣伝しようということで沖縄のNHKで６時４５分から始まる地方番組に私が出ることになりました。資料を事前に渡していましたらパネルをきれいに作ってくれており、アナウンサーとの対談という形で、デンタルフェアを実際に行っているものを取材し、それを流しながらやった思い出があります。

昭和54年高江洲旭先生が南歯会長の頃に、那覇市から50万円の寄付を頂くことになりましたが、寄付ですと前もって予算化することができないのでその対応で苦慮しました。これは補助金の形で今でも続いています。現在は100万円にしようと交渉中らしいですがいいことだと思います。

私が一番難儀した記憶は歯ブラシを集めることです。予算がないためライオン、サンスター、コルゲ

ートとかから寄贈してもらいました。後の渡口先生の頃は予算化されてそういうことはいらなくなったようです。私は将来のやり方としてもっとより小さな単位でデンタルフェアをやればもっと歯科衛生への住民の理解が浸透するのではないかと考えています。数年前までは受診率が5%だったのが今では6%を超えているということは、会員がだいぶ増えたせいもあるでしょうが、デンタルフェアその他我々が地道にやった成果だと思います。

○ 司会　14年前の3才児健診におけるむし歯の罹患率は88.2%、去年は68.5%となっており13年間で20%近い低下がみられます。次に第6回から10回までを担当した渡口進一先生にお願いします。

○ 渡口進一　人は非常に因果関係がありまして、私が歯科医師会に入りましたのは15年前で、公衆衛生・広報担当理事の高良政勝先生から公衆衛生委員を命じられ、その翌年からデンタルフェアが始まりました。当時は同好会が中心でした。第1回から第5回までは入場者はうなぎのぼりでしたが、その後困ったことに入場者が少なくなってきました。それで何か良いアイデアはないものかと色々考えてみました。私と新垣元洋先生、中村義宣先生とで公衆衛生のメンバーを組み、最初に報道関係にあたりました。側面から色々なことをしました。飲みに行ったりいろいろな事もしました。

その結果RBCテレビで1時間の番組でデンタルフェアを中継したのです。当時テレビで歯科の1時間番組はなかなかないのです。これは何百万円というコマーシャルに匹敵すると言われました。

報道関係を中心に置くということは、我々の使命です。会場で何人診たかではなく、どれだけ報道関係が動くかということを重要視していましたのでどうにか入場者も維持できたと思います。平日の午前中は皆さんなかなか来てくれないので第7回では幼稚園児を動員しました。でも普通の動員ではないのです。幼稚園に1～2ヶ月前から交渉して、担当の公衆衛生委員がそこに行き基本的な予防知識を教えるのです。そこでリウボウに来たときに色々と演技をしてもらいます。幼稚園児の演技ですから、我々素人から見ると面白くないかもしれませんが、お母さん方は一生懸命なんです。多い時には幼稚園児の動員で親子一緒で千名の場合もありました。混雑してくると貧血気味の人が出てくるので今後も責任者の人は気をつけてください。ほとんどは少し寝かせれば回復しました。

デンタルフェアですごく嬉しい事が二つありました。一つは会員全員が歯の衛生週間で何らかの形で参加していることです。これはとても意義のあることであり、この形態は他府県では見られません。もう一つは会員の親睦です。普段は別々の仕事場で働いている会員や歯科衛生士が一つの場所で活動する事によりお互いを参考にしたりして親睦の輪ができるのです。これを私はとても楽しみにしています。

私はデンタルフェアの全体的なことはつまり全県的に1万人の動員がありましたとか、こんな大きな行事をしましたというのは県歯がやり、開催場所は大山先生が言われた様に地区の中で細分化して各地区の役割としてやることが良いと思います。会員の身近なところでの開催がやはり実のあるデンタルフェアになると思います。

○ 司会　デンタルフェアに協力する会員及びスタッフにもし手当を出すとしたら南部だけでも500万円では足りません。それを私達は無料でやっています。改めてこのデンタルフェアはすごい流れなのだと感じています。では歴代担当者の話の最後に第11回を担当した下地規一先生にお願いします。

○ 下地規一　第10回の時にデンタルフェアを今後どうするか、マンネリ化しているので10回目で終わった方がいいのではないかという議論がかなり出てきました。渡口先生と私達が主張したのは継続は力なのだということです。高良先生を初め歴代の先生方が担当してきて、ここまで大きくしてきたんでこの灯を絶やしてはいけないということで10回目も成功に終わったのです。11回目になるとまた同じ問題が出てきました。この時私はマンネリ化を打破するためにはどうすれば良いかを考えました。幼稚園の動員にしてもかなりマンネリ化していましたので、大山先生が言われた様に各支部単位での構成を模索していました。それで浦添が出てきたのです。今年は首里ができるということで、将来の構成としてはやはりきめ細かな地域でのサービス、奉仕ということが必要になると思います。11回を終えてから私が県歯に出した資料があります。それには

①12回目からの主催者は県歯であり、その実行の主管を各地区にお願いする
②デンタルフェアを歯の衛生週間の一環として位置付けることができる
③全会員とそのスタッフ全てが参加するスケールの大きな例は他府県においてもあまり見ることができない
④先輩方がゼロの状態から現在のような形に作り上げたものを壊してしまうわけにはいかない
⑤「デンタルフェア」イコール「歯の衛生週間」ということになっている
⑥県庁サイドでも歯科医師会のデンタルフェアをかなり重要視して県庁環保健部での記者会見では必ず歯科医師会が同席してデンタルフェアの事についてアピールする場を設けている

事などが記されています。

私は12回目以降に定例にしたのは次の事柄です。県歯としてはメイン会場の事業、式典等を行い、全県レベルでのポスターやチラシとかを作り会員へ配布し、

「親と子の良い歯の表彰」や「母と子の良い歯の表彰」をやり、各地区へは補助金を配布する。そして細かい内容たとえば歯ブラシとかフッ素を購入したりすることは全部各地区へお任せする。地区で獲得した行政からの補助金も各地区で使って頂く。つまり実行の主管は各地区でやるスタイルをお願いしたわけです。

最近ではデンタルフェアは初めてというお客さんは少なくなってきました。また去年はむし歯があったのに今年は無いと言われたとか、かなり色々なことを言う人が出てきました。フッ素を塗るのに歯医者に行くとお金を取られるから、毎年デンタルフェアに来て塗るのだという人もいます。これらを考えますとそれだけ県民の間にデンタルフェアが定着してきたのだと思います。フッ素の無料塗布、歯ブラシの無料配布もひとつの客寄せになっていますが、この無料の方法をいつまで続けられるかという問題もあります。その意味からも金銭的な負担は行政にできるだけもっていただき、人的な負担は歯科医師会でもつという形が理想だと思います。(要約 山川修)

以上オリエンテーションの主要部分を掲載した。デンタルフェアの萌芽の頃の、先輩方の様々なご苦労が良くおわかり頂けたと思う。若い先生方の中には、デンタルフェアを単に義務的にこなすものと勘違いされている方も居られる様である。デンタルフェアの初期の活動は、我々歯科医師の自発的動機・社会に対する責任感から生まれたものであり、決して誰かに強要されて始まったわけではない。これは今現在も変わっていない。我々の地道な努力により、沖縄の子ども達や大人の方々が、口腔内の健康を保ち、ひいては全身の健康を増進し、長寿県沖縄が更にレベルアップできれば、この上ない幸せである。オリエンテーションにもあった様に、これからは地域密着型のデンタルフェアとして、南部一帯をカバーできる事をめざし、遅々とした歩みではあるが、全会員の理解と協力を得て、積極的に地域歯科保健を展開していきたい。



第4回　忙しい中のひととき



1987年　デパートリウボウ(14年間もお世話に)



1997年　メニューも登場



デンタルフェアでも"8020"健診

[2] 沖縄県口腔衛生センターへの協力

沖縄県歯科医師会では昭和50年9月県歯会館建設を機に、心身障害者の歯科治療、保健指導を目的として、口腔衛生センターを会館内に開設した。当初は会員48名による輪番制で毎週火曜日・木曜日に、施設入所の心身障害者を対象に、歯科治療が開始された。しかし、障害者治療が軌道に乗るにつれ重度心身障害者に対しても歯科治療の要望又は必要性がでてきた。歯科治療は特に気道の入り口を扱う事から、安全かつ健常者と同様な治療内容を行う為にも昭和54年6月から厚生省派遣医制度と県行政の協力のもとに全身麻酔下に於ける歯科治療が開始された。

麻酔医は日本歯科麻酔学会より歯科治療担当医は東京慈恵医科大学歯科学教室及び神奈川歯科大学障害者歯科学教室の全面協力のもとに派遣して頂きた。

当初は年4回(2月、6月、9月、11月)行われ、また昭和60年度からは宮古、八重山地区での全身麻酔下歯科治療も開始された。昭和63年から年2回(2月、6月)に減ったが、県生活福祉部で患者の掘り起こしをして頂き希望者を県歯科医師会が術前検診及び治療計画を会館内の歯科口腔センターにおいて約1ヶ月に渡り集中治療を行い、また術前術後の管理は牧港中央病院の御協力のもとに術前、術後入院とで計2泊3日の日程で行ってきた。これまで宮古、八重山地区を含めて19年間に延べ1088人の患者を一度の事故もなく全身麻酔下治療を実施してきた。

重度身体障害者の多くは意思表示が充分でなく治療に非協力的で極度に緊張したり、治療代の上で一定の姿勢を保つ事が困難な場合があり、また自分では口腔を衛生的に維持、管理することの困難性から多数の齲歯に罹患している例が多い。この場合頻繁に通院して治療するのは患者としても、苦痛を伴う事が多いため、このような症例に関しての全身麻酔下における歯科治療は健常者と、ほぼ同様な治療を受ける事ができ、かつ安全で多数の歯を一度に治療できるメリットがある。そして、平成9年12月現在でこれまでの障害者歯科治療に携わってきた医療担当者の延べ人数は10.542人で、治療した患者延べ人数20.714人になった。

南部地区歯科医師会では口腔センター設立当初からこれら全身麻酔後の患者予後観察及び一般障害者の歯科治療に対する、県歯科医師会の協力要請に対し全面的に協力してきた。今後、障害者歯科治療はもちろんのこと平成8年4月よりスタートした休日診療等の口腔衛生センター事業に一層協力していきたいと考えている。

[3] 沖縄歯科衛生士学校への協力

昭和49年まで、沖縄県には歯科衛生士を養成する学校がなかった。昭和50年に、沖縄県歯科医師会館が建設され、その中に沖縄歯科衛生士学院と沖縄県口腔衛生センターが設立された。沖縄歯科衛生士学院は、沖縄県認可の各種学校であり、なおかつ歯科衛生士国家試験受験資格を有する教育機関であった。わざわざ県外に行かなくとも歯科衛生士の資格が取れるようになったことは、会員全員が待ち望んでいたことである。初代学院長は登川正樹先生、副学院長に玉城信徳先生、教務主任は高橋清一郎先生であった。昭和50年4月に開校式ならびに第1回入学式が挙行された。

それ以前の昭和48年、南部地区歯科医師会の与那城勇会長時代に、日本歯科医師会から沖縄県歯科医師会に、甲種・乙種の歯科助手認定講習会を地元で開催し、現在会員の診療所に勤めている従業員に、歯科助手の認定を与えてほしい旨の依頼があった。それが各地区におろされ、南部地区歯科医師会では4月7日理事会の議題として「歯科助手認定講習会実施に関する立案作業」が採り上げられ、この件に関し南部として対応することとなった。4月19日には講習会用テキストの印刷依頼がなされた。講習会の開催場所は4箇所ほど調べた結果、那覇市医師会準看学校教室に決まった。昭和49年1月21日には講師の役割分担、スケジュールが決定した。講師には、伊礼迅・又吉達雄・西平守廣・中里治通・銘苅清・上地健一・高良政勝・山田勲・兼浜政勝・阿嘉昭宗・高江洲旭・与那城勇の各会員が委嘱された。2月28日の開講式には、登川正樹県歯会長、村田専務、ほか講師団が出席し、引き続き講義が行われた。講習会は3月3日までの土曜日、日曜日に開催され、計8回実施された。その後、県歯が歯科衛生士養成所(学院)を設立することになり、歯科助手認定講習会はなくなった。しかし南部の助手認定講習会で活躍された先生方は、歯科衛生士学校の講師の一員として、南部から派遣されることになった。

昭和58年沖縄歯科衛生士学院第1期の講師として南部地区歯科医師会から派遣された会員は次の20人の方々である。

解剖学	西平守廣・中里治通・知花朝敏 中村義宣・新城彬明
衛生学	兼浜政勝・宮里良雄
組織学	比嘉良有
細菌学	上地健一

薬理学	高江洲正勝
生理学	又吉達雄・城間猛
予防学	山田勲
歯科臨床概論	伊礼迅・高良政勝
社会保健実務	瀬底正男
診療補助	嶺井浩・銘苅清・阿嘉昭宗 友利政三

基礎学科・臨床学科においては、平日の診療時間を割いて学院（現在は学校）まで足を運んで講義をし、臨床実習では会員の診療所で診療補助の講義・実習を受けている。昭和62年までは修業年限が1年で、毎年32人の歯科衛生士が誕生した。昭和63年からは学院から沖縄歯科衛生士学校と校名が変わり、修業年限が2年となった。平成2年3月に沖縄歯科衛生士学校第1期生卒業式が挙行された。現在では毎年46人の歯科衛生士が卒業しており、南歯からは、40人の会員が講師として、沖縄歯科衛生士学校の運営に協力している。

Ⅳ.その他

ここでは他の項に納まらない南部の多彩な面を示す活動を整理した。まずは地区歯科医師会青色申告会であるが、これは県内五つの地区歯科医師会それぞれに組織されているものである。この上部組織が沖縄県歯科医師会歯科医師青色申告会連合会である。地区歯科医師青色申告会の役割は、各税務署と各会員との間の直接的な問題に対する対応であり、税務講習会等の開催による会員指導が主なものである。次に南部地区歯科医師連盟のことについてである。地区歯科医師会としては他にはあまり見られない組織である。強制加入ではないが、会員の理解と協力の上で成り立っている。以前は政治連盟として華やかに活動していたが今ではその活動内容も変わりつつある。また九州八市歯科医師会役員連絡協議会についてもその15年間の歴史に触れて見る。他県の歯科環境がどのようなものであるかを知る貴重な機会であり、また南歯の抱える問題の良き相談者の集まりでもある。以上3つの活動についてご報告申し上げたい。

[1] 地区歯科医師青色申告会

日本歯科医師会歯科医師青色申告会は、昭和46年青色申告制度開始の年にすでに発足しており、その後日本歯科医師会歯科医師青色申告会全国連合会として発展してきた。1983（昭和58）年12月13日には県歯による歯科医師青色申告会連合会発会式が行われた。

昭和59年9月18日南歯運営委員会において、北那覇・那覇地区歯科医師青色申告会規則及び運営細則（案）が承認された。この規則の第3条には歯科医師青色申告会の目的として次の様に定められている。「南部地区歯科医師会の会員を対象に歯科医業の特性に基づき青色申告を基本とする税務全般の調査研究及び指導を行い、もって適正な申告と医業経営の合理化に寄与することを目的とする」南部地区歯科医師会は管轄される税務署が北那覇税務署と那覇税務署の2箇所であるので、青申会もそれぞれに結成する必要があった。地区歯科医師青色申告会として、税務署との様々な折衝を行い、税務署に講師をお願いしての会員への適正申告の指導や情報伝達、他青申団体との交流を通しての歯科医師会の認知等の活動をしてきた。ここでは両歯科医師青色申告会の活動のあらましを振り返って見る。

☆北那覇地区歯科医師青色申告会

1984（昭和59）年1月25日北那覇歯科医師青色申告会発会式があり、本格的活動を始めた。だがその前年の1983（昭和58）年2月9日にはすでに歯科医師会として税務講習会を開催している。以後この講習会は毎年開催されている。毎年恒例となっている会務としては、税務署長異動に伴う表敬訪問、税務署人事異動歓送迎会（北那覇税協主催）、北那覇税務署管内納税表彰式参列、「税を知る週間」パレード参加（事務局）、税務署文書封入作業（事務局）等がある。北那覇歯科医師青色申告会として加入している団体は次の通りである。

・北那覇税務団体協議会：昭和61年12月4日設立総会
・北那覇青色申告会：1992(平成4)年9月25日10周年記念祝賀会。平成7年5月12日社団法人設立総会
・北那覇法人会：平成9年5月15日創立15周年記念祝賀会
・北那覇民間税務協議会常任理事会：昭和67年7月13日のみ
・北那覇税協四者定例会（税務署・税理士会・北那覇税務協商工会議所及び商工会）

以上の団体に於ける会合および恒例業務は、これまでの14年間で150回以上に上る。また夫人部の活動も次のように行われている

・平成3年11月13日北那覇税務署に関する夫人部座談会（南歯夫人部代表3人）
・平成4年11月13日北那覇青申会　「婦人と税」座談会（渡口節子・赤崎貞子）

☆那覇地区歯科医師青色申告会

1984（昭和59）年1月23日那覇歯科医師青色申告会発会式があり、本格的活動を始めた。この地区においてもすでに1983（昭和58）年2月10日税務講習会が実施されており、以後毎年開催されている。毎年恒例となんている会務としては北那覇と同様の、那覇税務署長異動に伴う表敬訪問、税務署人事異動懇親会、那覇税務署管内納税表彰式があり、また那覇ならではの各種懇談会がある。たとえば那覇青色申告会との役員懇談会、那覇税務署統括官との懇談会、那覇税務署との懇談会等が毎年行われている。また那覇税務団体協議会、那覇地区青色申告会にも加入して活動している。平成5年・6年には国税モニターに新垣元洋先生に指名され、平成7年・8年には太田正昭先生、平成9年・10年は安村庸先生が指名されている。

☆振替納税協力

北那覇・那覇歯科医師青色申告会が強力に推し進めている事業として振替納税がある。既存の会員はすでに90％が振替納税を行っており、新入会員に対しては入会時のオリエンテーションで説明し、振替納税への協力をお願いしている。

☆沖縄国税事務所管内税務指導者協議会

昭和46年から国税事務所管内税務指導者協議会が開催されている。これは日本歯科医師会歯科医師青色申告会全国連合会が行っているもので、沖縄では1985（昭和60）年1月18日に昭和59年度沖縄国税事務所管内税務指導者協議会が開催され、その後毎年開催されている。協議会は内部協議に始まり、各地区における税務の現況報告と諸問題、医業経営の合理化と会員指導、最近の税務調査の件数とその内容、各地区青申会の事業計画及び予算が報告、協議されている。次いで、日歯青申連嘱託税理士による講演がなされ、「歯科医業経営内容調査検討資料」に基づいてモデル地区・適正申告推進モデル地区・大都市地区における統計の分析結果の説明、暦年資料として昭和52年度からのデータが載っている「税務・経営関係資料」によって様々な税務関係の説明が行われる。その後に国税事務所との協議となり、国税事務所の税務指導方針について及び税務諸問題と会員指導についての協議がなされて閉会となる。

☆表彰受賞者

地区歯科医師青色申告会発足以来、積極的に会の活動を推し進めた次の方々は、税務署及び税協から表彰を受けられた。この会が社会から認められるようになったのは、このような方々の地道な努力があったからであり、私達もその努力に報いる様、適正な節税・納税を行っていかねばならないだろう。

平成5年11月15日	納税表彰式	北那覇税務署長表彰：友利政三
平成8年11月25日	北那覇税協 第10回定期総会	永年役員表彰受賞：友利政三・高江洲正勝 新城啓和
平成9年11月12日	納税表彰式	那覇税務署長表彰：玉木史朗・新垣元洋
平成10年11月11日	納税表彰式	那覇税務署長表彰：太田正昭・長濱正

☆那覇地区歯科医師青色申告会役員

	昭和59年～	昭和63年～	平成3年～	平成6年～	平成9年～
会長	新垣元洋	玉木史朗	玉木史朗	玉木史朗	新垣元洋
副会長	宮城正廣	太田正昭	新垣元洋	新垣元洋	太田正昭
専務理事	仲里正博	安村庸	太田正昭	太田正昭	長濱正
理事	赤峯悦生	新里叡	長濱正	長濱正	安村庸
理事			安村庸	安村庸	友寄景淳

☆北那覇地区歯科医師青色申告会役員

	昭和59年～	昭和63年～	平成3年～	平成6年～	平成9年～
会長	友利政三	友利政三	友利政三	友利政三	高江洲正勝
副会長	高江洲正勝	高江洲正勝	高江洲正勝	高江洲正勝	新城啓和
専務理事	新城啓和	新城啓和	新城啓和	新城啓和	山川修
理事	伊野波盛功	高宮城實之	山川修	山川修	湖城秀久
理事			塩浜康良	富島修	豊岡幹世

[2] 南部地区歯科医師連盟

南部地区歯科医師連盟の流れ

☆昭和63年2月29日　拡大理事会において「政治連盟設置の件」審議
☆昭和63年3月31日　臨時総会において第4号議案として
（1）南部地区歯科医師政治連盟の設置（提案理由）
（2）南部地区歯科医師政治連盟規則
（3）政治連盟会費の徴収に関する件
を呈上可決

(1) 南部地区歯科医師政治連盟の設置（提案理由）
本連盟は会員相互の協力により歯科医師の業権の確保、我が国の医療体制に対する民主的政治力を拡充し、憲法に則る国民の健康に関して文化的生活を確立することを目的として次の事を行う。
①会員に対する民主政治教育
②連盟の目的達成上必要と認める場合は選挙に際し候補者を推薦することができる。
(2) 南部地区歯科医師政治連盟規則（割愛）
(3) 政治連盟会費の徴収に関する件
・会費は月額500円とし年額6,000円を納入する。
会費及び負担金の納入方法は（社）南部地区歯科医師会に準ずる。
☆昭和63年5月27日　拡大理事会にて「南部地区歯科医師政治連盟役員選任の件」審議
☆平成7年3月29日　選挙規制法の改正により、連盟大会において名称変更し「南部地区歯科医師連盟」となる



昭和55年参議院選挙に向けて（関口けいぞうを応援）

[3] 九州八市歯科医師会役員連絡協議会

本協議会は九州各県県庁所在地の八つの歯科医師会で構成され、九州各地で共通する諸問題や、地方自治体との関連など、各市歯科医師会が相互の向上の為に寄与することを目的として発足した。原則的に年1回開催し、輪番制の順位により当番市を定め、当番会長は九州歯科医学大会開催時に当番市に役員を招集し、その会議の議長となり、副議長は時期開催会長がなる。協議会に出席する役員は原則として、会長・専務理事とし、その他必要であれば各市歯科医師会会長が定めて良いとなっている。沖縄では過去2回開催されている。これまで各協議会に南部地区歯科医師会が提出した議題を紹介する。その時折の南歯の抱える問題が浮き彫りにされていて興味深いものがある。



昭和58年度 第1回九州八市歯科医師会 役員連絡協議会



第10回九州八市歯科医師会 役員連絡協議会　　平成3年11月29日　担当　沖縄県南部地区歯科医師会

九州八市歯科医師会役員連絡協議会提出議題(南部地区歯科医師会)

第1回 於福岡 (S58・7・9)	1.診療所排水と下水道汚染の問題 2.歯科医師会会員と非会員の構成比及び相互関係の効果的展開の在り方 3.九地連沖縄学会「青い海　南の島の学会へ」
第2回 於沖縄 (S59・5・10)	1.青申会の有無、その活動状況のメリット、デメリットの点
第3回 於福岡 (S59・11・16)	1.受診率アップの為に、どのような活動を行っているか 2.問題のあるデンティストの入会の取り扱いについて 3.選挙に関してどの程度まで関与しているか(衆・参選挙、県知事選挙、市長選挙、陣中見舞等)
第4回 於大分 (S60・10・25)	1.生活協同組合の有無及びその資料について
第5回 於佐賀 (S61・10・25)	1.歯科医療緊急時における救急医療の対処法 2.会の方針及び展望を、若い会員に周知させ関心をもたせる活動方針について
第6回 於長崎 (S62・10・23)	1.地域に即した活動及び便利性の観点から(郡市所在地)支部として本会から独立分離する場合の対応策 (例)共済の分割可能か、とすればその方法 2.学校歯科医の配置方法と委嘱期間について
第7回 於熊本 (S63・10・28)	1.総会の持ち方(予算、決算)
第8回於鹿児島 (H1・10・27)	1.県内地区異動のため入会する会員の入会金は新入会員と同一額か 2.退会時(長期会員)に共済金他慰労金の類の割り戻し制があるか 3.県歯会員資格喪失者の地区会員身分取り扱いについて ——同時喪失か、資格維持か、その対応について—— 4.共済積立金運用について 1)会員への融資制度があるとすればその年間における予算額と一人当り額 2)原資充実の為の具体的な運用方法について単年度運用か、長期運用か、その種類について
第9回 於宮崎 (H2・10・26)	1.一人医療法人設立に伴う分院開設に対する会としての対処法について 2.退会後の再入会に対する入会金、通算期間の処遇について
第10回 於沖縄 (H3・11・29)	1.貴会における会費引き去り業務について具体的にご教示ください 1)口座引去様式一覧表(専用用紙型式)見本をご提供ください 2)上記用紙に手書き部分の表示があればお加えください 3)上記につき銀行委託作業の範囲 4)これらの作業がコンピューター化されているか、検討中か 2.高校歯科検診の対応方法と検診料の収受についてご教示を 1)校医の責任において全部任せているのか 2)会で検診班を結成して校医に託しているか 3)その他の方法 4)1)の場合の検診料の収受 2)の場合の検診料の収受—(校医、歯科医師会、各検診者)
第11回 於福岡 (H4・10・23)	1.成人歯科健診の施行状況(下記事項)について 経緯:発足の事情(行政要請か歯会活動か)、補助金の有無 方法:検診人数／回数・料金(検診範囲)、場所(施設検診・集団検診) 実績:年間受診者数、波及効果
第12回 於大分 (H5・10・15)	1.県歯代議員(郡市選出)の選出方法について (選出方法の規定条文がありましたら添付頂きたい)
第13回 於佐賀 (H6・10・21)	1.保健所法改正に伴う(母子保健事業)3才児健診の対処法について 2.各市町村との協議会開催などあれば、その構成委員並びに今後の指針など協議内容についてご教示ください
第14回 於長崎 (H7・10・27)	1.3才児健診への対応準備状況について
第15回 於熊本 (H8・11・8)	1.決算資料(平成5・6・7年)の提供について
第16回 鹿児島 (H9・10・24)	①人口 ②会員数(会員種類内訳)非会員数 ③組織図(委員会組織も含めて) ④地域歯科保健に関する事業内容(行政補助の有無とその額、歯科衛生士婦同費の有無とその額) ⑤域歯科保健に関する事業は全員参加方式か登録医制度か委員会の中で実施か ⑥行政や教育委員会などとの定例協議開催がされているか。あればその協議会名称とその構成メンバー
第17回 於宮崎 (H10・10・23)	1.保険に対する各歯科医師会での対応やその内容等の説明会・講習会(ケアマネージャー、摂食・嚥下障害)について 2.市教育委員会と共催で一般及び学校関係、歯科関係向けの『那覇市学校歯科保健大会』という講演会を毎年開催しているが、他県で同様な講演会をもっているか、その際の特別講師への謝金はどの程度のものかご教示いただきたい(本会では20万円)

第 2 章

南歯誕生までに至るよもやま話

［第一話］　沖縄の歯科医の元祖
［第二話］　美女金歯チルー
［第三話］　難産で生まれた沖縄県歯科医師会
［第四話］　ハーゼーク（歯の大工）と呼ばれた頃
［第五話］　兼業歯科医“縄張りがはっきりしなかった頃”
［第六話］　麻酔なしの抜歯
［第七話］　歯科医にかからずに済ます患者たち
——患者の立場からみた歯科医療史 (1)
［第八話］　模合と価格破壊
患者の立場からみた歯科医療史 (2)
［第九話］　1000人に2人しか入っていなかった健康保険
——患者の立場からみた歯科医療史 (3)
[第十話]　ウチナー養生
——患者の立場からみた歯科医療史 (4)
[第十一話]　歯科医院でも“ツケ払い”
——患者の立場からみた歯科医療史 (5)
[第十二話]　影の医療人“ヤッチュク”
——患者の立場からみた歯科医療史 (6)
[第十三話]　歯科医師会強制加入となる
[第十四話]　注射針は研いで使うものだった
[第十五話]　ある戦後史
[第十六話]　“アメリカ世”の地名
[第十七話]　歯科医軍作業に出る
[第十八話]　パンの講習会
[第十九話]　田んぼにヤミ市が立つ
[第二十話]　抜歯料金はタバコ5本分
[第二十一話]　機械油でテンプラを揚げる
[第二十二話]　二つの「沖縄歯科医学会」
[第二十三話]　孫の誕生
[第二十四話]　“矢面に立たされた医療人達”
[第二十五話]　南歯誕生
[第二十六話]　二足のワラジを履いた歯科医達——南歯人物伝——

[第一話] 沖縄の歯科医の元祖

今日ある南部地区歯科医師会(以後"南歯"と称する)の来歴を尋ねるには、その母胎である沖縄県歯科医師会(以後"県歯"と称する)の会史を、戦前は言うまでもなく、大正、明治までさかのぼり、会の沿革に一通り触れる必要がある。

初めて、沖縄県に歯科医院が登場するのは、20世紀に入ったばかりで、那覇と名護の間に電信が開通した年の1902年(明治35年)5月のことであった。26才の独身青年 楊(ヤナギ)長積が、首里区鳥掘の一角に開いた歯科診療所は恐らく新しい時代を象徴するものとして町の人々の話題に登った事であろう。



楊長積　昭和47年頃

時を同じくして、もう一名、大阪出身の松本和三郎なる人物も那覇区の久茂地で歯科医業を営んでいたという記録もあるが、彼については楊と交友があったかどうかも含めて、それ以上の事はつまびらかにされていない。しかし楊については1998年現在猶その次男、永井長秀(南歯会員)が健在であり、彼の口を通して、おぼろげながら楊の人物像と当時の状況が浮かび上がってくる。

楊 長積は1876年(明治9年)鹿児島県大島郡喜界村に生まれたが、大阪の歯科医院で書生として一時期を過ごした後、現在の東京歯科大学の前身に当たる高山歯科医学院に入学、24歳で卒業して2年後の1902年(明治35年)首里区鳥掘で歯科医院を開業した。旧姓は永井であったが養子に入った為、楊(ヤナギ)を名乗っていた。しかし、その後、1938年(昭和13年)に永井姓に復帰している。

次男長秀の記憶によれば彼は日常、和服を着用しており診療室でも和服の上から白衣を着ていたという。体格は小柄な方で5男3女をもうけるが、腕白だった長秀の目から見ると当時の御多分に漏れず"コワイ親父"でもあった。口数は決して多い方ではなかったが人望は厚く、晩年は県歯の会長を長期に渡って務め沖縄の歯科医第一号としてのみならず県歯の貢献者としても会史に留めおかれるべき人物である。ここで鳥掘にあった楊歯科医院について多少のスケッチを試みてみたい。

医院の入口には『楊歯科医院』と書かれた看板以外に、縦40cm 横60cm 位の立派な箱状の額縁が飾られている。中には朱色のゴム床製(当時の義歯床用材)の総義歯や金冠、ブリッジなどの実物見本が生々しく陳列されている。当時は識字率も低く、看板の字が読めない人も多くおり、また本県初めての歯科診療所という事もあって、彼がこの場所で何をするかという事すら一般には余り知られていなかった。それ故この様に視覚に露骨に訴える必要があった。その後に開業する歯科医師達もこれに倣ったが、後年県衛生課(武田課長在任当時)から禁止処分となっている。

さて医院の玄関先までくると、水の入った容器とひしゃくがおかれている。昭和15年に"裸足禁止令"が出されるまで沖縄ではかなりの人々が裸足で来院したので、医院内に上がる前に足の汚れを洗い流す為のものであった。引戸を開けて入ると、内部は外から来たばかりの眼には薄暗く感じられる。照明の類は一切見当たらない。電気がまだない時代だからである。県都那覇区(市ではなかった)でさえも電灯が夕方から一定時間だけ点るようになったのは、この後8年も経ってからの事であり、(その2年前に計画された電力会社は点灯申込み者が少な過ぎて失敗)医院の採光は全て戸口と窓に頼っている。この当時はコンスタントに自然の光を取り入れる為に北向きの窓を重視した。南向きの窓の場合は部屋が暑くなり過ぎ、東向きは夕方になると暗くなり、西向きは夕日が眩しくて朝は暗い。また二階に診療室をしつらえたのもやはり採光の事を念頭にいれての事であった。

畳敷きの待合い室の中央辺りにはきゅうすと湯飲みが置かれている。一日がかりで馬車や徒歩でやってきた地方の患者は此処で茶を飲んだり弁当を広げて番を待つ。診療室に入るとユニットの代わりに簡素な椅子と足踏みエンジンとよばれる人力の切削機具、それに薬瓶台などが冷ややかに患者を迎える。

この診療室には電力の事などのっけから念頭にないから、その後の歯科医院の様に停電のパニックには無縁である。このように人力車の時代の歯科医院の動力はやはり人力に頼る事から始められた。

[第二話] 美女金歯チルー

全ての先駆者にありがちな事であるが、楊の鳥掘に於ける開業も競争相手が皆無に等しかったのにも関わらず、必ずしも好調なスタートを見せなかったようである。

当時沖縄の一般大衆には歯を磨く習慣も見られず、又歯科に対する認識も育っていなかったので、生活にゆとりの無い大多数の人々の足を歯科医院に振り向かせるのは至難のわざであった。

それでも時には程遠からぬ所に居を構えていた尚侯爵が受診したりして医院の知名度を多少たりとも高めてくれた。尚侯爵来診時には従者の分も含めて2～3台の人力車が医院の前に横付けされる。その側には押す役目と引く役目の車夫がそれぞれ1台につき2名ずつ、うやうやしく待機しており、医院の前を通り過ぎる人々の目を引くには充分な効果があった。しかしこの地での開業に限界を認めたのか、楊歯科医院は半年そこらで那覇区上之蔵に移転する。そして5年後の1907年には更に天妃の善興寺の附近に移転する。この三度目の開業地は一見したところ目立たぬ一角であったが、楊はここの寺が農村の人々に人気があり参拝者が多い事に目をつけて選んだのであった。思惑通りに地方からの人々が参拝のついでに受診するようになり始めた。



チルーの様なうら若い娘達は前歯に金冠を装着して更に美しくなろうとした。

そしてその後、意外な事がきっかけとなり、患者が増えていった。1908年（明治41年）沖縄から325人の移民がブラジルに送りだされた。さらに2回目が1910年に出発するが、彼等は政府の指示で歯科治療を終了していないと許可が下りない規定となっていた。お陰で受診率があがった。

また余り遠くない所にあった遊廓"辻"のジュリ（芸妓）鶴〔チルー〕も歯科医院の宣伝に貢献してくれた。うら若い美女鶴の笑顔は愛らしかった。その彼女の上顎側切歯に楊が金冠を装着した所、彼女が微笑むたびごとに金色の光が口元で輝き、町の人々の注目を集め、以後、彼女は『金歯チルー』の愛称で呼ばれる様になった。そして彼女のファッションを追って楊歯科医院にも"金歯"目的の受診者が現れ始めた。銀合金は口腔内で黒変するのでニッケルクロム系のサンプラが導入されるまでの間は歯科用金属としては金合金しか用いられず、この頃から"ハイカラ歯"又は"ニコチカ"（ニッコリ笑うとチカッと見えるの意味）と呼ばれた"金歯"全盛期を迎える。その金冠も全部被覆冠（マル）から開面冠（窓開き）、更に窓をハート型にした冠などがそれぞれ好みに合わせて製作された。このような型からではあったが、沖縄の一般大衆の間にも歯科医院の存在が徐々に受け入れらていった。

[第三話]難産で生まれた沖縄県歯科医師会

歯科医師の全国組織「歯科医会」（後に「日本歯科医会」更に「大日本歯科医会」、「日本連合歯科医会を経て1926年日本歯科医師会」と改称）は1893年（明治26年）から既に機能しており、又県単位でもそれぞれの県歯科医師会が会を結成しつつあった。沖縄の方でも県歯結成の動きはあったのであるが会として当局から公認を得るために必要な10人の人数に達しなかったので成立には至らなかった。1915年（大正4年）2月発行の大日本歯科医会の会報に「開業歯科医10名に満たざる所」として青森、岩手、福井、島根、徳島、宮崎など6県と並んで沖縄の県名も記されていた。

それから歳月が流れ1920年（大正9年）楊が沖縄で初めて歯科を開業してから18年目にしてついに13人の会員を登録して沖縄県歯科医師会も設立認可を受けるに至った。発会の日の12月4日、2時から開かれた第一回総会の会場である那覇区天理教教会につめかけてきた会長佐々本義一、副会長の楊長積、理事の山城正忠、久高将旺、伊波孫兵衛、友寄英傑、真喜屋実彬等の会員の間ではこの日を迎えてどのような会話が交わされていたのであろうか？おそらく彼等が会設立の為にそれまで最も頭を痛めて相談しあったことは認可を得るのに必要な"数合わせ"ではなかっただろうか？当時同志が9人まで揃っていたものの、定員にわずか一人が足らなかった。医師会の方は既にこの6年前の1914年（大正3年）に設立されているのに、あと一人仲間が加わるまで、更に何年間か気長に待つべきか、あるいは他県と比べてこのままで果たして良いのだろうか……等々の議論も幾度か交わされたことであろう。思案の末彼等は当時内科や外科等の本業以外に歯科診療も行なっていた「兼業歯科医」とよばれる一般医師4人にも参加を呼び掛けた。これら助っ人4人も含めて13人の頭数が揃いこの日の総会に漕ぎ着けたのであった。手立ては如何にあれ、会が公認されねば歯科の存在が社会的にも認知されないし、またその啓蒙活動を初めとする歯科医師の対社会的な活動にも限界がある。4年前に県が主催した沖縄県衛生展覧会に歯科医師として個人的に参加

した経験をもつ佐々本はそのあたりの事も念頭に置いて県歯の設立を急いだのかも知れない。

その日は総会が終わると、6時から辻入口の料亭末広に会場が移され内務部長、警察部長、県病院長、医師会長などの要人や新聞記者等を招いてお披露目の宴が盛大に開催されて遅咲きながら遂に日の目を見た県歯は内外の祝福を受けている。

沖縄に初めて歯科医師会が誕生した翌年の大正10年、それまで「区」であった那覇と首里に市制が施行された。そしてここに人口6万の那覇市も誕生する事になる。

[第四話] ハーゼーク(歯の大工)と呼ばれた頃

1921年(大正10年)10月、那覇市の誕生に際しては県の新庁舎も落成し、呼び物の大綱引きが行われた。爆竹が鳴り響く中、なーふぁんちゅ(那覇っ子)達は祭り気分に沸き返った。その前年に出来たての県歯もこの機会に便乗して「ムシ歯デー」を開催した。更に翌年の1922年(大正11年)の那覇市衛生展覧会にも4日間にわたって口腔衛生に関する講演会が開かれた。県歯が設立されてからは組織として対応できるようになったので、今日のデンタルフェアの原形にも相当するこれらの歯科医師会の啓蒙活動も円滑に行なえる様になったものと考えられる。ところで県歯発足前後にこのように頻りに催された歯科の啓蒙活動には、歯が"石の固まり"に等しいと信じて疑わなかった当時の人々に歯科の重要性を紹介するという本来の目的以外に、更にその頃の意気軒昂な若い歯科界の別の願いも秘められていたのではないだろうか？県歯発足の翌年に入会、那覇市西本町で開業した友寄英彦(1896年～1980年)の残した回顧談や他の老会員達の証言を総合して見ると、これら歯科医の対社会的な活動の背景には歯科医に対する評価を高めたいという願望が意識下にあったのではないかという推測も成り立つ。

友寄は次のような体験談を残している。県歯会長佐々本義一(鳥取県出身)がその任にあった頃、県庁で何らかの祝典が催され医師会長を含む各界の要人には招待状が発送されたが、歯科医師会の長には案内が届けられなかった。友寄は自ら当時の衛生課長に掛合って会長の招待を取付けたという。当時の歯科医は"ハーゼーク"(歯の大工)或いは"ハーヤー"と一般から呼ばれ自らも"入れ歯師"を認じており、「現在のように社会から尊敬される地位に置かれてなかった。」と友寄は述懐している。更に彼の談話を引用すればその頃の歯科医師達は診療の大半を技工士に任かせ、趣味や芸能に興ずるもの、或いは日が未だ明るいうちから、辻の遊郭にくり出す者もあったという。この当時の技工士は現行法に基づく技工士と異なり見習いで技術を習得し技工のみならず代診として診療も手がけた。今日の通念からすれば容認されない状況ではあったが、こと会員同志の結びつきとなるとその数が十数名足らずだったという事もあってか親密この上ないものであったという。

診療設備については、第一号の歯科医院が登場して早20年以上を経ているので一歩近代化への途上にあったとは云え、まだ診療所の様子は今日の常識とはかなり食い違うものであった様である。那覇市に公営水道が敷設されたのは1933年(昭和8年)のことで、それまでの沖縄では井戸水か雨水、又は近郊から運ばれてくる水を買って飲料にあてていたので、佐々本歯科医院が屋上に水タンクを備えつけて医院内給水を行うと"近代的設備"という事で巷の注目を集めた。そして、なお足踏みエンジンが主役の時代であったので、友寄歯科が人力から進化して、電力を動力源とする電気エンジン付のユニットを導入すると"近代歯科医術の先駆け"という風評を得て新聞紙上に報じられる程であったと晩年の



友寄英彦　昭和40年代



戦前のうてぃんだ(現在の奥武山公園)　1933年、那覇市に初めて水道が引かれるまで、その湧き水は市民の重要な水源となっていた。水は小舟で対岸の那覇市(当時は陸続きではなかった)に運ばれ市民はそれを買っていた。

友寄は伝えている。ただしそのエンジンもフルに活用されてはいなかったようである。たまたま、友寄の診療所で日昼、受診したことがある当時の患者が聞取り調査に際して「ヤーマ(糸車のこと---足踏みエンジンのニックネーム)でガリガリ削られた」と語っているところからすると、どうもこの文明の利器も日昼は実力を発揮できなかったらしい。

那覇には1910年から電力が供給されているが、それはあくまで、日没後一定時間だけ供給される"夜線〔ヨルセン〕"のことであって、日中までも電気が使えると云う当時としては常識破りの"昼線〔ヒルセン〕"はその後石門〔イシジョウ〕通りや大門〔ウフジョウ〕通り辺りからおくれて徐々に送電が開始された。

[第五話]兼業歯科医"縄張りがはっきりしなかった頃"

ここで[第三話]の県歯発足の場面に登場してきた耳なれない「兼業歯科医」について法的な背景を整理しておきたい。友寄英彦や戦後の沖縄歯科界の有力者、平良進(1911年～1977年)の二人が残した当時の懐旧談を一部参考に供すると、明治期から大正初期にかけては、その数が少なかった事もあってか歯科医師達は簡単な抜歯か金冠や義歯の製作に主に携わっており困難な抜歯や消炎処置を初めとする歯科治療を一般医



戦前のパナマ帽制作風景

師が手がける事は別段珍らしいことではなかったようである。その傾向は大正初期まで続き「歯医者のくせに歯の病気も治せない」と、一般医であった父が口癖の様に当時の歯科医を批判していたと平良進は「歯科よもやま話」の中で述べている。

しかし1906年(明治39年)5月2日歯科医師法が医師法と並んで制定され一般医の歯科標榜及び診療も内務大臣の許可が必要となった。そしてそれまで行われた一般医師による歯科治療もその後、県令で以て嘉手納の伊波孫兵衛(中部地区会員、伊波徹はその一門に当たる)、北谷村の高江洲康亮、那覇区の杏文徳、糸満の友寄英傑(英彦の兄)の4人だけに特例として認められ、それ以外は御法度という事になった。その4人が県歯発足に際して協力してくれたお陰で会も成立に至ったのであるが、何故この4人だけに兼業が認められたのであろうか？実は彼等は技工士を既に雇い入れて本格的に補綴の方までも取り組んでいたのである。そのような経緯があって、既得権としてその特殊な身分が認められたのであるが、それも時と共に歴史的な存在になってゆく。しかしその後1937年(昭和12年)に日本歯科医師会が行った一般医の歯科専門標榜調べにより、高江洲康亮、木口文徳がその後も歯科に関わり続けていた事がわかるがこの両名はその後1941年(昭和16年)まで35年間も歯科を標榜していた事が別の記録で残されている。尚1941年の時点で同様の医師が全国で31名いた。ここに記されている木口文徳は前述の杏文徳と同一人物で「杏の一字をもじって木口と後年改姓したものである。彼は昭和12年健康保険法の協力者として楊長積、山城正忠らを始めとする7人の歯科医師達と共に内務省から感謝状も贈られており、もはや歯科医の身内として扱うべき人物であったのかも知れない。

[第六話] 麻酔なしの抜歯

県歯が発足した1920年(大正9年)頃から全国的に第一次大戦後の長期不況が始まるが、もともと経済力が弱かった沖縄では、それに追い討ちをかける様に1924年(大正13年)の糖価の暴落とサトウキビの不作が重なった為、地元銀行まで倒産する程不況が深刻化した。農村では米はおろか芋さえも口に出来ない人々が餓死を免れる為に中毒死の危険度の高いソテツの実や幹で飢えをしのいだ事から"ソテツ地獄"と呼ばれたが各地に欠食児童、長欠学童が続出、先祖代々の墓を売りに出す者、10才未満の幼女を親が辻の遊郭に売り渡すという人身売買も横行した。

又1923年(大正12年)頃から年平均7000人、多い時は2万人にものぼる労働力が移民や出稼ぎの型で流出した。特に小学校を終えたばかりから嫁入前の少女達が多数、家族の窮状を救う目的で阪神、中京の紡績工場に女工として赴いた。彼女達は給与の半分を食費や寮費として会社に回収されても尚その残りの殆どを実家に送金した。その為に健康を損ねて帰郷する者も多く、結核患者の8割がこれらの女工達であったという。そして年間2500人が死亡したと伝えられている。こうして昭和の10年代までも続く不況の下、日々の生活に追われる人々に取って歯痛以外には歯の事など構っていられないという状況が定着してゆき、各歯科医院も患者が減少し「閑古鳥が無く」という表現が歯科医の間でしばしば

囁かれた。

1937年（昭和12年）楊 長積の次男、永井長秀は久米島で卒後初めての開業生活に入っていた。開業資金が乏しい22歳のこの青年歯科医は治療椅子として安価な木製の椅子を調達した。それは頭を支えるヘッドレストも、元々付いていない床屋用の椅子であったので、頭を部屋の柱にもたれかけさせて代用する事にした。しかし島の人々は更に貧しかった。貧しさ故に大半の人々は歯科の治療が満足に受けられない状況にあった。

ある日、島で唯一のこの歯科診療所に地元の青年が



抜歯を希望してやってきた。壁の料金表にしばし思案げに見入っていた青年は永井に「歯をトルのにいくらかかりますか？」と尋ねた。50銭だと答えると「それでは麻酔なしならいくらでやってもらえますか？」と再度尋ねる。永井が当惑しながらも半額の25銭を申し出ると話はまとまり、永井は抜歯に取りかかろうとした。ところが青年は鉗子を目の前にすると急に居ずまいを正した。そして空手の心得があるのか方言で「ドウー、クファラスグトウ、マッチョウチミソーレー」（身体を硬くしますから待っていて下さい。）と云うなり椅子に深く座り直して両足を踏ん張り肘掛けをしっかり握りしめた。そして顔を真っ赤にしながら、全身の筋肉を硬直させて永井に叫んだ。「トウ、シミソーリ！」（さあー、やって下さい）。動揺歯でもあったので居合抜きの要領でひと思いに抜いて苦痛を速く終わらせてやりたかったのだが、気がせいたためか抜歯が終わるまでにはやはり多少の時間を要した。しかし血に染まった小臼歯が青年の口から取り出されるまでの間、彼はうめき声ひとつ漏らさなかった。貧しい時代の哀しい物語である。

ソテツ地獄にあえいでいる沖縄県民救済の為、沖縄県振興計画が1933年（昭和8年）から実施されたが、やっと目標の2割が達成されたところで、戦時体制に入って経済統制が厳しくなり、県民はむしろ更に苛酷な生活を強いられる様になる。そしてソテツ地獄の次には戦禍の地獄が待っていた。

[第七話] 歯科医にかからずに済ます患者たち

——患者の立場からみた歯科医療史 (1)

これまでは歯科医師側の証言もしくは医療界から得られた資料を中心にまとめ沖縄の歯科医療史を紹介してきたのであるが、ここで180度転換して当時の患者サイドからの証言や資料を収集してより立体的な医療史の構成を試みてみたい。そこでその主旨のもとに大正から昭和初期にかけて那覇や南部一帯に住んでいたという昔ばなしの好きな戦前、戦中派から聴き取り調査を行ってみた。

又その世代に属する芸能史研究家で戦前の那覇の風俗に精通している崎間麗進県文化財保護委員からも総括的な裏付けの情報提供を受けた。患者としての、あるいは一般人としての彼等の目には歯科医を含めた医療人はどのように映っていたのであろうか？

以下彼等から得られた証言をまとめてみたい。さて、戦前、那覇と首里に於ける人力車数は住民100人に付き約一台という全国一の普及率であったが特に昭和13年以降はガソリン統制により一層庶民の足として欠かせない乗物になっていた。那覇や首里で開業する医師達もそういった時代を反映して人力車で往診、それ以外の南部一帯で開業する医師達は馬にまたがり往診にも出かけていた。

自らも友寄英彦の歯科医院で受診した事があるという崎間によれば当時の医師や歯科医師は一様に立派なひげをはやしていて金時計を身に付けていたことが印象に残っているという。又政治家や実業家の間にステッキを持ち歩く事が流行していたが若い医療人の間にもステッキを手にする者が時折見受けられたという。診療室内の様子について調べてみると、女医の診療室は例外として医科も歯科も同じように女っ気がないというのが、通り相場だった様である。今日ならば看護婦や受付けあるいは歯科助手、衛生士といった女性群団が BGM の流れる中で医師や歯科医師の周囲を固めている光景が一般的なようであるが、その頃は頭の上に“ピカピカ光る鏡”（額帯鏡）をつけた医師がうす暗い診療室に一人きりでいるか、他に誰か居るとしても男性の助手（歯科も同様）が側に控えているくらいのもので、今日の華やいだ雰囲気はどこにもなかったという。尚この頃は照明の不備のせいか歯科医もやはり額帯鏡を用いる者が多かったようである。ところで1906年以降一般医師の歯科治療は特例の兼業医を除いては認められない事にな

っていたはずであるが、今回の聞取り調査の結果、実際には昭和10年くらいまでも南部の方では義歯や金冠こそ作らないものの抜歯や消炎鎮痛処置なども手がける一般医師が存在していたという証言も得られた。さて医師や歯科医師に対する一般人のイメージはどのようなものであっただろうか？“エライ先生”“コワイお医者さん”が共通の印象であったらしい。特に“ヤーマ（糸車）”と患者から呼ばれ恐れられていた足踏みエンジンで痛む歯を削る歯科医は痛がると叱られる事もあり、必ずしも親しみやすい存在とは言えなかったようである。『それに引き換え最近のお医者さんは愛想がよくなりましたね。』と一人の回答者は付け加えた。その頃の患者は少々の病気には煎じ薬や正露丸などでしのいで医師にかかるのは重傷の時に限られていたという。歯科に関しては更に受診者が少なく、又それなりの出費を覚悟せねばならない補綴処置に至っては殆どの人々が歯科医師を敬遠して欠損のままか或いは残根の状態で何年にもわたって放置したらしい。また一度も歯科医の門をくぐらずに年を重ね木彫りの“アンガマー”の面のような歯欠けの顔貌のままで生涯を閉じる者も決して稀ではなかったという。

1918年（大正7年）頃の一般の風潮を平良進（戦後県歯の実力者1911～1977）が「歯科のよもやま話」の中で伝えているが一般の人はおろか彼の祖父母でさえも義歯を使っていなかったと記している。まさにここで述べている証言を裏付ける記録と言えよう。

[第八話] 模合と価格破壊――患者の立場からみた歯科医療史 (2)

このように多くの人々が歯科医に掛らずじまいでいた原因の背景を探ってゆくと患者側の歯科に関する認識がかけていたという事などよりもまず経済的な事情が大きく浮かびあがってくる。当時、大半の人々が日々の生活で汲汲としていて歯科に通院する時間的、経済的な余裕が無かったこと、それに加えて患者の経済的負担を公的に支援する制度つまり医療保険が不備だった事などがあげられるがこれらはいずれも煎じ詰めれば経済的なところに端を発しているといえよう。

昭和12～13年頃、民間の平均的俸給取（サラリーマン）の月収が10円～20円前後、公務員の初任給が25円～35円、県の課長クラスが60円前後であった頃金冠の相場が5円（戦時体制下で金地金の統制が始まると7～8円）で義歯が15円前後であった事からも一般人が補綴治療を気軽に受けられなかった事情が容易に納得できよう。更に年に一回しか定期収入がなかった農家の実情はもっと厳しかった。そういった時代、“歯科に通える階層”は“米の食事が一日三食食べられる身分”の人達の事でもあったらしい。

例えば当時としては珍しく家族全員が歯の治療を上の蔵の平良進の診療所で受けていたと語る嵩原礼子（元中部地区会員故嵩原正夫人）の父は県の課長で月給60円～70円の高給取りであった。彼女の記憶によるとクラスで白米の弁当を持参するのは彼女を含めてわずか5～6人で他の子供達はイモを風呂敷などに包んで裸足で登校するのが一般的な状況だったらしい。そして米の味に飢えた子供に弁当が盗まれる事件がしばしば発生したという。さて、厳しい境遇の下には庶民の知恵もまた大いに発揮される。

歯科を受診したくても経済的にそれがかなわぬ患者達はその対策として摸合（寄合〔ユレー〕とも呼ばれ18世紀から見られる沖縄独自の頼母子講）をおこし、その相互扶助制度に頼って治療費作りに取り組んでいる。当時の農村ではサトウキビ刈りの時期を除いて主な現金収入がなく月掛けの摸合がかけられない者は年単位の“年摸合”に加わるなどしているが、金詰まりの時世の資金作りはやはり容易な事ではなかったという。歯科医の方でもその辺りの同情すべき事情は充分承知していたので、義歯を製作する前提での抜歯や冠製作前の根管治療の費用を免除するなどして受診率促進の為の努力を払っている。今日ならば定めし“価格破壊”となじられるところであろうが医療保険制度の不備が大きな足かせとなっており、これら両者の涙ぐましい対抗策が如何程の効果を上げたかは定かでない。

[第九話] 1000人に2人しか入っていなかった健康保険

――患者の立場からみた歯科医療史 (3)

健康保険は一応政府の社会政策の一貫として昭和2年から全国的に制度化されてはいたものの予算総枠が最初から決まっていて受診率の変動に連動して保険点数の単価も当初は毎年変動する始末で受け皿となる医療側からは歓迎されなかった。保険医のなり手も保険開始当時は全国の一般医師の場合、70%もいたが12年後の昭和14年には約半分まで減少している。遅れて国民健康保険も1938年（昭和13年）に始まるがいずれも今日の制度とは大きな隔たりがあった。更に歯科に関しては点数単価が医科に比較して低く設定されており、1943年（昭和18年）の場合、医科の20銭に対して10銭であった。そのような事情があったので沖縄の歯科医師も全体の2割程度しか保険医を引き受けていなかった様である。

またその受益者もごく一握りの階層に限定されており、今回聞取り取材に応じてくれた人々の全員がその対象

外であった。そして保険が存在した事実すら記憶していなかった。そして入手できた資料によれば昭和15年当時、保険の適用を受けられたのは沖電(従業員数92人)山形屋(66人)円山号百貨店(50人)首里無尽(49人)開銀(31人)南洋薬品(25人)琉球新報(24人)といった当時の沖縄の大手企業を始めとする従業員数10人以上の事業所51社に勤務する1200人のみ(当時の県総人口の0.2%)である。仮にこの資料に多少の不確かな点があったとしてもこの保険が今日うたわれている国民皆保険どころかそれをもっとも必要とする大半の住民には無縁の制度であった事だけは確かなようである。

歯科医師数に付いてもついでに検討を加えて見ると昭和15年のデータでは、人口10万人に対する歯科医師数は全国平均が28.4人に対して沖縄はその1/3以下の9.4人という実情で、数字の上だけから見れば明らかに歯科医師不足で、患者が待合室から溢れ出す程受診していても決しておかしくないはずであったのに、現実にはむしろ閑散としていたという事は、当時の沖縄の一般大衆が歯科医療に何らかの理由で距離を感じていたものと理解すべきであろう。そしてその理由はやはり患者側の経済力の弱さと医療保険の不備に求めるべきであろう。医療を需要と供給からなる経済行為として捉えた時、需要側の経済的環境の如何がどれ程その購買力(受診率)に大きく影響を及ぼすかということを示唆する一例といえよう。

[第十話] ウチナー養生——患者の立場からみた歯科医療史 (4)

では、医療機関に行かずに済ましていた当時の大多数の患者達は熱が出たり歯が痛んだりしたらどのように対処していたのであろうか？



戦前の真玉橋

その疑問に対して崎間は"ウチナー養生(沖縄療法)"と呼ばれる数々の民間療法が、古くから一般大衆の間に普及、定着しており、それらにより、大抵の病気は処理されていたと説明する。デング熱は明治、大正、昭和にそれぞれ一回づつ流行して一家全員が倒れ食事を作る人がいなくなり、天秤棒で粥を担いで売り歩く新手の商売と葬儀屋が繁盛したというが、医者にかかれぬ人達の間には"ブーブーヌジ(沖縄独特の瀉血療法)"が広く利用されたという。このウチナー養生は背中などにカミソリで傷を付けた後、ブーブー(竹筒)に度の強い泡盛を少量注ぎ点火して、それを背中の傷に押付けるのであるが内部の酸素が燃焼した分だけ陰圧になるので血液が吸い出される。琉球に伝わる瀉血法であるがこれは熱病以外に、ハブ咬傷、高血圧、尿毒症、浮腫などに有効だとされている。その他発熱に対してはトウガンの乾燥した皮やミミズ(漢方では地龍と称し今日も用いる)を食べさせ、風邪や夏バテにはフーチバー(ヨモギ)がよく用いられた。ハチ刺されには歯科関係者が目のかたきにしている歯垢(古ければ古いほど良いという)が塗り付けられ、うるしかぶれの類にはタバコの煙を吹き掛けるのが効くとされていた。歯痛に関しては正露丸(正露丸)や今治水とヨーチンなどの売薬が手元に無い者は、タバコのヤニをキセルからこよりでかき集めて鼻窩に擦り込んだり、刻みタバコ、センブリ、アロエ、フーチバー、重曹などが用いられ、又いかにも沖縄らしく泡盛で口を漱ぐ方法もあった。そしてそのような姑息な手段で治まらない場合には、歯痛よりもむしろ痛いのではないかと疑いたくなる"ヤーチュー(灸)"をすえて見たり、或いは自らの手で痛んでいる歯を数日間ゆすり続けて終に抜去するといった過激派もいたという。

このようなウチナー養生の中には、明治末期に流行した尿を飲ませる方法(小児の虫くだしとして)とかネコの肉を食べさせる結核の治療法など、科学的根拠に乏しく効果の程も疑わしいものが多かった。それにも関わらず多くの貧しい人々は、溺れるものがワラにもすがりつく様な気持ちで、ウチナー養生に救いを求めたらしい。

[第十一話] 歯科医院でも"ツケ払い"——患者の立場からみた歯科医療史(5)

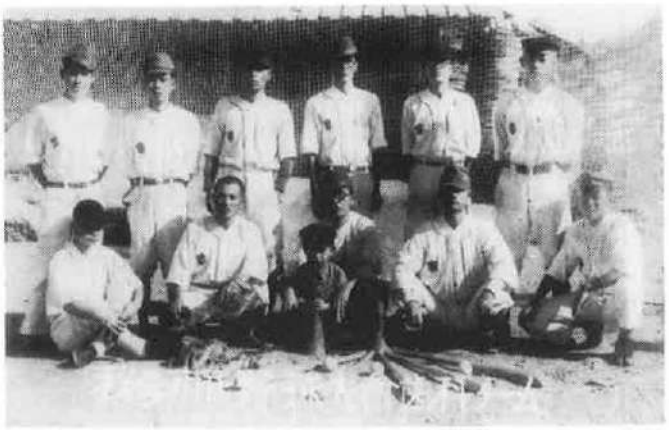
さて一通り"ウチナー養生"を試みて効を奏せず終に医家の軍門に降る決意をした時、金の無い患者達はどのような行動を取ったのであろうか？ 殆どの患者が現金の持ち合わせの無いことなど意に介しないで、医師の許に駆け込んだという。金詰まりの時代のこと故、たいていの家庭にはそのような有事の出費への備えが無かったからである。そして"ボンジリ(旧盆の精算のこと)"や"トシジリ(年末の精算)"といった具合に患者は一括または分割で精算するのであるが患者宅に医院から集金人が出向いてくる事もあったという。商店でも掛売りが常識の時代であったので、歯科の窓口でも例えば「イーバルのマチヤグワーの次男です」などという風に屋号を名乗

るだけでこと足りることもあったという。「先立つものは金」という言い回しがあるが、その頃の沖縄ではあとさきが入れ代わっていたものと見受けられる。その頃は患者にしろ商店の客にしろ代金を踏み倒すものは少なかった様で、那覇以外の地方では夜もカギをかける必要がなかったという。しかしこの料金体制では経営がやっていけなくなり、「死亡診断者だけは現金に限った」というある医師の話も残されており、恐らく人間関係が信頼の上に成り立っていたからこの料金方式を取ったというよりも、むしろ単に患者が負担能力を欠いていたのでやむを得ずそういう風潮になっていったものと捉えるべきであろう。

[第十二話] 影の医療人"ヤッチュク"——患者の立場からみた歯科医療史(6)

今回聞取り調査に際して昭和初期の那覇の町では技工士が患者宅に出向いて歯の治療を行なう事もあったという証言も耳にした。その当時までは見習いで治療技術を身につけた技工士達が歯科医の助手として、或いは「代診」として歯科医の診療を代行することは一般的な風潮であった様である。歯科医師数が少なかった為か「歯科医の指導監督下にあれば別段差支えなし」と当局が判断していた故か、特に其の事に関しての咎めや取り締まりもなかったようである。そしてそのような治療室で働く技工士のことを巷では"ヤッチュク"と呼んでいたが、そのヤッチュクが勤務先の歯科医院の仕事が退けてから内々にアルバイトをしていたのだという。ヤッチュクは依頼を受けた患者宅の座敷きに上がり込むと風呂敷包みから"歯医者の七つ道具"らしき物を取出して慣れた手付きで治療を済ましてくれたという。法的には如何にあれ歯科医院では一応"先生"と呼ばれている技術者がわざわざ出向いてくれて格安の料金で治療をしてくれるのであるから、この事は経済的な理由から正規の歯科治療を受ける余裕のない人々にとってはやはり一つの「救い」であったに違いない。この手の治療がどのくらいの比率で利用されていたかは、公的な記録が残されるべくもなく今となっては、只、当時を見てきた"語り部"の証言を通してしか知る術も無いが、医療史上、決して日の当たる舞台に登場する事の無かったヤッチュク達にここで新たに焦点を合わせてみたい。そもそも、歯科の技工士が如何なる由来からヤッチュクと呼ばれるようになったのであろうか？　元来この名称は病院や医院の薬局で調剤に携わっていた薬剤師、或いは免許を持たなくても医師の指示のもとに同様の業務に従事するスタッフ…「薬局生」に由来するものだという。「薬局生」が沖縄風に変化して「ヤッチュク」となったのであるが、沖縄の特殊な医療事情からヤッチュクはいつしか薬剤師とは限らず見習いで調剤や簡単な治療行為もこなす男性医療助手を指す名称になっていった。

南部のある医院に勤めるヤッチュクは、院長が往診に使う馬の世話から調剤や治療のみならず、事務長として、集金も行っていたらしい。また、別のヤッチュクは医師の指示で代理の往診も行っていたという。そしてその名称は更に発展してゆき、歯科医院で歯科医の指導の下に治療を手掛ける技工士の事も指すようになっていったらしい。技工のみに専従する技工士を単に"技工士"と呼び、治療を行う技工士を"ヤッチュク"と呼ぶという一応の区別はあったものの、両者の間に明確な区別は無かったようである。ただしここで述べる『技工士』とは現行法の歯科技工士と異なり、資格試験などによらずに見習いで技術を習得した技術者の事を指すが、その修業は通常、高等小学校（尋常小学校の6年を終えた者がさらに2年間通った学校で現在の中学にほぼ相当する）を終えたばかりの14～15才の少年時代から始められる。まだ幼なさを留める見習い技工士達は「でっち」として院長宅に住み込んで家事をこなしながら技術を教わるのであるが、全くの無給から始まるのが慣わしであった。それでも「日に三度、白米が食べられて技術が学べる」という条件は食料事情の悪い頃の貧しい少年達には魅力だったらしく、応募者は決して少なくなかったという。そして2～3年も経って一応基礎の技術が身に付いた頃2円とか3円の給金が"小遣い"という名目で支払われる。そして更に年を経て技工の方をマスターすると、次に治療室に進出してきて歯科医の指導の下に治療も手掛けるようになる。その後歯科医の代診ができるようになると一応一人前の技工士と認められ俗に称する"ヤッチュク"が誕生する。ヤッチュクに支払われる給料は15円が相場であったという。これは総義歯の代金とほぼ同じでまた当時の黒糖一樽分の代価でもあったが（永井長秀談）、他の業種と比べてみると必ずしも高給の部類には入らなかったようである。



昭和17年当時の秋季市民野球大会歯科チーム

時は移り、大平洋戦争終結時、米軍政府が極度の医師不足を補う目的から衛生兵を初めとして戦前、免許を持たぬものの医療に関わっていた者達全てを医療要員

として総動員し、「医師助手」「歯科医師助手」という名称の応急的な医療スタッフの制度を設けた事がある。彼等はそれから6年後の1951年、民政府令第42号と43号によりそれぞれ『介輔』あるいは『歯科介輔』という公的な名称を与えられ、制限付きながらも一応診療行為を許され又その身分も公認されることになるが、その中にはかってのヤッチュク達の一部も含まれていた。その後、半世紀以上の歳月が流れ彼等の大多数は姿を消し、又生存する者達も既に老境にあり彼等が存在した事を知る者すら同時に少なくなりつつある。

その事を考える時、正規の専門教育を受けられなかったが故に裏方に徹し続けてきたヤッチュク達が、戦前から終戦後にかけての沖縄の特殊な医療事情に即応して地域医療に一定の貢献を果たしたという事実は、20世紀も終りつつある今日、何らかの型で医療史上の記録に留められ、かつ、それなりの評価も与えられて然るべきでなかろうか？

[第十三話] 歯科医師会強制加入となる

1997年度（平成9年）9月の時点で沖縄県在の歯科医師の本会への加入率は80.8%となっている。2割の未加入者がまだいるという事になり、その為、南部地区歯科医師会執行部は彼等の入会働きかけで日夜腐心しているところであるが、戦時中、その加入率が100%だった時期がある。以下、その頃の歯科界を取りまく状況について触れてみたい。

県歯の会員数は昭和初期に入ると徐々に増え始め、陸軍の青年将校らによるクーデター「2.2.6事件」が起きた1936年（昭和11年）にはその数も33人を数えた。

しかし、その事件の前後から日本は一層、軍国主義に傾いてゆく。翌年には「蘆溝橋(ろこうきょう)事件」をきっかけとして、日中戦争が始まり、その決着を見ぬうちに更に1941年（昭和16年）12月8日には真珠湾攻撃により日本は終に米英を敵にまわしての大平洋戦争に突入する。国内では戦時の緊迫した対外情勢を反映して、



勅令団体となった沖縄県歯科医師会の会員（昭和十八年）前列右から四人目が永井長積、次が早川県知事

「国家総動員法」が昭和13年4月に施行される。これはあらゆる国民活動を国家の管理統制下におき、国民をこぞって戦争遂行に協力させようというものであった。又、同法が施行される3ヵ月前には陸軍の強い要請により厚生省が誕生、国策に副って国民の保健衛生と体位向上に重点が置かれるようになる。結核患者が多かった事や成人男子の体位が劣っていた事に対して、軍部が戦争遂行上、危機感を抱いていたからである。そして医療界に対しては昭和17年「国民医療法」が制定され、それに伴い医師会、歯科医師会に対して勅令が発布され、両団体はこの時から"官選団体"に変身する。この一連の法制定も又戦力増強を目的としていた。つまり、医療法を統合して、治療のみでなく、予防と保健指導にまで医療界の活動を発展させ"強い国民"作りを目指したのであった。

この時を境として、日歯会長は内閣の任命、その他の役員は厚生省、そして各府県の歯科医師会長はそれぞれ地方長官が任命する事になる。それまでの県歯は会員が主体になって運営されていたが、この時から会長永井（旧姓.楊）以下、役員人事も51人に達していた会員の互選を経ずに、早川県知事が直接任命に当たっている。一方「天皇の命による勅令団体」という事になったので歯科医師は好むと好まざるに関らず全員が強制加入となった。更に、戦争の為歯科材料が不足して会を通して配給制になった事も加わって歯科医師会の権限が強くなり一気に国策団体としての色彩が濃くなる。

会の事務所はそれまでは経済的余裕が乏しかったため、天妃町の永井長積会長宅を利用していたが、これを契機に那覇市上の蔵町に新たに事務所を構えて移転した。更に専任の事務局長他職員も雇用して一応団体組織らしくなったものの、彼等への給与を支払うゆとりまではなかった。そこで健康保険の事務取扱いに対して交付されていた補助金を転用してこれに充てている。

又、当時の全国の風潮に従い県歯は二度にわたり軍部へ「兵器献納」という名目の軍備協力金を拠出するなどして国策団体らしく時局に対応を続けていたが、戦況は日増しに悪化。そして終に1944年（昭和19年）10月10日6時40分多数の米軍機が那覇の上空に飛来して空襲が始まった。空襲前の那覇市は赤瓦の屋根が多く、

それが所々に見られる濃い緑と独特の対比を為していたという。

沖縄の誇る明星派の歌人山城正忠（第26話参照）はその風景を次のように詠んでいる

“朱のかわら、屋根のかげろう
春の日にものみなよろし
我が住める那覇”

その那覇の町並みもこの時のいわゆる「10.10空襲」により90%が灰燼に帰してしまう。（P.183写真参照）同時に30軒近くあった会員の診療所の殆どと天妃町の事務所も消失した。更に、翌年4月1日には米軍が沖縄本島中部に上陸開始、地上戦も始まる。

こうして勅令で設立された県歯は2年と少々の短命であえなくも自然消滅に至ったのであった。

[第十四話] 注射針は研いで使うものだった

1938年（昭和13年）7月、350名にも及ぶ沖縄各地のユタ（祈祷師）達が警察に連行されていった。この“ユタ狩り”ではユタ1名に付き賞金2円をかけて住民に密告させたというが、その目的は戦時体制下での報道管制にあった。ユタ達の流言蜚語で情報が撹乱される事を当局は恐れたらしい。新聞社も三社あったが「一県一紙」という当局の指示により一社に統一された。

戦時色が濃くなるにつれ戦争遂行だけが国家の最優先事項となり、このように情報関係はもとより国民生活のあらゆる分野に当局の規制と干渉が及ぶようになった。「贅沢は敵だ」「欲しがりません、勝つまでは」などのスローガンが町の角々に掲げられ、マスコミは「ソテツを食べていた昔に戻れ」と説いた。スポーツや文化面まで規制が及び英語風の片仮名や横文字の看板、又は名称も排斥された。



注射針を消毒する為のアルコールランプ（戦前の物）

東京の芸能界では歌謡曲歌手のディック.ミネが三根.耕一に又、古川ロッパが古川緑波と芸名を替えさせられた。沖縄では方言が禁止され、それまでは「忠臣蔵」や「ハムレット」までも方言で演じ通していた沖縄芝居の小屋でさえもが時局に合わせて“ヤマトグチ”（標準語）を用いる程であったという。

しかし経済統制は更に住民の生活に犠牲を強いた。食料の供給も1940年（昭和15年）から減らされ米を初めとして酒、タバコ、マッチ、ロウソク、灯油、石鹸、ちり紙など殆どの生活必需品が統制品となり一事が万事、行列に並んで配給を受けた。“ガソリン一滴、血の一滴”といわれる程ガソリンも不足。バスは木炭を燃料にして町中をのろのろと走った。1943年（昭和18年）には那覇や首里への電力供給も停まり歯科医は再び足踏みエンジンを用い、市民は昔のランプ生活に戻る。しかもロウソクや灯油も統制品であったので、住民は牛脂やヤギの脂を皿に盛り灯芯を浸してロウソクの代用にする者もあった。

武器の原料となる鉄などの金属も不足してきたので、各家庭の鍋、釜などさえも供出させられた。街角の郵便ポストや小学校の校庭に立っていた二宮尊徳の銅像も不要不急品と言う事になり回収され武器に化けた。家宝として金のかんざし、金時計、指輪などを持っている者にも当局は供出を迫った。

このような状況であったので、歯科材料としての金地金や銀バラも日中戦争開始後から統制品となり県歯を通して配給された。又、その他のアルコール、痲酔薬、石膏、マッチなども割り当て品であったが、特に需要の多い石膏、痲酔薬、輸入のみに頼っていたバー、リーマーの類は戦況の悪化に伴い殆ど配給されなくなった。金地金はこの頃、非常に値上がりしていて更にその統制も厳しく、歯科医師会から配布される使用券を使っても一度に2匁（7.5g）以上は買えないことになっていた。さらに、「前歯金冠や義歯床に使用してはならない」等の条件も付けられていた。

昭和13年の日歯総会の議事録からもこの頃の歯科界が材料不足でいかに悩んでいたかを伺い知ることができる。この15回定時総会では各県歯代表からの発言も材料供給に関してのものが多いが、その中には「屍体から金合金を回収する事を法制化しては如何か」という趣旨の意見さえも出されており当時の厳しい状況が伝わってくる。

以下にこの厳しい物不足の時代を生き抜いてきた老兵達の苦心談からいくつかひろってみたい。ある会員は県庁から不要になったセッコウの胸像を貰い受けて来て歯科用にリサイクルした。彼は胸像をおろし金で粉末ににし、金銅板上で加熱、文字通り“焼きセッコウ”にして再利用したという。この方式では理論上何度でもリサイクルできそうであるが一説によると4回までは可能だという。

局所痲酔剤はこの頃、既に塩酸プロカインを使用し始めていたが、供給がなくなったので、軍馬用のプロカイン（5%）を入手してそれを2%にに薄めて使用する者

もあったという。印象材は石膏を印象材として用いる方法以外にモデリングコンパウンドを主に使用していたので、その点では、容易に再利用ができた。

注射針は使い捨てどころか何度でも煮沸消毒して何年間かに亘って再利用した。そして爪楊枝の先くらいまで針の切れ味が悪くなると、アーカンソー砥石で研ぎ直して新たな再利用に供したという。特に太い伝痲針は切れ味が落ちると刺入時に抵抗が増し苦痛を伴なったのであらかじめ刺入部に浸痲をしておくという工夫をこらす歯科医もいた。一度しか使っていない注射針や使用済み石膏模型などを医療廃棄物業者に高額な料金を支払って引き取らせている今日の我々からは想像し難いリサイクルぶりであった。

[第十五話] ある戦後史

1945年(昭和20年)3月23日沖縄の島々を取り囲むように集結していた約1500隻の米軍艦隊から一斉に加えられた艦砲射撃により沖縄戦の火ぶたは切って落とされた。

「鉄の暴風」と例えられたこの沖縄戦の特徴は

①日本国内で唯一の地上戦であったこと。

②その結果45万の住民の27%に当たる12万余の県住民(軍関係者も含む)の生命が失われた事。

③軍人軍属とほぼ同数に及ぶ婦女子非戦闘員が犠牲になった事等があげられる。

開戦前は冬でさえ豊かな緑に被われていた本島南部一帯は弾雨で余す所なく耕され、焼き払われ大地がむき出しになった。自らを「艦砲の喰(ク)え残(ヌ)さー(喰い残し)」と称する生存者達は破壊し尽くされて視界さえ良くなった廃虚を前にして、只、呆然と立ち尽くすのみであった。

こうして疲弊しきった住民達は1945年(昭和20年)新しく乗り込んで来た"支配者"米国海軍の軍政下に文字通りゼロからの第一歩を踏み出す。1年と4ヵ月もの長期間続けられた地上戦により、全ての生産基盤も消滅していたので、それまでの"敵"米軍は以後、被災住民を保護する立場にまわることになる。

米軍は島内各地でまだ戦闘が行われている時期から、既に生き残った住民達を全島各地の難民キャンプ16ヵ所(後に10ヵ所になる)に分散して保護収容している。シラミだらけでボロをまとった難民達は生命からがら敵軍に投降して来たが、彼等はみな飢えと疲労で弱っていた。それに対して米軍は軍需物資の中から食料や衣類を放出して被災住民の救済に当たった。この当時、配給された軍用携帯食のKレーションや衣類として配給されたHBTと呼ばれるダブダブの戦闘服の事はまだ多くの人々の間に"戦後の思いで"として記憶されている。お陰でかろうじて"衣食住"の最低限度は確保されたが、この当時は"衣"よりも"医"の方がむしろ住民には必要だったと言えるかもしれない。「ハブさえもが姿を潜めていた」と伝えられる程、激しい弾雨の中、山野をさまよった揚げ句に保護された生存者達の多くは負傷しているか、もしくはアメーバ赤痢、マラリア、結核などの伝染病にかかっていたり、極度の栄養失調に陥っていた。

その為米軍は急遽、焼け残った民家.学校の校舎やテント小屋、あるいは"コンセット"(写真参照)と呼ばれるにわか造りの施設を利用して住民への無料診療を開始した。米軍の軍医だけでは当然人手が足りなかったので、軍医達の指揮の下、生存していた日本人医師64人、歯科医師19人、看護婦121人、見習い看護助手321人、薬剤師4人等の医療従事者がかき集められ診療に駆り出された。しかし、この戦争では医師50人、歯科医師10人、薬剤師8人、看護婦91人の生命が失われていた。それに加えて戦闘激化の前に本土に戦災を逃れたものもかなりあって、昭和18年時点と比較するとこの時点(昭和21年)では医師の数が約100人、歯科医の数が50人も減少していた。

この危機的状況を当時の医療行政担当者は苦肉の策で切り抜ける。

免許はもっていないが、以前、治療をしたことがあるヤツチャクや衛生兵、技工士などの医療の実務経験者達を介助者として現場で活用し始めたのである。彼等は「医師助手」「歯科医師助手」と呼ばれ混乱した医療現場の収拾に一役を買うが、その任務はその時点だけで終わらなかった。

6年後の1950年(昭和25年)一定の制限が付けられはしたが、彼等にはそれぞれ「介輔」「歯科介輔」という



終戦直後の那覇中学校コンセット校舎

公認された身分が与えられ、その後も引き続き地域医療の一端を担い続ける事になる。

一方、沖縄の医師不足の状況は、その後徐々に改善されつつはあったが、しばらくは慢性的に続く。無医地区解消を目指して本土や台湾、韓国などの医師が導入されたりもしたが、かれらの定着には何かと支障が生じやすかった。そしてその度毎に無医地区の人々は"医師不足"の不安にさらされるのであった。そのような見捨てられがちな僻地の住民に取って最も頼りになったのはこれらの介輔達であった。地元に溶け込んで定着してくれる介輔はかけがいのない存在であったに違いない。しかし介輔制度発足からほぼ半世紀が過ぎた今日、状

況は大いに変わった。医師不足どころか都市地区の開業医からは"医師過剰"の声さえ聞かれ始めている。

その状況を反映してか、あるいは老齢化の故か介輔達はこのところ姿を消しつつある。制度発足当初の1951年(昭和26年)介輔数126人、歯科介輔数35人であったが、環境保健部の資料によると1997年(平成9年)現在、介輔11人、歯科介輔0人となっている。歯科介輔は1985年(昭和60年)まで一名存在していたのであるが、その一人も次の年には統計の数字から姿を消している。介輔の歴史は沖縄の一つの戦後史とも言えよう。

[第十六話] "アメリカ世"の地名

地形さえも変えんばかりに吹き荒れた"鉄の暴風"は、沖縄の地図までも塗り変えた。特に戦闘の激しかった南部の真壁、摩文仁、喜屋武の三村は人口が激減して、戦後はそれぞれが村として成立しなくなっていたので、三村はやむを得ず合併して(それでも人口は4000人余に過ぎなかった)三和村(みわそん)という新名称で出発している。

その他、米軍の統治下になった為に抹消されたり、逆に作られたりした市町村名も多々ある。那覇市の山下町は単に"山下"という地名が旧日本軍の山下奉文中将(シンガポールの英軍を降伏させた)とたまたま同名だっただけで、"ベリー"に改称させられた。(その後昭和32年、山下町に戻った)

沖縄市の「コザ市」も「胡屋」を米軍が"コザ"と読み誤ったところから生じたと言われている。その他に終戦の年昭和20年(1945年)には、戦争の落とし子として沖縄各地の難民収容地区に耳慣れない名称の市が続々誕生する。

現在の名護市羽地の田井等に設けられた収容所には7万にも及ぶ戦災難民がひしめいていたが、米軍はこの一帯に"田井等市"という名称をつけた。同様にして、名護市域内に瀬嵩市、大浦崎市が、又、宜野座村内には宜野座市、古知屋市、漢那市が誕生したが住民がこれらの収容地区間を移動したり、出歩く事は厳禁されていた。

その後間もなく、これらの収容所も解散され、一時"うたかたの"様に生じていた"市"の群も消えて元の名称に戻ることになるが石川市だけはそのまま市として残った。字石川は、戦前は美里村の一部の戸数350、人口わずか1800の寒村であった。ところが、この地区にも収容所ができ3万人にも及ぶ難民が流れ込んできたため、小那覇舞天(本名、全孝、県歯会員。後に会長も務めたが、むしろ芸能活動を通して広く親しまれた)の「石川小唄」にも歌われた様に"にわかに沖縄一の市"に生まれ変わってしまった。米軍は当初、この石川市を将来沖縄の首都にしようという構想をもっていたといわれ、戦後初めての住民の自治組織であり、琉球政府のルーツに当たる「沖縄諮詢会」も、この地で発足している。同市には終戦と同時に歯科も含む総合病院ー「石川地区病院」もいち早く建設されており、諮詢会の予備的な集会も、この病院の新築されたばかりのT字型コンセット内で開かれている。

当初この病院(院長、神村吉助)には「石川市民病院」というモダンな名称がつけられたが、施設自体は初めは茅葺きの木造家屋であった。同じころ戦災難民を集めて賑わった宜野座市にも、将来首都になるかもしれないという噂があった。

同市にもテント張り(後で宜野座国民学校の焼け残った宿舎も利用)の総合病院が建設されたが、ここは専ら中南部から送られてくる重傷患者の受け入れ施設となっていて、米軍々医の殆ども外科医であった。送り込まれてくる患者の7割は女性であったが、7月頃ともなると地面にベットを置いただけのテント小屋は、熱気が激しく、栄養失調と衰弱も加わり、死者が続出、作業当番の住民は殆ど毎日、名前も判らぬ死体を土中に葬ったと伝えられている。

一方、南部では玉城村から知念村一帯にかけて難民キャンプが設けられ、この一帯を米軍は"知念市"とした。知念地区の医療施設は玉城村の百名にあった。米軍



戦後間もない頃の診療風景
(当時は足踏みエンジンも使用)

の命で医師浜松哲雄が百名に開設したテント小屋(後に台風で吹き飛ばされたため民家に移転)の診療所は、はじめ「浜松医院」の看板を掲げていたが、その内に外科医仲里朝之や歯科医永井長秀等も加わってベッド数60、職員数30人と内容も充実してきたので"知念地区病院"という公的な名称に変えられ翌年の7月にはコンセット建ての施設が完成している。早い時期からこの病院では、発電機も備えており、歯科でも電気エンジンを使用していた。

米軍の首都構想は気まぐれだったと見え、石川で誕生した沖縄諮詢会から発展してできた民政府はその後1946年(昭和21年)には、ここ知念市の親慶原(現在の玉城村)にまで南下してきていた。軍政府は現在の"琉球ゴルフ"の辺りにあった。那覇市と糸満町は戦闘終了

後もしばらくは立ち入り禁止であったが、糸満町は一足先(1945年10月)に住民が居住できるようになった。この地域にも引揚者と、那覇市や南部一帯の住民が収容されたので人口が膨張し米軍はここも"市"として取り扱った。現在の市制は1971年に施行されたものであり、難民達が去った後しばらくは「糸満町」に戻っていた。

糸満地区の医療機関としては真壁、喜屋武、兼城、小禄、豊見城の各地に診療所が設けられたが、糸満町の漁港近くの小さな民家では医師古謝将厚、歯科医与那城勇(初代南部地区歯科医師会会長)他数人の看護婦たちが住民の診療にあたっていた。

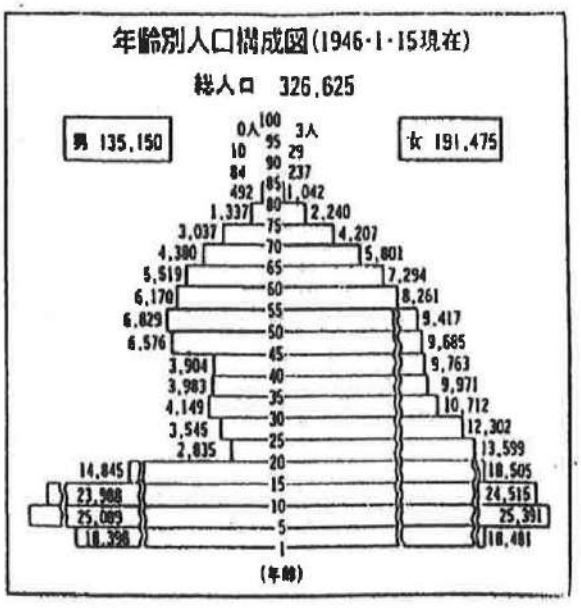
その後、神谷仁清他の医師も加わって、コンセット建ての糸満地区病院が開設された。ここの総合病院には患者輸送車も配備されたが、それは長期入院を要する患者をコザ中央病院まで輸送する為のものであった。その他にX線装置も一応備えていたが、歯科の方には足踏みエンジンしかなかった。

ところで、この頃の那覇市は兵站基地として使用されていたので、住民の立ち入りが禁止され、那覇の住人は知念市や糸満市に寄留民として住んでいた。この立ち入り禁止は1948年(昭和23年)まで続けられたが、その頃、戦災復興のため屋根瓦を焼く必要が生じ、米軍当局もやむなく基地内の「壺屋」だけには瓦職人とその家族の移住を例外的に認めることになり、それら住民のための区役所も一応設けられた。そして、その区役所の名称は"糸満地区管内壺屋区役所"とされた、那覇市も糸満市の行政管轄下にあったからである。一時はこの様に居候扱いを受けていた那覇の住民にも、そのうち、台風のおかげで首都を奪還するチャンスがあたえられる。1949年(昭和24年)7月、風速43.8m/sにも達したグロリア台風で、知念市高台にあった民政府のトタン葺きの庁舎が吹き飛ばされ、それがきっかけとなり民政府は那覇に移転して来たのである。

"アメリカ世"の地図は、この様に気まぐれに書き換えられていった。

[第十七話] 歯科医軍作業に出る

戦闘が終わって、今度は言語習俗の異なる異民族統治という次なる課題を前にした米軍は、住民代表を活用して間接統治を行うのが得策だと判断した様である。米軍の命により全島の避難民収容所の代表124人が石川に駆り集められ、彼らの中から互選により15人が選出された。こうして沖縄諮詢会が発足したが、この委員会はその後"脱皮"を繰り返しつつ琉球政府にまで発展してゆく。"ライオン"の異名で知られた志喜屋孝信以下15人の委員達は、この時より住民の死活に関わる衣食住や医療を初め文化面にまでわたって、米軍と住民とのパイプ役を務め始める。この諮詢会は発足した翌年(1946年)食料配給と労働力調査の目的から、生き残った沖縄本島の人口調査を実施している(図表参照)。その結果、判った事は人口が明治12年の廃藩置県当時の約32万にまで激減していたこと、20才から40才までの働き盛りで、かつ結婚適齢期の男性が戦争の犠牲になった為、同世代の女性の数の1/3にまで減少したーという事であった。



諮詢会もこの数字を目の当たりにして、彼らの取り組んでいる戦災復興が如何に難しい情況に直面していたかを実感した事であろう。この後しばらく、沖縄の全住民は等しく米軍の被救済民として、肉体労働者は2400カロリー、それ以外の者は1400カロリーの基準で、食糧の無料配給を受ける日々が続く。ただし、この生活も決して気楽なものではなかった。「清掃が悪い。衛生状態が悪い。作業命令に従わない。」などの理由で軍当局は時折配給停止をして、住民をパニックに陥れた。

一方この時の諮詢会の公衆衛生部長には、戦前の衛生課長、大宜味朝計が医療界での"顔の広さ"と、医療行政の経験を買われて選ばれている。以後、彼は持論の医療公営を主張しつつ、戦後の医療界に大きな影響力を行使して行く。戦後の約1年間は軍政府から一切の金銭取引が禁止されていたいわゆる「無通貨時代」であった上に医療機関も公営化されていたので診療費は無料、同時に医療従事者も他の公務員や軍作業員(軍雇用員。1961年全軍労が組織されるまではこう呼ばれた)と同様に無給であった。そして、この時代通貨に取って代わる役目を果たしていたのが、アメリカタバコの"アカダマ"(ラッキーストライクのこと。日の丸とも呼ばれた)や、"シカグウワー"(キャメル)であった。尚、タバコが無い場合には欲しい物同志を物々交換する原始共産制社会でもあった。タバコ以外にポーク缶詰、コンビー

フ、コカコーラ、チョコレートの類は住民に取っては"憧れの文明"をも意味した。今日、本県でのランチョンミートの消費量が特に多いことは当時の名残だとされている。そして、それらの品物が入手しやすい立場にあったのは、軍作業員や「ドライバー」と呼ばれたトラック運転手達であった。特にドライバーは米の無いこの時代にも三食"銀シャリ"(白米)が食べられて時代の花形とされていた。他方、平良進の手記によれば、彼は軍病院で歯科医のポストを求めて大宜味朝計等に働きかけたりもしているが、当時の他の歯科医達は必ずしも彼の様に復職に積極的ではなかった様である。登川正樹(1915－1996　元県歯会長、会館建設の功労者)は郵便局長をしていたという。与那城勇も4ケ月ばかり糸満地区病院で勤めていたが、キリスト教の布教活動に転向、戦後の10年間は牧師として過ごしている。また、歯科医としてそれまでの敵軍に協力することにより、"裏切り者"と見なされることへの懸念から、初めの頃は歯科医の身分を隠す者もいた。一方では、他の住民に混じって軍作業に出かける歯科医達もいた。「日本を打ち負かしたアメリカのことをもっと知りたかった」と語る玉城信徳(中部会員、元県歯会長。副会長時代には会長を助け会館建設に貢献)は、当局の命令で歯科に復帰させられるまでは、しばらく米軍のPXで働いたりガーデンボーイをしていた。永井長秀も軍作業をしていたところを医療担当官に説得されて歯科に戻っているが、余り乗り気でなかった様である。



若き日(19歳当時)の金城一史(診療所のコンセット前にて)

尚、当時はまだ歯科医には成っていなかったが一般人として、軍作業を経験している南歯会員はその他にもいる。

三代目南歯会長、嶺井浩も高校を卒業すると同時に弱冠十六歳でPXに勤め始めている。同じ職場には、元県歯会長の西平守廣(当時20歳)も働いていた。

一方、金城一史(元県歯副会長、南歯誕生前の最後の支部長)は、同じ頃、毛色の変わったキャリアを歩みつつあった。大抵の者が米軍関係の職場を指向していたというのに、彼は戦前、西本町で歯科を開業していた姉の影響で、医療に興味を持つ様になったのか、高校を卒業するとすぐに(昭和24年まではまだ大学進学の道は開かれていなかった)何らの免許も持たないのに、那覇診療所(現在の開南カトリック教会の敷地にあった)に雑用係の助手として勤め始めた。診療所内には歯科医の上原信雄以外にも4名の医師がいたが、彼は各科の医師の助手として、時によっては戦前のヤッチュクに近い役目を果たしたので重宝がられた。産婦人科の助手として往診に出かけることもあったという(写真参照)。それから、十数年の歳月が流れ、歯科医になった金城は医療関係者のパーティーで、当時、同じ職場に居た看護婦に偶然出会った。懐かしそうに現況を尋ねる彼女に、開南で歯科を開業している旨を告げると、彼女は明るく笑って答えた。「あら、金城さん、産科と思っていたら今度は歯科をやっているの？」

戦中、戦後の動乱をくぐり抜けて来た歯科医達は皆一様にたくましい。それぞれが個性的な道を歩んで豊かな人生経験を積んで来たからであろう。

[第十八話] パンの講習会


永井長秀とその仲間たち(戦後間もない頃)

永井長秀は1945年(昭和20年)、知念の親慶原(現在の玉城村)の収容所で軍作業をしていたところを、係官に呼び出され、百名(玉城村)の診療所の歯科を担当するように命ぜられた。連れられて行ったテント小屋には、歯科の診療設備などロクになく、あるのは、マーキュロクロム、サルファ剤くらいのもので、後は抜歯鉗子が一本あるきりで麻酔剤さえもなかった。「これでは仕事にならない。」彼はため息をついた。やる気も起こらないので、そこらにあるベッドで昼寝をしたり、近くの海岸まで降りてゆき魚釣りをした。青い海と白い砂浜は、戦争と無関係に穏やかで美しかった。そのような日課を繰り返していたある日、海岸に看護婦が、彼を呼びにやって来た。大声で「すぐ戻って下さい。」という。急いで引き返すと、中央から視察にやって来た大佐と通訳官が立っていた。彼の顔を見るなり、大佐は険しい表情で詰問し始めた。職場を放棄して魚釣りとは何事だという。性来、気の短い永井も、支配者と被支配者という間柄を忘れて、前からたまっていた不満を大佐にぶつけた。「見て下さい。何の道具もないのに、これじゃ仕事にならないじゃないです

か。沖縄人は動物ではない。人間ですよ！」

それから間もなく、永井の下に中古品ではあるが、色々のアメリカ製の治療器具や技工用具が、どっさり送り届けられて来た。他の南部一帯の診療所では、体力を消耗させる足踏みエンジンが使われていたのに、永井の所では電気エンジンが軽快な音を発していた。永井も仕事に励む様になっていた。それからしばらくして、北部の診療所から知人の歯科医が、彼の診療室を見学にやって来たが、その設備の余りの充実ぶりに、目を丸くしてその訳を知りたがった。「大佐に女でも世話したのかね？」彼は冗談半分にたずねた。

この頃の一般的な風潮として、米軍の担当官、特に日本語の話せる二世の将校とうまく付き合うことは、生きてゆく上で不可欠なことであった。彼らの意向次第で、住民は色々な便宜も図ってもらえるし、欲しい物も手に入ったので、世渡り上手な者達は、獲れたての魚介類を献上したり、中には女性を斡旋して利権を得ようとする者さえあったという（沖縄市町村長会編、地方自治七周年記念誌、1955年）

その様な世相を反映して、この様な冗談が来訪者の口から発せられたのであろう。全てが、無の状態に帰していたのであるから、確かに、この時代を生きてゆくには、統治者の米軍から何か「貰う」もしくは「して貰う」という受け身の生活しか生きるすべはなかった。

それまでは「敵の言葉」ということで英語を使わなかった人々がまっ先に覚えた単語は「ギブミー」と「テンキュー(Thank you)」だったと言われているが、子供達までも米兵を見かけると駆け寄って“ハロー、ギブミー”と菓子類をせびったものだった。住民代表たる政治家達も住民の為にアメリカ側から援助物資を如何に巧みに引き出すか頭を悩ませた。

戦後しばらくして台風が来襲した時の事である。職務に忠実な那覇市の配給所職員達は、その夜皆で力を合わせてテント小屋に貯蔵されていた米や豆などの配給物資を暴風と雨から守り通した。台風の過ぎ去った朝、職員の代表が、仲本為美市長にその手柄を報告するために駆けつけた。その職員は“おほめの言葉”を期待していたのであるが、その時、市長は「誰が配給物資を守れと云ったか？」とけんもほろろの態度であったという。（那覇市史）食料品は台風で水に濡れさえすれば、無料で市民にスポイル品として払い下げることができ、それは又、味噌・醤油の立派な原料になる。そしてアメリカ側から再び供給が受けられるはずであったのがフイになったから市長は怒ったのである。“ギブミー民族”になり下がってはならないと説く人々もいたものの、彼らとて頭のてっぺんから足のつま先まで米軍の支給品を身にまとい、配給の食料で養われている時代でもあった。

ところで、「衣食住足りて礼節を知る」といわれるが、終戦を境に人々の価値感が混乱して、倫理観の低下も目立ち始めていた。大勢の家族に食べさせる為には、配給品だけでは不足だったからか、少しでもましな生活に近ずこうとした故か“戦果”に走る人々もかなり居たようである。この当時“戦果”という言葉は、物の有り余っている、アメリカ人の物資を“ちょろまかしてくる”ことを意味した。同胞から物を盗むことはやはり恥ずべき犯罪だと考えられていたが、以前の敵国人から失敬してくることには、人々はあまり罪悪感を覚えなかったらしい。むしろ、たくましい生活力として捉えられていた様である。

今からすれば不名誉な話かもしれないが、敗戦の混乱期にこの様な裏面史の一頁が紛れ込んで存在している事も又、厳然たる事実である。

折しも、与那城勇は、糸満の診療所につとめるかたわら、キリスト教の伝導活動を始めていた。彼はこの様な時こそ精神的再建が必要だと考えた。そして、人目につきやすい町角に、聖書の中の一節を記した集会案内の看板をかかげた。ところが、町の人々の間には「パンの講習会が市役所で開かれるらしい」という噂が流れていた様である。案内板には「人の生くるはパンのみによるに非ず－聖書研究会、場所糸満市役所」と記されていた。与那城は敗戦後の精神的な荒廃の時期にキリスト教の精神を伝えようとしたのであるが、飢えた人々の目には“パン”の文字しか映らなかったらしい。

[第十九話] 田んぼにヤミ市が立つ

戦争の後始末に明け暮れた昭和20年（1945年）もどうにか越した翌年、沖縄諮詢会を母胎として「沖縄民政府」（当初は沖縄中央政府と称していた）が発足、更にB円と呼ばれる紙幣（正式にはB型軍票）も通貨として発行され（P201写真参照）賃金制度も復活（5月1日）、医療関係者にも公務員としての給与が支払われるようになる。そのかわりに、それまで無料だった配給制度も6月以降は有償となった。しかし軍作業員や公務員以外は、直接に現金収入が無かったところから、医療部門に限ってはその公共的性格を考慮に入れ、尚しばらくの間は、無料診療が引き続き行われる事になった。

又、貨幣経済が再開されたとはいえ、それを受け入れる経済基盤が充分に回復していなかったので、医療部門の統制以外に、物価に対しても統制が行われることとなった。この時の公定価格は、戦争の始まる前の労賃や米の代金などから算出されたが、戦後のインフレの為新顔のB円の信用度も低く、当初は依然として物々交換が行われる始末で、経済統制は効果を上げなかった。戦後で物資が極端に欠乏していたところに引揚者が続々帰還、人口が3年間で32万から一気に56万に膨張し、彼らの多くが制限枠を超える通貨を持ち帰ったことや、又台湾や日本本土との密貿易（本土とは切り離されていたから外国扱いであった）が盛んに行われたことなどが加わってインフレが起こり、公定価格など、あって

も無きに等しいヤミ価格が横行したのである。

こうして那覇市の新栄通りから平和通り一帯にかけては、米軍の横流し品や密貿易の物資を露店に並べて売りさばく"ヤミ"市場が賑わうようになる。この一帯は戦前は水田地帯であったが、取り締まりを物ともせず市が開かれ、多くの買い物客がつめかけた為、活気に満ちあふれた「通り」に生まれ変わってしまった。取り締まりのMP(米軍憲兵)達も、その住民パワーのたくましさに根負けしたようで、その経済統制も昭和23年(1948年)11月には撤廃される。そして、人聞きの悪い"ヤミ市場"も天下晴れて自由市場になり、「新栄通り」とか「平和通り」という体裁のよい名称で呼ばれるようになった。

しかし米兵達は"ヤミ市場"の呼び名の方が好みに合っていたのか、半世紀以上たった今日もなお、彼らの間ではこの一帯を"ブラックマーケット"(ヤミ市場)と呼んでいる。又、この頃から戦前の湿地帯、牧志に現在の国際通りが形成されて行く。昭和22年12月、露天劇場のアーニーパイル劇場(後に、国際劇場と改称。国際通りの名称の由来となる)がオープン。街には当時の世相を歌った新しい歌謡曲が高らかに流れ始め、「湯の町エレジー」「異国の丘」「憧れのハワイ航路」「銀座カンカン娘」「長崎の鐘」などが昭和23年から24年にかけて一斉に世に出る。

こうして自由経済の時代を迎え、各地には、ささやかながら企業も芽生え始め生活は苦しいながらも、人々は戦後の虚脱状態から脱け出して、希望と活力を取り戻し始める。そして、全国的には1年遅れるが、1947年(昭和22年)頃から沖縄にも戦後のベビーブームが訪れる。あたかも平和の訪れをことほぐかの如く、この頃、あちらの家、こちらの家でも赤ん坊の泣き声が聞かれた。その赤ん坊達も立派に育ち、今日、各界で第一線に立っている。沖縄の団塊の世代は、こういった時代背景の下に生を受けたのである。因に、南歯会員の中にも昭和22年生まれは8人、23年生まれは10人おり、それぞれが見事な業績を上げて活躍中である。昭和22年生まれの南歯会員には安里幸子・兼城繁・高良恒巳・玉城民雄・仲里正博・宮城正廣・安村庸・島袋進がおり、昭和23年生まれには赤峯悦生・高橋学・赤崎栄・赤嶺裕也・真栄城正弘・玉沢吉弘・友利清一・前川清春・屋宜優がいる。奇しくも戦後の沖縄の歯科医師会のルーツとも目される「沖縄歯科医学会」もこの頃(昭和22年1月27日)に産声をあげている。

[第二十話] 抜歯料金はタバコ5本分

戦後も3年目にはいると沖縄の公営医療も新たな局面を迎える。それまで3年近く続けられてきた無料診療は1948年(昭和23年)4月1日布令により打ち切られ、生活困窮者以外からの診療費徴収が始まった。

この時、公布された公定料金表から歯科関連の主な項目をひろってみると、初診料3円、抜歯料一歯につき5円、充填一歯につき10円、義歯は一歯欠損につき10円——といった大ざっぱな内容であった。

因に当時の理髪業にも公衆衛生部から定められた公定料金があり、それが抜歯と同じく5円であった。その他に、娯楽が殆ど無かった故、人気を集めていた、沖縄芝居の入場料が2円、沖縄ソバが20円～25円、アメリカ製タバコの公定価格が1カートン100円(ヤミ価格200円)、



戦後の那覇市前島・泊方面

ヤミ市場のコカコーラ(タライの中の生ぬるい水に浸して売られていた)が30円といったところであった。

歯科の料金は当時のインフレを反映して、それから3年後の1951年(昭和26年)には6倍から20倍の幅でもって値上げが行われるが、理髪料金などは物価にスライドさせていったので5年の間に40倍もの値上げが行われている。他の物価を見ても、1946年6月から1948年までの間に、米は3. 7倍、イモ7. 8倍、鮮魚10倍、タバコは63倍になっているが、これは毎月2割ずつ着実に上がった計算になる。

この様な不安定な経済状況は、給与所得者に大きな負担を強いるものである。1946年(昭和21年)賃金制が布かれた時には、知事が1000円、市町村長が340円～400円、医師500円～700円、歯科医師310円～400円、警視、校長が400円、薬剤師、郵便局長250円～340円、獣医250円～310円、銀行支店長、区長310円といった内容でスタートしたが、物価上昇が急速だったため、一定の給与だけに頼って生活していた公務員は生活が非常に苦しくなってゆき「戦後のもう一つの戦争」とさえ云われた。当初、教師や民政府の職員は月給が200円～300円であったが、ヤミタバコ 1カートンの代金と大差がなかったので、生活に直結するアメリカ製物資が入手しやすい軍作業、あるいは比較的待遇が良くなりつつあった民間企業に転職する教師が増えていった。ある高校の場合には24人いた教師が一人去り二人去りしてついには全員が消えてしまったという。程度の差こそあれ、医療人も又、この戦後インフレの被害を受けている。

当時、沖縄本島だけは医療従事者全員が公務員で

あったので(奄美、宮古、八重山群島では最初から自由開業であった)、うなぎ登りの物価には皆が等しく悩まされた。公務員の医師、歯科医師の月給が310円～700円と規定されていた頃、沖縄ソバ一杯が25円～30円もしたというのは如何にも高すぎた。ただし、医療関係者は比較的患者からタバコなどの貰い物が多かったので、それを売りに出して生計の足しにするという手があった。しかし、その様に世慣れしていない医師も又多くおり、手元にふんだんにあるタバコを気の向くまま吸って、ヘビースモーカーになってしまい"タバコ貧乏"と呼ばれた医師達もいたという。その様な背景があって、自由開業を求める医療人達の声は次第に高まり1950年(昭和25年)2月には沖縄医療団が自由開業への働きかけを試みたが、実現を見ないで1951年1月19日になってようやく条件付きで布令31号が出されて個人開業が認められる様になる。この時の条件とは「開業地は沖縄医師配置委員会の指定する所に限る」という内容であったが、これは開業医が都市に集中して無医地区を生ぜしめない為の配慮から設定されたものであった。条件付きであるからには厳密な意味での自由開業とは呼べないものの、医療人にとっては希望のある前進として歓迎された。そして、この配置制度による個人開業も、3年後には撤廃され、ついに自由開業の時代に入る。この時以後、1966年(昭和41年)7月1日に沖縄独自の「現金給付制医療保険」が開始されるまでの12年間、沖縄の医療界は文字通りの自由開業時代を経験する事になる。

尚、この時、医療の空白地域が生じない様に僻地診療所はそのまま公営の機関として残され、公務員医師が配置された。更に、正規の免許を持たない介輔、歯科介輔等に対しても無医地区に限って、自由開業を認めるという特別の措置も取られた。さて、乱暴な試算ではあるが、1998年現在の抜歯の診療報酬をアメリカ製タバコの価格に換算してみると、大よそ、1カートンから2カートン分に相当する。そして、医療公営時代初期の抜歯の対価はアメリカ製のヤミタバコ5本分に過ぎなかった。この様に当時の労働の対価が現在の1/40ないし1/80に評価されていたということは、物の価値に比べて人間の労働の価値がその分だけ低く評価されていたということになるのであろう。

[第二十一話] 機械油でテンプラを揚げる

シマ歌(民謡)に欠かせない三線(サンシン)は、沖縄の人間に取って衣食住に並んで必要な物だったらしく、戦後の難民収容所では、夜ともなるとあちらこちらでその切々たる音色が流れていたという。肌身離さず三線を持ち歩いた者もいたことであろうが、これらの三線の多くは収容所内で手作りで組み立てられた、いわゆる"カンカラ三線"であったようである。戦災で家を焼かれ、家族や近しい者を失った人が多かったこの頃は、特に心の傷を癒してくれる物が必要であったが"カンカラ三線"は、その目的を充分に果たした。この手作り楽器は身近かにある空き缶や棒切れ、パラシュートの細ひもなどで組み立てられていた。

その後もしばらくは、万事この要領で人々は物不足に対応して戦後を生き抜いてゆく。

マラリア患者が多かったので、その治療薬アテブリンはふんだんに手に入ったが、この薬は水に溶かすと鮮やかな黄色の顔料になったので、青インクや消毒薬の赤チンキ(マーキュロクロム)と共に、"終戦当時の三原色"として絵の具やポスターカラーの代用品として用いられた。

一方、パラシュートの生地は上品なドレスに改造され、小麦粉の布袋も肌着や野球のユニホームに変身、至る所に転がっていた砲弾の薬莢殻は灰皿や花活けなどに加工されたり、そのまま家屋の柱に利用された。真鍮製のライフルの薬莢は加工、研磨されて美しい指輪になっていた。鉄カブトも鍋として煮炊きに使われ、墜落した戦闘機の残骸も軽くて強度のあるアルミ系合金のジュラルミンであった事から鋳直され、食器や洗面器、アイロン、ソバ打ち機などの平和的な道具に姿を変えた。

ただし、この様に武器でさえも食器に利用したり、不足している物を、手近かの物で代用する生活の知恵には、時として思いがけない危険も伴う。配給品のチーズを石鹸だと思い込んで身体にぬりたっくった話は笑い話ですむが、殺虫剤のDDTを小麦粉代わりに使って犠牲者が出たり、酒が無いのでメチルアルコールを含む密造酒造りが流行して多くの死者や失明者が出たことなどは、戦後の二次災害ともいえる。

昭和21年(1946年)警察発表の資料によれば、その年度の交通事故の死者87人に対して、メチルアルコール中毒被害者は79人(その内死者46人)となっている。

又、テンプラ油の代用として自動車の潤滑油"モビール"を使うことが全島で流行した。用途により30番や50番などあったが30番の方が「風味が良い」とされていた。食べ過ぎると吹き出物ができたり、下痢をするなどの副作用があってもなお、多くの人々がモビール天ぷらに舌つづみを打った。



昭和二八年当時の足踏みエンジン

さて、その頃の医療人はこの物不足時代にどの様に対応したのであろうか？沖縄本島の医療従事者は終戦後の6年間は公務員として公立施設に席を置いていたので、米軍の設備や材料供給が背後にあり、その点では他の住民の様にいきなりゼロからの出発には直面していない。否、むしろ、米軍のメディカルサプライは当時沖縄の医療人に新しい知識の供給源とさえなった。コザ中央病院の歯科で平良進がノーマ(水癌)にペニシリンを用いて劇的な効果を上げたというエピソードが残されているのもこの頃の事である。

ところが、1951年(昭和26年)、個人開業が解禁されると各人、それなりの苦労が始まる。特に歯科医には、治療機械と技工道具集めという大きな仕事が手始めに待っていた。しかも歯材店などまだ無い時代であったので、それまで勤めていた診療所から材料や器具を払い下げてもらったり、伝手を頼って各人が道具集めに奔走した。

スピットンつきのユニットなど、元々、望むべくもなく、木製の机や椅子などで代用。ヘッドレストの代わりに、助手が手で頭を支えるか、柱にもたれかけさせるなどの工夫がこらされた。この頃も足踏みエンジンが使われているが、かなりの歯科医は足がつかれてくると、助手にペダルを踏ませている。

山などに出かけ、大きな木の切り株を見つけ出してくることも重要な道具探しの一つであった。当時は鋳造によらずハンマーと鉄砧で冠を打ち出して作ったので、その工作台としての切り株は技工室に欠かせない物だったからである。

言うまでもなくエアコンプレッサーなど無いので、ロウ着やインレーの鋳造をする時には、これも又、足踏みのフイゴを忙しげに踏みながらガソリンバーナーに空気を送り込んで作業に当たったが、フイゴとブローパイプを持つ手元との連携プレーがかなり高度の熟練を要した。

エアコンプレッサーが無いのであるから当然エアシリンジも無い。当時の歯科の必需品として赤いゴム球のついたユーモラスな型の"気銃"がどこの診療室にもおかれていた。窩洞を乾燥させる際には、そのゴム球を手のひらで勢いよくへこませる事により内部の空気を吹付けて使用した。

金冠を鋳造以外の方法で作製するには、金合金を薄く伸ばさねばならないが、それには圧延機(ローラー)という機械が必要であった。しかし入手が困難であったので、ソバ打ち機を転用したりした。この機械は構造が圧延機に似ていたが、飛行機のジュラルミン製で軟らかいソバを伸ばす目的で作られており、幾度も金合金を圧延するとローラー部分がひずみを生じてしまうという泣きどころがあった。

埋没材が入手できない頃は、石膏に海の砂などを混ぜて用いたり、鋳造リングは鉄パイプを適当な長さに切断して代用。レジンの研磨用フェルトの代わりにシュロの葉の付け根の部分を用いると同様の効果が上げられるという新発見もなされた。

鋳造用具としては圧迫蓋の方が構造が簡単なので、空き缶の蓋に木製の取っ手を打ち付け、アスベスト代わりに水に浸した紙や粘土を内側に詰め込んで用いた。その後しばらくして、空き缶と鎖から成る遠心鋳造機も使われ始める。この装置は鎖の付いた空き缶内にリングを入れてブローパイプで加熱、金属が融けた瞬間にすばやく"クサリ鎌"の要領で振り回すのであるが、時折、真っ赤に加熱した金属があらぬ方向に飛び散ったりするので鋳造の度ごとに同室の者は退避した。
(P205～206参照)

"無い無い尽くし"の世界では適応力と創意工夫が要求される。我々の先輩達も小さな発明や発見を重ねつつこの厳しい時代をくぐり抜けてきたのである。

[第二十二話] 二つの「沖縄歯科医学会」

第二次大戦が終わって人々が一息つきかけた頃、米ソ両陣営の間に次の火種が生じ初めていた。終戦後5年目の1950年6月、朝鮮戦争が勃発する。ただし、この時の日本は、米軍の後方基地としての特需により敗戦後の不景気から立ち直る手掛かりをつかむ。沖縄も戦略上"要め石"(キーストーン)と呼ばれる様になり、恒久的な基地建設がその翌年から始められる。そして、沖縄全体が基地に依存する体質も根ずいてゆき、基地の町には米兵の出入りが認可された"Aサイン"のバーやレストラン、キャバレーなどの看板が乱立。同時にその立ち入りが取り消される"オフリミッツ"は死活問題として、そこで働く人々や業者を震え上がらせた。その他、朝鮮

戦争の特需景気がきっかけでスクラップブームが1952(昭和25)年頃から始まる。それまでの沖縄では至る所に戦車、廃船の残骸や砲弾が散乱していたのであるが"フルガニ"(クズ鉄)が"カネ"になることがわかって、女性や子供までもが野山にスクラップ拾いに繰り出し、産業基盤の貧弱な沖縄経済に貢献、1956年には、その輸出額は砂糖を追い越し、総輸出額の56%を占めるにまで至っている。スクラップ成り金が現れ、子供までが大金を手にすることもあった反面、不発弾で命を落とす人々もあった。沖縄戦で投下された爆弾は約20万トンで、その5%が不発弾と推定され、スクラップ収集中に限らず土木工事中も含めて爆発事故が頻発。1946(昭和21)年～1963(昭和38)年の17年間で673人死亡、1120人が負傷している。この中には密漁目的で火薬を抜き取る作業中の事故も含まれている。

では、この頃の歯科界の動きに目を転じてみよう。歯科医師会再編の動きは、戦後3年目の1947(昭和22)年に早くも見られる。沖縄本島在住の32人がコザ市(現沖縄市)胡屋の沖縄中央病院に集結、「沖縄歯科医学会」が発足。会長には呼びかけ人でもあり戦後の沖縄歯科界の有力者、平良進、幹事には後に立法院議員として活躍した知花英夫やコザ市長になった仲地康之の他、村田哲雄、高江洲義光等が選ばれている。更に会員としては、上原信雄、小那覇全孝の他に若き日の登川正樹や玉城信徳などもその名を連ねている。この年は沖縄にベビーブームが訪れ始めた年でもあるが戦乱の傷跡が充分癒えていない時期にもかかわらず、なりわいを同じくする者達がこうして早くも集いを持ち始めた事は意義深いことである。それから4年の月日が流れ、それまで認められなかった沖縄本島の個人開業(宮古、八重山、奄美群島は自由開業制であった)が1951(昭和26)年開禁されるが、それに伴い医師達の都市地区偏在を避ける目的から開業配置制度が実施される。そして、その配置を実施する為、軍政府の勧告により医師会、歯科医師会が設立されることになる。ところで、この頃発足して5年目を迎えていた沖縄歯科医学会は、実のところ、その活動も下火になり集会も定期的には開かれなくなっていたのであるが、「沖縄歯科医師会」が設立され、歯科界も心機一転、再出発する事になる。会長には沖縄歯科医学会の会長、平良進が就任、副会長には知花朝申、専務理事は高江洲義光といった顔触れでいよいよ歯科医師会らしい活動が始まる。

しかし、1952(昭和27)年4月1日、米軍政府は北緯30度以南の南西諸島の行政区分に突然手直しを加える。それまで奄美、沖縄、宮古、八重山の4群島には、それぞれ独立国並に一つずつ小さな政府が置かれていたのであるが、行政上不便になってきたので、それらの小さな4つの政府を統合して琉球政府を誕生させる。この行政区分の変更に対応して、誕生わずか一年目の沖縄歯科医師会も組織が再編される。こうして、沖縄本島以外に宮古、八重山のみならず現在は鹿児島県に所属する奄美群島までも含む広い版図を統べる「琉球歯科医師会」が誕生。会員数も一気に40人増えそれまでの2倍以上の72人を擁するまでに至る。会長には再度、平良進が就任。「琉球歯科医師会」の誕生により、それまでの「沖縄歯科医師会」そのものはこの時点で他の群島と同格の支部組織扱いになり、新たに「沖縄群島歯科医師会」の名称で、会長に嘉納宏を選んで再出発している。ところが、その翌年の1953(昭和28)年12月25日、米軍統治下を共にしてきた奄美群島だけが切り離されて本土に復帰した為翌1954年4月2日、「琉球歯科医師会」は那覇保健所に於いて解散総会を行い、再び元の「沖縄歯科医師会」に改称、宮古、八重山群島と共に戦後を歩むことになる。この後、沖縄の本土復帰までの18年間に会の名称は一度も変更がなかったことに比べて、会の発足当初は3年間に3度も気ぜわしく名称と機構が変わっている。これは米軍の統治政策がコロコロと変わった為、政府が4度も模様替えをさせられ、そのとばっちりで弱小団体の歯科医師会までも、母親が再婚する度毎に姓が変わる"連れ子"の様に名称を変えていったのである。

ここで、戦後の歯科界の出発点となった「沖縄歯科医学会」について当時、若手(26才)として会に参加していた玉城信徳の証言を中心にまとめてみたい。

玉城によると、この「沖縄歯科医学会」は本島在住の32名の歯科医師達が参集したという点では戦後の歯科医師会のルーツともみなせるが、同時にスタディグループとしての性格も濃かった様である。新しい"アメリカ世"の到来で、アメリカの歯科医療に接した沖縄の歯科医師達、特に若い会員達の好学心は大いに刺激されたらしい。研究会の席上、顎骨々折やノーマ(栄養事情が関係、比較的多発した)などの治験例、印象材、ペニシリンなどについての報告が行われ、玉城もサルファ剤注射に関する研究発表をおこなった。こうして初めの頃は活発な討論や発表もみられたのであるが3回目くらいから研究会も低調となり、その後は尻窄みに終わって新に発足した「沖縄歯科医師会」に移行して行ったらしい。

この時、学ぶ機会が失われたことに対する無念さは若い玉城の心の片隅で消え去らずに残っていた様である。そのことは30年近く経て、1976(昭和51)年、自らが県歯会長に就任した時の行動になって現れる。当時、大勢の若い会員達を率いてスタディグループの育成に青年の様な情熱を燃やしていた伊礼迅(1916～1983)の活動に対して、彼は会の側からの全面的な支援を申し出ている。こうして翌、1977(昭和52)年誕生したのが「歯科臨床談話会」で、その後毎年11月3日文化の日に研究発表が行われる様になるが、1986(昭和61)年度の10回目からは「沖縄歯科医学会」と名称が改まって今日に至っている。

ところでその名称が昭和22年、戦後の混乱の中で生まれた「沖縄歯科医学会」と同名になった事は全くの偶然らしい。昭和61年当時の学術担当理事、饒波正太郎

によれば談話会発足後10年の節目に当たり、内容も充実してきたので学会の名称に移行したに過ぎないという。偶然とは言え戦後の逆境の中から32名の歯科医師達が寄り添って第一歩を踏み出した時の精神は一脈の流れとしてこの同名の学会にも受け継がれていることであろう。

[第二十三話] 孫の誕生

歯科医師会の名称が目まぐるしく二転三転した後、やっと三度目に「沖縄歯科医師会」(以後、沖歯会と略する)で落ち着いた1954(昭和29)年からは戦後の混乱も終息に向かい始め、南歯の前身に当たる「南部支部」に関する資料もこの年度の分からは目にする事ができる。

その1954(昭和29)年から正式に南歯が発足する1970(昭和45)年までの16年間、南部支部の世話役として奉仕に当たって来た支部長及び副支部長達は以下の15名に及ぶ。

1954(昭和29)年5月～1956(昭和31)年2月	嘉手納憑計
1956(昭和31)年5月～1958(昭和33)年5月	上原信雄
1958(昭和33)年5月～1961(昭和36)年5月	友寄英彦　(副支部長:富本盛弘)
1961(昭和36)年5月～1962(昭和37)年5月	富本盛弘
1962(昭和37)年5月～11月	中地康之　(副支部長:阿嘉宗惇)
1962(昭和37)年12月～1964(昭和39)年5月	阿嘉宗惇　(副支部長:西平守廣)
1965(昭和40)年～1966(昭和41)年	村田精太郎(副支部長:中村義宣)
1967(昭和42)年～1969(昭和44)年	金城一史　(副支部長:山田勲)
1970(昭和45)年～1970(昭和45)年	与那城勇　(副支部長:上原斉)



開南歯科医院(院長 金城一史会員)の入り口に掲げられた戦後第一号の県歯の看板。「県」の一文字が見あたらない点に注意。

蛇足ながら、ここに登場する「南部支部長」達と現在の南歯の支部長とを混同してはならない。この当時の支部長は現在の南歯会長のポストに相当するものである。しかし、その半面、当時の支部長達は、事実上、会本部の連絡係、ないしは集金係(会費の口座振り込み制などはまだ無かった)に近い存在であった事実も否めない。1960(昭和35)年、3代目支部長、友寄英彦の時から副支部長も置かれる様になるが、それ以前の支部長達は補佐役もつかず、単独で診療の合間を利用しつつ会務の遂行に当たっている。特に初代の支部長、嘉手納憑計の場合は、自ら各会員の医院まで出向いて会費徴収の労を取ったのであるが、同様の状況はその後もしばらく続く。4代目支部長、富本盛弘は入会した翌年の1960(昭和35)年、南部支部総会で友寄英彦の補佐役という事で副支部長に選ばれたが、友寄が任期半ばで退いた後は28才の若さで、しかも補助者もなしで支部の世話役を引き継いでいる。彼の語るところによれば、支部長としての彼の主な任務は、一人1ドルの本会々費とその集めた会費をバスに乗って普天間の会計担当理事、高良実のもとに届ける事であった。

1958年(昭和33)から1964年(昭和39)までの約7年間沖歯会の会費は1ドルであったが、その1ドルは今日の3000円前後の貨幣価値しか無かった上に会員数が少なかった(1958年の沖歯会会員数は66人)ので予算が乏しく事務職員も抱えられなかった。その為、この様な情況に甘んじていたのであるが、宮古、八重山や支部長が行けない様な所の集金には歯材商、竹富良直の手も借りるという状態が長いこと続いた。

厳しい情況下にあったのは支部長一人に限ったことではなかった。富本を初め草分け期の役員達は皆この様に手間暇のかかる会務の遂行にも手弁当で当たって今日ある歯科医師会を築き上げて来たのである。

会館どころか、会の事務所も戦後しばらくは予算が無い為、設ける事ができなかったので一応、便宜上会長宅に事務所をおくのが慣習になっていたようであるが取りたてて看板などを掲げていたわけでもなかった。その後1962年(昭和37)金城一史が専務の時に初めて、彼の診療所に「沖縄歯科医師会事務所」と書いた看板が掲げられたが、これが戦後第一号の会の看板になる。金城はこの事務所から謄写版印刷の会報や通知の葉書を会員に発送しているが、勿論無報酬でしかも看板代の如き雑費も個人で負担している。その2年後1964年(昭和39)山川文雄(1912～1979)が会長に就任して会事務所は山川歯科内に移るが、その時発行された会報(8月25日号)に初めて「書記を採用、9月1日より那覇市前島町2の235琉球泡盛産業ビル3階に事務所を開設」という旨の報告がなされている。これは当時から準備が進められつつあった現金給付方式の医療保険実施の為に本格的な会の事務所が必要になったからである。泡盛産業ビルとは泊港近くの一角にあるやや古びた建物であったが、時折泡盛の香りさえ漂うこの事務所で沖歯会は以後、現在の会館ができるまでの10年と6ヶ月を過ごす事になる。

しかし1970年代からは会員数も増え"事務所ホール"(当時はそう呼んだ)も手狭になって来て、保険講習会

や総会のたびごとに、ゆうな荘など他の会場を借りて急場をしのぐ有り様であった。総会会場は戦後の20年を通して定まらず転々としている。戦後初期(1954年以降)は那覇市久茂地の教育会館がよく利用されたが、その他、那覇保健所、昭和会館、岸本ホール、コザの大和、名護の双葉荘でも開かれている。南歯発会の舞台となった、ひめゆり通りの幸楽(現メゾン幸楽)もよく利用されたが、役員達はハーバービュークラブ(現ハーバービューホテル)やシーメンズクラブの様な米軍施設や、松の下、味作、左馬でも集まっている。

会議の飲食費は自弁の時代で、そう度々こういった場所で集まっているわけにもゆかなかったので会長宅、理事宅もよく利用された。村田哲雄(1918～1970)が副会長の頃は彼の自宅も理事会の場に供された。「うちの二階は涼しいので皆のたまり場になっていてね、平良先生や山川先生、小那覇先生、川原先生なんかがしょっちゅうやって来て夜遅くまで酒飲みながら会議をやっていたさ」と未亡人の村田芳子(1999年4月まで開南で開業)は当時を忍ぶ。玉城信徳も県歯会長当時「会長を長いこと続けていたら財産を食いつぶしてしまうよ」と冗談まじりに周りの会員にもらした事があるが、この頃までは、この様な情況であったので会長のなり手が無くて、人選に難航する時代でもあった。

この困難な時代の役員や会員達の奉仕と自己犠牲があったからこそ、今日の歯科医師会もあるという事実は忘れてはなるまい。

しかし、この様な無理な状態はいつまでも続けるわけにもゆかない。何らかの打開策が必要になりつつあった。さてその頃、南部支部内でいくつかの小グループが生まれ始めていた。それは最寄りの会員や気心の知れた者同志が核となって作られた10人前後から成る摸合グループであったが、支部組織内に生まれた"子"に当たる組織でもあるから、沖歯会からすれば"孫"が誕生した事にもなる。

富本は1959年(昭和34)に入会したが「十日会」という摸合グループがあると誘われて、さっそく参加している。その前後にも「二十一日会」「五日会」といった集会日を名称にした摸合グループが誕生しているが、それらの集会の場では会費の徴収も行ったので支部長に取っては好都合であった。その他診療に関する情報の交換や、自由診療時代につきものの料金問題が議題に上がることもあった。時代こそ異なるものの会員達が一日の診療を終えてのひと時、夕餉を共にしつつ意見を活発に交わす光景は今日の南歯の支部集会を彷彿とさせるものがあったようである。

しかし、どのグループも共通に目指していたことは、会員相互の親睦であった。それは、当時の時代的な背景から出た事でもあったらしい。1954年から1966年までの12年間は何らの医療保険も公定料金もない全くの自由診療時代であったので、その為に幾つかの弊害が見られる事もあった。医療保険が無い為に受信率が低く歯科医師数が少なかったにもかかわらず、地域によっては医院間に競合関係が生じ、料金の値下げ競争が見られる事もあったようである。又、戦前にもあったことであるが、冠製作前の根管治療の料金や義歯製作前提の抜歯代金を免除することも行われた。これらの傾向は場合によっては診療内容を低下させる危険性もはらんでいる。西平守廣は1960年(昭和35)首里で開業を始めたが「3軒あった歯科医院の間で患者の取り合いになったことがある」と当時の情況について触れている。

その様な背景があった為、不要な摩擦を除き円滑な開業を目指すべくサブグループが自然発生的に形成されていったものと考えられるが、この事は自然の摂理にもかなっていたといえよう。そして、支部会員達の声無き声がやがて形を取ったのが南歯の誕生であり、これらのサブグループは南歯誕生に際してその支部組織作りのヒントにもなり母胎ともなったのである。



1960年　ハーゲン大佐送別会

[第二十四話]“矢面に立たされた医療人達”

[蝉の生涯]

今日我が国で医療保険制度は全ての国民にとってあたかも大気の如き存在とさえなっており、この制度の無い生活はもはや想像できない。しかし、戦後の沖縄では、その医療保険制度が全く存在しない生活が21年間（その中、最初の3年間は無料診療が行われていたので事実上保険は不要であった）も営まれている。1966（昭和41）年になって初めて医療保険制度が施行に至るがそれとても現行の現物給付制と全く異なり、フランスなどで行われている「現金給付方式」と呼ばれるものであった。これは患者が一旦、医療機関で診療費を支払って、後で保険事務所で払い戻しを受けるという方式で、各医療機関がそれぞれの判断で料金を徴収する事もでき、しかも診療内容に関して当局の規制も無く自由診療制の要素が残されていたが、払い戻し事務が不便で患者側の評判は良くなかった。しかも、この保険に加入できたのは生活が比較的に安定した4割の住民層のみで、残りの更に保険を必要とする階層には救いの手が差し伸べられていなかった。そして、走り出して3年目には本土復帰が決まって復帰準備態勢に入り、その運営方針で医療側と政府側の確執が深まり、1971年12月17日から医療側は保険医総辞退を決行。走り出して間も無いこの制度はここで消滅してしまう。

昆虫の蝉は、7年間も暗い地中で幼虫の期間を過ごさねばならないのに地上ではわずか一週間しか生きられないというが、この沖縄独自の保険制度も11年間の準備期間を経てやっと陽の目を見たにもかかわらず施行後はわずか5年5ケ月ではかなくも姿を消してしまう。以下その紆余曲折に満ちた保険制度の顛末を追ってみたい。

[米軍公衆衛生で大いに貢献する]

殺虫剤のDDTは今でこそ人体への影響故用いられなくなっているが戦後しばらくの間、沖縄では便所や下水に散布されたり、野球場の白線の代用、シラミ退治などと実によく活用されたものであった。昼下がりの小学校の校庭の木の下でシラミ退治の為、頭が真っ白になるまでDDTを浴びせかけられて無邪気にはしゃぐ子供達の姿は戦後史の一コマでもある。特に戦後蔓延を極めたマラリヤや日本脳炎（1947年16万人がマラリヤに罹患、死者909人、1953年日本脳炎で213人罹患、67人死亡）の媒介源である蚊の駆除にも米軍当局はこれ等の殺虫剤を2000人にも及ぶ衛生労務者や飛行機などで大量に用いて制圧。そのおかげで戦争後に爆発的に流行するといわれていた伝染病が最小限でくい止められている。それ以外にも彼らはこの当時、結核や他の伝染病対策などの公衆衛生面にはかなり力を注いでいる。公看（公衆衛生看護婦）を各地に常駐させて結核患者の保護や指導に当たらせたり、戦後しばらく経ってではあるが、齲蝕予防の為、水道水のフッ化物添加を行うなど公衆衛生の分野ではかなりの実績を上げている。とりわけ性病予防には占領当初から神経をとがらせ、その対策の為に保健所も設置したのだという。（沖縄県長寿のあしあと）

ところで、彼らがこの様に公衆衛生に特に力を注いだ本音は沖縄住民の健康を気ずかったからというよりも、米軍将兵を性病その他の伝染病から保護することにあったからであり、性病予防に重点が置かれたのも、沖縄駐留軍兵士の罹患率が全米軍中で最も高かったからに過ぎないという。そして性病と赤痢、食中毒などの伝染病から米人達を守る目的で彼らの出入りするバー、キャバレーやレストランなどには「Aサイン」と称する厳しい認可制を設けている。

さて、真意は如何にあれ、この様に公衆衛生面では大いに沖縄住民にも貢献してくれた米軍であったが、こと住民の医療保険制定に関しては全く消極的であった。最初の頃は資金が無いという口実で取り合おうとさえしていない。米本国自体にも存在しない皆保険制度を占領地住民に施す事など最初から乗り気でなかったのも無理からぬ事かもしれない。しかし、それだけが原因で18年近くも医療保険の実施が遅れたのであろうか？

[黒船来航！]

戦後沖縄の公営医療は医療人達の声に押されて段階的に自由化の道を歩んで行った。戦後7年目の1951年からは配置制の型を取って個人開業が解禁され、更に3年後の1954（昭和29）年には完全な自由開業の時代を迎える。丁度その翌年の沖縄の歯科界の消息を伝える座談会記事が日本歯科評論（昭和30年11月号）に掲載されているが、座談会の話題が健康保険制に及んだところでの司会者、高津弐と沖縄歯科医師会会長、平良進の対話に注目したい。

司会者「今はどうなんでしょう。どうもアメリカさん健保は嫌いらしいんだが・・・・」
平良（笑って）「まだアメリカさんの方へは話を持ち出していないんですが、どうもそうらしいですな。」
司会者「健保がないとありがたいですネ・・・」
平良「そうなんです。自由診療だけですから・・・」
司会者「まあ、無い方が歯科医にはいいですね」
平良「しかし、医療を受ける事の出来ない人が多いんで惨めな人も相当におりますんで、世論をそこまで昂めるという必要もあるわけですが..（以下省略）」

この記事からもうかがい知る事が出来るが当時の日本本土では医療保険に対して開業医達がかなり不満をもっていた事も一つの事実であるようだ。そして、その情報を伝え聞いている沖縄の歯科医達は、戦後10年目に

して勝ち取った自由診療制こそが歯科臨床に取って最も理想的な制度であり、目下自分達は最も恵まれた境遇におかれているのだという認識があったらしい。そして、自由診療制の下、アメリカの進んだ歯科の影響も受けて、近代的な臨床を手掛けているのだという自負も彼らにはあった様である。

しかし、この座談会の司会者、高津がその後2年経って沖縄を旅行した際、中部で開業している友人が足踏みエンジンを未だに使用している現場を目撃して驚いている。(歯科評論昭和32年2月号)

更に、その報告を裏づける様にその後1965(昭和40)年厚生省の技官、稲葉利正が沖縄を訪問した際の報告記事にレントゲンの普及率が歯科医88名中約20台、エアータービンの普及率が約70%と報告しており、米軍統治下の自由診療体制下で特にアメリカナイズされたり近代化されていたとは速断できない様である。

しかし、歯科を含めて当時の沖縄の医療界には現状肯定派が主流を占めており、新たに保険制度を導入しようという雰囲気よりむしろ、自由診療制を今更未知の制度によって撹乱されたくないという空気が支配的であった様である。それ故この当時から始まった医療保険制度導入の話は医療人達にとってまさに、太平の夢を覚ます"黒船来航"の響きさえあったのではないだろうか？そういった背景があって、座談会の席で、平良も保険制度の必要性を認めながらも一方では自由診療制を称賛する本音の発言もしていたものと推察される。

さて、話がさかのぼり、1948年から貨幣経済再開に伴い医療費も有料となった時、医療制度は未だ公営であったので低料金であったが1951(昭和26)年個人開業制が解禁された時から、医療費負担は住民の生計に影響を及ぼすものとなって行く。医師達は自由診療時代の到来を喜び合ったが患者達、特に疾病と貧困の悪循環を嘆く階層の人々は公営医療も医療保険制もいずれも無い時代の険しい道を歩み始める事になる。こうして、医療保険制度発足を求める声は巷に高まって行く。そして、その声に押されて、翌1955(昭和30)年琉球政府社会局は本土の医療保険制度を下敷きにして草案作りに取り掛かり始める。

[医療保険アメリカから見捨てられる]

行政側は草案着手2年後の1957(昭和32)年初めての公聴会を開く。その頃から医療側は本土保険の問題点について調査研究を進めていたので、公聴会の場でも本土の医療保険制度が抱えていた財政危機の問題などを具体的に引き合いに出して、政府草案の不備を指摘。「この際沖縄独自の理想的な法案を作るべきである」と主張する。この時は政府側もそれを認め、二度目の公聴会の後、法案を根本的に練り直すことになる。

その後、政府は厚生省の助言指導も取り入れて、1958(昭和33)年1月に新しい構想を発表。骨子は「琉球政府管掌による全住民対象の現金給付方式。当局は、診療内容に立ち入った規制を加えない」といった医療側が受け入れやすい内容であった。そして同年12月行政主席(県知事に相当。1968年までは米軍側が任命)の諮問機関として「医療保険制度創設審議会」が発足。学識経験者10名、医療担当者10名(医師会7名、歯科医師会2名薬剤師会1名)政府職員3名、公益代表2名の計25名が選ばれ審議に当たり始める。しかし3ケ月で10回に及ぶ審議を重ねたにもかかわらず、保険財政が隘路となって審議会と政府側の意見の対立が解消されなかった。赤字財政が生じた際の処理方法に関して審議会は「政府が負担すべきである」と主張したのに対して、政府側は一般会計からの補填に最後まで難色を示す。ここで両者の完全な歩み寄りが得られない平行状態がしばらく続くが、政府は審議会の完全な同意が得られないまま、1960(昭和35)年5月立法化に踏み切ろうとする。そして、米国民政府に"事前調整"つまりお伺いをたてたところがこの場に及んで、米国民政府は何と「ノー」の回答をする。

琉球政府はこの草案の着手に当たっては1955年8月に民政副長官からメッセージの形ではあるが内諾を得ていたのでここまで法案の作業を進めて来たのであったが、高等弁務官室から行政主席宛に送られて来た5月3日付の書簡には「米国民政府は医療保険制度の援助は出来ない。従って保険制度を作るならば琉球政府の自己財源でまかなわなければならないが、それには当初5人以上の事業所の被用者とその家族からスタートして漸次対象を拡大して行くべきであろう。」といった主旨の事が記されていた。財政上頼みの綱とあてこんでいたアメリカ側に土壇場で手を引かれたとあってはなすすべも無い。5年間もかけて練って来た法案はこの様ないきさつから審議未了という形を取って葬られてしまう。(我喜屋良一、『沖縄における社会福祉の形成と展開』

[未熟児の誕生]

その後保険法案は皆保険から大きく後退して、「5人以上の事業所とその家族からスタートして段階的に対象を拡大する」という段階的実施案で新たに出直す。ところが、ここでも現金給付に対する反対論があったり、どの住民層から始めるべきかなどで行政府、医療側、労働団体などそれぞれの思惑が絡んで折り合いがなかなかつかず、ここでまた5年の歳月が流れてしまう。そして1965(昭和40)年になってようやく沖縄独自の医療保険法は陽の目をみる。立法院に於ける与野党の激しい対立の揚げ句、野党退場のままで可決されたこの法案は、いわば"帝王切開"で生み出された様なものであったが、この時生まれた保険制度自体も又未熟児の様に不完全なものであった。法案作りの当初は皆保険を目指していたはずであったが、財源の裏づけの無い哀しさでいつしか理想から大きくそれて、全住民の約4割のみを対象とする貧弱な制度に変貌し果てていた。しかもその恩

恵に浴したのは官公労などの様な組織化された5人以上の事業所に働く比較的生活も安定した階層の人々で、残りの最も医療保険を必要とする農漁民や零細企業に所属する階層の約56万人は除外されていた。

この時採用された沖縄独自の現金給付方式にはそれまで開業医が慣れ親しんできた自由診療制の要素も残されており医療側に取っては都合の良い制度で、点数表や療養担当規則などにしばられることもなくのびのびと診療に専念でき料金も自らの判断で徴収できた。

しかし、患者側からの受けは芳しくなかった。

(1)まず診療費を全額窓口で納めねばならないので、高額を要する治療の時には患者の経済負担が大きかった。

(2)払戻し事務が繁雑で日数を要し不便であった。

払い戻しを受けるには医療機関の「診療料金受取証」(明細書つきの領収証)を持参して保険事務所へ出頭、その後その明細書の審査と査定が終わった時点で再び保険事務所へ出向かねばならない。おまけに医療機関によっては領収書を請求されても事務の都合でその日のうちに発行できない場合もあったので二度も三度も交通費をかけて足を運ばねばならず時間的、経済的に負担になるという苦情も少なからずあった。その為、少額の治療費の場合は償還を放棄する者が多かった。それに加えて、保険料を天引きされていても保険を利用しない被保険者がかなり居たので剰余金が見る見る中にたまって行き、この保険が施行されていた5年間でその額は何と2,881万ドルにまで膨れ上がっている。因にその資金はその後、医療福祉基金に充てられ「沖縄健康増進センター」が作られ、県歯も会館建設に際して一部その恩恵に浴して居る。

[三師会ヤリ玉に上げられる]

この様に多くの問題をはらみながらも、この保険制度はひとまず走りだすが、さっそくその翌年からは最初に目指して居た皆保険へ向けての見直し作業が始められる。そして、その法案に取り組んで居る最中の1969年沖縄の本土復帰が決まり、今度は本土の現物給付保険へ移行する準備体制に入る。

ところで、その前年には主席が公選制となり、屋良朝苗を主席とする革新政権が誕生、それまでの与党自民党は18議席を擁する多数野党の立場にまわっていた。

屋良の率いる行政府は復帰へ向けての構想として、既存の政府管掌保険に加えて新たに市町村管掌の国民健康保険を発足させて、皆保険を目指そうとする。この政府側の"二本立て案"に対して、医療側の三師会(医師会、歯科医師会、薬剤師会はこの名称の下に協力体制を取っていた)と自民党は市町村財政の基盤の弱さを理由に沖縄全体を一括して政府管掌とする"一本立て案"を主張。ここで両陣営は又もや真っ向から対立する。しかし結局1971(昭和46)年9月30日、「沖縄全体を政府管掌で一括する」という自民党の修正案が立法院で可決される。

この修正案が法律になるには主席の署名が必要であったが、屋良は自らの支持母体である革新団体が三師会と自民党の主張する法案に反対していたので、ここで署名を拒否。それに対し三師会は主席に「もし署名が得られず同修正案が廃案になる様な事があれば我々は保険医を総辞退する」と通告して署名を迫る。しかし屋良は署名を拒否し続け結局修正案は廃案となり、三師会も12月17日から保険医総辞退を決行。米軍統治下の沖縄に生まれた現金給付方式の医療保険はここに至り5年5ケ月の短い生涯を閉じ、12月17日から翌1972年5月5日の本土復帰で現行の医療保険が施行されるまでの約5ケ月間、沖縄には再び医療保険の存在しない空白期間が生ずる。そして、「本土保険制度の欠陥を改めて沖縄独自の理想的な法案を作ろう」と13年前に立てられた計画もここで見果てぬ夢と潰えてしまう。

また、三師会が保険医の総辞退を決行したことは復帰前夜の沖縄を一段と騒がしいものにする。マスコミを先頭に革新団体は「医療人の責任を忘れた暴挙」と決めつけ、労働団体幹部の中には辞退者氏名を公表せよとまでいきまく場面もあり、又、被保険者団体の代表からは「医師会側が現物給付実施を引き伸ばそうとしている」となじられてもいて、この頃の医療人はすっかり"憎まれ役"に仕立てられた感がある。医療側は本土の市町村管掌の国保が各自治体で連携なしに運営している為、貧富の差が生じ、中には過疎で財政が危機に瀕している事例が見られたり、財政基盤の貧弱な市町村では医療スタッフの確保にも支障を来していて医療サービスの内容も低下しているなどの問題点を指摘。「本土の国保の失敗を他山の石として、将来への長期の展望から、沖縄を統一ブロックとする沖縄独自の政府管掌の国保を作るべきである」と主張したのであるが、時の政権に受け入れられずこの様な不本意な仕儀に終わったのであった。

米軍統治下の沖縄で作られた制度がかくも紆余曲折に満ち満ちた転帰を取った事の真相を今日極める事は困難であるが、要因としては統治者の米国の支援を欠いた為に、財政的に無理があった事、医療側、行政側、労働団体のそれぞれの立場と思惑の絡み合いから話がなかなかまとまらなかった事—などが上げられる。尚、賛否が最後まで分かれた現金給付方式については、本土の医療保険が当時赤字財政で悩んでいた事からその打開策として厚生省が「沖縄でテストケースとして推進した」とする見解(「沖縄社協創立三十周年記念誌」、琉球大学医学部付属地域医療研究センター「沖縄の歴史と医療史」)もある。

[第二十五話] 南歯誕生

1965(昭和40)年8月19日、時の内閣総理大臣、佐藤栄作は総理として戦後初めての沖縄訪問に際して「沖縄の復帰なくして日本の戦後は終わらない」と語ったが事実、沖縄の戦後は20年以上経ったこの時点でも延々と続いていた。

その翌年(昭和41年)には米国民政府が沖縄の上訴裁判所の裁判権を取り上げるという強権を発動(サンマ課税裁判)して問題が紛糾。その前後にも米人ハンターによる住民誤射事件が相次いで発生したり、青信号で横断中の12才の少年を轢いて死に至らしめた米兵に無罪判決が下される事件、米人車輌の轢き逃げに端を発した「コザ暴動」(興奮した群衆が米人車輌30台以上に放火、武装兵200人が出動した)などが発生している。

無国籍の状態に置かれていたというのもこの頃の特徴の一つである。日の丸の旗は当時は祖国との精神的なつながりの象徴として革新団体が住民に掲揚を呼びかけ、時には米兵に破り棄てられる事件なども起こって住民の反発を招く様なこともあったが、戦後27年の間には心情論だけでは片付けられない場面も見られた。

遠洋航海に出掛ける沖縄の船舶には日の丸の使用が許されなかった為"国籍不明船"として入港を拒否されたり、拿捕されたりした。1962(昭和37)年にはインドネシアのモロタイ島付近で操業中のマグロ漁船が飛行機から銃撃を受け4人が負傷、1人は死亡するという悲劇さえ起こっている。本土渡航に際してもパスポートが必要で、人々は「日本まで行ってくる」という表現をしていた。

こういった環境下で生まれ育った子供達の中には自分の国籍がはっきり答えられぬ者がいても無理も無い。「あなたはどこの国の子供ですか?」というある調査に対して約1%が「アメリカ」と答えたという。こうして、本土復帰を求める声は日増しに高まってゆき、終に1969(昭和44)年11月21日佐藤・ニクソン会談で沖縄の本土復帰が3年後の1972(昭和47)年と決定され、沖縄中の組織や団体はこぞって「世替わり」を迎える準備態勢に入って行く。

[つつましやかな船出]

その頃の沖縄では1966(昭和41)年から始まった現金給付方式の医療保険が施行されているところであった。そして、医療界は1966年から琉大医学部設置に取り組み始めている。一方、1970(昭和45)年5月31日金城一史から南部支部長の任を引き継いだ与那城勇は、本土復帰を視野に入れつつ前任者時代からの懸案事項でもあった支部組織の整備拡充に乗り出す。それは増加傾向が著しかった支部会員数(64名)への対応、いずれは導入される本土の現物給付方式の医療保険の受け入れ体制づくりなど将来への展望から導き出された帰結でもあった。彼は他府県の支部組織の活動に関する情報を取り寄せて、それらを参考にしつつ立案と計画に打ち込んだ。そして一支部であった南部支部は同年7月18日、料亭幸楽に於いて緊急臨時総会を開き会の名称を「南部地区歯科医師会」と変更する。

こうして戦後二度目の世替りを迎えるに当たり、ここに南歯が誕生するのであるがその執行体制たるや、会長の与那城(当時54才)以外に副会長上原斉(33才)、山田勲(31才)のわずか3人のみという今からすればまことにつつましやかな船出であった。しかし彼らは3人だけの執行部の手不足を補う善後策として会員64名を1班から6班までのグループに編成して、連絡網を開発、世話役の班長を配した。

その後「班」によるグループ編成には軍隊組織を思わせるところがあってイメージが悪いという意見もあり、代わりに「支部」の名称を用いる様になり牧志支部、松尾支部、開南支部、崇元寺支部、城南支部、南支部が誕生。この時から、その世話役は支部長と呼ばれるようになる。又、支部名はその時々の実態に即して流動的に変えられて行った。

3代目会長　嶺井浩の時には牧志支部、松尾支部、開南支部、泊支部、首里支部、南支部、糸満支部、浦添支部、安里支部、若狭支部の10支部に91人が割り振られており1987(昭和62)年、7代目会長　友利政三の時から那覇東、那覇西、真和志、小禄、首里、浦添、糸満、豊見城、島尻の9支部に再編成され現在に至っている。

尚、その後各支部の会員数が20人前後になってきて世話役の支部長一人では手不足になってきたので、友利執行部の時から介助役の「班長」を設けることになったがその17年前、南歯発足当初の「班長」と偶然同じ呼び名になっている点が面白い。

ところで、南歯の最初の班編成はそれまでの既存の模合グループがヒントとなり行われたのであるが、その点では末端会員の意向が反映されたものであったと言える。その後、各支部は適宜集会の曜日によって、二木会、三金会、三水会等の愛称の月例会を開く様になり、会員相互の親睦、情報伝達、末端会員の生の声を吸い上げる場として会員に広く親しまれる様になり南歯の底辺を固めて行く。

初代執行部は自らのチェック機構と諮問機関として今日の代議員会のルーツに相当する「運営委員会」を設けたり、日歯の委託事業の歯科助手認定講座(P145写真参照)に先鞭をつけるなどの業績を残している。なかんづく、特記すべきは、いずれ法人格を取得しようという腹案の下に南歯の最初の定款を世に問うたということである。

知花朝敏、永井長秀、西平守廣他の「定款運営委員会」の協力を得て準備されたこの草案は南歯発足後早々2年目の1972(昭和47)年3月17日料亭幸楽に於ける臨時総会に諮られた。席上、社団法人移行に関し

て二三の疑義が出されたが、最後に当山良子(1918～1984)が「私は戦前から開業していますがこの様に整備された定款は初めて見ました。皆様賛成して下さい」と呼びかけ、拍手で以て承認されている。その後南歯の発足がきっかけとなって、中北部、宮古、八重山支部も地区歯科医師会へと発展。南歯は"先駆け"の役目も果たしている。

この様に精力的な第一歩を踏み出した南歯ではあったがその前途には未解決の問題や不備が山積していた。まず第一に上部組織である県歯さえ、会館を持たず泡盛産業の3階を賃借りしている有り様であったので南歯は事務所どころか職員を抱えることもあたわず手弁当で3人の執行部は会務を処理している。1978(昭和53)年度からは役員理事手当も出る様になるが、それまでの初代与那城勇、二代目高良政利、三代目嶺井浩の3執行部役員は無報酬で会務を遂行。会費徴収も高良政利の時から"便利"な口座引き去り制になるが、それまでは支部会の席を利用して行っている。未納者の診療所には初執行部の山田も出掛けて行き、"ゆんたく"をしながら集金をして来る事もよくあったという。通知の文書はガリ版を利用したが、事務職員がいないので急ぐ場合には手書きの書面をコピーして間に合わせたりもしている。「あの頃は確かに不便で何もかも遅れていたが古き良き時代で、精神的な面ではむしろ満たされていた」と山田は当時を懐かしむ。

定款制定の翌月、4月30日、南歯は那覇市安里のオリオン会館(現、ホテル西武オリオン)で昭和47年度定期総会を開催、その時の新役員人事からは3人だけの執行部体制を抜け出し以下の如くに、理事と監事が加わり一歩現在の体制に近ずいている。新役員、会長、与那城勇、副会長、高江洲旭、専務理事、山田勲、理事、兼浜政勝、阿嘉昭宗、監事、上原信雄、高良政利。(写真参照)



3年目を迎えた与那城執行部(オリオン会館)

そしてその総会の約2週間後の5月15日、沖縄は本土に復帰、四半世紀以上の長きに及んだ"戦後"も終わり県民(それまでは住民又は島民と呼ばれた)はパスポート無しで気軽に本土に出掛けられる様になる。沖縄歯科医師会もゆうな荘で解散総会を開き、戦後27年間使用を許されなかった"県"の一文字を名称に加えて「沖縄県歯科医師会」として新たな一歩を踏み出している。

[その後の南歯]

さて南歯は創立の時点で復帰後の展望から法人化を念頭に定款も制定したのであるが法人の登記は復帰後もしばらくは見送られたままになっていた。しかしその後次第に会の組織が充実して来るに従い、法人格を持たない事が会の独自の活動と発展を妨げる様になって行く。行政側との折衝に於いても任意団体というだけでは信用が得られない。デンタルフェアを例に取れば、南歯は第一線に立って活動を展開しておきながら、市からの補助金も直接受けられず、県歯を経由して受け取らねばならないというまどろっかしさがあった。共済金に対する非課税措置も法人でないと受けられない。その様な事情に迫られて、終に1987(昭和62)年、6第目会長、友利政三の執行部(副会長高江洲正勝、専務理事新城啓和)の時に南歯は社団法人に移行する。

会の発足後実に17年目の事であった。それから更に月日が流れ、1987年(平成10年)現在南歯の会員数は233名(発足当初64名)事務職員2名(発足当初0)役員と委員総数は会誌編纂委員までも含めると51名(発足当初3名)、予算総額26,763,000円にまで達している。会発足時初年度の予算は1477ドル23セントであったので丁度50倍になった計算になる。その事業内容もデンタルフェア、学校歯科関係から税務講習会、医政連等と多岐にわたっている。特に5代目会長 玉木史朗の時から発行され始めた会誌「南部地区歯科医師会だより」はその後平成6年から「綾羽」と名称が改められたが、その読み易く親しみ易い内容により南歯と会員を密接につなぐ事で大いに貢献、間もなく20年目を迎える。

今一つ、南歯の事業で自慢の種は20年以上も続けられて来て、伝統にもなっている家族忘年会である。会場の和やかさからも家族的な南歯の空気が伝わってくるが、毎年400人から500人が恒例の年忘れに参集、今や南歯の行事の"季語"にさえなりつつある。

更に目下、南歯が重点的に取り組んでいる事業がもう一つある。間もなく30周年を迎えようとしている本会の会史の編纂である。十年一昔と言われるが、30年ともなると立派に歴史と呼べる。振り返ってみると、戦前には会史の編纂がなされていない。1943年勅令団体になった県歯は専従職員も擁し、事務所も構え又、会設立後24年目にはいっていたので沿革がまとめられていてもよさそうであったが、その様な動きはなかったらしい。個人的には友寄英彦や嘉納宏が会の経緯を記事として発表した事があるらしいが組織的な会の事業としては残されていない(永井長秀談)。

戦時体制下の全体主義の社会は文化的には不毛の時代であったとみられる。県歯はその後1986(昭和61)年会長 比嘉良有の時、即ち沖縄県に初めての歯科医師会が誕生して46年目にして、最初の会史を物して

いるが、その背景としては会に色々な意味でのゆとりが生まれていたということも言えよう。その観点からも、今日、南歯が30周年を目前に、その境地に達したという事は喜ぶべきことであり又誇らしい事でもある。

［今にして思えば･･･］

ここまで発展を遂げて来た南歯であるが、その出発点に立ち戻って再点検をしてみると、その第一歩は沖縄の歯科界から必ずしも双手をあげての祝福を受けていなかった様である。発足早々に“親”に相当する県歯と肩を並べて定款を制定、しかも法人化も目指すという初代の執行部の計画案からは確かに血気盛んな青年達の動きにも似た性急さが感じられたのかもしれない。独立したがる息子をなだめる親の心境から出たものかとも思われるが「会費負担が増えるではないか」「何故、第二組合的な組織を作る必要があるか？」「城の中に城を造るな」などの懸念や批判が投げかけられていた事も事実である。

「今にして思えば、あの頃の私は、まず走りだしてから試行錯誤を繰り返していた様で、周辺との調和までには配慮がゆき届いていなかったかもしれない。その為に先を急ぎすぎる様に映ったのかもしれない」と与那城は30年近い昔の南歯発足当初に思いを馳せる。「しかし若い会員達がかくも生き生きと活躍している現在の南歯の姿に触れたりすると又、あれでも良かったのかなとも思う」と付け加えている。

「終わり良ければ全て良し」とも言うが終わりの無い歴史を語る場合、その歴史的な評価は時の流れにより定まるところが無い。しかし誰かその第一歩を踏み出す者がいなければ歴史も生まれて来ない―という事だけは確かな様である。

[第二十六話] 二足のワラジを履いた歯科医達――南歯人物伝――

［沖縄のチャップリン登場］

終戦直後の沖縄で多くの人々が愛する者や身近な者を奪われ悲しみに打ちひしがれていた頃、一人の男が現れて、彼らに忘れられていた笑いを取り戻してくれた。

男の名前は小那覇舞天（ブーテン）（本名、小那覇全孝）或いは単に“ブーテン”と言った。彼は三味線を片手に、絶望のどん底にあった人々を軽妙な沖縄風のギャグで笑わせつつも、説いて回った。「死んだ人達の事をいつまでもくよくよ悲しんでいても始まらないじゃないか。亡くなった人達の為にも明るく生きて一日も早く、この郷土を復興させようではないか！」 彼の人気は日増しに高まり戦後の沖縄で老いも若きもその名を知らぬ者がいない程の売れっ子になって行く。

当時のブーテンは沖縄諮詢会（琉球政府の前身）の文化芸術課長という、いかめしい肩書があったにもかかわらず、一番弟子の照屋林助（この頃は同委員会付の運転手）とコンビを組んで住民達に“笑いの種の配給”を届ける為、沖縄中を東奔西走。彼の創始した沖縄漫談の流れはその後、照屋林助のワタブーショーや登川誠仁などの芸に受け継がれて行くが、更にその後、彼は乙姫劇団、フォーシスターズも育て上げ沖縄の大衆芸能の基礎を完成。“沖縄のチャップリン”と称される所以でもある。

彼の生業は元々歯科医であったが喜劇人のイメージが余りに強かった為、その事は余り知られていなかった様である。

その為か、彼は司会役を依頼されたりすると、時折「皆さん、私は歯医者でありますが、シカイ（歯科医）がシカイ（司会）をしますと併せてヤッカイ（八回）ということになりまして････」などと駄洒落を飛ばしたりもした。日本歯科医専（旧、日本歯科大学）在学中は、とある寺に下宿していたが生来、器用な彼は門前の小僧の類で般若心経をいつの間にか覚え込んでしまっていた。そこである日住職の代理で檀家に読経に行く羽目になり、立派な袈裟に身を包んで若い僧侶よろしく、経を唱え始めたが正式に全部は教わっていなかったので後半部にさしかかると怪しくなってしまった。しかし彼は動ずるところも見せず、おもむろに琉球民謡のチジュヤー（浜千鳥）節を厳かに唸り続けて見事に代役を済ませたという。この様にひょうきんなブーテンも、喜劇人によくある事だが、彼の長男、小那覇全人（元、ラジオ沖縄編成部長、現在方言ニュスキャスター）によれば診療中や家庭に在る時は寡黙でむしろ謹厳そのものでさえあったという。芸能活動のみならず、半世紀近くに亘って母校二中（現、那覇高等学校）の城岳同窓会長を勤め、更に一方では、沖縄歯科医師会の会長職も一期



小那覇全孝と当時の会員達

(1960～1962)果たしており、彼は正に二足のわらじを見事に履きこなした医療人でもあった。

ところで、彼の様に生業以外の分野で活躍したり、あるいは卓越した才能で世に知られた歯科医人は戦前戦後を通じて彼一人にとどまらない。このよもやま話の最終稿ではその様な南歯の文化人達の横顔に触れてみたい。

[芸達者な歯科医達]

まず意外な人物から始めると、沖縄歯科研修同好会の生みの親であり育ての親、伊礼迅は、大の勉強家として全国の歯科界でも広く知られていたが、その彼にはハーモニカ演奏という特技があった。ハーモニカは明治24年に日本に紹介されて以来、その手軽さから全国の若者の間に広く愛用される様になったが、伊礼はその道では沖縄一の奏者として知られ、コンクールの審査員の経験もある程の技量であったらしいが、肺結核で断念したと伝えられている。

ハーモニカの次に尺八に移ろう。尺八という名称はその「一尺八寸」の長さに由来し、虚無僧が門付けに用いて広まったというが、琉球民謡の本場沖縄では多少土地柄に馴みにくいという印象を受ける向きもあろう。しかし、夜のしじまの中を寥々と響き渡ってくる、その澄んだ音色には禅味さえ込められているものでもある。

南部支部三代目支部長、富本盛弘はその尺八の都山流の名取で「竹琳軒大師範、富本華山」と号し、都山流尺八楽会評議員と沖縄県支部支部長を務めており、現在も木曜日には後進の指導に当たっている。大阪歯科大学在学中、友人の勧めにより入門、その後40年以上の長きにわたって琉球民謡の勢力の強い沖縄で邦楽の灯を点し続けている。その業績を買われ、現在沖縄県邦楽協会の名誉会長の地位にもある。

更に芸能関係では、最後の南部支部長、金城一史が世に広く知られている。"二足のわらじ"どころか"何足ものわらじ"を同時に履く程多芸な彼は、写真、絵画の部門で沖展、県芸術祭、沖縄二科展等に数度に亙って入選。琉歌の分野でも10曲以上を世に送りだし琉歌百選の中に彼の作品も収載されている。そのレパートリーは更に歌謡曲にまでも及び、彼の作詞による「君いずこ」は全国歌謡祭で多数の作詞家達に伍して競い9位を受賞。その他の作品も日本著作権協会に登録。代表作に「南十字の見える島」(曲、普久原恒男)「旅路」(曲、普久原恒男)「デイゴの故郷〔ふるさと〕」(曲、渡口政信)がある。南歯の広報誌「綾羽」の命名も彼の琉歌がヒントになったと担当理事、友寄清順は述べている。

[歯科でなりわいを立てる詩人達]

〈瀬底月城〉

波穏やかな佐敷町津波古の馬天港近くで開業している瀬底正俊は「月城」の俳号で長年に亙って沖縄タイムスの俳壇の選者と沖縄県俳句協会の長を務めた経歴を持つ沖縄俳壇の大長老でもある。医院の一隅に自作の句の「句碑」に並べて、抜去歯牙を祀る「歯塚」も建立。我々、歯科医が医療廃棄物として、特にためらう事もなく日頃、処分している抜去歯牙をその塚に納め、折に触れ、般若心経を唱えるなどの供養までもしていると聞く。いかにも俳人らしい細やかさである。

若い頃は画家志望で大阪に渡ったが、ひょんな事から歯科医になったと笑って語る。昭和19年から半世紀以上の句歴を誇るが、そのきっかけは青年時代の恋文と日記から始まったとのこと。

この機会に月城の数多くの作品の中から幾つかをひろって鑑賞してみたい。

まず歯科医なら誰でも共感するであろう句

〈梅雨の傘　歯牙検診の　村遠し〉

を初めとして、句碑にも刻まれている

〈屋根獅子の　阿の牙くぐる　初雀〉

の様に俳画の光景がそのまま浮かんで来る様なほのぼのとした作品がある。

(蛇足ながら、阿の牙とは雄のシーサーの口を開いた状態を指す。)そして

〈オオゴマダラ　人と神との　間舞う〉

〈紅型の　美女の瞳すわり　舞ひ始め〉

の様にあでやかできらびやかな写生句もあれば、一方ではその眼は社会問題にまでも配られており、

〈果てしなく　農夫まずしき　文化の日〉

の様な句も詠まれている。

現在、「シーサー句会」「人」など合計四つの句会の指導にも当たっており、句集、「若夏」「南島俳句歳時記」の著作がある。

〈酒好きの歌人、山城正忠〉

戦後沖縄の大衆芸能を小那覇ブーテンという歯科医が完成させた様に、明治大正期の沖縄の歌壇の基礎を創ったのもやはり一人の歯科医であった。

山城正忠は1884(明治17)年那覇区若狭町に生まれ33才の時、同じ若狭町で山城歯科医院(後に西本町、石門通りの高木光彦の海南歯科を引き継ぐ。)を開業したが、彼は東京歯科医学校(現、東京歯科大学)在学中から、新詩社の与謝野鉄幹、晶子夫妻に師事、中央の歌壇に多くの作品を発表、新進気鋭の明星派の歌人として活躍していた。帰郷後は沖縄朝日新聞の歌壇の選者に迎えられ、地元の歌人の育成に貢献するが、その後を追って琉球新報、沖縄タイムスにも歌壇が設けられており、沖縄学の創始者、伊波普猷も認めている様に彼は沖縄の短歌の世界に一つの時代を画した人物である。中学時代から早熟な文学少年であったが、家業が失敗した為学校を中退、一時は県立病院の事務職員などをして生計を立てていたが、与謝野晶子の歌に感銘を受け、「明星」に親しむ様になる。その後も文学への夢絶ちがたく終に上京。当初は見知らぬ土地で脚気にかかったりして、職も無く生活費にも事欠き、素人易者になろうとしてみたり、何をしてもうまく行かず、失

恋も重なってピストル自殺を試みようとまでした事もあった。



四九才当時の山城正忠

新詩社の同人には北原白秋、石川啄木、高村光太郎、大貫(岡本)かの子、小山内薫、木下杢太郎などがおり、多士済々であったが与謝野夫妻はその中でも山城を特に弟子として愛し、晶子は山城の事を「重厚で熱情的な快男子」と評し、又彼も夫妻を両親の様に慕っていたらしい。それ故、鉄幹が亡くなった時、山城は〈手に触れて　碑のつめたさを　なげけども　あやまれり師は天に在せり〉(この歌は折口信夫が新百人一首に推薦している)と深い悲しみを訴えている。

同門の石川啄木とも交友があったが、一途に明星派の浪漫主義を守ろうとする山城と社会主義に傾倒して行った啄木とは思想面では相入れないところもあったものと推察される。しかし、山城は啄木の才能を高く評価していた様で、彼の事を「痛快な男であった。何時も思索している様な瞳でものを見る」と後年述べており、更に「啄木には議論では歯が立たなかったが酒は俺が強かった」などとかって共有した思い出を懐かしんでもいる。

山城は酒をこよなく愛したが、同門の友人摩文仁朝信は、そんな彼の事を〈泡盛をたうべぬ時は　木像のごとくさびしき　正忠の顔〉と揶揄している。

戦後、酒が入手困難な頃にはメチルアルコールまでも飲んで吐血する程の酒好きだった彼は、しかし、家庭ではもう一つの顔をもっていた。彼は大変な子煩悩の父親でもあった。山城、唯一の歌集「紙銭を焼く」は幼くして世を去った愛児に捧げたものである。

〈月かげを　窓よりいれて　楽しめり
児等は読みつつ　父は飲みつつ〉

〈酒のみの　癖のみ父に　受けて来し
われなり児等に　何を譲らん〉

〈旅にある　父に代えよと　児のために
木馬を買ひて　送るふるさと〉

以上三首からは山城が子等に注いでいる愛情が痛い程に伝わって来るが、その愛児の一人鯛二はやがて重い病を得て痩せ衰えて行く。

〈己が身を　減らしたまへと　病める児を
抱きて祈りぬ　余り軽きに〉

そして幼い愛児は終に帰らぬ人となり、子を失った父の嘆きが次の歌となる。

〈さびしけれ　その手に触れず　夕ぐれの
風ひるがえす　墓前の絵本〉

さて話は変わって、与謝野晶子は「冬柏」の中で山城について

〈正忠(ただ)を　恋の猛者(もさ)ぞと　友の言ふ
戒(いまし)むるごと　そそのかすごと〉

と詠んでいるがどうも山城には更にもう一つの顔があったらしく、「紙銭を焼く」を読み進んで行くと"恋に生きた歌人"という別の人物像も新たに浮かび上がって来る。

〈年甲斐も　無くてなどいふ　分別も
石ころのごと　捨てしわが恋〉

〈妻の眼を　たくみに偸(ぬすみ)　禅の座に
かたちをかりて　君をおもへり〉

「紙銭を焼く」の中には恋に関する歌がかなり見られるが、昭和6年以前の作品は割愛されていることから計算すると、これらの歌は山城が 48 才以降のものだということが判り「年甲斐も」という語に改めて一つの重みさえ感じられる。そして、彼の歌集のページを更にめくっていると

〈世に奇跡　ありと薬を　髪の毛の
うすれしに塗る　何の未練ぞ〉

という一首に出くわすが、これも、この視点から見ると、単に肉体の老化に焦りを覚える中年男のありきたりの嘆きだけでなく、恋をテーマにした彼の一連の作品とあながち無縁でもなさそうで、我らの先輩、山城の人間臭さをかいま見る様でほほえましくさえ感じられるのではないだろうか？

話を歯科に戻そう。山城は東京の文壇を去って、那覇で歯科を開業した年に次の様な歌を残している。

〈歯医者とは　真珠のごとく　愛(めで)しわが
わかき生命(いのち)の　墓場となれり〉

〈患者をば　外(そ)らさぬ術(すべ)も　覚えけり
生きねばならぬ　うつそみのため〉

これを読むと、どうやら彼が歯科をなりわいとして選んだのは「うつそみのため」つまり、生きるための妥協策からであり、彼は不本意ながら歯科医になったものらしいということが推察できる。

しかし、その様な彼も一旦、歯科医になってからは同業者同志の活動にも積極的に加わっており、立派に二足のわらじを履いている。彼が開業して3年目に初めて沖縄に県歯科医師会が誕生するが、その時彼は理事を務め、その後 1923(大正 12)年には県歯会長までも努めている。

戦後間もない 1949(昭和 24)年、歌人以外に書家(沖縄の三筆)としても知られた歯科医、山城正忠は第

二の歌集を世に出すこともなく百名にあった知念地区病院に於いて65才でひっそりと亡くなっている。病名は胃癌であった。

[使命感という名のワラジ]

ここまで紹介して来た6人の歯科医達が履いていた、二足のわらじの片方のわらじに仮に共通の名称を付けるとしたら定めし「余技」といったあたりになるのではないだろうか。それに対し「使命感」とでも呼ぶ方がふさわしいわらじを履き通した歯科医達もいる。二人の南歯会員は宗教人として、他の一人は社会事業家としてそれぞれの使命を全うする。

〈教えを説く歯科医〉

初代南歯会長、与那城勇は青年時代からキリスト教の伝道師になる計画を持っていたが、その布教活動の経済的な裏付けが目的で歯科の道に入った。戦後、糸満町に糸満キリスト教会を創立、更に布教目的の雑誌ゴスペル(福音)を発行、又、同名の教会幼稚園も開設、30才代の10年間を布教のみに専念。戦後沖縄のキリスト教界史に一つの足跡を残している。

今一人の宗教人、「生長の家」沖縄総支部管長を務めた久高将旺(1886～1971)は初め教員であったが歯科に転向。1915年那覇で開業したが、"自由業"だとばかり思って選んだこの歯科医の仕事も彼が想像していた様に自由でもなく、思惑が大いにはずれて失望。医院をたたんで西表炭鉱に出稼ぎに行ったり、石垣で新聞を発行してみたりして落ち着かない生活を送る。そして安住の地を求めて各地を転々と放浪している間に、台湾でチフスにかかり入院。この時の一カ月の入院が転機となり彼は「生長の家」に入信。「天国(理想郷)は遠くにあるものではなく心の持ち様次第では自分の心の内に求め得るものである」と悟る。久高50才の時であった。その後、教化部長として歯科開業のかたわら布教活動を続けるが、面白い事に久高の日記や信徒達の手記を調べていると、歌人山城正忠の名前がここでも再び登場、山城もこの教団の一員であったという意外な事実が判明する。山城は参禅もしていたがこうして心の問題とも取り組んでいたらしい。久高は沖縄に県歯が発足した当初から山城正忠とともに会の理事にも加わっており、歯科医師会の活動にも応分な貢献をしている。

さて、与那城、久高の両名は自らの信じている"教えを広めるべし"という宗教上の使命感故、二足のわらじを履いたのであるが、ここにもう一人全く別の立場からの使命感に従った歯科医がいる。

〈銛をうたれた男ー上原信雄〉

「銛をうたれた男」とはハンセン病対策事業に長年、無私の献身を続けた上原信雄(1897～1987)の喜寿の祝いに際して、彼の業績を讃える趣旨で上梓された書の題名である。捕鯨船に、ひとたび銛を打ち込まれた鯨はどんなにあがいても逃れられるものではない。ハンセン病者を救えという"使命感の銛"を打ち込まれて逃れられなくなってしまった上原の半生を同書の編者はユーモラスにこう例えたのである。

1897(明治30)年、糸満村に生を得た上原は家庭が貧しかった為、旧制中学を中退、17才の時、医師玉城濶〔ヒロシ〕の薬局生をしていたが「教育立県」を唱える玉城が私財を投じて始めた育英会の奨学生として東京に学ぶ機会が与えられる。(それから丁度40年後、上原は育英事業も手掛け始めるが、それにはこの様な背景があったのである。)40才の時に帰郷して那覇市東町で開業するが、その翌年公会堂で開かれた「救癩大講演会」に出席した事が上原の生涯に転機をもたらす。

その時「愛楽園には250名の患者が収容されているが医師、薬剤師から婦長までもが県出身者のなり手がない為、他県出身者によって運営されている」という実情や、「内科、外科、眼科などは一応そろっているが歯科だけがまだ無い」という報告を聞かされ「私は歯科医師の一人として胸を刺される思いが致しました」と後年上原は述べている。傍観者の一人だった上原はここで当事者の一人となって行く。

そして、主催者側に器具材料一切自弁で無報酬の出張診療を申し出る。それからというもの、毎月一回か二回那覇から愛楽園までの二十里の行程を木炭バス(戦時下であった為)に揺られて彼は愛楽園に顔を見せ始める。この頃は屋我地大橋(1953年架橋)などあろうはずもなく、島に渡るには渡し舟を二度も乗り継ぎ、更に一部は徒歩にも頼らねばならず結局、一回の出張に三日を費やしたが、その様な事など意に介する風もなく彼は黙々と通いつづけた。更に食料事情の悪い戦時中には、シークヮーサー、天妃まんじゅうや芋などの差し入れを持参することも忘れなかった。この時点で上原は"銛をうたれた男"に成り切っていたのである。

戦況が悪化してからは、愛楽園に移り住み、専属の歯科医となり医師の手不足の時は外科や眼科の治療もこなした。妻と共に保育所の保父や保母を勤めた事もある。その後、癩予防協会理事長になってからは自費で東南アジアのハンセン病施設を訪問。その見聞を活かして、当時否定的に捉えられていた在宅治療を推進。又、患者の社会復帰対策にも多大な貢献を果たしている。

ところで初めの頃は彼が愛楽園に通う事に親類や仲間の歯科医も反対した。そして世間では彼の恋人か身内が愛楽園にいるのではないかともささやいた。又彼がハンセン病患者の歯科治療をしている事が知れ渡ると感染を恐れて患者が激減した事もあった。では、この様な代価を払ってまで何故一介の歯科医がこのとてつも無い難事業を生涯の使命として行ったのであろうか？少なくとも宗教上の使命感からではなさそうである。

〈いわれ無き差別〉

上原を知る者の多くは初め彼がクリスチャンだと思い込むらしいが、彼の三女、大野愛子によれば彼は神の存在を信じていなかったという。しかし「科学を学んだ者として矛盾や不合理なことに我慢ができない」人間であったという。だからこそ、同じ人間として、しかも同じ島に生を得ている同胞が、この病ゆえに犬畜生以下の虐待を受けている現実が見過ごせなかったのかもしれない。彼はしばしば「強い者の味方には誰でもなれる。弱い者の味方になれてこそ人としての価値も出てくる」という言葉を口にしているが、それが彼の哲学だったのかもしれない。

当時「全国一癩の多い県」として知られていた沖縄に於けるハンセン病者への差別、迫害には目を覆うばかりにすさまじいものがあった。無知な人々は、この病気を「血統病」あるいは「遺伝病」と考え「チーワルー」「チーヤンデ」(血が悪い者)などと呼び、患者の家族に迫って患者を家から追い出させた。家を追われた患者は海岸近くの洞窟や墓場に身を潜めたが乞食をして露命をつないだことから「ムヌクーヤ」「クーヤー」「クンチャー」又は「コーター」(古語のかったい一乞食に由来)とも呼ばれた。彼らは死んでもなお差別された。葬式以外一切の法事も行われず炒り豆が供えられて「二度と出てくるな」と墓の入り口も封じられた。「火葬されれば無菌になるのに」と上原はその不条理さを嘆いている。昭和13年に愛楽園ができるまでは患者達はどこにも安住が認められず、仲間同士で雨露をしのぐ仮小屋を作ろうものなら地元民に火を放たれ、追い立てをくらった。

県が羽地村嵐山に収容施設を計画した時も、水源地が汚染されるという理由で2万人のデモ隊がこれを阻止。地上のどこにも行き場が無い事を思い知らされた病者達の代表、青木恵哉は「ただ一坪でも良いから誰からも何とも言われないで安らかに座れる土地が欲しい」と悲痛な叫びを発している。この悲惨な情況が座視できなくなったキリスト教団体の「沖縄MTL」が立ち上がり、上原もその運動の流れに身を投じて行ったのである。

この様に彼の90年の生涯中後半の50有余年は救癩活動におしげなく捧げられているが、もう一方に於いて彼は育英事業にも献身しており、70才の時には自宅と全財産を「財団法人沖縄学援会」にそっくり寄付している。

ところで、"遠目よき富士も登れば只の山"と言うように、偉大な社会事業家、上原の人物像も富士山と同じで、肉迫すれば肌の粗さもやはり目につく。

"疲れを知らない怪物"と称された彼も決して聖人君子の手合いではなかった。若い頃の私生活面では芳しからぬ風評も聞かれ、不用意な発言でつるし上げられた事もあり、売名の徒とそしる声も聞かれた。しかし、それらの批判や中傷がよしんば全て事実であったとしても、彼の偉大な業績の全体像は富士の美しさ同様いささかも損なわれるものでない。沖縄の社会事業史は上原信雄抜きでは語れるものでない。

1902年、楊長積の登場で開幕した今世紀の我らの歯科界にはこの様な人物もいたのである。

「第2章南歯誕生までに至るよもやま話」の資料・情報提供者名(敬称略・順不同)
会員　:玉城信徳(中部地区)、知花朝敏、村田芳子、比嘉良有
永井長秀、与那城勇、瀬底正俊、高良政利、西平守廣
金城一史、富本盛弘、嶺井浩、友利恵勇(宮古地区)
山田勲、新城啓和
会員外:小那覇全人(故 小那覇舞天長男)
仲田稲造(沖縄生長の家教化部長)
崎間麗進(県文化保護委員
故 嵩原正(元中部地区会員)夫人



医療保険の指導で来県した稲葉技官の歓迎会



復帰前に結成されたスタディグループ医研会
全員がグループの制服を着用している



勉強会の実習も真剣に

第 3 章

南部支部、南部地区“あの日あの時”

はじめに

沖縄県は他県と異なり、我が国唯一の亜熱帯地域で広大な海域と自然環境を有し、歴史的にも本土他府県にない特異性を持っている。

歴史を振り返ると、琉球王国の成立から大交易を経て1879年(明治12年)4月の廃藩置県に至るまで、沖縄特有の文化を形成してきた。明治に入ると、いわゆる大和世の世変わりで本土と一体化の県政に連結することになる。


戦前の首里城付近

沖縄県の歯科医師会の設立は大正9年12月4日那覇区天理教会内で開催されたが当時は13人の会員で設立申請した。昭和に入り歯科医師も除々に増え、町には電車が走り、軽便鉄道も年間100万人の県民を運び、この鉄道が県民に正確な時間を知らせる時計の役割は果たしたとも言われている。又、昭和5年には山形屋沖縄支店も営業開始し商業活動も活発になってきた。しかし一方においては有数の移民県であり、南米諸国や南洋群島に多くの移民を送り出している。その為、海外雄飛をする前に歯科検診を受診している事も聞いている。いわゆる貧困が生み出した社会状況であった。

昭和元年の沖縄県の人口は56万余人で、80%以上が農村で首里、那覇の市部の人口は15%程度で沖縄県は農村的性格をもった社会であった。昭和4、5年になると世に言う昭和恐慌が起こり、ソテツ地獄と言われた時代もあった。そのような中で戦前の沖縄県人は南国特有のおおらかさと、優しさで逞しく生活を生き抜いてきた。

1941年12月8日太平洋戦争に突入すると沖縄県は地理的条件により重要な位置を示す。1944年10月10日沖縄は初めての空襲を受け那覇を中心に各地が破壊された。1945年4月1日米軍は54万余の兵員と1500隻余の戦艦をもって沖縄本島に上陸、最も熾烈な80日間の沖縄戦の幕が上がったのである。この戦いは沖縄県民にとって余りにも悲惨な戦争で、いわゆる鉄の暴風と呼ばれ、南部を中心に25万余の戦死者を出してしまう。我々歯科医師会員も戦闘に巻き込まれ10名が戦没した。終戦直後の沖縄の人々は無から有を生み出さなければならなかった。見渡す限り荒廃した瓦礫のなかから物質的な面だけでなく精神的な面でも復興に立ち上がった。投降勧告から始まり、住民の救出、難民収容所での生活と復興への萌芽はいわゆる軍政下での出発であった。


戦後間もない頃のテント屋

復興で最初に取り組んだのは生活の安定と健康管理である。特に医療従事者は、一時的公務員となり県民の健康管理、衛生面に従事することになる。時代が進むにつれ、やがて住民にも笑顔が表れ、生活が向上していく、いわゆるアメリカ世の時代にはいる。

1972年5月15日沖縄は27年間にわたる米国統治に終止符が打たれ、日本に復帰、晴れて新生沖縄県の誕生が宣言された。かって我々の先輩には素晴らしい先生方が大勢いて活躍していた。振り返ってみると時代の移り変わりは余りに激しく、記憶も薄らいでしまう。戦前戦後を通じ現在も第一線で活躍している諸先生方に当時の想い出や苦労話、また歯科医療事情を語っていただいた。

A. 歴代の南部地区歯科医師会会長の就任挨拶

沖縄歯科医師会南部支部から南部地区歯科医師会へと時代と共に歴代の時の執行部のトップである会長の思いが伝わってくる挨拶文を過去の資料から掲載しました。特に初代の与那城勇先生から高江洲旭先生までの会長の就任挨拶の文章が見当たらなく、困っていましたが、昭和62年の社団法人南部歯科医師会設立の記念誌の中にあの日あの頃の想い出を語って頂いた挨拶文がありましたので、それを挨拶として代用させて頂きました。(南部支部時代の資料は見当たらない為ここでは割愛させて頂きます。)

玉木史朗先生からは会長就任の挨拶文が南部地区歯科医師会誌に投稿するようになり太田正昭先生まで資料が揃っています。また会誌を調べていると、この就任挨拶だけでなく3月の通常総会時の会長の年間施政方針の挨拶文もありましたが、全体を統一して就任挨拶を掲載してあります。時の執行部の陣容、苦労等が紹介され若い会員にとって社団法人南部地区歯科医師会の歴史的流れが身近に感じ理解して頂ける事と確信しています。南部地区歯科医師会の歴代会長及び任期期間は以下の通りであります。

初代南部地区歯科医師会会長	与那城　勇	(任期	昭和47年4月1日～昭和49年3月31日)
2代	〃	高良　政利	(任期 昭和49年4月1日～昭和51年3月31日)
3代	〃	嶺井　浩	(任期 昭和51年4月1日～昭和53年3月31日)
4代	〃	高江洲　旭	(任期 昭和53年4月1日～昭和55年3月31日)
5代	〃	玉木　史朗	(任期 昭和55年4月1日～昭和59年3月31日)
6代	〃	友利　政三	(任期 昭和59年4月1日～昭和63年3月31日)
7代	〃	高江洲正勝	(任期 昭和63年4月1日～平成 3年3月31日)
8代	〃	新城　啓和	(任期 平成 3年4月1日～平成 6年3月31日)
9代	〃	新垣　元洋	(任期 平成 6年4月1日～平成 9年3月31日)
10代	〃	太田　正昭	(任期 平成 9年4月1日～平成12年3月31日)



昭和61年12月11日　社団法人 南部地区歯科医師会設立総会

— 社団法人沖縄南部地区歯科医師会の法人取得を慶びその首途を祝福する —

南部地区歯科医師会初代会長　　与那城　勇

この席で歴代会長を代表してご報告申しあげよと、友利元会長のご依頼をかたじけなくし、ご報告申し上げることを光栄に存じます。

私が南部地区歯科医師会に関わりましたのは昭和29年、当時の小禄村高良に歯科を開業した時に始まります。その頃沖縄は米軍占領行政下に置かれ、医療保険制度のない時代で、県民大衆は、戦後の日本本土医療保険制度の事を伝え聞いて、それを時の琉球政府に導入せよとの切なる要望がありました。しかし環境条件がそなわらないため軽々しく導入してはならないと、医療側は慎重でその検討に足踏み状態を続けておよそ10年、昭和41年遂に政府は医療保険施行を決断し医療保険審議会を設置し、法案策定作りに移り歯科からも二名の代表委員を出しました。(永井長秀、与那城勇)

さまざまな曲折を経て、今年7月、現金給付方式医療保険は発足し、それまで歯科医師会は学術団体、親睦の任意団体で天下太平でしたが、この保険制度の施行により国の行政、福祉の実行機関として歯科医師会の歴史始まって以来の体験をする訳であります。

昭和45年5月、私は沖縄歯科医師会南部支部長に当てられました。当時の支部の会は、沖縄歯科医師会(以下沖歯会と略称します)の連絡係りのようなものでしたが、医療保険施行後、急激に会務は増大し会員の過半数は南部に集まっているため、僅か3名の役員では動きが取れませんし、本土復帰も近づいているし、そうなれば現物給付方式医療保険にも対応するため、会を組織作りすべきと痛感し、副支部長上原斉、冨本盛弘(後に山田勲)の諸氏に相談、歯の衛生週間行事が済むと早速その企案にかかりました。そして、昭和45年7月18日南部支部の臨時総会に計り

(1) 南部支部を発展、変革し沖縄南部地区歯科医師会とする。(以下本会とする)
(2) 本会を三分会、六支部に編成する。
(3) 本会の定款、運営細則を作成する。
(4) 定款、細則委員の選任
(5) 本会運営委員の選任

等の提案決議を得、即日本会を沖縄南部地区歯科医師会と改称しました。早速このことは沖歯会に報告し、了解を得、決議事項達成の準備に取り掛かりました。

御協力に感謝して

南部地区歯科医師会２代会長　　高良　政利

執行部

会長　高良政利、　　副会長　中里治通、　　理事(専務)　高良政勝、
理事(会計)　上地健一、　　理事　城間猛、　　監事　兼浜政勝、当山良子

支部

城南支部　(支部長　座波秀政)
崇元寺支部　(支部長　高江洲政勝)
牧志支部　(支部長　銘苅　清)
松尾支部　(支部長　金城政和)
開南支部　(支部長　友利政三)

会員は88名、翌年の昭和50年度は会員91名(全琉149医療機関)
現在(昭和62年)会員173名(全琉354医療機関)
会費月2500円、入会金10万円、一般会計303万円
現在(昭和62年)会費月5500円、入会金30万円、一般会計1800万円
現在(昭和62年)と比較して会員1/2、一般会計1/5、医療機関1/24、でした。

事業計画としては

1. 県歯会事業への協力(県歯会館建設)
2. 支部会活動の強化

の2項目のみで内部の確固たる基盤作りを主眼としていましたが、こじんまりした親睦団体の感が多い会でした。

市立病院建設基本構想審議会(会員　与那城勇、高良政利)が発足し

1. 首里琉大跡(首里方面)
2. 天久方面
3. 小禄方面(金城)

等が候補地となりましたが結局は現在地に決定されました。海洋博覧会が開催され、会場内の診療所に会から13組(26名)が派遣されましたが患者が少なく会場見物した想い出があります。歯科医院は現在の半分でしたので患者が多く、特に夏休中は受付順番取りの為、早朝よりならび、警官が保護のため巡回するほど混雑し、医師の手が足りず治療拒否、非歯科医師行為等で注意文書を発送した位でした。

会員の増加に伴って、会の運営、相互の意思疎通、対外的、対患者、その他諸々の難問が多くなると予想された執行部の苦労は察するに余りあります。どうか会員も役員になられた御心算で御協力して下さい！それによって執行部役員の心強さとなり心の糧となり会がより一層発展していくのですから。

あの日あの頃

南部地区歯科医師会３代会長　　嶺井　浩

昭和51年と言えば、3月28日に県歯の副会長だった玉城信徳先生が県歯の会長に、南部地区歯科医師会会長の高良政利先生が県歯の副会長に選出された日である。4月に入って高良先生から南部は副会長以下の人事は本人の内諾を得ているから君さえ会長就任を承諾してくれれば人事は決定すると説得され、学校歯科の会計と学院の講師をしていたが、それでは組閣の心配も要らないからいいかな等とのんきに考えてお引き受けしたのが運の付きというもので18日の総会で副会長高江洲旭先生、専務古堅英信先生、会計座波秀政先生、理事城間猛先生と会員90余名に対し執行部5名という陣容でスタートした。最初に手をつけたのが支部の編成であった。このことに積極的に協力してくれた久高将成先生がいた。彼は県歯の歯の衛生週間の新聞広告のすぐ横に掲載されたヤクルトの広告記事を見て『どうなっているんだ』と電話で抗議してきた程の熱血漢だった。

政治的には自民党の『新しい沖縄を作る会』や『政経文化パーテイー』等が開催され会員も何名か出席した。知事は平良幸市氏が選出された。7月になって田中角栄逮捕のニュースが流れた。准看学校の講師に宮城正廣先生を推薦したが10月に入って金城輝夫先生が一身上の都合で退会した。 新聞によれば、当時歯科で生活保護の指定を受けていた機関は60％にも満たなかった。11月に入って西銘後援会の旗開きに高良政利先生と挨拶に伺った。

ところで我々にとって非常にセンセーショナルなことが発生した。というのは中医協の場で自由診療である金属床、ポーセレン、金の3項目が保険に組み込まれるという動きが出てきた事である。もしそうなったら我々の生活は危機に直面し大変なことになるので、日歯の会議に出席された県歯の玉城会長に御足労を願い、8日の拡大委員会の席でその経過について説明してもらった。執行部にとっては降って湧いたような難題で、文字通り最悪の事態になり、その為12月20日に臨時総会を開催したこともあった。昭和52年には入会問題が起こり支部会でもかなり討論したこともある。いずれにせよ、執行部は任命されればベストを尽くすことに努力し、評価されればそれでよし、会員の声を反映し、よりよい執行部を作ることは当然の事である。

回顧してみると、小生の様に執行部にいきなり就任する事より地区の中堅の流れをよく理解し継承していくことが如何に大事かを痛感し、次期会長は是非高江洲旭先生にお引受けしてもらいたいと懇願したところ、心良く承諾してもらった。

最後に、在任中は小生の不徳のいたすところを心よく支持していただいた各位にたいして紙上をかりて心より厚く御礼申し上げます。

各会員の益々の結束を

南部地区歯科医師会４代会長　　高江洲　旭

嶺井先生の跡を引き受けて、昭和53年から54年の2年間の1期を務めて参りました。当時の執行部は副会長に古堅英信、専務に友利政三、理事に新城彬明、玉木史朗、城間猛、監事に中村義宣、兼浜政勝の諸先生方で、まさに血気盛んな強力なメンバーでありました。

当時南部地区歯科医師会々員は115人で十日会、十五日会、三水会と例会をもち模合を軸として、会員の横のつながりを大切にして、お互いの情報交換することによって相互関係を深める大切な例会で、組織の強化につながったと思います。

又、南部地区歯科医師会の福祉共済金の運用のための一才半児の健診料の積み立て、新開業による会員相談委員の発足、デンタルフェアにおける那覇市からの補助金獲得、執行部のかねてからの要望であった第一回家族慰安会をハーバービューホテルで開催致しました。会員皆様の御協力により、のど自慢あり、踊りありの和やかな内に盛会に終わった事を嬉しく思いました。これを契機に奥様同士の親睦も深まったものと確信しております。

思いおこせば、冷や汗をかく事もありましたが、古堅先生始め、執行部の皆様に支えられて二年間を無事勤める事が出来た事を感謝致します。

社団法人南部地区歯科医師会がスタートいたしました。これは友利先生はじめ、執行部の御尽力によるものと拍手を送ります。守りの医療から攻めの医療に転換することです。県民のニーズに答えるべき健康増進のために歯科医療のサービスは益々重要な役割が期待されています。

歯科界をとりまく環境は年々厳しさを増してくる昨今ですが、輪と団結で困難を乗りこえてがんばりましょう。最後に南部地区歯科医師会の益々の御発展を祈ります。



1980年　南部地区歯科医師会家族慰安会

就任にあたって

南部地区歯科医師会５代会長　　玉木史朗

広く世界の状勢をみるとき、1980年代は苦難の時代の始まりという感じがします。国内では、インフレ抑制のための金融引き締め、小中零細企業の倒産の続出、そのような中での地方議員選挙、首長選挙、はたまた参議院選挙と息つく暇もなく人心を揺さぶる事が続きます。国外ではソヴィエトのアフガニスタン侵攻に始まり、オリンピック参加問題、イランの米大使館員人質事件にはじまる米、イランの極めて緊迫した状態、等々。このような時世に、我が沖縄の歯科界も種々な問題を抱えながらも、新しい執行部を編成し、来る二カ年間の種々な問題に対処すべく体制がやっと整ったようです。

ここ南部地区歯科医師会も後で紹介がありますように、これまでにない規模と有能な人材で苦難の80年代の初頭を切り抜けるべき体制を整えることが出来ました。あとは会員各人の絶大なる協力が望まれるだけであります。

新執行部の腕前を試すかのように、県歯の目玉事業である、デンタルフェアの開催、県議選、参議院選を迎えることになりました。6月22日の参議選までは、否応なしに、我々はそれに巻き込まれてしまいます。過日、理事、監事、支部長を含め、全役員でデンタルフェアや選挙の支援活動に対する協議を致しましたので、追って会員各位に協力の呼びかけがあると思いますからよろしくお願いします。

デンタルフェアは我々の対社会的に対応する事業であり、「関口ケイゾウ」と「大ハマ方栄」は何が何でも国会に送らなければならないからであります。

しかしながら南部地区歯科医師会の本来の事業は去った総会でも承認がありましたように、あくまでも、事業計画に沿って、地道に、一年を通して遂行することだと確信しています。

1才半児の健診、それに伴う福祉共済金運用規則の整備、開業相談委員会の発足と、それに必要な資料の整備等々であります。これらの事業も来るべき時に備えて、我々会員の結束をはかり共通の利益を守り相互の福祉を求めることにあります。国家公務員、地方公務員や大会社の社員等は多くを望まなければ恙無く一生を送ることが出来るように種々の身分保障がなされています。一方我々零細企業者は孤独です。又一国一城の主であると日頃自負しています。しかしそれも各人が健康である時にしか云えません。かつての戦国時代のように自分の囲りに、群雄が割拠した時にも、今日のように平和な主で居れるでしょうか。会員各員のより多くの支援が有れば、新執行部も恐れることなく奮迅の努力をしていきたいと思っております。

就任にあたって

南部地区歯科医師会６代会長　　友利政三

長かった県議選を終えて、うっとうしい梅雨の真只中に入っております。私達歯科界を取り巻く環境と似ております。梅雨は季節の移り変わり、時と共に晴れ間も出て、やがて夏を迎える事ができます。しかし、私達を取りまく環境は、わたしたちの努力なしに自然に好転する事はありません。学校保健、地域社会のニーズの多様化、国の施策による締め付け、医師過剰問題、健保改悪、どれをとっても私供が即対応しなければならない課題が山積されております。このような厳しさを増すばかりの時期に我が歯科界の将来は、歯科医師界の政治力なしには解決は困難であります。会の事業、政治に対する無関心、あきらめが私達の環境の悪化を助長するのもであり、私達は団結、協調を図り、対外的に歯科医師会が圧力団体、或いは協力団体としての組織力を発揮出来るようにならなければ事態の好転は望めないと考えます。

私達の診療報酬は収入と支出のバランスの上に成り立っており、保険（収入）、税務（支出）の面を考えても南部地区の会員も、県歯科医師会が自身をもって対外的に対処できるように強力なバックアップ体制を組んで行く必要性を充分に認識して頂いて、会務にたいする協力をお願い致します。南部地区の新執行部は優秀な人材が新たに加わりスタートを切りました。より良い明日の歯科界を目ざして、この２年間努力を続けてまいります。皆様方の一層の御協力、御指導を賜りますようお願い致します。



1986年　第1回税務講演会

ご 挨 拶

南部地区歯科医師会７代会長　　高江洲正勝

この度、総会決議をもって南部地区歯科医師会の会長に選任されました。身にあまる光栄と思っています。本会は今日に至るまで歴代会長及び執行部の努力と、卓越した指導力のもとに、地域社会において学術団体として、数々の実績をあげて来ました。我々の活動が、高い評価をうけていることは、御承知のとおりです。これまでのすばらしい功績を誇りに思うと同時に、私達が忘れてはならないのは、会員の結束であります。結束がある限り、我々の地域社会における活動はとどまることはありません。しかし、会員個々をとりまく歯科界は年を経るごとに、暗雲、雷雨の襲来の対応に苦慮しております。日技の要求による外注技工料の問題、診療所の急増に伴う供給と需要のバランスの変化、特措法や事業税の税制改革における位置づけと、被害の予測さえ出来ない情勢です。しかも医療制度は、福祉の原点を離れ、経済主導型に変化しつつあり、統制医療制度の到来さえ懸念されます。

本会内部においては、従来の事業の計画を計るのはもとより、友利政三前会長の情熱の下で達成されました社団法人として組織の整備強化が急務となっております。公益法人としての社会的責任を果たすと同時に、会員にとってより魅力のある組織づくりをしなければなりません。このような時期に、私が会長の重責によく堪え得るかどうか、一抹の不安を感じております。幸いにして、永年執行部におられ、会務に精通し、会員より絶大な信頼をもたれている新城啓和副会長をはじめ、大田正昭：専務、安村庸：会計、真境名由守：学術、金城光也：厚生、山川修：学校歯科.公衆衛生、新里叡：広報、屋宜優：保険、玉城生夫：那覇地区、高宮城實之：浦添地区、竹尾孝明：島尻地区と、優秀でファイトのある各担当理事が誕生しました非常に心強く思っております。

執行部は一致協力して、会員の総意のもとに各自に課せられた任務をはたしていく決意であります。会員の皆様のご支援とご協力を切にお願い申し上げます。

就任にあたって

南部地区歯科医師会８代会長　　新城啓和

平成3年3月28日の総会に於いて南部地区歯科医師会の会長に御承認を頂きました新城でございます。浅学非才の私に3年間会長の重責が勤まるかどうか一抹の不安も感じております。しかしながら総会の決議を受けた以上微力ではありますが、誠心誠意、組織の発展向上に全力を尽くす所存であります。

昭和26年4月わずか37名の会員をもって沖縄歯科医師会が発足し、現在では南部地区歯科医師会だけでも197名をようする大きな組織になっております。

昭和47年の与那城勇会長の時代に法人化の目標が設定されて以来、昭和62年“ブルドーザー”と言われる友利政三会長時代に社会的にも一人前と認められる法人化の認可をとる事ができました。高江洲前会長も就任以来一貫として内部充実.組織の構築.人材の発掘等の為に各支部回りでご活躍を頂いているのはすでに皆様方のご承知の通りでございます。
南歯の実績は歴代会長、執行部及び会員の先生方の尽力により地域社会に深く根ざし対社会的にも高い評価を受けて居ります。

南歯の伝統でもございます、「会員相互の和の団結」を再重要課題として高江洲前会長の築いてこられた路線を全面的に踏襲し事業計画に沿って地道に遂行して生きたいと考えております。

私どもを取り囲む社会環境は歯科医師過剰問題、非会員による開業等に見られるがごとく非常に厳しいものがございます。しかしながら地域住民の口腔の機能と全身の健康との関わり、歯科医療に対する価値観を高めることによって打開していく事が可能だと考えて居ります。私共、執行部は会員の先生方のニーズをとりあげ執行する機関でございますので何なりと申し付け頂ければ幸いでございます。

3年間実務を担当して頂く事になった理事を紹介させて頂きます。一時期学校で教鞭をとった事のある人生経験の豊富な新垣元洋副会長、抜群の企画力.実行力のある太田正昭専務、学術 真境名由守、学校歯科公衆衛生 山川修、広報 玉城生夫、保険 屋宜 優、会計 長濱正、厚生 照屋均、那覇 友寄清順、浦添 塩浜康良、島尻 上地智博、上記のスタッフで職務を分掌して参ります。なお執行部のお目付け役の監事には大城正雄先生、宮里修先生に引き受けて頂き非常に心強く思っています。私共、執行部は異体同心の団結で各自の任務を遂行していく決意でございます。全会員の皆様方のご協力、ご指導をお願い申し上げ挨拶と致します。

会長就任挨拶

南部地区歯科医師会９代会長　　新垣元洋

去る3月25日の平成5年度通常総会において、南部地区歯科医師会会長に御承認して頂いた那覇西支部の新垣元洋です。まことに身に余る光栄であります。

浅学非才です。しかし、心強いことは、監事の宮里修先生、大城則安先生、副会長の太田正昭先生、専務理事の山川修先生、会計の長濱正先生、保険の屋宜優先生、学術の友利隆俊先生、公衆衛生の玉城均先生、厚生の照屋均先生、広報の友寄清順先生、那覇地区の砂川英樹先生、浦添地区の富島修先生、島尻地区の玉城英人先生、そして、新進気鋭の支部長、班長の有能でやるきのある役員が執行部におられることです。

これまで南部地区歯科医師会の発展の為尽力頂いた新城啓和前会長の路線を奮起して、1歩でも前進出来るようがんばっていく所存です。広く会員のご意見を聞き、和を大切にし、理事者の合意で執行して事を基本として、また、これまで南部地区歯科医師会の形作り育ててこられた会長経験者顧問の先生方のご指導をあおぎつつ完走を目ざして力走するつもりです。小生一人の力では微力ですが、総勢31名の執行部の皆様の力を結集して大きな力となって、そして一枚岩となり、南部地区歯科医師会の発展のため最善を尽くして行く所存でございます。どうか全会員のみなさまの温かい御理解と御協力を得まして、無事3年間の任期を全うさせて頂けますよう重ねてお願い申しあげて、会長就任の挨拶に代えさせて頂きます。



第32回沖縄県学校保健大会にて表彰される


1994年　那覇市健康フェスティバル　テープカット

会長就任の挨拶

南部地区歯科医師会10代会長　　太田正昭

新年度を迎えましたが、会員の皆様には益々ご健勝の事とお喜び申しあげます。去った3月20日社団法人南部地区歯科医師会通常総会にて、会長の任を拝命致しました。

昭和63年4月から高江洲元会長のもとで、新米専務理事として会務に携わらせて頂き、平成3年4月から新城啓和元会長の元で更に3カ年専務を務めさせて頂きました。平成6年4月に新垣元洋前会長を補佐する副会長として現在に至りました。この9年間に、各担当理事そして支部長、班長の先生方の献身的な御努力のお陰で南歯は発展してきました。支部組織という強力な活力源を支えて下さった会員の皆様には、改めてお礼を申し上げます。更に今後とも御協力、御助言をお願い申し上げます。

平成9年度というのは、各市町村行政でも様々な転換を迫られる時期でもあります。例えば、保健所法が改定され地域保険法と変わり、具体的実地が行われる年度ということになります。各市町村でこれに関連しその業務受皿の場所として『保健センター』を建設充実させていくことになります。そのヒヤリングが、那覇市においては過去3回実地され、各保健、福祉、医療関係者から建設に伴います具申をしたところです。具体的業務内容紹介は『地域歯科保健担当理事』にお任せする事としますが、市町村からのアプローチが頻繁になる事が予想されます。この例のように、歯科が行政の様々な施策の中で遅れをとってはなりません。私達南歯役員は対行政について、コンタクトを取りながら情報の枯渇を避け、早めは早めに対処して行きたいと思います。

民法の規定の中に『法人は公益事業の推進と会員の資質の向上を旨とすべし』とあります。人は『楽しいから笑うのではなく、笑うと楽しくなれる！』と言います。『法人だからやらなければ』と言うのではなく、『出来ることをやっていれば、法人として認められてくる』かも知れません。

一方、南歯会員は目下235名となりました。しかし、非会員がまだ30数名います。法人組織の会員として地域保健に参加し、学童検診業務に携わることがありません。地域市民や行政もそれを認識しています。今後も会員獲得に傾注し組織力を増強したいと考えています。

これから3ヵ年、社団法人南部地区歯科医師会の発展の為にに粉骨砕身努力するつもりです。幸い、支部長班長の先生方を始め、理事の先生方に強力な助っ人として執行部に参加して頂きました。また、各委員の先生方も担当理事のよきアドバイザーとして快くお引き受け頂いたと、伺っております。3カ年間皆様と共に『まあるい南歯』を合い言葉に、結束していきたいと思います。会員の皆様の御助言御協力宜しくお願い申し上げます。

B. 歴代会長の座談会

日時 ： 平成10年6月27日(土)午後7時
場所 ： かりゆしアーバンリゾート那覇「やあしばる」

出席者(敬称略)

歴代会長	与那城 勇	高良 政利	嶺井 浩
	高江洲 旭	玉木 史朗	友利 政三
	高江洲正勝	新城 啓和	新垣 元洋
代議員会議長	山田 勲		
会 長	太田 正昭		
副会長	山川 修		
専 務	長濱 正		
司 会	渡口 進一(会史編纂委員長)		
会史編纂委員	砂川 英樹、友寄 清順、玉城 英人		



南部地区歯科医師会 歴代会長座談会

司会 これから南部地区歯科医師会の歴代会長の座談会を開催いたします。当時の沖縄の社会情勢も話ながら進めてゆきますので、宜しくご協力お願い致します。まず、会長挨拶をお願いします。

会長 みなさんこんばんは。先程まで、非常に美しい夕日が見えていましたが、そろそろ日も暮れようとしています。遅くから会史編纂座談会にお集まりいただき恐縮です。本日は歴代の会長経験者とまた会務に深く携わった先生方にご案内差し上げました。歴代会務のエピソードなど頂戴できれば幸いです。南部地区歯科医師会を語るとき、これまで歴史資料が散逸している状態で何



南部地区歯科医師会歴代会長座談会 太田会長挨拶

かと不自由でした。そこで、前会長新垣先生のときに編纂のお話が出まして、少しずつ資料収集に当っていたわけです。本日ここに、そうそうたる先生方にお集まり願い、編纂懇談会が開催できましたことは喜びに堪えません。さて、早速ですが、思い出話など含めまして座談会を開催致します。よろしくお願いします。

1.当時の南部地区歯科医師会の状況



1972年5月15日　沖縄復帰

司会　南歯の歴史を振り返ると色々なことがあります。我々の先輩は、明治・大正・昭和と非常にすばらしい業績を残しております。歴史もあります。南歯の一番特徴的なのは、1970年に与那城先生が初めて南部地区歯科医師会を発足した事です。当時は、復帰の前後で国政参加やコザ騒動と色々ありました。そこで、当時を振り返って南歯の状況を与那城先生に話して頂きます。よろしくお願いします。

与那城　この席に参りましてずっと見渡しましたところ、昔の懐かしい顔触れにお目にかかれまして、本当に長生きしていて良かったとしみじみ思っております。「昔の事を思い出して話せ」との御注文でありますが、南歯もそろそろ30周年を迎えようとしております今日、この会史編纂の企画は時宜にかなった事と考えております。

司会　先生が1970年から会長になり、1970年7月18日に、南部地区歯科医師会が発足しましたが、当時は会員数が64名でした。1972年の3月17には定款の開設や運営などがあるわけですが、その当時のことをお話してくださいますか。

与那城　その当時は南歯はまだ中北部、先島の支部同様、南部支部と呼ばれておりまして役員はと言いますと支部長と副支部長だけから構成されていまして、今日とは似ても似つかない程小さな団体でありました。しかし本土復帰を目前にしまして、本土の医療保険制度をスムーズに受け入れる体制を整備拡充せねばならないという事になりまして、それまでのわずか2、3人の役員だけでは対抗出来ません。そこで、私が支部長を仰せつかりました時から、山田勲先生、上原斉先生のご協力を得まして南歯を発足させたという次第であります。

司会　次に山田先生にお話して頂きます。与那城会長時代に役員は会長・副会長・専務の3人で、山田先生は、専務として活躍されていました。その当時の状況や思い出をお願いします。

山田　昭和40年に私が南部地区に入りました時に、村田精太郎先生が支部長をなさっていました。それから1年後、金城一史先生・富本盛弘先生と私とで支部をまかされました。その当時の支部会は親睦団体的なものでありました。その後与那城先生が支部長になりました時には、単なる親睦団体であってはならない、メッセンジャーボーイ的な支部であってはいけない、そこには会員のそれなりの地位と将来に対するビジョンを持った会にしようということが与那城先生の希望であり、ご指導をうけたことでありました。そう言う事で当時の定款を作られました。まず、会を組織する為には規約がなくてはならない、単なる箇条書きで10ケ条位のもちあわせ事項では会としては成り立たないから将来"社団法人南部地区歯科医師会"という原型を作ろうというのが与那城先生のお考えでした。当時、与那城先生・上原斉先生と私の3人で与那城先生のお宅で、奥さんの手づくりのお弁当を食べながら勉強しました。私も開業してまだ3、4年位の若輩ものでしたが、与那城先生の熱意を肌で感じましたので、お手伝いしますということで印刷に係わるお手伝いですけど、不慣れな活字の配置などの校正作業を3人で与那城先生のお宅で行いました。製本に携わったということです。

司会　1つお聞きしたいことがあるのですが、当時73人の会員なのですがドルと交換する時のことを山田先生お話して下さいますか。

山田　当時、全県的に1ドル=360円で交換するのが決まっていましたので、予算を立てる時も360円で計算した。当時の予算書ドル時代は項目が少なく収入と支出のバランスが悪く、要支出項目がわずかであった為、それではということで今の予算書の雛形を作ることにしました。その時の総会は今の西武オリオンホテル、元のオリオンビール会館であり、また以前は青バス(昭和バスで今の琉球バスの前身)の、昭和ホールで行われました。その時の総会がそれ以降のドルから円に変わる予算立てと事業計画、それにあった予算計画を行ったことです。

司会　高良先生は、1974年から1975年まで2年間会長をなさっていますが、会員数は88人でした。その当時は那覇ハーリー・国際海洋博覧会・南ベトナムが無条件で降伏、県歯科医師会館落成など色々ありましたが、どうでしたか。

高良　城南・崇元寺・牧志・松尾・開南・南の6支部で

会員が88人でした。友利政三先生には開南支部の支部長をして頂きました。会長就任以前、与那城先生が会長の時、上原信雄先生と私とで監事をさせて頂きました。　昭和49年4月21日の総会で会長を仰せつかり、役員は7人でした。(監事2人・理事5人)その時、月会費2,500円、1年間の予算は300万余でした。雛形が、与那城先生の執行部で出来上がっていた為、年会費・年間予算等などそれを通じて行いました。

司会　南歯の事務局があった泡盛産業ビルでの時代と、県歯への移行についてお話がありましたらお願いします。

高良　事務局の泡盛産業時代は事務員がいなかったので、現在は県歯会庶務課長の伊泊さんを採用しました。その後県歯会館が出来たので、南部地区の事務局を貸してくださいとお願いし、月2万円で借りることが出来ました。当時は役員・執行部・代議員の先生方も手当はありませんでした。

司会　次は、嶺井先生です。お願いします。1976年(昭和51)から翌年の2年間会長をなさっています。当時の県民所得は、76万4500円で会員は97人。具志堅用高世界チャンピオンやベトナム難民が漂流した時代です。その当時のお話よろしくお願いします。

嶺井　私は、昭和44年に開業しましたが、与那城勇先生会長のもと牧志支部の班長をやらせて頂きました。昭和51年4月の総会で高良政利先生・山崎友太郎先生・比嘉良有先生に説得され、県歯会の予算決算委員・学校歯科の会計・学院の講師などを辞めさせてもらえればやりましょうという事で、会長を引き受けました。当時は会長の立候補者がなく、なにかとの繋ぎでさせられるのが多かったのです。資料を見ていると、南歯会の事業というのは県歯に協力する事と、支部活動の強化という2項目でありました。又、支部編成を12支部に再編成し、4月には91人の会員数でしたが、私が辞める頃には100人程になっていました。政治の面では自由民主党から「新しい沖縄を作る会」とか「政経文化パーティー」への出席など、最初の年、会としては政治的な事に力を入れていました。ちょうど屋良朝苗知事から平良幸市知事に替わり、田中角栄が逮捕されるという事件が起こりました。昭和51年度は、歯科の生活保護指定の医療機関というのが当初、59.4%ということで殆どの生活保護指定を受けてないという医療機関が多くありました。それから、金城輝雄先生が辞めたいと言い出した頃から、会からの退会の問題や金とポーセレン・金属床がそろそろ保険導入になるのではということで、日歯の方から支部に来て何回か支部会をもち、何度かもめたことを覚えています。昭和52年には、非会員の先生が広告を出して歯科医師を本土から連れて来て入会させて下さいという事で、これも何度か理事会を開いてもめた事もありました。同年の最初にデンタルフェアが開催されました。私の様に急に南部の役員に就けられるというのは、戸惑うことが多かったので、出来る限り執行部の先生方が、次の執行部を継いで欲しいと思い、高江洲旭先生を次期会長に推薦し引き継いでもらいました。



(左)嶺井浩先生　(右)高江洲旭先生

司会　高江洲旭先生は1期2年間やっておりまして、会員が102人、その当時は730(ナナサンマル)交通変更や琉大医学部の開学などがありました。お願いします。



1978年7月30日　交通規則の切り換え

高江洲旭　与那城先生が会長をなさっていた1972年(昭和47年)に開業した頃、ご指導を仰ぎお世話を頂きました。与那城会長は、南部地区歯科医師会のベースを作られました。それは、支部から南部地区になる大きな節目にもなっております。ご苦労された与那城会長をはじめとする3人の先生に感謝いたします。　定款を作りデンタルフェアにも熱を入れ、ご一緒に仕事をさせて頂きました。南部地区の伝統的な基礎作り、当時の執行部の先生方が今の会長になられた経緯については皆さんご存じだと思います。伝統的な事業を受け継ぎながら改革すべきことは改革し、古堅先生・友利先生・新城先生・玉木先生・兼浜先生・城間先生の6人のメンバーで、支部の編成を手掛けた。当時那覇市の医療協議会があり、デンタルフェアに関して那覇市から補助金を頂いた。友利政三先生のブルトーザー的に仕事をこなしていた事、当時のことを鮮明に覚えています。対外的にもいいメンバーでしていたと記憶にあります。伝統ある南部地区がここまできたのも歴代の先生方与那城先生をはじめ、高良先生・嶺井先生の大変なご指導のたまも

のと感じております。有り難うございます。

司会　次に、玉木史朗先生は2期で4年間やっております。支部会は十日会・三水会・十五日会・一日会があります。当時の会員数は121人で、社会的な事情は沖縄県の人口110万で、夜間断水が11ケ月もあり、県観光収入が200億円で、日本海中部地震と色々あった時代です。玉木先生お願いします。

玉木　私は、昭和49年開業までは中部病院勤務の公務員であり、中部地区の会員でもありました。当時、南歯のことはよく知らなかったのですが、ちょうど金属床やポーセレンの差額問題で日本中で歯科パッシングが起こりつつある時代に開業しました。昭和49年12月に入会し高良先生にはお世話になりました。その当時は、開業したてで会務に対しては関心がなく、特に班長や支部長なども経験はありませんでした。友利先生、新城彬明先生、前川先生等が支部長をしている時で、毎月の支部会を盛り上げるにはどうしたらいいか話しあったものです。それから高江洲旭先生の会長時代に理事とし初めて執行部に入りました。与那城先生が作られた定款は、まだ社団法人にもなっていませんでしたが、ちゃんと社団法人南部地区歯科医師会と明記されており、私達もそれを教科書として運営したものです。高江洲旭会長時代に1才半健診が国の事業から地方自治体の実施事業としておろされ、それが県歯から南歯で担わなくてはならない状況にありました。この際、我々南歯の方でこの事業を全部引き取りました。その健診をやることでその健診料をプールして福祉共済事業に役立てようと云う発想が起きました。当時、南歯の福祉共済金は$300相当の基金しかなく、それでは何も出来ない状態でありましたので、今日の福祉共済制度の芽出しであったと記憶しております。



(左)山田勲先生　(右)玉木史朗先生

司会　それでは、友利先生に話を伺いたいと思います。友利先生は158人の会員からスタートしています。当時は地価上昇(5.2%)や、第1回NAHAマラソン、泊大橋の開通、海邦国体等めまぐるしい時代でした。

友利　私が沖縄に帰ってきたのが昭和46年復帰の年でしたが、開業して半年もたたないうちに、新入会員で泊で開業しているのに開南支部長を引き受けさせられた事を思い出します。当時は、支部会はあるがなかなかうまく機能していない事情があり、支部を再編成して近所の先生方の親睦をはかる事が今後の歯科医師過剰時代に向けての対策の第1歩であり、歯科医師会が会としての力を持続していく為にどうしても必要という事で支部編成がなされました。嶺井会長の時、泊支部長をしていたのですが、浦添支部長の新城彬明先生・糸満支部長の前川清春先生と3人で持ち回りの合同支部会をやろうという事になり、支部会の持ち方、支部会をいかに魅力あるものにするか話題作り等を支部会の前の晩、玉木先生迄引っ張り込んで、夜遅く迄いろいろ問題提起しながら将来の展望を語りあった事を覚えています。高江洲旭会長の時専務として執行部に入り、副会長の古堅英信先生・理事に城間猛先生・新城彬明先生・玉木史朗先生・兼浜政勝先生と多士済々のメンバーから多くの事を学びました。高江洲会長、そして次の玉木史朗会長の時もそうでしたが、決断力があり「責任は私がとる、しっかりやってくれ」と励まされ、私も動き易かったし、色々教えられました。私が南部地区歯科医師会の活動に入る原点は、与那城先生がまとめられた「社団法人南部地区歯科医師会の定款」でした。これが私の起爆点であり、会の活動にのめり込むことになったと思います。

歴代執行部の流れを次に継ぐ為に、一生懸命やりました。私が会長を引き受けた時、玉木史朗先生・上原亀次先生・大山日出男先生・新垣元洋先生・新城啓和先生・高江洲正勝先生というメンバーで"昭光脚下の会"というまず脚下を見つめあうことからスタートしようという主旨で会長の諮問機関が出来、私の執行部に対する助言・提言を頂き無事任期を全うする事ができました。心から感謝申し上げます。

司会　次は、高江洲正勝先生にお願いしたいと思います。先生の会長時代は、昭和から平成へと移行し役員の任期が1期2年から3年になった時代です。当時の会員数が180人、先生が任期を終える頃には192人になっています。沖縄水産高校が甲子園初準優勝した年でもあります。

高江洲正勝　皆さんのお話を伺っていますと、その時代の執行部の苦労や、活躍を自分があまりにも何も知らないのに驚いています。南歯の流れの中では、自分が執行部に居た期間というのは、本当に短いものだと再確認しました。私も支部長からのスタートということになりますが、当時は電話連絡係ということで引き受けた記憶があります。友利先生がお話された支部長の先生方の活動は今日初めて知りました。私は県歯の理事を2期経験しましたが、友利先生から副会長をやってくれと言われた時は、本当にびっくりしました。南歯の執行部の事は知りませんでしたが、断る理由もありませんでした。会の仕事は一種のボランティアだと思っていましたし、常日頃友利先生の公私にわたる行動力、実行力に

感心していましたので、ついて行くだけでいいだろうと軽い気持ちでした。沢山の事を学びました。会長になった時は理事の任命で苦労しました。私の考えでは、各理事も当然継続してくれるものと思っていましたので、かなりの理事が個々の事情から出来なくなったのには困りました。現会長太田先生が専務に、現山川副会長が公衆衛生理事になってもらった時には助かりました。感謝しています。



左から　新城啓和先生、友利政三先生、高江洲正勝先生

司会　次は、新城先生お願いします。先生は1期3年やっております。当時の社会情勢に土日閉庁制度・県議会庁舎が落成・よい歯の表彰で那覇市立神原小学校が文部大臣の表彰を受けました。又、全国的にはNHKの「琉球の風」が放映されました。当時の会員数は196人です。

新城　大学卒業と同時に沖縄に帰ってきたのが、昭和46年，復帰前年でした。その当時の給料は私の兄が教員で、公務員の初任給が50ドル位でした。現在であれば卒業しても研修ということで給料は少ししか貰えないと聞いているのですが、あの当時は180ドル近く貰っていたので、復帰前ではあったがその時の歯科医師の高給には驚きました。それから2年間の研修の後、昭和48年に開業、復帰と同時に現在の保険制度が導入され、1番患者さんが多い頃、新米ではありましたが、当時30分位で1日50人で受付を終了した。過剰時代でした。今では、1日開けていても50人には達していませんが、その後の25~6年の間に、患者の受診の数は本当に隔世の感があります。振り返ると受診率は余り変わっていないし、歯科医師が増えたのだろうと今実感しています。10年位は、自分の為・家族の為・地域の為だけに診療していたのですが昭和55年支部長に任命されて、組織に係わることになりました。25年近く歴代の先生方、執行部の先生方の指導の元で、直接的には玉木史朗先生・友利先生・高江洲先生の元で仕事をさせて貰って、組織のあり方など勉強させてもらいました。人生というのは歯科医療も大事だがそれと同時に職業を通し、組織を介しながら人と人のかかわりの中で小生を成長させてもらえたということが、歯科医師会に入って良かった事でもあり、いい先輩，いい後輩に巡り会えた事は、良かったと非常に喜んでおります。歴代の会長の先生方がお話したように、支部組織の活性化というか、構築に尽力頂いたおかげで私が会長に就任した時には、支部組織も盤石ですし、支部長の先生方もしっかりしていました。理事の先生方に、そういう意味ではしっかり支えて頂いた。何の苦労もなく執行をさせてもらったという事が私の実感です。

司会　次は、新垣先生お願いします。阪神大震災・地下鉄サリン事件等と社会不安な時代でした。それではお願いします。

新垣　私が入会しましたのは、高江洲旭先生の会長時代昭和53年であります。大学卒業して3年後開業した為、修行・研修をしながら診療するという状態で、その当時患者が多く会の活動というのは出来ませんでした。1日の患者数は最初の頃は60人で、それが段々増えて80人程でそれを見るのに大変でした。その中で会長や理事をなさっている執行部の先生方が患者を診ながら、会の仕事をするバイタリティーは凄いものだと思っていました。昭和59年に友利政三先生が会長になられた時に、理事として執行部に入るのですが、友利先生からその当時、忙しい診療だけではなく、そろそろ会の仕事をやる時期になったのでやってくれと言われて執行部に入るのですが、私自身、会の仕事がどういうものか全くといっていいほど何も知らない事が多かったのです。友利先生はじめ役員理事の先生方に、いろんな事を学んだのもこの時期で、南歯会のルーツ・会の組織のあり方・運営など、多くの事を教わり経験を積ませてもらいました。そして、新城啓和先生が会長になられて私は副会長という役職を仰せつかりました。新城先生からも、南歯会のルーツ・ルールを3年間色々教えて頂きました。それから、会長という大変な役職を仰せつかり、どうしようか大変悩みましたが、その時の太田副会長・山川専務の力強いアシスタント、又フォローしてくれる2人がいたから会長を引き受ける事が出来たと思います。

2. 事業の中で特に印象に残った事

司会　与那城先生の会長時代は、先ほどの話で役員は3人だけでしたのでご苦労なさったことは良く分かりました。会長時代の特徴的な事、南部地区歯科医師会の発足、どんな苦労をしたか、お話頂けますか。

与那城　当時は現在の様な会館は勿論、事務所など在りませんから、理事会はその都度川岸を変えて、食堂の座敷で行うとか、役員の自宅などで行ったものでした。勿論、大抵の経費は自己負担です。事務職員なども雇えるはずもありませんから、通知の文書もガリ刷り、又は急ぎの時は、手書きをコピーした物を発送した事も有ります。会費徴収は口座引き落とし制なども有りませんでしたから、何らかの集会の場を利用して集金しまし

た。総会などは、大広間のある幸楽などの料亭を活用しました。三人だけでは全会員への伝達やコミュニケーションが図れませんから、それまでの模合のグループなどからヒントを得て、南歯を再編成、グループ分けを行いました。それを「班」と呼んでいましたが後から「支部」と名前が変わりました。この様に何もかもゼロからの出発でしたので、一つ一つ新しく創り出す必要がありましたが三人寄れば文殊の知恵と申します。山田先生、上原先生やその他の諸先生の御力を借りまして、どうやら創立の時代を切り抜けたのでした。

司会　定款についてお話お願い致します。

与那城　その定款も無くて困った物の一つでした。一つの団体を運営するには運営規則がまず無いと動けません。誕生間もない南歯にはその様な物もありませんでしたから、日歯や他府県の地区歯科医師会の定款などを取り寄せて、それらを参考にしまして当時の南歯の組織に即した規則集を捻り出したつもりです。

司会　当時専務をしていた山田先生にお願いします。

山田　与那城先生を手伝いしていた時は、上原斉先生と私、与那城会長先生と三人しかおりませんでした。その時会計がおかしなことになっていたので、それを整理して欲しいといわれて入ったのが与那城先生をお手伝いするきっかけです。与那城先生の足跡として定款製本が残っています。もう一つ形に見えないのが何かというと、もちろん理事もいないので、代議員会というものもないので、与那城先生が作ったのは運営委員会でした。永井先生を筆頭に當山良子先生・上原亀次先生、今で言う知恵袋を運営委員としておいて、与那城先生の考えていることをこの人達に色々修正してもらう事でした。だから私が会計をお手伝いしていた時は、私も何も分からないけどこの先生方のアドバイスで、現南部地区の一番の屋台骨となっている福祉共済は、与那城先生がおやりになった事です。何でもいいからまずお金がないと動くことが出来ないからお金を貯めようということで、わずかな会費の中から一般事業がないから使わないで、全部プールしようと、そのプールしたことがそのまま続いて、1才半健診から入ってくる金があって、共済が膨らんだのです。もうひとつの形として、残ったのはあれ一回きりだったのですけど、大きな事業は当時、日本歯科医師会が昔からあったものを沖縄もそろそろ時代が違ってきたので、甲種・乙種の歯科助手認定を日本歯科医師会に加入するまで、悪いけど沖縄県歯科医師会の方で、今いる従業員に名目もないだろうから、その人達に資格を与えることをして欲しいということを、県歯に言ってきました。各支部にいわゆる南部支部・中部支部・北部支部・先島支部と、その時ですよ、それからいっきに理事を作らないといけなくなった。高江洲先生が副会長になって私が専務理事でその時はもう上原斉先生がリタイヤして兼浜先生も加わった。あの時の写真が資料としてでています。歯科助手認定講習会を終了して、舞台で記念撮影をして打ち上げした。あれが与那城先生の形として、現在も残っているのは、定款と歯科助手講習会でした。その助手講習会を専務として講師人を編成しなければならなかった。それが終わった翌年に認定が終わったら、県が衛生士学院を作ろうと講師の編成で苦労していた時南部の講師陣をそっくり割り振りした。あらゆる基礎は全部与那城先生が作り出していると思います。



昭和49年第1回歯科助手認定講習会



(左)与那城勇先生　(右)高良政利先生

司会　それでは、復帰間もない頃の話を高良先生にお願いします。

高良　日本復帰が47年、私が会長になったのが2年後の49年です。その間与那城先生が色々と基盤を作られておられたので、私達の場合は新しい事業は何もしないで与那城先生が作られた線路にそのまま入っていこうと基盤がためとでもいいますか、先生がやられたのにコンクリートをうっていこうと言う感じでした。嶺井先生もそんな気持ちでやっておられたようです。ドル時代から日本円へと大変化時代になり、特に健康保険導入ですね。健康保険問題で厚生省から、山本技官が集団保険診療の指導でいらしたりして、集会は全部保険講習会でした。それと、なにしろ医療機関が少ないので、非医者行為(もぐり)が多く、警察に取り締まりをお願いしたりした。新垣先生がおっしゃったように、1日80～100人特に夏休みになると140人～150人、朝の5時頃から順番取りをやっている時代ですから、それ以上は受付出来ないと会員の診療拒否問題が出てきました。そして会

員に注意文書を緊急発送しました。それから、ドルから日本円になったので、県歯会と連携して保険外慣行料金を設定しました。それも沖縄県歯科医師会名入とか南部地区歯科医師会名入りで印刷すると、具合が悪いので各自の診療所名を記載する様に指示しました。海洋博では救急用の医師と歯科医師で出してくれとの事で、南歯会誌の南歯今昔物語に書いてある様に、2名ずつ取り組んで頂いたが、患者はいなくて暇なのでみなさん海洋博を見物できたようです。渡口先生のお話のように当時会員が少なく各同窓校友会で人材を南歯会へ、そして県歯会へと送った。南歯会は人材育成機関みたいでしたし、後輩は先輩のお願いを聞いて頂いた事が印象に残っています。

司会　それでは、嶺井先生よろしくお願いします。高良先生からずっと継続でやってこられました嶺井先生、特徴的なものがありましたらお願いします。

嶺井　私の場合レールが引かれていまして、その上を走るという形であり、この昭和61年に法人化ができました時も、設立記念誌に書いたのですけどその後も、南歯今昔物語にちょっとふれまして、大体もう何回か申し上げていますからご存じだと思います。やはり目新しいのはないですけど、最初はみんな政治問題のパーティーに出たことが特徴です。いろんな問題、先ほど申しましたけれども、新しい沖縄を作る会とか経済文化パーティーとか、屋良知事から平良知事に替わったこと等です。又、ゴールド・メタルボンド・金属床が保険に取り入れられるということで、何回か理事会を開いたことが頭に残っています。それから、2年目がたいした問題もなく非会員の方からアプローチがあり、会員に認めてくれと言うことがありました。それから、第1回デンタルフェアが行われました。まあ大体そういうような事で、平良進先生が厚生大臣表彰されたとか、そういうことがありました。先ほど申し上げたとおりということでほとんど目新しいことはございません。

司会　有り難うございました。それでは高江洲旭先生、家族慰安会や先ほど話した1才半検診、先生も特徴的な事業があると思いますが、お願いします。

高江洲旭　先ほども話しました通り事業計画として支部活動の強化、例会を持ち模合かねた会員の横のつながりを大切にお互いの情報交換をすることによって相互関係を深める大切な例会で組織の強化につながったと思います。玉木史朗先生からお話がありました、福祉共済金ですが、これは南歯のいわゆる福祉共済運用の為の、1才半健診料を積み立てていくということで大きなもので、昭和54年4月だったと思うんですけども、国の事業から1才半健診が各市町村へ移行したいということで、南歯はそれを引き受け、健診の日程とか那覇市側の協力のもとに1才半健診の実施、それが南歯の福祉共済のベースになったことです。それから、私が会長になった時に、新入会員の開業相談員の発足ということで、友利先生と玉木先生を、千葉県の方に地区から派遣して、2・3ケ所歯科医師会の事情を報告受けていました。色々独占禁止法の問題になりましてですね、当時もそういう先見があり、歯科商品組合との話し合いお互いに情報交換を行い、今後の相談委員会に協力を得ることが出来ました。そういう記憶があります。それから先ほどでました、デンタルフェアで那覇市からの補助金を頂いたということは非常にインパクトがあり、その事は非常に有り難かった。それから第1回家族慰安会が行われた事です。第1回は昭和53年12月23日ハーバービューホテルで奥様同伴出席で行われました。奥様同士の親睦も行われ好評だったというふうに思っております。だいたい以上です。

司会　有り難うございます。家族的な雰囲気を作ってきた事ですね。それでは、続きまして玉木史朗先生に移りますけれども、先生の会長時代が121人で4年間に151人、だいぶ増えました。厚生省の資料では沖縄県では昭和55年には歯科医師数は240名。4年後には369名になっています。ですから129人も歯科医が増えた時期なのです。先生、よろしくお願いします。

玉木　そうですね。私は2期やって沢山仕事をしているように皆さんは印象に残っているようですが、実際に私自身がやった仕事は相前後しますが、皆、芽出しと云うかその先駆け的な発想を提供したいという例が多いわけです。先ほどの福祉共済問題の時もそうだし、のちの那覇市学校歯科保健大会のそれも、私の会長時代ではないし、芽出しというか、きっかけを作る役目だけでありました。その中で司会の渡口先生が先ほどおっしゃったように歯科医師が急増してきたということがありました。当時、薬剤師が急増し薬局の距離制限が云々され、その問題が生じていた時でもありました。本土では都市部で特に歯科医師の増加に伴う開業問題が社会の話題になっていました。北海道では薬局と同様、開業場所の距離制を歯科医師会が規制した為、公取に訴えられ判決の結果違法であるとされたものです。そのような状況下でありましたので、南歯でもどのように均衡を保つ様に開業して頂こうかと考えられたのが開業相談委員会というのもでありました。それは、南歯の各支部別の医療機関の保険の請求点数の状況を調べ、その資料を南歯や材料店を通して、これから開業される歯科医師に提供して開業場所の設定を自主的に判断出来るようにということでありました。しかし諸般の事情から2年くらいで廃止せざるを得ない事になりました。

司会　その当時、沖縄県の車の台数は34万台でして、玉木先生の話を聞きますと、南部地区歯科医師会はみんなで集まろうという大きな目標があったのですね。その中で開業相談委員会やいろんな事を手掛けています。有り難うございました。それでは続きまして友利先生

にお願いしたいのですが、先生の会長時代は現在の南歯を充実させた時期だと思います。内容的にはかなり盛り沢山ありますので、最初に法人化についてお話下さい。

友利　高江洲旭会長の時代に、ある程度の流れが出来、組織ができました。それを完成させたのが玉木史朗先生の時代でした。でこぼこを全部ならされて私の時代に入ったわけで、お陰でかなり自由に動けたと思います。社団法人格を取得したこと、那覇市学校歯科保健大会、それから、歯科医青色申告会と税務当局との関係見直しという事がその時期にございました。私が那覇地区青色申告会と北那覇地区青色申告会、両方の会長を一時期やらざるを得なくなり、那覇・北那覇税務署を走り廻ったことを思い出します。法人化の問題ですが、実は昭和45年に曙の方で西銘順治市長の時に沖縄県歯科医師会が会館を作ろうとしたのですが、法人格をもっていないということで実現できなかった。与那城先生が社団法人として定款を作られたのは、そのいきさつがあったからじゃないかと私は理解しているのです。法人格を持つと、どのようなメリットがあるのかといいますと、金融機関からのお金の借り入れが出来ること、対社会・他の法人格をもつ団体と対等な話が出来ること、それから法人は業界と行政を結ぶ接点になっているということです。しかし、監督官庁に報告義務がある事、会計から事業内容迄事務手続き上の繁雑さというデメリットはあるのです。そして、当時は法人化を出来るだけやらせたくない県庁医事課の反応がありました。しかし、むしろ官公庁にとってはほんとは便利なのですね。官公庁は法人を通してその業界全体を監督できるわけです。ところが、いろんな業界が法人を作り過ぎて拒否反応がありました。しかし無理にお願いして申請してから2ケ月程という異例の早さで法人格をとる事ができました。これで南部地区は金融機関からの借り入れも、公的機関からの補助金等の受け入れも可能になったのです。先ほど、高江洲旭先生からお話がありましたが、那覇市からデンタルフェアに対する補助金50万を頂いたのですが、法人格のない南部地区歯科医師会に対して那覇市は非常に難色を示していました。しかし、南部地区を通して法人格をもつ県歯に提供をするという形をとり予算書を出してお願い致しまして、受け入れ可能となったわけです。その様ないきさつもあり、又1才半児の健診料もかなりの額が貯って来ていた。今現在、1億3千6百万円程ですが、そういう任意団体としての限界に来ていた時期だったと思います。

与那城先生を起点として、スタートした南部地区歯科医師会も法人化せざるを得ない状態にあったといえるでしょう。県歯との対応も誤解が憶測を呼び、法人の中に法人を作る南部地区の反乱と受け取られたりした時期もありましたが、県歯と対話を通じ、その実情を理解して頂いた。法人格を取るにあたり一番苦労したのが、副会長の高江洲正勝先生・新城啓和専務理事でした。県庁医事課に正装して通いづめ、あれだけの定款を書き上げました。勿論、与那城先生の定款がその叩き台になっての事でした。本当にご苦労様でした。その時、法人格を取得して間もない南部地区医師会（中村義清会長＝現沖縄県医師会副会長）に大変お世話になりました。南部地区医師会の定款、法人化した時のいろんな資料を高江洲正勝先生が頂いて新定款作りに参考にさせて頂いたという事を記録に残して欲しいと思います。1才半児の健診料の積立、福祉共済積立金の件ですが、私が専務の時でした。当時の共済積立金は先ほどの玉木先生のお話にありました様に、300ドル（360円に換算しても11万程）でございました。高江洲旭先生・副会長の古堅英信先生・城間猛先生・新城彬明先生・兼浜政勝先生・玉木史朗先生の英断に心からの敬意を表します。1億円貯めるのが夢でしたけれど現在1億300万余、疾病共済・死亡共済・融資金として大きく会員の為に役立っていると思います。

家族慰安会（現在家族忘年会）も私が専務の時のスタートでした。当時受益者負担で参加OKの人だけの会でした。それでもハーバービューホテルの白鵬の間で74名の参加でスタートした事、そして登川正樹・玉城信徳両先生を招待して御二人に言葉を頂いた事をとても嬉しく覚えています。

司会　学校保健大会の件もお願いします。

友利　玉木史朗先生に宮城正廣先生がその企画を話した事があった様ですが、私は知りませんでした。会長を引き継ぐにあたって玉木先生が宮城先生にハッパをかけてくれまして、私もその企画を知り、理事会で検討した結果「やりましょう」という事になり、予算も組んでなかったので、次年度に予算を組むということになって、早速支部廻りをしてその意義や、専門団体としての役割等を話して理解を求めました。準備に1年8ケ月程かかりました。玉木先生はじめ、いろんな先輩方のアドバイスと宮城先生を中心とした若い先生方のアイデア等が非常にうまくいって、那覇市学校歯科保健大会を開くことが出来ました。昨年で13回目の大会を無事終えることができ、学校関係者・養護教諭・教育委員会等の協力があったからこそと思っています。又、日本の一流の先生方が講師として来て下さり、内容の素晴らしい講演をして頂きました。南部地区歯科医師会の情熱が講師の先生方にものりうつった様な大会が出来たと思います。

司会　有り難うございます。ちなみに那覇から名護まで沖縄自動車道が開通し、各地区との交流もより盛んになった時期です。続きまして、高江洲正勝先生宜しくお願いします。

高江洲正勝　法人化の時は、定款の作成を担当しました。与那城先生の時の定款が、なぜか製本になったものは私の手元にはありませんでした。法人設立に関する本や参考書を色々買って読みました。東京の八重洲ブックセンターにも行きました。昔は行政の方も法人

化を奨励していたそうで、設立時の審査はそう厳しくなかった様です。ところが友利先生が言われた様に、私達の頃は法人化をさせたくない時代なのです。友利先生を中心に執行部ががんばった事は、忘れる事はできないと思います。私が会長になった時は、本土の方では歯科界の冬の時代が始まりつつあった。開業を始めた若い先生方が、収入の面で厳しくなっていると聞いていました。沖縄では幸にもその実感はありませんでしたが、就任時の支部廻りで、若い先生方の為にがんばりたいと挨拶した事があります。何も出来ませんでした。結局はこれまでの執行部の作ったレールの上を、事故を起こすことなく走った3年間でした。

司会　高江洲先生、事務局のOA化は先生の時になりましたね。

高江洲正勝　今のOA化とは全然違います。あの頃は理事や支部長への連絡は、事務局が頻繁に電話していました。診療中の先生方にはかなり大変でした。FAXがあるといいんではないかという事で、太田専務を中心に検討を始めました。役員だけではなく会員にもどうかという事になり、希望者を募って一括購入しました。かなり安くついたので、コピー機も買おうという事になりました。九州八市の会長・専務会議の時は、各県の専務が太田先生にアドバイスを求めていました。現在のコンピューターはすごいそうですね。事務の合理化がかなり進んだと聞いております。

司会　すばらしいですね。先見の目があって、OA化の基礎を作ったわけですね。続きまして、新城啓和先生にお願いします。

新城　執行部を引き受けるに当たってまずは、組閣といいますか、理事になってくれる先生方を人選しないといけないわけで、その上で1番最初にお願いしたのが、その当時副会長の新垣元洋先生に何回も通い、やっとくどき落として引き受けて頂いて安心し、専務はどうしようかということで、その当時、太田先生は専務を降りるつもりで私に挨拶にみえていたわけですけど、ちょっと待ってくれということで、本当いうと大分苦労したんですけど、最終的にこちらの誠意が伝わって、副会長・専務と無事スムーズに決まりました。それから、理事の先生方もすんなり気持ち良く引き受けて頂いて、無事3年間が終わったというのが私の感想です。その中で一番印象に残っていることは、那覇市学校保健歯科大会が昭和60年那覇マラソンと一緒に発足した事です。けれども、ちょうどその時に第1回から8回目までの講演集を作ろうということで、1つの記念誌を発行できたということ、当然記念誌ですから、予算もかかりますが、那覇市と南部地区歯科医師会と両方折半で費用を出してもらった事です。それから、高名な先生方の講演集を南部地区歯科医師会が、記念誌として発行できたという事は、私にとってラッキーな出来事だったと思います。又、もう1つの反省点といたしましては、その当時の特別講演の先生方だけの記念誌になっており、その中には、この座談会の司会進行をしておられる渡口進一先生・宮城正廣先生・養護の先生・学校の校長先生・PTAの役員の先生方に、内部の講師という形で講演をして頂いたのですが、諸般の事情でそれを記念誌に含めることが出来なかった事が私にとって心残りです。

司会　ちなみに、先生は学校歯科保健大会を7回・8回・9回となされ、そのころ会員数は196人最後の年には215人に増えています。次に新垣先生お願いします。

新垣　私の時には、友利先生からずっとやってきた那覇市学校保健大会が、10回の大会となるということで、10回記念大会という節目の事業でこれは平成7月1月26日、第10回記念大会ということでシンポジウム形式で今までの特別講師井上先生・大国先生・斎藤先生を招きまして、県内講師宮城正廣・コーディネーター高良政勝先生をお迎えしまして、今までの噛むことの大切さについてやってきた本大会の10年間の集大成として、それをシンポジウム形式でやりました。それが平成8年の1月に沖縄県学校保健会というのがありまして、第32回沖縄県学校保健研究大会において「学校保健功労賞(団体)」という表彰を南部地区は受賞しました。それともう一つ、私の時代以前からある会報誌で「南部地区歯科医師会だより」というのがずっとあるのですが、それからこちらにいる友寄清順先生の広報担当理事によってこういうふうに「綾羽」という表紙題に変わった事で平成6年8月号より第1回「綾羽」に変わりました。そういうことで、執行部の各担当理事が一生懸命やって頂いて、会が盛り上がって行くような気がいたしました。もう1つ変わったことといいますと、総会をホテルでやったという事です。総会は普通、会館でやるわけですが、会長改選の時とか、定款の改正などは別ですが、普通の総会の時には出来るだけ会員が多く集まる合同支部会にしてもいいんではないかという狙いがあったもんですから、まずやってみようということで、合同支部会という形でホテルで総会をやってみました。ある先輩の先生から、「お前は会費を取って総会をやるのか」と言われまして、支部会では5,000円で支部会費を集めてやっていますので、この会でも1人当たり5,000円の会費をだして頂いて、ハーバービューで総会を開いたわけでございます。合同支部会という支部会活動をより重視してきた南部地区の流れであります。南歯には9支部ありますので、9支部集まりをかねて、それを全体の合同支部会とし、それを総会で使わせてもらったということです。その総会では、100名を超える先生方の出席で盛大に総会をさせて頂きました。あと一つだけ、今日先生方にお集まり頂いた会史編纂を最初にやろうと声を掛けたのが私でありまして、今、与那城先生が冒頭でお話がありましたように、南部地区の足跡をきちっと残しておくことが、将来南部地区を支えてくる先生にとっても必要だと思いまして、理事会で承認して頂きたいわけでございます。その後準備

会を発足させ、与那城先生をはじめ色々な先生の所でお話をお聞きし、準備を始めました。そういうことで、会史編纂の実行委員会ができ、今日の歴代会長座談会が開かれた事は、現執行部が努力されたことはもちろんのこと、私にとって感無量でございます。

司会　有り難うございます。友利政三先生、那覇市立病院の口腔外科の件につきましてもお願い致します。

友利　市立病院の中に、歯科をテナントで作るという話が突然でてきましてびっくりしました。ともかくお話を伺ってみようという事で、市立病院の田端病院長に高江洲正勝副会長・新城啓和専務・友寄喜樹先生の4名でお会い致しました。診療科にすると、他府県の例で赤字の可能性がある、それでテナントの話がでてきた、そういうことでした。琉大の口腔外科がありますが、西原の方に移転して、那覇市民・県民が非常に不便である。時間的・経済的・負担も大きい。又、一般開業医も困難な症例の紹介にも困っている。公的病院には口腔外科が必要という事を理解して頂いた。現在素晴らしい実績を残し、ますます発展しております。田端辰男院長の英断に心から感謝している次第です。



那覇市立病院口腔外科開設10周年記念祝賀会

司会　有り難うございます。それでは、山田先生のお話を伺いたいと思います。先生は、友利先生の会長時代、発足から15年現在も代議員会議長をなさっているのですね。今日もその為にお出で頂いていますので、よろしくお願いします。

山田　今、渡口先生からお話がありました様に、友利会長時代に代議員会議長に選出されました。当時の執行部の方々が大変ご苦労なさって、社団法人設立という長年の夢が叶いました。社会から一人前に認められた組織になったわけです。その後の歴代会長と執行部が一生懸命会員福祉と社会に貢献すべく事業にご苦労なさっております。そんな苦労が実るよう側面からサポートをする機関が代議員会だと理解しています。執行部は365日会務に携わっています。それに対し、代議員会は年に1～2回か多くて3回くらいだと思います。通常代議員会が1回で、臨時代議員会は1回もしくは2回くらいで執行部の事業を把握しなければなりません。しかも、法人の代議員会議事録は主務官庁の審査にかかります。その事を新生社団法人南部地区歯科医師会代議員会の代議員の先生方に自覚浸透して預けるよう努めています。先ほど、高江洲正勝先生は見たことがなかったとおっしゃった、与那城勇会長が作られた定款の表紙には社団法人と印刷してあります。書き込むからには社団法人とはいかなるものかという事を勉強しながら、与那城先生にその重みを叩き込んで頂きました。その教えを若い先生に引き継ぐのが私の役目だと認識して現在議長職を務めています。代議員会が活発な討議と審議がなされ、立派な議事録がなされると総会では、親睦と年1回のお祭りになっても良いのではと言うのが私の願いです。その点、南部地区の代議員会は初めて代議員になった若い先生達もよく意見発表され、神聖な空気の中にも和やかな雰囲気があり、21世紀は若い先生達で、立派な南歯会に発展出来ると頼もしく期待しています。

司会　友利先生、青申会についてお願いできますか。

友利　2年程で私は、北那覇税務署・那覇地区は玉木史朗先生にお願いしました。結局、15年程青申会活動をやりました。税務署では、税務団体協議会という税務協力会が出来て年3回～4回の会議が開かれ、その後に懇親会もあり、かなり私達の業界についてのレクチャーが出来たと考えています。税務署の方々から税についてのレクチャーを受け、私は業界のレクチャーをするという関係ができたと思います。職員の方々は1、2年程で転勤になり、又最初から人間関係の再構築をし、又レクチャーを受けレクチャーするという非常に根気のいる仕事でした。しかし15年もすると、那覇・北那覇・沖縄・名護・宮古・八重山と転勤された方々から電話があったり便りがきたりと、確実に我々の業界に対する認識が全県に深まったものと考えております。

3. 南部地区歯科医師会の将来への展望

司会　話を伺いますと、南歯には大変素晴らしい会の運営がなされています。今後南歯はどういう方向に進んだ方が良いのが、将来の展望についてお話を伺いたいと思います。
与那城先生お願いします。

与那城　展望と申しますよりも、私の現在の立場から申しますと第一線を担われる先生方にお願いすると申し上げるべきでしょう。同胞県民の為に良い地域医療を提供するには、団結の力でもって医療環境を改善して行く必要があります。団結の力に最大の効を発揮せしめ得るには、ひたすらに「和」の精神が肝要であります。今後とも和の精神で以て会の運営に当たって頂きたいとお願い致します。

司会　有り難うございました。高良先生お願いします。

高良　役員は忙しいなか会員の為にがんばっていますので、私も与那城先生と同様、どうか和の精神でご協力をお願い致します。

司会　嶺井先生お願いします。

嶺井　将来の展望についてという事ですが、現在の我々の情況は御存知のとおり、政府による医療費抑制に依り保険点数は以前程アップする見込みはなくなり、又同業者の増加によって患者数は年々減少し概して良好といえず又、不景気が追い打ちをかけ収入は益々先細りの観があります。歯科医師会全体の問題として入学定員を削減するとか医師の年齢制限をするという問題が俎上にのってきていますが、新規開業するにも設備に要する費用とか患者獲得が出来るかといった問題や地区会に加入する際にかかる費用等を考え合わせると勤務医の方が気楽という予想が成り立つと思われます。まず私は4つの事を考えたのですが

1. 独自の会館を建設（ムリな話）する。
2. 営利事業を考える。（会費負担を軽減する為）
3. 非会員の入会をしやすくする。（環境整備）
4. 福利厚生費を充実させる。（病休・年齢制限がきても）

どちらも無理な話と片付けられそうですね。何れにしても地区会に加入してよかったし、又会員が色々な問題について話し合い、悩みを解決し明日への活力が出てくるようになった事は喜ばしい限りで、歯科医師会加入のメリットが今後もずっと継続される事を希望するものです。我々は未曾有の大戦を体験し焦土となった沖縄から多くの先輩方の御奮闘により歯科医師会の組織が充実し、私的集団から法人組織となり対外的にも何ら臆することもなくなっています。併し、現今の多難な時代にこれまでの諸先生達のご苦労を無にすることなく、輝かしい伝統を守り発展させていくことではないでしょうか。

司会　高江洲旭先生はいかがですか。

高江洲旭　21世紀を目前にして、歯科界は大きな変革の渦中にあります。この中にあって、これからの日本の歯科医療はどうあるべきか、まず現状を認識し明日の歯科医療への指針を探ってみる必要があると思います。日本の歯科医療は戦後から今日まで国民健康保険制度の大枠の中で推進されてきました。そして国民は広く歯科医療を受ける機会に恵まれ恩恵を受けてきました。その歩みの中で我が国の医療供給体制は、昭和36年の国民皆保険制度以来、歯科部の設置や定員増など、社会構造大きく変化した現在、歯科医師の過剰時代を迎えております。歯科界をとりまく環境益々厳しさ増しております。この現実をふまえて未入会者の対策を検討する時期に来ていると思います。諸問題を解決していく為には南部歯科医師会の組織力が益々重要になって来ます。来るべき21世紀に向けて大きな視野と見通しの下に南部地区歯科医師会の各会員が一致協力して問題に対処してゆく必要があろうと思います。

司会　玉木史朗先生お願いします。

玉木　これまでは、我々の南歯の歩みを色々お話して頂き大変有意義な一時でした。先輩の皆様、有り難うございました。今度は、来る21世紀に向けての何か展望をということでありますが、一言述べさせて頂きます。今日の日本の社会はさまざまな変革を迫られているように思われます。金融をはじめ、経済・政治・更には社会構造の変革にまで及んでいるかに思われるくらいです。このような状況下で我々は、医療制度そのものがどのような方向に進まんとしているのか、我々自身にもよく理解出来ないということではないでしょうか現在の歯科医師過剰問題、歯科医療の需給問題が今日、提唱されている解決策でどれほどの効果が期待出来るのか、現行の医療保険制度もこれから先、どの位維持出来ると考えているのか、必ずしも明るいものではないように思われるのだが、我々自身も自衛の為の対策を今から考え始めなければならないのではと思うこの頃です。皆様はいかがお考えでしょうか。

司会　有り難うございます。友利先生お願いします。

友利　今の玉木先生の意見にまったく同感です。厚生省・国の施策に振り回され、65才定年または70才定年とか、日歯が70才定年に賛成を表明したり日歯代議員会では決まった事ではないという結末とか、一般会員の私達には何の問いかけも議論もなく定年制に対する保障はいっさいふれられていない。上意下達で我々は日歯広報で知らされるだけの存在なのか、非常に疑問に思うことが多い。恐らく定年制が実現するとしても10年以上はかかると思う。今の40代・50代の先生方も自身の事として考えないと困る事になる。歯科界の将来を大き

く展望する為、皆で語り合い議論しましょう。困難に直面した時には先輩方、そして与那城先生をはじめ、歴代会長の知恵をお借りして解決の道を探る。又、その事が後継者育成にもつながると思う。若い才能ある先生方を多く育てる事が将来の南部地区にとって最も大切な事と思います。

司会　有り難うございました。高江洲正勝先生お願いします。

高江洲正勝　自分達を取りまく環境が、これからも厳しいということを前提に将来を考える必要があると思います。南歯の発展の為には、若い開業する先生が入会する事が大事です。組織率を高める為には、入会のあり方まで考え直さなければいけないのではと思います。入会金、病院歯科や勤務医等どうしても議論が必要です。

司会　新城先生お願いします。

新城　現在は、少子高齢化社会が急ピッチで到来する21世紀を迎えてあらゆるものについてクオリティー・オブ・ライフが求められています。近年、口腔の機能と全身の健康との関わりが注目されてきており、かむことは顔面や頭部の血流を良くし頭の働きや情緒の安定に役立ち、ポジティブな働きがあります。又、よくかんで食べることによって糖分の血中濃度が高くなり、満腹感ができることによって食事の量そのものが減り、過剰なカロリー摂取を防ぐことになり痩せられることが科学的に証明されています。21世紀は、歯科医学・医療というものが、ますます脚光を浴びるものと思慮されます。明治31年に公立学校医が設置をされ、我々の先輩方の努力によって昭和6年になって初めて学校歯科医が設置をされました。具体的には保健所に少なくとも歯科医師1人の確保、所長問題・療養型病床群・特別養護老人ホーム等に於ける歯科医師の配置・学校現場に於ては年2回検診の予算確保又、養護教諭と同様に歯科衛生士の設置の義務化等を含めて、医科歯科の格差是正に向けて最大限の努力をすべきではないかと考えています。

司会　新垣先生いかがですか。

新垣　現執行部や、近い将来の役員に早めに改正して欲しい点が2点あります。最初にですが、「選挙規則の一部改正について」です。現在の選挙規則では会運営がやり辛い、役員や代議員の選出がスムーズにいきません。南歯の総会（3月）で南歯や県歯の代議員を選出しても、後日の県歯の総会で理事・役員が選出されます。その際、両方に重複する役員がでることがよくあります。そうすると、県歯の代議員に欠員が生じてきます。問題点は、その欠員が生じた時の南歯の対応です。現在の規則では、総会でしか選出できないことになっており、次の総会やその為だけの臨時総会を開催しないと選出できません。そこで、予備代議員から正代議員に昇格できる簡便な方法を取り決めると、スムーズに欠員なく会が運営できると考えます。選挙規則の一部改正を早めに実行してはいかがでしょうか。次に「予算編成について」です。従来の入会金と高校検診料依存型の予算編成を改めて、将来健全な予算編成ができるようにすることではないでしょうか。現在は、入会金50万円の内35万円は一般会計に算入しています。従って、次年度の新入会員の予定数によって予算の枠が設定されています。新入会員が予定より下まわると、予備費もなくかなり苦しい財政となり、会の運営は困難となります。きちんと決まった予算額の範囲で事業計画を立て、その事業を遂行する事が正当でありましょう。又、高校検診料の170万円も一般会計に算入されているが、検診料は検診医にかえすことが本来の姿と考えます。入会金も高校検診料も一般会計に算入するのではなく、将来の為の積立金として備蓄していくことが大切です。正規の会費による、本会の事業遂行ができる事が会の発展につながると思います。いかがでしょうか。以上です。



左から　高江洲正勝先生、新垣元洋先生

司会　山川先生、最後に座談会を閉じてもらいましょう。

副会長　歴代会長の先生方、今日は時間の制約のある中で色々と貴重なお話を聞かせていただいて感謝申し上げます。この会史編纂が成功するには、先輩方のご指導・ご協力がぜひとも必要です。今の若い先生方、将来の新入会員の先生から、南部地区歯科医師会とはどんな会かと聞かれたときに、これを読みなさいと渡せるような、会史にしたいと思います。本日は有り難うございました。

C. 女性会員の座談会

日時　平成10年5月23日(土)午後7時
場所　香港飯店

出席者(敬称略)
与那嶺貞子　村田芳子　山内秀子　宮城トシ　林房子
山口悦子　友利時野　宮城智恵子
司会　上江洲紀子



座談会の先生方

1. 子供時代の歯科医療

司会　今日はお忙しい中、ご出席下さいましてありがとうございます。今日は経験豊かな女性の先生方に戦前・戦後を通して歯科医療を中心に当時の生活環境のお話をしていただければ幸いです、まず最初に先生方の子供時代の思い出や歯科医療事情についてざっくばらんにお話を伺いたいと思います。ではまず友利先生からお願いいたします。

友利　私は、父の仕事の関係で中学3年生までヤマネコで有名な西表島で過ごしました。戦後、そこでの歯磨きは日常塩を使って指でこすったり、又、木の燃えかす(炭)で磨いたりしていました。食事は姉や友達と一緒に海でスヌイやウニや貝、タコ、小エビ等を又山ではフキ、椎の実、フード(果実)等を取ってきて、手のこんだ料理はしませんでした。調理法は生または塩ゆでする位でした。その為栄養も豊富で硬い物を噛む事により歯がきれいになりむし歯も少なかったように記憶しております。歯科医院で治療した経験もなく乳歯も自然の脱落にまかせていました。

司会　現在、軟食の弊害が社会問題となっていますが、当時は、食生活の中で歯が磨かれていたことになりますね、与那嶺先生、何か当時の子供達に対してお感じになったことはございませんか？



中華料理を囲んで

与那嶺　私は、戦前本部町で開業と同時に初めての本部小学校での校医になりました。今でも運動場の高台に立ってしどろもどろの挨拶をした事を思い出して赤面しています。毎年の口腔診査は、本部で開業して居られる神元先生に教えて頂きました。あの頃の学童は、歯ブラシもなくほとんど歯も磨いていないので、食べ物は甘い物を食べるなと云うだけの指導でした。今考えると硬い物を強く噛んで食べなさいと指導しなかった事に気が引けます。

司会　山口悦子先生、那覇でお過ごしたと思いますがご自分のご体験も含めていかがでしたか？

山口　戦前と戦後しばらくは学校検診もないので歯の治療をした記憶はありませんね、当時は歯科医院へ行くのはお年寄りの方が入れ歯を入れに行くものだと思っていました。一般的に子供が歯科医院へ行くのは少なかったのではないでしょうか、それでも、私の場合は父が今後は女性も技術を持たなければならないと言う事で小さい頃から何か技術をと考えていて歯科に進んだわけです。

司会　私は、戦後久米島で生まれましたが当時は、簡単に歯を抜きその後、補綴処置をしなかった為、40才の人が70才位に見えた方が多かったですね歯科医院が近くに無かったので大変不便を感じていました。林先生いかがでしたでしょうか？

林　私は、生まれも育ちも八重山です。物心つく頃には伯父(久高将旺)が八重山で開業していましたので歯科という言葉はいつも身近に感じていました。大声で泣きわめき治療をした記憶は殆どありません。足踏みエンジンを面白がって踏んだり、技工士さんが片足でフートベルを踏み乍ら金属冠を作るのを興味深く見て育ってきました。

司会　村田先生には、戦前の卒業ですので当時の歯科事情で記憶に残っていることがございましたらお願いします。

村田　戦前の医院関係は上之蔵に集中していて歯科医院も四軒ありました。宮平歯科の当山良子先生(故)は人力車で通勤していました。戦時中からしばらくは海軍の患者さんが多かったですね。私の父もそこでレコード楽器店(蓄音機)をしていました。

司会　山内先生も離島のご出身だと思いますがいかがでしたか？

山内　私は、宮古で生まれ育ちました。昭和初期当時の宮古島には柴田米三先生(柴田道子先生のお父様)の歯科医院が一軒あっただけで子供の頃の歯痛の記憶は全くなく一度ムシ歯予防デーの日に柴田先生が歯磨き粉と歯ブラシを小学校校庭で皆に配って下さった思い出があります。やはり食生活の影響だったのでしょうか歯痛の子はいませんでした。

2.学生時代・戦前・戦中・戦後の思い出

司会　それでは戦前・戦後を通じて先生方の学生時代の思い出があると思います、特に戦前、伊波普猷が近代女性としての自立を向上させた時代もあり那覇、首里の環境は女性の息吹のスタートともいわれていました。その中で先生方はどうして歯学を志したのか又、当時の生活はどのように送っていったのか、お話を伺いたいと思います。友利先生はどうして歯科医師になろうと思ったのですか？

友利　戦時中、戦後にかけて父親が出征中なので母親一人での子育ての大変さを見ていましたので女性が何か資格を持つ事の大切さを子供心に感じた事があり高校生の頃、父親が屋我地診療所で夜中でも馬で往診しているさまを見て当時の私は女性には往診は無理だと思い歯科医師になる事を選びました。

司会　宮城トシ先生はいかがですか

宮城トシ　女学校の校長先生に女性の仕事として歯科医師がよいとすすめられ山内先生のお父様の紹介で日本女子歯科医専にすすみました。

司会　宮城智恵子先生は小学校、高校を本土での通学体験をお持ちのようですが、宜しくお願いします。

宮城智恵子　昭和20年2月熊本に疎開し、翌21年の3月に引き揚げてきました。当時疎開者は具志川村字金武湾に収容されていましたが、父の仕事の関係で糸満小学校へ転校しました。熊本帰りなものですから私だけ靴下と靴を履き、ランドセルなどの学用品は揃っていました。当時の学校にはガジュマルが屋根代わり、石階段教室、テント小屋、馬小屋校舎とよばれた瓦葺きの掘ったて小屋がありましたが、教科書はない時代でした。昭和31年歯学部進学を目指し、叔父(母の弟)のいた東京へ行き私立女子高校に一年遅れて入学しました。昭和31年のことですが、今でいう県外進学のはしりのようなものです。

司会　それでは山内先生に戦前の東京は文化の息吹も新鮮な時代であったと思いますが女子歯科大生としての生活をお聞かせ下さい。

山内　私は、東京女子医科大学の創設者吉岡弥生先生の女性も医学への道をという言葉が常に頭にあり希望は医学でした。しかし父(医師)の歯科なら将来家庭との両立が出来るだろうからという意見で歯学を目指す事になりました。今歯科医人生でよかったと思っています。当時は、東洋女子歯科医専と日本女子歯科医専の二校があり私は日本女子歯科医専の方でした。第二次世界大戦終戦まで続いていました。予科半年、本科四年四年半の学校で昭和12年入学、


山内秀子先生(中央)

16年暮れ卒業まで支那事変はあったものの、のんびり、優雅な学生生活で日曜は銀ブラとテシトリッヒ(モロッコ)、ガルボの(椿姫)、未完成交響楽、望郷と洋画のハシゴをしたものでした。邦画は原節子、高峯三枝子(暖流)の時代でした、16年の暮れ卒業、軍靴のひびきが目の前にきているとも知らず京都の友人も一緒に楽しく宮古島に帰郷した翌日は真珠湾攻撃をラジオで聴いておどろきました。年が明けて17年母校の研修予約もそのままに勉強不足のまま開業しましたが女性歯科医は宮古では初めてとあってめずらしがってくるクランケもいたのか大変な患者の数でした。

司会　村田先生、先生は御主人の県歯の元副会長哲雄先生(故人)と共に医療に従事していたと思いますが女性としても公私共に大変忙しい時代だったと思います、戦前の学生時代や戦後はいかがでしたか？



戦後間もない頃の村田歯科医院

村田　私は、昭和16年に卒業、80人の卒業生がいました、4～5ヶ国の外国人留学生もいて国際色も豊かでした、診療中の身だしなみは厳しく現在のヘアスタイル(髪を後ろで束ねる)もあの当時の名残です。戦前は、上之蔵に住んでいました、結婚し夫哲雄の郷里与論島に渡り終戦の時長女が生まれました。その頃、親に会いたくて与論島からサバニに乗り子供を連れて沖縄に帰ってきました。帰る途中那覇に着くまで大変苦労しました。山原に着き、山を登ったり下りたりで奥の部落から大宜見まで歩き、小さな子供とけがをしながらボロボロになって那覇に帰りました。開業していた歯科医院は空襲で焼けてしまいその焼け跡から学生時代の消毒器だけを使用可能で拾い出しました、旧姓の「比嘉」という文字が刻まれており私の現在の宝物です。父は軍の時計修理もしていてそのお陰でお菓子や食料が沢山ありました。与那原で開業している時エンジンの故障も父が直してくれ今でも、父には感謝しています。

司会　与那嶺先生は確か本部のご出身だと思いますが卒業後はすぐ本部へお帰りになられたのですか？そして歯科医院のスタートはどちらですか、

与那嶺　昭和16年、歯科を卒業してその年に卒業証書と登録した免許証を同時に沖縄に持ち帰りました。生まれ育った本部の土地で開業しました。だんだん戦局も騒々しくなって来る時代でしたので、一日も早く開業した方がよいとせがまれてのスタートでした開業した当時は、まだ自信がないので伯父(故真喜屋先生)の歯科医院で研修に励みました。その内に本部にも本土から大部隊が駐屯してきました。兵隊の患者が多く一般の患者は夜遅くまでみていました。技工は大変忙しい毎日でした。昭和20年の10．10空襲では全滅し私の診療所も直撃を受け財産(歯科)は全て灰に消えました。大事な免許証も焼けてしまいました。戦争が激しくなり上陸され地上戦になると丸(タマ)がいつ自分に命中するか息を殺して壕でひそんで居るだけでした、数日後とうとう見つかり渡久地部落の住民はトラックに乗せられ久志村の大浦崎という浜辺の松林の中に放り出されました。

司会　宮城トシ先生の東京での学生時代は戦時中のようでかなり厳しかったと思いますが・・・

宮城トシ　学生時代の思い出は、昭和17年3月宮古島から同級生と2人で船や汽車で上京、生まれて初めての長旅で汽車での一晩は泣き明かす思いでした。当時は言葉も宮古アクセントを気にして無口になり、女子師範に受験するんだったと後悔したりしていました。上京まもない4月には最初の東京空襲でB29を見てサイレンが鳴っても演習かなと思い後で、本物だったと知りゾッとしました。当時の学生生活は物資不足と勤労奉仕活動で勉学は十分でなかった、思い出されるのは明治神宮外苑での学徒出陣壮行会で東条大佐が指揮台に立ち東京大学、一橋大と各大学の男子学生が分列行進するのを私達の学校も参加した事であった。空襲サイレンに明け暮れ夜もモンペのまま寝ていて罹災しなかったのが不思議です。昭和20年に猩紅熱とジフテルアの合併症に罹り昭和医大付属病院の隔離病棟に入院空襲のサイレンにも外へ出られず入院室の窓際でB29を恐怖感もなく眺めていた。沖縄は全滅と聞いて諦めの心境でした。戦後宮古島に帰り両親が無事で感激でした。先輩方の援助を受け開業、昭和24年には結婚して本島に移りました。主人は故人ですがスポーツマンで昭和15年の円盤の日本記録を18年間も保持していました。現在は、平凡に感謝する日々を孫達に囲まれて送っています。

司会　それでは、今日お集まりの先生方の中で林先生が初めて戦後の動乱期に学生生活のスタートを切るべく上京しておりますが、動乱期に加えて沖縄の離島(八重山)からいきなり上京ということで計り知れないご苦労があったのではないでしょうか？宜しくお願いします。

林　私は、昭和27年石垣、那覇間の定期船や航空

便のない頃、ポンポン船で途中台風に会い伊平屋島まで流され一週間かかって那覇の泊港に着きました。ラジオも無い時代で鹿児島経由で上京しました。そろそろ沖縄県民の記憶の中で風化されつつありますが、沖縄は昭和47年の日本復帰まで外国の扱いでパスポートや検疫証明書が必要でした。渡航するには上船、下船時に船の中で荷物の検査があり大きな不安をかかえた私のはじめての渡航の時も大きな蒲団袋の包みや柳行李等は紐をすべて解かれ時間をかけ容赦なくしつこく調べられた記憶があります。この苦い体験がいやで卒業まで一度しか帰省しませんでした。

司会　山口先生のご卒業当時沖縄は米国統治の色濃い時代であったと思いますが、医療関係で体験したことがございましたらお願いします。

山口　私は、育英資金で大学に行っていました、戦後まもないということもありまして戦争で進学が滞っていた方々が入学し同級生は年齢にかなりばらつきがあった時代です。卒業後軍病院に2年間研修を受け当時は牧港に3ヶ月、ズケランに3ヶ月、キャンプヘイ病院6ヶ月間いました。その後に免許証を頂きやっと一人前に治療をさせてもらいました。4週間80ドル土・日休み一日8人、一時間1人の予約をし午前4人、午後4人というシステムでした。昭和35年頃からタービンがあり口腔外科、補綴、保存と各々に予約制になっておりました。軍の医者と歯科医師とユースカーとヘリコプターに乗り、宮古、八重山に行きました、主に衛生指導を広める為でした、又軍の歯科医師と県の歯科医師会と交流を年1回持っておりスライドとか8ミリカメラでの講演会をしていました、いつの間にか途絶え（復帰前後かわからないが）てしまっているのが残念です。

司会　友利先生、東京での学生生活を中心に話して下さい。

友利　私の学生時代は、生活費節約のため（月30＄で1＄360円で日本円で10800円）先ず、米と安価な福神漬けを買っていました、納豆も最初食べられませんでしたが安いので高蛋白源として毎日食べました。交通費も負担すぎるため多くは帰省しませんでしたが時折帰るときは鹿児島行きの鈍行で煤煙で黒くなりながら又、鹿児島からの船便は船酔いで一昼夜呑まず食わずでぐったりと寝たっきりでした、そんなつらい日々の中で在京歯科学生による年に一度の新入生の歓迎会を兼ねて集まっていてその時の皆さんとの再会に救われた思いでした。卒業後も当時の先生方（西平先生、小浜先生、山城先生等）を心強く思っています。

司会　林先生はつらい渡航手続きを経て上京した後の学生生活はいかがでしたか？

林　昭和28年入学、当時の学生は沖縄からの送金が月額30＄（1＄360円換算）と限られパスポート提示の下東京銀行本店で受け取りました、小包等も税関で開けられるので手許に届く頃には、中身がはみ出た事もありました。戦後歯学部は予科2年、学部4年の6年制でした、女子学生は全体の一割程度で又当時の学生の男子は麻雀、女子はアンミツやところてんを前に長いお喋りをするのがささやかな楽しみでした。教室は冷暖房の設備も乏しく唯一ダルマストーブがあるだけでしかも石炭量が限られていたので寒さに堪りかねて古い机や腰掛けが犠牲になったこともあります。同級生には、妻帯者や子持ちがいたり他の大学を卒業して学部へ編入して来た方等、年齢層も厚くそれだけに皆さんよく勉強しました、なつかしい記憶として実習用の抜去歯牙（天然歯）を探すのに神田界隈の歯科医院を訪ね廻った事があります。学部5年の後期からの登院ではそれぞれの科の教官の下で実際に患者治療ができたことは幸いでした、外科、保存、補綴、矯正でそれぞれノルマが課さられそれを満たすための患者集めが大変でした。中でも矯正など保険が適用されないケースや地方出身で患者の伝（つて）のない学生たちが困っていました、私は幸いにも一期先輩の嘉手納懋一先生に患者を紹介していただきノルマを達成することができました、今でも先生のご恩に感謝しております。

司会　与那嶺先生は歯科医師として終戦を沖縄本島でお迎えになった唯一のお方ですが瓦礫と化した当時の沖縄での体験をお聞かせ下さい。

与那嶺　終戦を知った時は、一時期気抜けしましたが皆、裸一貫だと思うと全てゼロからの出発点となります。米軍の大きな船舶が、積み荷を降ろすと我々捕虜はそれを浜から収容所迄運ぶ為に毎日のように、かり出されました。兵士が銃剣を持ってにらんでいるので必死で頭に荷物を乗せ運びました、その事にこりて診療所勤務しようと決心しました、その前に、足を痛めて診療所に行ったら女医の千原茂子先生に呼ばれて住民の為に歯科を診てくれと頼まれました。歯科室といっても歯科用の器具は野戦用なのか簡単な抜歯鉗子等で根管治療の器具はありませんでした。初めの頃は、鎮痛剤とダイヤシンを与えたりしたのですが治療すれば保存できる歯牙もありましたが状況が状況で患者の苦しみも見かねて心ならずも抜歯になりました、毎日のように抜歯があり一日40本程抜歯しました当時、アルコールは酒の代用にと民間人によく盗まれた事もあります本当に困りました。6ヶ月間の収容生活は私にとって大変思い出に残る時代です。

司会　山内先生も歯科医師になられて終戦をお迎えしていますので歯科医療体験をお持ちだと思いますがその事についてお話しをしていただけますか？

山内　私は、軍医少佐と結婚し朝鮮に渡りました。間もなく終戦を迎えました、ようやく釜山港から山口県の港に着いた時真っ先に飛び込んできたのは「流浪の民、

琉球人よいづこへ」という見出しの新聞の一面記事でした終戦の翌年、沖縄の事情も分かり引き揚げが始まり鹿児島で駆逐艦に乗り宮古島へ帰って来ました。桟橋に降り立った時建物は全くなく空き地ばかりどこまでも見渡せる空襲後の姿でした。父の病院も軍に没収され住宅の一部がやっと残されており父（医）、主人（医）、私（歯科）と3人で疎開してあった医療用品を持ち出し開業しました。しばらくは混沌とした日々が続き宮古、八重山、沖縄本島は本土と分離、独立させられるという噂もあり道には米兵が横行し、敗戦国の島民は不安で耐えるのみでした。孤立状態の宮古には歯科器材を求める事も出来ずコントラ、ハンドピース、等の修理も多い中、当時の高峯先生、友利先生、池村先生と部分を持ち寄り材料を分け合って皆で細々と診療をしていました。

3.女性としての診療について

司会　今では、女性の歯科医もかなり多く現在の学生でも半数近くが女性であるといわれています。先生方は女性としての歯科医療の先駆者でありますが、当時を振り返りながら楽しかった事苦しかった事をお聞きしたいと思います。与那嶺先生お願いします。

与那嶺　良かった事は、一歯科医として全国の歯科医と共に登録され自分史の中で大事に刻みこまれている事です。振り返ってみるとあまりにも忙しく歯科医として勉強が足りなく、自分自身に満足することが出来なかったことです。

司会　村田先生お願いします。

村田　終戦直後はしばらく歯科医師は中央からの配置制度でしたので私は大里診療所に配置されました、その時、出産と育児、仕事と多忙な日を送り子供を一人家に置けず仕事場に連れていきました、当時は保健室がないので小学校の健診のさいに民家の庭で軒下健診をした想い出もあります。



戦後間もない頃の軒下健診（村田芳子先生）

司会　宮城トシ先生お願いします。

宮城トシ　私は、母と同居していたので子育てを協力していただき診療を従事することができ大変助かりました。

司会　友利先生いかがですか、

友利　昭和42年に結婚、岡山県で専業主婦に徹していましたが、昭和50年主人の開院と共に私も仕事を開始しました。出産の時は徐々に患者さんを減らしながらでも一週間前位に産休に入りました。子供を産み育てる事と歯科医業と平行させることは大変ですがやはり他人も含めて回りの方々の助けがなければとても成しとげられない大事業です。

司会　皆さん女性の歯科医としての同じような悩みあるいは喜びというような共通点はありましたか

全員　当時は、座位診療ではなく立位診療でしたが、妊娠にたいしても何の気負いもなくごく自然の日々を過ごし日曜、祭日も自然と仕事をしていました。人口に対する歯科医師数が少ないので社会的にもより多くの患者さんを診療しなくてはという責任感の様なものがありました。

司会　それでは皆さん、特に思い出に残ったことや後輩に対してのアドバイス等を山口先生お願いします。

山口　昔は、「和を持って」の精神で男女共に一緒に飲みに行ったりし会員の数も少ないせいかお互いにファミリーみたいに助けあったり会話も多かった様に思います、泡盛会館の頃が懐かしいですね。会員の数が多くなればなる程「和」というものが大切なことだと思います。

司会　宮城智恵子先生のご卒業は、日本がまさに高度成長期にさしかかった頃だと思いますがその頃沖縄の歯科界でどんな想い出をお持ちですか？

宮城智恵子　平良進先生の時代でしたが、昭和42～3年頃軍のフライングドクターに応募しました、歯科医師7～8人でヘリコプターに乗り無医村診療ということでおそらく伊是名村の公民館と思いますがそこへ行きました。歯科器材は全てアメリカ軍が用意し、治療は、抜歯が主でした。使い捨ての麻酔針、縫合糸など当時としては最先端の医療器具を用い県の歯科医師会とアメリカ軍の歯科医師が合同で治療したことは記憶に残っています。

司会　山内先生歯科医師としての長いご経験で現在もお元気で患者に接しておられますがそれなりの誇りと秘訣がおありと思います宜しくお願いします。

山内　女性の職業として歯科はやりがいもあるいい職業ではないでしょうか、今奥深く高度な技術が益々必要になり難しくなっていきます、でも歯痛をおさめ立派な外科処置ができ補綴物が思うように出来たとき、患者さ

んの喜びの顔は歯科医にとってなにものにもかえられない最高のものです。子育てと仕事の両立で悩むことも多いけれど難関を突破して歯科医になった方々、きっと上手に乗りきれることと思います。歯科医は、健康でないとつとまらないので趣味を生かしたりジョキングをしたり心のゆとりと健康づくりをしながら歯科医人生を最高のものにしてほしいものです。

司会　最近歯科を後継者にバトンタッチしてアドバイス役でいらっしゃる宮城トシ先生にお願いします。

宮城トシ　健康に自信がないので無理にしない様にしています、亡夫はスポーツマンでしたが私には特技がありません、毎朝(5時～6時)倫理の集い(社会教育団体)に参加して心の勉強をし明るく生きる様にしています。

司会　林先生日頃の歯科医師としての姿勢それから後輩に一言をどうぞ、

林　私は、大学を卒業して40年になりますが、患者さんには真心で接する様、自分自身は勿論3人の子供達にも何時も云い聞かせています、時には旅行し頭も、身体もリフレッシュして今日一日楽しく仕事が出来れば最高に幸せだと思って居ります。若い先生方には、日本の国内にとどまらず、世界の国々に目を向け、日進月歩の医学の進歩にたゆまぬ研鑽を積んでほしいと思います。若い皆さんの特権です。

司会　村田先生お願いします。

村田　私は、医療人として歯科医療に一生懸命従事し充実した人生を送られたら幸せだと思います。若い先生方もがんばって下さい。

司会　友利先生、思い出を兼ねながら後輩にアドバイスをお願いします。

友利　私は、卒業後(昭和37年)東京の錦糸町駅診療所にお世話になりました、内科、耳鼻科、眼科、歯科等があり経験豊かな先生がご一緒で色々な事を学びました、その時、伊礼迅先生がご病気で東京の病院に入院なさるので一年程で那覇に帰りました。未熟な若い女性が医院を守る事の大変さを経験致しましたが、回りの方々の助けを得る事が出来、色々なケースに出会い、多くの臨床経験をさせて頂きました。沖縄での歯科医師としての仕事のスタート地点です。自分にとって楽しいと思う事を精一杯実行しながらストレスを解消し気分転換をする事は絶対に必要だと思う。

司会　与那嶺先生戦前の数少ない女子歯科大出身ですが戦後の男女共学出身の後輩の先生方にアドバイスをお願いします。

与那嶺　我々の時代の女子会員は、今より少なかった故もあってか皆さんおとなしく遠慮がちだったと思います。特に女子会員の中で大きな存在だった当山良子先生(故)を失ってからは会員がバラつきがちで元気がなくなった感がします、その点若い人は新時代に即応した女性デンティストであり男性軍に勝るとも劣らないそして新しい女性の歯科医師会長が誕生する事を希望します。

司会　今日出席の先生方の中に強く印象に残っている当山良子先生は、昭和59年にお亡くなりになりましたが、お身内でもある山口先生に当山先生の想い出をお願いします。

山口　私より大先輩であります当山良子先生の思い出ですが、若い頃(独身時代)から大変おしゃれでモダンで考え方も常に前向きな方でした。「花の東京は楽しい所であり、魅力的な所であった」等と学生時代の思い出を大変楽しそうに話しておられました、明るい性格で行動的な方でしたので仕事と子育ても上手にこなしていた様に思います。色々な困難も持ち前の明るさで何時のまにか笑顔に変えてしまうという生活をしていた方でした特に女性の先生方の集まりには何時でも出席し、お互いに仕事の悩みや家庭との両立をさせるための悩み等を話し合いストレス解消をしていた様に思います。

司会　現在、宮城智恵子先生は、女性歯科医師の会長になっております。それでは最後になりますがその経過と現在の状況をお聞かせ下さい。

宮城智恵子　私が、沖縄歯科医師会に入会した昭和40年頃は、女子歯科大学出身の先生が多数おられて、当山良子先生(故)の音頭の下時々の会食の集いを持った記憶があります。その後、昭和60年頃に第一回目を仮称「沖縄県女子歯科医師の会」として初代会長比嘉初子先生の下スタートしました。新しく入会した若い先生方も交え日常の忙しい家庭生活や診療の話を持ち込まない親睦会という趣旨でした、その後定例のものにする為、世話役を各出身大学で負担する事になりましたが、先生方のお忙しさのため3回ほどで中断してしまいました。10年位のブランクの後平成8年4月13日ハーバービューホテルで小禄清美先生を会長に40名の先生方が集い再スタートしました。今回は県歯会の会員、非会員を問わず入会できることにしていますので現在、県内にいらっしゃる127名の全入会を歓迎しています。第2回目平成8年パレスオンザヒルで第3回目平成10年かりゆしアーバンリゾートで集いました。時代の流れで若い会員が圧倒的に多く趣も女性同士で育児、結婚などプライベートな問題も和気藹々と話せて好評です。定例会の他に八重山への小旅行、ナイトクルージングなど小グループによる活動も始動しています。今年、比嘉初子先生(故)はじめ会員の皆さんが心待ちにしていた会の正式名称が「アルドクラブ」と決まりました。ASSOCIATION－OF－LADY DNTIST－IN－OKINAWAの頭文字「ALDO]をとったものできっと先生方

にも気に入ってもらえることでしょう。本会の灯が絶えることのないように、これから2年間皆様のご助力を仰ぎながら少しでもお役に立てるように会長を勤めさせて頂きたいと思っています。

司会　21世紀を前にして戦前、戦中、戦後、日本復帰等の激動期をみごとに乗り越えご経験豊かによき歯科医師、女性、社会人として歩んで来られた先生方の今回のお話は、貴重な記録として又、後輩への良きアドバイスになることと存じます。では、最後になりますが、先生方の今後の更なるご健康と末永いお幸せを祈願して終わりに致したいと思います、今日はありがとうございました。



婦人歯科医師の集い　昭和51年5月22日



平成6年　南部地区歯科医師会女性会員の集い





平成6年　南部地区歯科医師会女性会員の集い



平成8年　女性歯科医師の集い

D. 戦前戦後の思い出

ここでは会員の先輩13名の先生方に、戦前、戦後そして現在に至るまでの体験談や、思い出を語って頂き、会史編纂委員が先生方の自宅を訪問し、聞き取り調査を元に原稿にして作成しました。また貴重なお話や写真、資料等をお借りして、できるだけご紹介したつもりですが、紙面の制約上割愛した箇所等、多々あるかと存じますが、何卒ご了承の上委員会よりお詫び申し上げます。

内容に関しては、聞き取り調査を文章化しており、文脈の読み取りが困難な所があると思いますが、諸先輩方の沖縄の過去の歯科医療事情等の生きた証言として、また、沖縄の歯科の原点を見つめる上からも、大変貴重な事と思います。

どうぞ、少しでも過去を理解する事で、今後の若い先生方にお役にたてれば幸いだと思います。

戦前の歯科医療	永井 長秀（大正４年生）
最後の同窓会	与那城 勇（大正５年生）
東京歯科医学校第一号	知花 朝敏（大正９年生）
瀬底月城と歯塚	瀬底 政俊（大正10年生）
我が足跡	比嘉 良有（大正13年生）
喜義丸の最後の救助者	崎山 厚　（大正14年生）
九死に一生を得た広島原爆投下８時15分	高良 政利（大正15年生）
波乱万丈の青春から歯科医へ	西平 守廣（昭和３年生）
戦後を見て	金城 一史（昭和４年生）
苦学-仕送りに涙の感謝	嘉手納憑一（昭和４年生）
最後の一中生	嶺井 浩　（昭和７年生）
母は最高の指導者であり恩師	林 昭治　（昭和７年生）
私の生い立ち	冨本 盛弘（昭和８年生）



1948年当時の切手



復帰前まで使用したパスポート

戦前の歯科医療は

永井 長秀

父永井長積は、明治35年に沖縄にやってきた。首里に柏という産婦人科医がおり、父と同郷のよしみで、来沖をすすめられ開業した。当時は、沖縄では歯の治療をすると言う習慣がなかった。沖縄の言葉で"イシガンヤンミ(石が痛くなるものか)"と言う言葉がある。それ程歯に無関心であった。又、あまり甘いものを食べないせいか、虫歯が少なかった為かもしれない。沖縄に来て間もない頃、尚家から首里鳥堀で開業せよとの依頼があり、開業のはこびとなった。当時、尚家の人たちは人力車に乗って来院した。



戦後間もない頃の永井長秀(後列右より2人目)と仲間たち

明治の終わり頃、沖縄は農家が多く生活が苦しかった為、多くの人々が移民に出て行った。歯の治療が完治していないと、認められないと言うことで、医院は繁盛した。その後首里から天妃町に移転した。後ろには善興寺というお寺があり、寺への信仰があつい田舎の人と移民の安全祈願の人も含め、医院は益々繁盛した。

辻遊廓にチルーと言う遊女がいて、側切歯に金歯をいれていて、彼女がにっこり笑うと美人にみえるので"金歯チルー"と呼ばれ、巷の評判になった。また、製糖業も盛んになり、その味見のため、わらで黒砂糖をなめていたので、膿漏が進行したりしたため、前歯金冠が流行した。そういう社会的要求があった時代でもある。

私が昭和12年に沖縄に帰ってきた当時、治療費一つとっても今日と比べると天文学的開きがある。その頃、初診料が50銭、今は1.750円、その当時の3.500倍と言うことになる。抜歯も50銭であった。随分と開きがあったものだ。義歯はいわゆる"サーター一丁"12円であった時代にそれ以上の金額を請求すると、払いきれなかった事もあり約11円から12円であった。今の価値からすると6万円といったところであろうか。サンプラが3円、金冠が5円の時代である。すべてひっくるめての料金であった。現在の保険治療の点数が低いとの指摘もあるが、それに比べても遥かに低い診療報酬であった。

戦前は夜だけ電気がきたため、昼の間は足踏みエンジンであった。治療はほとんど抜歯か抜髄が主体であった。民間療法として、たばこのキセルで患部を焼くという方法があった。遠方の患者は朝から弁当持参で来院し、三畳の間でお茶を飲みながら、ゆっくりと待っている。入れ歯の場合などは近くの宿で一泊し、翌日装着して帰る患者もいた。診療所の窓は明かり採りの為北向きが良いとされていた。その上二階ならなおさらよいということであった。看板だけでは字が読めない人が多いため、診療所の入り口には義歯やサンプラ冠のサンプルが飾ってあった。この看板は昭和13年当時の衛生課長発令で禁止となり、後から始末書をとられた医院も多かった。

戦前の歯科医師会はわりと団結心も強く、その頃識名園などに行って、毎年運動会などを開いた記憶もある。ライオンがスポンサーとなって、虫歯予防デーということで、幻灯器などを使って地方への啓蒙活動を行っていた。

私の戦争体験は言葉では言い尽くせない程、あまりにも悲惨である。戦争というのは人を殺す残酷な事だ。自分が生き延びるためには、神も仏も無いわけである。平和時にみる沖縄での言い伝えとは、あまりにもかけ離れている。私は南部戦場をさまよいながら、摩文仁の海岸の崖にある洞穴にしばらくの間避難していたが、そこもやがて米兵に包囲されるようになった。ある時、摩文仁の海岸で砂浜の間に井戸のように水がわき出ている場所があり、そこに水をくみに言ったことがあるが。その時目の前に米兵がいるにもかかわらず、機銃による攻撃を受けなかった。むしろ海を泳いでいる人たちだけをねらっていたような気がする。その頃から、日本兵も戦闘意欲を

失っており、米国の二世がおりてきては、投降を呼びかけていた。投降後最初は宇摩文仁の方につれて行かれて、それから玉城村の当山の方に移動した。その後百名、佐敷の収容所に移された。夏頃になって米国の二世から百名の軍病院に行くように言われたので、そこに移った。ところが、十月の暴風でそこも壊れてしまい、浜松先生のいらっしゃった病院に行くことになった。その後仲里先生も加わり百名の知念中央病院を設立した。そこは民間で焼け残った数少ない建物で、現在は恩納村の琉球村に保存されている。


復帰前の国際通り

歯科診療はその頃からアメリカの器械を用いており、椅子は組立て式であった。百名にいる頃、日中は作業にかりだされたが、体の具合があまり良くなく病臥がちであった。夜になると子供達を集めて、読み書きを教えていたので、「先生、先生」としたってくれ、クラッカーやレーションの缶詰を持ってきてくれたので、次第に身体は回復していった。彼らも高校等に進学していった。

一年ほど百名にいたが、その後家族をたよって鹿児島に渡った。ある日上京した際に、封鎖されていた預金が引き出せるという噂を聞き、さっそく厚生省に行った。驚いたことに東歯の同級生の笹本君が歯科参事官をしており、その日の内に預金を引き出せるように手続きをしてくれた。彼はその後、無医村診療の巡回班としても何度か沖縄を訪れている。 さっそく日大歯学部の近くにあった植田材料店にいき、買えるだけの歯科材料を購入した。今でも購入した抜歯鉗子が残っている。当時東京で勤務する気持ちも少しはあったのだが鹿児島に戻った。鹿児島で開業し、少し蓄えもできたので、電気エンジンを購入した。ちょうどその頃沖縄貿易が始まって、宮里辰彦君達も鹿児島に来た。安仁屋さんと再会したとき、沖縄に帰るよう説得された。そこで決心してパスポート(天妃町1番地の本籍を基に)を取得し帰ってきた。当時ちょうど国際通りの道路拡張工事が始まっており、あまりの道幅の広さに、びっくりし「これでは商売にならない」ということで、反対運動があった。リウボウの方から工事が始まり、真栄田世勲さん(戦前の沖縄県歯科医師会書記)に頼んで現在の土地を探してもらい開業することになった。当時歯科医院を開業するのには、2、3割の自己負担金が必要であったが、知り合いの歯科医からアメリカ製のシリケートセメントをかき集めてそれを担保に借り入れを認めさせた。100万円の資金のうち80万円は融資を受け、残り20万円は模合を起こしておぎなった。

やなぎ歯科の由来は父の名前を引き継いだ形となる。旧姓揚から現在の永井に改名した。開業して当初、「銀座のやなぎを植えようではないか」と言うことでやなぎの木を植えたところ、「やなぎの木があるからやなぎ歯科医院」とささやかれるようになった。このように私はこの商店街の創世の頃からの一員なので、歯科医と言う立場にもかかわらず、通り会の会長など役員をさせて頂き、いろいろ苦労もあった。

その当時の歯科の保健は、自費診療と保険診療がごっちゃになったような保険制度であった。たとえば義歯が25ドルと保健の診療報酬を決めたとする。その内3割は患者さんからいただいて、残りを保険者から給付を受けるのは本土の保険制度と同じだが、25ドルを30ドルにしてもよいという制度であった。すべて現金給付であった。しかし実際は支払い基金にいって給付を受ける人(患者)の数が少なかったので、基金としては財源が残ることになった。復帰のときにその資金を会館設立などに運用したいきさつがある。

二十数年間県歯代議員議長を務めたが、みんなで議論できるよな議会運営をめざした。代議員会はその後も沖縄県歯科医師会の伝統として今でも受け継がれている。

思い出に残る事業としては、米軍の軍医と基地内で勉強会などもしたことがあった。米国への留学制度(米留)ができた当時、歯科医の留学先が無いため、軍司令部に直訴した結果、在沖の米軍歯科医とのミーティングに通訳付きで参加することが認められた。米琉歯科医学会の始まりである。写真が好きだったのでその模様をたくさん撮影して記録にとどめている。

最後の同窓会

与那城　勇

私の所属する同窓会は、親生同窓会、略して親生会といいます。30年近く前まではかなり会員もいて各地で全国大会を開催し、昭和57年には沖縄で盛大に大会を開いた事もありました。ただ残念な事に普通の同窓会と大きく異なっていた点は、会員数が決して増えることがなく、確実に毎年先細りに向かっていたという事です。次々と訃報が届いて集まる度毎に歯が欠けた様になじみの顔が消えていき、10年程前に開かれた全国大会がついに最後の集まりとなってしまいました。「会員の高齢化が進み、これ以上会の継続は不可能になりました。本大会をもって組織的な活動を終了します。」最後の会長坪井先生の解散宣言は当時70代に入ったばかりで最若手の私の耳に悲しく響き、つくづくと時の流れの無常さを感じたものでした。

今はもう、その本部組織もありませんし、若い会員の皆様は「ハテ、そんな名前の学校あったっけ？」といぶかしく思われる事でしょう。この親生会とは、実は戦前の検定歯科医達が結成した全国組織の事だったのです。「検定歯科医とは何だ？」と再び疑問に思われる事でしょう。その事を理解していただくには、日本の歯科医の第一号、小幡英之助が1875(明治8)年医術開業試験により開業免許を得た時の事まで話をさかのぼる必要があります。

それまで日本各地の"口中医"とか"入れ歯歯抜き口中療治者"と呼ばれていた歯科医の先祖達の多くは今日の伝統工芸職人の様に、その技術を代々の家業としていたらしいのですが、この時を境として開業免許は検定試験合格者に限られるという事になります。しかし最初は学校や塾の類もありませんでしたから、歯科を志す人達は数少ない先輩の開業医達(初めの頃は外国で技術を修めた)のもとに書生として弟子入りして技術を修めたという事です。そうこうしている中に、高山歯科医学院(東京歯科大学の前身、1890年開設)を皮切りに歯科医専が開校される様になり、歯科医養成の現場は個人の歯科医院から専門学校へと移っていきますが「国家試験で実地学科共に専門学校卒業者と同等の知識と技術を習得している事が証明されれば専門学校を卒業しなくても同等の免許を手にする事ができる」という従前からの制度はしばらく踏襲され、私が若い頃まではまだ残されていたのでした。

この検定制度は今の時代にはとても容れられない制度と申せましょうが、14才の時から洋服屋の丁稚、16才で大阪に渡り、回覧雑誌(貸本)の配達をしながら独力で学費を稼いで夜間中学に通っていた私の様な貧しい少年にとってはまさに希望の灯火そのものでありました。私はその頃から「救世軍」という名のキリスト教の一派に加わっていましたが、ゆくゆくは伝道者になろうと心に決めておりました。そして、その計画遂行には独り立ちできる生活力を身につける事が先決だと考えたのですが、たまたま書生として住み込んでいた歯科医院の先生の影響もあって歯科の道を志したのでした。それからの私は昼間には住み込み先の医院で助手として治療の実地と技工を教わり、夜は取り寄せた歯科医専の講義録を一心不乱に勉強しました。その頃の私には昼の仕事から解放されて夜一人で机に向かうことが、許されたがかけがえのない存在に感じられるのでした。「書生時代には試験の日が楽しみで待ち遠しかったよ」と当時の話を子供や孫達に言って聞かせる度に「嘘だろう」と言われますが、本当にその当時の私はそれ程試験に青春の情熱を傾けていました。何故なら金も身寄りも何も持ち合わせていない苦学生の私が自活できる手段は試験以外では得られなかったからであります。専門学校に通わなくても歯科医の免許が取れるというこの試験は私のような苦学生だけでなく学校の教員とか社会人の経験のある人達までが



生後間もない長男〔智〕を抱いている28才当時の与那城勇。中国内蒙古にて(昭和17年)

応募していましたので相当な難関となっており、途中で戦列を離れて行く仲間も幾多と見られました。

生理、解剖、病理などの学科試験は三年以内に分けて受験できる規定になっていましたので、高価な教科書は試験に通るとすぐに売り払って次の教科書代に充てたものでした。かくして、晴れて免許を手にした者の間には同じ試練をくぐって来た者同志だという戦友間にも似た友情が芽生えてくるものです。私達の親生会とはそういった歯科医達の集いであったのです。ですから会員一人一人が小さな立志伝の主人公でもありました。

そういえば「立志伝」とか「苦学生」という言葉には最近、カビが生えかけているそうで、死語になりつつあるとも耳にしました。成る程、それも良く判るような気がします。便利で快適な生活が行き渡り、快楽に取り囲まれた今日の環境下では「苦学生」というのはドンキホーテ的な前世紀の遺物でしかないでしょう。ついでに私の観察したところでは私達が好んで用いた「努力」とか「忍耐」という言葉の語感も変質してしまい、野暮ったさが込められているような気が致します。もう一年と一寸で二十一世紀を迎えようとしていますが今後、価値観はもっと大きく変わることでしょう。前世紀の"遺物"検定歯科医が消えて行くのは歴史の必然かもしれませんが、ついでに「苦学生」「努力」「忍耐」などという古い価値観も新しい時代の波に洗い流されてしまう運命にあるのでしょうか？

おしまいがどうも愚痴っぽくなってしまいましたが「検定歯科医」の事は今後の医療史上で重要な資料となると考えてここに証言を残すことに致しました。

編者追記

この検定制度で歯科医籍に登録された会員には、与那城勇先生以外以下三名の方々がそれぞれ活躍しておられたが、1999年現在、与那城先生以外はいずれも物故者となっておられる。

久高将旺先生（1886～1971）

阿嘉宗惇先生（1910～1997）

大仲重雄先生（1914～1997）



第21回親生歯科同窓会沖縄全国大会　昭和57年2月18日～20日　於　東南植物楽園

東京高等歯科医学校第一号
知花 朝敏

父朝申は日本歯科医学専門学校の5回生で卒業後栃木県大田原町で開業する。私は其処で長男として生まれた。3才の時に茨城県結城町に移る。そこで幼稚園、結城尋常高等小学校4年迄学び、5年の春、祖父の要望があって一家は沖縄に引き揚げる。昭和6年のことである。那覇尋常小学校に転校して5、6年を学び昭和8年に沖縄県立二中(現那覇高校)に入学、昭和13年に卒業する。24期生である。

進学を決めていなかった私は迷いに迷った挙げ句、母の勧めに従い、父の職を継ぐべく、受験雑誌で知った最も学費の少ない東京高等歯科医学校を志望して入学する。学校はお茶の水駅前にあり設備の素晴らしさにビックリさせられた。各階に水洗便所があり。廊下の要所要所には灰皿があり、防火用シャッター、スチーム暖房があり、二中とはまるで違っていた。戦前の中学や高専、大学には学校教練があって陸軍将校が配置されていた。高等歯科には酒井陸軍歩兵大佐が配置されていた。二中には教練教師として大城有先生がいた。査閲の成績を気にして「其の成績優秀なり」の評価を望んでいたが、生徒が一生懸命やっても仲々得られず「其の成績良好なりと認む」の講評に終わるのが常だった。高等歯科の査閲は代々木の練兵場で全校生を集めて行われた。最後に指揮台に立った査閲官を見ると配属将校と同じ歩兵大佐であった。なんとなくホッとした感じがしたものだ。シーンと静まる中に査閲官の声が響いた「第一中隊、第一小隊、第一分隊長の号令は明瞭で良好なるも稍々責任感に欠けるものがある、第二中隊…第三中隊…第四中隊…、其の成績優秀なるものと認む」。あれ程二中の大城(有)先生が生徒を叱咤激励しても得られなかった評価がいとも簡単に得られたのには驚きであった。学校教練は東京都内にある学校の中でもトップ級の学校だという、自慢の一つである。

講義は中学時代とは違い教科書のない学科(歯牙解剖、補綴、口腔外科等)があり、ノートを録るのに四苦八苦する。疲れて周囲を見回すと皆一生懸命ノートを録っているので遅れない様に再びノートを録り始めたものだった。皆苦労している。臨床実習は3年の後期から始まり4年一杯あった。実習に入る前に先ずワッテ巻き10回がある。ライターの前でブローチにワッテを巻き、根管に貼薬の時はスーとワッテが残る様に清掃の時はワッテがはずれては駄目になるのではずれないように巻く、10回やり1回でも失敗するとやり直しを命ぜられ練習して再び挑戦する事になる。此処をクリアーして初めて患者の治療が許され臨床実習に入る。ライターが鬼に見えたときである。ライターは生徒4人に1人がついて指導する。治療の単位は2000点とケースが決まっており、充たないと進級、卒業が出来ないので、生徒は必死にがんばったものである。点数について団交した事があった。家路を急ぐ教授を、クラスの者が集まっている喫茶室に案内して「点数を少なくしてください、とても取れそうもありません、でなければ予診やレントゲンに点数をつけて下さい」と教授に要求すると教授は「私は10年間生徒を教えているが今時分になると決まって同じ様に点数を少なくしてくれと要求してくる。皆で協力してやれば出来ると言って来た。又其の通り〆切迄に点数を取って皆卒業して行った。君達も亦同じ様に点数取ることが出来るだろうから、ライターと相談して、お互い協力して頑張りなさい」と団交はチョンとなった事もあった。厳しかった3年半(半年短縮組)であったが全課程を修了する事が出来た。卒業後は家に帰り家業を手伝っていたが近所の友寄英彦先生の勧めがあり、糸満の歯科医院に勤務した。当時はどこの歯科医院にも技工士が3～4名勤めていて治療したり技工したりしていた。医療品、歯科材料は配給となり、海上交通もままならない時代でしたので歯科治療にも影響が出始めていた。特に一番良く使う石膏は不足がちで石膏像を買い、これを細く砕いて火にあぶると蒸発



高等歯科学校時代の知花朝敏(後方中央)

してどうにか再生出来たので使ったものである。

昭和18年7月に徴兵検査を本郷区役所で受ける。種々の検査を受けた後、最後は徴兵官の前に立ち「第二乙種合格！」と宣告され「君は故郷に帰って一年位療養しなさい」と言われる。第一乙種合格は甲種合格同様直ぐ入隊、第二乙種合格は自宅待機の事である。昭和19年頃になると街を歩く若者は少なくなり若い兵隊が目につく様になって来た。軍隊という所は星の数が物言う所なので、何とか少しでも早く星を増やしたいものだと考えている時に海軍歯科軍医募集の広告が出たので早速応募したところ、しばらくして受験票が届いた。見ると集合の日時が明日の九時迄に九大医学部に出頭する様にと記されていた。とてもでないが明日九時までに福岡には行けない。そこで連隊区司令部に行き「どうにかなりませんか」と相談すると係官が分厚い徴兵簿を持って来て徴兵簿を見ながら「十日後に台北で試験があります。そこで受験しなさい」と言い受験地を書き替えてくれた。空席を求めて飛行場を往復しながらやっと切符を手に入れ、台北に行き受験したら身体検査で不合格となる。帰りがけ徴兵官と一緒になったので「」何故不合格なのか？と尋ねると「」既往症のあるものは不合格だと云う。それで「私の友人で既往症のある者が数人合格しています」と反論すると「去年までは採用していたが、今年から採用しないことになったのだ銃後にも国民がいて歯科医を必要としている銃後で頑張ってくれ」と云われて家に帰る。

10月10日那覇空襲に遭う。鉄製の治療椅子が飴の様に溶けているのにはビックリした。一家は大分県に疎開し、私は疎開先にある、岡本歯科医院に勤める。8月15日に終戦の詔勅を聞く。戦後は沖縄事務所の配る新聞で僅かに沖縄の様子を思い浮かべ、生存者欄で父の健在を知って引き揚げを決心する。

真和志村診療勤め

疎開地大分県佐志生ー長崎県大村収容所ー佐世保ー那覇港ー久場崎収容所ー豊見城村診療所医官宿舎で落ちつく。医官宿舎と云ってもテント家屋で一家5名が生活をする。間もなく父は首里地区病院に転任となり首里鳥堀へ引っ越す。やっと医療器械を集めたのに又器械集めかと苦い顔をしていた。当時の診療所の医療器械は野戦病院の救急用しかないのでつてを頼ったり、サプライ廻りや塵捨て場廻りをして診療所を整えたのである。移転する度に家らしくなるがカバ家（テント小屋）には変わりなかった。

私は真和志診療所勤務の辞令が下りて真和志に移る。ここで所謂規格家屋を与えられる。昭和22年4月の事である。夜になると囲碁好きな村長、住職、課長、医療介補等が集まって酒を飲んだり碁を打ったり眠くなるまで駄弁ってから解散するのが常だった。6月になって村長が「そろそろ虫歯予防デーだね」と言う。が私は学校で習っていないので、どうしてよいか解らなかったが、とにかく村内の校長先生に集まってもらって相談しようと、役場の衛生課を通じて我が家に集まってもらう様にと連絡する。村内には与儀、真和志、大道、安里の4つの小学校があるので、連絡に廻るのは大変だったからである。学校検診は初めてだった。学生時代の予診当番の様な要領でいいのだろうと軽く考えて学校を訪ねる。校長先生初じめ先生方がご苦労さんと歓迎してくれたのには嬉しかった。

検診しやすい様に検診場を作ってもらってから生徒の検診を始めるが、何しろ茅葺きの上に電気がないので採光が悪い。生徒たちが先生の言う通りに素直に動いてくれるのが救いだった。記録は担任の先生にやってもらう。生徒と帳簿の名が一致の確認の必要からそうしてもらう。生徒の検診は立ってやったり、坐ってやったり、廊下でやったり、早くよく口の中が見える方法をとるのに四苦八苦する。子供達の口の中も様々たる有様だった。

検診の度に歯科検診を待つ生徒の列は長くなり早く出来ないのに困った。保健の先生とも相談して努力するが内科より遅くなるのには参った。内科と同じ位の早さで出来る様になるのに25年もかかった。次は給食後のハミガキを成功させようと模索している時に骨折して苦労したこともある。

琉球歯科医師試験の事についてふれると

1951年頃だった、平良進先生より「琉球歯科医師国家試験をやるが君は解剖の問題を担当してくれんか？僕は口腔外科を担当するが基礎医学は卒業間もない若い先生の方が良い」と相談があった。私は問題を任してくれる事を条件に引き受ける。「心臓に於ける刺激伝導系について記せ」という問題を提出する。受験生は民政府布令第33号第3条第1項の規定により認められた4名であった。試験当日問題を見たある会員に歯科医師

の試験にはちょっと適当でない様に思うと批評を受ける。その年の日本の後期の国家試験の問題に全く同じ問題が出題されているのを知って間違いでなかったとホッと安心したことがあった。

母と子の良い歯のコンクールについて記すと

1953年(昭和28年)頃でしたか自由開業になって間もなくです。山川文雄先生が「去年日本歯科医師会では"母と子のよい歯のコンクール"を始めたようだ、沖縄でもやろうじゃないか。実施要領を伊礼君と2人で作ってくれんか、選出すれば後の広告や景品や表彰式の会場等は僕がやる」と相談があった。当時交通機関は殆どなく、行き交う軍の自動車、民間の公用車でヒッチハイクしながら用をたしていた時代で、歯科医の数も少なく、広い国頭に7名、中頭ですら11名、どうやって検診したものかと思ったが一応やることにして選出方法を伊礼君と話し合う。

先ず対象者だが一番ムシ歯の少ない年齢すなわち歯の生え揃った2～3才または永久歯の生え揃う中1、2年になるが、連絡のとりやすい学校の生徒が一番良いだろうということで、中1を対象者とすることに決める。安田、安波の様な辺鄙な交通の悪い所の学校の検診は不可能なので校長推薦を一次診査として、二次診査は各保健所に各校の代表に集まってもらい、北部、中部、南部の歯科医師会の先生方の診査で代表を決めてもらう。中央審査は教育会館に北部5名中部4名南部6名の代表に集まって貰い。私と伊礼君とで最終審査をしてただムシ歯ばかりでなく、学業成績や体格を加味した点数制にして採点する。地区代表15名の内から一位、二位、三位を決め他は佳良賞を贈ることにする。表彰式は7月18日沖映本館で挙行された。

会場を埋めた観衆もさる事ながら、圧巻は当時としては喉から手が出るほど欲しい茶箪笥や机、椅子等の商品が舞台一杯に陳列された事であった。「良い歯のコンクール」は大過なく無事終了し、改めて山川文雄先生の政治力を見直したものでした。



戦後間もない頃の波の上

1955年の事である風邪気味で中々咳が止まらないので、保健所に行ってレントゲン撮って診察してもらう。担当の医師に「疲れから来た風邪でしょう二三日休養すれ治るでしょう」と言われ、安心して仕事していたら二ヶ月位して急に咳と共に喀血する。ビックリして稲福全志先生に往診を願い病床生活に入る。

7月に久留幸男先生岩間先生が肺外科手術の指導に来島された。沖縄の結核患者にとって大変な朗報となり、手術で治癒する希望に燃えていた時であった。或る日いつもの通り西平守由叔父がぶらっと訪ねてくる。私が病床に寝ているのを見てビックリ「早く何とかせねば、久留先生は私の知人だから相談して見よう」と早速相談したらしい。コザ病院から入院通知が来て、結核病棟に入院、44番目の手術患者となる。左肺上葉のS1+2を切除する。いったん無菌となるも一年位たって咳に菌が出始め右肺上葉の病巣からと云うことで、金城綱一先生に区域切除してもらう。菌が出なくなり。このまま治るものと思っていたら、再び一年位したら又菌が出始める。かなりしつこい菌である。今度は金武の保養所に入院して薬物療法する。退院してからの咳の検査は8週培養のコロニー計算となる。30～40コロニーから始まり、2回目からは20コロニー、3回目10コロニー台となり、4回目に一桁となり、5回目やっと0となり治癒する。結核闘争はこれで終わる。

1966年山川文雄先生(沖歯会長)より保健対策委員を命ぜられる。沖縄の社会情勢は社会保障が問題となってきた。未だ経験した事のない社会保障について厚生省技官稲葉利正先生、日本歯科医師会武石信治先生(調査室室長)、岩谷緑先生(常務理事、保健担当)等の指導を受け、沖縄に適した制度は何かを永井長秀先生、与那城勇先生を中心に一生懸命勉強して出来たのが復帰前の保健である。

瀬底月城と歯塚

瀬底 政俊

私は、大正10年6月30日生まれ、名は別名瀬底月城(俳号)とも言われている。かつて大正3年頃の馬天港は大東船が寄港して、賑やかであった。昭和18年頃まで技工士が本土の先生を雇って診療(馬天歯科)をしていた状態であった。医者は明治の終わり頃から2名ほどいた。歯科は私が地元では初めてである。昭和16年頃私は、当初絵描きを志して大阪へ行き、その後何かの縁で京都へ勉学をしに行った。その折りに大阪歯科医専に受験し、沖縄からは3人中1人(私)がたまたま合格し、今では妻が「ディキランヌーが合格した」と笑っているが、私はディキヤーだと思っておる。

昭和16年に入学。卒業は昭和19年、戦争のまっただなかであった。戦争中はイモを植えて食べた。また那覇二中への通学は朝の6時半に家を出て約2時間かけての通学で帰りはいつも遅く、授業の予習、復習は出来ない状態であった。3年目からは、那覇で下宿生活をした。大阪での学生時代は堺から枚方に約2時間電車で通学していた、当時体が弱かったが毎朝6時に起床し「となり組」の学童を指揮しラジオ体操してなんとか体力をつけていった。また軍隊での生活のなかの発声練習で体力がついてきたと思う。戦時中なので日常生活のなかではイモの買いだしをして下宿のおばさんに運んであげた。学校では、打ち出しの実習であったが後にレジン床が出てきた。陶歯が殆どの状態であった。

卒業は3月ではなく9月に卒業した。それは戦争で人が足りなく次から次からへと戦場に派遣されて行ったからである。昭和19年頃の軍隊生活で、私は卒業後大阪から鹿児島に入隊し、学徒兵で3ヶ月間の教育期間を過ごし、5ヶ月目からは戦時編成で各地に派遣されていった。最初、衛兵と衛生兵と間違えられた。軍隊としての疎開先は熊本であった。二階級進級して伍長となり約10人単位をまとめとして主に人員の指揮と壕堀りの役目を負っていた。兵隊として熊本の疎開地で終戦を迎えた。軍隊での生活は寝台がきちんと並べてあり躾が厳しく、朝などはパッと起床し洗顔や歯を磨く時間等がない規則正しい生活であった。



瀬底夫妻

戦後知人の紹介で鹿児島の技工士経営の医院で手伝いをした、その後宮崎県の高千穂町の岩田歯科医院でいろいろとお世話になり、戦後の混乱のなか歯科医師として認めて頂いた。また、卒業と同時に軍隊に行ったので免許申請が出来なかった、当時は試験ではなく申請する事でよかった。手続きは昭和20年終戦後高千穂警察署へ申請し県庁に履歴書等を提出後文部省へと手続きがなされ歯科医師免許状の交付となった。その間は沖縄の疎開学童の手伝いをしていた。当時私は無精ひげを生やしていたので、ひげの兄さんと呼ばれていた、その姿で子供達を自分の兄弟だと思い買い物や畑を耕したり普通の労務者の様であった。疎開地の500人程の字の区長を務め学童は100人名ほどいたと思う。また、そこの村長さんに沖縄の一般疎開者が困っているので畑をくださいと話したら、村長さんは、戦後の知念地区(4カ村)から知念村の面積ぐらいの土地をあげると言ってくれたのには(場所は川南飛行場跡であったが耕作前に沖縄帰還となる)びっくりした思い出がある。

その後沖縄帰還が出来たので、私は、昭和22年に沖縄に帰り、コンセット型の診療所佐敷診療所で公務員として働いた、当時は、ドクターと医介補の体制で米軍の歯科器具を使用し、注射器、ピンセット、ミラーなどの配給があった、医療器具はアメリカの戦地用で給料300円で知念村、大里村、百名からも患者が来た。義歯はレジン歯、陶歯が多く、足踏みエンジンを用い、モーター、エンジンを自分で作った事もあったが残念だが現在は無い。

昭和22年の頃の学校歯科医としての学校の歯科検診は現在のように先生が学校に出向いて検診をするとい

う事はなく、終戦後の学校の施設が不十分なためまた学校と診療所が近かったせいで生徒が診療所に来て検診を行った。しばらくして学校に出向く様になり佐敷小学校600～700名、佐敷中学校300名、百名小学校が400名を一人で検診した。久高島の検診は今も船に乗って行っているが約50年近くになる。 当時の歯の衛生状況については、今まで検診が無いときは歯の汚れはすごかったが、検診をするという事で検診の前にハミガキをして来るという歯に対する関心が少し芽生えたように思う。しかし、カリエスは多く治療としては、タービンの無い時代なのでチゼルなど使用して痛くないように治療した。又予防拡大もしっかりとやったつもりである。米軍では、根管処置が無いらしく、根管用、ブローチなどを戦前からの歯科医師の所へ分けてもらいに行ったこともある。当時の公衆衛生事業では、山崎先生、平良進先生から手当はないが俺達が保証するからやれと言われ半分すかされながら公衆衛生の仕事をさせてもらったという思い出がある。

PTA活動としては、子供達の健康増進に朝のラジオ体操に力を入れて活動した、また青年会での集まりでは歯科の私に救急箱の所に先生いてて下さいよ、といわれた事もあった。県の思い出では、昭和22年頃の会員は36名であった。山崎先生から3年間議長を命じられ、また平良先生からは、会計は瀬底先生しかいないと言われた。会館建設は監事の後からである。愛楽園における歯科医療および文化福祉活動については、離島巡回検診が縁で屋我地の愛楽園の検診をする事となった。また、愛楽園の文芸部の俳句の一環として俳人達との交流が中心でもあった。愛楽園での検診では、部屋に入る時に自分の足を消毒した、それは、自分もうつらないように、また相手にも感染させないようにの事であった。


歯塚にて　瀬底政俊

俳誌(人)について少しだけ説明させて頂く、私の別名は瀬底月城とも呼ばれている、俳人になるきっかけは、自分が病気がちの為毎日日記を昭和16年の頃から(二中の時)書いている。(戦中は書いていない)。恋い文もよく書いた。本格的に活動したのは、37才からで、昭和52年に各地にあった雑誌をひとつに集めて沖縄では私が沖縄県俳句協会の第一回目の会長に就任となった。現在会員は70名余りいる、「人」の全国大会が1998年5月に沖縄で開催された。県内で俳句の医療関係者は少なく唯一本部出身の神元繁弘(俳号翠峰)さんが俳句の先輩である。翠峰先生は句集「花見坂」を出版された。私がよく被る帽子は「利休帽」という帽子である。

歯塚について、他府県のある地方では、納骨の際分骨に歯だけは取って置き、小袋に入れる風習がある。そこで私は、1950年から「歯は生きている」という事で、自分の診療所の前の庭先に歯塚を作った。抜歯した歯牙を保存するためである目標は2000年までの予定である。歯を祭る風習が他府県にあるというが私の歯塚には、ビンのなかに乳歯、永久歯を入れてあるが、将来学問的にカリエスの状態、予防学、保存学、処置の状態、根の形成の状態など比較推察ができるのではないだろうかと思う。時々講演会をお願いされた時によく話すのは「皆さんの歯で私はメシを食っている」と話して皆さんを笑わせている。

その他に、昭和24年頃コザから高良先生、中地先生、と私三人は保健所関係でアメリカ軍用機で東京へ行き厚生省の指示で三ヶ月間歯科大学研修や学校視察を行ったこともある。今思うと公費留学生の形の始まりのようなものだったかもしれない。個人開業になる前の話である。なお、現在は、午前診療、余暇を句会に出席、毎週一回句友達と句作りに精を出し、園芸で草花と遊ぶ。健康法は、毎朝の乾布摩擦、週数回の健康体操、散歩、及び自己気功法である。口腔内の状態は上顎7歯下顎8歯でパーシャルデンチャーを装着している。

我が足跡

比嘉 良有

私は、大正13年7月1日に、自声堂(楽器店)を営む両親の元に生を受けた。両親は、私を含め4歳上の姉村田芳子、2歳下の弟良導の3名を歯科医師として世に送り出してくれた。幼児期は、西町の真教寺の幼稚園に入っていた。昭和6年那覇尋常高等小学校に入学し、昭和12年県立第二中学に入学、28期生である。そのころから戦争ムードが盛んになり、昭和14年大東亜戦争が勃発、勉強どころではなくなった。

昭和17年県立第二中学を卒業と同時に海軍兵学校受験するも失敗。一年浪人後、東京高等商船学校の入試時に面接の際に「ミッドウェイについてどう考えるか？」と聞かれた思い出がある。その年に、日本歯科医専にも受験した。3月14日の入学受験者は1200名を突破し本校だけでは足りずに、法政大学の校舎を借りての入試状況であった。(後日、日本歯科大学60周年の資料を紐解くと、当時の受験者は1200名中150名の合格者であった)入学当時にフラスコ缶等歯科器材をもらったが、多くは使い物にならなかった。歯科治療器具は、電気エンジンや足踏みエンジンが主役の時代である。入学した昭和18年から19年は、戦争も末期に入り、東京空襲では神田の町を地下足袋を履き逃げまわり、勤労奉仕・ドラム缶・鶴見造船等いろいろと思い出が残るが、今では遙か遠い過去の話になってしまった。

昭和20年終戦、友人の松岡君の郷里奄美を訪問する形で、冬期休暇に彼と共に陸路で鹿児島まで行き、鹿児島から古仁屋まで金十丸でわたり、その後は沖永良部の和泊の海岸から、サバニに便乗し、姉村田芳子のいる与論へと渡り、渡沖の計画を練った。つまり密航である。昭和21年1月2日、サバニに便乗し国頭村佐手海岸に上陸、奥間の上村誠之先生宅等を転々と、両親を探しまわり、久志村嘉陽の捕虜収容所にて無事を確認し再会を果たした。収容所において、一時的ではあるが嘉陽校・瀬嵩校にて臨時で教職に就く。その後は首里に移り住み、具志川宮里在の沖縄中央病院の歯科部長であった平良進先生を訪問、当時はコザへの移転準備がされており、タイミングよく職に就くことができた。移転後は、コザのコンセットに居住し沖縄中央病院に医介補として勤務、平良進・中地庸之両先生には、大変お世話になった。診療室にはユニットは1台と、テントを割与えられていて、診療を行っていた。その当時知花先生もおられた。



水の配給(戦後)

昭和22年には、復学の希望の実現を果たすため、陳情書を作成し行政に対して行動を開始。昭和24年3月、契約学生(国費学生)として正式に復学がきまり、佐世保にて日本歯科医専3学年の復学が決定、上京後、狛江市の南灯寮に寄宿。

戦前の日本歯科医専の同期は、すでに卒業し助手とし在籍しており病院実習などについても厚意を受けた。余談ではあるが、当時米軍の占領下での医介補として勤務していた経緯で、アメリカの歯科医療器具を持参していたため、彼らにとっても貴重な代物であり、時には貸し出しをしたものだ。

昭和26年日本歯科医専を卒業、第九回国家試験に合格し、沖縄中央病院に技官として勤務。勤務していた頃、ノーマ(すい癌)が流行し歯科で入院して取り扱っていた。当時、平良進先生はペニシリン抗生剤を投与出



孫と一緒(由利香一良香の次女)

来るよう、ハットリ中佐に嘆願し投与が認められた。余談になるが、コザにいた頃、夜は黒人がピストルをもって女性をねらっているとの噂を聞いたことがある

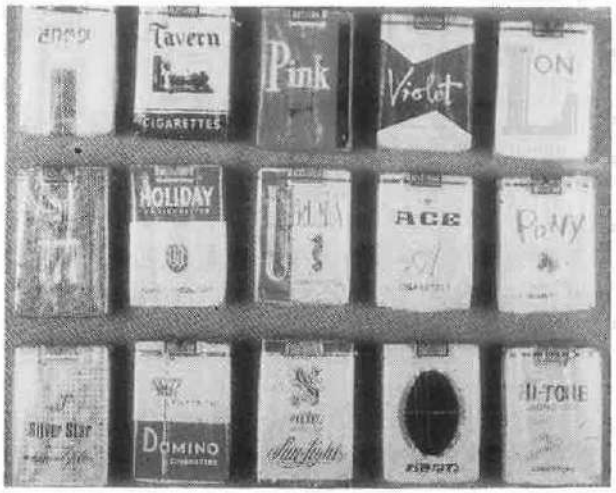
その後、個人開業の実施に伴い知念地区に開業許可を受け与那原町に比嘉歯科医院を昭和27年4月1日に開業。復帰後の47年に現在の場所、私が生まれ育った那覇市西に移り、今年で47年目を迎える。昭和27年当時は、自由診療においては抜歯は無料で診療していた時代がある。ただし義歯の製作を前提としてである。

公衆衛生においては、与那原小学校、与那原中学校、百名小学校での検診があり、南風原においては嶺井先生に手伝っていただいた。当時の検診料は無給に近かったのを記憶している。夏休みともなると、陽も上がる前から順番待ちで並んでいる子供達もいて、いまでは考えられない数であった。

そのほかに、印象に残っていることは、沖縄歯科医師会と琉球歯科医師会の名称についてである。当時は、奄美大島も琉球歯科医師会に含まれており、1951年奄美大島が本土復帰した為、奄美大島を含めるか否かで名称の変更がなされた。その後は、歯科医師会館の建設の際にはいろいろな方々にお世話になった事に感謝の思いで一杯である。



復帰記念メダル



数々のタバコ

喜義丸の最後の救助者

崎山　厚

私は、大正14年(1925年)3月10日島尻郡糸満町(現糸満市)で生まれた。その頃父親は、友寄英彦先生の兄さんが糸満で友寄外科を開業時、当時歯科医が少なく、那覇で技工士をしていた父が友寄外科歯科部の方の担当として糸満に来ていた。それで英彦先生と知り合った。その後父は、玉澤歯科の分院を借りて開業をしていた。その当時は、歯科医師は僅かしかおらず県全体をカバーする事が出来なかったので歯科医師のいない地域に分院を設け技工士を常駐させる分院制であった。診療所は、糸満ロータリー近くの2階にあり、足踏みエンジンを使って治療を行った。当時の患者さんは、黒砂糖を好んで食べていた様で虫歯が多かった。小禄からも患者さんが来ていた。父親は義歯作成が主な仕事で、昭和19年(1944年)頃まで診療をしていた。昭和12～18年沖縄県立二中学校のころ、糸満～高嶺～東風平～国場を通る軽便鉄道を2年生まで使っていた。当時は、軍事訓練も受けていた、同級生には作家の大城立裕氏の親友で元コザ商工会議所会頭の末吉業信氏もいた。同中学校を昭和18年3月に卒業し、歯科を受験するために大阪へ行った。受験は不合格になり沖縄へ戻る時に、私は、九死に一生を得る出来事に遭遇しました。受験後沖縄に帰るために大阪－鹿児島経由沖縄行きの「喜義丸」に乗船し沖縄に向かっていた5月26日の朝、その日は波が高く海は荒れていた。午前11時頃、ちょうど奄美大島にさしかかったところで船は米軍の潜水艦の魚雷を受けた。その時、私は船底に近い三等室で寝ていた。私は夢を見ているような錯覚にとらわれた。まわりには人影がなくなり泳げない私は出口を探し始めた。ちょうどその時足元の海水の勢いが強くなり、船が傾きかけ下から横からと入ってきた海水に巻き込まれて、船の外に海水と一緒に投げ出されてしまった。投げ出された私の、手の届く所に運良く梱包された荷物が浮いていた。しばらくそれに掴まっていたがそれも次第に沈みかけた頃、真新しい畳が浮いて私の方によってきた。私はまたそれに必死でしがみついた。それから1時間たったであろうか、名瀬から来た救助船に助けてもらった。私が最後の救助者のようで後で聞くと全死没者は632人に上ったらしい。その後、名瀬から沖縄に戻った私は、昭和19年2月に受験のために再び船で鹿児島に渡り受験したが浪人生活が続いた。その時家族は、父を沖縄に残して千葉の田舎に住む叔父の所に疎開していた。その後5月東京にて徴兵検査を受けた。昭和19年10月千葉から宮崎に疎開先を変えた時に、入営通知が届いた。鹿児島の一八部隊に入隊し、1ケ月間の訓練の後鹿児島から支那の中支へ出発する日が東京大空襲の日であった。指揮班に配属された私は、釜山から満州鉄道で中支に移動した。大



戦前のタマザワ歯科



1943年(昭和18年)5月 26日　米軍潜水艦の砲により水没した嘉義丸

隊本部は中支の揚子江河岸の大きな町九江市にあった。私は、そこから10里ほど離れた、風景で有名なロザンという山の麓の村に中隊がありそこに配属された。昭和20年5月初め頃から各中隊から2名づつの入江にある兵指令部での暗号教育の募集があり、初年兵7名のうち私が選ばれて、地方では模範青年の山梨出身の秋山上等兵で関東軍現役の方と2名ビル群の立ち並ぶ入江指令部での暗号教育を1ケ月位受けた。大隊支部で先行していた中隊長と大隊長に到着の申告をした時の感激は昨日のように記憶している。そこで終戦まで無事に過ごしていた。終戦から日本へは輸送の順番待ちで一年近く揚子江の中流の町で順番を待っていた。日本へは昭和21年7月山口県日本海の仙崎という港に着きそこで軍隊は解散した。宮崎県に疎開している家族に会うために、下関から宮崎県向けの汽車に乗り宮崎県の本城村で家族と再会した。父親は、本城村で免許を借り開業していた。その村には沖縄県人も多く疎開しており、私達も2年間程そこに住んでいた。その時宮崎県日南市で開業していた友寄英彦先生にお会いしました。友寄英彦先生の兄は戦前糸満で外科を開業しており、父親との仕事上の付き合いもあり先生の口添えで昭和22年3月に日本大学へ推薦状を携えて入学試験を受け合格しました。日大学生時代3年迄は南燈寮で寮生活をしており当時は、さほど食料には困らず過ごした。歯科3年の12月末頃、東京銀座にある川上歯科に住み込みで技工士の同級生の所で技工の仕事を遅くまでやり終電の電車で帰ったが、途中の駅で降りて南燈寮まで3～4時間歩いて夜中にたどり着いた事を覚えている。日大歯科専門部としては最後の学部（29回卒）での学生であり、その頃の単位の取得は、総義歯の患者を一人連れてきて義歯を制作すると単位がもらえた。その後は6ケ年の歯科大学に移行した。



崎山夫妻

私は、昭和27年（1952年）3月に卒業して6月に免許を取り、沖縄に帰って来ると自由開業前で東風平で公務員開業を半年ほどして昭和27年11月から糸満で開業した。その頃父の知り合いや母の親戚の小田が総入れ歯の経験者でお二人共、理想的な顎提をしていたので在学時代、野本先生という総義歯の大家が居り、丸がりで軍医の出身であったのか豪放な方が居られた。私は、講義中の要点を暗号教育によってなれた速記でノートに記入していたので、そのノートを参考にして、モデリング印象・辺縁形成・咬合関係・陶排・試適を行い、仕上げた。お二人共、たくあんも噛めると喜ばれた事を今でも覚えている。そして、昭和28年（1953年）11月に那覇市の国際通り、現在の国映館近くの2階を借りて一年間程開業していた。その時の開業の様子は、クレゾールで器具消毒をしていた。C1～C2は足踏みエンジンで窩洞形成をしてアマルガム充填が多かった。また、当時は琉球歯科医師会に所属して米琉歯科医学会にも何度か参加していた。その頃は歯科医師が少なく、夏休みになると多くの子供達が来院し、整理券を発行し朝早くから順番待ちというのが続いた。この状態は復帰頃まで続いた。私は、開業して35年になるが、昭和30年のころは、大道小学校の検診を集団で行っていた。また、思い出には、崇元寺の近くに米琉親善会館でよく会合があった。現在は、読書・音楽鑑賞・散歩などが毎日の日課となっている今日この頃である。

九死に一生を得た広島原爆投下８時15分

高良　政利

『九死に一生を得る事数回、そして広島原爆投下8時15分』

私は、昭和の足音が聞こえつつある大正15年11月小禄安次嶺（現那覇市当間の伝統工芸館前の県営住宅付近）にて7人男兄弟の6男として生まれた（寅年）。父は県立医生教習所出身（4年制医学校で国家試験受験資格獲得）内科医である。中学時代時々調剤、手術時の雑用、他の手伝いをさせられた。昭和9年（小学2年）の県人口59万3300人、歯科医師35人。当時、義務教育は小学校6年迄で父兄会費、月10銭（1円の1/10）の支払いも出来ず小学3,4年で退学し年季奉公に行かされる者、旧制中学校（5年制）は受験進学するが約5%位しか進学出来ない程貧乏県で芋と裸足の時代であった。昭和16年私が開南中学校（現開南カトリック教会付近）2年時に9歳年上の兄、實は歯科医専を卒業翌17年久留米連隊へ、7歳上の3男、進も医専を卒業し都城連隊へと入隊した。こうして男子の殆どは強制徴兵され戦場へと狩り出されて行った、その何十分の一が生き残ったであろうか。昭和16年12月8日（中学2年）日米開戦、勝った勝ったと日本中が沸き立って2年後の昭和18年文化系学徒出陣、そして20歳時徴兵検査が1年繰り下がって19歳となった。旧制専門学校の受験資格も1年下がって中学4年終了で受験出来るようになった。　昭和18年12月31日　県下医師163人、歯科医師69人、薬剤師24人。翌昭和19年2月中学4年終了した私は18歳で米潜水艦跳躍しつつあるなか5隻で船団を組んで無事鹿児島上陸、30数時間かけて東京到着した。（その6ヶ月後対馬丸悲劇が起こる）当時歯科医学専門学校（4年制）は男子官立1、男子私立6、女子私立2、計9校（現29校）で卒業約1500名、死亡歯科医師約800名で年間約700名しか増加しない、無試験で歯科医師免許が下付される、理科系は徴兵延期が出来る等々で理科系に受験生が殺到した。日本歯科医学専門学校（現日本歯科大学）も約2000名中220名合格する事が出来た。同年10月10日の空襲で那覇市垣花町（現軍港）の高良医院も全焼した。翌20年の4月末（19歳）駒沢大学で徴兵検査を受け甲、乙、丙、丁のうち眼鏡着用で乙種合格と認定された。当時合格しないと無能者扱いされ道も歩けない位だった。検査場で徴兵係将校が「お前は琉球か、琉球はもう駄目だなあ」と4月1日米軍の沖縄上陸戦の末路を聞かされ暗澹たる気持ちになった。合格と同時に入隊であるが在学証明書と理科系徴兵延期願いを提出し延期する事が出来てほっとした。昼夜となく米B29機の空襲が続き世田谷代田橋の下宿先は焼け、麹町区（現千代田区）富士見町の学校も半分以上焼失し休校状態だったので両親の疎開先、宮崎に暫く身を置いた。当時陸軍軍医将校の兄進が宮崎での休暇が終わって岡山陸軍病院へ帰隊するとの事だったので一緒の汽車（列車）で東京に向かった。



高良政利　昭和19年4月日本歯科大学入学

昭和20年8月6日、その日は珍しく空襲もなく穏やかな晴天のなか汽車は順調に走って朝6時頃広島を通過した（約2時間余の8時15分原子爆弾爆発）。13時、岡山到着、兄と別れて10数時間後東京へ着いた。兄は帰隊後直ぐ救護隊第1陣として広島へ向かった。新型爆弾と聞いたが一面煙もうもうの焼け野原、火傷手当と点滴以外処置の方法がなく、毛髪は抜け、下痢症状がひどく、健康そうな人も2,3日で死亡、死体るいるいと此の世の地獄の様であった。（世界で最初の核爆発域にて世界初の医療を施した体験記録は終戦時命令で焼却した、保管しておけば貴重な記録だった筈）とは兄の後日談。1週間後の8月15日陛下の終戦の放送を聞いたときは皆泣いた。それ迄、何年間も灯火管制で町中が暗かったがその夜から明るい日本になった。昭和19年入学時の私の生活費は下宿費、食費、雑費を含め月50円。平均的月給50円。映画50銭、蕎麦50銭。4年後はインフレで月9000円。4年次の患者実習は一般家庭米配給（大人1日2合5勺）、それも遅配し大豆15日分配給という

食糧難時代で、歯の処置どころか食べるのが、生きるのが精一杯時代で親類知人のいない私はノルマ達成に大変苦労した。今でも時々夢を見る事がある。なんとか卒業し、1期先輩から始まった春秋年2回の国家試験に合格し晴れて歯科医師として世間に出る事が出来た。ちなみに歯科医籍番号は38894号である。

今年平成10年11月15日卒業50周年記念クラス会が東京で開催されたが、入学220名、卒業199名で今日まで約60数名逝去し生存者130名、年々5,6名少なくなる。 大阪で2年位勤務医生活し、昭和25年(24歳)帰郷した。当時全琉(奄美大島、本島、宮古、八重山)で全歯科医師は36名。私は戦後国家試験合格者第1号で37人目である。1ヶ月後の11月1日より沖縄中央病院(現中央病院の前身)勤務した。その内訳は平良進歯科部長(敏彦氏御尊父)、中地庸之勤務医(嘉間良診療所兼任)、私、技工士(屋比久、上地)であった。中央病院は2年制看護学校のある全琉の中心的病院でカマボコ型コンセット造りである。抜歯が中心で、充填はアマルガム、シリケート(珪酸セメント)が主である。材料は米軍支給で当時の日本よりも数段優れたのを使用していた。金属は所謂サンプラの継成冠、無継冠でどの歯科診療所からもガンガンとサンプラ板を叩く音が聞こえ、まるで板金屋の様であった。全員官立診療所の勤務医だったが昭和26年より待望の自由開業時代に入った、自由開業といっても地区配置許可制である。私の場合は前原地区(現与勝半島)屋慶名、そして半年後、糸満町端通りで開業した。昭和28年安謝で夜間開業しつつ美栄橋(現パレット久茂地西側)の琉球臨時厚生協会病院(現赤十字病院の前身)が吉田春子内科医、与那嶺茂了外科医、高良政利歯科医、太田吉甫事務局長、看護婦数人で開院した。塩屋、辺土名、等の1泊2日の内科、歯科の無医地区診療では足踏みエンジン持参だが医療が最悪時であるので大人子供もC2どころかC4、歯槽膿漏もP3、P4である。普通椅子に4名を座らせ麻酔をし流れ作業式で朝から夕方迄何百本抜歯しただろうか。

昭和30年11月(29歳)那覇1区20組(後樋川50)(現壺屋1丁目8番34号)に高良歯科医院開院。壺屋は沖縄戦終了後生活必需品食器類焼きのため那覇に最初に転入を許可された地区である。壺屋神原通り付近には山形屋、リュウボウ、大洋琉映、那覇劇場(芝居)等さまざまな店が建ち並び、各方面に向かう東陽、昭和のバス発着拠点ともなり活気あふるる場所であった。それ故、浜松外科、嘉陽内科、久高歯科、嘉手納歯科(憑一氏御尊父)、かのう歯科、玉城歯科(民雄氏御尊父)、崎山歯科(厚氏)等多数の諸先生がその界隈で開業された。


昭和30年当時の高良歯科

平成7年12月31日、40年間続いた高良歯科医院を閉院した(70歳)。現在小禄在の高良歯科医院(長男政憲)の勤務医である。歯科医師生活50年間は先輩後輩のご指導激励協力で大変楽しかった想い出ばかりである。ありがとうございました。

表題の『九死に一生』云々ですが人生一生涯に本人は知らないが何回も『九死に一生を得た』事があると思います。私の場合は、小さい時から弱く、1歳半時に急性大腸炎で入院先の那覇の堀口胃腸医院から治癒不能、家で死なせとで帰され、白髪になり今日か明日かで棺桶まで準備されたり、近所の小禄村役場溜池に溺れ死亡寸前郵便配達人に救助され、懲りずに同池に又溺れるは、対馬丸悲劇前、10,10空襲前に、そして1年早く上京したので沖縄戦を(小中学同期70数名戦死)、大学合格したので兵隊行かないですむし、広島原爆でもと、当時戦争で22～23歳迄の生命と覚悟してたのが古希になるまで生き延びてこれたのには、なにか人知では計り知れない何様かが助けて頂いたのではと感謝している。現在は「晴耕雨読」、5人の孫と遊んで「日々是好日」である、多謝多謝。

波乱万丈の青春から歯科医へ

西平 守廣

1、昭和3年に首里城下で出生。付属小学校から昭和16年県立一中に入学したが丁度その年の12月8日に太平洋戦争が勃発。その日のニュースは胸にズキンと来るものがあったのを今でも覚えている。当時、我々からは帽子も戦闘帽となり、学生服もカーキ色でゲートルを巻いて登校したものである。戦争の激化に伴い我々の青春はふっ飛び学業どころではなくなり英語廃止を叫んで授業をボイコットしたり軍事教練が厳しくなり、また土木工事や嘉手納飛行場造りにモッコかついで、きつい作業に明け暮れた。巷には兵隊の姿が多くなり、また魚雷にやられ、ずぶぬれになって行進する兵隊達も見られた。我々もじっとしておれず、昭和19年の8月に特別幹部候補生として埼玉所沢陸軍整備学校に入隊した。最初は操縦兵に憧れて入隊したが当時、飛行機が少なくなり整備に回された。後々の話になるが操縦兵は特攻隊要員であり、整備に回されたお陰で生き残った様なものである。

私の名前は本来、西平幸男であったが 入隊前に いつ戦死するかも知れないと考え、西平一族の守が付かないと、どこの馬の骨かも判らないでは困ると思い自分で市役所に届け出て現在の守廣に改名した。20年8月15日に日本国は無条件降伏し我々は軍隊を追い出され 皇居前広場の砂利の上に正座して何故か涙を流し頭を下げた。

2、戦前 戦中の県内の歯科事情について記すと

私の叔父(高里盛期)が戦前、西町(西本町)で歯科医院を開業していた。殆どの開業医は足踏みエンジンで治療していたが電気エンジンを使っていた所もあった様だ。一番記憶にあるのは玄関の横に60cm四方位の箱に総義歯や金冠等の見本を展示してあった。患者はこれを見て中に入った。

現在の義歯はレジン床、又はスルフォン床だが当時は蒸和ゴムの時代で蒸和の火加減が難しく調節を誤ると爆発等を起こしたそうである。(今、私の所に蒸和ゴムで作ったブリッヂが保存されている。)

当時女子の歯科衛生士や助手等は殆どいなくて技工士見習いの少年を雇って治療の助手や技工見習いをしていた。(私も開業して5~6年はそうであった。)

昭和4年~5年頃の見習いの給料は4~5円位で或る程度、技工が出来るようになると20円位が平均であった。最高は100円位で代診もしていた。 当時、前歯の金歯が3~4円で昭和16年頃は7~8円位だった様だ。(因みに中学校の月謝が5円だった。)そして金は配給制になった。

戦前の人達はGOLDを好み、健全歯にもピカピカの金歯を被せ、義歯にも多々金歯を入れた。その為に金歯模合を起こしている人達もいた。



戦後間もない頃の首里坂下

3、終戦直後の話をすると

22年に漸く沖縄に帰って来て軍作業員として色々な職種を転々としたが、米人とはよく喧嘩をした。然し一応通訳らしきものをやっていたこともあって英語だけはちょっと勉強していた。PXに居た頃、ある程度の収入があったので、その資金で大学へ行った。24年に結婚し26年に長女が生まれ28年生の次女が生まれる2ヶ月程前に東京へ行った。

4、学生時代

昭和29年に日本歯科大学へ入学。当時入学金が5万円位だった。当時の学生は戦争中の志願兵や戦時体制のために勉学する機会を失い、終戦後生活が漸く落着いた頃から再び学業に戻って来たために年齢的にま

ちまちで4～5才の年齢差は普通で10才以上も違う学生も多かった。

当時日本歯科大学は沖縄県出身者が割と多く、今でも校友会は県内で一番多い。また私と中原爽先生（日歯大理事長 日本歯科医師会会長 参議院議員）とは奇しくも学生番号が隣だった為に、いつも一緒であり、彼の家に行ったりまた私の所で遊んだりして一番親しい友達だった。

日歯大は服装に厳しく登院するまでは詰め襟の学生服を着ないと校門に入れなかった。私は5年間、県の学生寮（沖映寮）に居たが寮費は2食付で3500円だった。寮には歯科関係では具志川市の仲眞良性先生、元琉大口腔外科教授の山城正宏先生、現札幌医科大学歯科口腔外科の小浜源郁先生が一緒だった。余談だが当時、従兄3名で時々飲みに行った。或る日新宿2丁目のバーでウイスキーのホワイトホースが目についてシングルで一杯ずつ注文したら1000円請求されてびっくりした。（当時サントリー一杯30～50円で飲めた。）帰りの電車賃も無くなり やむなく交番に駆け込んで後払いの旅館を世話してもらった。

5、歯科医院開業

昭和35年に卒業し、直ちに先輩の平良歯科に勤務し12月に現在地に開業した。当時首里には私も含めて3軒だった。全県的にも開業医（84～85名）が不足していたために割りと最初から忙しかった。知識階級の患者は保存治療を望んでいたが田舎からの患者は治療できる歯でも抜歯を希望した。折角治療しても2～3年ですぐ駄目になると思っていた様だ。



西平守廣

当時診療時間は朝9時から晩の9時迄であった。それで従業員に昼食と夕食をとらさせていた。診療費は平均して処置料25￠、抜髄根充40￠、抜歯1弗、アマルガム充填2弗、金冠13弗、SP冠3弗、総義歯30弗位で患者数平均35人位、そして月収入は平均700弗位で物価は本土の2割高であった。

県歯からの通達で慣行料金と云うものがあったが余り守られておらず過当競争の所もあった。また市の周辺は勿論、市内でもモグリで治療や義歯を作っているのがいた。昭和47年の日本復帰の年にモリタ〔株〕から売り出されていたスペースラインが沖縄に導入出来る様になり、沖縄から20名位の先生方が大阪まで行ってDr. ビーチの講習を受け購入した。今までの立位診療から座位診療になり大変楽になった。

6、 学校歯科医

昭和37年から城西小学校の校医になった。当時生徒数は2000人弱で（現在900人くらい）検診に午前中つぶして5日位かかった。養護教諭が居なくて担任の先生に筆記をお願いした。検診後治療カードを出して治療を喚起した。（昭和40年頃から）夏休みには朝4～5時位から患者（子供）が順番取りに並んでいたので、番号札を配って開院時に来てもらった。午前中は主に子供たちを、午後から大人を診る様にしてた。

歯の衛生週間には講演をし、またPTA新聞等へ投稿した。検診後に歯の王様 女王様を表彰し、現在まで続いている。特に思い出深いのは昼食後のハミガキをする為の個人の歯ブラシとコップを入れる保管箱を校長先生にお願いして教育委員会から予算がおりて整備した事である。当時子供たちのう蝕歯の状況はとてもひどく何とかしなくてはと、一学年をターゲットにして、徹底治療した事があったが非常に好成績を治めたがやはり、学校は校長先生の熱意に大きく左右されると思った。

7、歯の衛生週間

県歯の衛生週間の行事は市内で街頭検診や離島に舟で渡って検診や簡単な抜歯もした。特に軍のヘリコプターをお願いして伊平屋島に行った事は思いで深いものがある。現在は那覇市内を中心に、デンタルフェアが

離島各地で行われる様になった。

8、県歯理事及び会長就任 についてのべると

昭和39年に会計理事に就任した。会費の徴収は現在の様に引き落としではなく総会の時や或いは各個人から回って徴収した。前年まで何人かの未納者もいたが任期2年目に100%徴収できたのは嬉しかった。当時は会員も含め皆会務に参加しても無報酬であった。

昭和41年に公衆衛生理事に就任。学校歯科医師会設立を準備し、昭和42年3月総会において正式に発足し、山崎会長の下で副会長に就任。昭和45年に専務理事に就任。当時、日本復帰前の諸準備で多忙を極めた。(医療保険 社団法人の登記、県歯定款改正等)

昭和61年に会長に就任したが、同時に日本歯科医師会の代議員となり、また九州地区を代表して日本歯科医師政治連盟理事に就任、お陰で月1～2回の東京往復が定期便となり、およそ地球の17～18周回のフライトレコードが記録されている。

在任中一番記念になったことは県歯の保健文化賞受賞である。これは県歯の先輩方の努力によって会館の建設と共に歯科診療センターを設備して厚生省及び県を動かし県歯と三味一体の協力関係を作り重度心身障害者の歯科治療を行い本島内は勿論、離島迄も治療範囲を広げて社会からその功績を評価された。ただこの受賞のために各方面へアプローチしたがなかなか厳しく約6年がかりで漸く目的を達成した時は誠に大きな喜びであった。表彰式は宮中において天皇陛下ご臨席の下に行われ、非常に栄誉なことであった。

また県歯の70周年記念式典と同時に三地区(中国地区、四国地区、九州地区の16県)役員連絡協議会が開催された。会員福祉の為に保険組合の設立が急務とされていたが、県歯単独では到底無理だったので全国歯国組合の武居会長にお願いして20番目の県として加盟させて頂いた。この組合は全国の小規模県が集まって作られた組合である。

9、 私の趣味

ゴルフ、麻雀、囲碁、園芸、読書。ゴルフ歴は約30年。40才代後半はH－9までいったが寄る年波、現在16。県歯のDGAの創設には当初から関わっている。九地連のゴルフコンペは昭和47年から参加している。現在迄に6～7回優勝している。今年は琉球ゴルフ倶楽部のグランドシニアのクラブチャンピオンになった。

麻雀は学生時代に覚えたが、当時大学周辺には多数の雀荘があった。休講になると直ちに雀荘にかけ込んだ。また土曜日は午後から大体5人で交替してやり、一人は食事の仕度、或いは眠って徹夜に備えた土曜日は徹夜し、日曜日も殆ど夜中迄やって、学校へ行ったら早速眠っていた。今でも頭の活性化のために月2～3回位やっている。

戦後を見て

金城　一史

私は1929年の生まれで幼い時は那覇市西新町の真教寺の向かいで姉の金城マツイが善隣歯科医院を開業していたので、少年時代をそこで過ごしていた。姉は東京東洋歯科医専卒で沖縄の女性歯科医の最初の人だと聞いている。私は歯科医院の家庭環境にあった故か小学校低学年の頃より歯科医になりたい気持ちが、芽生えた。また当時の技工士が義歯等を作成するのをみるのが楽しみであった故かもしれない。当時は男女とも側切歯に金冠を入れるのが流行していたので、金冠作りもよくみかけた。



太田政作氏（元琉球政府主席）と金城一史

戦後は高校を卒業したら殆どの人が軍作業に勤めるのが大半であったが、私はやはり歯科に興味があったので、那覇診療所（現在の那覇市樋川のカトリック協会の所）に勤めた。当時の診療所は内科.外科.産婦人科.歯科の四種があったが、私は手があけば、何でも手伝ったのである。地区に内科の新嘉喜倫元先生は高齢の為、雨降り等は私が代診に行ったものである。また婦人科の長田紀秀先生のお手伝いで子癇（主として分娩のときの発作性の痙攣）の患者さんには戸惑いをかくせなかった。当時私は若干19才であった。勤務1年半で（1950年）個人医開業が許可になったので、それぞれに先生方も解散し、私も本土留学をすることになった。大学の同級生には18才の現役から復員軍人の45才位の生徒までいた。この時勢での下宿探しは一苦労であった。朝鮮人と琉球人はお断りの張り紙があり偏見の強い時代であった。貧乏学生だった私は午前中は大学で受講し午後からは有楽町にあった朝日新聞本社の診療所でアルバイトをしていたので日活の社長や芸能人もいろいろ診る事ができた。



長井いわお先生と那覇病院手術室にて

昭和33年卒業し、すぐに帰郷し翌35年5月には現在の開南歯科を開設した。トタン屋根の診療所での出発であった。その年に歯科医師会の理事そして1年後に専務理事となり、私の診療所に沖歯会の事務所の看板を掲げ専務兼ガリ版刷りの小使いであった（むろん役員手当はなし）。当時は口腔外科の病院がなく私の診療所に大学の医局員を1年交代で派遣して頂き、小手術は当歯科医院で行い、大手術になると那覇病院で外科の先生方の協力を得ておこなったものである。

また当時は琉球政府立看護学校の非常勤講師として10年間勤めたが本土復帰と同時に那覇高等学校に看護科が併設され、その年に非常勤講師として勤め1990年までの22年間勤務した。その間琉球歯科医師試験委員、技工士試験委員等の任命を受けたが、とりわけ戦後初めての自衛隊が沖縄入りした時には労働組合の抵抗も強く自衛隊の診療所に勤務者がなく、やむなく専務だった私が医務室兼務医として勤めたが、労働組合の方々にはぞっとさせられた想い出も多い多難の時代であった。

苦学-仕送りに涙の感謝

嘉手納憑一

初めに私の父について少しお話をしたいと思う。私の父嘉手納憑計は、首里の当ノ蔵町で歯科医院を開業していた。戦前首里支部長をしていた父は、支部会を自宅で5～6人の先生を集めて勉強会をしていたそうである。また父は、礼儀作法などにには厳しい人であった。当時父は、尚家の診療に行く時は一人ではなく、尚家の主治医である仲地紀晃先生と一緒に尚家に出入りしていた。その時は、「往診箱」という物を持って印象、歯石除去などの往診診療をしていたそうである。当時の歯科事情について、私の子供の頃(戦前)は、診療室では、足踏みエンジンや電気エンジンを使用していた。技工室にも足踏みエンジンがあった。当時首里の当ノ蔵町で子供達の間では、「ハーヤーはカデナー」「ミシンヤーはトウマター」という唄があった。そのぐらい歯科医院が少ない時代であったのである。余談だが西平守廣先生の奥さんが幼小のころ通院していたそうである。そして、1942年～45年には首里支部長をしていた。昭和20年2月15日に家族全員でタイシン丸という疎開船で大分県の竹田という所に疎開し、そこでも開業をしていた。そして、昭和21年12月に久場崎収容所から沖縄に入る。那覇の千歳橋神里原のあたりで開業し、昭和29年5月には南部地区支部長として活動していた。以上が父の話である。



嘉手納憑計(憑一の父)

戦時中 私は、第二小学校(現城西小学校)に入学し、昭和19年から県立一中に入学した。10・10空襲の時は、那覇で軍作業をしていた。空襲のなか命からがら那覇から首里に逃げ帰り昭和20年2月15日に大分県竹田に疎開しそこで、竹田中学に編入しそこでも飛行場の整備など軍の作業をした状況であつた。そして、父は竹田で開業していた。終戦は、大分県竹田で開業をしていた時に迎えた。その後久場崎収容所に昭和21年12月4日に帰り、それから首里に移動し、首里は焼け野原でテントでの生活が始まった。その頃、母が急性肺炎に罹患し、首里の鳥堀町にあった(内科、外科などの総合病院)コンセット病院に入院した。その病院には知花朝申先生、平良進先生がいて公務員のような形で仕事をしていた。父も米国軍の指定された場所で仕事をしていた。

母は、6ヶ月間入院しペニシリン注射にて回復、治癒していったが結局一年間母の看病をした後首里高校へ編入する事になる。大学時代の思いでは、私は昭和27年4月に日本大学歯学部に入学し、インターン時代に補綴、外科のケースなど1年間にあげなければならないケースの患者さんを探すのに苦労したことである。生活は、沖縄からの仕送りが一ヶ月で30ドルという制限があったために30ドルでの生活は厳しいものがあった。昭和31年大学5年の時父が62才で亡くなり、その後は平良進先生が仕送り、月30ドルと学費を2年間、卒業まで出して頂き、卒業後は平良先生の所へお礼奉公として勤務する事になった。平良歯科勤務のころ昭和33年～37年10月までの4年間勤務させていただき、先生のもとで、いろいろと多くの事を学ばさせてもらった、『心中より感謝申し上げます』。その後私は、昭和37年



嘉手納憑一夫妻

10月に与儀十字路（阿嘉歯科の向かい）で開業しました。患者さんは最初は少なく、大里村、玉城村、東風平村など南部中心の患者さんが多かった。診療は、夜の10時まで、休みも月に1回という具合で、お盆、正月以外は診療をしている状況であった。当時の診療は、順番制で夜遅くまで休みも余りないというのが多かった。夏休みは子供たちが中心であったため、大人の患者さんは少なかった。与儀での開業は7年間であった。そこで、昭和38年4月に長男が生まれ（歯科3代目）、昭和42年与儀から松尾に移転し、昭和48年（オイルショックの頃）に松尾から久米に移った。久米に移ったころに職業病である椎間板ヘルニアに罹り、診療するにも大変な時であった。私は、昭和43年県歯会計理事として役職につき、会計処理を全部みるようになった。当時本島はもちろん、宮古、八重山までの離島まで会費の徴収にかけずり回ったという印象が残っています。その時は、診療は休まざるを得ず、会の仕事、診療との毎日で体を労る事を忘れ、体調を崩し大病を患い役職をはなれる結果となった。学校歯科校医としては、昭和40年から与儀小学校を阿嘉先生と一緒に検診した。また天妃小学校の歯科校医を引き受けた。当時は、口腔衛生週間の時口腔診査をし、小学生に賞状・賞品を自前で揃え賞品は、時計・筆箱・アルバムなどを当てそれを、男子1人、女子1人といった具合に毎年表彰していた。幼稚園児男女2人にも同様にした。その他に、米軍のヘリコプターを使って僻地の無歯科医地区の検診、診療にも従事した。メンバーは、南部支部の友寄英彦先生を中心に沖縄の先生が数名、軍属のドクターも一緒に伊是名、伊平屋、国頭などをまわった。また、久高島にも船で、友寄先生、嘉手納先生などと一緒に行った事は懐かしい思い出である。また、現在では琉舞を玉城節子先生に教えていただき、歯科医師会の忘年会にも「御前風」を踊った事もある。



1950年代の国際通り

最後の一中生

嶺井 浩



嶺井浩

私は、小学校に昭和13年に入学し19年に年卒業した。当時首里の人口は約2万人で歯科医院は嘉手納歯科があった、小学校では永井長秀先生が校医をしておられた。昭和19年県立一中に嘉手納憑一先生と共に入学し、私達が最初で最後の一中生となった。当時は1学期は授業をし、2学期は小禄(那覇)飛行場でのモッコ担ぎや、与那原港湾作業とか陣地構築にかり出された。昭和20年4月1日に米軍が沖縄に上陸したが、3月23日に私達は西原製糖工場へ集合の予定になっていた。その日から沖縄戦は始まったのである。家族5人で首里を出発し、昼はかくれ夜に歩いて山原に疎開し、終戦を山原で迎えた。羽地、真喜屋から山づたいに逃げたが、米軍上陸後は久志の二見で降伏し、トラックに乗せられ仲尾次へ収容させられた。平良のカンパン捕虜収容所に兄が収容されたが、マラリヤにも罹った。その後知念の志喜屋に移され知念高校2年生に編入(当時は4年制)し、昭和23年に卒業し5年程米軍の作業に従事した。その後大阪に行き定時制の高校2年に編入した。高校を卒業後、日本歯科大学へ昭和30年入学、36年に卒業した。

大学時代夏休みに帰る時、東京から鹿児島まで汽車に乗り、鹿児島から沖縄までは船での帰省であった。今思うといい思い出である。また当時の流行は力道山のTVの観戦であった。 学生時代の食事事情はラーメンが30～40円ぐらい、大学の学生帽は1年間だけ被った。実習は電気エンジンで実習、タービンは導入されたがほとんど使用しない状況であった。日歯大卒業後に矯正は、東京医科歯科大の矯正科で高橋新次郎先生、三浦不二夫先生等から直に教わる。ちょうどマルチバンドの完成の時であったが、当時は無給である。また昭和37年の頃の沖縄では私が初めての矯正医であった。昭和38～40年に平良歯科医院に勤務し大学病院から先生がお見えになり外科診療をしていた。

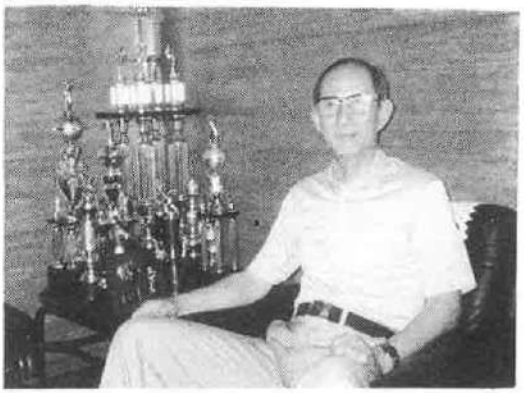
琉球政府厚生局予防課勤務時、最初は保健所に開業前の暫時就職の希望であったが、他に公務員歯科医師は1人もおらず県庁の配属となった。前任は伊良波先生であったがお会いしたことはない。保健所は大山先生が一番長く国仲先生、松田先生、新城先生へと充足されていった。巡回診療は8大学の協力のもとで3ヶ月間離島をまわる。巡回診療は琉球政府が日本政府に要請して来てもらい、琉球政府が治療計画を立てて、例えば人口や対象者等調べて実地調査し離島をまわる。準備は器材道具を運び、組立し、衛生士も連れて行く苦労があった。沖縄本島内も南部や国頭にも行って検診し、抜歯、アマ充がほとんどで技工補綴物はしなかった。そして、昭和44年に与那城先生会長時に国際通りに開業し、現在にいたっている。当時まだドル時代であり山崎友太郎先生から県庁に提出する書類の関係で学校歯科の会計担当を仰せつかり、南部地区の面倒をみてくれないかと言われ、校医の少ない南部方面の大里小学校、中学校の校医を引き受けた。検診にはタクシー、バスを利用した。校医手当等県庁からの予算面には山崎先生の功績が大きい。当時の子供達の口腔内は那覇まで出てこないと治療ができないのでかなり悪い状況であった。

昭和47年復帰前後に歯科医師会館建設については登川会長、玉城副会事、上原会計の3人が中心になり現在の場所の確保に頑張っておられた事を思い出す。

昭和51年に南部地区会長に就任した頃最初の1年目に自由診療の金属床とポーセレンが保険に組み込まれようとするなどの時局問題が起き、2年目には某技工士の経営する歯科医院の雇われ先生の入会に関する件等の問題があり頭の痛い思いでであった。学校歯科検診では、南風原小学校での講話をした事などが思い起こされる。そして、現在 趣味としては釣りとウォーキングをする位で今思うと班長から始まり学校医・会計・県の理事～代議員とやらせてもらったが、昭和62年に心筋梗塞になり平成10年にバイパス手術をうけてやっと一命をとりとめた。今後は健康に気をつけてがんばるつもりである。年をとると共に健康には充分に気をつけたいと思う。

母は最高の指導者であり恩師

林 昭治



林昭治

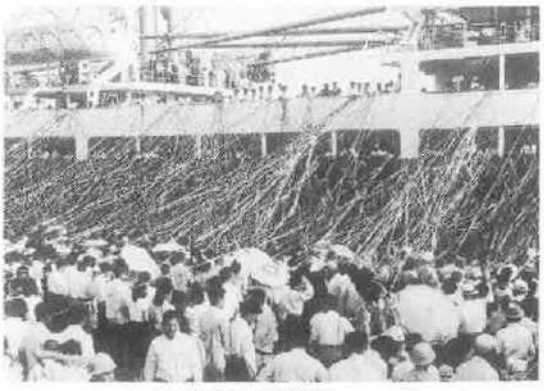
私は歯科医師である母の末っ子として生まれた。幼い頃より母親の診療している姿は見ていたが、歯科医療というものには興味はなく無関心でまさかその後を継ぐとは夢にも思ってもいなかった。当時の八重山では、電気事情も悪かった事もあり足踏みエンジンで治療が行われていた。忙しい時には足踏みエンジンを踏む手伝いをさせられたのが唯一の歯科との関わりであったかもしれない。そのお陰か後の学生実習の時の足踏みエンジンの使い方には手慣れたもので大いに役立った。

戦争中は疎開のため、母の診療所は閉鎖し、診療中断を余儀なくされたが、戦後はアメリカ民政府から薬品、材料が支給され戦前と変わらず開業する事ができたようだ。(本島では戦後一時期開業が許可されなかったようだが)

昭和26年高校卒業後エンジニア希望で進学したが、どういう巡り合わせか九州歯科大学に入学する事になり歯科での道を歩む事になった。

当時沖縄はB円(軍票)の時代で 当然本土では通用せず余分な仕送りはなく、月30ドル(約10800円)で授業料(学費)から下宿代まですべての生活を賄わなければならず、経済的には大変な苦労の連続の学生生活であった。はじめの1～2年は殆ど肉体労働のアルバイトでしのいだのだが、後半は比較的楽な家庭教師などのバイトに恵まれ、苦しいながらもスポーツやささやかな小旅行など楽しい一刻をすごす事ができた。

昭和32年卒業後の研修中に八重山の母と一緒に診療していた次男が体調を崩した事で帰省し、昭和33年に後を継いで開業した。当時26歳という若輩での未熟者には毎日の診療が研修の連続だったが、大過なくやってこれたのも歯科医師としても先輩である母親の厳しい指導があったもので、私にとっては最高の指導者であり恩師だと今でも感謝している。



戦後の出港風景

その頃八重山には歯科は3医院しかなく毎日が多忙であった。特に夏休みには押し寄せる子供の患者の波に 昼休みもない程であった。また学校歯科医も7～8校持ちながら、検診にも多くの日数を要したものである。その傍ら多忙の合間をぬって狩猟、魚釣り、車、ダイビング、ゴルフ、スポーツ等々大いに楽しませてもらった。

そのうち八重山地区の歯科医師会長を13年務めさせてもらった。当初は支部会費というものがなく、殆ど自前で各方面の協議会等々に歯科医師会代表で出席し、その報告を各医院に出向いて伝えたものである。その間に若い先生方が次々に帰ってこられて開業され、会員の数も増え、新しい歯科医療の風も吹き込んできた。

昭和53年那覇に転居し、若狭で開業した。支部会にも積極的に出席し、かねてから組織というものは底辺が一番大事で支部会そのものがまさしく底辺の集まりで、そこでの意見など、又情報交換などが重要ではないかと考えている。その支部での細い意見や情報をしっかりと中央に伝えられる組織になり、且つ横のつながりも強くしていけたらと思っている。

昨今は気楽に診療を続けながら趣味の庭弄りをたのしんでいる。

私の生い立ち

冨本 盛弘



冨本盛弘

ハシカド歯科という名前は旭橋の袂に歯科医院があったため、父の命名による名前である。私の生い立ちは久米町で生まれ、6才で東町に移り、天妃小学校に通った。父は仕事場(歯科医院)で使った石膏を砕いて粉にし、釜で茹でて再び石膏としてリサイクルしていたのを思い出す。

私がちょうど小学校5年生の時に10・10空襲にあった。その時は学校へ行こうと思っていたら、なにかポンポンという音が聞こえ、家の屋根の上に登り眺めていたら、戦闘機が那覇の港を空襲している光景を見た。空襲警報がなったのは随分時間が経ってからだったと思う。那覇の港からは多くの負傷兵がトラックに乗せられて運ばれて行く状況であった。その日は今のハーバービューの近くの農園の防空壕に一時避難し一夜を過ごした。翌朝家へ行くと家は空襲で消失し残っていたのは家で飼っていた鳥ターチーやチャーンが焼き鳥になっていた。その後私達家族は母方の実家や父方の実家に転々と避難し北の方へと追われる様に逃げていった。3月まで中城の安谷屋へ避難、喜舎場小学校に籍を置いた。そして翌年3月5，6日頃再び那覇で疎開船(貨物船)に乗り鹿児島に行く途中何度も何度も魚雷に合い奄美島の古仁屋に一時避難し、軍の掃海艇と共に機雷を海底に落としながら船団を組み無事鹿児島に辿り着いた。鹿児島に上陸後は大分の狭間村へ行った。学年はもう一度5年生に戻っての授業であった。

終戦は疎開先の部落で聞いた。長崎の諫早収容所に集合がかかり小学校6年生の12月に船で沖縄に帰る事となった。最初は久場崎の収容所暮らし、その後那覇の開南でテントを張りその中に家族2世帯が住んだ。楚辺の材木集積場から板等を取ってきて床に使った。後に2×4(組み立て)の家を真地に建てて移り学校は真和志小学校に編入した。



那覇 10.10.空襲(1944年)

昭和23年6・3・3制となり中学校の一期生となる。当時は中学校をジュニヤと言い、高校をハイスクールと呼んでいた。また小学校は8年まであり7年生から高校を受験出来た。よって昭和8年生は疎開先で旧制中学に通っていた人達は、沖縄に帰ってきたら中学が無いため、すぐ高校へいく事になった。同期でも3～4期の差がでて来るそんな時代であった。中学時には今の栄町が軍のゴミ捨て場だったので、そこから印刷物の紙を拾い裏地の白い部分を使って白紙のノートとして利用した。また受験前の合宿での生活は、各自イモを1個持ち寄ってそれを煮て朝食にした。墜落した飛行機のアルミの破片等を使用していろんな遊び道具を作ったり、ベルトコンベアーの滑車や板を使い車作りをし遊び道具となった。また当時の思いでには小学校の時よく不発弾の爆発事故があり弟もそれで傷を負った。中学生の時には学校の教師になりたいと思ったが教師に理論と実践が伴わない青白きインテリと言われ、また父の影響もあり高校生の頃から歯科医になろうと意識し始めた。首里高校時代(7期)に空手部を作ったり、応援団長にもなり貧しいな

がらも青春時代を謳歌した。大学受験の時にパスポート申請に6ヶ月もかかり最初の受験に間に合わないという事もあった。その後予備校に行き編入試験で近畿大理工学部に合格したが中途退学し、昭和28年に再び大阪歯科大学に受験合格、当時の送金は30＄までと制限があり決まっていた、(ルート1＆＝360円)生活費は月1万8百円、生活するだけで一杯で、学費が納められず学費未納者という事でよく登校停止をくらった。大学3年生の頃アジア財団に奨学金の申し込みをし3千円を援助して頂いたがまだ不足の額は石鹸(ラックス石鹸)やタバコ(うるま等)を沖縄から持ってきて売ったりして稼いだ。病院生の時には患者さんが少なく、同じ九州人会の仲間で患者さんの確保や交換等した思い出がある。昭和34年の11月に安里橋の近くで開業。開業当時は友寄英彦先生が南部支部長(今の会長)をしており金城一史先生の紹介で10日会に入会した、当時は、10日会、21日会、15日会等があり、模合をしたり歯科医師会費を集めたりしていた、友寄先生が年輩だったので私が副支部長に指名された。当時は普天間の県歯会計高良先生のところまで会費を納めに行ったりした。当時は保険制度の無い時代で治療料もドンブリ勘定的な価格であった。例えば義歯作製の場合の抜歯は無料が多かった。1日14～15人で子供は少なく、学校検診が始まってから子供が増えてきた。電気エンジンが主である。16年間安里で開業し道路の拡張工事により今の所に移転し現在に至っている。県歯理事の頃の話で、歯科医師会に金が無くて会議の時等には右ポケットには自分の持ち金、左のポケットには公金を持つという状況もあった。県の総会資料はガリ版1枚で済むような状態であった。復帰前後の時、保険制度が変わるという事で厚生省の保険担当官がみえ、社会保険庁へ行った。当時カルテの原型ともいえるA4判サイズに現在使用のカルテに近い基本的な物が出来上がった。また、当時医療審議会の辞令を頂き特に復帰5月14日から15日にかけて医師会と歯科医師会が県の医師会に多数集まり午前5時ごろまで医療保険について審議討論した事などが復帰前後の思いでとなっている。学校歯科医としては、大道小学校を昭和39年から校医としてみており、当時は今の倍ぐらい生徒が居り、午前中の時間を一週間かけて検診した。久高島へも10名程で検診をしに行った。山崎先生の時は主に南部の各小学校へ派遣された。

現在趣味として、尺八を学生時代から続いてやっている。都山流尺八八楽会沖縄県支部長を昭和40年から任命され現在に至る。昭和34年6月に尺八の教師をし主に自衛官の弟子が多く、今では弟子が師範や大師範が10数名おり全国各地で活躍している。都山流尺八楽会評議委員を20年ほどさせて頂いており、また沖縄県邦楽協会を作り、初代会長を20年間務め、平成7年11月沖縄県文化功労者の奨励賞を県教育長から表彰されたのが印象に残っている。



アメリカから発行された歯科研修証明書

E. 各事業の思いで

ここでは特に、過去の南部地区歯科医師会執行部で役員を務められた先生方の中から、代表して7名の先生方に担当当時の思い出を書いていただく事にしました。担当当時を振り返りながら書かれた文章は、その当事者でなければ判らないエピソードや苦労話もあり、それぞれの先生方の各事業に対する熱い思いが伝わってきます。

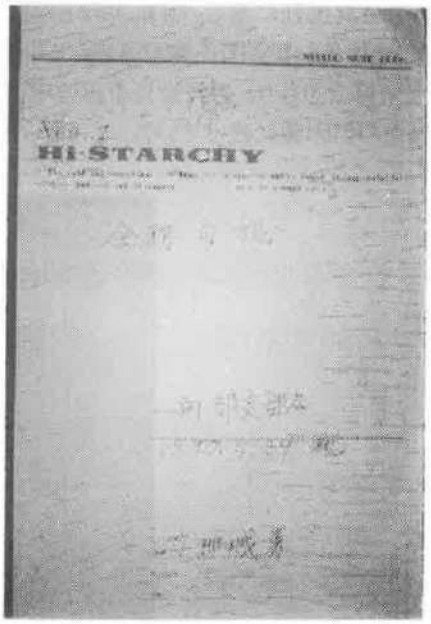
全体的バランスや紙面の都合上、全文を紹介できず、またご提供いただいた数多くの写真の中から一部しか紹介できなかった事をご了承下さいますようお願い申しあげます。

お忙しい中、下記の先生方にご協力いただきました。

① 8年間の監事の目から	宮里 良雄（昭和15年生）
② 那覇市学校歯科保健大会を振り返って	宮城 正廣（昭和22年生）
③ 保険委員会の流れ	屋宜 優（昭和23年生）
④ 初めての理事は会計担当	長濱 正（昭和29年生）
⑤ 厚生の思い出	照屋 均（昭和29年生）
⑥ 広報は会員との橋渡し	友寄 清順（昭和29年生）
⑦ 公衆衛生から地域歯科保健へ	玉城 均（昭和32年生）



(社)南部地区歯科医師会会報



1970年の会務日誌(与那城勇)



那覇市学校歯科保健大会要項

8年間の監事の目から

宮里良雄

私が南部地区歯科医師会の監事についたのは、18年前の玉木史朗元会長から友利政三元会長にかけての8年間で、中村義宣先生(故人)や大城正雄先生と共に監事として会務に関わってきました。

資料をもとに当時を振り返ってみますと、日本復帰した昭和47年(1972年)に70人だった会員数も玉木史朗元会長の年に150人を超え、友利政三元会長の頃には180人と著しい増加をみて過去の慢性的歯科医師不足も解消され組織としても急速に成長する過渡期でありました。

会の予算規模もドルから円に変わった昭和48年(1973年)に230万円だったのが、玉木史朗元会長の年に1000万円台になり、友利政三元会長の昭和62年(1987年)には、2300万円台と約10倍に規模を大きくしています。人数と財産増加は、当然組織の力の向上につながるわけで、単なる親睦団体から脱皮して、学術、保険、税務の講習会や研修会による会員の資産及び経営の向上、小中学校検診は勿論、貴重な会の財源にもなった高校検診、1才半健診、県市町村行政への協力、デンタルフェア及び後述の歯科保険大会等対社会への啓蒙運動、マスコミへの広報活動、医政連を中心とする政治への参加、さらにゴルフ、ボーリング、家族慰安会等の会員相互の厚生福祉活動及び共済事業、会員への低利の融資制度など、多岐にわたる事業が実施され、一般医と比較して評価が決して高くなかった歯科医師の社会的地位の向上に貢献した役割は大きい。

このような活動を通して会としての社会的アイデンティティーを確立するのが急務の重要な時期にあった当時の執行部は、使命感に燃えて多忙な診療のかたわら、日夜会務に精進し、その努力の結晶が現在の会の運営の土台になっていると言えます。

私の在任中執行された事業で特に評価に値する業績の主なものを2、3あげてみますと、まず歴代執行部の懸案事項であった南部地区歯科医師会の社団法人化を実現したことです。任意団体としては、会の財産が年々大きくなり、問題化に直面して、それを解決する道としても社団法人化は緊急の議題であり、当然の帰結だった訳です。

法人として認可されるまでには幾多の紆余曲折があったものの、執行部の忍耐強い働きで日の目を見たことで法律的にも社会的にも認知された人格ある会が誕生し、その後の諸活動の原動力になった事は言うまでもありません。また、特筆に値する事業、第1回那覇市学校歯科保健大会が開催されたことです。これまでのデンタルフェアに加え、公衆への啓蒙運動が新規にスタートしたわけで、この計画の実現には玉木、友利、両元会長の強い意向もさる事ながら担当理事だった宮城正廣先生の熱意と貢献は賞賛に値するものです。

それから、会員の日常診療上、朗報と言えるのが那覇市立病院に口腔外科が開設された事です。この件に関しては、関係者が早くから関係機関に積極的に陳情を展開した結果、実現した訳で難症例のみならず、身近に紹介病院を持てた会員にとっても有益な事です。以上、私の回想録です。



第20回　家族忘年会　年を忘れて今夜も

那覇市学校歯科保健大会を振り返って

宮城正廣

1. 那覇市学校歯科保健大会が誕生した背景

昭和57年、私は南部地区歯科医師会の学術・学校歯科担当理事をさせてもらっていた。また、沖縄歯科研修同好会の役員もさせてもらっており、役員会や定例会での雑談のたびに「最近の子供達に叢生が多いのではないか」ということが頻繁に語られ、臨床現場でも不正咬合が増加傾向にあることを実感しており「歯科医療従事者として何とかしなければならない」ということが話題になっていた。

また時期を同じくして、TBS報道特番で東京大学小児歯科二木武先生、東京大学口腔外科井上直彦先生、鹿児島大学矯正科伊東学而先生、日本大学小児歯科赤坂守人先生等が出演された番組の内容にあらためて危機感を持つことになった。番組では、子供達に噛めない子、噛まない子、飲み込めない子の様なまともに咀嚼が出来ない子供達が増えてきており、乳幼児からの食生活の改善や健全な育成のための保健教育の必要性を訴えておられた。報道番組は益々私共の何とかしなければならないという思いを増幅させることになり、その結果、教育関係者、父母、歯科医療関係者が共に子供達の健康を考える場を作ろうということから浮上してきたのが、那覇市学校歯科保健大会であった。

2. 執行部の対応

当時の会長であられた玉木史朗先生に、大会の趣旨を説明したところ、即座に賛同を得たが、執行部内では一般を巻き込むことに対する慎重な意見もあり、すんなりとはいかず、執行部の酒席で大会が話題になったときは喧々囂々〔ケンケンガクガク〕の議論をしたものである。最終的には会長の方針で大会開催に向けて準備態勢を整えることになった。

大会は企画当初から歯科医師会単独の事業では意味がなく、行政との共催でなければならないという基本的なスタンスから、教育委員会に共催の打診をしたがいい返事はなく、それでも企画書や事業計画書を提出し、種々の開催運動の結果、2年後の昭和60年に第一回那覇市学校歯科保健大会の開催にこぎつけることになった。

3. 忘れられない両会長のことば

私は大会が企画されて開催に至るまで、玉木、友利両先生の元で仕事をさせてもらったが、忘れられない両先生のことばがある。

史朗先生の「ここでやめたら男ではない！」、史朗先生の会長任期満了に対する執行部での慰労会終了後、めずらしく史朗先生から「リッカ正廣桜坂カイ」という誘いに乗ってしまい、史朗先生言うところの昔の彼女の店で飲むことになった。店の名前は忘れたが、桜坂琉映の斜向かいにあり、3～4名ほどで満席になる歴史を感じさせるスタンドバーで、更に泡盛を飲まされてからの話である。史朗先生曰く「宮城、君は理事をやめると聞いたが本当か？」、答えて曰く「私は史朗先生の命により理事に就いたものであり、先生が退任するのであれば、私も辞めさせていただきたく思っています。」、史朗先生語気を強めて曰く「君は大会の企画をしといて、まだ実現もしていないのに、ここでやめたら男じゃない！」、完全に酒が回って反論して曰く「冗談じゃないですよ・・・・」、売り言葉に買い言葉で、友利先生の元で二期目の理事をさせていただくことになった。この様な事情で私が学校歯科保健に関わっていく契機になり、顎口腔機能および機能異常（顎関節症）に趣味を持つきっかけになっていった。

友利先生の忘れられないことばとして「私（会長）が全責任を持つからあなた達は存分に自分の仕事をしなさい」と言われたことばがある。前述のように那覇市教育委員会からの大会共催の承諾の返事は2年後であった。当時も南歯の予算は潤沢ではなく、新規事業に対して積立てをする余裕も無かった（一部の会員からのお叱りもあったであろう）時であり、具体的に実施計画を練れば練るほど財源不足が計画の障害になってきたのである。思案に尽きて会長に相談した時の返事が前述のことばであった。友利会長はことばに違わず那覇市に補正予算を組んでもらい補助金を獲得してこられたのには、敬服したものである。

実行委員会大会に向けて高良政勝先生の助言を受け、実行小委員会を新垣元洋先生、仲里正博先生、赤峯悦生先生と共に手弁当でスタートし、ある程度の骨子が出来た時点で、教育委員会、さらに無償にもかかわらず仲本鈴子先生を中心とした養護教諭会、栄養士会の先生方の協力で実行委員会が組織された。度重なる委員会開催のあと、南歯の多くの先生方に当日の役割を分担していただいて、他に類をみない地域住民参加型

の学校歯科保健大会が実現したのである。ここで忘れてならないのは、大会実現を可能成らしめたのは、執行部トップと理事、会員との信頼関係が確立されていたからできたものであり、南部地区歯科医師会の良き伝統である。

4. ICD(国際歯科学士会)学会での発表

平成元年にICD学会が沖縄県で開催され、高良政勝大会実行副委員長より講演要請があり、那覇市学校歯科保健大会について話すことになった。拙文ながら講演要旨が日本歯科評論1989年8月号に掲載された。一部転載して当時にプレーバックしたい。

「現在、子どもたちの口腔状況は決して好ましいものではない。当地においても、遅ればせながら、学校歯科保健大会や日常の様々の機会をとらえて"口"の健康の重要性を訴えている。世の中が発展するにつれ、また生活に便利さが増すにつれ、その代償として人間にとって好ましい生活環境は崩されてくる。

私は職業柄、その代表的なものが口腔に表れているように思えてならない。健康的な歯牙と確かな咀嚼力、これこそ人々が健康的で文化的な生活を営むことを可能にする源である。治療から予防へ、さらに健康増進へ、本来あるべき姿に人々を位置づけるのは、一に我々歯科医の努力にかかっている。"口の健康が豊かな人生への出発点"であることが理解されて初めて、われわれが望むような歯科医療の場が開けてくるのである。現在はその実現に向かって大いに努力し、来るべき21世紀には、そういう環境下で豊かな気持ちをもって歯科医療にあたりたいものである。

さいごに

大会の趣旨は歯科保健の重要性をいかに社会に浸透させ、子どもたちの健康増進をめざすところにあった。また歯科保健のあり方を地域社会、行政、歯科医師会が共に学習していこうということであった。いまだ道半ばというところであるが、継続は力と信じ今後とも努力すべきであろう。



保険委員会の流れ

屋宜 優

県歯の大半の会員を要する南部地区歯科医師会にとって、県歯の医療保険の問題は、即、南部地区歯科医師会会員の問題として身近に関ってきた。

南部地区歯科医師会の会務日誌には復帰前後の健康保険が現金給付から現物給付に替わる時期の県歯・南部関連の記録が残されている。県歯と一体となって混迷の時代を乗り切った南歯会員の記録である。ここでは南歯の会務日誌をもとに保険関係について書かせていただく。

県歯関連では1971年10月23日健保問題総決起大会、11月15日保険医総辞退記者会見(於 医師会館)、以後年末までは健保対策委員会、健保問題連絡総会等が頻繁にもたれ、翌1972年3月には本土医療保険講習会が開催されている。また会員自身及び家族の国保加入の手続き等も県歯からの伝達により行われている。4月15日には復帰時における医療問題講演会が医師会館で開かれた。5月9日の南部地区歯科医師会運営委員会では、円換算診療報酬表案が承認されている。県歯拡大役員会も開催され、復帰への対応が県歯・地区同時進行で行われた。(1972年南歯会員73人)5月15日本土復帰して沖縄県となり、直ちに本土医療保険制度が施行された。18日には県歯事務所において保険説明会が行われた。6月には九州地区連合歯科医師会会長団を迎えて、保険・医業経営に関する懇親会が八汐荘で開かれた。日歯理事による保険研修会も何回か開催されている。7月15日の南部地区歯科医師会運営委員会で、九州地区保険指導者会沖縄代表に比嘉良有先生の推薦派遣を決め、7月26日に比嘉先生が出張している。これが南部地区歯科医師会会務日歯に記載されている最初の保険関係の県外出張である。8月から国民健康保険に関する連絡協議会が開催されるようになり、また那覇地区医師会長を訪問して国民健康保険に関する渉外活動が数回行われている。10月には南部各支部において、松田技官、比嘉良有先生による保険診療報告研修会が持たれている。11月の理事会において、那覇市・知念村・佐敷町・玉城村・与那原町・浦添市・大里村・南風原町・西原町・豊見城村の国民健康保険協議会委員を推薦決定した。那覇市に関しては今でも毎年国保運営協議会を南歯が推薦している。7月には県歯からの社保指導者会議代表出席依頼により、高江洲旭・山田勲理事の派遣を決定した。これ以後毎年のように南部からの派遣が続いた。



1996年　役員と会員の懇談会

1974年2月の理事会で、糸満市国保協議会委員を推薦した。1974年4月に発足した高良政利執行部において保険担当理事が誕生し、上地健一先生が就任した。(1982年南歯会員140人)保険担当理事の出張費は当初から会議費の旅費から支出していたが、平成2年度からは保険研究費に含めて予算化された。南部にとって少ない予算をさいて出張費を出しています。(1992年南歯会員213人)それにしてもここ10年来の保険改正は目まぐるしく、これを会員に正確かつ分かりやすく説明することは大変な仕事である。毎月の支部会での保険情報の伝達、会員からの質疑に対するきめ細かな回答の準備等、保険委員は頭を抱える事が多い。しかしながら、いくらかでも会員の日常の診療がスムースに流れる様、保険委員会は今後も努力していきたい。(1998年南歯会員233人)

初めての理事は会計担当理事

長濱 正

私は平成3年4月1日付け、新城啓和会長より会計担当理事を拝命。これまで自医院の会計すら、よく目を通したこともなく細かいことが苦手な小生、このような性格で30数年生きた人間が、今さら変わりようもなく何故、このような大役を引き受けたのだろうと後悔ばかりしていたような記憶があります。今流行の洗脳だろうか？

会長と専務に呼び出されたのが事の始まりであった。その席上『会計もコンピューターの時代です。昨年でそのレールを敷く事が出来ました。今年からだれでも会計処理が正確に、しかもスピーディーに行なえます。何も心配することはありません。ただ年2回の代議員会と年1回の総会にて、ほんの少し会員の皆様方の前で喋るだけです。等々…』

単純細胞の小生としては、そこまで言われると断る理由を探す事が出来ません。もちろん必ずしも引き受けなければならない理由もありませんが……。

その結果、日頃お世話になっている新城会長、太田専務のお役に少しでもなればという思いから有り難く仕事をさせて頂く事になりました。ところが、実際には歯科医師連盟理事、那覇地区歯科医師青色申告会理事、県歯財務委員、それに四役会、顧問会、その他の会合への出席を含めるとかなりの時間を拘束されると同時に重責である事が、すぐに理解出来ました。話が違うと思っても後の祭りでした。その後6年間会計を担うことになるわけですが、そのなかで印象深い出来ごとを振り返ってご紹介します。

新城会長時代

この頃から一般会計における予算編成について入会者数、つまり入会金の増減によって左右されるような会計ではよくないと指摘されましたが、現実には前年度繰越金を見込まなければ予算がうまく組めない状態でした。

平成4年度、新入会員20名と予想を13名上回る人数の先生方が入会しました。当然、次期繰越金が多くなります（820万円）。次年度、平成5年度予算においては減価償却引当金支出（91万円）、退職給与引き当て預金支出（102万円）、退職金共済掛け金の増加、これまで貯えておかなければならない支出を単年度で積み立てる事が出来た事になります。

特記すべきことは、この年度に支部振興費等が70万円増額しました。常日頃から言われている南部地区歯科医師会は、会員あっての会である。つまり、支部会あっての会である。支部会の充実が会の充実であるという考えから、会長の強い要望で支部長の重要性、ご苦労を考慮して、支部長手当をこれまでの2倍の10万円に引き上げました。私も賛成しましたが、反面今年度は問題ないが、次年度以降この支出の増額がボディーブローとしてジワジワ予算をひっ迫させられるという思いが、立場上頭をよぎったのは事実です。

しかし、今となって思えばあの時会長の強い思いがなければ現在も以前と全く同じ金額だったでしょう。そして、将来も会費値上げでもしない限り出来なかった事でしょう。

新垣会長時代

理事の負担軽減の為、理事会、拡大理事会と月2回の定例会を拡大理事会1回にまとめましたが、何らかの緊急を要する場合、理事より要望があった場合に臨時理事会を開催するという形態をとるようになったのが、一つの大きな特徴と言えます。

平成7年度、予算編成は特に思い出深いものとなりました。これまで事務費の増加に対してどうにかしなければならないという意見がいろいろございましたが、会長の決断力、指導力によって従来続いていました事務職員給与のベースアップ額（1万円）を抑制する事が出来ました。当時、会長自ら事務職員と何度となく話し合いを持ち、副会長、専務、財務委員等も少なからず関りを保ち、死活問題になりかねないデリケートな問題を何とかまとめました。その時点で臨時理事会を「平家亭」にて行いましたが、予算案件では長時間もめ、1年間の慰労会を含めた理事会は食事にも殆ど手づかずの状態で午前0時30分に閉会した事を鮮明に覚えています。結果的にはベースアップ額7,000円となり事務費総額としては約158,000円程度伸び額を抑える事が出来た計算になります。

また、この年度から事務所費、水道光熱費（60万円）の半額を歯科医師連盟会計から支出し、一般会計の負担を軽減することにしました。その定時代議員会において山田勲議長の挨拶の中で「平成7年度の予算案をこれから審議するわけですが、この会計は非常にスリム化され執行部の努力が評価できます。」というお褒めの言葉を頂き、今までの胸のつかえが消えていくのを感じたのは私一人ではなかったと思います。

今思えば他にもたくさんいろいろな事がございましたが、今後事業の見直し、事務職員給与体制、高校検診料問題等、時代の変化に伴い考え方を再検討しなくてはならない時代にさしかかって来ているように思います。

2期6年間、何のお役にも立てず申し訳ない気持ちと長い間浅学非才な私を支えてくれた会長はじめ顧問の先生、執行部の先生方、ならびに会員の先生方に感謝の気持ちを込めお礼申し上げます。

最後に次期会計担当理事友寄景淳先生のご活躍を期待しています。そして、南部地区歯科医師会がこれまで以上に地域住民の為の歯科保健事業を充実させ、同時に会員のお役に立つことの出来る会に発展していくことを祈念いたします。

厚生の想い出

照屋均

ゴルフ上手？が認められ県の厚生委員になったのが、開業の翌年の昭和59年ですから、かれこれ10数年余り厚生の仕事に携わっていたことになります。当時は九地連大会の初めての沖縄開催があったり、また共済基金運用の年金給付制度を生保を交えて作り上げていた時期で、その後の年金問題のまさに問題化していった経緯を振り返ると隔世の感があり、感慨深いものがあります。県歯が組織づくりから内部充実へと転換を求められていた[そして皆が右肩上がりを信じて疑わない]そんないい時代だったのではないでしょうか。 平成3年からは、いよいよ金城光也先生の後をうけ南部の担当理事を拝命、「委員の楽しみは会員の喜び、会員の楽しみは委員の喜び」という手前勝手なモットーを挙げ2期6年を楽しくも無事努めさせてもらいました。県歯の厚生と違い、対外的仕事や面倒な年金問題等もなく、また融資共済や年間行事などの業務がすでにレール化されていたとはいえ有能な執行部の先生方の適切な側面サポートや、会員の皆様の御協力がなければ・・・・という気持ちいっぱいの幸せな6年間でした。ありがとうございました。

さて、前置きはこの位にして思い出話を交えながら厚生業務のご案内でもさせてもらいましょう。

厚生の仕事は以下の三本柱から成り立っています。

1)疾病等の福祉共済事業

昭和54年からの1才半児健診料の積み立てにより飛躍的に発展した制度です。当初は疾病及び死亡について支給することとしたが、昭和62年からは現在のような貸し付け事業が出来るようになりました。ここ何年かは0.5%という超低金利が続いており、疾病共済とあわせ多くの先生方がその恩恵に浴しており、非常に充実した素晴らしい制度となっております。(詳しくは会誌94年3月号、玉木史郎先生の「南歯今昔物語」をごらんください。)疾病共済金の支給についてはお許しをえられる先生に対してはお宅や病院にお伺いしてお見舞い方々お支払いしたのですが、事例は様々でしたが個人事業主の我々はやはり健康が一番の資本だなと、毎回痛切に感じることが多かったことが印象に残っています。総会時に一度「会員の健康調査」ということでアンケートをとったことがありますが、折にふれ広報等を利用して何らかのアプローチが続けられてもいいのではないかと考えています。

2)融資共済事業

1)でもふれていたように超低金利によりウエイティングありの大人気になっていますが、近年不幸なことに返済不能におちいるケースが出てきています。保証人の問題の改善は私の任期中から課題になっていたのですがやはり早急に改定していく必要があると思います。

3)イベント事業

最も厚生らしい仕事の代表と言えばーそうです、年末一番のお楽しみ、家族忘年会であります。当初「家族慰安会」という名称でした。今年で21回を数えるこの大会、歴史を感じさせるネーミングですね。忘年会で思いで深いのは、やはり「エイサー」によって執行部による余興が定着したことでしょう。当時小禄支部長だった赤峯秀紀先生の発案で行われ、最近ビデオで見たのですが、会場の熱気と興奮が画面からもビンビン伝わり、「最高ヤッサー、ワッター余興ヨー！」とうなずくほどの出来栄え、しかしそれ以来、厚生委員は「今年は何をやろうか」と頭痛のタネとなっております。単なる楽しみ事にとどまらず、会のありようを内外にアピールし、会そしてデンタルファミリーの活性化という意味からも、これからも続けてほしいものです。厚生の先生方、これからもよろしく頑張ってね。

イベント事業の2番目は、球技大会。12回を数えるこの大会も確か、2回目までは名称のようなバレーやソフトボールのような屋外のスポーツ大会でしたが、やれ場所が、準備が、雨が降ったりetc・・・・問題が出た事は、何より淋しいものがあります。このイベントは会員の為、というよりもパラデンタルスタッフのためという位置づけがなされています。ぜひ多くの医院の参加をあらためてお願いします。

最後にゴルフ大会にいってみましょう。友利会長時代に定例化したゴルフコンペ60回に向けて回数を重ね、ますます盛り上がりを見せていますが、就任時の頃はゴルフ場の予約という難題がありました。バブルの余波残りし頃で、DGAの予約もわざわざヤンバルまで早朝、予約を取りにーそれも平日の診療のある日に行ったものです。

今考えると異常ですが、当時はそれが当たり前の時代だったのです。南歯のコンペ予約ではこんな事がありました。琉球ゴルフクラブの予約のために私は3時起床、

3時半に所定の用紙に8名の名前を書いて待つこと4時間余り、そして受付の8時までに他の7人のメンバーは来てもらい予約を取るという難儀なことをやったのです。その日の夜の理事会、どんなにどやしつけても眠ってしまう幼児のように深い眠りにおちてしまった私はやはり、理事としての自覚が足りなかったのでしょうか。そしてコンペ当日‥‥台風襲来です。ヤシの木も折れんばかりの風雨の中、ゴルフ場の駐車場で、玉城吉康先生と2人で「みんな根性ねーなー、でもやっぱり中止かな、カラオケでも歌いに行くか‥‥」

日頃、カーボランダムポイントのように身を粉にして会務に励み時々はバカになりながら自らも楽しむ厚生委員、皆様の楽しみの陰にはかような隠れた努力があるのです。

以上、長々と書きつらねてきましたが厚生の仕事、少しでも御理解できたなら幸いです。これを機会により一層の厚生に対するご支援、御協力の程、よろしくお願い申しあげます。



1995年海邦ゴルフ　今日の優勝者は？



1983年家族慰安会　伊礼昭洋先生のご家族



1992年家族忘年会　さて中味はなんでしょう



第20回　観客も一緒

広報は会員との橋渡し

友寄清順

私を広報担当理事の役職にどうかという話が出たのは、平成6年3月の初め頃だったと思う。前任の玉城生夫先生が当然2期やるのだと思っていた。私は当時新城執行部で那覇地区担当理事をやっていて、支部会があると、那覇市内の支部4ヵ所で三役が回れない所を回り、会や執行部からの執行事項等を説明伺いする役目で何もしないおいしい理事であった。

平成5年度の通常総会の場で、広報理事を優柔不断の性格故に引き受けてしまう羽目になり、それで委員をどうしようかという事になった。玉城生夫先生からの助言もあったが、この際私も経験がないのだからと、支部会で仲の良い先生を中心にし、そしてその先生方と馬が合う先生に委員をお願いしようと思った。最終的には上原慎二・小場幸男・仲本友久という先生に決定するのだが、この3人、実に面白い先生方である。普通は4人揃って委員会という事になるのだが、どうしてもアルコールが入る会になってしまう。それでも就任した月には4月号として、会誌を発刊しなくてはいけなかった。そこで、前任の玉城先生、会誌を印刷・製本してくれる「ちとせ印刷」の平敷君を含めた6人が集合する事になったが、その集合場所がすごい。なんとハーバービューホテルのロビー側の喫茶店であった。そこで赤鉛筆を持って、集まった原稿の校正をしたのである。このようにして我々新しい委員会による「第1回南部地区歯科医師会だより」が出来上がったのである。しばらくして2回目の委員会で、他県の会誌や九州八市の会誌はどのようなものかという話になり、その結果、どこにもない読みやすくて誰でも参加できる会誌にしようという事になった。それでは、思い切って、会誌の表紙題から変えてみたらどうかとなった。5月の理事会での委員会報告でこの話を打診したところ、なんと三役がOKを出した。私自身「本当にいいの？」と言う感じであった。6月の理事会では、太田副会長・山川専務からも、名前はどうなっているのかと聞かれたりもした。早く理事会の承認を得なければいけないので、委員会を開く度に、名前をどうするかを一生懸命話し合った。当初「綾羽」「水平線」「青波」の3つの案が出た。しかし、会誌は九州八市に送るのだから、沖縄の南部地区からと分かるものに、そして飽きられる事無くいつまでも続くような名前にしようということになった。

「綾羽」の「綾」には沖縄の方言で、「希望」という意味がある。私の先輩の金城一史先生の行き付けの店でもこの名が使われており、金城先生がいつも「これはカリー」と言っていたのを覚えていた。そして、羽がついたのは、沖縄の方言で「アヤハーベール」と言う言葉が綺麗な蝶々と言う意味であるが、これも「カリー」の言語だそうだ。「水平線」は、沖縄的イメージで何処までも果てしなく意味深く。「青波」は、沖縄の青を強調して、台風の如く力強く。

この3つを理事会に提出したところ、すんなりと「綾羽」に決定となった。委員会に持ち帰り、名前負けしないように8月号の原稿集めや、表紙のデザインはどうしたらいいか等と色々悩んだのを今でも思い出す。これらも新人理事の私に三役が好きなようにさせてくれたお陰であり、又、この様な南部執行部のあり方が私は好きである。そしてこのような形を作り上げてこられた歴代の執行部に感謝したい。



1998年　那覇市学校保健懇談会



広報委員と関係者

公衆衛生から地域歯科保健へ

玉城　均

南部地区における公衆衛生活動の思い出を語るときに、まず最初に口から出るのは、デンタルフェアでしょう。県歯主体で運営していた時期から数えて22回（平成10年現在）となる息の長い活動です。会員の誰もが、愛着と自信を込めて「デンタルフェア」と呼ぶこの活動が、これほどまでに市民に浸透した要因は、会員の『歯の衛生』に対する熱意がこの事業を船出させたことと大きく関係があるでしょう。行政が言いだしたからでもない、誰かにお願いされて同調して始めたわけでもない。生きて行くうえで『歯の衛生』が大切なのだと伝え続けた一徹さと行動力が、いつしか市民に受け入れられて、今に至ると手前みそながら思っています。最近では歯科の関係者だけでなく、栄養士会や大学の学生らが熱心に参加してくれる様子や、会場がごった返しているにもかかわらず、先生と相談者が楽しそうに健康談義をするのを見て、もう立派な市民活動だなとほほ笑みながら言った年配の来場者がいたことを思い出します。



1987年　デンタルフェアにて

前述のように1977年に県歯主催で始まったデンタルフェアですが、1988年からは各地区の主管事業となって現在に至っています。しかしながら、南部地区としては那覇で始まったデンタルフェアという歴史を大事にしたいと考えています。それが南部地区各会場で行われる創意工夫に表れているし、各会場担当者の自負でもあるのです。別項の南部地区デンタルフェアの経過と第14回デンタルフェアオリエンテーションの内容をご覧いただくと、事業開始当時の様子が伺え興味深いものがあります。第14回（1990年）当時、増加する新入会員と共にデンタルフェアの意義と熱意を共有したいという執行部の考えから企画されたオリエンテーションであったと記憶しています。先輩諸氏が熱く語った一夜でした。今は亡き、下地則一先生と中村義宜先生のお話しがテープの都合で十分に記録されていないのは、残念です。後日、デンタルフェアの担当者反省会に中村先生が公衆衛生OBとして参加されるのが恒例になっていて、席上ビールの泡を飛ばしながら、パネルを床に平行に設置する極意を伝授してもらったことを思い出します。さまざまな経過を辿ったデンタルフェアです。会場が 4会場に増え、会場も移り変わり、開催日数が変わりました。初期の頃は、6月4日の「歯の衛生週間」スタートの日を中心に4～5日の開催でしたが、他の地域歯科保健事業の増加や来場者の利便性等を考慮し、「歯の衛生週間」中の土日に開催する傾向になりました。1997年からは一日開催となっています。それに伴って、やはりメディアに対しては6月4日の「歯の衛生週間」スタートの日は、大きくアピールしやすいということから、南歯から県歯にお願いして、特に6月4日にメディア対策をしてもらうこととなり、1998年から実行されました。



第8回デンタルフェア浦添　よい歯の子ども表彰式

この10年来の、デンタルフェアの大きな思い出としては、先生の着衣を白衣から自由にしたことと、“歯に信頼の傘マーク商品（お菓子）”を全国に先駆けて紹介したことでしょう。1995年に初めて、先生の着衣を白衣から自由にとの企画を皆様に相談したときは、大変なお叱りを受けました。医師のシンボルの白衣を着けないとはどういうことだとか、衛生面で問題があるとか多くの指摘を受け困惑しましたが、来場者と気安くお話しをする雰囲気作りを主眼に実行しましたところ、意外に先生方と来場者に好評で今日の様な状態となっています。もちろん最終的な判断は、先生個人にお任せしていますが、大方の会場で白衣を着けないで、デンタルフェアに望む方が多いようです。先生と来場者が指導・啓蒙という上下関係から、相談するという隣り合った関係になることが意識されてきたのかもしれません。“歯に信頼の傘マーク商品（お菓子）”の紹介は1996年からでした。デンタルフェアとは別に、南歯は那覇市学校歯科保健大会という大きな歯科保健（公衆衛生）活動の場を持っています。噛むことの大切さを考え続けた活動ですが、その

中で、単に噛むという運動機能だけではなく、「食育（食べることを学ぶ・教える）」ということを学習する機会がありました。口腔衛生の立場から、片寄った食事の是正や甘味の制限といった、歯科では制限の処方を中心に考えてきた訳ですが、食育という立場に立つと、制限するばかりではなく、健康づくりのための食品を自ら選択する能力を育てなければならないことに気が付き、その手初めとして、甘味を考察するうちに“歯に信頼の傘マーク商品（お菓子）”にたどり着くことになります。しかし、最



1997年　健診もにこやかに

初から“歯に信頼の傘マーク”をターゲットにしていたのではなく、とっかかりは、キシリトールを紹介することを目標にしていました。今でこそキシリトールがう蝕抑制に効果が高いことを皆さんが承知して、久しぶりの業界ヒット商品となっていますが、当時は公衆衛生関係者の間で僅かに話題にのぼるだけの存在でしかなく、また厚生省の認可が得られていませんでしたので、ヨーロッパから個人で手に入れるしか方法がありませんでした。困り果てていた時に、友利隆俊先生を介して、東京歯科大学口腔衛生学講座の松久保・真木両助教授にご相談したところ、国内でのキシリトールの入手は困難だが、オリゴ糖中心の“歯に信頼の傘マーク商品”なら日本トゥースフレンドリー協会を通して、業界を紹介していただけることとなりました。全国的にも“歯に信頼の傘マーク”を歯科医師会が市民に紹介することは初めてであるとのことで、多くのメーカーに商品の提供をしてもらいました。大きな箱15個に詰められた各種のお菓子を、徹夜して4000袋のビニールに袋詰めして来場者用に設置しましたが、単純な作業ながらも大変な作業で、小人数では二度とやるものではないと心に決めたことだけは強く覚えています。たとえ、う蝕予防に役立つとはいえ、歯科医師がお菓子を配ることで、市民に誤解を与えてはいけませんので、十分で適切な情報を提供して理解してもらうように配慮しながらプランを実行したのはいい経験でした。大方の皆が共有している情報をさらに高度にするために繰り返し情報提供することも大変ですが、これまでとは考え方が異なったり、価値観が変わるような情報を提供するときには配慮せねばならないことがいかに多いかを知る良い機会でした。この翌年の春、厚生省の認可を受けたキシリトールが日本デビューと同時に爆発的な売れ行きを示したことは皆さんご承知のとおりです。

南歯の公衆衛生活動の中心は長い間デンタルフェアと乳幼児歯科保健でした。う蝕予防の啓蒙活動と乳幼児歯科健診が公衆衛生活動の中心を占め続けたのには、子供たちのう蝕があまりにも多く、社会問題になっていた時代の特徴としてとらえることができます。しかし、最近では、社会情勢の変化や疾病構造の変化にともなって歯科の公衆衛生活動の在り方にも変化がでてきました。歯周病の解明、高齢化社会の到来などからライフステージにそった歯科衛生実践の考え方が導入され、8020運動を推進することが私たちの目標になりました。その最中に、疾病予防的な衛生という言葉から、健康づくり・健康の保持ということに観点をおいた保健という言葉に意識が変わることになります。保健所法を地域保健法に改めた眼目もそこにありますし、さらに地域で健康づくり・健康の保持に取り組むということで地域保健・地域歯科保健という呼称となってきました。南歯もこの意図をくんで、長く慣れ親しんだ公衆衛生委員会を地域歯科保健委員会と健康づくり推進対策委員会とに二分して、名称を改め、機能性を高める組織配置にしたのが1997年 4月からの組織改編でした。さらに近年、歯科保健を推進するためには専門集団としての歯科医師会だけが懸命になっただけではだめで、広く地域・行政との共働がポイントであるとする考えが主流になってきました。地域歯科保健の必要性を整理してその推進を図るには、なぜ今歯科保健か？　なぜ市町村で歯科保健か？　なぜ他の事業もあるのに（こんなに忙しいのに）歯科保健か？　を考えつつ地域や行政とパートナーシップをとることが必要とされることから南歯においても、以前にも増して、行政との連携が増えています。政策提言の場にでることが増える一方で、歯科医療・保健の専門職としての明確な意思表示が求められているというのが、最近の実感です。1997年から地域歯科保健・健康づくり推進対策・学校歯科保健・学術・公報委員会を中心として合同委員会を設定し、各部署の課題や問題を研究・検討する場をもって活動しているのも、そういった時代要請に知恵を寄せ合って答えを見つけたいという考えからです。

南部地区歯科医師会として、地域保健法・母子保健法改正に伴う3才児健診の市町村移行に対応すべく、平成6年度から情報の収集、行政・保健所との意見交換をしてきました。これは、地域のことは地域が担って行くという原則をとっていましたので、1才半歯科健診同様に地区の歯科医師会が市町村と調整する問題として当初はとらえていました。また、保健所としても1才半児健診同様に地区歯科医師会がやっていくという方向を支持していたし、さまざまな意見交換の間も他の組織の介在については言及していませんでした。また、どんなに事前調査をしても、3才児健診の国庫補助の額、実施方法等がなかなか国より示されないため、市町村の態度がかたまりにくいという状況続きました。法改正によっ

て県の業務が市町村に移行するとはいっても、マンパワーの確保等の問題から市町村としてはどうしていいか困っているという感じで、平成6・7年度・8年前半まで賢明に市町村の方向を探りましたが、3才児健診の事業方針が示されないままに経過しました。

そうこうしているうちに、平成8年6月になって急に沖縄県小児保健協会が3才児健診を取りまとめるという話がでてきました。沖縄県小児保健協会から県歯科医師会に話があり、県歯が動き出しました。6／28の地区会長会に沖縄県小児保健協会の役員が参加して「沖縄県小児保健協会のコーディネイトの下に歯科医師会会員が3才児歯科健診を行う」案の説明をしました。その要点が南歯発第67号『3才児健診に係る予備的ご報告について』として7月15日付けで南歯会員に郵送にてご



1997年デンタルフェア　とまりん入場受付

連絡したものです。その席上、沖縄県小児保健協会は県下のほとんどの市町村に話はつけてあり、市町村側からの要望により3才児健診に参入していくとの説明でした。これに対し後に8／30那覇市医療協議会で、那覇市保健衛生部長（野原氏）は沖縄県小児保健協会からの強い働きかけにより沖縄県小児保健協会に委託することとなったと述べています。その真偽は別として、沖縄県小児保健協会の申し出を県歯が仲介として各地区との調整もないまま地区会長会に出し、また、沖縄県小児保健協会と協力して事業推進していきたいとの態度表明をしたのであれば、本問題は県歯主導にておこなわれるものと南歯は理解しました。一方で、南歯は、各市町村と1才半児歯科健診をとおして長く保健部門の協力関係にありますので、沖縄県小児保健協会がどう表現しようとも、市町村の意向を直接把握する必要があるということで、当該市町村にアンケート質問を行いました。9／10南歯拡大理事会にて配付の資料（3才児健診についての市町村へのアンケートに対する回答）がその結果ですし、そのなかの那覇市の回答を見ると、この時点で沖縄県小児保健協会はすでに、那覇市に対し3才児健診受託に際しては歯科は沖縄県歯科医師会との協力を取り付けてあるとしたことが伺えます。

従って本件について南歯は、会員の意見取りまとめの任になく、県歯の方針を南部地区会員に伝言することはできますが、沖縄県小児保健協会の下で3才児歯科健診をすることの是非を会員に決裁を仰いだり、具体的内容を説明することはできませんでした。（7・8月支部会にて本件は伝達済み）後の作業としては、県歯が直接会員に事業内容を説明して、3才児歯科健診への参加・協力を要請し会員の生の声を聞いていくことを見守ることでした。アンケート質問で返答のないところや1才半児歯科健診と同様の方法を望むとした市町村も最終的には沖縄県小児保健協会への事業委託ということで決着しました。本件で、南歯が終始主張したのは、改正地域保健法の趣旨は、「地域の保健サービスは地域の手で行う」ものであるということです。3才児健診の市町村移行を期に、各地域ごとの8020運動を推進する足掛かりとして位置付けていました。そういった意味から、民間委託の形が全県的に画一的になることへの疑問と、規制緩和と地方分権、つまり地方（地域）の独自性の発揮という観点に曇りが生じると解釈しています。せっかく地域の実状に合わせた乳幼児保健のシステムづくりを実践できる機会であったのに、地域の市町村自体がそのチャンスを見逃してしまったのではないかと考えるのです。市町村や地域と歯科医師会を含む地域の関係団体の機運が熟していなかったのでしょう。今後この問題によって、法改正の意義を失わせた一面が出ることが懸念されます。

しかし、直接的に3才児健診に関与できずとも、ライフステージに沿った8020運動を分断することはできません。3才児健診においても、南歯会員のサポートを続けることで地域歯科保健を推進していくという南歯の意志に変化がないことを強調しておきたいと思います。

F. 夫人部の活動を通して

生涯つき合う仲だから

夫人の会代表　高良ミチ子

〈芽ばえ〉

一生つき合って行く仲間なんだから…と南部地区歯科医師会会員の夫人たちが連携と親睦を目的に自主的に集まりを持ったのが昭和53年頃だったでしょうか。組織づくりというほどの事でもなく、医院経営について共通理解や情報交換の場にでもということで、当初は中、北部にも声をかけ合っての集まりで、それぞれの地域事情の違いなどお互いに興味深く話し合っていたものです。その後3年程して距離の都合もあって地区ごとに分離、南部は模合を軸に毎月集まるメンバーが定まってきて、活動の中核として世話役を重ねて来ました。



日本の年中行事と作法についての学習会

〈講演会が学習と交流の場に〉

昭和60年から会活動を育成するということで、南部地区歯科医師会から助成金が支給されるようになり、その有効な活用法を皆で真剣に？考えた結論は、講演会を継続的に実施していこう、という事でした。

他人様の口の中で、宇宙観や人生観を組み立てながら日々診療に打ち込んでいる我が夫に〝口腔外界〟の空気を送るパイプ役として雑学を仕入れてくるのも良妻の条件の一つであるはず。諸々のことにハイクオリティーが要求されてくる世の中で、社会的信頼と評価の高い医院経営を維持して行くためには、先生方の努力と共にそれをサポートできるだけの夫人たちの資質も大切な要素となるはずで、その向上を目指す機会を作ろうというわけです。

10数年に亘って続いている講演会はその都度次のステップへの学習意欲をそそられているような素晴らしい内容でした。参加者も個性豊かで、司会役や感想発表など見事に努めてくれたり、会運営の段取りを進める姿の端々にキラリとそのセンスを輝かせる瞬間があったり、単なるおしゃべりにしても実に楽しい表現力を発揮してくれたり、和やかにすすめられる雰囲気はお互いの交流の場としても好評で、先生方にも我が妻のもう一面を見ていただきたい一時です。またその感想を南部地区の会報へ投稿した夫人たちの

文才もなかなかなもので 改めてお互いの能力を再認識したものです。

〈諸活動を通して〉

全国区国会議員の応援を主として選挙運動にも一役買って来ました。関口恵造先生(昭和60年)、木暮山人先生(平成元年)、中原爽先生(平成7年)などその都度、県歯科医師連盟の依頼を受けて候補者との懇親会を開催して来ました。集票活動や電話戦術など、今は各医院でまとめていますが、かつては夫人の会も当番制で何日間か事務局に詰めて頑張っていたものです。又、慣れない応援弁士を務めたり、元リウボウ前で20人程が勢揃いして、白いスカートと白いブラウスという白案のユニフォームでの呼びかけ活動は、後々まで自他共にのさわやかな話題でした。



仲原爽先生との懇親会

これまで親睦活動として、新年会やボーリング大会、北海道雪まつり(昭和54年)や奥入瀬の紅葉まつり(昭和63年)など見学旅行も実施、それぞれに楽しい想いでを振り返ったりしていますが、そのうちに又企画したいと話し合っています。

色々な企画に参加した方々があれだけ感動するのに参加者数が少ないことが悩みで、あれこれと方策を講じてみても今一つです。歯科医師会の支部組織のように地域を基盤にして世話役を置き、そこでのコミュニケーションに支えられた活動にしたいものです。又、先生方の〝婦人部〟と混同しないようにと〝夫人の会〟になっていますが、その婦人部との接点も持てたらと思っています。

夫人の会　講演講習会

月　日	テーマ	講　師	場　所
昭和　60．1.28	税と医院経営	慶田城照子	サンパレス
60．7．6	院長夫人としての心得とスタッフ教育	荒川寿子	西武オリオン
62．8．5	生活に活かすファッションセンス	金城文子	西武オリオン
平成　1．6．28	家庭で手軽につくれる琉球料理	松本嘉代子	高良宅
1.10.20	効果的な税務と相続、贈与税の活用法	石原洋	山市ホテル
2．9．5	感性を知性で着る	仲宗根和子	東急ホテル
3．4.25	しなやかに個性、のびやかに男と女	幸喜徳子	サンパレス
3.11.12	家庭管理とケーキづくり	比嘉弘子	比嘉宅
3.11.21	人の心をとらえる話し方	伊良皆善子	ｸﾞﾗﾝﾄﾞｷｬｯｽﾙ
4．9.29	首里城と琉球の文化	崎間麗進	ｸﾞﾗﾝﾄﾞｷｬｯｽﾙ
5.11.21	私の歩んで来た道	仲井間文子	ｸﾞﾗﾝﾄﾞｷｬｯｽﾙ
6.10.12	日本の食文化とマナー	久保田照子	都ホテル
8．6.14	しなやかにしたたかに―沖縄の女たち	崎山律子	ｸﾞﾗﾝﾄﾞｷｬｯｽﾙ
10．4.24	日本の年中行事と作法	端慶覧侑子	ｸﾞﾗﾝﾄﾞｷｬｯｽﾙ

G. 戦後の通貨交換と当時の歯科治療費

沖縄の戦後の経済発展と通貨切り替え

戦後の沖縄の経済発展と通貨切り替えは、収容所時代の食料配給、帰郷、国内外からの引き揚げ、廃虚からの復興、ヤミ市場、戦利品、密貿易等と他に例を見ない生活を出発点にしている。その中で特記することは、アメリカ統治時代、日本円軍票、新日本円、B円、ドル等と通貨切り替えが我々の生活に密着した時代であった。このめまぐるしい貨幣の動きは我々医療人も同様、戦後の動乱期を象徴している。昭和20年6月23日（慰霊の日）を境に組織的な戦闘が終わった沖縄戦は、約33万人の人々が壕や洞窟や墓の中から着のみ着のままで、米軍に収容された。戦火が消えたとは言え、沖縄の山河を目の当りにした住民はその変貌に新たな不安を感じながら家族を探しそれぞれの収容所での生活に入る。最小限の食料と衣類が配給され、そこで最初に覚えた英語は『ギブミー』で、ギブミー民族という言葉が生まれたのも今では笑い話になってしまった。

当時は生産する力もない状態で米軍の配給物資に頼り、命をつなぐ生活であった。しばらくして落ち着いてくると、共同作業で芋掘りを行い毎日の食料もアメリカ兵の余剰物資で賄われるようになる。お互いに通貨がなく物と物とを交換するいわゆるバーター制が行われた。時が移るに従って住民の希望者には職が与えられ特別配給品を支給される米軍関係の仕事が羨望の時代にもなる。昭和20年秋頃になると、次第に収容所から故郷に帰る事が許された。

1946年（昭和21年）1月29日GHQは日本と南西諸島の行政分離を宣言し、4月15日～28日に第一次通貨交換が始まる。今まで携帯していた僅かばかりの旧日本円は新しい法定通貨1対1に交換された。この年、九州や本土に疎開していた県民の帰還が始まり、住民は新円を持参してきた。一時期、B円と並んで流通することになる。1946年8月になると再び第二次通貨交換が施行され、沖縄本島に限り新日本円を発行することになった。医療従事者は、全員が公務員であり歯科医師の月給は310～400円であった。当時はヤミ市が出回り極端に物資が欠乏している為、戦後の飛行機の残骸を利用し、あるいは薬莢を改良し、コーラのビンを代用し生活の中に取り入れたり、戦果と称して米軍の物資を失敬したり、大胆には密貿易も関与していた時代であった。このように住民の生活力は雑草の様に逞しく次第に経済の活性化を増進してゆく。

1948年5月1日米軍政府はインフレを抑制するために又正常な経済発展の為に琉球銀行を設立した。当時は51％の株を米軍が保持していた。これを契機として第三次通貨交換が7月16日に施行全沖縄統一で法定通貨として定めた。いわゆる本格的なB円は最初為替レートが1ドル対50円だったが、1950年4月12日、B円の為替レートが1ドル対120円に設定され一本化された。このように待望の民間の貿易もスタートし以後は生産設備の再建や住宅の復興に向かっていく。B円時代は米国ドル交換施行まで10年余も沖縄の流通貨幣としての役割を果たしており、当時は琉球大学開校、琉球政府発足、日本政府那覇南方事務所を開設、土地闘争の激動期でもあり、基地経済拡大期でもあった。

歯科医療については1948年貨幣経済再開に伴い医療費も有料となり1950年代になると自由開業への働きが企みられ、配置制度の問題等、文字通り経済発展の荒波の中で戦後の一時期を生き抜いて行くようになる。

1954年には念願の自由開業を迎える事が出来た。1954年～1966年までは、医療保険の問題について草案作りから審議会までいろいろ検討されたがすべて自由診療になってしまう。1958年9月16～20日、B円と米国ドルとの通貨交換が始まる。今まで慣れ親しんだB円を関連銀行に持参し交換が始まると金融機関はものものしい警戒で緊張し、住民は新しいドル通貨での生活に不安を持ちながら、また今後の通貨に期待を抱いて交換の行列をなしている。かつては、米軍雇用者への給与がドルで支払われ基地外へ出る時にB円に交換されていたが、次第にドルは民間でも流出しB円が完全にドルの裏付けをもつことができたので、米国のドルを沖縄に適用させることになったのである。

医療保険においては、1965年皆保険を目ざしていたが、官公労などの組織化された事業所のみで一部の人のみの保険になってしまう。1969年に本土復帰が決まると現物給付保険へ移行する準備体制に入る。1972年日本復帰に伴い約14年間沖縄経済を支配し続けた米国ドルも5月15日から日本円と通貨交換が対レートは1ドル305円と定められていたが、71年10月9日付けで、確認された個人が保有しているドル現金については、360円との差額が保障された。戦後5度目の通貨交換であった。

当時の歯科治療における料金一覧票を参考に掲載して置く。

1948年(昭和23年)3月25日沖縄民政府令8号の中の歯科料金表

(1950年8月23日日付沖縄知事　志喜屋孝信)

1.診察料	初診10円
2.入院料	A　1日20円(食事を含む) B　1日10円(診療所給食せず)
3.手術料	50円以上1,000円以内
4.薬　品	1日1剤10円
5.往診料	20円以上50円以内
6.注射料	10円以上50円以内
7.レントゲン写真料	20円以上200円以内
8.処置料	5円以上50円以内
9.抜歯料	1歯ニ付20円以上100円以内
10.充填	1歯ニ付20円以上100円以内
11 義歯　片顎 上下顎	200円以上600円以内 500円以上1,000円以内
13.歯科処置料	3円以上100円以内
14.文書料	1件ニ付10円以上50円以内

1964年(昭和39年)当時の大阪市学校歯科医会会報に記載された沖縄の歯科治療費

処　置	料　金
単治	0.25ドル
抜髄根充	0.40ドル
抜歯	1ドル
ア充	2ドル
冠	13ドル
総義歯	30ドル
義歯　1歯 1歯増	5ドル 1ドル



B円(軍票)



1958年　ドル交換(B円からドルへ)

一般診療料金表　1

昭和48年当時

項目	種別		円	ドル	項目	種別		円	ドル
診察	基本診療料		¥450	$1.50	手術				
	時間外加算		¥200	$0.67	抜歯	乳歯		¥750	$2.50
	深夜加算		¥550	$1.80		前歯		¥750	$2.50
	乳幼児加算		¥200	$0.67		臼歯		¥900	$3.00
投薬						難抜歯		¥2,000	$6.60
	内外含		¥150			特難		¥2,600	$8.50
	頓服		¥150		消炎	口腔内手術	単純	¥2,000	$6.60
注射							複雑	¥3,600	$12.00
	皮・筋		¥150			口腔外手術	単純	¥3,600	$12.00
	静脈		¥150				複雑	¥7,200	$24.00
X線						腫瘍摘出	単純	¥7,200	$24.00
	標準		¥550	$1.80			複雑	¥36,000	$120.00
	咬合型		¥1,100	$3.60		顎骨骨折	単純	¥36,000	$120.00
	キャビネ		¥2,000	$6.40			複雑	¥54,000	$180.00
	読影料		¥400	$1.30		歯肉息肉除去		¥750	$2.50
処置						頬唇帯整形手術		¥5,400	$18.00
	普通処置		¥300	$1.00		舌小帯整形手術		¥9,000	$30.00
知覚過敏（ｻﾌｧﾗｲﾄﾞ）			¥300	$1.00		歯根端切除		¥7,200	$24.00
知覚過敏（イオン）			¥400	$1.30		外歯瘻手術		¥9,000	$30.00
	根管治療	単純	¥300	$1.00		脱臼整復術		¥1,500	$5.00
		複雑	¥350	$1.25					
	抜髄	単純	¥550	$1.80					
		複雑	¥750	$2.50	充填				
	根充	単純	¥550	$1.80		アマルガム	単純	¥1,300	$4.30
		複雑	¥750	$2.50			複雑	¥1,500	$5.00
	歯髄切断	単純	¥550	$1.80			研磨	¥300	$1.00
		複雑	¥1,500	$2.50		複合レジン		¥3,600	$12.00
	即日根充	単純	¥900	$3.00	ｲﾝﾚｰ	金合金	単純	¥5,500	$18.00
		複雑	¥1,100	$3.60			複雑	¥7,200	$24.00
	歯髄覆罩		¥300	$1.00		金パラ	単純	¥3,600	$12.00
	P処置 1/3顎		¥300	$1.00			複雑	¥5,500	$18.50
	除石 1/3顎		¥500	$1.50		その他	単純	¥2,500	$8.00
	Pcur	単純	¥600	$2.00			複雑	¥3,500	$11.70
		複雑	¥2,000	$6.70	金合金	ﾎﾟｽﾄｲﾝﾚｰ		¥16,000	$33.00
麻酔									
	浸潤麻酔		¥300	$1.00	修理				
	伝達麻酔		¥500	$1.70		床破折		¥2,000	$6.70
						補強		¥750	$2.50
						1歯増毎		¥750	$2.50

一般診療料金表　2

昭和48年当時

項目	種別		円	ドル	項目	種別		円	ドル
補綴		義歯			Cr－Br				
	局部義歯					乳歯冠		¥2,000	$6.70
	1床1歯ﾚｼﾞﾝ		¥2,500	$8.50		継続歯			
	1歯増す毎に		¥750	$2.50		金裏装		¥13,000	$43.00
						その他裏装		¥9,000	$30.00
	総義歯　床	ﾚｼﾞﾝ	¥12,000	$40.00		レジン冠		¥7,200	$24.00
		A	¥15,000	$50.00		ｼﾞｬｹｯﾄ冠			
		B	¥22,000	$73.00		ﾚｼﾞﾝｼﾞｬｹｯﾄ		¥7,200	$24.00
						硬質レジン		¥13,000	$43.00
	リベース	単純	¥3,600	$12.00		ポーセレン		¥22,000	$77.00
		複雑	¥6,000	$20.00		アルミナス		¥25,500	$85.00
						ﾎﾟｰｾﾚﾝ焼付		¥36,000	$120.00
	ｸﾗｽﾌﾟ　(鋳)								
	金合金				金属冠				
	小臼歯		¥7,500	$25.00		金合金	鋳造冠		
	大臼歯		¥9,000	$30.00		小臼歯		¥18,000	$60.00
	金パラ					大臼歯		¥21,600	$72.00
	小臼歯		¥6,000	$20.00		金合金	咀嚼冠		
	大臼歯		¥7,500	$25.00		小臼歯		¥14,500	$50.00
	特殊鋲					大臼歯		¥18,000	$60.00
	双歯鉤		¥2,000	$6.70		金パラ冠			
	レスト有		¥1,500	$5.00		小臼歯		¥7,200	$24.00
	レスト無		¥900	$3.00		大臼歯		¥9,000	$30.00
	フック等					その他合金			
	特殊鋼		¥750	$2.50		クラウン		¥2,200	$7.40
	金パラ		¥2,550	$8.50	支台築造				
	金合金		¥3,600	$12.00		アマルガム		¥1,300	$4.30
	バー					金合金		¥2,200	$7.40
	特殊鋼		¥3,600	$12.00	ダミー				
	金パラ		¥14,500	$48.00		金合金			
	金合金		¥20,000	$66.00		前歯		¥11,000	$37.00
						小臼歯		¥14,500	$48..00
	保持装置		¥750	$2.50		大臼歯		¥18,000	$60.00
	金属床					レジン			
	コバルトクロム					前歯		¥2,900	$10.00
	全部床		¥40,000	$130.00		小臼歯		¥3,600	$12.00
	局部床		¥50,000	$160.00		大臼歯		¥2,900	
	金床		¥150,000	$5,000.00	個人トレー			¥2,000	$6.60
					スタデーモデル			¥2,000	$6.60

歯科診療料金受取証（被保険者／被保険者であった者の分）

（第三号様式）

受取証発行年月日 197　年　月　日

受取証発行第（　　）回目

所在地

医療担当者登録番号歯第（　　）号（医・介）

医師名　　印

（TEL　　）

病名		記号		番号	男・女
		患者名		明大昭　年　月　日生	
		開始	年　月　日	診療実日数	日
		終了	年　月　日	転帰	治ゆ　繰越　その他

区分		回	区分		回	区分		回	区分		回	区分		回
診療	基本診療料		処置	根充 単複		充てん	アマルガム 単複		補てつ	フック等	特殊鋼		修理手術	
	時間外加算			歯髄切断 失生乳			硅酸レジン 単複				不銹鋼			
	深夜加算						燐酸セメント			バー	金パラ			
	乳幼児初加算										特殊鋼		抜歯	乳歯
投薬	内外含 30g未満			直抜即時根充		インレー	金パラ銀 単複				不銹鋼			前歯
	30g以上			歯髄覆罩						保持装置				臼歯
	屯 30g未満			軟組織処置			その他の合金 単複			継続歯	金パラ裏装			離抜
	30g以上			外科後処置 単複							他の合金裏装			特離
											全陶・レジン冠			歯槽骨整形
注射	皮筋 30g未満			膿漏処置		補てつ	義歯 局部 床 歯			金属冠	金パラ 鋳造 大小			歯齦弁切除
	30g以上			歯石除去			総義歯 床							歯齦息肉除去
	静脈 30g未満			盲のう掻爬 単複							嚼面 大小			口腔内消炎術
	30g以上						リベース 単複							
X線	標準型			撤去料			金パラ 双大小				その他 大小			
	診断料			調整料							その他の合金			
処置	普通処置						特殊鋼 双有無			支築ダミー	アマルガム		麻酔	伝麻
	知覚過敏 硝酸										合金			
	イオン			特定薬剤							金パラ 前歯			
	歯類						不銹鋼 双有無				臼歯 大小			
	根管治療 単複		理学療法								その他 前歯		受取金額	
	抜髄 単複										臼歯		$	

説明

H. 帯環金属冠等の製作法

今日、クラウンやブリッジは鋳造で作るのが常識となっているが、一昔前までは

1　帯環金属冠（バンドクラウン）　　2　SP 継成冠

3　無継冠　　4　嚙面鋳造冠

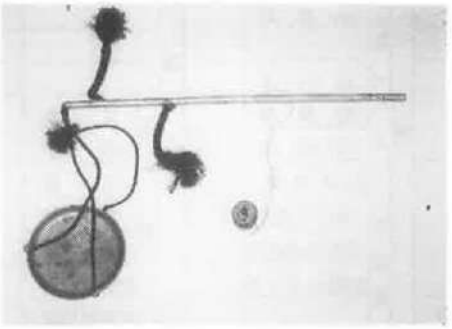
等があり、特にプラチナ冠やサンプラ冠とよばれ、前歯では開面冠と言うのもあった。

金属の種類でも今日はパラジウム冠が主流だが、金、ニッケルクロム合金、黄色合金が主体であった。

金は"はかり"を使ってカラット調整（銀銅を加えて）それを加熱、溶解した状態で金用鋳造機で厚めの板状にし、それを圧延機（ローラー）で適度の薄い金板を作る。ニッケルクロム合金はサンプラ板とキャップが市販されていた。

技工法も圧印法が主体で、モルデン（土のような印象材）で型を取り、メロットメタル（ビスマス約50%、スズ約31%、鉛19%の共晶合金）で陰陽金属型を作る。それを金板やサンプラ板キャップを間にはさみ槌打または器械によって圧接適合、鑞着、溶接作業をする方法であった。

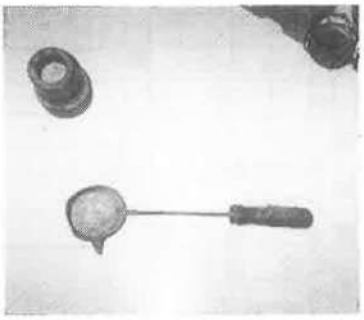
鋳造法では黄色合金や金を溶解し、リングの上で加熱、それを手動式遠心鋳造機（鎖がま鋳造機）や水蒸気圧圧迫鋳造機（圧迫蓋）で鋳造していた。



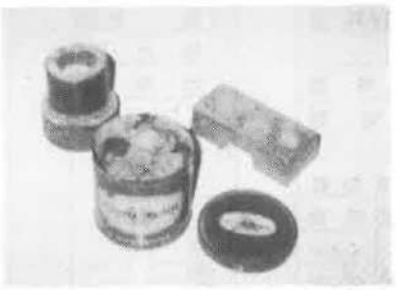
金のカラットを調整するためのはかり



純金はカラットメタル（銀と銅から成る）を加える為サオ、ハカリを使用



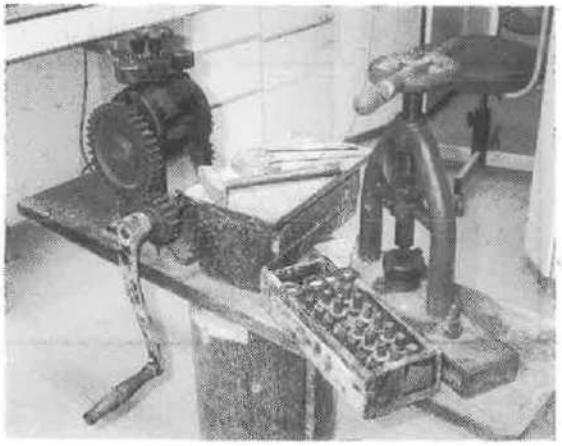
メロット合金を溶かすためのメロット鍋
これで陰型と陽型を作る



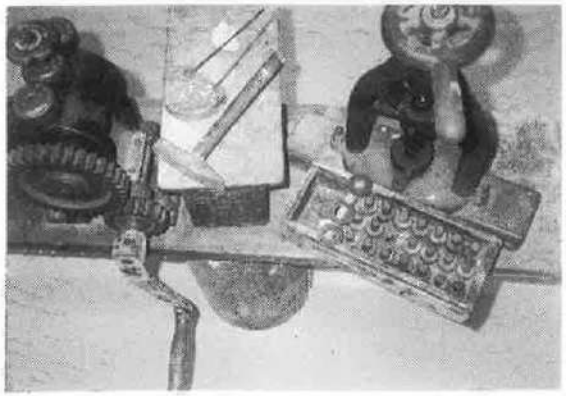
陰陽型作業　歯型をモルデンで印象し、そのモルデンに鉛を流し込む



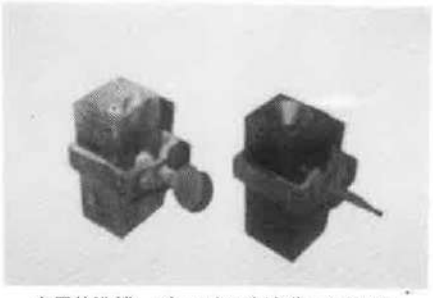
鍍環金属冠を作る為の道具一式



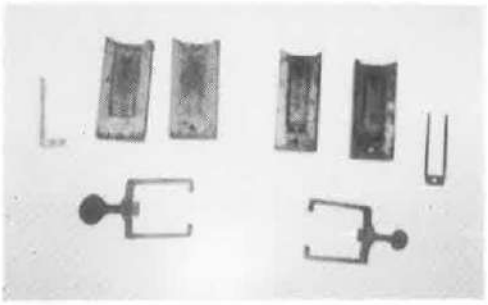
金合金を板状に圧延する為の圧延機（ローラーとも呼ばれる）



中央は鉛の塊　金冠の形を作る為槌打する



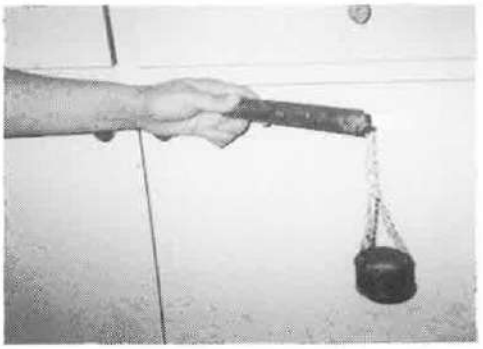
金用鋳造機　ゴールドの板を作って延ばし金箔を作る



金用鋳造機を分解したもの



金用鋳造機　カラット調整後、器の上で溶解し金板を作る



鎖がま鋳造機　これを振り回すことによって遠心力を作り鋳造する



いわゆる鎖がま鋳造機（手動式遠心鋳造機）



陰陽金属型　間にはさみ金箔を槌打する固定台



槌打する時に使う叩き台
戦前は何処にでもあった

第 4 章

各会員・各支部の活動及び比較年表

A. 各種比較年表

掲載内容：①南部地区歯科医師会会員の年齢順年表

②南部地区歯科医師会年表

③沖縄の社会情勢年表

④日本・世界の情勢年表

⑤会員の声・顔写真



戦前の教科書



戦前の方言札



戦前のレストラン



戦後の美空ひばりショー



戦後の開南バス停



電気店のテレビに群がる人達

明治43年～大正9年（1910年～1920年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【明治43年】 8.6　呉渓順出生 【大正4年】 5.20　永井長秀出生 【大正5年】  大正5年の自動車 3.30　与那城勇出生 【大正8年】 5.7　与那嶺貞子出生 【大正9年】 3.10　村田芳子出生	【明治43年】 2.－　那覇区に電話開通 8.－　県立図書館が開館、初代館長に伊波普猷 【大正3年】 7.1　那覇・首里間に電車開通 12.1　那覇・与那原間に軽便鉄道開通 【大正4年】 6.－　国頭街道（那覇・嘉手納・名護）が開通する 【大正5年】 －　沖縄初の『衛生展覧会』開催 1.－　明治橋が改築され開通 【大正8年】 3.－　衆議院議員選挙法改正、宮古八重山を加え5人となる 【大正9年】 10.－　初めて国勢調査を行う	【1910年】 8.22　日本韓国併合 【1911年】 10.10　辛亥革命 【1914年】 7.28　第1時世界大戦始まる 【1915年】 1.18　対華21ヶ条要求 【1916年】 3.20　アインシュタイン、一般相対性理論を定式化 【1918年】 11.11　第1次世界大戦終 【1919年】 6.28　ベルサイユ講和条約 【1920年】 1.10　国際連盟発足

流行歌	***映画***	***書籍***	***その他***
✧ 1914年「流行歌・松の声」これが流行歌と称した第1号で流行歌という言葉が流行した ✧ 1915年「恋いはやさしい野辺の花よ」	✧ 1914年3月1日沖縄初の映画常設館「帝国館」が那覇区に完成 ✧ 1915年6月大正劇場が落成 ✧ 1911年米国ハリウッドに初の映画撮影所設立	✧ 1911年「古琉球」伊波普猷「善の研究」西田幾太郎 ✧ 1914年「心」夏目漱石 ✧ 1915年「羅生門」芥川龍之介 ✧ 1919年「古寺巡礼」和辻哲郎	✧ 1919年・野口英世、黄熱病病原体研究 ✧ 1915年・那覇の大坪商店が自動車を輸入し各地をパレード ✧ 1912年4月14日・タイタニック号氷山に衝突し翌日沈没



呉渓順
京北歯科



永井長秀
東京歯科医学専門学校



与那城勇
朝鮮総督府施行歯科

慶良間は見えるが、まつげは見えない。先祖の言葉。

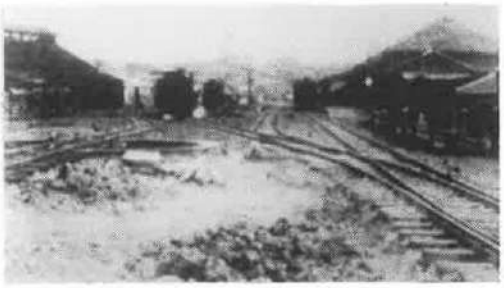


与那嶺貞子
東洋女子歯科



村田芳子
東洋女子歯科

大正9年～13年（1920年～1924年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
8.26 知花朝敏出生 11.25 山内秀子出生 【大正10年】 6.30 瀬底正俊出生 7.19 九州歯科医学専門学校設置 9.19 渡名喜吉子出生 【大正11年】 1.7 東洋女子歯科医学専門学校設置 7. 日本女子歯科医学専門学校設置  軽便鉄道那覇停車場 【大正13年】 7.1 比嘉良有出生	10.－ 県庁舎美栄橋に新築移転 12.4 沖縄県歯科医師会設立総会 － この年県に糖業課新設 【大正10年】 1.5 柳田国男、沖縄民芸調査のため那覇到着 5.20 那覇首里両区に市制施行 － 名護・辺土名間の群道開通 【大正11年】 － 那覇市衛生展覧会 3.－ 県鉄嘉手納線が開通 － 鰹節製造が絶頂に達する 【大正13年】 － ソテツ地獄 3.25 沖縄神社建立のため首里城の撤去工事開始、正殿のみ保存 8.－ 沖縄－阪神航路が開始	8.14 第7回五輪アントワープ大会、テニスで日本初の銀メダル 11.5 初のムシ歯デー 【1921年】 9.19 世界初の高速自動車道路ベルリンに完成 11.4 原敬首相東京駅頭で刺殺される 【1922年】 2.6 ワシントン軍縮会議 11.4 ツタンカーメン王の墓発見 12.30 ソ連国成立 【1923年】 9.1 関東大震災 【1924年】 7.1 メートル法施行 7.5 第8回五輪パリ大会

流行歌	***映画***	***書籍***	***その他***
◇ 1921年「めえめえ児山羊」「七つの子」 ◇ 1922年「籠の鳥」「砂山」 ◇ 1923年「月の砂漠」「船頭小唄」 ◇ 1924年「からたちの花」「兎のダンス」	◇ 1920年 松竹キネマ、蒲田撮影所開設 ◇ 1921年「カリガリ博士」「三銃士」「豪傑児雷也」 ◇ 1924年「国定忠治」「要心無用」「国民の創生」「籠の鳥」	◇ 1921年「銀の匙」中勘助「赤い蝋燭と人形」小川未明、 ◇ 1922年「南島説話」佐喜真興英「暗夜行路」志賀直哉 ◇ 1923年「沖縄一千年史」 ◇ 1924年「尚泰実録」出版	◇ 1921年東京博物館設立、デビスカップで初出場決勝進出 ◇ 1922年アインシュタイン来日 ◇ 1923年「文芸春秋」創刊 ◇ 1924年高橋克巳ビタミンA発見



知花朝敏
東京高等歯科医学校

趣味は囲碁将棋の観戦、早朝街の散歩。座右の銘「千里の道も一歩から」



山内秀子
日本女子歯科

趣味はウォーキング、読書、座右の銘「和」



瀬底正俊
大阪歯科大学

趣味は俳句



渡名喜吉子
東洋女子歯科



比嘉良有
日本歯科医専

大正 14 年～昭和 3 年（1925 年～1928 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢

【大正 14 年】

3.10　崎山厚出生

【大正 15】

2.13　上原利子出生

8.14　宮城トシ出生

11.3　高良政利出生



大正劇場

【昭和 3 年】

9.15　西平守廣出生

10.12 東京高等歯科医専門学校設置

沖縄の情勢

【大正 14 年】

－　帝国議会、沖縄経済を救済するため産業助成 5 カ年計画案を可決
－　首里城正殿国宝指定
－　人口 55 万 8499 人

【大正 15】

1.－　普通選挙法施行
2.－　旭町で大火
3.－　沖縄青年同盟創立

【昭和 2 年】

7.－　那覇商工会議所設立
－　電灯料値下げ運動起こる

【昭和 3】

4.－　県立第 3 中学校設立
－　首里城正殿復旧起工
－　農業試験場、真和志与儀に設置

日本の情勢 海外の情勢

【1925 年】

3.2　衆議院普通選挙法修正可決
3.10 政府日英協定税率を廃棄

【1926 年】

8.6　日本放送協会設立
11.18 豊田自動織機製作所設立
12.25 大正天皇崩御

【1927 年】

3.15 蔵相失言による昭和の金融恐慌はじまる

【1928 年】

6.4　初のむし歯予防デー
8.2　アムステルダム五輪の陸上 3 段飛びで織田幹雄優勝
11.1 ラジオ体操東京で放送開始

流行歌

- ✧ 1925 年「証城寺の狸囃子」「出船の港」
- ✧ 1926 年「この道」「鉾を収めて」
- ✧ 1927 年「ちゃっきり節」「モンパリ」
- ✧ 1928 年「君恋し」「波浮の港」

映画

- ✧ 1925 年「雄呂血」「ジークフリード」「荒武者キートン」
- ✧ 1926 年「素晴らしき哉人生」「乱魔の巷」「鉄路の白薔薇」
- ✧ 1928 年「鞍馬天狗」

書籍

- ✧ 1925 年「キング」創刊「痴人の愛」谷崎潤一郎
- ✧ 1926 年「琉球古今記」伊波普猷、「伊豆の踊り子」川端康成
- ✧ 1927 年「河童」芥川龍之介
- ✧ 1928 年「南島研究」創刊

その他

- ✧ 1928 年フレミング、ペニシリン発見



崎山厚
日本大学歯学部

趣味は読書
ウォーキング
「日々是好日」



上原利子
日本女子歯科医専



宮城トシ
日本女子歯科

趣味：短歌



高良政利
日本歯科医学専門学校

「晴耕雨読」
孫共を相手に「日々是好日」



西平守廣
日本歯科大学

趣味はゴルフ、麻雀
囲碁、園芸
「天は自ら助くる者を助く」

昭和４年～７年（1929年～1932年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢

【昭和４年】

4.　京城歯科医学専門学校設置
7.3　金城一史出生

【昭和５年】

10.9 嘉手納憑一出生

【昭和７年】

3.2　嶺井浩出生
3.9　林昭治出生



泉崎橋

9.30 林房子出生

沖縄の情勢

【昭和４年】

3.29 教員27人社会科学研究理由に処分
－　あらかきバス運行開始

【昭和５年】

－　牧原争議起こる
農村疲弊により小学生の欠席や欠食、人身売買が多くなる
教員の首切り増加
5.－　デパート山形屋開店

【昭和６年】

2.－　酒造業の倒産続出
8.9　宮古島で風速65m/h、民家7000戸が倒壊
－　首里城正殿修理完成
－　テング熱蔓延

【昭和７年】

9.11　那覇宮古間、無線電信開通
11.－「歴代宝案」旧久米村で発見
12.11　八重山教員思想弾圧事件

日本の情勢 海外の情勢

【1929年】

5.16　第1回アカデミー賞チャップリン拒否
10.24 世界恐慌始まる

【1930年】

1.21　ロンドン軍縮会議
11.14 浜口雄幸首相東京駅で狙撃され重傷

【1931年】

8.25 羽田国際飛行場海港
9.18 満州事変勃発
10.24 アル・カポネに懲役11年の判決

【1932年】

1.28 上海事変勃発
3.1　関東軍、満州国建国を宣言
5.15　5・15事件、青年将校ら犬養毅首相射殺
10.1　リットン調査団報告通達、満州国を否認

流行歌

◇ 1929年「蒲田行進曲」「東京行進曲」「お菓子と娘」
◇ 1931年「酒は涙か溜息か」
◇ 1932年「影を慕いて」

映画

◇ 1929年「大学は出たけれど」「進軍」「唐掛時次郎」「メトロポリタン」
◇ 1931年「マダムと女房」「瞼の母」
◇ 1932年「浪子」「金色夜叉」

書籍

◇ 1929年「太陽のない町」徳永直「蟹工船」小林多喜二
◇ 1930年「那覇変遷記」島袋全発
◇ 1931年「轡虫」梶井基次郎
◇ 1932年「女の一生」山本有三「沖縄歴史」島袋源一郎

その他

◇ 1932年「のらくろ上等兵」が単行本になる（1円）
◇ 1932年5月平和館にトーキー映写機がそえつけられる



金城一史
日本歯科大学

「丹誠無二」



嘉手納憑一
日本大学歯学部

英文読書、快酒快食快眠快便



嶺井浩
日本歯科大学

趣味はウォーキング
「至誠天に通ず」



林昭治
九州歯科大学



林房子
日本大学歯学部

昭和8年～10年（1933年～1935年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢

【昭和8年】

4.30　富本盛弘出生

【昭和9年】

3.27　中村義宣出生

12.1　呉渓順入会

【昭和10年】

8.10　古堅英信出生

9.26　城間猛出生

10.25　阿嘉昭宗出生



首里市営バス

沖縄の情勢

【昭和8年】

3.21　那覇首里間電車廃止

9.1　那覇市水道給水開始

―　沖縄県振興15カ年計画実施される

【昭和9年】

6.11　移民教養所、開洋会館落成

―　干ばつで離島の食料欠乏

―　牧志街（新県道、国際通り前身）開通

【昭和10年】

―　人口59万2239人

1.27　首里市営バス運行開始

6.―　屋部焼き打ち事件

10.―デパート円山号開店

日本の情勢 海外の情勢

【1933年】

4.30　海軍戦闘機が慰霊飛行の宙返り時に空中分解

【1934年】

12.26　日本初のプロ野球チーム「大日本東京野球倶楽部」創立（現巨人）

【1935年】

8.10　第1回芥川賞直木賞発表、
石川達三「蒼氓」
川口松太郎「鶴八鶴次郎」

10.1　第4回国勢調査、人口6925万人

11.26　日本ペンクラブ発会式、会長島崎藤村

12.1　初の年賀切手発売

12.10　大阪野球倶楽部（阪神タイガース）創設

流行歌

◇ 1933年「島の娘」「十九の春」「サーカスの唄」「東京音頭」
◇ 1934年「国境の町」「ダイナ」
◇ 1935年「無情の夢」「明治一代女」「大江戸出世小唄」

映画

◇ 1933年「伊豆の踊り子」「丹下左膳」「滝の白糸」
◇ 1934年「東洋の母」「町の灯」
◇ 1935年「雪之丞変化」「国定忠治」「外人部隊」「国境の町」

書籍

◇ 1933年「桃太郎の誕生」柳田国男「春琴抄」谷崎潤一郎
◇ 1934年「沖縄童謡集」島袋全発
◇ 1935年「太閤記」矢田挿雲「義人謝花昇伝」親泊康永「辞苑」新村出

その他

◇ 1933年「ヨーヨーブーム」、3月法医学会で血液型と気質の関係めぐり大論戦

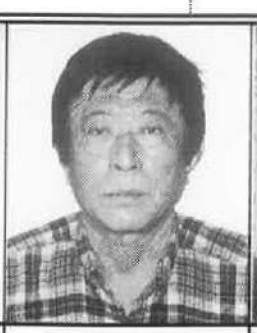


富本盛弘
大阪歯科大学

趣味は都山流尺八
「萬象書蔵一管中」



古堅英信
東京歯科大学



城間猛
日本大学歯学部

趣味は海



阿嘉昭宗
東京歯科大学

趣味はカラオケ、散歩、ウォーキング

昭和 11 年～12 年（1936 年～1937 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢

【昭和 11 年】

1.18 山口悦子出生

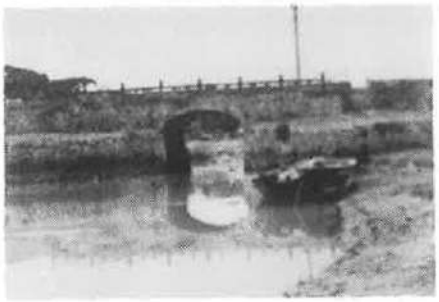
2.5 高江洲旭出生

【昭和 12 年】

1.5 玉木史朗出生

2.12 友利時野出生

3.2 上原斉出生



崇元寺橋

沖縄の情勢

【昭和 11 年】

1.－ 福岡－沖縄－台湾航空路開通

2.－ 私立開南中学校設立

－ 郷土博物館創設
－ 末吉宮国宝指定
－ 首里図書館開館
－ 守禮門解体修理起工

【昭和 12 年】

2.－ 県教育会、読み換えるべき姓84発表

4.－ 衆議院議員選挙（漢那憲和他４人当選）

5.－ 県会議員選挙

12.－ 第２次社会科学研究会事件（小学校教員６人検挙）

日本の情勢 海外の情勢

【1936 年】

2.26 2･26 事件

8.1 第11回五輪ベルリン大会、前畑秀子 200m 平泳ぎで優勝

【1937 年】

3.15 シカゴで世界初の血液銀行開業

4.15「奇跡の人」ヘレン・ケラー初の来日

5.4 パリ万博開幕、ピカソ「ゲルニカ」出品

7.7 盧溝橋事件、以後８年に及ぶ日中戦争の発端

8.13 第２次上海事変

10.16 ゴルフの４冠王ジーン・サラゼン来日

12.13 中華方面軍南京占領

流行歌

◇ 1936 年「東京ラプソディ」
◇ 1937 年「人生の並木道」

映画

◇ 1936 年「人生劇場」「罪と罰」
◇ 1937 年「人情紙風船」「裸の町」「大いなる幻影」「歴史は夜作られる」
◇ 1937 年９月大蔵省外国映画の輸入全面禁止を通達

書籍

◇ 1936 年「宮本武蔵」吉川英治「戦争」武藤貞一
◇ 1937 年「雪国」川端康成「級方教室」豊田正子「若い人」石坂洋次郎

その他

◇ 1936 年８月「白バイ」デビュー
◇ 1937 年７月文部省ラジオ体操への国民総動員を決定



山口悦子
日本歯科大学

卒後早 35 年余。種種の専門知識と技術を要求された日々。楽しかった？



高江洲旭
九州歯科大学

趣味はドライブ、カラオケ。
座右の銘「和」
妻 恵美子、長女 美奈子、次女 みゆき、 長男 義也



玉木史朗
大阪大学歯学部

テラピアも熱射（ひざし）を避けて橋の下。 浮浪者
茶髪はおれが元祖と言い
座右の銘「正念 環白」



友利時野
日本大学歯学部

趣味はテニス、ウォーキング、絵画
座右の銘「和」



上原斉
九州歯科大学

昭和 13 年～14 年（1938 年～1939 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢

【昭和 13 年】

12.25　新城彬明出生

12.29　又吉達雄出生

【昭和 14 年】

5.12　大山日出男出生

9.13　宮城智恵子出生

9.18　山田勲出生



那覇市役所のサイレン塔

沖縄の情勢

【昭和 13 年】

7.－　ユタ狩り

8.1　人身売買厳禁

11.10　国立国頭愛楽園設置（沖縄愛楽園）

－　沖宮、弁ノ嶽石門国宝指定

【昭和 14 年】

3.28　日本民芸協会民芸調査団来沖

4.－　沖縄初の保育園、私立名護保育園開園

6.18　武徳殿の開殿式行われる

日本の情勢 海外の情勢

【1938 年】

4.1　国家総動員法、国民健康保険法公布

6.9　学生、生徒の勤労動員始まる

12.22 精神総動員連盟、国民服はカーキ色と決定

【1939 年】

4.26 満 12 歳以上の不就学男子に青年学校義務化

5.11 ノモンハン事件、満州・モンゴル国境のノモンハンで日ソ軍衝突

9.1　独、ポーランド侵攻 第 2 次大戦始まる

流行歌

- 1938 年「支那の夜」「愛国行進曲」「旅の夜風」
- 1939 年「上海の花売娘」

映画

- 1938 年「愛染かつら」「五人の斥候兵」「舞踏会の手帖」「級方教室」「モダン・タイム」
- 1939 年「土」「暖流」「望郷」「上海陸戦隊」「残菊物語」
  4 月映画法公布、脚本事前検閲

書籍

- 1938 年「黒弁の花」山之口獏「をなり神」伊波普猷「麦と兵隊」火野葦平「蛙」草野心平「風立ちぬ」堀辰雄、
- 1939 年「昭和国民読本」徳富蘇峰「源氏物語」谷崎潤一郎

その他

- 1938 年 7 月ガソリン節約強化決定、自家用車は 1 日 1 ガロン
- 1939 年 3 月厚生省金歯の代用にパラジウム奨励と示達



新城彬明
東京医科歯科大学



又吉達雄
九州歯科大学



大山日出男
大阪大学歯学部

特技は舟の櫓を漕ぐ事、趣味は囲碁

座右の銘「晶落」



宮城智恵子
日本大学歯学部

趣味は美術館巡り、シーサーコレクション



山田勲
九州歯科大学

趣味はネイチャーウォッチング

昭和14年～15年（1939年～1940年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
11.25 上地健一出生	11.29 糸満馬車軌道営業停止	11.25 白米禁止令公布 七分炊き以上禁止 12.12 軍機保護でビルや高台からの俯瞰撮影禁止
【昭和15年】	【昭和15年】	【1940年】
1.28 瀬底正男出生	1.3 柳宗悦ら日本民芸協会民芸調査団再度来沖 1.7 方言論争起こる	2.5 マッチ製造配給の商工省令公布、統制始まる
2.23 嶺井勢子出生		4.8 国民体力法公布 17～19歳男子の身体検査の義務化 4.16 厚生省薬品の配給統制を5月実施と決定 4.24 米、味噌、醤油など10品目に切符制度採用
 沖縄県庁	—　防空演習、防空壕掘り盛んに行われる 5.—　若狭町に那覇市立第2商業学校開校	5.1 国民優性法公布 5.10 英でチャーチル挙国一致内閣を組織 独軍、仏・ベルギー・オランダに奇襲攻撃 6.14 独軍パリに無血入城
5.1 當山正昭出生 5.8 高良政勝出生		

流行歌	映画	書籍	その他
✧ 1940年「誰か故郷を想わざる」「蘇州夜曲」	✧ 1940年「宮本武蔵」「小島の春」「燃ゆる大空」「風の又三郎」 ✧ 1940年4月俳優の登録制実施、非登録者の出演を禁止	✧ 1941年「旅愁」横光利一「如何なる星の下に」高見順「三国志」吉川英治	✧ 1939年12月ごはん節約へ噛みしめ運動提唱



上地健一
九州歯科大学

趣味は釣り、ゴルフ



瀬底正男
大阪歯科大学

絵画グループを結成、美を楽しみゴルフでリフレッシュ、誠実でありたし!!

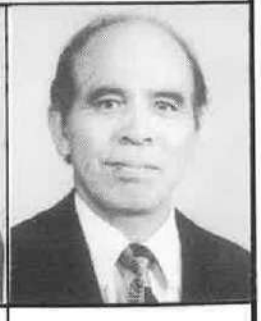


嶺井勢子
大阪大学歯学部



當山正昭
九州歯科大学

趣味は囲碁、ゴルフ



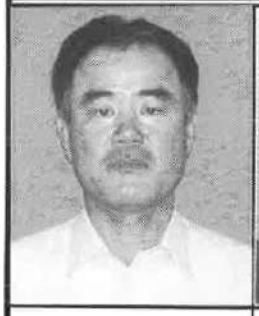
高良政勝
大阪大学歯学部

特技は早起きくらい。死ぬまでボケずに臨床に生き甲斐を感じたい。

昭和15年8月～16年4月（1940年～1941年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
8.8　宮里良雄出生 8.9　高江洲勲出生 1014 友利政三出生	11.1　裸足禁止の県令公布 12.10 大政翼賛会沖縄支部発会 12.20 新聞3社統合（沖縄日報、沖縄朝日新聞、琉球新報）し沖縄新聞となる	8.7　独空軍、大編隊で英本土昼間爆撃を開始 8.8　戦艦大和、呉海軍工廠で進水式 9.27 日独伊3国同盟調印 10.12 大政翼賛会発会
【昭和16年】	【昭和16年】	【1941年】
 県立病院	1.－　国民学校令実施（小学校を国民学校と改称） －　沖縄ホテル開業	1.11 新聞紙等掲載制限令公布実施、新聞などへの国家機密の掲載制限を大幅に強化 3.3　国家総動員法改正公布、統制罰則を強化 3.23 戦前最後の全国選抜中等学校野球大会開幕 3.31 朝鮮総督府、小学校を国民学校と改称し朝鮮語の学習を廃止 4.13 日ソ中立条約モスクワで調印
3.3　銘苅清出生 4.11　饒波正太郎出生		

流行歌	***映画***	***書籍***	***その他***
✧ 1941年「そうだその意気」「めんこい仔馬」 ✧ 沖縄郷土音楽協会創立	✧ 1940年「駅馬車」「民族の祭典」 ✧ 1941年「元禄忠臣蔵」「白鷺」「みかへりの塔」「戸田家の兄妹」「昨日消えた男」「次郎物語」「馬」	✧ 1941年「新太閤記」吉川英治 「黎明期の海外交通史」東恩納寛惇 「路傍の石」山本有三 「人生論ノート」三木清	✧ 1940年10月野球連盟、監督を教士、選手を戦士、マネ＊ジャーを秘書などとする新用語を使用



宮里良雄
九州歯科大学

趣味はゴルフ・園芸



高江洲勲
九州歯科大学



友利政三
愛知学院大学歯学部

特技は柔道3段、趣味はゴルフ、読書　「誠実」
妻：澄江 、長女：香苗、次女：夏子、長男：正樹



銘苅清
日本歯科大学



饒波正太郎
大阪歯科大学

昭和 16 年 4 月～17 年 3 月（1941 年～1942 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
4.16　福村義信出生		4.16　信濃川発電所の 2 期工事落成、日本最大
	6.－　大阪商船、大阪－那覇間運休	
8.23　中里治通出生		8.1　米、日本への石油輸出禁止を発表 9.8　独軍、レーニングラードを包囲
		10.18 東条英機内閣成立 10.20 日本食肉統制会社営業開始 11.26 米、中国と仏印からの日本軍の全面撤退要求（ハルノート） 12.1　御前会議、米英との開戦を決定 12.8　日本軍、真珠湾を攻撃（太平洋戦争）
10.20 国仲匡出生	12.8 沖縄で初めてラジオ電波発信	
 布町風景	－　北明治橋改造	
【昭和 17 年】	【昭和 17 年】	【1942 年】
2.16　渡口進一出生	1.23　護国神社竣工	1.2　第 14 軍マニラを占領 2.15　第 25 軍シンガポールを占領
3.23　与那城智出生	2.－　衣料切符制実施	3.11　マッカーサー、コレヒドール島脱出
	3.19　ラジオ開局（有線）	

流行歌	*映画*	*書籍*	*その他*
◇ 1941 年「長崎物語」 ◇ 1942 年「空の神兵」 「湯島の白梅」	◇ 1941 年「砂塵」 ◇ 1942 年「独眼竜政宗」 「母子草」	◇ 1941 年「智恵子抄」高村光太郎 ◇ 1942 年「婆三四郎」宮田常雄 「海戦」丹羽文雄	◇ 1941 年 10 月満鉄調査部の尾崎秀実、リヒアルト・ゾルゲらをスパイ容疑で逮捕（ゾルゲ事件）



福村義信
日本歯科大学



中里治通
東京医科歯科大学

特技は書店の立ち読み、趣味は 50 の手習い、碁・パソコン・熱帯魚飼育



国仲匡
九州歯科大学

行政に身を置く者として己の非力を痛感、慨嘆しております



渡口進一
日本歯科大学

趣味は 8 mm 撮影
「過去をふり返り未来に生かす」



与那城智
日本大学歯学部

昭和17年4月～10月（1942）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
4.1　座覇秀政出生	4.－　県会議員選挙	4.1 配電統制令により9配電会社開業
	5.－　衆議院議員選挙	4.18米 B25 東京名古屋など本土を初空襲
		5.9 寺院の仏具や梵鐘などに強制供出命令
6.29　漢那強出生		6.5　ミッドウェー海戦
7.30　垣花博子出生	8.－　南明治橋竣工	7.28 米西海岸在住の日系人10万人アリゾナ州の収容所へ強制収容
8.23　新垣繁信出生		8.7　米軍ガダルカナル島上陸開始
	南明治橋	8.13 米国で原爆製造のマンハッタン計画開始
10.17 上原淳出生		8.22 独ソノスターリングラード攻防戦始まる
		10.15 政府指定重要物資は強制買い上げと決定

流行歌	映画	書籍	その他
◇「南の花嫁さん」 ◇「朝だ元気で」 ◇「明日はお立ちか」 ◇「婦系図の歌」	◇「父ありき」 ◇「未完成交響曲」 ◇「維新の曲」 ◇「鳥居強右ヱ門」 ◇「鞍馬天狗」	◇「琉球－建築文化－」伊東忠太 ◇初の女性週刊誌「週刊婦人朝日」創刊	◇国語審議会、仮名遣いは発音通りと決定（蝶は「てふ」から「ちょう」へ）



座波秀政
日本大学歯学部



漢那強
東京医科歯科大学

特技は応用工作
趣味は囲碁、メカ探求
「正直は最良の政策」



垣花博子
東京歯科大学



新垣繁信
大阪大学歯学部



上原淳
日本歯科大学

趣味は山歩き
「人間万事塞翁が馬」

昭和 17 年～昭和 18 年（1942～1943）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
11.9　新垣元洋出生 12.8　上里忠昭出生 【昭和 18 年】 2.15　新垣義勝出生  崇元寺 4.18　大城則安出生 5.25　大城正雄出生	【昭和 18 年】 －　防空演習、竹槍訓練が各市町村で盛んに行われる 7.－　泉守紀第 26 代県知事となる 7.－　東条英機来沖	11.9　仏ビシー政権対米国交断絶 11.15 関門海底鉄道トンネル開通式挙行 12.8　バサブア（ニュウギニア）の日本軍守備隊全滅 【1943 年】 1.20　登呂遺跡出土 1.31　スターリングラード攻防戦で独、ソ連に降伏 2.1　日本軍ガダルカナル島から撤退開始 2.15　国鉄、物資輸送力増強の為旅客列車を大幅削減 4.18　連合艦隊司令長官山本五十六、戦死 5.16　チャンドラ・ボース亡命先の独から来日 7.25　伊でムッソリーニの権力剥奪、逮捕

流行歌	*映画*	*書籍*	*その他*
✧ 1942 年「新雪」 「マニラの街かどで」 ✧ 1943 年 1 月情報局、米英の音楽約 1000 局の演奏を禁止	✧ 1942 年「ハワイ・マレー沖海戦」 「待って居た男」 「新雪」 ✧ 1943 年「桃太郎の海鷲」 「姿三四郎」	✧ 1942 年「こども風土記」 柳田国男	✧ 1943 年日本野球連盟用語の日本語か決定（セーフは「よし」アウトは「ひけ」など）、ユニフォームを軍服式に変更



新垣元洋
東京歯科大学

特技はマラソン
趣味はゴルフ
座右の銘「我が人生に悔いは無し」



上里忠昭
九州歯科大学

座右の銘「人間は自分が考えているような人間になる」



新垣義勝
東京医科歯科大学

趣味は油絵、ゴルフ
座右の銘「明日は明日の風が吹く」



大城則安
広島大学歯学部



大城正雄
東京医科歯科大学

ゴルフ、囲碁、水石、ハンデ－ある人に理解と希望を

昭和 18 年 9 月～昭和 19 年 11 月（1943～1944）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
		8.1 朝鮮に徴兵制施行
9.1 伊礼兼治出生		9.8 伊、連合軍に無条件降伏
9.8 又吉盛弘出生	－ 西新町に国民劇場設立	
	－ 国防献金、飛行機献金等盛んに行われる	11.22 カイロ会談、米英中首脳が対日方策討
		12.24 徴兵年齢 19 歳に引下げ
【昭和 19 年】	【昭和 19 年】	【1944 年】
		3.8 大蔵省アルミ材不足で錫合金の 10 銭・5 銭・1 銭硬貨の鋳造開始
3.8 高江洲正勝出生	3.21 大本営直轄の第 32 軍新設	
	5.－ 中学生女学生陣地構築作業で授業中止	
5.27 伊礼昭洋出生		6.6 連合軍、ノルマンディー上陸作戦を開始
	8.22 学童疎開船対馬丸、悪石島付近で撃沈 1700 人中生存者 227 人	8.25 連合軍パリ解放、ド・ゴール凱旋
		9.5 山口県大津島に人間魚雷「回天」基地設置
11.15 友寄喜樹出生		
	10.10 米軍空爆により那覇市壊滅的被害、市域の 90%約 12000 戸罹災	
	11.－ 戦時食糧増産推進沖縄本部設置	11.24 B29、東京を初めて本格的に空襲

流行歌	*映画*	*書籍*	*その他*
✧ 1943 年「若鷲の歌」 「お使いは自転車に乗って」 ✧ 1944 年「予科練」 「同期の桜」 「ああ紅の血は燃ゆる」 「月夜船」	✧ 1943 年「花咲く港」「歌行燈」 「無法松の一生」「伊奈の勘太郎」 「ハナ子さん」 ✧ 1944 年「加藤隼戦闘隊」 「おばあさん」「あの旗を撃て」 「一番美しく」	✧ 1943 年「死者の書」折口信夫 「司馬遷」武田泰淳 「右大臣実朝」太宰治 ✧ 1944 年「津軽」太宰治 「花ざかりの森」三島由紀夫	✧ 1943 年 10 月練り歯磨きを禁止、袋入りの粉歯磨きに限定



伊礼兼治
広島大学歯学部

趣味は野辺散策、読書
座右の銘「己所不欲、勿施於人」



又吉盛弘
日本大学歯学部

論語読みの論語知らず。ウォーキングしたくとも持病の腰痛でまま成らず。健康第一、今理解す



高江洲正勝
東京医科歯科大学



伊礼昭洋
新潟大学歯学部

趣味は提琴と英会話。両方とも下手なので脳が右往左往し混乱している。



友寄喜樹
九州歯科大学

陶芸、囲碁、ゴルフ
座右の銘「自然体」

昭和 19 年 12 月～昭和 20 年（1944～1945）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
12.5　伊波富夫出生		12.2　元巨人の投手沢村栄治、東シナ海で戦死
【昭和 20 年】	【昭和 20 年】	【1945 年】
2.12　上江洲紀子出生	1.31　第 32 軍、県民男子の第 2 次召集実施 2.3　学徒動員強化、通信などの特訓開始 2.7　県庁平時行政から戦場行政へ切り替え 3.26　米軍慶良間諸島に上陸 4.1　米軍北谷読谷海岸より上陸 4.21　伊江島守備隊主力全滅す	1.9　米軍ルソン島に上陸開始 2.4　ヤルタ会談、対独戦後処理・ソ連の対日参戦など決定 3.3　米軍マニラを完全制圧
 青空教室		5.7　独軍、連合国軍に無条件降伏
8.13　山田芳宏出生	7.1　県庁職員 4 月分給料を陸軍省に献金 6.18　ひめゆり部隊 49 名 摩文仁の洞窟で自決	7.26 米英中首脳ポツダム宣言を発表 8.6　広島に原爆投下 8.8　ソ連、日本に宣戦布告 8.9　長崎に原爆投下 8.15 天皇ポツダム宣言受諾詔書を放送 8.30 マッカーサー、厚木飛行場に到着
11.24 新城啓和出生	6.23　沖縄守備隊の組織的抵抗終わる	
12.16 宮里修出生	8.20　米軍政府、石川に沖縄諮詢会を正式設置 9.20　16 市・地区で市会議員選挙実施、初の婦人参政権 10.31 各収容所から旧居住区へ帰村開始 11.7　屋嘉収容所の捕虜釈放	11.6　4 大財閥解体指令 12.16 戦犯容疑の近衛文麿自宅で服毒自殺

流行歌	***映画***	***書籍***	***その他***
✧ 1945 年「ラバウル小唄」 「勝利の日まで」 「お山の杉の子」 「リンゴの唄」	✧ 1944 年「怒りの海」「陸軍」 ✧ 1945 年「天国の花嫁」 「新風」 「歌え太陽」 「孤の呉れた赤ん坊」 「そよかぜ」	✧ 1945 年「日米会話手帳」 「旋風二十年」 「古代感愛集」折口信夫、 「新日本少年国民文庫」	✧ 1945 年 10 月戦後初の切手「久米島切手」発行 ✧ 1945 年 10 月 24 日国際連合発足、加盟 51 ヶ国



伊波富夫
九州歯科大学

趣味は同級生と山登りとウォーキング、
「何事も前進のみ」



上江洲紀子
九州歯科大学

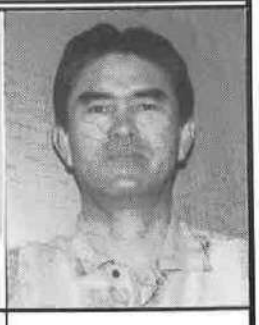
趣味は歴史の旅、読書
(奈良平安時代の歴史書)



山田芳宏
九州歯科大学



新城啓和
九州歯科大学



宮里修
新潟大学歯学部

趣味は家庭菜園、磯釣り、投網、カラオケ、囲碁、座右の銘「中庸」
子供は三男一女

昭和21年～昭和22年（1946～1947）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和21年】 7.28　垣花幸子出生 10.6　金城竹治出生 10.25　宜志富哲昭出生  建築中の規格住宅 【昭和22年】 1.22　玉城民雄出生 2.1　高良恒己出生	【昭和21年】 1.10　具志川村田場に沖縄文教学校開校 4.15　第1次通貨交換、旧日本円よりB円へ 4.22　沖縄中央政府創設、初代知事に志喜屋孝信 4.26　沖縄諮詢会解散し、沖縄議会発足 5.1　沖縄中央銀行発足 6.5 米軍物資無償配布から有償配布となる 7.－この月にガリオア援助決定 8.5 第2次通貨交換、本島に限り新円発行 10.21 沖縄民政府、玉城村親慶原に移転 10.25 米軍政府により琉球列島貿易庁設立 【昭和22年】 1.14　青年高等学校25校沖縄各地に設立 1.27　沖縄歯科医学会	【1946年】 1.29 連合軍総司令部GHQが琉球諸島などに対する日本の行政権を停止 2.17 新円発行 4.9　男女平等による初の総選挙 5.3　極東国際軍事裁判開廷 7.19 初の歯科専門、東京歯科大学に設立認可 11.1 第1回医師国家試験実施 11.3 日本国憲法公布 【1947年】 1.31 マ元帥の命令により2・1ゼネスト中止 2.20 GHQ、輸出品への「Made in Occupied Japan」（占領下の日本製）の記載を指令

流行歌	映画	書籍	その他
✧ 1946年「リンゴの唄」 「かえり船」 「啼くな小鳩よ」 「悲しき口笛」	✧ 1946年「わが青春に悔いなし」 「我が道を往く」 「疑惑の影」 「歌麿をめぐる5人の女」 ✧ 1947年「断崖」	✧ 1946年「愛情はふる星のごとく」尾崎秀実	✧ 1946年4月沖縄中央病院（現県立中部病院）が越来村胡屋に開設し同年付属看護学校が開校 ✧ 1946年2月15日米ペンシルベニア大で世界初のコンピュータ「ENIAC」公開



垣花幸子
広島大学歯学部

趣味は野山の散策、トールペインティング



金城竹治
東北大学歯学部



宜志富哲昭
大阪大学歯学部



玉城民雄
福岡歯科大学

昼寝、スキューバーダイビング、ウィンドサーフィン、「明眸皓歯」



高良恒己
広島大学歯学部

昭和 22 年 3 月～9 月（1947）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
3.17 安里幸子出生	3.22 米軍政府、昼間の通行許可	3.12 トルーマン・ドクトリン、ソ連封じ込めと共産圏勢力拡大阻止
4.3 仲里正博出生	4.1 うるま新報社、民間企業として経営認可	4.1 6・3・3制の男女共学義務教育開始
		4.7 労働基準法公布
		4.20 第1回参院選
		4.25 第23回総選挙
	5.1 特別行政区「みなと村」（奥武山・楚辺一帯）を設置、村長に国場幸太郎任命	5.3 日本国憲法施行
7.27 兼城繁出生	6.15 沖縄民主同盟結成、琉球共和国の独立を目指す	6.1 片山内閣成立
		6.5 米、欧州復興のマーシャルプラン発表
		7.1 公正取引委員会設置
	7.20 沖縄人民党結成	7.3 GHQ、三井物産と三菱商事の徹底的解体を指令
	8.1 沖縄本島B円再び法定通貨となる	8.4 最高裁判所発足
9.20 島袋進出生	8.16 民政府、公営バス設立	8.15 インド独立、首相にネール、パキスタン分離
9.25 安村庸出生		9.1 労働省発足、GHQの強い示唆により厚生省から分離
	9.10 沖縄社会党結成	



米軍による検診を受ける少女

流行歌	映画	書籍	その他
◇「港が見える丘」 ◇「星の流れに」 ◇「炭坑節」 ◇「夜のプラットホーム」	◇「心の旅路」 ◇「荒野の決闘」 ◇「長屋紳士録」 ◇「ガス灯」 ◇「ブルックリン横町」 ◇「素晴らしき日曜日」	◇「人生論ノート」三木清	◇9.7 露天のアーニーパイル国際劇場落成



安里幸子
東京医科歯科大学



仲里正博
日本歯科大学

趣味はゴルフ



兼城繁
新潟大学歯学部

趣味は野球、映画
座右の銘「好奇心」



島袋進
日本大学歯学部

特技は沖縄方言
趣味はゴルフ、写真
座右の銘「仁」



安村庸
東京医科歯科大学

継続は力なり
独自性を持て

昭和22年9月～昭和23年4月（1947～1948）

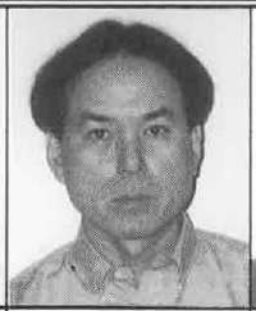
沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
9.27 宮城正廣出生	10.7 民裁判所施行	10.18 中国行政院長、琉球の中国帰属を要求と言明
	12.2 米軍政府、地方選挙権公布	
【昭和23年】	【昭和23年】	【1948年】
1.8 八木茂出生	1.24 米軍政府「琉球の政府について」の声明発表	1.4 ビルマ独立 1.26 帝銀事件 1.30 インド独立の父ガンジー暗殺
 那覇市の繁華街 牧志大道り	2.1 市町村長選挙 2.8 市町村議員選挙	2.1 沢田美喜、混血児養護施設「エリザベス・サンダース・ホーム」を開設
		3.7 新警察制度発足 3.10 芦田均内閣成立
3.12 高橋学出生 3.13 真栄城正弘出生	4.1 6・3・3制の学制改革実施	4.1 新制高等学校発足
4.6 玉澤吉弘出生	― 首里に美術村建設	4.7 世界保健機関（WHO）発足

流行歌	映画	書籍	その他
◇「東京ブギブギ」「異国の丘」 ◇1948年5月1日横浜国際劇場で10歳の美空ひばりがデビュー、岡晴夫の「港シャンソン」を歌う	◇1947年「安城家の舞踏会」 ◇1948年「春の饗宴」「女優」「第7のヴェール」「美女と野獣」「ターザンの黄金」「酔いどれ天使」 ◇1947年12月アーニーパイル国際劇場設立	◇3月9日文部省、教科書検定基準を制定 ◇4月30日河出書房、戦後初の全集・大系本「現代日本小説大系」を刊行	◇1947年11月 開南バス停付近にヤミ市発生 ◇1948年1月 明治製菓、ペニシリンの製造を開始（この年38社が生産開始） ◇セロテープ、ニチバンより新発売



宮城正廣
日本大学歯学部

趣味は与親朋好友、共餐飲酒之事
「継続能成為力量」



八木茂
日本歯科大学

趣味：車と旅行と食べ歩き（家族と）スポーツジム



高橋学
九州歯科大学

趣味はスポーツ、音楽、車。
大切な事：スポーツする心
「知行合一」



真栄城正弘
広島大学歯学部



玉澤吉弘
明海大学歯学部

趣味は写真（十年ぶりに復活予定）

昭和23年5月～昭和23年12月（1948）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
5.23　赤崎栄出生	5.1　琉球銀行設立（株の51％は米軍が保有）	5.14　イスラエル建国宣言、第1次中東戦争勃発
6.29　赤嶺裕也出生		6.24　ソ連、ベルリン封鎖
		6.28　福井地震、死者3700人余
	7.1　沖縄タイムス創刊 7.1　最初の琉球切手7種発行	
	7.16　第3次通貨交換、新日本円からB円に統一	7.29　第14回五輪ロンドンで開幕
		8.15　大韓民国樹立 大統領に李承晩就任
	8.18　ハワイ沖縄救済更正会による戦後初の米国留学生那覇空港を発つ	8.29　ヘレン・ケラー、11年ぶり二度目の来日
	9.27　ハワイ沖縄救済更正会から贈られた豚573頭到着	
9.29　前川清春出生		9.9　朝鮮民主主義人民共和国樹立、金日成首相に就任
11.18　赤峯悦生出生	10.4　福岡に沖縄関係戸籍事務所設置	9.18　全学連結成
	10.4　リビー台風沖縄諸島を襲い死者20人	10.1　警視庁と大阪府警110番を設置
12.5　友利清一出生	10.29 本土沖縄間の渡航許可制となる	10.19 第2次吉田内閣成立
		11.12 極東軍事裁判判決 東条英機ら7人絞首刑
		12.7　昭電疑獄で芦田前首相逮捕

流行歌	***映画***	***書籍***	***その他***
◇「憧れのハワイ航路」 ◇6月1日10歳の美空ひばり、横浜国際劇場でデビュー、岡晴夫の「港シャンソン」を歌う	◇「ヘンリー5世」 ◇「王将」	◇「菊と刀」ベネディクト ◇6.13 太宰治入水自殺	◇10.8 電球、歯磨きなど111種が自由販売に ◇この年、旺文社が大学入試の模擬試験を開始 ◇この年平和通りにテント小屋の市場が立つ



赤崎栄
神奈川歯科大学

self possession



赤嶺裕也
東京医科歯科大学

趣味は旅、テニス
座右の銘「一期一会」



前川清春
東京歯科大学



赤峯悦生
九州歯科大学

旅行・ウォーキング・映画・庭いじり・美術鑑賞
座右の銘「進士の学は日に新たなり」



友利清一
日本歯科大学

ドライブ、真夜中に音楽を聴きながらあてもなく走っています

昭和23年～昭和24年（1948～1949）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
2.10　屋宜優出生	12.15 沖縄婦人連合会結成 12.28 沖縄復興計画全体委員会開催	12.10 国連総会「世界人権宣言」を採択 12.24 A級戦犯釈放 12-29 免田事件
【昭和24年】	【昭和24年】	【1949年】
		1.26 法隆寺金堂壁画喪失
	3.19 日本政府、本土から沖縄への旅券発行開始	3.7　経済安定政策（ドッジ・ライン）公表
5.16　国定剛出生	4.11　沖縄軍政官府創設 7.2　第1回沖展開催 7.13　米国陸軍資金による米国留学制度（米留）発足、派遣学生2人を決定	4.4　NATO北大西洋条約締結 4.25　1ドル=360円の単一為替レート実施
10.18 太田正昭出生	7.23　グロリア台風襲来 10.1　米軍政府、沖縄議会の解散を指令	7.6　下山事件 7.15　三鷹事件
10.31 与儀實篤出生	10.1　シーツ軍政長官着任 10.22 沖縄議会解散、任命制の沖縄民政議会設置	8.26　シャウプ税制勧告
11.3　金城朝和出生	―　4群島の軍政府を統括する琉球軍政本部を設置	9.7　西独正式発足
11.13 金城孝出生		10.1　中華人民共和国成立
	11.18 沖縄民政府、上之山校跡から天妃校跡に移転	11.3　湯川秀樹ノーベル物理学賞授与
		11.30 対共産圏輸出統制委員会（ココム）設立

流行歌	*映画*	*書籍*	*その他*
✧「青い山脈」 ✧「銀座カンカン娘」 ✧「長崎の鐘」 ✧「イヨマンテの夜」 ✧「トンコ節」 ✧「君忘れじのブルース」	✧「鐘のなる丘」「晩春」「野良犬」「青い山脈」「月よりの使者」「戦火のかなた」「哀愁」「痴人之愛」「悲しき口笛」 ✧8.14　映画倫理規定管理委員会（映倫）設立	✧戦後初の芥川賞決定 「本の話」由起しげ子 「確証」小谷剛	✧7.1 米1950会計年度予算に沖縄軍事施設費5000ドルを計上、基地建設本格化



屋宜優
朝日大学歯学部



国定剛
神奈川歯科大学



太田正昭
九州歯科大学

夢に心入れよ、愛に心忘るな、因の支え心せよ大悲と一期一会



金城朝和
明海大学歯学部

苟日新、日日新、又日新



金城孝
東京医科歯科大学

昭和 24 年～昭和 25 年（1949～1950）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
12.26 新里正武出生	11.18 日琉金融協定・貿易協定締結 12.12 沖縄ヘラルド創刊	12.1 初のお年玉つき年賀はがき発売（2円、3円） 12.27 インドネシアの初代大統領にスカルノ就任
【昭和 25 年】	【昭和 25 年】	【1950 年】
1.2 阿嘉徳真出生	1.17 米軍政府、食料大幅値上げを発表 1.20 米軍政府、琉球放送局（ＡＫＡＲ）の放送開始	1.7 新千円札発行（聖徳太子の肖像） 1.26 インドが新憲法施行 独立記念式典を行う
4.3 金城賢治出生	2.15 ＧＨＱ沖縄に恒久基地建設を開始すると発表	2.9 米上院議員マッカーシー、国務省に 57 人の共産党員と演説「マッカーシー旋風」始まる
 1951 年頃の糸満ロータリー	3.31 公営バス廃止 4.1 沖縄バス、協同バス創立 4.1 琉球郵政省発足 4.1 琉球農林省発足	4.4 第 1 回全国植樹祭、甲府市で開催 4.21 蟹川虎三、京都府知事に当選、初の社会党知事に 4.22 山本富士子、初の「ミス日本」に選ばれる
5.4 前川雅春出生 5.5 友寄景淳出生	4.10 琉球復興金融基金（1 億円）創設 4.12 ドルとＢ円の交換率、1 ドル=120 円に設定 4.－ 教員訓練所を糸満、コザ前原、名護に設置	5.1 北海道開発庁設置

流行歌	*映画*	*書籍*	*その他*
◇「桑港のチャイナタウン」 ◇「夜来香」 ◇「水色のワルツ」	◇「また逢う日まで」 ◇「帰郷」 ◇「赤い靴」 ◇「乙女の性典」 ◇「暴力の町」 ◇「暁の脱走」 ◇「石中先生行状記」	◇「キンゼイ報告」 ◇ 4 月 2 日吉川英治「新・平家物語」を週刊朝日に連載開始	◇ 1950 年ころからスクラップブーム起こる ◇ 平均寿命 60 歳こえる



新里正武
東北大学歯学部



阿嘉徳真
東京歯科大学

趣味はダイビング、ウォーキング、読書



金城賢治
広島大学歯学部

趣味はカラオケ



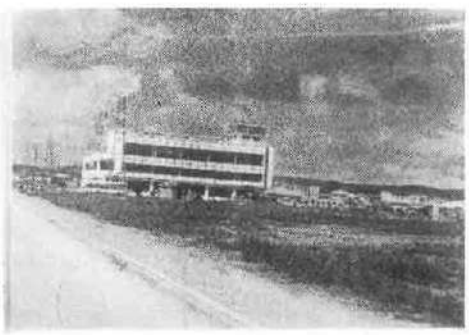
前川雅春
東京歯科大学

特技は飛行機操縦
趣味はウォーキング



友寄景淳
日本歯科大学

昭和25年5月～11月（1950）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
5.5　真境名由守出生	5.22 琉球大学開学、初代学長に志喜屋孝信	
 沖縄タイムス社前	6.15 臨時琉球諮詢委員会発足 6　米軍、天久上之屋一帯の立ち退きを命令	6.6　住宅金融公庫発足 6.25　朝鮮動乱勃発 6.30 東証株価急落、再開以来の最安値つける
7.14　山川修出生	8.1　みなと村、那覇市に合併 8.4 「群島政府組織法」公布	7.2　京都の金閣寺全焼
8.28　新里叡出生	9.12 米軍政府、人民党機関誌を発禁処分 9.17 沖縄群島知事選挙、平良辰雄当選 9.22 日琉貿易協定成立	8.10　警察予備隊令公布 9.11　関脇力道山引退を発表、翌年プロレス転向
9.11　玉城生夫出生	9.24 沖縄群島議会議員選挙	9.26　国連軍ソウルを占拠北朝鮮軍、北へ撤退
11.16 儀間清師出生	10.31 沖縄社会大衆党結成 11.1　民間貿易開始 11.4 沖縄宮古八重山各群島政府発足	10.1　第6回国勢調査（人口8319万9327人） 10.25 朝鮮戦争に中国参戦 11.10 NHK、テレビの定期実験放送開始 11.22 プロ野球第1回日本シリーズ開幕（パの毎日がセの松竹に4勝2敗）

流行歌	映画	書籍	その他
◇「東京キッド」「星影の小径」 ◇「山の彼方に」「買物ブギ」 ◇「あざみの歌」「黒いひとみの」 ◇「トロイカ」「ベサメ・ムーチョ」	◇「羅生門」 ◇「情婦マノン」 ◇「帰郷」 ◇「自転車泥棒」 ◇「細雪」	◇「少年期」波多野勤子、「ものの見方について」笠信太郎、「武蔵野夫人」大岡昇平 ◇5月24日井伏鱒二、斎藤茂吉らに第1回読売文学賞	◇6月26日最高検、「チャタレイ夫人の恋人」を猥褻として押収を指令 ◇11月3日オリンパス光学工業と東大病院が、胃カメラを共同開発



真境名由守
日本大学歯学部

趣味は奇術、ゴルフ

座右の銘「自分の体は自分で持て」



山川修
日本歯科大学
新潟歯学部

好きな言葉「誠・信・望」

妻　：礼子
息子：誠



新里叡
新潟大学歯学部



玉城生夫
福岡歯科大学



儀間清師
福岡歯科大学

特技は老人に気に入られる事。趣味はエレキギター、英語、なはマラソン。「Time and tide wait for no man（一日一生）」

昭和25年～昭和26年（1950～1951）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
12.6　平良敏彦出生	12.8　琉球列島民政長官にマッカーサー元帥就任 12.15 琉球軍政府を琉球列島米国民政府と改称	12.7 池田首相、参院で「貧乏人は麦を食え」と発言
【昭和26年】	【昭和26年】	【1951年】
2.15　長嶺将秀出生	1.5　沖縄群島政府移民計画策定 1.9　米軍、朝鮮戦争のため灯火管制を敷く 1.19 個人貿業が認められる 3.15 琉台貿易開始	1.1　北朝鮮・中国軍が反撃38度線を越える 1.25 米講話特使ダレス来日
2.22　黒潮武嗣出生 4.　東京医科歯科大学、大阪大学歯学部設置 4.1　渡名喜吉子、宮城トシ、村田芳子入会 4.9　砂川英樹出生 4.14　外間宏正出生		2.15 東京に15年ぶりの大雪、積雪34㎝を記録
6.1　上原利子、比嘉良有入会	3.31 臨時琉球諮詢委員会解消 4.1　琉球臨時中央政府発足、主席に比嘉秀平任命 4.6　本島の土地所有権証明書交付開始	3.4　第1回アジア競技大会（ニューデリー）
	4.29 日本復帰促進期生会結成6月までに復帰要求署名有権者の72%に達す	4.11 マッカーサー国連軍最高司令官を罷免
	9.8　日米安保条約、対日講和条約調印	7.31 戦後初の民間航空会社日本航空設立
		9.30 米国で人工心臓を用いての手術に成功



琉球政府ビル

流行歌	*映画*	*書籍*	*その他*
◇「アルプスの牧場」 ◇「あざみの歌」 ◇「上海帰りのリル」 ◇「ヤットン節」	◇「自由学校」「麦秋」「めし」「イヴの総て」「邪魔者は殺せ」「黄色いリボン」 ◇9.10 ベネチア映画祭で「羅生門」がグランプリ獲得	◇「沖縄の悲劇」仲宗根政善著 ◇「原爆詩集」峠三吉 ◇4月16日「サザエさん」が朝日新聞に連載開始	◇沖縄初のガソリンスタンド設置 ◇テープレコーダー登場 ◇1951年1月3日NHK第1回紅白歌合戦を放送



平良敏彦
日本歯科大学



長嶺将秀
日本大学歯学部

趣味はゴルフ、読書



黒潮武嗣
日本歯科大学
新潟歯学部

趣味は走ること、水中散歩、山のぼり

座右の銘「命ど宝」



砂川英樹
神奈川歯科大学

Let us, then, be up and doing, With a heart for any fate; Still achieving, still pursuing, Learn to labor and to wait.



外間宏正
日本大学松戸歯学部

趣味はバイク、ライフル、空手、無線、自転車、ウォーキング

昭和 26 年～昭和 27 年（1951～1952）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
11.23　仲間正武出生	11.24 琉球煙草（株）設立	12.1日医、保険単価問題で保険医辞退決議
【昭和 27 年】	12.24 B円の新千円札発行	【1952 年】
3.28　金城光也出生 4.　東京歯科大学、日本歯科大学、日大歯学部、大阪歯科大学、設立 4.6　玉城直子出生	【昭和 27 年】 1.－ 米国総領事館開設	1.4 英軍、スエズ運河を封鎖
5.16　竹尾孝明出生	2.29 布告第 13 号「琉球政府の設立」公布 布令第 68 号「琉球政府章典」公布	1.18 李承晩ライン設置
6.1　瀬底正俊入会	3.2　第１回立法員議員選挙	2.14 第６回冬期五輪オスロで開幕
8.6　儀保邦泰出生	3.18 琉球米民政府、軍用地使用料の支払いを回答、坪１円８銭の低額で以後７年間紛争続く	2.26 チャーチル英首相、原爆所有を言明
 南方連絡事務所	4.1　琉球政府発足、米民政府初代行政主席に比嘉秀平を任命	3.4 十勝沖地震、死者行方不明 33 人
	4.28 対日講和条約、日米安保条約発効	4.9　日航定期旅客機「もく星号」米軍管制下、三原山に激突遭難
	7.1　日本政府那覇に南方連絡事務所を設置	5.19 ボクシングフライ級の白井義男、日本人初の世界チャンピオンに
		7.19 第 15 回五輪ヘルシンキ大会日本復帰
		8.1　日本電信電話公社発足

流行歌	映画	書籍	その他
◇「あゝモンテンルパの夜は更けて」 ◇「リンゴ追分」 ◇「若者よ」 ◇「テネシーワルツ」	◇「生きる」「若い人」「真空地帯」「本日休診」 ◇「第三の男」「カサブランカ」「殺人狂時代」「風と共に去りぬ」「陽のあたる場所」	◇マーク・ゲイン「ニッポン日記」 ◇「明星」創刊 ◇安田徳太郎「人間の歴史」 ◇源氏鶏太「三等重役」 ◇川端康成「千羽鶴」	◇親子ラジオ普及 ◇電気冷蔵庫登場 ◇4月10日ＮＨＫ連続ラジオドラマ「君の名は」スタート、毎週木曜日 20：30―9：00



仲間正武
福岡歯科大学

趣味は囲碁、読書
座右の銘「継続は力成り」



金城光也
日本歯科大学
新潟歯学部

特に趣味はありませんが、気の合う仲間と語る(飲む）事は大好きです



玉城直子
東京医科歯科大学



竹尾孝明
日本大学松戸歯学部



儀保邦泰
日本大学松戸歯学部

「ヒヤッ」とすることが多くなった。安全運転に心がけます。

昭和 27 年～昭和 28 年（1952～1953）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
8.19　長嶺尚子出生	8.31　琉球民主党結成	10.15 保安隊創設
10.15 上里和美出生	10.10　崇元寺石門修復落成	12.20 東京青山に日本初のボーリング場開設
12.8　島袋泰弘出生	12.－　金門クラブ（米留経験者の親睦団体）発足	
【昭和 28 年】	【昭和 28 年】	【1953 年】
 山形屋からガーブ橋、安里を望む	2.1　ＮＨＫテレビ放送開始	3.5　スターリン死去
8.15　赤嶺雅和出生	4.3　土地収用令公布 4.11　米軍真和志村で土地強制収容 4.29　安謝・銘苅土地収容問題起こる 6.16　沖縄市町村土地特別委員会発足 7.15　伊江島土地闘争起こる 11.20 ニクソン米副大統領来沖 12.5　米軍小禄村で土地強制収用 －　スクラップ・ブーム、ピークに達する	5.12　外務省１$=360円平価決定を発表 7.27　朝鮮戦争休戦協定板門店で調印 12.1　新百円札発行　肖像は板垣退助
12.9　護得久朝保出生		

流行歌	映画	書籍	その他
◇「君の名は」「雪の降る町を」「町のサンドイッチマン」	◇ 1.15『ひめゆりの塔』大宝館で封切上映 ◇ 10.16『沖縄健児の塔』沖映で封切 ◇「東京物語」「雨月物語」「君の名は」「禁じられた遊び」「終着駅」「風と共に去りぬ」	◇ 南博「中国」 ◇ ボーヴォワール「第二の性」 ◇ A・フランク「光ほのかに」	◇ 米軍、軍人・軍属向け風俗営業者へＡサイン制度実施 ◇ 与儀に農連市場開設 ◇ 米国救援物資による学校給食一部で実施

				
長嶺尚子 九州歯科大学	**上里和美** 鶴見大学歯学部	**島袋泰弘** 東京医科歯科大学	**赤嶺雅和** 日本歯科大学 特技　料理 趣味　コンピュータ 座右の銘は 主一無適	**護得久朝保** 広島大学歯学部 ゴルフ、ウォーキング、読書

昭和 29 年 1 月～8 月（1954 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和 29 年】	【昭和 29 年】	【1954 年】
1.15　与那城勇入会	1.7　米大統領、沖縄の米軍基地無期限保持を表明。 2.5　日航機、日琉間就航 2.18　南米移民出発開始	1.14マリリンモンロー、ジョー・ディマジオと結婚（１０．４離婚発表） 1.15　憲法擁護国民連合結成
3.1　沖縄群島における開業医師、歯科医師の配置廃止。 3.－　日歯大、杉崎寿、秋山太一郎教授招聘、講演会開催		2.1 マリリンモンロー来日
4.2　琉球歯科医師会解散総会、沖縄歯科医師会設立総会 (会長・平良進、副会長・高江州義光 専務理事・知花英夫、会計理事・小那覇全孝 監事・知花朝申、村田哲雄) 4.14　湖城秀仁出生	4.1　琉球放送局発足 4.14　文化財保護調査委員会発足 4.26　移民金庫発足 4.27　米民政府、50 人以上の行進集会を警察の許可制にする。 4.30　立法院、軍用地問題で土地 4 原則を打ち出す。	3.1　米 ビキニ環礁で水爆実験、日本の第５福竜丸被爆 3.8 日米相互防衛援助協定（ＭＳＡ協定）調印 4.26ジュネーブ会議開催
5.3　沖縄歯科医師会臨時総会、定款一部改定。 5.7　高嶺明彦出生 5.22　1954 年度 定期総会(教育会館) 5.31　長濱正出生	5.14　八重山計画移民第１陣、西表古見へ出発 5.－　奄美に「食管法」施行	6.19　名古屋のテレビ塔完成 7.1　防衛庁設置 陸海空自衛隊発足 新警察法施行
7.21　比嘉民子出生	7.1　防衛庁、自衛隊発足 7.26　立法院庁舎落成	7.10　日本文化放送、初の深夜放送を開始。 7.21　インドシナ戦争休戦のジュネーブ協定調印
8.26　照屋均出生	8.1　那覇泊港開港	8.　E.プレスリーがデビュー

流行歌	***映画***	***書籍***	***その他***
✧ お富さん	✧「羅生門」 カンヌ映画祭グランプリ受賞 ✧「7 人の侍」黒沢明監督 ✧ ディズニー映画「ダンボ」 初の日本語吹き替え映画 ✧ Ｏ．ヘプバーン主演「ローマの休日」	✧「潮騒」三島由紀夫	✧ 電気洗濯機、急速に普及 ✧ 男性ファッションモデル登場 ✧ 映画入場料（東京 100 円。徳島 47 円） ✧ バキュームカー登場



湖城秀仁
日本歯科大学



高嶺明彦
福岡歯科大学



長濱正
神奈川歯科大学



比嘉民子
東京歯科大学

趣味は絵画鑑賞、ガーデニング

座右の銘「中庸」



照屋均
北海道大学歯学部

趣味はゴルフ、読書、映画鑑賞

昭和29年8月～11月（1954年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和29年】	【昭和29年】	【1954年】
8.27　阿嘉宗三出生		
9.3　友寄清順出生	9.1　首里市,小録村　那覇市に合併	
 1954年　國際通りの改修工事	9.10　米軍援助、現物から現金給与方式に変わる	9.26　台風15号で青函連絡船「洞爺丸」が転覆、1155人死亡 9.27　中国第1期全人代、毛沢東を国家主席に選出
10.17 高良政憲出生	10.1　琉球放送が民放ラジオを開始 10.6　人民党事件（沖縄米軍、強制接収反対の瀬長亀次郎ら3人逮捕）	10.3　栃錦横綱に昇進、推挙式
11.1　高良政利入会	11.1　オグテン民政副長官「土地問題4原則は非現実的、公共のためいかなる私有地も取得」と立法院に書簡 11.1　教育会館落成	11.3　法隆寺金堂「昭和大修理」が完了
11.11 長嶺和弘出生	11.7　沖縄刑務所暴動起こる	11.7　プロ野球日本シリーズ、中日が初の日本一に
11.25 新崎裕子出生		11.24 日本民主党、結成。総裁に鳩山一郎を選出

流行歌	***映画***	***書籍***	***その他***
◇ 高原列車は行く	◇「二十四の瞳」 木下恵介監督 ◇ 東宝の特撮映画「ゴジラ」封切	◇「女性に関する十二章」 伊藤整	◇ ヘップバーン「麗しのサブリナ」でトレアドール・パンツ流行



阿嘉宗三
奥羽大学歯学部

趣味はスカッシュ、水泳、ボーリング



友寄清順
日本歯科大学
新潟歯学部

座右の銘
「温故知新＋和」

家族は　妻　文子、
長女 未来、次女 ひかる



高良政憲
日本歯科大学
新潟歯学部

座右の銘「中庸」



長嶺和弘
九州大学歯学部

特技はゴルフを10年以上もやって未だに100前後という特技。趣味はジョギング



新崎裕子
日本歯科大学

— 夢 —
NBAの試合を家族4人アメリカでみたい

昭和 29 年 12 月～30 年 1 月（1954 年～55 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和 29 年】	【昭和 29 年】	【1954 年】
12.－ 社会保険課税率を 28％に決定		12.10 第一次鳩山内閣成立
12.3 玉城英人出生	12.17 宜野座ダム起工式	12.22 政府 憲法第 9 条の統一解釈を発表（自衛権保有・自衛隊は合憲）
12.19 当間淳司出生		
12.29 高宮城實之出生		12.30 米科学者グループ、光合成実験に成功と発表
【昭和 30 年】	【昭和 30 年】	【1955 年】
1.3 宮里正出生	1.13 「朝日新聞」特殊記事‘米軍の「沖縄民政」を衝く’を掲載（日本本土で「沖縄問題」の論議起こる。）	1.7 トヨタトヨペットクラウンを発表
	1.16 米極東軍司令部、朝日新聞報道に全面的に反論する	1.9 少年自衛隊第 1 次採用試験(衣食住付きで月給 5400 円が魅力で競争率 35 倍)
1.17 高良宗男出生	1.17 アイゼンハワー大統領、予算教書で沖縄占領の無期限継続を再確認する	
	1.17 第一次沖縄教育研究中央大会開かれる	1.19 世界平和評議会、ウィーン・アピールを採択
	1.29 日弁連、沖縄問題特別調査委員会結成を決定	1.30 南北朝鮮統一促進協の全国発起人大会で、民戦と民団が激突し流会

流行歌	***映画***	***書籍***	***その他***
◇岸壁の母	◇「ゴジラ」 本多猪四郎監督 ◇「二十四の瞳」木下恵介監督 ◇「近松物語」 溝口健二監督	◇「女性に関する十二章」伊藤整 ◇「潮騒」三島由紀夫 ◇「愛は死をこえて」 J・ローゼンバーグ	◇ラジオは視聴者参加のクイズが流行る ◇喫煙率 47%、1 位は「新生」 ◇「サザエさん」「フクちゃん」などが新聞連載



玉城英人
松本歯科大学

(過去)＋(現在)＋(未来)＝?

趣味はウフトゥルバイ



当間淳司
松本歯科大学

趣味はボーリング、ゴルフ

座右の銘「堅忍不抜」



高宮城實之
九州大学歯学部

趣味はボウリング、ウォーキング

座右の銘「不将不迎」



宮里正
東京医科歯科大学

大変革の時代にあって動じない不変のものを求めて行きたい。今、池波正太郎の「鬼平」と「剣客商売」にはまっています。



高良宗男
鶴見大学歯学部

趣味は読書

座右の銘「人の行く裏に道あり花の山」

昭和 30 年 1 月～30 年 5 月（1955 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和 30 年】	【昭和 30 年】	【1955 年】
1.28　當山邑子出生	2.4　オグデン民政副長官転出、後任にモーア少将の就任発表	2.15　初の人間国宝に浜田庄司・松田権六ら 30 人
2.26　前城康一出生	2.11　柳家金語楼、沖縄慰問那覇市の大洋劇場にて「沖縄の人々に笑いを」を演ずる	2.25　米から貸与の駆逐艦 2 隻が横須賀に入港
3.－　日歯大、宇賀春雄教授招聘 1955 年度総会(教育会館)、定款の一部改定	3.3　立法院、「軍用地賃借料の一括払い反対」を決議	3.2　ﾌﾟﾛﾚｽ遊びが流行、横浜市で中学生が死亡
 1955 年　整備された那覇市国際通り	3.11　米軍、宜野湾村伊佐浜部落強制土地収容を開始する。住民はテント生活へ 3.14　米軍、伊江島真謝区の軍用地接収を開始する。 3.16　米民政府、「集成刑法」公布 3.18　米民政府、労働組合を認可制とした布令「労働組合の認定手続」を公布	3.19　第二次鳩山内閣成立
4.16　上地智博出生 4.22　大西満出生 5.3　真境名勉出生	4.19　沖縄の人口 78 万 7678 人 4.－　自費琉球学生制度発足	4.1　ラジオ東京(現 TBS)がテレビ局を開局 4.9　初のレギュラースポンサー付きドラマ「日真名(ひまな)氏飛び出す」放映開始 5.5　パリ協定発効、西ドイツが独立国となる

流行歌	*映画*	*書籍*	*その他*
◇ ガード下の靴みがき	◇「浮雲」 ◇ 洋「エデンの東」	◇「君の名は」（菊田一夫）	◇ 坂口安吾 宮武外骨逝去 ◇ マンボスタイル、ポニーテール慎太郎刈り大流行 ◇ 女性サンダル大流行



當山邑子
奥羽大学歯学部



前城康一
日本歯科大学
新潟歯学部
特技は特になし
趣味は読書



上地智博
福岡歯科大学
一言：精神的、体力的に年を感じるこの頃です。40 代でなにができるか模索中です



大西満
福岡歯科大学
座右の銘「思いやり」
趣味は野球、ゴルフ、将棋



真境名勉
日本大学松戸歯学部
特技はなし
趣味は麻雀、ＣＤ蒐集
洋画鑑賞

昭和30年5月～8月（1955年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢

【昭和30年】

5.9　座覇守弘出生

5.21　古波蔵信泉出生



那覇市（新しいビルの建ち始め）

6.15　赤嶺秀紀出生
6.27　比嘉良喬出生
7.－　日本短波放送で「歯科医師の時間」放送開始

8.24　板倉繁巳出生

沖縄の情勢

【昭和30年】

5.8　比嘉琉球民政府主席、米下外交委員会で米軍による土地収用の現状と調査を訴える
5.19　立法院、土地問題四原則を全会一致で確認する。
5.22軍用地問題解決促進住民大会が開かれる
5.23　行政主席ら、四原則による土地問題折衝のため渡米する
6.1　この月、琉球政府「経済振興第一次五ヶ年計画」策定される

7.16　全沖縄軍用地地主大会開かれる。
7.19　米軍、伊佐浜軍用地強制接収を開始する

日本の情勢 海外の情勢

【1955年】

5.14　ワルシャワ条約調印

6.1　初のアルミ硬貨、一円が発行される

7.9　東京・文京区に「後楽園ゆうえんち」が開演
7.15　トニー谷の長男が誘拐される（21日犯人逮捕）

8.6　第一回原水爆禁止世界大会開催
8.7　東京通信工業（現・ソニー）、日本初のトランジスタラジオTR－55を発表
8.8　長崎の平和記念公園で平和祈念像の除幕式

8.24　森永砒素ミルク事件で、厚生省が森永乳業徳島工場製造の粉ミルクの使用禁止を通知

流行歌

◇「月がとっても青いから」
菅原都々子

映画

◇米「暴力教室」
◇「旅情」キャサリン・ヘプバーン

書籍

◇「太陽の季節」石原慎太郎

その他

◇全国の電話加入台数二百万台を超え、祝賀会を開催（戦後の二倍、世界第六位）。
◇ペチコートの入った「落下傘」スタイル流行



座覇守弘
奥羽大学歯学部

趣味は格闘技研究、水泳



古波蔵信泉
福岡歯科大学

趣味はウォーキング、テニス



赤嶺秀紀
福岡歯科大学

座右の銘「誠実、念ずれば花咲く」
趣味はつり、パソコン



比嘉良喬
日本歯科大学新潟歯学部

特技は乗馬、スキー
趣味は旅行



板倉繁巳
奥羽大学歯学部

昭和30年9月～31年5月（1955年～56年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和30年】	【昭和30年】	【1955年】
9.16 金城秀男出生	9.3 米兵が6歳の幼女を暴行殺害。（由美子ちゃん事件）12月6日に米兵死刑宣告	9.1 電電公社、大都市16区間で即時通話を実施。電話回線が3倍に増設され、東京―神戸間では特急でも30分かかったものが1分で通話できるようになった
10.13 第1回アジア学術会議設立総会 特例技工士法制定(沖縄は復帰時に制定) 10.18 日本歯科評論主催「沖縄の歯科を語る座談会」(森田ホール) 10.20 中原実日歯大学長、日本代表として中国訪問の途次来沖	10.15 沖縄人権擁護委員会発足 10.23 米下院軍事委派遣のブライス調査団来島 10.24 米軍、7.30に原子砲を沖縄に持ち込んだ事を発表	9.10 ガットに正式加盟 9.30 ジェームス・ディーン交通事故死
11.14 城間吉弘出生 11.18 医師法、歯科医師法立法化 11.22 川平昌彦出生	12.1 琉球政府裁判所の民事裁判権拡大 12.－ 石垣空港開港	10.1 第8回国勢調査(8927万5529人) 11.15 自由民主党結成
【昭和31年】	【昭和31年】	【1956年】
2.3 嘉手納懇計元(南部支部)支部長逝去	4.1 リバック救援物質によるミルク給食、全小学校で実施	4.1 医師会が反対した医薬分業制度実施
4.11 安里博出生 4.14 保険問題で臨時総会開催 5.18 1956年度総会、役員改選 会長・平良進、副会長・高江州義光、 専務理事・知花英夫、会計理事・村田哲雄 5.9 塩浜康良出生		5.21 米、ビキニ環礁で初の水爆投下実験

流行歌	映画	書籍	その他
✧「おんな船頭唄」三橋美智也	✧「ジャンケン娘」 江利チエミ、美空ひばり、雪村いずみ初共演	✧「流れる」幸田文	✧ 理研光学工業より複写機「リコピー101」、自動電気釜が東芝より登場服部時計店(現セイコー)が国産初の自動巻き腕時計「セイコーオートマチック」を製造 ✧ 都市勤労者平均月収は2万6262円



金城秀男
北海道医療大学歯学部

座右の銘「汝の立つところを深く掘れ、そこに泉あり」



城間吉弘
福岡歯科大学

デミダス片手に音楽聴きながらの休日の早朝ドライブがストレス解消。



川平昌彦
明海大学歯学部



安里博
福岡歯科大学

趣味はテニス
座右の銘「温故知新」
家族は妻：房江
子ども：啓、晨



塩浜康良
日本大学松戸歯学部

座右の銘「努力」
趣味は日曜大工など物を作ったり直したりすること

昭和31年5月～9月（1956年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢

【昭和31年】

5.19　志村圭子出生



1956年当時城岳から琉球政府、右に那覇高校

8.15　長浜真徳博士の講演会「ペニシリンショック」

8.25　湖城秀久出生
8.27　神元憲和出生

9.17　普天間悟出生
9.17　宇根良出生

沖縄の情勢

【昭和31年】

6.8　米民政府、沖縄軍用地接収のプライス勧告発表（沖縄側の土地四原則要求無視）
6.－　先島航路開設

7.－　コザ市発足
7.28　那覇市で四原則貫徹県民大会開催（十数万人参加）

8.8　米軍、コザ地区への立ち入りを禁止「オフリック」発令（～8.14）
9.3　琉大志喜屋図書館焼ける

日本の情勢 海外の情勢

【1956年】

5.19　科学技術庁発足
5.24　売春防止法公布

6.3　大相撲夏場所で若の花が初優勝
6.3　学校医らが虫歯・寄生虫・トラコーマの三大病撲滅運動五ヶ年計画を開始と新聞に
6.7　全労週四二時間の時短運動推進を決議

6.10　日本、サッカーのメルボルン五輪出場が決定
6.15　茨城県東海村に日本原子力研究所発足
6.23　エジプト初代大統領にナセル選出

7.3　鉱工業生産指数が過去最高を更新（神武景気）

流行歌

✧「ここに幸あり」大津美子

映画

✧「ビルマの竪琴」市川崑監督
✧「ヘッドライト」ジャン・ギャバン

書籍

✧「太陽の季節」石原慎太郎
✧「女優」森赫子

その他

✧ 何でも落ちる合成洗剤「トップ」(250g入り50円)発売
✧ 永谷園から「お茶づけ海苔」発売



志村圭子
日本歯科大学 新潟歯学部

趣味はゴルフ、スポーツ全般



湖城秀久
昭和大学歯学部

昭和59年昭和大学卒業、平成2年帰郷、平成4年浦添市大平にて開業。



神元憲和
日本歯科大学 新潟歯学部

趣味はダンス、食べ歩き
家族は妻・麗、長男・和繁、次男・繁昂、三男・繁信



普天間悟
大阪大学歯学部

趣味はバスケット、ジョギング、ダイビング



宇根良
神奈川歯科大学

特技はバスケットボール
趣味は釣り

昭和31年9月～12月（1956年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和31年】	【昭和31年】	【1956年】
9.－　沖縄県歯科技工士会発足(会員 30余人) 9.30　城間三男出生		
10.－　日本医師会遠藤長英理事来沖 10.－　健康保険について医師会と合同研究		10.19 日ソ共同宣言に調印、11年ぶりに国交回復 10.23 ハンガリー事件(ブダペスト)
10.17 宮良修出生	10.25 比嘉主席、死去する	
11.10 太田恭子出生	11.1　レムニッツアー民政長官、行政主席に当間重剛那覇市長を任命する	11.8　第一次南極予備観測隊の観測船「宗谷」東京出港 11.19 東海道本線全線電化が完成 11.22 第16回メルボルン五輪開幕
		12.2　ラジオ東京で東芝「日曜劇場」放映開始 12.18 国連総会、日本加盟を承認。 12.20 NHK、カラーテレビ東京実験局を開局 12.23 第1回中山グランプリ（後の有馬記念）開催
12.13　前川一彦出生		
12.30　上原智也出生	12.25 那覇市長選で人民党の瀬長亀次郎が当選 12.27 米民政府、瀬長当選で那覇市の銀行貯金を凍結、都市計画融資・補助を中止	

流行歌	***映画***	***書籍***	***その他***
◇「この世の花」島倉千代子 ◇ どうせ拾った恋だもの	◇「狂った果実」 石原裕次郎・北原三枝主演	◇「夜と霧」V・フランクル ◇「大菩薩峠」中里介山	◇ 高村光太郎、浦口健二逝去 ◇ 水俣病が多発・問題化 ◇ 学生アルバイトで歯科医師国家試験の試験台が話題に



城間三男
大阪大学歯学部

座右の銘「即今只是」
趣味はスポーツ全般、特にバスケットボール、マラソン



宮良修
大阪大学歯学部

座右の銘「初心忘れるべからず」 趣味はゴルフ、テニス、油彩



太田恭子
明海大学歯学部

特技は琉球料理
趣味は水泳、ピアノ
家族は夫、娘、息子
座右の銘「ムヌ(食事)はワタヌミー、シクチ(仕事)はナイルウッピ)」



前川一彦
東京歯科大学

趣味はバスケット、ゴルフ、野球



上原智也
九州歯科大学

趣味はゴルフ、野球

昭和32年1月～5月（1957年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和32年】	【昭和32年】	【1957年】
1.9　高津式(日本歯科評論社長)講演会(登美の家)	1.3　沖縄銀行協会、「共産主義者と思われる。」として瀬長那覇市長との全取り引きを停止	1.5　米大統領、中東特別教書を提出。対ソ強硬姿勢を打ち出す（アイゼンハワー・ドクトリン）
		1.13　美空ひばり、ファンに塩酸をかけられて火傷
1.20　高江洲實出生		1.18　中・ソ共同宣言発表（社会主義諸国の団結を強調）
1.31　東盛靖出生		1.29　南極地域予備観測隊、オングル島に上陸し、観測基地を「昭和基地」と命名
2.11　比嘉隆夫出生	2.11　琉球米民政府、瀬長那覇市長の本土渡航却下。	
2.28　玉城吉康出生	2.16　社大党、沖縄の日本返還など対米要望決議	
4.2　玉城均出生	2.23　米民政府、「米合衆国土地収用令」公布	2.25　第一次岸内閣成立。石橋内閣の全閣僚留任
5.17　1957年度総会		3.25　仏・西独・伊・ベネルクス三カ国欧州共同市場（ＥＥＣ）条約調印
5.30　歯の女王コンクール発表会(タイムス)		4.1　官庁がメートル法に統一
	5.29　米国防省、沖縄に「ナイキ」地対空ミサイルの基地建設発表	

流行歌	*映画*	*書籍*	*その他*
◇「錆びたナイフ」 ◇「骨子」	◇洋「追」ジュリエッタ・マシーナ ◇「挽歌」	◇「愛のかたみ」田宮虎彦・千代 ◇「美徳のよろめき」三島由紀夫	◇コカコーラが上陸 ◇ポリエチレン製のバケツ「ポリバケツ」を開発 ◇ラジオ東京、「赤胴鈴之助」放送開始。 ◇日産スカイライン登場



高江洲實
明海大学歯学部

趣味はジョギング

座右の銘「延年益寿」



東盛靖
広島大学歯学部

趣味はゴルフ、テニス

座右の銘「精神一到何事か成ざらん」



比嘉隆夫
鶴見大学歯学部

特技はカラオケ
趣味はテニス、読書



玉城吉康
日本大学歯学部

ゴルフ好き、酒好き



玉城均
北海道医療大学歯学部

誰も計画的に道を選ぶことは少ない。何人かの出会いが道をつけると察す

昭和 32 年 6 月～33 年 1 月（1957 年～1958 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和 32 年】	【昭和 32 年】	【1957 年】
6.－ 日本歯科医師会館着工	6.5 米大統領、「琉球列島の管理に関する行政命令」を発表、高等弁務官制度の設置を決定。	6.－ 岸首相訪米し、日米共同声明（日米安保委設置・米地上軍撤退）
6.29 西平栄次郎出生	6.19 米軍、120 ヘクタールの新規土地収容を発表。	7.1 初のフィルター付きタバコ「ホープ」発売。
7.1 沖縄県歯科医師会会報第 1 号発行（ガリ版）	7.4 初代琉球列島高等弁務官にモーア中将が就任。	8.26 ソ連、大陸間弾道弾（ICBM）実験に成功。
9.10 技工士講習会	11.23 モーア高等弁務官、瀬長市長追放のため「市町村選挙法」を改定し「市町村自治法」を公布する。	9.25 立法院、「教育 4 法」三たび可決。
11.7 小場幸夫出生	11.25 那覇市議会、布令改正に基ずき瀬長市長不信任案を可決する。	10.4 ソ連、世界初の人工衛星「スプートニク」打ち上げに成功。
12.25 古堅譲出生	12.17 真和志市、那覇市に合併する	12.17 米、大陸間弾道弾（ICBM）実験に成功。
12.28 加藤進作出生	12.23 極東放送、開局する。	
【昭和 33 年】	【昭和 33 年】	【1958 年】
1.29 下地玲子出生	1.7 高等弁務官、教育四法を承認	1.1 日本国連安全保障理事会の非常任理事国
	1.12 那覇市長選、革新系の兼次佐一当選	1.1 東京通信工業、社名をソニーに変更。
		1.20 日本・インドネシア平和条約・賠償協定調印（ジャカルタ）
		1.31 米 第一号人工衛星打ち上げ成功

流行歌	***映画***	***書籍***	***その他***
✧「俺は待ってるぜ」石原裕次郎 ✧「チャンチキおけさ」三波春夫	✧「喜びも悲しみも幾年月」木下恵介 ✧「翼よ！あれが巴里の灯だ」ジェームス・スチュワート ✧「戦場にかける橋」ウィリアム・ホールデン	✧「植山節考」深沢七郎 ✧「挽歌」原田康子 ✧「鍵」 谷崎潤一郎	✧「赤胴鈴之助」の歌と刀の玩具が人気 ✧ ダイハツ「ミゼット」（249cc、8馬力）が198000円で登場、大人気。 ✧「ウテナ男性クリーム」が発売



西平栄次郎
北海道医療大学歯学部



小場幸夫
明海大学歯学部



古堅譲
新潟大学歯学部

座右の銘「禍福はあざなえる縄の如し」
特技はバレーボール
趣味は読書、ドライブ



加藤進作
神奈川歯科大学

座右の銘「全力投球」
特技は安全運転
趣味は野球、フィッシング



下地玲子
神奈川歯科大学

昭和 33 年 2 月～3 月（1958 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和 33 年】	【昭和 33 年】	【昭和 33 年】
	2.1　那覇先島間無線電話開通	2.1　アラブ連合共和国成立
		2.4　日印通商協定・円借款協定調印
2.6　知花英夫専務理事立法院議員出馬のため辞任		
2.7　山城正裕出生	2.5　ガーブ川氾濫（翌 10.16 再度氾濫）	2.5　アラビア石油設立。ペルシャ湾の油田が目的
		2.18　東京の地価高騰で土地争いが急増と新聞に
	2.13　琉球政府結核患者の東京での入院を求める。	
2.26　平良浩出生	2.16　沖縄社会党結成大会。祖国復帰などを決議。	2.22　文部省小学校体育に「回れ右」など号令復活。
2.27　高里盛期会員逝去		
		3.3　富士重工、軽乗用車「スバル３６０」発表。
3.－　知花英夫前専務立法院議員に当選		
3.－　日本歯科医師会、会長に佐藤運雄選任		
3.－　第２回アジア歯科会議		3,9　下関で関門国道トンネル（3461 メートル開通式。
3.2　玉那覇哲出生	3.13　琉球米民政府社党代表の沖縄渡航を不許可。	
3.22　山川景康出生	3.16　琉球立法院総選挙。社会大衆党が第一党に。	
3.28　比嘉千春出生		3.18　米、伊丹飛行場を返還（34 年に大阪国際空港に）
		3.30　東京千駄ヶ谷の国立競技場が落成式。

流行歌	*映画*	*書籍*	*その他*
◇　沖縄「酒の罪」（蔵良垣苗子・山内昌徳） ◇　「オーイ中村君」若原一郎	◇「無法松の一生」 ◇「十戒」	◇「人間の条件」五味川純平 ◇「陽のあたる坂道」石坂洋次郎	◇ 横山大観・山川均逝去 ◇ アルミホイール登場 ◇ 栄養補給ジュース「プラッシー」が人気



山城正裕
九州大学歯学部

趣味は小動物を飼うこと、ウォーキング、読書



平良浩
神奈川歯科大学

特技は野球

座右の銘「努力・知恵・運」



玉那覇哲
広島大学歯学部



山川景康
日本大学松戸歯学部

趣味はゴルフ、パソコン

家族は妻・明美、長女・菜央



比嘉千春
福岡歯科大学

二流の医者と言われるより、一流のヤブ医者と呼ばれたい

昭和 33 年 4 月～9 月（1958 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢

【昭和 33 年】

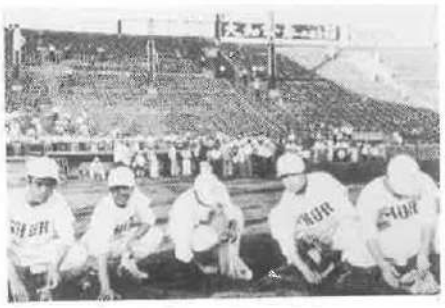
4.　九州歯科大学設立
4.2　高良兼次 出生

4.29　富島修出生

5.1　林昭治入会

5.19　定期総会（岸本ホール）。役員改選
会長・高江州義光、副会長・山川文雄
専務・永井長秀、会計・中地庸之
監事・小那覇全考、上原信雄

5.24　嘉数武男出生
7.8　奥住守彦出生



1958 年首里高校が甲子園初出場

9.8　長堂忍出生

沖縄の情勢

【昭和 33 年】

4.11　高等弁務官、軍用地代一括払い中止を発表
4.17　沖縄読谷村沖で沈没船の解体中に砲弾が爆発
4.22　第 3 回アジア競技大会の聖火、沖縄着

5.20　米国政府、上訴審裁判所設立
5.24　米軍、中距離弾道ミサイル（ＩＲＢＭ）申し込む
5.27　泊港ターミナルビル完成

7.7　琉球行政府主席、軍用地問題で来と共同声明
8.9　第 40 回全国高等学校野球選手権大会開幕、沖縄から初めて首里高校が出場
8.11　那覇市で第一回の沖縄軍用地問題の現地折衝
8.26　首里高校が持ち帰った甲子園の土が植物防疫法に触れると、那覇港で海中に投棄される

9.16　B 円から米ドルへ（第四次通貨交換）

日本の情勢 海外の情勢

【1958 年】

4.1　売春防止法全面施行（罰則規定を新設）
4.10　学校保険法公布。学校医、保健室の設置など
4.15　第 1 回アフリカ諸国会議
4.19　日本では、20 世紀最後となる金環食を観測

5.16　テレビの受信契約者数が１００万を突破
6.1 仏ドゴール内閣成立
6.18　日銀、戦後初めて公定歩合を下げ二銭 1 厘
7.8　テレビは 5.3 世帯に一台など都の家計調査
7.14　イラクでクーデター共和国樹立宣言
7.27　兼高かおる、旅客機での世界一周記録達成
8.1　日本対ガン協会設立（会長・塩田広重）

ビクター、初の国産ステレオレコードを発売

流行歌

◇「星はなんでも知っている」
◇「有楽町であいましょう」
フランク永井

映画

◇「彼岸花」
◇洋「大いなる西部」

書籍

◇「氷壁」井上靖
◇「点と線」松本清張

その他

◇各種ブーム（ロカビリー、フラフープ、ミッちー　ｅｔｃ）
◇本田スーパーカブ登場
◇初の専門誌「週刊テレビガイド」創刊。



高良兼次
奥羽大学歯学部

趣味はウインドサーフィン、切手収集、パソコン。　座右の銘「実るほど頭を垂れる稲穂かな」



富島修
日本大学松戸歯学部



嘉数武男
福岡歯科大学

健康な体で仕事に励みゴルフ＆釣りに明け暮れ、最後はビールで乾杯！



奥住守彦
東京歯科大学



長堂忍
愛知学院大学歯学部

家族は芳子、嘉幸

昭和 33 年 10 月～12 月（1958 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和 33 年】	【昭和 33 年】	【1958 年】
10.4　瀬底正司出生 10.8　豊岡幹世出生		
	10.15 守礼門、復元完成。	10.9　巨人軍長嶋茂雄、新人王獲得。
10.21 医療保険制度創設審議会規定		10.18 フラフープが東京のデパートで発売
		10.31 米・英・ソ 核実験停止に関するジュネーブ会議
11.5　上原修出生 11.5　上原慎司出生		
11.23 佐久川正明出生		
11.28 介輔及び歯科介輔規則公布		12.1　一万円札発行。14 色刷りで肖像は聖徳太子
	12.18 立法院、「米合衆国が貸借する土地の借賃の前払いに関する立法」「土地借賃安定法」可決。	12.18 米、大陸弾道弾（ICBM）の試射成功
12.22 第 1 期医療保険制度創設審議会委員に 永井長秀、友寄英彦		12.21 仏第五共和制で初の大統領にド・ゴール当選 12.23 東京タワー（333 メートル）完工式挙行

流行歌	*映画*	*書籍*	*その他*
◇「おんな船音頭」三橋美智也	◇ 伊映画「鉄道員」 ピエトロ・ジェルミ監督主演 ◇「私は貝になりたい」 フランキー堺主演 ◇「隠し砦の三悪人」黒沢明監督	◇「南極越冬記」西堀栄三郎 ◇「美徳のよろめき」三島由紀夫	◇ 帝国ホテルに日本初のバイキング料理現れる ◇ この年の流行語「ながら族」「トンボ返り」「しびれる」



瀬底正司
大阪歯科大学



豊岡幹世
奥羽大学歯学部



上原修
福岡歯科大学

子孫繁栄、世界平和、歯科界齲蝕（虫歯）歯周病根絶。ギャンブル、スポーツ成績良好。



上原慎司
福岡歯科大学

座右の銘「稲穂の如くありたい」尊敬する人は養父母，故長嶺将真殿(空手) 趣味はピアノ



佐久川正明
東北大学歯学部

大切なものは家族（みゆき、ゆり、めい）

昭和 34 年 1 月～34 年 12 月（1959 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和 34 年】	【昭和 34 年】	【1959 年】
1.16 第 1 回医療保険制度創設審議会開催 1.－ 米琉歯科医学会始まる	1.9 米民政府、那覇市への都市計画補助、融資再開	1.1 計量単位をメートル法に一本化 1.1 キューバ革命 2.16 キューバでカストロが首相に就任
4.19 無医村問題で臨時総会（昭和会館） 5.1 金城一史入会 5.1 永井長秀入会 5.13 諸見里亮出生 5.16 1959 年度定期総会（親睦） 5.29 医療保険立法推進協議会 6.10 那覇開放型病院開院式 6.19 金城康夫出生 7.1 林房子 入会 7.－ 赤十字阿嘉島巡回診療（村田哲雄、比嘉良有）	4.10 大相撲沖縄巡業開催 4.26 沖縄赤十字社、初の離島巡回診療開始 — 米軍、西原飛行場返還 5.9 沖縄国際ターミナルビル落成 6.30 石川市宮森小学校に米軍機墜落（死者 17 人、負傷者 121 人）	4.10 皇太子結婚パレード 6.3 シンガポール独立宣言 6.25 長嶋茂雄、天覧試合で本塁打
9.23 屋宜裕子出生 10.1 金城清一郎出生 10.16 玉城斉出生 11.1 富本盛弘入会 12.－ 「琉球薬局方」発行	8.27 那覇バスターミナル落成 11.1 沖縄テレビ開局 11.11 大田政作主席任命 12.26 金武町で米海兵隊員、イノシシと間違えて主婦を射殺	9.14 ソ連の「ルナ 2 号」初の月面着陸に成行 9.26 伊勢湾台風が中部地方横断、各地に大被害 11.1 国民年金法施行 12.15 第 1 回レコード大賞に水原弘「黒い花びら」

流行歌	映画	書籍	その他
◇ 東京ナイトクラブ ◇ 黒い花びら ◇ 黄色いさくらんぼ	◇「人間の条件」 ◇「キクとイサム」 ◇ 洋「12 人の怒れる男」	◇「裁判批判」家永三郎 ◇「にあんちゃん」安本末子	◇ 週刊誌続々創刊 週間現代、文春、平凡、少年マガジン、少年サンデー創刊 ◇ 一袋 35 円の「即席麺」チキンラーメンが大人気



諸見里亮
奥羽大学歯学部



金城康夫
松本歯科大学

21 世紀へ向けて歯科医療に精進?! ゴルフ・書画を極める。健康に生きる



屋宜裕子
東京歯科大学



金城清一郎
徳島大学歯学部

趣味は男の料理。今年は是非スキューバダイビングに挑戦してみたい



玉城斉
奥羽大学歯学部

子育てとは、親子が共に成長し、喜びを共有しながら努力をし続けること。

昭和 35 年 1 月～35 年 4 月（1960 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢

【昭和 35 年】

1.28　川畑剛出生
1.30　友利隆俊出生
2.4　真境名真吾出生

2.14　仲里雅則出生
2.15　第 2 期医療保険制度創設審議会委員（永井長秀、山川文雄）

3.8　山内忠出生

3.－　日本歯科医師会会長、河村弘選任



沖縄県祖国復帰協議会結成大会

沖縄の情勢

【昭和 35 年】

1.10　那覇市、ハワイのホノルルと姉妹都市を結ぶ
1.14　全小中学校のパン給食を開始

2.11　奄美出身者の沖縄永住を認可

3.8　「琉球住民の日本旅行管理に関する布令」一部改正される（旅券 4 年間有効となる）

3.22　那覇市生誕の像（朝倉文夫作）を除幕

4.28　沖縄祖国復帰会発足。沖縄返還要求大行進（鹿児島～東京）

日本の情勢 海外の情勢

【1960 年】

1.19　日米相互協力及び安全保障条約（新安保）・日米行政調停調印

1.25　三井三労組、無期限ストに突入（三池闘争）

2.1　北炭夕張炭坑でガス爆発。42 人死亡

3.2　日ソ貿易長期協定調印

3.13　警視庁、初の速度取締まり。381 人検挙

4.18　韓国、李承晩大統領退陣要求デモ

4.30　ソニー、世界初のトランジスターテレビ発表

流行歌

◇ だれよりも君を愛す
◇ でいごの花

映画

◇ おとうと
◇ 太陽がいっぱい
◇ ベン・ハー

書籍

◇「頭のよくなる本」林髞

その他

◇ 巨人の別所毅彦プロ野球最多３０２勝達成
◇ 歯並びの全面矯正技術アメリカから輸入
◇ ヤン坊マー坊のコマーシャル始まる



川畑剛
明海大学歯学部

座右の銘「努力と根性」



友利隆俊
東京歯科大学

趣味はゴルフ、コンピュータ遊び



真境名真吾
奥羽大学歯学部

座右の銘「人間万事塞翁が馬」　趣味はゴルフ、テニス、サウナ



仲里雅則
明海大学歯学部



山内忠
鶴見大学歯学部

昭和35年5月～35年9月（1960年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和35年】	【昭和35年】	【1960年】
5.6　仲村将健出生		5.1　ソ連、領空侵犯したアメリカのU2型機を撃墜する
5.14　1960年度定期総会（衛研ホール） 会長・小那覇全孝、副会長・中地庸之、 専務・東郷公雄、会計・高良実）	5.23　米下院、「琉球経済援助法」（プライス法）を可決する	5.24　チリ津波日本各地を襲う。死者行方不明者139人
6.－　日歯ニュース創刊 6.－　「よい歯の学校」表彰始まる	5.24　沖縄各地に津波が襲う（チリ津波） 6.1　琉球放送テレビが開局する	6.19　安保条約、自然承認。33万人が国会を包囲
	6.19　アイゼンハワー大統領沖縄を訪問、祖国復帰県民大会とデモに迎えられる。この月、安保反対デモ続く	6.23　岸首相、臨時閣議で退陣表明
7.9　山城ひとみ出生	7.1　ラジオ沖縄開局する。	7.19　池田内閣成立
7.14　大阪歯大救ライ奉仕団来島	7.14　初の軍関係労組〈瑞慶覧モータープール〉決定される。	9.7　ローマ五輪で日本の体操男子が団体優勝
8.14　伊計真智子出生 8.16　洪柏青出生	7.22　琉球経済援助法（プライス法）成立	9.10　NHKなど六局がカラーテレビの本放送開始
9.21　小禄真出生	9.1　東京－沖縄間にジェット旅客機就航。	この年あたりから日本でごきぶりが増え始めた

流行歌	映画	書籍	その他
✧「潮来笠」　橋幸夫	✧ 東映アニメ「少年猿飛佐助」 ✧「青春残酷物語」大島渚監督 ✧ 洋「勝手にしやがれ」 J・P・ベルモンド	✧「性生活の知恵」謝国権 ✧「敦煌」井上靖 ✧「島葬の国」川喜田二郎	✧ ローマ五輪最終日、裸足のアベベ金メダル ✧ 元祖インスタントコーヒーが森永から発売。 ✧「ナンセンス」と「異議なし」が流行語。



仲村将健
日本大学松戸歯学部
趣味は釣り



山城ひとみ
奥羽大学歯学部
座右の銘「唯心」
趣味は水泳、読書、Eメール



伊計真智子
松本歯科大学
趣味は社交ダンス、旅行



洪柏青
鶴見大学歯学部
趣味はゴルフ



小禄真
福岡歯科大学
特技は楽器演奏
趣味は計画を立てずにぶらり一人旅。

昭和 35 年 9 月～35 年 12 月（1960 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和 35 年】	【昭和 35 年】	【1960 年】
9.26　宮城嗣典出生		
		9.14　原油五カ国、石油輸出国機構(OPEC)結成
10. 1　日本歯科医師会会長武見太郎来島（医療保険問題）		
		10.12 浅沼稲次郎社会党委員長、刺殺される
10.28 濱口茂雄出生		
11.2　本永尚司出生		
	11.13 第五回琉球立法院選挙（自民が圧勝）	
		11.19 富士山で雪崩。冬山訓練中の五十余人が遭難
12.1　西平守廣入会		
		11.27 生産過剰で卵が暴落、一個約１０円と新聞に
12.10 新垣秀也出生		
12.10 長堂芳子出生		
		12.13 アジア卓球選手権大会で男女とも日本が団体優勝
	12.28 琉球米民政府、祝日の「日の丸」掲揚を拒否	
		12.30 全国のテレビ台数は六百万台に、と新聞に

流行歌	*映画*	*書籍*	*その他*
✧「アカシアの雨がやむとき」	✧「日本の夜と霧」 ✧「悪い奴ほどよく眠る」 ✧「独裁者」	✧「どくとるマンボウ航海記」 北杜夫	✧インスタント・ブーム



宮城嗣典
鶴見大学歯学部

特技は水泳
趣味はゴルフ
座右の銘「大胆細心」



濱口茂雄
日本歯科大学
新潟歯学部

特技は水泳
趣味はアウトドア



本永尚司
神奈川歯科大学

趣味はゴルフ



新垣秀也
日本歯科大学
新潟歯学部

座右の銘「健康第一」
遅いながらも那覇マラソンを完走し続けます。



長堂芳子
神奈川歯科大学

一番大切なものは家族。人生を選び直せるとしてもやはりこの家族。

昭和 36 年 1 月～36 年 8 月（1961 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢

【昭和 36 年】

1.7　赤峯健出生



1961 年頃のバスターミナル現在の市庁舎敷地内

4.　愛知学院大学歯学部設立
5.1　玉城正雄会員逝去
5.11　社会局長、医療保険構想発表
5.－　第 3 期医療保険制度創設審議委員会（友寄英彦、阿嘉宗惇）
5.－　精和病院開院
6.－　児童福祉法の一部改正により歯科を含めた 3 歳時健診が実施される
6.5　金城敬出生

7.22　村田恵一出生
8.29　仲本友久出生
9.16　福里英彦出生

沖縄の情勢

【昭和 36 年】

1.13　米軍、ナイキ・ミサイル発射訓練開始

2.18　沖縄大学、初の私立 4 年制大学として認可
2.28　伊江島米軍射撃演習場で少年射殺される

3.21　分蜜糖、輸出第 1 位

4.4　沖縄人権協会設立
4.6　小学校新教育課程開始
4.8　復帰協、日本政府へ対米折衝要求、国政参加の実現など新運動方針を決定
4.28　祖国復帰県民大会

5.10　初のミス那覇コンテスト開催
5.21　初のプロ野球公式戦、奥武山球場で開催（西鉄対東映）

6.17　全沖縄労働組合連合会結成
6.18　全沖縄軍労働組合結成

7.4　沖縄人権協会、米兵の妻子置き去り帰国を調査

日本の情勢 海外の情勢

【1961 年】

1.10　健康保険連、医療費値上げ反対で初のデモ
1.20　J・F・ケネディー大統領就任
2.14　俳優・赤木圭一郎、東京の日活撮影所でゴーカートを運転鉄扉に激突、21 日死亡
2.19　日本医師会、診療費の増額求め全国一斉休診
4.12　ソ連、初の有人宇宙飛行に成功。ガガーリンが乗った「ボストーク 1 号」が地球を 1 周
5.1　キューバのカストロ首相、社会主義化宣言。
6.22　池田・ケネディ共同声明
8.13　東ドイツ、亡命防止のため「ベルリンの壁」構築

流行歌

◇「上を向いて歩こう」坂本九

映画

◇「用心棒」
黒沢明監督・三船敏郎主演

書籍

◇「英語に強くなる本」岩田一男
◇「何でも見てやろう」小田実

その他

◇ 導太犬「タロー」、南極から 4 年半ぶりに帰国
◇ トヨタ、大衆車「パブリカ」発売 38 万 9000 円
◇ 明治製菓より「マーブルチョコレート」登場



赤峯健
愛知学院大学歯学部

免許を取得して 12 年。仕事も趣味も一歩一歩着実に向上していきたいです。



金城敬
福岡歯科大学

特技はバスケット
趣味はマラソン、ソフトボール
妻：やよい　長女さくら



村田恵一
北海道医療大学歯学部

趣味はゴルフ、ボーリング、釣り、海水魚飼育



仲本友久
松本歯科大学

座右の銘「仏心鬼手」
特技は少林寺拳法
趣味は海



福里英彦
鶴見大学歯学部

特技はバレーボール
趣味はゴルフ、水泳、マラソン

昭和 36 年 9 月～37 年 1 月（1961 年～1962 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和 36 年】	【昭和 36 年】	【1961 年】
9.19　井出隆一郎出生	9.19　コザで米兵ひき逃げ、少女 4 人死傷 ＊　この頃 食糧事情悪化	9.16　第二室戸台風襲撃 9.25　東京～札幌間に初のジェット機就航 9.27　大鵬と柏戸の横綱同時昇進が決定
	10.8　若狭大通りで那覇大綱引き、24 年ぶりの復活	
11.20 西川謙出生 11.22 大見謝健出生		
	12.7　具志川村の民家に米軍ジェット機墜落	12.8　寿命は男 65.4 歳 女 70.3 歳と「厚生白書」
12.11 上田隆一郎出生		
12.－ 九歯大永松長学長来島	12.17 那覇市長選挙、西銘順治当選	
【昭和 37 年】	【昭和 37 年】	【1962 年】
1.16　桃原均 出生	1.12　ミサイル発射演習開始	1.27　奄美大島で明治34年以来の降雪を記録

流行歌	*映画*	*書籍*	*その他*
✧「銀座の恋の物語」 石原裕次郎・牧村旬子	✧「豚と軍艦」長門裕之・吉村実子 ✧ 洋 「ウエスト・サイド物語」 ナタリー・ウッド主演	✧「記憶術」南博	✧ 東芝、世界初の 14 インチカラーテレビを発表、早川電気（現シャープ）は、約 30%値下げで 17 インチは 25 万円に ✧ この年岩戸景気でレジャーブーム ✧ 勤労者世帯収入は 4 万円弱



井出隆一郎
東北大学歯学部

一言：新世紀に向かうこの時代に生まれたことを喜びとし、自らも確かな未来へ。



西川謙
神奈川歯科大学

酒食伯国音楽潜水将雪写真野外生活地図空冷車料理走二輪映画園芸建築



大見謝健
日本大学松戸歯学部



上田隆一郎
東北大学歯学部

趣味：ダイビング、写真撮影



桃原均
日本歯科大学

昭和37年2月～37年9月（1962年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和37年】	【昭和37年】	【1962年】
1.31　上原和人出生		
	3.6 国際大学4年制設立認可	
3.－　日本歯科医師会、会長・中原実選任	3.9 衆議院、「沖縄および小笠原諸島における施政権回復に関する決議」を採択	
4.5　徳田安成出生	3.19 ケネディ―米大統領「沖縄は日本」と公式声明。	3.31 義務教育の教科書を無償化する法律、公布
5.－　第8回医療保険審議会（立法勧告見送る）		4.1　5年制高等専門学校設置
5.13　城間健 出生	4.23 祖国復帰へ1ドカンパ運動（祖国復帰協議会が代表団を対日講和条約発効の「屈辱の日」4.28に代表団を本土に送ろうと始めた。）	
5.19　1962年度定期総会 会長・高江州義光、副会長・村田哲雄、 専務・金城一史、会計・富本盛弘、 監事・川原保、永井長秀		5.17 大日本製薬、サリドマイド系薬剤の出荷停止。（24日厚生省は「企業の自主的措置」と通達）
	6.1　立法院、琉球船舶に日の丸掲揚要請を決議。	
8.－　学校保健法公布		
8.2　赤嶺勝哉出生		8.5　マリリンモンロー謎の死をとげる。
		8.12 堀江謙一、小型ヨットでの太平洋横断に成功
9.6　金城史明出生	8.13 沖縄高校、夏の甲子園に沖縄から初出場	
	9.1　那覇市、ガーブ川の改修工事に着手（1965.3.15完成、総工費6７万ドル）	9.5 プロ野球の金田正一3509奪三振を記録

流行歌	映画	書籍	その他
◇王将 ◇いつでも夢を	◇「ニッポン無責任時代」植木均 ◇「切腹」仲代達矢主演 ◇「キューポラのある街」 ◇「怒りの葡萄」ヘンリー・フォンダ ◇「ハスラー」ポール・ニューマン	◇「易入門」黄小娥 ◇「手相術」浅野八郎 ◇「愛と死のかたみ」 山口清人・久代	◇若者の間でツイストブーム ◇赤塚不二夫のギャグ漫画「おそ松くん」連載開始 ◇流行語「わかっちゃいるけど止められない」



上原和人
長崎大学歯学部

趣味はテニス、読書
家族は妻・幸代
長男・大和
長女・奏音

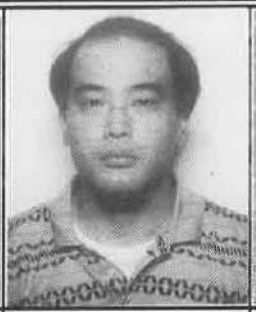


徳田安成
日本歯科大学
新潟歯学部

趣味は音楽鑑賞、エアロビクスダンス、サウナ



城間健
松本歯科大学



赤嶺勝哉
明海大学歯学部

座右の銘「成せば成る」
趣味特技はゴルフ、映画鑑賞、水泳



金城史明
昭和大学歯学部

座右の銘「我が身を抓って人の痛さを知れ」
スポーツ大好きで夜遅くまで運動、運動。

昭和 37 年 10 月～38 年 2 月（1962 年～63 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和 37 年】	【昭和 37 年】	【1962 年】
		10.3　プロ野球の阪神15年ぶりセリーグ優勝
		10.10 ファイティング原田、世界フライ級王座に
10.20 宮城正照出生	10.21 第 17 回国体開会。沖縄が初めて正式参加。	
		10.22 米、キューバ海上封鎖を声明（キューバ危機）
11.1　嘉手納憲一入会	11.2　ライシャワー駐日米大使、沖縄援助に関する日米協議委員会設置を提案。大平外相同意。	11.5　美空ひばり・小林旭結婚
11.24 中地庸之元副会長逝去		11.7　ＴＢＳ系で「コンバット」放映開始。
12.7　上原徳夫出生		11.20 米、爆撃機撤去通告受けキューバ封鎖を解除
	12.20 沖縄嘉手納基地付近に米機墜落 12 人死亡。	12.28 プロボクシング日本フライ級選手権で斎藤清作（たこ八郎）が王座に
【昭和 38 年】	【昭和 38 年】	【1963 年】
1.3　澤田泰治出生	1.1　最低賃金制実施、沖縄の全産業で一律時給９セントへ	1.1　フジテレビ、国産初の連続アニメ「鉄腕アトム」の放映開始。
1.11　松本真志出生	※　この冬久米島で零下２度(1.20)、宮古で零下 5.5 度(2.2)を記録。	
2.25　久田誠一郎出生	2.28 泉崎で米軍トラックによる中学生轢殺事件(5.1 無罪判決)	

流行歌	映画	書籍	その他
◇「赤いハンカチ」 ◇「島育ち」 ◇「小さい秋みつけた」	◇（洋）「世界残酷物語」 ◇（洋）「地上最大の作戦」 ◇「座頭市物語」勝新太郎	◇「野生のエルザ」 アダムソン ◇「徳川家康」山岡荘八・講談社	◇大都市のスモッグ、住宅難深刻化 ◇ＣＭ「スカッと爽やかコカコーラ」始まる。 ◇世界の都市への飛行機代、パリ、ロンドンは 40 万円



宮城正照
新潟大学歯学部



上原徳夫
東北歯科大学

特技はバドミントン
趣味はビデオ鑑賞



澤田泰治
松本歯科大学



松本真志
明海大学歯学部

特技はスキー１級。
趣味はモータースポーツ(モナコグランプリを観戦したい)



久田誠一郎
奥羽大学歯学部

座右の銘「必ず原因があるから結果がある」
特技はダイビング

昭和 38 年 3 月～39 年 12 月（1963 年～64 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和 38 年】	【昭和 38 年】	【1963 年】
1.15　古堅英信入会		3.23　キヤノンが自動焦点カメラを試作、と新聞
4.11　嘉手納一彦出生		3.31　東京で 4 歳の男児誘拐(吉展ちゃん事件)
	4.28　祖国復帰県民総決起大会が行われ、北緯 27 度線上で本土・沖縄初の海上交歓をする。	4.25　大阪駅前に日本初の横断歩道橋が完成。
5.18　1963 年度定期総会、高江州義光会長辞任、会長に山川文雄選任		5.3　鈴鹿で第 1 回日本グランプリ自動車レース開催
5.－　日本歯科医師会 60 周年記念式典		7.11　老人福祉法公布
5.22　真座孝出生	8.13　甲子園で首里高校が沖縄代表として初勝利。	11.1　伊藤博文新千円札登場
12.14 保険問題研究委員会発表（平良、与那城、比嘉（有）村田（清）、西平）	昭和 38 年度那覇市民の平均所得 374 ドル。	11.22 ケネディー大統領暗殺
【昭和 39 年】	【昭和 39 年】	【1964 年】
4.　神奈川歯科大学設立	2.1　立法院、沖縄住民代表の国会参加を採択	8.2　トンキン湾事件(米・北ベトナム衝突)
6.24　照屋健出生	7.8　沖縄人権協会、高等弁務官の自治権否定について国際人権連盟に報告	10.1　東海道新幹線スタート
8.3　長嶺恭正出生	9.1　本土―沖縄間マイクロ回線開通	10.10 第18回オリンピック東京大会開催
9.1　事務局を琉球泡盛産業ビル（那覇市泊）に開設	9.7　東京オリンピック聖火那覇着	11.9　佐藤内閣成立
9.27　東郷公雄元専務逝去	9.30　一号線から高圧線鉄塔撤去	
10.28 上原かんな出生		
11.1　城間猛入会		
11.17 南部地区会、沖縄整肢療護園で園児の無料診療実施		
12.30 海外研修団、台北歯科医師会と懇談会		

流行歌	***映画***	***書籍***	***その他***
◇「高校 3 年生」舟木一夫 ◇「愛と死をみつめて」 ◇「お座敷小唄」 ◇「アンコ椿は恋の花」都はるみ	◇「天国と地獄」黒沢明・三船敏郎 ◇洋「アラビアのロレンス」 ◇洋「ウエスト・サイド物語」 ◇「砂の女」岸田今日子 ◇「飢餓海峡」	◇「危ない会社」 ◇「流通革命」林周二 ◇「愛と死をみつめて」河野実・大島みち子 ◇「炎は流れる」大宅壮一 ◇「行為と死」石原慎太郎	◇「やめられないとまらないかっぱえびせん」の CM 始まる ◇ワッペンブーム ◇モンキーダンス流行はじめる ◇「一姫、二虎、三ダンプ」が流行語に



嘉手納一彦
日本大学歯学部

趣味はアウトドア。喜びはいい仕事をして家族と美味しくお酒が飲める事



真座孝
福岡歯科大学



照屋健
鹿児島大学歯学部



長嶺恭正
神奈川歯科大学



上原かんな
福岡歯科大学

趣味は旅行

よろしくお願いします

昭和40年1月～41年12月（1965年～66年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢

【昭和40年】

1.－　東京10チャンネルで「テレビ歯学講座」放映開始
1.4　友寄清喜出生
2.13　沖縄学校保健会設立及び第1回学校保健大会

4.－　岩手医科大学、東北、新潟、広島大学に歯学部設立

7.1　山田勲入会

9.1　宮城智恵子入会

【昭和41年】

1.20　竹中大蔵政務次官、本会の招きで医療保険問題指導のため来沖（～23日まで）

3.17　医療保険審議会委員17人発令（沖縄県歯科医師会より永井長秀、与那城勇）
4.9　伊波清子会員死去
4.18　日本政府援助による学童検診始まる(5ヵ年）中部地区

7.1　現金給付による医療保険スタート
9.8　中部病院でインターン制を行うことで日米間意見一致

10.1　高江州旭入会

11.28 下地隆之出生

12.30 乾太郎出生

沖縄の情勢

【昭和40年】

2.7　米軍、北爆開始(7.28 沖縄からB52、ベトナム爆撃へ)
8.19　佐藤首相、沖縄訪問。戦後初の沖縄訪問。
9.18　那覇市庁舎(現在地)完成

この年イリオモテヤマネコ発見

＊ 沖縄県主要企業の平均給与は男82.61ドル、女43.36ドル

【昭和41年】

1.1　最低賃金、時給13セント実施

9.5　台風18号(コラ)、宮古島襲来(瞬間最大風速85.3m)
9.16　首里市庁舎完成
10.5　自衛隊初来沖、市内をパレード
11.3　琉球政府立博物館(現県立博物館)開館

＊ この年 那覇地区医師会24時間診療はじめる。

日本の情勢 海外の情勢

【1965年】

1.13　佐藤・ジョンソン共同声明。沖縄返還に進展なし
4.6　立法院、憲法記念日を祝日に追加し、慰霊の日を6月23日に設定
10.21 朝永栄一郎ノーベル物理学賞受賞
11.17 第1回プロ野球ドラフト会議。巨人内堀内獲得

【1966年】

1.19　インド首相にインディラ・ガンジー選出
5.16 中国文化大革命始まる
6.29 ビートルズ日本公演
7.1　医療保険制度開始

＊ この年 全日空ボーイング727型機東京湾墜落(2.4)をはじめ国内での航空機事故4件

流行歌

◇「はイサイおじさん」
◇「あんこ椿は恋の花」都はるみ
◇「バラが咲いた」マイク真木
◇「霧氷」橋幸夫
◇「君といつまでも」加山雄三
◇「星影のワルツ」千昌夫

映画

◇「網走番外地」高倉健主演
◇「飢餓海峡」内田吐夢監督
◇「白い巨塔」封切。田宮二郎主演
◇「赤ひげ」黒沢明監督

書籍

◇「なせばなる」大松博文
◇「愛と死をみつめて」
◇「アンネの日記」
◇「人間革命（2）」池田大作
◇「頭の体操」多湖輝
◇「氷点」三浦綾子

その他

◇ TBS「ウルトラマン」放映開始
◇「オロナミンC」100円「ブラックニッカ」「チャルメラ」「ポッキー」「ママレモン」がヒット
◇ 3C（カー、クーラー、カラーテレビ）時代の始まり



友寄清喜
北海道医療大学歯学部



下地隆之
大阪大学歯学部

趣味は読書
家族は妻・圓枝



乾太郎
神奈川歯科大学

座右の銘「利をもって利とせず、義をもって利となす」
趣味は音楽鑑賞



与儀實篤
大阪大学歯学部

昭和 42 年～43 年（1967～1968 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢

【昭和 42 年】

3.26　沖縄学校歯科医会設立総会
4.1　高江州勲、當山正昭入会
4.10　中部病院でインターン制始まる
4.－　北海道、九州大学に歯学部設置

6.1　又吉達雄入会

9.－　学校歯科医が置かれる（61 名）

11.14 歴代会長及び村田副会長感謝会

沖縄の情勢

【昭和 42 年】

1.19　佐藤首相、沖縄政策権一括返還の立場を表明

5.14　宜野湾市で暴力団員が銃乱射。7 人死傷。
5.－　基地公害問題起こる（嘉手納村屋良で燃える井戸）

7.21　大城立裕、芥川賞受賞

11.20 日米共同声明に沖縄返還が明示されず、那覇市で 11 万人が抗議の「葬送行進」
11.24 OHK（沖縄放送協会）発足

日本の情勢 海外の情勢

【1967 年】

3.4　高見山、外国人で初の関取に昇進
3.5　日本航空、世界一周線の営業開始

7.1　欧州共同体（EC）発足
8.8　東南アジア諸国連合（ASEAN）結成。
8.10　ＪＣＢ、日本初の国際クレジットカード発行

10.17　清朝最後の皇帝・愛新覚羅溥儀（あいしんかくらふぎ）、北京で死去。
10.18　ミニスカートの 女王ツイギーが来日。

流行歌

◇「ブルー・シャドウ」
ブルーコメッツ
◇「帰って来たヨッパライ」
フォーク・クルセダーズ

映画

◇「日本のいちばん長い日」
黒沢年男
◇「アルジェの戦い」ジャン・マルタン

書籍

◇「英単語記憶術」
◇「華岡青洲の妻」有吉佐和子

その他

◇ 大卒男子平均初任給 2 万 9000 円前後
◇ タカラ、「リカちゃん人形」発売。

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢

【昭和 43 年】

4.－　琉球大学保健学部設置
4.－　日本歯科医師会会長に竹中恒夫選任

7.1　嶺井浩入会
8.31　歯科衛生士法

11.9　第 32 回全国学校歯科保健大会で「沖縄学校歯科医会」加入承認
12.1　中里治通入会

沖縄の情勢

【昭和 43 年】

2.5　B52 嘉手納に飛来、駐機

8.21　甲子園高校野球で興南高校が準決勝で敗れる
9.23　台風 16 号が沖縄・宮古直撃。3 人が死亡、2203 戸全半壊。
11.10 琉球政府主席選挙（11 日に屋良朝苗当選）

日本の情勢 海外の情勢

【1968 年】

3.16　ソンミ虐殺事件・米軍、南ベトナムソンミ村の無抵抗の村民 5 百余人を虐殺。

4.4　米黒人運動指導者キング牧師暗殺。
4.18　初の超高層、霞ケ関ビル完成。

7.1　郵便番号制度を実施。

10.17 川端康成、ノーベル文学賞に決定。

12.10 東京都府中市で 3 億円強奪事件。

流行歌

◇「恋の季節」ピンキーとキラーズ
◇「ブルーライト・ヨコハマ」
いしだあゆみ

映画

◇「神々の深き欲望」
◇ 洋「狼の惑星」

書籍

◇「民法入門」佐賀潜
◇「どくとるマンボウ青春記」
北杜夫

その他

◇「あしたのジョウ」連載開始
「巨人の星」放映開始
◇ サイケ調のファッションや広告が流行

昭和 44 年～45 年（1969 年～1970 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和 44 年】	【昭和 44 年】	【1969 年】
1.25 小那覇全孝元会長逝去	1.11 米民政府、総合労働布令を公布	1.20 米、ニクソン大統領就任
2.13 医療保険給付制で論争再燃	1.29 日米共同声明で沖縄の復帰が昭和 47 年と決まる	1.18 東大安田講堂占拠
4.15 第 4 次本土派遣医師による学童検診（先島地区）		
4.29 上原信雄 勲 3 等瑞宝章叙勲	3.17 那覇新港建設工事始まる	
5.1 瀬底正男入会	4.28 沖縄デー 全国各地で集会・デモ 都内大混乱で 967 人検挙	5.26 東名高速道路、全線開通。
6.13 岸本富雄を事務局に採用		
6.20 社会保障制度審議会委員に比嘉良有	6.5 全沖縄単労組、初の 24 時間スト。	
7.1 饒波正太郎入会		7.20 アポロ 11 号、人類史上初の月面着陸。
		8.27 「男はつらいよ」シリーズ第一作、封切。
12.25 行政府、医療保険の 2 本立方針決める	11.21 佐藤首相訪米、ニクソン大統領と日米共同声明発表。沖縄を「核抜き・基地本土並み」で 47 年に返還する。	9.3 北ベトナム ホー・チ・ミン没

流行歌	映画	書籍	その他
✧「夜明けのスキャット」由紀さおり	✧「男はつらいよ」 ✧ 洋「個人教授」	✧「天と地と」海音寺潮五郎 ✧「水平思考」デボノ	✧「セブンスター」発売。1 箱 100 円。 ✧ 海外旅行、ボーリングブーム ✧ ミディ・マキシ・シースルー登場

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和 45 年】	【昭和 45 年】	【1970 年】
2.－ 歯科医療費値上（9.73%）		1.－ 日本医師会、医療費問題で全国一斉休診
4.－ 城西歯科大学、鶴見大学歯学部設立	3.－ 復帰準備委員会設置	
5.29 南部支部総会 役員改選 支部長・与那城勇、副支部長・富本盛弘、上原斉		3.14 万博 EXPO '70 大阪 で開催
6.1 山田芳宏入会		
6.9 那覇地区・南部地区各小中学校「よい歯の王様・王女様」表彰の会（オリオン会館）	4.17 沖縄の国政参加特別措置法成立	3.31 赤軍派、日航機「よど号」をハイジャック
6.20ﾌﾗｲﾝｸﾞﾄﾞｸﾀｰ実施（伊平屋島・平良進、松村正昭、宮城智恵子、与那城勇）		
7.18 南部地区緊急臨時総会（幸楽） 決議事項：会名を沖縄南部地区歯科医師会と改称	5.1 沖縄・北方対策庁が発足する	7.27 都で光化学スモッグ注意報・警報の発令開始
10.1 大山日出男入会		
10.20 愛隣園施設訪問歯の衛生週間に集まった商品を寄贈		
11.20 与那城智入会		
11.22 ﾌﾗｲﾝｸﾞﾄﾞｸﾀｰ第三分会第二班渡名喜島に（松村 班）	9.10 琉球政府、台湾政府に尖閣諸島の領有を主張	11.25 三島由紀夫、自衛隊市ヶ谷駐屯地で割腹自殺
12.1 山口悦子入会		
12.8 ﾌﾗｲﾝｸﾞﾄﾞｸﾀｰ第三分会第二班渡名喜島に（当山 班）	12.20 沖縄コザ市で、反米暴動が起きる	

流行歌	映画	書籍	その他
✧「圭子の夢は夜ひらく」藤圭子 ✧「走れコータロー」ソルティシュガー	✧「戦争と人間」 ✧ 洋「イージーライダー」	✧「創価学会を斬る」藤原弘達 ✧「冠婚葬祭入門」塩月弥栄子	✧ 世界で初めて UCC が缶コーヒーを発売。 ✧ SL ブーム ✧ ライオンが「ホワイト&ホワイト」ではじめてラミネートチューブを使用

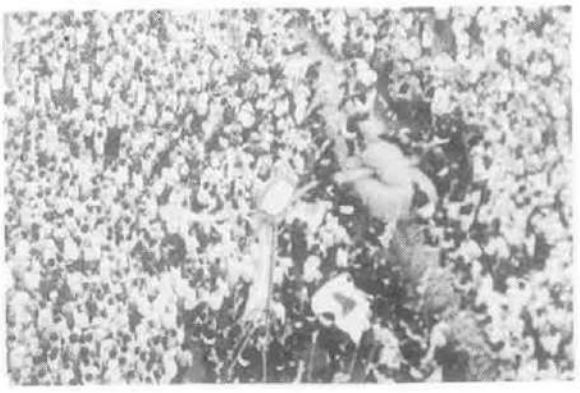
昭和 46 年～47 年（1971～1972 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和 46 年】 1.18　福村義信入会 1.11　宮里良雄入会 4.－　日本大学松戸歯学部、岐阜歯科大学設立 5.11　沖縄県歯科医師会会館建設準備委員会 6.21　嶺井勢子入会 6.22　伊波富夫入会 6.29　第 1 回定款制定委員会 草案委員に知花朝敏、与那城勇が委任 8.26　上地健一入会 9.13　銘苅清入会 10.3　上江洲紀子入会 10.6　大綱引き協力募金 217 弗那覇市へ贈呈 11.15 三師会保険医総辞退を通告（効力は12月17日、翌年5月24日撤回） 12.17 座覇秀政入会	【昭和 46 年】 1.13　沖縄で毒ガスの第一次移送作業。 4.27　沖縄に自衛隊 6800 人配備計画発表 6.17　沖縄返還協定調印。 8.15　ドル・ショックで沖縄経済混乱 10.9　主席権限により、全琉 35 ヶ所でドルチェックが行われる 11.10 沖縄返還協定反対ゼネストで警官死亡 12.1　糸満市が誕生する	【1971 年】 3.11　第一銀行と日本勧業銀行が合併調印 5.14　女性 8 人を誘拐殺害した大久保清逮捕 6.－　日本医師会、保険医辞退に突入 8.15　米のドル防衛策で株価大暴落（ドルショック）。同 28 日、対ドルレート変動相場制移行 12.18 10 カ国蔵省会議、円切り上げ幅を 1 ドル＝308 円に（スミソニアン協定）この年、日米貿易摩擦激化

流行歌	*映画*	*書籍*	*その他*
◇「よこはま・たそがれ」五木ひろし ◇「わたしの城下町」小柳ルミ子	◇「八月の濡れた砂」 ◇ 洋「ある愛の詩」 ◇ 洋「小さな恋のメロディ」	◇「ムツゴロウの博物誌」畑正憲 ◇「二十歳の原点」高野悦子 ◇「日本人とユダヤ人」イザヤ・ベンダサン	◇ 平均寿命 男・69.3 才 女 74.7 才 ◇ 怪獣ブースカ、子供向けの商品そくそく



1971年8月15日　ドルチェック



1971年10月10日　那覇大綱引き

昭和 47 年（1972 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢

【昭和 47 年】

2.－　歯科医療費値上（13.7%）
3.1　新城啓和入会
3.17　臨時総会（定款、運営規定、制定）

4.27　高良政勝入会
4.－　日本歯科医師会会長・中原実選任
4.－　松本歯科大学、東北歯科大学、日歯大新潟歯学部、福岡歯科大学、設立
4.6　南部地区学校医配置委員会
4.15　復帰時における医療問題講演会 医師会館において

5.1　阿嘉昭宗入会
5.1　新城彬明入会
5.1　与那嶺貞子入会
5.2　全身麻酔で抜歯し幼女死なせた歯科医に有罪
5.5　高江州正勝入会
5.6　友利政三入会

5.10　日本歯科医師会 第 58 回代議員会、本土復帰による沖縄歯科医師会会員の入会を決定。日本歯科医師会へ加盟
5.15　上原斉入会
5.15　本土復帰、沖縄県となり本土医療制度直ちに施行され円換算診療報酬表配布
5.22　現物給付による医療保険スタート

6.1～6.3　衛生週間行事に関してライオン、コルゲート社より商品寄贈受け包装作業する。

6.12　九州各県歯科医師会会長来沖(12 日)まで

7.26　九州地区保険指導者会 比嘉良有氏出張

8.－　厚生育成医療の厚生省改正(口唇裂と兎唇 歯科医師の診療認める)

9.11　南部地区支部長会開催
9.15　公衆衛生委員会 校医配置立案作成

10.－　那覇市国民健康保険事業の実施
10.－　産業歯科医師(6 月に明文化、10 月施行)

12.1　金城竹治入会
12.22「沖縄県社会保険医療協議会」発足
歯科代表に村田精太郎、又吉達雄

沖縄の情勢

【昭和 47 年】

1.20　東峰夫「オキナワの少年」芥川賞受賞
2.29　沖縄海洋博正式決定
4.1　沖縄国際大学が開学する

5.15　沖縄の施政権が返還され、沖縄県が発足する。(通貨ドルから円へ)
5.15　沖縄開発庁が発足し、那覇に沖縄総合事務局が設置
5.15　沖縄振興開発金融公庫が設立
5.20　ベトナムから帰還途中の B52 が沖縄に飛来。

5.22　海上自衛隊初沖縄入り

6.25　沖縄で復帰後初の知事、県議選挙。屋良朝苗復帰後初の知事に。

10.1　本土―沖縄間のダイヤル通話開通

12.16　復帰後初の衆議院議員選挙

日本の情勢 海外の情勢

【1972 年】

1.24　グアム島で横井元軍曹、28 年ぶりに発見救出
2.3　札幌オリンピック開催
2.19　連合赤軍、「浅間山荘」に篭城。同 28 日に警官隊突入。

6.11　田中角栄通産相「日本列島改造論」を発表。
6.17　米、ウォーターゲート事件発覚。
7.7　田中内閣発足
9.29　田中首相と周恩来中国首相、日中共同声明に調印。国交回復なる。台湾は対日断交宣言。
10.28 中国からパンダ（カンカンとランラン）到着。

流行歌

◇「瀬戸の花嫁」小柳ルミ子
◇「どうにもとまらない」山本リンダ
◇「女のみち」びんから兄弟

映画

◇「軍旗はためく下に」
◇洋「ゴッドファーザー」
◇洋「キャバレー」

書籍

◇「恍惚の人」有吉佐和子
◇「日本列島改造論」田中角栄

その他

◇「お客様は神様です」や「あっしにはかかわりのねえことでござんす」などの言葉が流行る
◇日立より初のカラー複写機登場
◇パンダブーム

昭和 48 年～49 年（1973 年～1974 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢

【昭和 48 年】

1.－　老人医療無料化
1.1　国仲匡入会
1.22　第１回那覇市国民健康保険運営協議会
1.23　非医師診療摘発事件勃発
1.29　特例技工士試験
2.27　沖縄県歯科医師会会館建設用地取得
3.16　～3.20 与那城会長上京、関係諸方に沖縄の医療事情説明指導を求める
3.30　又吉盛弘入会
3.30　宮城正廣入会
4.9　国税庁沖縄事務所屋部博所長と川崎直税課長と会館建設積立金(負担金)について打ち合わせ
4.21　那覇市(国民健康保険課)より地域医療開発補助金として金弐拾万円受領

10.29 新垣義勝入会
12.8　松田技官による保険診療に関する集団指導 (PM1:00～4:00) 八汐荘

【昭和 49 年】

1.31那覇市医療協議会設立総会（ゆうな荘）
2.－　歯科医療費値上げ(21.22%)
2.2　歯科助手認定講習会開講式・講義（那覇準看護学校）
2.16　南部税務講習会（那覇準看護学校教室）
2.22　理事会：那覇市医師会準看学校歯科講師に高良政勝会員推薦
3.3　歯科助手認定講習会（計８回）閉講式

5.15　沖縄県保険医療福祉事業団発足
6.4　沖縄県歯科医師会会館起工式
7.12　伊泊シズ子氏（現県歯総務課長）勤務開始
7.17　渡口進一入会

8.8　社保指導者研修会（高良政勝専務、高江州旭氏）福岡

9.18　大城正雄入会
10.4　文書発送「予約診療及び保険患者取り扱いについて」
10.12 第 27 回九州歯科医学大会(鹿児島)
10.30 饒波正太郎入会
11.－　歯科差額、社会問題化
12.20 玉木史朗入会

沖縄の情勢

【昭和 48 年】

1.17　沖縄県、糸満市に２８年間放置の沖縄戦犠牲者の遺骨３００体の収集を開始。
3.2　海洋博起工式
4.12　沖縄の米訓練場で、老婆が戦車に轢かれ死亡。
5.3　本土復帰記念沖縄特別国体（若夏国体）開幕。

11.26 那覇市前島の琉海ビル建設工事現場で大陥没事故が起こる。
この月、物不足、買いだめ騒ぎが起こる。

【昭和 49 年】

3.2　那覇市小禄の下水道工事現場で不発弾爆発。36人死傷。
3.29　大宜味村喜如嘉の芭蕉布、重要無形文化財に指定。
4.1　コザ、美里二市が合併し、沖縄市が誕生。

7.10　伊江島の米軍射撃場で米兵による地元青年狙撃事件が発生する。
8.1　銀バスと首里バスが合併する。首里～那覇間にバス専用レーンができる。

日本の情勢 海外の情勢

【1973 年】

1.1　70 歳以上の老人医療費の無料化実施。
3.－　選抜高校野球で「怪物」江川旋風。

8.8　金大中、東京のホテルから拉致される。

10.6　第４次中東戦争勃発で第１次石油ショック（この年、トイレットペーパー、洗剤買いだめパニック起こる。
10.23 江崎玲於奈、ノーベル物理学賞受賞決定

【1974 年】

3.10　ルバング島 に 28 年潜伏の元陸軍少尉・小野田寛郎、元上官の命令で下山。

8.8　ニクソン米大統領、全米向けテレビ放送でウォーターゲート事件により辞任と発表
10.8　前首相、佐藤栄作、ノーベル平和賞受賞
10.14　長嶋茂雄、引退式で「巨人軍は永久に不滅です」と挨拶
12.9　三木内閣発足

流行歌	映画	書籍	その他
「神田川」かぐや姫 「危険なふたり」沢田研二	「仁義亡き戦い」 洋「燃えろドラゴン」	「日本沈没」小松左京 「ノストラダムスの大予言」五島勉	公定歩合、明治18年以来最高の9%に 「ごきぶりホイホイ」発売 ブルース・リー、香港で急死。

流行歌	映画	書籍	その他
「昭和枯れすすき」さくらと一郎 「襟裳岬」森進一 「二人でお酒を」梓みちよ	米オカルト映画「エクソシスト」 「砂の器」 洋「エマニエル夫人」	「やせる健康食」中村鉱一 「かもめのジョナサン」 リチャード・バック	「ノストラダムスの大予言」が話題に カラーテレビ普及率55.1%に

昭和 50 年～51 年（1975 年～1976 年）

	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和 50 年】 1.23　前川清春入会 2.19　大阪で歯の苦情 110 番開設(以後全国に広まる) 歯科医の差額徴収に苦情殺到。 2.27　～28 歯科公衆衛生全国大会参加 （中里副会長）神奈川 3.15　旧事務所から新会館に引っ越し 4.－　九州地区連合歯科医師会に入会 4.7　沖縄県歯科衛生士学院開校式典及び入学式 5.11　南部地区総会　全会員 91 名　会費月 2500 円 5.13　沖縄県歯科医師会会館落成祝賀会 5.14　友利時野入会 5.15　垣花幸子入会 6.2　高校検診実施について割当表発表 7.25　第 1 回口腔衛生センター開設準備委員会 9.9　口腔衛生センター歯科診療所開所式並びに説明会 9.10　宮里修入会 9.27　第 28 回九州歯科医学大会(宮崎～28 日) 9.29　第 1 回那覇市立病院建設基本構想審議会 10.23　～1.15 毎週木曜日海洋博診療班派遣	【昭和 50 年】 4.28　復帰協、27 年間の中間総括を行い、闘争史に区切り 5.6　沖縄県伊江島での米兵発砲事件(49 年 7 月)で日本政府は裁判権放棄を決定。 7.17　皇太子、沖縄訪問。ひめゆりの塔の前で沖縄解放同盟の二人が火炎瓶を投げつける。 7.19　沖縄海洋博覧会開幕	【1975 年】 3.10　新幹線博多まで全線開通。 3.25　サウジアラビア ファイサル国王暗殺ハリドが王位継承 4.5　蒋介石死去 4.30　ベトナム、南ベトナム解放勢力が全土解放(ベトナム戦争終結) 5.7　エリザベス女王夫妻初来日 7.5　沢松和子 ウインブルドンダブルス優勝 9.30　天皇、皇后 渡米

流行歌	映画	書籍	その他
✧「およげたいやきくん」子門真人 ✧「シクラメンのかほり」布施明 ✧「港のヨーコ・ヨコハマ・ヨコスカ」	✧「金環食」 ✧ 洋「ジョーズ」 ✧ 洋「タワーリング・インフェルノ」	✧「播磨灘物語」司馬遼太郎 ✧「複合汚染」有吉佐和子	✧ 正体不明の「紅茶きのこ」ブーム ✧ 個人平均貯蓄 150 万円

【昭和 51 年】 1.12　第 12 回沖縄学校保健研究大会 3.14　歯科治療の地区別慣行料金は東京都区部と徳島県で最高 2.6 倍の格差と歯科医師会調査。 4.　徳島大学歯学部設立 4.1　真栄城正弘 入会 4.1　新垣繁信入会 4.2　国保連合会業務開始式 6.4　歯科衛生士学院生徒、歯の衛生週間の街頭アピール(三越、ショッピング・センター前) 7.4　久高将成逝去 8.1　八木茂入会 11.13　第 29 回九州歯科医学大会(福岡、～14 日) 12.12　第 1 回海外歯科研修及びゴルフツアー(～15 日)	【昭和 51 年】 1.18　沖縄海洋博覧会閉幕(183 日間で入場者 348 万 5750 人) 2.7　県内配電 5 社、沖縄電力への吸収合併が決まるこの月、海洋博後遺症で県内のホテル業界、閉店や一時休業が相次ぐ 6.13　県知事、県議会選挙が実施知事に平良幸市が当選 11.14　那覇市長選に平良良松三選 12.22　宮古・八重山、電話の即時通話とテレビの同時放映が開始	【1976 年】 1.8　中国 周恩来没 2.4　ロッキード事件発覚 4.5　中国、天安門事件。 7.27　田中角栄前首相、ロッキード事件で逮捕 9.9　毛沢東死去 10.10　具志堅用高、WBA 世界 J・フライ級王座に 12.24　福田内閣成立

流行歌	映画	書籍	その他
✧「ペッパー警部」ピンクレディー ✧「北の宿から」都はるみ ✧「岸壁の母」	✧「犬神家の一族」 ✧「嗚呼！花の応援団」 ✧ 洋「タクシードライバー」	✧「限りなく透明に近いブルー」村上龍 ✧「不毛地帯」山崎豊子	✧ ビクターが VHS ビデオ発表。 ✧ 気軽にラッタッタのロードパル原付バイク発売。 ✧ 競馬、競輪、競艇の年間売り上げ 3 兆円突破

昭和 52 年～53 年（1977 年～1978 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和 52 年】 1.18 琉球大学医学部設置準備委員会発足 2.1 伊礼兼治入会 4.－ 昭和大学歯学部、長崎大学歯学部、鹿児島大学歯学部、設立 5.21 日大歯学部、X線量が従来の１／１００の歯科用X線装置を開発 6.2 第１回デンタルフェア開催(～6 日) 6.4～6.10 高校検診 6.14 第１回琉球大学医学部口腔外科講座設置促進準備会 6.15 高江州義光元会長、沖縄県公衆衛生大会で県知事表彰を受ける 6.18 平良進 厚生大臣表彰 7.1 高良恒己入会 9.4 高江州義光 日本歯科医師会会長表彰(日歯有功賞) 10.13 那覇市と重度心身者医療についての談話会 10.25 平良進元県歯会長逝去 11.19 第 30 回九州歯科医学大会(大分) 12.19 沖縄県解剖体確保推進協議会発足	【昭和 52 年】 4.3 沖縄県石川市で戦時中に米軍が投下した大型不発弾撤去8000人が一時避難 5.15 沖縄反戦地主会、期限切れの土地返還を申請。（18 日、地籍明確化法公布し強制使用延長） 6.23 沖縄戦終結 33 年目の戦没者追悼式が各地で行われる。 7.11 参議院沖縄地区 稲嶺一郎当選 8.20 大田昌秀「これが沖縄戦だ」が刊行される 11.18 第１回沖縄の産業祭り開催	【1977 年】 1.4 東京で青酸コーラ殺人事件(以後無差別殺人事件続出) 1.20 米カーター大統領就任 3.16 印 ガンジー首相失脚 6.12 樋口久子、全米女子プロゴルフ選手権で優勝 8.7 北海道有珠山が32年ぶりに噴火 8.18 中国文化大革命の終結宣言 9.3 王貞治、756 本塁打の世界新記録樹立 国民栄誉賞第１号に 11.30 在日米軍、東京の立川基地の全面返還

流行歌	映画	書籍	その他
◇「昔の名前で出ています」小林旭 ◇「青春時代」森田ｺｳｲﾁとﾄｯﾌﾟｷﾞｬﾗﾝ ◇「津軽海峡冬景色」石川さゆり	◇「幸せの黄色いハンカチ」 ◇洋「ロッキー」S・スタローン	◇「人間の証明」森村誠一 ◇「ルーツ」A・ヘイリー	◇カラオケブーム始まる ◇この年日本人の平均寿命世界一となる（男 72.69 歳、女 77.95 歳） ◇この年大卒男子初任給10万円突破

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【昭和 53 年】 1.14 赤嶺裕也入会 4.－ 鹿児島大学歯学部、東日本学園歯学部設立 5.1 漢那強入会 5.10 山川文雄 厚生大臣表彰(公衆衛生功労者) 6.1 第２回デンタルフェア(～4 日まで) 8.1 新垣元洋入会 9.1 伊礼昭洋入会 10.1 赤峯悦生入会 10.14 九州歯科医学大会(佐賀)で登川正樹前会長表彰される 11.1 知花朝敏入会 11.3 高江州義光 叙勲・勲５等双光旭日賞 11.3 上原信雄 沖縄県知事表彰(県社会福祉功労者) 12.19 南部地区歯科医師会、南部 13 市町村健診担当者との話し合い 各市町村 （補正予算の議会に対する予算措置）南部地区歯科医師会（各市町村に対する要望、その他） 12.23 第１回家族慰安会（沖縄ハーバービューホテル）	【昭和 53 年】 3.1 第１回沖縄県功労賞に屋良朝苗 6.4 平和の鐘献納式典 7.30 沖縄県で「車は左」に交通規則の切り替え。 10.24 平良知事、病気により辞表提出 12.10 沖縄県知事選で初の保守候補、西銘順治当選。 12.14 知念村久高島でイザイホーが始まる この年、米海兵隊の 104 号線越え実弾射撃演習が頻繁に行われる	【1978 年】 1.14 伊豆地方でＭ７の地震発生。25 人死亡 1.15 キャンディーズ、後楽園で解散コンサート 4.4 東京池袋に超高層ビル「サンシャイン 60」竣工。 5.20 新東京国際空港（成田空港）開港。 6.12 宮城県沖地震 M7.5 8.12 日中平和条約調印 10.16 青木功、ゴルフ世界マッチプレー選手権で優勝。 11.21 江川卓と巨人、「空白の１日」をつき電撃契約

流行歌	映画	書籍	その他
◇「いい日旅立ち」山口百恵 ◇「与作」北島三郎 ◇「UFO」ピンクレディー	◇「人間の証明」 ◇洋「スターウォーズ」G・ルーカス監督 ◇洋「サタデーナイトフィーバー」	◇「不毛地帯」(1～4 巻) 山崎豊子 ◇「広中平祐の家庭教育論」広中平祐 ◇「不確実性の時代」ガルブレイス	◇東芝、初の日本語ワープロ「ＪＷ－10」発表。一台 630 万円。 ◇岐阜県で「口裂け女」のデマが勃発

昭和 54 年～55 年（1979 年～1980 年）

【昭和 54 年】

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
2.16 琉球大学医学部設置決定 4. 岡山大学歯学部設立 4.25 島袋進入会 4.28 第３回海外研修ツアー(ヨーロッパ、５月 10 日まで) 5.26 山川文雄 叙勲・勲４等瑞宝章 6.1 第３回デンタルフェア(4 日まで) 6.4 重度心身障害者全身麻酔下治療開始 6.13 安里幸子入会 7.1 宜志富哲昭入会 7.6 山川文雄元県歯会長逝去 7.18 第 10 回那覇市医療協議会 9.1 垣花博子入会 10.2 上原淳入会 10.20 九州歯科医学大会(長崎) 11.14 赤崎栄入会 11.14 国定剛入会 11.14 高橋学入会 12.25 赤い羽根共同募金に100万円寄付(第1回)	1.9 第１回沖縄縦断トリムマラソン開催 3.18 沖縄刑務所、那覇市楚辺から知念村具志堅に移転 5.14 那覇―石垣間に 130 人乗りのジェット機就航 5.21 沖縄開発庁、尖閣諸島に仮設ヘリポート着工。 6.3 北大東島、女医殺人事件 7.19 県、米軍、防衛施設局の三者連絡協議会発足。 8.1 沖縄県、初の自衛官募集業務を開始。 10.1 琉球大学医学部開学 ※ この年県の最低賃金は時給 297 円 ※ 観光入域者数 180 万 7940 人	1.1 米中、30 年ぶり国交回復。 1.13 初の国公立大学共通一次試験。32 万人受験。 5.4 英 サッチャー保守党内閣成立 初の女性首相誕生 7.1 ソニー、「ウォークマン」第一号発売。 7.11 静岡県東名高速日本坂トンネルで玉突き事故。173 台炎上、７人死亡 12.27 アフガニスタンにソ連軍侵攻。

流行歌	映画	書籍	その他
✧「夢追い酒」渥美二郎 ✧「贈る言葉」海援隊 ✧「魅せられて」ジュディー・オング	✧ 洋「エイリアン」 ✧「銀河鉄道 999」松本零士原作 ✧ 洋「ディアハンター」	✧「天中殺入門」 和泉宗章 ✧「四季・奈津子」 五木寛之 ✧「ジャパン・アズ・ナンバーワン」 ヴォーゲル	✧ インベーダーゲームの人気過熱で偽造硬貨不正使用などの少年非行続出。 ✧ ＮＥＣがＰＣ・8001 を発表。いよいよパソコン時代へ。

【昭和 55 年】

1.28 上原信雄 朝日社会福祉賞表彰 3.11 平良敏彦入会 3.15 阿嘉宗三入会 3.19 屋宜優入会 4.5 沖縄歯科衛生士学院入学式 5.1 大城則安入会 5.1 阿嘉徳真入会 5.25 沖縄県南部地区歯科医師会だより 55 年１号 6.4 第４回デンタルフェア(8 日まで) 8.6 夫人部会 8.14 デンタルファミリーの集い(参加人員 444 名) 9.9 第１回那覇市教育委員会懇談会(海邦会館) 玉木史朗、渡口進一、兼浜政勝、高良恒巳 10.25 第 33 回九州歯科医学大会(熊本) 11.1 玉城英人入会	1.25 自衛隊那覇基地で空対空ミサイル爆発 3.－ トートーメー継承訴訟提訴 6.10 自衛隊那覇基地で戦闘機が着陸に失敗、炎上 8.4 上原康恒、ジュニアライト級世界チャンピオンに 8.7 那覇空港でミサイルを着装した米軍戦闘機が緊急着陸、オーバーラン。 8.21 ソ連原潜が中城湾東方海上で火災事故。 10.29 米軍演習が原因で恩納岳が火事、40 日間続く。 11.－ 浦添市町選挙・比嘉昇、那覇市長選挙・平良良松当選	1.4 米、ソ連のアフガニスタン軍事介入の報復措置を発表。 5.24モスクワ五輪ボイコット決定 6.12 大平首相急死 7.17 鈴木善幸内閣成立 9.9 イラン・イラク戦争勃発 11.4 王貞治現役引退 11.4 米 レーガン大統領当選 11.19 山口百恵引退結婚 11.29 川崎で金属バット殺人事件 12.7 福岡国際マラソン瀬古利彦３連覇

流行歌	映画	書籍	その他
✧「ダンシングオールナイト」 ✧「異邦人」 ✧「大都会」	✧「影武者」 ✧ 洋 「クレイマー・クレイマー」	✧「蒼い時」 山口百恵 ✧「悪魔の選択」（上下） Ｆ・フォーサイス	✧ ワープロが初めて発売される。 ✧ 自動車生産台数が世界一に。 ✧ 家庭内暴力増大

昭和 56 年～57 年（1981 年～1982 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢

【昭和 56 年】

1.1　安村庸入会
2.1　島袋泰弘入会
3.1　友寄清順、真境名由守入会

4.1　玉城生夫、玉城民雄入会

5.1　金城朝和、新里叡、仲里正博入会
5.13　山川修入会
5.28　那覇市医師会３役と懇談会
6.4　デンタルフェア（～７日）
6.8　兼城繁入会
8.11　前川雅春入会
8.25　婦人会

12.1　志村圭子入会
12.11　那覇市国保運営協議会
12.19　第４回南部地区歯科医師会家族慰安会（ｸﾞﾗﾝﾄﾞｷｬｯｽﾙ）

沖縄の情勢

【昭和 56 年】

1.7　県、自衛官募集業務委託を決定
2.1　平和通りアーケード完成
3.8　ＷＢＡジュニアフライ級タイトルマッチで具志堅用高 挑戦者のフローレンスに敗れ V14 逃す
4.1　主任制度実施
7.10　夜間断水、以後翌年６月６日まで制限給水続く
8.11　国費医学制度、昭和 57 年度から５年間復活決定
11.14　国頭村で新発見の野鳥、ヤンバルクイナと命名
12.30　北谷町のハンビー飛行場返還

日本の情勢 海外の情勢

【1981 年】

1.19　テヘランの米大使館人質事件 444 日ぶりに解決
2.23　ローマ法王ヨネ・パウロ二世来日
3.16　第２次臨時行政調査会発足、土光敏夫会長
3.30　レーガン米大統領、狙撃され負傷
5.10　仏大統領選、社会党のミッテランが当選
7.29　英チャールズ皇太子ダイアナ嬢と結婚
10.6　サダト・エジプト大統領暗殺
10.16　北炭夕張鉱でガス突出事故、93 人死亡
10.19　福井謙一京大教授、ノーベル化学賞受賞

流行歌

◇「ルビーの指輪」寺尾聡
◇「奥飛騨慕情」竜鉄也
◇「みちのくひとり旅」山本譲二
◇「お嫁サンバ」郷ひろみ

映画

◇洋「エレファント・マン」
◇「泥の河」小栗康平
◇「駅／ＳＴＡＴＩＯＮ」

書籍

◇「人間万事塞翁が丙午」青島幸男
「窓ぎわのトットちゃん」黒柳徹子

その他

◇ディスコ・ブーム
◇ミニバイク流行

【昭和 57 年】

2.8　国税事務所長と懇談会（会長・副会長）
3.1　那覇市国保運営協議会
3.4　那覇市教育委員会、学校歯科に関する件
4.1　新里正武入会

6.1　玉澤吉弘入会
6.11　県知事との懇談会
7.1　太田正昭、友寄喜樹入会

8.11　板倉繁巳入会
8.27　第１回開業相談委員会

10.13　城間吉弘入会
11.1　金城賢治入会
11.10　金城光也入会

12.8　潮城秀仁入会

12.18　第５回南部地区歯科医師会家族慰安会（ｸﾞﾗﾝﾄﾞｷｬｯｽﾙ）

【昭和 57 年】

2.5　国頭村安波の普久川ダム完成
3.13　琉大教育学部移転、これで全学部移転完了
4.8　伊計大橋完成（198M）
4.13　友利正、ＷＢＣジュニアフライ級世界チャンピョンとなる
6.1　那覇市シルバー人材センター、事業開始
7.9　糸満新漁港完成
9.22　県都市モノレールの運営会社、第三セクター方式で設立
11.15　県知事選、西銘順治再選 参院補選は大城真順当選
11.16　那覇・桜坂で火災、17 店舗全焼

【1982 年】

1.26　ロッキード事件判欠公判、全日空被告幹部全員が有罪判決
2.8　永田町のホテル・ニュージャパンで火災、33 人死亡
4.1　500 円硬貨発行（15 年ぶりの新硬貨）
5.21　英、フォークランド島上陸作戦開始
8.17　老人保健法公布、70 歳以上医療費無料制度廃止
11.10　ブレジネフ・ソ連共産党書記長急病死 後任にアンドロポフ

流行歌

◇「待つわ」あみん
◇「夢芝居」梅沢富美男
◇「セーラー服と機関銃」薬師丸ひろ子
◇「北酒場」細川たかし

映画

◇「蒲田行進曲」つかこうへい
◇「転校生」大林宣彦
◇洋「ＥＴ」スピルバーグ
◇「鬼龍院花子の生涯」

書籍

◇「プロ野球を10倍楽しく見る方法」江本孟紀
◇「気くばりのすすめ」鈴木健二
◇「悪魔の飽食」森村誠一
◇「積木くずし」穂積隆信

その他

◇エアロビクス流行
◇カード式公衆電話、テレフォンカード新登場
◇ＣＤシステムプレーヤーとＣＤがソニーから新発売

昭和 58 年～59 年（1983 年～1984 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢

【昭和 58 年】

2.1　安里博入会
2.9　税務講習会（北那覇税務署）
2.10　税務講習会（那覇税務署）
3.1　儀間清師入会
4.1　長濱正入会
4.1　事務局大屋照子勤務開始
4.8　当間淳司入会
4.16　第 12 会定時総会
5.10　外間宏正入会
6.8　高宮城實之入会
7.1　照屋均入会
7.9　第 1 回九州八市歯科医師会役員連絡協議会（福岡）
7.12　上里和美入会
7.15　第 1 回九州各県社保担当者会（長崎）
7.21　中央保健所運営協議会
9.25　伊礼迅ご逝去
8.1　友寄景淳入会
8.25　那覇市国保運営協議会
11.25 那覇市医療協議会
12.9　仲間正武入会
12.22 第 6 回南部地区歯科医師会家族慰安会(ｸﾞﾗﾝﾄﾞｷｬｯｽﾙ)

沖縄の情勢

【昭和 58 年】

2.24　キャンプ・ハンセン基地内でタクシー運転手、米兵に刺殺される
3.18　国頭村宜名真トンネル開通（1045M）
6.6　那覇空港で自衛隊大型ヘリ離陸に失敗炎上
6.27 参院選、喜屋武真栄当選
1011 琉銀、県内企業初の株式上場
12.8　沖縄戦記録フィルム 1 フィート運動の会結成
12.19 衆院選、瀬長・國場・上原・玉城・仲村が当選

日本の情勢 海外の情勢

【1983 年】

2.1　老人保健法施行
4.15 東京ディズニーランド浦安市にオープン
5.26 日本海中部地震発生 104 人死亡
7.5　帝京大病院の血友病患者が死亡（米の研究者スピラがエイズと診断）
9.1　ソ連戦闘機、領空侵犯の大韓航空機を撃墜
10.14 日本初の体外受精児東北大学医学部付属病院で誕生
11.12 ロッキード裁判、田中角栄元首相に実刑判決
12.27 中曽根内閣発足

流行歌

◇「さざんかの宿」大川栄策
◇「矢切の渡し」細川たかし
◇「めだかの兄弟」
◇「15 の夜」尾崎豊デビュー

映画

◇「家族ゲーム」森田芳光
◇「戦場のメリークリスマス」
◇洋「スター・ウォーズ」

書籍

◇「探偵物語」赤川次郎
◇「和田アキ子だ 文句あっか」
「老化は食べ物が原因だった」

その他

◇10.9 ビルマのラングーンで爆弾テロ事件、韓国閣僚ら 21 人死亡
◇NHK 朝のドラマ「おしん」平均視聴率 52.6%を記録

【昭和 59 年】

1.9　高江洲實入会
1.23 那覇地区歯科医師青色申告会発会式
1.25 北那覇地区歯科医師青色申告会発会式
2.1　真境名勉入会
2.7　竹尾孝明入会
2.10 第 2 回九州八市歯科医師会役員連絡協議会（沖縄）
2.13 第 1 回北那覇地区税務指導会
2.14 第 1 回那覇地区税務指導会
3.29 第 1 回那覇市健康づくり推進協議会
3.8　古波蔵信泉入会
4.23 長嶺将秀入会
5.9　儀保邦泰入会
7.25 南部地区だより
7.29 第 1 回南部地区ゴルフ大会（琉球ゴルフ）
7.11 赤嶺雅和入会
8.7　座覇守弘入会
9.22 友利清一入会
12.21 第 7 回南部地区歯科医師会家族慰安会

【昭和 59 年】

1.11 中城湾港新港地区の公有水面埋め立て第 1 期工事竣工
1.24 本部半島で発見された昆虫が新種のヤンバルタナガコガネと判明
6.18 日教組大会、労働福祉会館で開幕
6.21 那覇空港で自衛隊機着陸に失敗し消波ブロックに激突炎上
8.2　ロス五輪で平良朝治、重量挙げで 5 位入賞
8.2　琉大付属病院西原町上原に移転（10.15 から診療開始）

【1984 年】

1.9　東証ダウ平均株価が初めて 1 万円突破
2.8　第 14 会冬季五輪、ユーゴのサラエボで開幕
3.18 怪人 21 面相事件（江崎グリコ社長自宅から誘拐）
4.26　レーガン、現職大統領初の中国訪問
7.28 ロサンゼルス 5 輪開幕、ソ連などが不参加
8.14 健康保健法改正公布本人 10 割給付廃止
10.31 インデラ・ガンジーインド首相暗殺
11.1　15 年ぶり新札発行千円札に夏目漱石

流行歌

◇「もしも明日が…」
◇「桃色吐息」
高橋真梨子
◇「ギザギザハートの子守唄」
◇「ワインレッドの心」

映画

◇「お葬式」伊丹十三
◇「麻雀放浪記」和田誠
◇「風の谷のナウシカ」宮崎駿
◇洋「インディー・ジョーズ」

書籍

◇「プロ野球知らなきゃ損する」
板東英二
◇「第四の核」上・下
F・フォーサイス

その他

◇9.2　インターハイ女子砲丸投げで仲松てるみ（興南）初の全国制覇
◇10.11 子宝日本一に浦添の浦底夫妻〔16 人〕

昭和60年～61年（1985年～1986年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢

【昭和60年】

1.18 第1回沖縄国税事務所管内税務指導者協議会
1.28 夫人部研修会（確定申告の周辺）
2.18 養護教諭との懇親会
2.25 當山邑子入会
3.1 高嶺明彦入会
3.21 長嶺和弘入会
5.12 第1回球技大会（浦添当山小学校）
6.7 神元憲和入会
7.1 比嘉千春入会
7.6 夫人部主催教養講座「院長夫人の立場と内外への心遣い」講師荒川壽子
7.10 玉城直子入会
8.23 法人設立準備委員会発会式
8.23 奥住守彦入会
9.9 金城康夫入会
11.19 第1回法人設立準備委員会
11.28 第1回那覇市学校歯科保健大会（労働福祉会館）
11.6 上里忠昭入会
12.1 那覇市保育向上推進協議会主催子供まつり歯科相談コーナー担当（与儀公園）

沖縄の情勢

【昭和60年】

2.13 瀬底大橋開通
4.13 壺屋焼の金城次郎、県初の人間国宝に指定
4.17 沖縄国際センター、浦添市前田にオープン
4.28 第1回全日本トライアスロン宮古島大会開催
5.15 上之屋の米軍牧港住宅地区、強制使用任期切れに伴い返還が決定
6.5 西銘知事米国務省に基地整理を要請
6.15 一坪反戦地主会、嘉手納基地の継続使用認定の取り消しを提訴
9.25 県収用委、20年強制使用を受理

12.8 第1回NAHAマラソン開催、4503人がスタート

日本の情勢 海外の情勢

【1985年】

3.11 ゴルバチョフ、ソ連共産党書記長選出
3.16 「科学万博－つくば85」開幕
4.1 放送大学授業開始
6.18 豊田商事会長マスコミ監視の自宅で2人組の男に刺殺される
8.12 群馬県「御巣鷹」に日航機墜落、520人死亡
9.21 任天堂「スーパーマリオプラザース」発売

12.28 レバノン内戦終戦協定調印

流行歌

◇「ミ・アモーレ」中森明菜
◇「熱き心に」小林旭

映画

◇「火まつり」柳町光男
◇「台風クラブ」相米慎二
◇洋「アマデウス」

書籍

◇「アイアコッカ」
◇「首都消失」上・下 小松左京
「豊臣秀長」上・下 堺屋太一

その他

◇阪神タイガース21年ぶりにセリーグで優勝、日本シリーズで西部ライオンズを破り初の日本一に

【昭和61年】

1.24 上地智博入会
5.25 第2回球技大会（港川中）
5.9 上原智也入会
5.25 宮里正入会
6.9 比嘉良喬、山川景康入会
6.16 上原みどり逝去
7.1 高良兼次入会
7.8 上原修、下地玲子、瀬底正司、宮良修入会
8.31 第10回南部地区ゴルフ大会（国際ゴルフ）

9.29 県歯と法人化について打合せ会
10.1 上原慎司入会
10.8 玉城斉入会
11.20 第2回那覇市学校歯科保健大会（那覇市民会館）

12.11 臨時総会及び社団法人設立総会
12.27 第9回南部地区歯科医師会家族慰安会（ｸﾞﾗﾝﾄﾞｷｬﾂﾙ）

【昭和61年】

2.8 海洋博記念公園内に熱帯ドリームセンター開園
3.1 県教育長通達後初の卒業式日の丸・君が代で混乱
4.11 那覇港臨港道路の泊大橋開通
4.15 県立芸術大学開学
7.24 浜田剛史、WBCジュニアウェルター級世界チャンピョンとなる
10.4 那覇市民体育館、識名に完成

11.17 県知事選、西銘順治3選

12.23 沖縄関係税制措置三度延長（5年間）

【1986年】

1.28 米スペースシャトル「チャレンジャー」打ち上げ直後に爆発、乗組員7人死亡
2.25 フィリピンでアキノ新大統領誕生
2.26 マルコスがハワイへ亡命
4.11 ハレー彗星6300キロまで地球に最接近
4.26 ソ連のチェルノブイリで原発事故発生
5.8 英皇太子夫妻来日、ダイアナフィーバー
5.27 日本の対外純資産額が世界一にと大蔵省発表

流行歌

◇「雪国」吉幾三
◇「時の流れに身をまかせ」テレサ・テン
◇「My Revolution」

映画

◇「コミック雑誌なんかいらない」滝田洋二郎
◇「海と毒薬」熊井啓

書籍

◇「化身」上・下 渡辺淳一
◇「日本はこう代わる」長谷川慶太郎
◇「知価革命」堺屋太一
◇「自分を生かす相性・殺す相性」

その他

◇11.21 伊豆大島三原山大噴火、22日島民1万人島外脱出
◇7.6 衆参同日選挙、社会党大敗北
◇10.11 レーガン・ゴルバチョフ、米ソ首脳会談

社団法人南部地区歯科医師会設立記念誌より

南部地区歯科医師会 友利政三会長 挨拶

本日はお忙しい中を西銘知事をはじめ、御来賓の皆様には、南部地区歯科医師会社団法人設立祝賀会に御臨席を賜り心より感謝申し上げます。　近年、学校、地域社会、行政において健康に対する関心が非常に高まって来ております。そして健康の保持・増進の為の種種な施策が企画され、実施されつつあります。私共、南部地区歯科医師会としても各地域社会の特性、ニーズに応じたきめ細かい対応が必要となってまいりました。御承知の通り、南部地区歯科医師会は那覇市、浦添市、島尻地区の20の市町村を包含する地域の歯科医療を担当しており、沖縄県の歯科医療機関の約6割が集中している所でございます。20の市町村の学校、地域社会、行政からの要請、要望に対して任意団体である南部地区歯科医師会ではその対応に苦慮する場合が多くございました。南部地区歯科医師会も各地域社会行政と密接な連携をとり、歯科保健活動を強化充実させ、責任団体としての役割を全うすべく組織強化と活動能力の向上を目指して昨年12月11日南部地区歯科医師会社団法人設立総会を開きました。そして満場一致の決議をもって、県庁に社団法人の許可をお願いいたしたわけでございます。幸いにして西銘知事、県環境保健部原部長をはじめ島袋医務課長、安座間課長補佐、大村主事の皆様方の御理解と御指導の下に62年1月16日をもって社団法人の許可を頂きました。その間、御指導を頂きました県歯科医師会、那覇市医師会、南部地区医師会をはじめ関係各位に心から感謝を申し上げます。

現在高齢化社会といわれるなかで、疾病発生の要因は社会的要因と加齢的要因によるものが増加しつつありますが歯科疾患も、う蝕、歯周病、咬合異常、顎関節症、顎、口腔領域の先天性疾患、外傷、炎症性疾患、腫瘍など多岐にわたっております。口腔の重要な機能の1つである咀嚼作用は単なる機械的作用にとどまらず、人々の生活を豊かに満してくれる源泉であり、その障害は歯、口腔にとどまらず自身の健康と社会生活に及ぼす影響は極めて重大なものがあります。ことに最近は人間が生きて行く上に最も基本的な行為、咀嚼するということが顎、顔面の発育不全による歯列不正、不正咬合などにより、充分出来ない子ども達が増えて来ております。昨年は文部省が3年間で3億円という一次予算をつけて咀嚼機能の解明にのり出しております。咀嚼機能とボケとの関連、児童生徒の心身の発育発達に及ぼす影響、即ち人間の精神生活と肉体生活との関連について各大学の教授を中心とした研究があらたにスタートしております。更に40才以上の国民の93%以上が歯周病におかされている現在、私共の対応も幅広いものとなってまいりました。歯科的健康はライフステージに即した生活習慣の改善に基本があり、歯科疾患が全身的健康を阻害する大きな要因としてその対策を立てねばなりません。そしてその重要性は地域住民、行政に強く認識されつつあり、地域住民の歯科的健康の保持・増進を効果的に確保する為に組織的、計画的に歯科医療関係者、行政住民が協力し合って歯科保健医療活動をさらに強く推進する為の方策の策定に努力せねばなりません。基本的には

① 生涯を通した歯科保健医療活動を包括的に実施すること

② 地域の特性に応じた方策、地域住民を主体的に考えそのディマンドに応じた方策の具体的な検討

などが必要となってまいりましょう。

私共は公益法人としての自覚を持ち南部地区歯科医師会の組織をあげて責任団体としての重責を果たすべく会員一同決意をあらたにいたしている所でございます。今後ますます地域の歯科保健医療活動に邁進する所存でございます。皆様の一層の御指導、御鞭撻を賜ります様お願い申し上げ私の挨拶といたします。ありがとうございました。

昭和62年2月9日

南部地区歯科医師会

法人取得を慶びて

皓き歯は　親より賜う宝玉

健やかにせむ　吾らの業は

呱々の声　天下に響け陰る世に

朝を呼ぼう　南歯法人

めぐり逢う　峠の道を友がらと

草分け越える　この日忘れじ

与那城　勇

昭和 62 年～63 年（1987 年～1988 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢

【昭和 62 年】

1.12 北那覇税務団体協議会
1.15 玉城吉康入会
1.17 社団法人南部地区歯科医師会設立認可となる
2.7 上原信雄ご逝去
2.9 （社）南部地区歯科医師会設立祝賀会（ｸﾞﾗﾝﾄﾞｷｯｽﾙ）
2.24 那覇保健所運営協議会
3.13 法人設立準備委員会解散式
3.31 山内秀子入会
4.18 昭和61年度第１回（社）南部地区歯科医師会定時総会
4.24 川平昌彦入会
6.3 デンタルフェア（～６日、リウボウ）
6.7 第１回デンタルフェア浦添
6.29 事務職員増員、大城リリ
7.8 塩浜康良入会
10.8 友利隆俊入会
11.23 比嘉良導ご逝去、11.- 村山正光ご逝去
11.29 子どもまつり歯科相談（与儀公園）
12.8 黒潮武嗣入会
12.17 第３回那覇市学校歯科保健大会（那覇市民会館）
12.25 第10回南部地区歯科医師会家族忘年会（ｸﾞﾗﾝﾄﾞｷｯｽﾙ）

沖縄の情勢

【昭和 62 年】

3.2 沖縄気象台、天久から樋川に移転
3.25 於茂登トンネル開通
5.2 県総合運動公園、沖縄市に開園
5.31 牧港住宅地区返還
6.21 嘉手納基地包囲大行動、基地周辺を約 25000 人の人の輪で包囲
9.3 沖縄コンベンションセンター落成（宜野湾市）
9.20 海邦国体夏季大会開幕
10.8 沖縄自動車道、石川－那覇間開通
10.25 海邦国体秋季大会開幕
12.9 ソ連偵察機本島上空を領空侵犯、自衛隊機が警告射撃を行う

日本の情勢 海外の情勢

【1987 年】

2.9 ＮＴＴ株売り出し開始
4.1 国鉄分割民営化、ＪＲ各社開業、国鉄精算事業団発足
5.3 朝日新聞社阪神支局で記者が銃撃され２人死亡
7.4 自民党竹下派「経世会」結成、田中派３分裂
10.12 利根川進、ノーベル医学生理学賞に
10.19 ＮＹ株式市場大暴落（ブラックマンデイ）
10.20 東証株価、史上最大の大暴落
11.18 日本航空民営化

流行歌

✧「命くれない」瀬川瑛子
✧「あばれ太鼓」坂本冬美
✧「百万本のバラ」
✧「愚か者」

映画

✧「マルサの女」伊丹十三
✧洋「スタンド・バイ・ミー」

書籍

✧「サラダ記念日」俵万智
「ビジネスマンの父より息子への 30 通の手紙」
「堀の中の憂鬱な面々」

その他

✧ ベンガル湾上空で大韓航空機行方不明事件発生、乗員乗客１１５名行方不明

【昭和 63 年】

1.8 嘉数武男、山城ひとみ入会
1.22 昭和 62 年度第１回臨時総会
1.28 北那覇地区税務講演会
1.29 玉城均入会
1.31 第 16 回南部地区ゴルフ大会（国際ゴルフ）
2.8 赤嶺秀紀入会
2.10 那覇地区税務講演会
2.24 第 15 回那覇市医療協議会（自治会館）
3.31 南部地区総会
4.1 島良政憲入会
5.9 山城正裕入会
5.16 Ｂ型肝炎予防接種開始
6.8 砂川英樹、西平栄次郎入会
6.17 南部地区諸会費銀行口座振替業務開始
8.4 ファクシミリデモンストレーション（キャノン、東芝、富士通）
9.16 ３師会懇談会（那覇市医師会）
11.24 第４回那覇市学校歯科保健大会（那覇東町会館）
12.8 第 11 回南部地区歯科医師会家族忘年会

【昭和 63 年】

1.12 グアム米軍基地より52爆撃機12機飛来、復帰後29回目
5.26 日本初のフリーゾーン那覇地区完成
7.1 日独合同調査班、沖縄トラフで熱水鉱床を発見
10.1 沖縄電力民営化
1025 久茂地１丁目再開発ビル起工式
12.7 第１回サントピア沖縄開幕

【1988 年】

2.13 第 15 回冬季五輪、カナダ・カルガリーで開幕
3.17 初の屋根つき球場「東京ドーム」落成
4.10 本州四国を結ぶ瀬戸大橋開通
5.15 ソ連、アフガニスタンからの撤退開始
6.18 リクルート疑惑発生
9.17 ソウル五輪開幕
10.19 東京地検リクルート本社などを一斉捜査
11.8 米大統領選、共和党のブッシュが当選
12.28 東証株価初の３万円の大台にのる

流行歌

✧「乾杯」長渕剛
✧「人生いろいろ」島倉千代子
✧「ラストエンペラー」で坂本龍一が日本人初のアカデミー音楽賞受賞

映画

✧「となりのトトロ」宮崎駿
✧「異人たちとの夏」大林宣彦
✧洋「ラストエンペラー」

書籍

✧「ノルウェイの森」上・下 村上春樹
✧「ゲームの達人」上・下 シドニー・シェルダン

その他

✧ 県民一鉢運動始まる
✧ 京都国体で沖水高が初の全国制覇
✧ ソウル五輪 100M背泳ぎ「バサロ泳法」で鈴木大地が金メダル
✧ 千代の富士、53 連勝でストップ

昭和64年～平成2年（1989年～1990年）

【平成1年】

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
1.24 沖縄県歯科医警察協力会発足懇談会（海邦会館） 1.29 第3回南部地区球技大会（金城中） 4.19 婦人部の集い（サンパレスホテル） 4.7 加藤進作入会 5.1 婦人の集い「先生方の健康管理」公演と実習 6.3 第13回デンタルフェア那覇（～4日、リウボウ） 6.4 第3回デンタルフェア浦添（ﾏﾁﾅﾄｼｮｯﾋﾟﾝｸﾞｾﾝﾀｰ） 8.11 婦人部の集い「家事整理のヒント」（東急ホテル） 7.28 村田恵一入会 8.8 前川一彦入会 9.29 小禄真入会 10.3 大西満入会 10.21 玉城村まつり健康歯科相談コーナー（～10.22） 11.8 古堅譲入会 11.18 第5回那覇市学校歯科保健大会（那覇市民会館） 12.8 仲村將健入会 12.8 真境名真吾入会 12.21 第12回南部地区歯科医師会家族忘年会（ﾊﾟｼﾌｨｯｸﾎﾃﾙ）	1.9 沖縄電力政府保有株の一般売り出し 4.26 県は新石垣空港問題で白保海域を断念、カラ岳東側海岸案に変更 6.23 ひめゆり平和祈念資料館開館 8.20 ペルー移住90周年記念式典開催 8.27 アルゼンチン移住80周年記念式典開催 11.3 首里城正殿復元起工式 11.13 伊江島の米軍ハリヤー訓練基地完成 11.26 第1回ツール・ド・オキナワ開催 11.29 県労協、25年の歴史に幕 11.30 連合沖縄発足 12.25 小禄バイパス開通	1.7 天皇崩御、閣議新年号を「平成」と決定 1.20 米大統領にジョージ・ブッシュが就任 4.1 3％の消費税実施 6.2 宇野宗佑内閣成立 6.3 天安門事件 6.24 美空ひばり死去 8.11 幼女連続誘拐殺人犯宮崎勤を逮捕 10.17 サンフランシスコで大地震、死者64人 11.9 ベルリンの壁、28年ぶりに事実上撤廃 12-9 大阪歯科大、レーザー光利用の新治療法開発 12.22 ルーマニア、チャウシェスク体制崩壊

流行歌	映画	書籍	その他
✧「川の流れのように」 ✧「愛が止まらない」 ✧「北国へ」	✧「ウンタマギルー」高嶺剛 ✧「北京的西瓜」大林宣彦 ✧「その男、凶暴につき」北野武	✧「TUGUMI」「キッチン」「白河夜船」吉本ばなな	✧ 難民船、沖縄周辺に相次ぎ漂着 ✧ リクルート事件で真藤前NTT会長逮捕（3．6）

【平成2年】

1.26 護得久朝保入会 6.1 普天間悟入会 6.1 事務職員入社、玉城良枝 6.10 第1回デンタルフェア首里開催（首里リウボウ） 6.1 金城清一郎入会 6.19 婦人部の集い「センスアップセミナー」（東急ホテル） 6.30 事務職員退職、大城リリ 7.1 富島修入会 8.1 新崎裕子入会 8.16 第18回那覇市医療協議会（以後年1回開催） 8.25 南部地区学術講演会 9.1 新垣秀也入会 9.1 城間三男入会 9.20 第6回那覇市学校歯科保健大会（那覇市民会館） 11.1 城間健入会 11.29 むし歯予防推進指定校研究発表会（神原小） 12.20第13回南部地区歯科医師会家族忘年会（ﾊﾟｼﾌｨｯｸﾎﾃﾙ）	1.26 県庁舎行政棟落成式 2.1 県内初の浦添美術館開館 4.1 パイン缶詰・果汁など輸入完全自由化 7.27 県議会庁舎起工式 8.21 沖水高甲子園で準優勝 8.23 世界のウチナーンチュ大会開催 10.1 国勢調査実施、人口1,222,445人 11.18 県知事選、大田昌秀当選	1.13 共通1次に替わり大学入試センター試験実施 2.11 アフリカ民族会議指導者マンデラ、28年ぶりに釈放 3.15 ゴルバチョフ、最初で最後のソ連大統領に就任 8.2 湾岸戦争始まる 10.3 統一ドイツ誕生 11.22 サッチャー英首相辞意 12.28 バブルはじける、東証大発会時時価総額590兆円から大納会時365兆円へ

流行歌	映画	書籍	その他
✧「おどるポンポコリン」 ✧「さよなら人類」	✧ 高嶺剛監督「ウンタマギルー」第40回ベルリン映画祭カルガリ賞受賞 ✧「少年時代」篠田正浩 ✧「われに撃つ用意あり」若松孝二	✧「真夜中は別の顔」「明日があるなら」シドニー・シェルダン ✧「NOと言える日本」石原慎太郎	✧ この年リゾート開発等の影響を受け、県内地価急騰 ✧ 花の万博（4.1～9.30）大阪で開幕 ✧ 日米構造協議決着（6.28）

平成3年～4年（1991年～1992年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢

【平成3年】

1.28 婦人部新年会（東急ホテル）
2.17 第5回南部地区球技（ボウリング）大会（国際ボウル）
1.25 長堂忍入会
1.25 長嶺尚子入会
3.22 第1回那覇市教育委員会懇談会（3師会）
3.28 南部地区平成2年度通常総会
5.10 事務局パソコン設置
5.20 那覇市政20周年特別表彰（那覇市民会館）会長出席
6.2 第2回デンタルフェア首里
6.2 第5回デンタルフェア浦添
9.27 平成3年度感謝状贈呈式並びに9月合同支部会（那覇スカイプラザホテル）
10.27 那覇市健康フェスティバル歯科相談及び講演（山川理事）
11.1 平良浩入会
11.13 北那覇税務署に関する婦人部座談会（婦人部代表3人）
11.18 那覇市長面会、那覇市学校歯科保健大会記録誌作成助成金要請（3役・真境名）
11.29 第10回九州八市歯科医師会役員連絡協議会（沖縄）

【平成4年】

2.27 第1回南部地区保健医療協議会（南部保健所）会長
2.28 第1回那覇市健康づくり推進協議会（市役所）会長
3.5 第1回中央保健所医療協議会、会長
3.17 OA推進研修会
3.19 第1回南部保健部会（南部保健所）会長
3.6 佐久川正明、宮城正照、金城敬入会
5.1 下地隆之、嘉手納一彦、本永尚司入会
5.22 金城秀男入会
6.11 赤嶺勝哉入会
6.11 第1回那覇市かみかみ教室、真境名由守理事
6.24 下地規一逝去
7.1 豊岡幹世、諸見里亮、湖城秀久、上原和人入会
7.24 仲里雅則入会
8.10 松本真志入会
8.27 第20回那覇市医療協議会（ホテルエッカアネックス）
9.8 金城史明入会
10.1 比嘉隆夫入会
10.8 屋宜裕子入会
10.11 豊見城村健康まつり歯科健診（金城秀男）
11.22 糸満市健康福祉まつり歯科健診、大城則安、玉城英人
12.22 第15回南部地区歯科医師会家族忘年会（パシフィックホテル）

沖縄の情勢

【平成3年】

1.14 県かりゆし長寿大学開校、1期生88人入学
1.17 恩納村県下初の環境保全条例可決
1.23 西表群発地震発生
4.19 バレットくもじ営業開始
8.20 副知事に尚弘子就任、全国2番目の女性副知事
11.5 沖縄開発庁長官に伊江朝雄が就任、県出身初の大臣
11.7 伊差川バイパス完成
11.30 九州歯科医学大会（沖縄コンベンションセンター）

【平成4年】

2.3 石垣市で中学生の集団暴行致死事件発生
2.14 池間大橋開通（1425M）
4.11 平仲明信、WBAジュニアウェルター級世界チャンピョンとなる
4.21 アシアナ航空、韓国ー那覇の国際定期路線開設
7.26 参院選、島袋宗康が当選
9.3 福州園開園
9.12 学校週5日制スタート 小中高で第2土曜日休日
11.3 首里城公園開園、首里城正殿復元落成式

日本の情勢 海外の情勢

【1991年】

1.17 湾岸戦争勃発（43日間）
2.23 タイで軍事クーデター発生
4.16 ゴルバチョフソ連大統領が初来日
5.14 滋賀県信楽高原鉄道で車両衝突事故、42人死亡
6.3 雲仙普賢岳で大火砕流発生、42人死亡
6.15 フィリピン・ルソン島のピナツボ山大噴火
6.20 大手証券会社の損失補填発覚、以後金融不祥事続発
7.1 ワルシャワ条約機構全面解体
12.21 ソ連邦、消滅決定

【1992年】

2.7 マーストリヒト条約に調印
2.8 第16回冬季五輪、アルベールビルで開幕
4.29 ロサンゼルスで黒人暴動、58人死亡
7.25 第25回五輪バルセロナで開幕
8.24 中韓外相、国交樹立の共同宣言
11.3 米大統領選、民主党のクリントン当選
12.19 韓国大統領選、金泳三民自党候補が当選

流行歌

◇「火の国の女」坂本冬美
◇「愛は勝」KAN

◇「君がいるだけで」米米CLUB
◇「浅い眠り」中島みゆき

映画

◇「おもいでぽろぽろ」宮崎駿
◇「息子」山田洋次
◇洋「羊たちの沈黙」

◇県産映画「パイナップル・ツアーズ」
◇「シコふんじゃった」周防正行
◇「紅の豚」宮崎駿

書籍

◇「ものかんづめ」さくらももこ
◇「血族」シドニー・シェルダン
「だから私は嫌われる」ビートたけし

◇「さるのこしかけ」さくらももこ
◇「国境の南、太陽の西」村上春樹

その他

◇米国最大の玩具チェーン「トイザらス」国内1号店を茨城県に開店
◇FAXが家庭に進出

◇5月2日国家公務員の完全週休2日制スタート
◇6月22日骨髄バンク患者登録スタート
◇「Gショック」売り上げ急増

平成5年～6年（1993年～1994年）

【平成5年】

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
1.8　友寄清喜入会	1.10 ＮＨＫ大河ドラマ「琉球の風」放映開始	1.1　ＥＣ12カ国の市場統合発足
3.25　平成4年度南部地区総会	1.20 西表トンネル開通	1.3　米・ロシア首脳、START2 核弾頭削減条約に調印
4.8　川畑剛人会	3.7　第1回おきなわマラソン開催	3.6　東京地検、金丸信前自民党副総裁を脱税容疑で逮捕
5.7　上原かんな入会	3.27 屋我地大橋開通	3.27 中国国家主席に江沢民を選出
5.14　那覇市国民健康保険運営協議会（屋宜理事）	4.25 第44回全国植樹祭を糸満市で開催	5.15 Ｊリーグ開幕
5.28　仲本友久入会	5.11 那覇新港で集団密航の中国福建省人57人逮捕	6.23 新生党結成、自民党分裂
6.6　第1回デンタルフェア小禄、那覇（17回）浦添（7回）首里（4回）	7.18 衆議院選、西銘・仲村・上原・古堅・宮里が当選	7.7　東京サミット開幕
7.1　大見謝健、前城康一入会	9.3 台風13号、久米島を直撃	8.6　衆院議長に初の女性議長・土井たか子誕生
9.8　小場幸夫入会	11.20 小劇場沖縄ジャンジャン閉館	8.9　細川連立内閣発足
10.6　那覇市成人歯科健診（真和志農協）	11.24 とよみ大橋開通	
10.10 豊見城村健康づくりフェスティバル（金城秀男）	12.16 宮古・八重山で民放放映開始	
11.15 平成5年納税表彰式、友利会長表彰		
11.16 税を知る週間夫人座談会（高良ミチ子）		
11.17 婦人部会（グランドキャッスル）		
11.21 糸満市健康福祉まつり（前川一彦、上原智也、普天間悟）		
11.25 那覇市高齢者保健福祉計画策定会議（那覇市・3役・山川・玉城均）		

流行歌	*映画*	*書籍*	*その他*
✧「島唄」 ✧「無言坂」香西かおり ✧「心凍らせて」高山厳	✧「ソナチネ」北野武 ✧「月はどっちに出ている」崔洋一 ✧「お引越し」相米慎二	✧「磯野家の謎」 ✧「マディソン群の橋」 「ワイルド・スワン」ユン・チアン	✧ 6月21日定期預貯金の金利完全自由化 ✧ 7月12日北海道南西沖地震発生、死者172人、行方不明者26人

【平成6年】

1.9　那覇市学校歯科保健大会の経過と展望を語る座談会（レインボーホテル）	2.22 琉球バス、会社整理を申請し事実上倒産	1.29 小選挙区比例代表制など政治改革4法案が成立
1.13　那覇市成人教育歯科講座（首里、山川理事）	3.17 沖縄船籍の漁船、2.9グアム沖で沈没し乗員は37日間の漂流後救助される	2.12 第17回冬季五輪、リレハンメルで開幕
1.18　大浜当宗ご逝去	4.4　沖縄市黙認耕作地にF15戦闘機墜落	4.26 名古屋空港で中華航空機が墜落、264人死亡
1.28　夫人部新年会（西部オリオン）	4.6　普天間基地で訓練中の米軍ヘリ墜落	5.6　英仏海峡トンネル開通
2.8　那覇市学校給食研究協議会講演（山川理事）	4.15 名桜大学名護市に開学	5.9 マンデラ、南アフリカ初の黒人大統領に
3.1　真座孝入会	6.1　県内初の音楽専用ホール シュガーホール開館	6.27 松本サリン事件発生7人死亡
4.8　澤田泰治、福里英彦入会	11.20 県知事選、太田昌秀再選	6.30 村山富市内閣発足
5.10　玉那覇哲入会	11.23 県内初の私立美術館・佐喜真美術館開設	10.13 大江健三郎、ノーベル文学賞受賞決定
5.12　那覇市かみかみ教室（友利隆俊）	11.27 嘉納杯国際柔道大会無差別級で真喜志慶治選手が初優勝	
6.7　浦添市保健計画策定委員会（島袋支部長）		
7.1　宇根良入会		
7.4　東盛靖入会		
8.11　那覇市健康都市宣言策定審議会（会長）		
9.1　赤峯健入会		
10.3 那覇市健康都市スローガン標語の提言（市長訪問・会長）		
10.30 第40回南部地区ゴルフ大会（サザンリンクス）		
11.11 那覇市「あけもどろ健康づくり宣言」（市民会館・会長）		
121　長堂芳子入会		

流行歌	*映画*	*書籍*	*その他*
✧「innocent world」mr.children ✧「愛が生まれた日」	✧「シンドラーのリスト」 ✧「全身小説家」原一男監督、作家井上光晴を追ったドキュメンタリーフィルム	✧「大往生」永六輔 ✧「超整理法」野口悠紀雄	✧ 9月4日関西国際空港開港 ✧ 9月20日イチローが200本安打達成 ✧ 10月29日長嶋巨人、悲願の日本一に

平成７年～８年（1995年～1996年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢

【平成７年】

2.9　第９回南部地区球技（ボーリング）大会、ｻﾗﾀﾞﾎﾞｳﾙ
3.8　第１回南部地区医薬分業定着促進協議会（南部保健所）副会長
3.29 南歯平成６年度通常総会、合同支部会（ﾊｰﾊﾞｰﾋﾞｭｰﾎﾃﾙ）
3.30 那覇市民健康科へ成人歯科健診勉強会指導医師派遣（山川専務、玉城均理事）
4.7　山内忠入会
4.7　高良宗男入会
4.20 第１回会史編纂準備会
6.13 北那覇青色申告会社団法人設立記念式典（友利政三）
9.28 南風原町「歯の健康フェアー」（前川清春、村田恵一）
10.6　上原徳夫入会
10.14 豊見城村保健福祉スポーツまつり
10.28 那覇市健康フェスティバル歯科健診コーナー
11.19 糸満健康福祉まつり（西崎運動公園）前川雅春、玉澤吉弘、上原かんな
11.22 豊見城村教育委員会・豊見城支部懇談会
12.5　西川謙入会
12.9　浦添市健康まつり、浦添支部協力

沖縄の情勢

【平成７年】

1.7　12.18から行方不明の名護市の３児、自宅近くの水タンクの中で遺体発見
3.12 来間大橋開通（1690M）
4.21 泊埠頭旅客ターミナルビル「とまりん」オープン
6.23 「平和の礎」除幕式、戦争犠牲者234183人の名を刻印
8.1　県立公文書館、南風原町にオープン
9.4　少女暴行事件発生（本島北部で女子小学生が米海兵隊員３人に暴行される
9.5　尚家文書、那覇市に寄贈
10.1 琉球朝日放送（ＱＡＢ）開局
11.1 識名園、一般公開始まる

日本の情勢 海外の情勢

【1995年】

1.1　ＷＴＯ（世界貿易機関）発足
1.17 阪神淡路大震災、神戸で6000人以上死亡
3.20 地下鉄サリン事件
5.16 麻原彰晃オウム心理教代表を殺人容疑で逮捕
9.8　日銀、公定歩合を史上最低の0.5%に
10.26 プロ野球、ヤクルトが日本一に
11.2　米金融当局、大和銀行に米国からの撤退命令
12.14 パリでボスニア和平調印式

流行歌

◇「ズルい女」シャ乱Ｑ
◇「ＬＯＶＥ　ＬＯＶＥ　ＬＯＶＥ」ドリームズ・カム・トゥルー

映画

◇「マディソン郡の橋」
◇「フォレスト・ガンプ」
◇「ガメラ　大怪獣空中決戦」

書籍

◇「ソフィの世界」
◇「大往生」永六輔
「パラサイト・イブ」瀬名秀明

その他

◇５月２日ロサンゼルス・ドジャースの野茂英雄、シャイアンツ戦に先発デビュー。トルネード旋風

【平成８年】

1.18 沖縄県学校保健会表彰式受賞参加（金武町中央公民館）３役・友利理事
1.25 那覇市歯科健康講演会（山川専務）
2.18 第10回南部地区球技大会（サラダボウル）
4.8　宮城嗣典入会
5.8　乾太郎、上田隆一郎、久田誠一郎、徳田安成入会
8.1　太田恭子入会
8.9　那覇市救急医療懇話会打合せ会（自治会館、砂川理事）
9.29 第47回南歯ゴルフ大会（台風のため中止）
9.10 井出隆一郎、洪柏青入会
11.1 長嶺恭正入会
11.7 那覇市かみかみ教室（石嶺公民館、玉城斉）
11.8 第15回九州八市歯科医師会役員連絡協議会（熊本）
11.21 第60回全国学校歯科保健研究大会（東京、友利理事）
11.26 上原亀次ご逝去
12.19第1回小児成人病対策委員会（那覇市教育委員会）
12.21第19回南歯家族忘年会（パシフィックホテル）

【平成８年】

1.7　米兵、歩道上の母子３人轢き殺す事故発生
3.7　那覇地裁、小学生暴行事件で米兵３人に実刑判決
6.9　県議選、大田知事の与党が過半数確保
6.21 名護市で女子中学生拉致事件（殺人事件に）
9.8　米軍基地めぐり初の県民投票
12.31 レコード大賞に安室奈美恵、史上最年少

【1996年】

1.5　村山富市首相退陣表明
2.10 北海道豊浜トンネルで崩落事故、２０人死亡
2.16 菅厚相、薬害エイズ問題で国の責任を認め謝罪
3.20 英で狂牛病騒ぎ起る
7.19 アトランタ五輪開幕
7.26 住宅金融債権管理機構が正式発足
11.18 大阪地裁、末野興産の破産を宣告
12.17 ペルーでゲリラが日本大使公邸を占拠

流行歌

◇「アジアの純真」ＰＵＦＦＹ
◇「ＢＥＬＯＶＥＤ」ＧＬＡＹ

映画

◇「Ｓｈａｌｌ　ｗｅ　ダンス？」
◇「トキワ荘の青春」
◇８月４日渥美清死去、８日国民栄誉賞受賞

書籍

◇「脳内革命」春山茂雄
◇「超勉強法」野口悠紀雄
◇「神々の指紋」グラハム・ハンコック
◇「弟」石原慎太郎

その他

◇２月１２日司馬遼太郎、腹部大動脈瘤破裂のため死去
◇病原性大腸菌Ｏ157の脅威が全国で荒れ狂う
◇アムラーファッション

平成9年～10年（1997年～1998年）

【平成9年】

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
1.23 農水省共済組合沖縄支部歯科講演会（山川専務） 1.28 那覇市保健センター建設基礎調査委員会（玉城理事） 2.12 金城孝入会 4.9 第1回合同委員会 4.8 濱口茂雄入会 5.1 浦添市民憲章推進協議会（湖城理事） 5.23 阿嘉宗惇ご逝去 6.6 浦添学校保健会（湖城理事） 6.11 伊計真智子入会 7.23 那覇市保健大学校（総合福祉センター、山川副会長） 8.31 第50回南部地区ゴルフ大会（バームヒルズ） 8.12 照屋健入会 9.3 第25回那覇市医療協議会（副会長・専務・他） 9.8 浦添市地域健康講演会（茶山団地自治会、金城敬） 9.25 浦添市母子保健連絡協議会（湖城理事） 10.16 全国学校歯科保健大会（福島、小禄真） 10.30 かかりつけ医推進委員会（中央保健所、会長） 11.11 桃原均入会 11.20 平成9年度医療法講習会（県庁講堂、中央保健所主催）	2.10 米軍の鳥島での劣化ウラン弾発射が表面化 4.12 太田知事、基地の整理縮小を求め訪米 9.28 那覇市で不発弾処理、1万人が避難 10.2 名護市議会「市民投票条例」修正案を可決 12.21 名護市で米軍海上ヘリポート基地建設の是非を問う住民投票を実施、反対票が53%の多数を占める	1.2 ロシアのタンカー「ナホトカ号」重油流出 2.19 中国の最高実力者鄧小平が死去、92歳 3.9 ヘール・ホップ彗星地球に最接近 4.1 消費税5%に 4.22 リマ日本大使公邸人質事件、特殊部隊突入で127日ぶり解決 5.1 英総選挙で労働党圧勝ブレア内閣発足 5.27 神戸児童連続殺傷事件 7.1 英国、香港の主権を中国に返還 8.31 ダイアナ元皇太子妃パリで交通事故死

流行歌	映画	書籍	その他
✧ 1997年「WHITE LOVE」「CAN YOU CELEBRATE」	✧ 1997年7月12日「もののけ姫」封切り、年末まで107億円の配給収入	✧ 1997年「失楽園」渡辺淳一 「少年H」妹尾河童 「7つの習慣」 「鉄道員（ぽっぽや）」浅田次郎	✧ 「たまごっち」「プリクラ」が女子中学生を中心に爆発的にブームとなる。

【平成10年】

1.23 南部地区歯科医警察協力会（3役・支部長） 2.23 那覇市母子保健連絡協議会（玉城均理事） 2.26 平成9年度那覇市教育委員会学校保健懇談会 2.26 浦添市学校保健研究大会（湖城理事） 3.19 第15回小児成人病対策委員会（那覇市教委、友利理事） 3.31 事務局大屋照子退職 4.1 事務局採用辞令交付（中村誠） 4.22 夫人の集い（グランドキャッスル、セリーナ） 4.27 平成10年度第1回浦添市健康づくり推進協議会（浦添市保健相談センター）湖城理事 5.23 女性会員座談会（香港飯店） 5.29 那覇市学校保健安全研究会総会（石嶺ｽﾎﾟｰﾂﾌﾟﾗｻﾞ） 6.27 中央保健所保健事業連絡協議会（中央保健所、会長） 6.27 歴代会長座談会（かりゆしｱｰﾊﾞﾝﾘｿﾞｰﾄ那覇やあしばる） 8.4 中村義宣ご逝去 8.18 財政経済セミナー（自治会館、安村庸） 9.8 与儀實篤入会	2.8 太田知事、海上基地反対を表明 2.10 名護市町選でヘリ基地賛成派の岸本健男氏が当選 3.7 対馬丸の慰霊式54年ぶりに悪石島沖で挙行 11.15 県知事選で稲嶺恵一、当選	1.23 長野冬季五輪開幕 2.10 清水宏保、スケート500Mで日本初の金 7.25 和歌山市で毒物混入カレー事件発生 8.31 北朝鮮「テポドン1号」1発を発射 10.7 金大中韓国大統領来日 10.26 プロ野球、横浜が38年ぶりに日本一 11.25 江沢民中国国家主席来日 12.12 政府、日本債権銀行に一時国有化を通告

流行歌	映画	書籍	その他
✧ 「Time goes by」Every Little Thing ✧ 「Perfume of love」globe	✧ 「SADA」「絆」「犬、走る」 ✧ 9月6日黒澤明死去	✧ 「宣戦布告「NO」と言える日本経済」石原慎太郎 ✧ 「老人力」赤瀬川原平 ✧ 「大河の一滴」五木寛之	✧ 11月18日しし座流星群、33年ぶりに地球に大接近。沖縄は曇りで観測できず ✧ 9月27日マグワイヤ、70本塁打で37年ぶりの記録更新

平成 11 年～12 年（1999 年～2000 年）

沖縄県南部地区 歯科医師会の情勢	沖縄の情勢	日本の情勢 海外の情勢
【平成 11 年】 4.13　西平守昭入会 5.11　林秀樹入会 6.4　第 1 回デンタルフェア豊見城 6.24　代議員会 10.12 上地栄作入会 10.12 西平三喜男入会	【平成 11 年】 4.4　沖縄尚学高、春の選抜大会で初優勝 4.30　沖縄で 2000 年サミット開催決定 5.21　文化庁は首里城、中城城などを世界遺産に推薦することを決定 5.26　那覇空港の国内線新旅客ターミナルビルがオープン 6.26　有村産業が会社更生法申請し事実上の倒産、負債総額 300 億円 8.31　沖縄山形屋閉店	【1999 年】 6.18　ケルン・サミット開幕 9.21　台湾で M7.6 の大地震発生

流行歌	***映画***	***書籍***	***その他***
✧ 宇多田ひかるの CD 700 万枚突破	✧ ビートたけし「菊次郎の夏」 ✧「スターウォーズ・エピソード 1」	✧ 芥川賞作家柳美里の小説「石に泳ぐ魚」のモデルとなった女性のプライバシー侵害を認める判決が東京地裁であった	


琉球新報
沖縄で2000年サミット
未来のページ開く
「歴史の痛み」くみ首相決断
開催会合は福岡と宮崎

サミット


号外
琉球新報
THE RYUKYU SHIMPO
沖尚、全国制覇
センバツ 県勢、初の快挙
紫紺の優勝旗

沖尚全国制覇（選抜）

B. 会員の住所録及び歯科医院所在地図

Ⅰ.会員名簿及び住所



1981年　10日会の忘年会



1998年　合同支部会

氏名	支部名	医院名	〒(職)	住所(職)	TEL(職)	〒(自)	住所(自)
阿嘉 昭宗	真和志	阿嘉歯科医院	902-0064	那覇市寄宮 2-36-15	832-5310	902-0064	那覇市寄宮 2-36-15
阿嘉 徳真	島尻	あか歯科医院	901-1303	与那原町字与那原 3632-2	945-8097	900-0032	那覇市松山 1-25-11
阿嘉 宗三	首里	いしみね歯科	903-0804	那覇市首里石嶺町 1-153	886-1214	900-0022	那覇市樋川 1-14-38
赤崎 栄	那覇西	赤崎歯科医院	900-0012	那覇市泊 1-11-8	867-7077	900-0012	那覇市泊 1-11-8
赤峯 悦生	豊見城	赤峯歯科	901-0222	豊見城村渡橋名 280-2	850-0333	900-0021	那覇市泉崎 1-13-6 ロイヤルマンション泉崎 703
赤嶺 勝哉	小禄	アップル歯科医院	901-0152	那覇市小禄 912	859-1160	900-0033	那覇市久米 1-10-9
赤峯 健	島尻	けん歯科クリニック	901-1117	南風原町津嘉山 1597-3	889-0011	901-0153	那覇市宇栄原 3-10-3 赤嶺住宅 301
赤嶺 秀紀	小禄	あかみね歯科クリニック	901-0145	那覇市高良 1-1-62	858-0648	901-0145	那覇市高良 1-1-26 あかみねマンション 303
赤嶺 雅和	那覇東	白山歯科クリニック	902-0065	那覇市壺屋 1-8-39	867-0306	901-0152	那覇市宇小禄 944-1
赤嶺 裕也	小禄	赤嶺歯科医院	901-0153	那覇市宇栄原 1019-1 宇栄原センターハイツ 2F	858-0155	901-0146	那覇市具志 2-5-10
安里 幸子	真和志	銘苅歯科医院	902-0067	那覇市安里 1-2-4	862-1419	900-0033	那覇市久米 2-16-22
安里 博	浦添	広栄歯科	901-2101	浦添市西原 497-2	879-0766	901-2101	浦添市西原 1561-12
新垣 繁信	豊見城	沖縄協同病院	901-0201	豊見城村真玉橋 593	850-7951	901-0205	豊見城村根差部 232-1
新垣 秀也	那覇西	久茂地歯科クリニック	900-0015	那覇市久茂地 2-8-7 ニイヤビル 4F	866-7622	903-0806	那覇市首里汀良町 2-25-2
新垣 元洋	那覇西	新垣歯科医院	900-0015	那覇市久茂地 2-24-19	866-1176	900-0012	那覇市泊 1-6-2 ライオンズM泊 203
新垣 義勝	那覇東	新垣歯科医院	900-0022	那覇市樋川 2-15-2	855-6375	902-0067	那覇市安里 3-1-50
新崎 裕子	小禄	新崎デンタルクリニック	901-0154	那覇市赤嶺 2 丁目 13-11 マンション赤嶺 1F	857-7660	901-0143	那覇市宇安次嶺 214-1
伊計 真智子	首里	まち子デンタルクリニック	903-0804	那覇市首里石嶺町 2 丁目 139 番地	885-8119	902-0062	那覇市松川 386-1
板倉 繁巳	那覇西	美栄橋歯科クリニック	900-0015	那覇市久茂地 3-15-6	862-9133	900-0012	那覇市泊 1-6-1 ビッグライスとまり 802 号
井出 隆一郎	那覇東	ターミナル歯科医院	900-0021	那覇市泉崎 2-41 BC ビル 301 号	831-6215	901-0152	那覇市小禄 1-30-15 ライオンズM 小禄 602 号
乾 太郎	那覇西	たろう歯科医院	900-0015	那覇市久茂地 1-3-8 宇良ビル 2F	866-0230	903-0825	那覇市首里山川町 1-91-1701 号
伊波 富夫	首里	伊波歯科医院	903-0802	那覇市首里大名町 2-7-2	886-1057	900-0013	那覇市牧志 1-6-10
伊礼 昭洋	那覇西	けんし歯科医院	900-0015	那覇市久茂地 3-4-4 YAKA ビル 4F	867-3638	901-2112	浦添市沢岻 1033-3
伊礼 兼治	浦添	伊礼歯科医院	901-2127	浦添市屋富祖 3-7-3	877-9039	901-2223	宜野湾市大山 6-25-20

氏名	支部名	医院名	〒(職)	住所(職)	TEL(職)	〒(自)	住所(自)
上里 和美（うえざと かずみ）	首里	上里歯科医院	903-0804	那覇市首里石嶺町 3-372	887-0093	903-0804	那覇市首里石嶺町 3-372
上里 忠昭（うえざと ただあき）	浦添	三愛歯科医院	901-2122	浦添市勢理客 1-2-28	876-1203	901-2226	宜野湾市嘉数 4-5-15
上江洲 紀子（うえず のりこ）	真和志	上江洲歯科医院	900-0003	那覇市安謝 186	861-2832	900-0011	那覇市上之屋 258-1 ﾒｿﾞﾝ高倉上之屋 901
上田 隆一郎（うえだ りゅういちろう）	浦添	上田歯科医院	901-2131	浦添市牧港 2-46-10	876-0032	901-2131	浦添市牧港 2-34-7 ｺｺﾋﾙｽﾞ202
上地 栄作（うえち えいさく）	浦添	島デンタルクリニック	901-2126	浦添市宮城 5-2-1	878-3034	902-0071	那覇市繁多川 2-11-5
上地 健一（うえち けんいち）	真和志	上地歯科医院	902-0064	那覇市寄宮 153-1 第2玉元ビル2F	55-5202	901-2121	浦添市内間 2-4-8 浩陽ﾏﾝｼｮﾝ内間 201
上地 智博（うえち ともひろ）	島尻	(医)上智会 上地歯科医院	901-0416	東風平町宜次 706-4	98-2355	901-0416	東風平町宜次 706-4
上原 修（うえはら おさむ）	真和志	うえはら歯科医院	902-0074	那覇市仲井真 287	833-2233	903-0103	西原町字小那覇 164-3
上原 和人（うえはら かずと）	真和志	和歯科医院	902-0073	那覇市上間 278-1	855-5864	903-0826	首里寒川町 2-73-1 ﾗｲｵﾝｽﾞM 首里寒川 902 号
上原 かんな（うえはら）	糸満	上原歯科医院	901-0361	糸満市糸満 1005	994-2066	901-0361	糸満市糸満 2063
上原 慎司（うえはら しんじ）	那覇東	とみや歯科ｸﾘﾆｯｸ	900-0013	那覇市牧志 3-13-16 とみやﾋﾞﾙ2F	864-1038	900-0013	那覇市牧志 3-13-16 とみやﾋﾞﾙ5F
上原 淳（うえはら じゅん）	浦添	(医)健生会 上原歯科ｸﾘﾆｯｸ	901-2102	浦添市前田 1411	879-1555	901-2102	浦添市前田 1413-2
上原 利子（うえはら としこ）	那覇西		900-0015	那覇市久茂地 3-9-12	900-0015		那覇市久茂地 3-9-12
上原 智也（うえはら ともや）	糸満	上原歯科ｸﾘﾆｯｸ	901-0305	糸満市西崎 6-15-2	992-2888	901-0305	糸満市西崎 6-15-2
上原 徳夫（うえはら のりお）	豊見城	豊見城村歯科ｸﾘﾆｯｸ	901-0213	豊見城村高嶺 359-1	850-1077	901-0305	糸満市西崎 2-3-24
上原 斉（うえはら ひとし）	浦添		901-2126	浦添市宮城 4-15-7	901-2126		浦添市宮城 4-15-7
宇根 良（うね りょう）	那覇西	うね歯科	900-0011	那覇市字上之屋 411-7	866-6480	902-0076	那覇市字与儀 221
大城 則安（おおしろ のりやす）	糸満	大城歯科	901-0305	糸満市西崎 2-43-3	994-7808	901-0305	糸満市西崎 2-43-3
大城 正雄（おおしろ まさお）	那覇西	大城歯科医院	900-0013	那覇市牧志 2-17-15	861-4879	900-0013	那覇市牧志 2-17-15
太田 恭子（おおた きょうこ）	那覇東	おおた歯科	900-0021	那覇市泉崎 2-1-6	836-0260	900-0021	那覇市泉崎 2-1-6
太田 正昭（おおた まさあき）	真和志	太田歯科医院	902-0077	那覇市長田 1-24-11	834-4632	902-0071	那覇市繁多川 5-4-45
大西 満（おおにし みつる）	糸満	大西歯科ｸﾘﾆｯｸ	901-0305	糸満市西崎 1-22-3 大1ﾋﾞﾙ2F	994-1450	901-0305	糸満市西崎町 2-8-3
大見謝 健（おおみじゃ たけし）	豊見城	おおみ歯科医院	901-0241	豊見城村豊見城 673-5	856-5187	901-0417	東風平町外間 188
大山 日出男（おおやま ひでお）	小禄	大山歯科医院	901-0152	那覇市小禄 120	857-1066	901-0152	那覇市小禄 120

氏名	支部名	医院名	〒(職)	住所(職)	TEL(職)	〒(自)	住所(自)
奥住 守彦（おくすみ もりひこ）	真和志	おくずみ歯科ｸﾘﾆｯｸ	900-0002	那覇市曙 2-10-25	861-7678	900-0013	那覇市牧志 2-22-1-406 ﾗｲｵﾝｽﾞM 牧志
小禄 真（おろく まこと）	豊見城	まこと歯科	901-0244	豊見城村宜保 269 ｼﾃｨﾊｲﾑ ｱｶﾐﾈ2F	850-9009	900-0012	那覇市泊 3-3-1 ﾒﾌﾞﾝｾﾝﾁｭﾘｰ603
嘉数 武男（かかず たけお）	真和志	嘉数歯科医院	902-0067	那覇市安里 2-4-17 ﾗｲｵﾝｽﾞMあさと 205	862-0010	900-0013	那覇市牧志 2-13-6 嘉数ﾊｲﾑ501
垣花 幸子（かきのはな さちこ）	那覇西	垣花歯科医院	900-0013	那覇市牧志 2-23-7	866-0200	900-0016	那覇市前島 3-21-3
垣花 博子（かきのはな ひろこ）	豊見城	垣花整形外科歯科医院	901-0241	豊見城村豊見城 1007-30	850-4160	901-0241	豊見城村豊見城 1007-30
嘉手納 一彦（かでな かずひこ）	那覇西	嘉手納歯科医院	900-0033	那覇市久米 1-24-13 ﾐﾈﾋﾞﾙ2F	867-1580	900-0034	那覇市東町 13-1 沖縄ﾋｶﾞｼﾏﾝｼｮﾝ505号
嘉手納 憲一（かでな けんいち）	那覇西	嘉手納歯科医院	900-0033	那覇市久米 1-24-13 ﾐﾈﾋﾞﾙ2F	867-1580	900-0033	那覇市久米 1-23-2
加藤 進作（かとう しんさく）	首里	くばがわ歯科医院	903-0807	那覇市首里久場川町 2-149	887-6480	903-0804	那覇市首里石嶺町 4-44 丸新ﾋﾞﾙ305
兼城 繁（かねしろ しげる）	小禄	ﾊｰﾄ歯科医院	901-0156	那覇市田原 287 三善三原ﾋﾞﾙ2F	859-1220	901-0153	那覇市宇栄原 560-3
神元 憲和（かみもと けんわ）	那覇西	神元歯科医院	900-0015	那覇市久茂地 2-2-7 神元ﾋﾞﾙ3F	867-2010	900-0014	那覇市松尾 2-23-7 和昇ﾋﾞﾙ5F
川畑 剛（かわばた つよし）	浦添	(医)健生会 上原歯科ｸﾘﾆｯｸ	901-2102	浦添市前田 1411	879-1555	901-2204	宜野湾市上原 1-4-7
川平 昌彦（かわひら まさひこ）	真和志	(医)社団かびら会 川平病院歯科	900-0024	那覇市古波蔵 3-5-25	833-8822	900-0032	那覇市松山 1-20-1
漢那 強（かんな つよし）	首里	漢那歯科医院	902-0061	那覇市古島 47-1	887-7694	901-2121	浦添市内間 524-1
金城 一史（きんじょう かずみ）	那覇東	開南歯科医院	900-0022	那覇市樋川 2-1-32	832-1123	900-0022	那覇市樋川 2-1-32
金城 賢治（きんじょう けんじ）	真和志	安謝歯科医院	900-0003	那覇市安謝 664 沖縄ﾖｼﾋﾞﾙ2F	868-6450	900-0031	那覇市若狭 2-8-15
金城 清一郎（きんじょう せいいちろう）	那覇西	泊歯科ｸﾘﾆｯｸ	900-0012	那覇市泊 2-12-4 山喜ﾌｫﾚｽﾄ2-A	866-8470	900-0006	那覇市おもろまち 2-12-4
金城 敬（きんじょう たかし）	浦添	おおひら歯科ｸﾘﾆｯｸ	901-2114	浦添市安波茶 285	875-0648	901-2103	浦添市仲間 334-36
金城 孝（きんじょう たかし）	島尻	南部徳洲会病院 歯科口腔外科	901-0417	東風平町字外間 80	998-3221	902-0063	那覇市三原 2-10-22
金城 竹治（きんじょう たけはる）	小禄	前島歯科医院	901-0152	那覇市小禄 546-2	857-3710	901-0152	那覇市小禄 546-2
金城 朝和（きんじょう ともかず）	那覇東	おおはし歯科医院	900-0024	那覇市古波蔵 3-8-5 玉城ﾋﾞﾙ 2F	834-1891	901-0152	那覇市小禄 229-1 ﾎﾟﾗﾘｽGT 4F
金城 秀男（きんじょう ひでお）	豊見城	金城歯科ｸﾘﾆｯｸ	901-0201	豊見城村真玉橋 148	856-0136	900-0031	那覇市若狭 1-17-21
金城 史明（きんじょう ふみあき）	島尻	(医)みなみ歯科医院	901-1104	南風原町宮平 248-5	888-1482	902-0077	那覇市長田 2-33-48 ﾛｰﾄﾞｳｨﾚｯｼﾞ那覇 1110
金城 光也（きんじょう みつや）	小禄	(医)さつき会 さつき歯科ｸﾘﾆｯｸ	901-0153	那覇市宇栄原 2-18-3	857-6480	901-0153	那覇市宇栄原 2-18-3
金城 康夫（きんじょう やすお）	那覇西	きんじょう歯科	900-0016	那覇市前島 1-6-5	864-2800	900-0016	那覇市前島 1-6-5

氏名	支部名	医院名	〒(職)	住所(職)	TEL(職)	〒(自)	住所(自)
儀保 邦泰	那覇西	儀保歯科	900-0031	那覇市若狭 3-1-13	862-6991	900-0031	那覇市若狭 3-1-13
儀間 清師	島尻	松山歯科	901-1414	佐敷町津波古 1006	947-3537	902-0077	那覇市長田 2-33-48 コートヴィレッジ那覇 912
久田 誠一郎	那覇西	くだ歯科クリニック	900-0015	那覇市久茂地 3-11-6	862-6480	900-0013	那覇市牧志 3-16-13
国定 剛	首里	国定歯科医院	903-0804	那覇市首里石嶺町 2-265-3	884-9025	903-0804	那覇市首里石嶺町 2-120-4
国仲 匡	那覇東	沖縄県環境保健部 健康増進課	900-0021	那覇市泉崎 1-2-2	866-2209	904-0021	沖縄市胡屋 4-19-18
呉 溪順	真和志					902-2312	那覇市安里 1-4-15
黒潮 武嗣	首里	(医)虹の会 くろしお歯科クリニック	902-0061	那覇市古島 12-1 ピュアパレス黒潮 2F	862-8388	902-0061	那覇市字古島 12-1 ピュアパレス黒潮 301
洪 柏青	糸満	かしわ歯科	901-0315	糸満市照屋 1255-1	992-4171	901-0305	糸満市西崎 6-15-9 丸秀ビル 301 号
湖城 秀久	浦添	湖城歯科クリニック	901-2113	浦添市大平 1-36-5	874-1256	902-0063	那覇市三原 3-14-10
湖城 秀仁	首里	あおば歯科クリニック	903-0801	那覇市首里末吉町 4-5-20	885-8148	903-0801	那覇市首里末吉町 2-191-3
古波蔵 信泉	首里	こはぐら歯科医院	903-0803	那覇市首里平良町 1-4	886-1156	903-0803	那覇市首里平良町 1-14-1 ｸﾞﾗﾝｽﾞM 首里第2 403 号
小場 幸夫	那覇東	コキデンタルオフィス	900-0021	那覇市泉崎 2-19-7	836-6661	900-0021	那覇市泉崎 2-13-8
護得久 朝保	首里	知花歯科医院	903-0812	那覇市首里当蔵町 2-17	884-2216	903-0805	那覇市首里鳥堀町 3-2
崎山 厚	那覇東	崎山歯科医院	900-0022	那覇市樋川 2-16-17	832-2583	900-0022	那覇市樋川 2-16-17
佐久川 正明	首里	首里歯科医院	903-0821	那覇市首里儀保町 2-42	885-5597	903-0804	那覇市首里石嶺町 2-115 IC ﾏﾝｼｮﾝB-302
澤田 泰治	浦添	さわだ歯科	901-2122	浦添市勢理客 2-5-23102	875-4555	901-2133	浦添市城間 2-7-3 ｺｰﾎﾟ浦添 206
座覇 秀政	浦添	経塚歯科クリニック	901-2111	浦添市経塚 437	876-1102	901-2132	浦添市伊祖 869-4
座覇 守弘	豊見城	ざは歯科クリニック	901-0242	豊見城村高安 413-1 ｿｰﾗﾋﾞﾙ古蔵 701	850-5048	900-0024	那覇市古波蔵 105 大漁ﾏﾝｼｮﾝ2F
塩浜 康良	浦添	しおはま歯科医院	901-2122	浦添市勢理客 3-9-13-C	876-8244	900-0016	那覇市前島 2-18-1 ｼｬﾄﾚ塩浜 301 号
島袋 進	浦添	(医)仁陽会 島ﾃﾞﾝﾀﾙｸﾘﾆｯｸ	901-2126	浦添市宮城 5-2-1	878-3034	901-2126	浦添市宮城 6-2-6
島袋 泰弘	小禄	島袋歯科医院	901-0153	那覇市宇栄原 464	858-4141	901-0153	那覇市宇栄原 464
下地 隆之	浦添	国際歯科クリニック	901-2113	浦添市大平 438-1	879-6070	901-2113	浦添市大平 498-13 マンション福永 207 号
下地 玲子	浦添	本永歯科クリニック	901-2121	浦添市内間 4-26-11 玉寄産業ビル 2F	878-1181	900-0012	那覇市泊 1-4-10 ﾗｲｵﾝｽﾞM第8703 号
城間 健	真和志	さわやか歯科クリニック	902-0064	那覇市寄宮 173-1	854-8211	902-0075	那覇市国場 1164-3 丸渡ﾏﾝｼｮﾝII 303 号

氏名	支部名	医院名	〒(職)	住所(職)	TEL(職)	〒(自)	住所(自)
城間 猛	首里	城間歯科医院	903-0821	那覇市首里儀保町 2-13	884-2218	901-2226	宜野湾市嘉数 553 マデナトハイツ 1554
城間 三男	小禄	しろま歯科ｸﾘﾆｯｸ	901-0156	那覇市田原 271 ｻﾀﾞﾝｸﾛｽ与儀 2F	859-1119	901-0152	那覇市小禄 1564-1
城間 吉弘	浦添	しろま歯科医院	901-2127	浦添市屋富祖 1-3-6	878-6121	901-2113	浦添市大平 500-2801 号
新里 叡	那覇東	(医)新里歯科医院	902-0065	那覇市壺屋 2-5-25 平山ﾋﾞﾙ 2F	855-5212	902-0077	那覇市長田 2-24-30
新里 正武	真和志	しんざと歯科	902-0067	那覇市安里 1-1-58 光生ﾋﾞﾙ 3F	868-2217	901-2226	宜野湾市嘉数 3-4-11
新城 啓和	真和志	新城歯科医院	902-0062	那覇市松川 278-3	854-3412	902-0062	那覇市松川 278-3
砂川 英樹	真和志	砂川歯科医院	902-0071	那覇市繁多川 5-17-7	832-2727	902-0077	那覇市長田 2-31-25
瀬底 正司	島尻	瀬底歯科医院	901-1414	佐敷町津波古 246	947-6207	901-1414	佐敷町字津波古 5
瀬底 正男	島尻	しんかい歯科	901-1415	佐敷町新開 1-111	947-1455	901-1415	佐敷町新開 1-6
瀬底 正俊	島尻	瀬底歯科医院	901-1414	佐敷町津波古 246	947-6207	901-1414	佐敷町字津波古 246
平良 敏彦	那覇東	平良歯科医院	900-0013	那覇市牧志 3-9-19	867-4485	901-2111	浦添市経塚 69-6
平良 浩	那覇東	つぼや歯科医院	902-0065	那覇市壺屋 2-23-4	853-5568	902-0065	那覇市壺屋 2-23-4
高江洲 勲	那覇東	新栄歯科医院	900-0014	那覇市松尾 2-24-3	861-4712	903-0816	那覇市首里真和志町 1-13
高江洲 旭	那覇西	高江洲歯科	900-0012	那覇市泊 1-4-10 ﾗｲｵﾝｽﾞM泊第 8 101 号	62-4803	900-0016	那覇市前島 1-8-16
高江洲 正勝	真和志	たかえす歯科医院	902-0062	那覇市松川 1-1-20	833-4922	902-0062	那覇市松川 1-1-20
高江洲 實	豊見城	みのる歯科医院	901-0231	豊見城村我那覇 426-78	850-6064	900-0012	那覇市泊 1-21-10 ﾆｭｰｺｰﾎﾟﾗｽ泊 302 号
高橋 学	島尻	高橋歯科医院	901-1111	南風原町字兼城 563-1	889-5655	901-1111	南風原町字兼城 563-1
高嶺 明彦	那覇西	たかみね歯科ｸﾘﾆｯｸ	900-0032	那覇市松山 1-9-2	866-0648	901-2114	浦添市安波茶 498-2
高宮城 實之	浦添	高宮城歯科医院	901-2131	浦添市牧港 1-31-20	877-3621	901-2131	浦添市牧港 1-31-20
高良 兼次	小禄	ﾍﾘｰ歯科ｸﾘﾆｯｸ	901-0152	那覇市小禄 421-29 ﾀｶﾋﾞﾙ 2F	858-4182	901-0152	那覇市小禄 421-29
高良 恒己	浦添	高良歯科医院	901-2127	浦添市屋富祖 1-2-10	879-0849	901-2127	浦添市屋富祖 1-2-10
高良 政勝	真和志	たから歯科医院	902-0067	那覇市安里 372-8	884-6480	903-0826	那覇市首里寒川町 1-78-8
高良 政利	小禄	高良歯科医院	901-0152	那覇市小禄 1-1-7 ﾌﾟﾗｻﾞ高良 201	857-3030	901-0152	那覇市小禄 1-1-7 ﾌﾟﾗｻﾞ高良 8F
高良 政憲	小禄	高良歯科医院	901-0152	那覇市小禄 1-1-7 ﾌﾟﾗｻﾞ高良 201	857-3030	901-0152	那覇市小禄 1-1-7 ﾌﾟﾗｻﾞ高良 707

氏名	支部名	医院名	〒(職)	住所(職)	TEL(職)	〒(自)	住所(自)
高良 宗男	真和志	あけぼの歯科	900-0002	那覇市曙 2-24-3 PMC ﾏﾝｼｮﾝ202 号	869-2772	900-0002	那覇市曙 2-24-3 PMC ﾏﾝｼｮﾝ503 号
竹尾 孝明	豊見城	竹尾歯科医院	901-0213	豊見城村高嶺 393-5	856-3569	901-0213	豊見城村高嶺 393-5
玉城 生夫	那覇西	ﾀﾏｷ歯科医院	900-0015	那覇市久茂地 2-12-1	863-0350	900-0013	那覇市牧志 1-19-53 ﾗｲｵﾝｽﾞM 牧志 702 号
玉木 史朗	那覇西	玉木歯科	900-0015	那覇市久茂地 1-2-20 OTV 国和ﾌﾟﾗｻﾞ303	862-8726	900-0033	那覇市久米 1-17-21
玉城 民雄	那覇西	具志川歯科医院	901-3123	具志川村大田 564	985-2321	900-0016	那覇市前島 1-13-10 ﾗｲｵﾝｽﾞM 中の橋 902
玉城 直子	首里	たまき歯科ｸﾘﾆｯｸ	903-0816	那覇市首里真和志町 2-36	886-5544	903-0816	那覇市首里真和志町 2-38
玉城 英人	糸満	い歯科医院	901-0302	糸満市潮平 606-1	994-1827	901-0305	糸満市西崎 2-30-14 ｷｬｽﾙ ｴﾇ202
玉城 均	真和志	ながた歯科医院	902-0077	那覇市長田 1-7-6	854-1182	902-0077	那覇市長田 1-7-6
玉城 斉	那覇東	たまき歯科医院	900-0014	那覇市松尾 2-3-7	868-0736	902-0073	那覇市松尾 2-3-7
玉城 吉康	首里	まきし歯科医院	903-0804	那覇市首里石嶺町 4-199	885-1182	902-0061	那覇市古島 446
玉澤 吉弘	糸満	玉沢歯科	901-0361	糸満市糸満 866-1	992-3841	901-0305	糸満市西崎 2-20-5
玉那覇 哲	首里	たまなは歯科医院	903-0804	那覇市首里石嶺町 4-46-102	87-3331	903-0806	那覇市首里汀良町 2-7-4
知花 朝敏	首里	知花歯科	903-0812	那覇市首里当蔵町 2-17	84-2216	903-0812	那覇市首里当蔵町 2-17
照屋 健	島尻	上地歯科医院	901-0416	東風平町宜次 706-4	998-2355	902-0075	那覇市国場 1186-4 丸彦マンション505
照屋 均	島尻	よなばる中央歯科医院	901-1303	与那原町字与那原 77	945-5588	901-1302	与那原町字上与那原 95
桃原 均	那覇西	ももはら矯正歯科ｸﾘﾆｯｸ	900-0013	那覇市牧志 1-2-20	860-5365	900-0012	那覇市泊 3-7-8
当間 淳司	浦添	当間歯科	901-2133	浦添市城間 4-40-5	876-1290	901-2133	浦添市城間 2-10-15
當山 正昭	那覇西	西武門歯科医院	900-0033	那覇市久米 2-24-9	868-7024	900-0033	那覇市久米町 2-24-9
當山 邑子	那覇東	宮平歯科医院	900-0014	那覇市松尾 2-5-41	63-1776	900-0014	那覇市松尾 2-19-39 ｸﾞﾘｰﾝﾊｲﾂ401
徳田 安成	首里	とくだ歯科ｸﾘﾆｯｸ	902-0068	那覇市真嘉比 369	885-6688	900-0022	那覇市樋川 2-2-3
渡口 進一	那覇西	渡口矯正歯科医院	900-0012	那覇市泊 1-10-8	866-5483	900-0012	那覇市泊 1-10-8
渡名喜 吉子	糸満					901-0512	具志頭村字具志頭 75-3
富島 修	浦添	とみしま歯科ｸﾘﾆｯｸ	901-2101	浦添市西原 786	879-8889	901-2103	浦添市仲間 740
富本 盛弘	真和志	ﾊｼｶﾞ歯科医院	902-0062	那覇市松川 1-1-6	832-1846	902-0062	那覇市松川 1-1-6

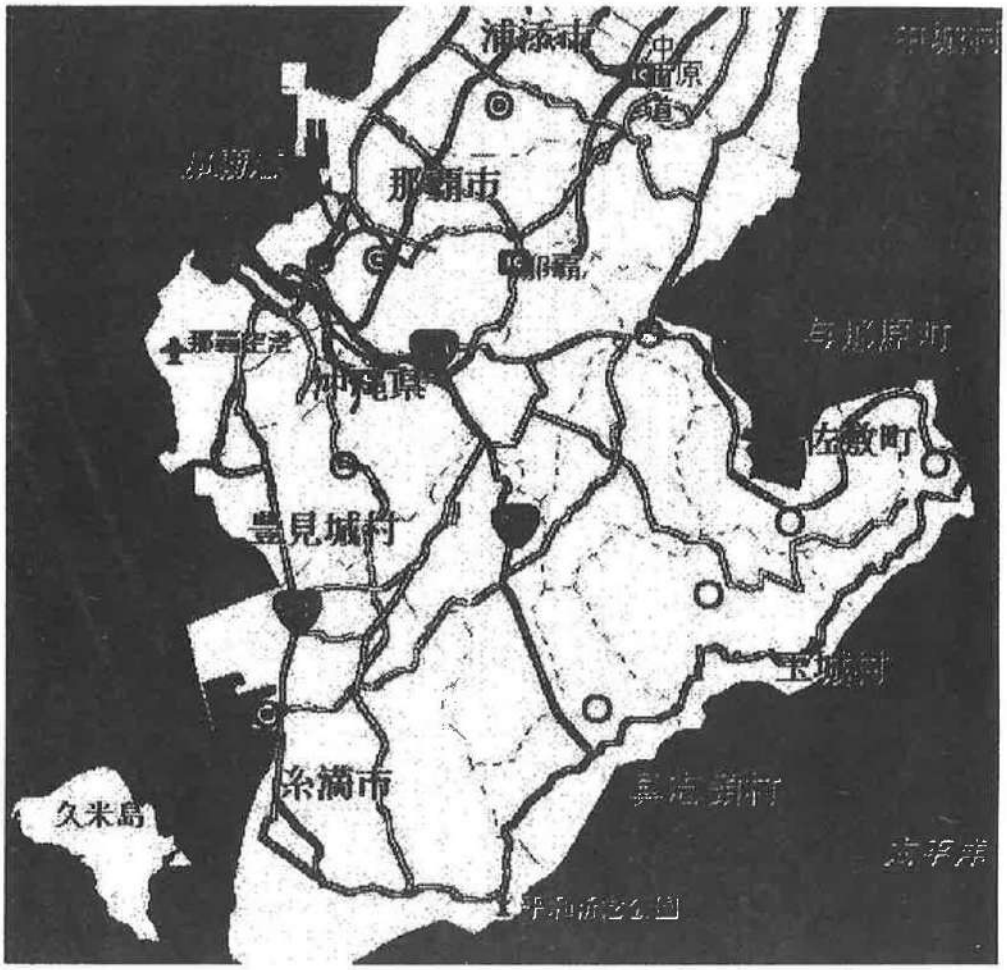
氏名	支部名	医院名	〒(職)	住所(職)	TEL(職)	〒(自)	住所(自)
友寄 景淳	真和志	ﾄﾓﾖｾ歯科	902-0067	那覇市安里 360-7	886-1515	900-0012	那覇市泊 1-14-13 マンション G1BU
友寄 清喜	真和志	友寄ﾃﾞﾝﾀﾙｸﾘﾆｯｸ	902-0064	那覇市寄宮 1-32-2	836-5418	902-0063	那覇市三原 2-16-5 大湾ﾋﾞﾙ 305
友寄 清順	那覇東	友寄歯科医院	902-0065	那覇市壺屋 2-18-8	832-1509	902-0064	那覇市寄宮 1-32-2
友寄 喜樹	小禄	ともよせ歯科医院	901-0156	那覇市田原 4-7-3	858-8151	902-0064	那覇市寄宮 2-38-11
友利 清一	浦添	G 歯科ｸﾘﾆｯｸ	901-2132	浦添市伊祖 2-20-5	878-2535	901-2132	浦添市伊祖 3-46-3
友利 隆俊	真和志	やえす歯科医院	902-0064	那覇市寄宮 2-30-49 ﾍﾞﾙﾍﾞ森山 2F	855-6480	902-0078	那覇市識名 1-1-12 ﾗﾌｨｰﾈ寄宮 1002
友利 時野	浦添	牧港胃腸外科 歯科医院	901-2131	浦添市牧港 4-24-7	876-5641	901-2131	浦添市牧港 4-24-7
友利 政三	那覇西	崇元寺歯科医院	900-0012	那覇市泊 1-8-3	867-1862	901-2226	宜野湾市嘉数 4-6-5
豊岡 幹世	浦添	とよおか歯科医院	901-2114	浦添市安波茶 255-1	877-1661	900-0014	那覇市松尾 2-12-25 ﾗｲｵﾝｽﾞﾏﾝｼｮﾝ松尾 901
中里 治通	那覇東	中里歯科医院	900-0014	那覇市松尾 1-9-1	867-4319	902-0062	那覇市松川 2-5-40
仲里 雅則	真和志	なかざと歯科医院	902-0066	那覇市大道 45	887-6408	902-0066	那覇市大道 45
仲里 正博	那覇西	仲里歯科医院	900-0033	那覇市久米 1-25-10	862-8241	900-0033	那覇市久米 1-25-10
仲間 正武	島尻	なかま歯科医院	901-0512	具志頭村字具志頭 636-6	998-1234	901-0512	具志頭村具志頭 1477
仲村 将健	真和志	(医)星陵会 下地歯科医院	902-0067	那覇市安里 381-1 本部ﾋﾞﾙ 6F	885-6115	901-2121	浦添市内間 2-5-28 ﾒｿﾞﾝﾄｰﾏ 201 号
仲本 友久	豊見城	仲本歯科医院	901-0201	豊見城村真玉橋 135-1	856-0161	900-0016	那覇市前島 3-14-6
永井 長秀	那覇西	やなぎ歯科医院	900-0013	那覇市牧志 1-3-62	867-3896	900-0013	那覇市牧志 1-3-62
長堂 忍	真和志	長堂歯科医院	902-0071	那覇市繁多川 2-1-1	835-1088	902-0071	那覇市繁多川 2-1-1
長堂 芳子	真和志	長堂歯科医院	902-0071	那覇市繁多川 2-1-1	835-1088	902-0071	那覇市繁多川 2-1-1
長濱 正	真和志	(医)長浜歯科医院	902-0075	那覇市字国場 1186-2	855-0648	902-0075	那覇市字国場 1186-2
長嶺 和弘	那覇西	ながみね歯科	900-0013	那覇市牧志 1-3-35 丸玉ﾋﾞﾙ 3F	863-1141	902-0067	那覇市安里 53 ﾒｿﾞﾝｾﾝﾁｭﾘｰ安里 503
長嶺 尚子	浦添	ｱｰｽ歯科ｸﾘﾆｯｸ	901-2133	浦添市城間 2-7-3 ｺｰﾎﾟ浦添 201	875-4780	901-2224	宜野湾市真志喜 555-2 ﾗｲｵﾝｽﾞ M 真志喜公園 502
長嶺 将秀	真和志	長嶺歯科医院	902-0062	那覇市松川 1-11-13 ﾊｲﾂ松川 201	854-3939	903-0826	那覇市首里寒川町 2-61
長嶺 恭正	浦添	ながみね歯科医院	901-2101	浦添市西原 749-3 ｳｲﾝﾄﾞｴA 1F	876-6086	901-2101	浦添市西原 717-1 UNT ﾏﾝｼｮﾝ 203 号
西川 謙	小禄	西川歯科医院	901-0155	那覇市字金城 337-2 ｴﾙｶｽﾃﾛ 2F	859-4700	901-0155	那覇市字金城 337-2 ｴﾙｶｽﾃﾛ G

氏名	支部名	医院名	〒(職)	住所(職)	TEL(職)	〒(自)	住所(自)
西平 栄次郎	真和志	(医)八十八会 さかした歯科ｸﾘﾆｯｸ	902-0062	那覇市松川 2-5-9	886-1212	902-0062	那覇市松川 2-6-17
西平 三喜男	首里	ミッキー歯科ｸﾘﾆｯｸ	903-0804	那覇市首里石嶺町 4-94	887-0707	903-0804	那覇市首里石嶺町 4-434-1 ｺｰﾎﾟかりゆし 305
西平 守昭	真和志	にしひら歯科ｸﾘﾆｯｸ	902-0072	那覇市真地 358-1 ｺｰﾎﾟたまき 1F	835-2611	903-0812	那覇市首里当蔵町 1-10 ﾊﾟﾚｽｻｲﾄﾞｳﾞｨﾗ 302
西平 守廣	首里	西平歯科医院	903-0812	那覇市首里当蔵町 1-10-1	884-1272	903-0812	那覇市首里当蔵町 1-10-1
饒波 正太郎	浦添	のは歯科医院	901-2133	浦添市城間 3-1-3	877-9217	900-0012	那覇市泊 2-11-5
濱口 茂雄	那覇西	浜口歯科医院	900-0015	那覇市久茂地 1-4-9 ｱｲｷｬﾝﾋﾞﾙ 2F	867-2214	900-0033	那覇市久米 2-24-11 ﾄﾞﾐｰﾙ久米 501 号
林 昭治	那覇西	林歯科医院	900-0031	那覇市若狭 2-5-1	861-4899	900-0031	那覇市若狭 2-5-1
林 秀樹	真和志	きりん歯科ｸﾘﾆｯｸ	902-0077	那覇市長田 1-4-4	835-9505	900-0014	那覇市松尾 1-3-30 ｿｰﾜﾋﾟｱ松尾台 707 号
林 房子	那覇西	林歯科医院	900-0031	那覇市若狭 2-5-1	861-4899	900-0031	那覇市若狭 2-5-1
比嘉 隆夫	浦添	たかお歯科	901-2104	浦添市当山 560-7	879-6804	901-2132	浦添市伊祖 613 ﾊﾟﾃｨｰﾉ伊祖 303 号
比嘉 民子	那覇東	ﾙﾅ歯科医院	900-0024	那覇市古波蔵 2-2-18	834-2932	900-0027	那覇市山下町 115-1 ﾛｰｽﾞﾏﾝｼｮﾝ201 号
比嘉 千春	浦添	ちはる歯科ｸﾘﾆｯｸ	901-2103	浦添市仲間 345-1	877-6480	901-1301	与那原町板良敷 469
比嘉 良喬	那覇西	比嘉歯科医院	900-0036	那覇市西 1-15-16	868-0355	900-0036	那覇市西 2-12-1-203 ﾌｧﾐｰﾙ西町ﾎﾞｰﾄｻｲﾄﾞ
比嘉 良有	那覇西	比嘉歯科医院	900-0036	那覇市西 1-15-16	868-0355	900-0036	那覇市西 1-15-16
東盛 靖	那覇東	那覇民主診療所	900-0021	那覇市泉崎 2-2-5	835-3035	901-0152	那覇市小禄 1536 ﾊﾟﾜｰﾋﾙｽﾞM 5-A
福里 英彦	浦添	ふくざと歯科医院	901-2126	浦添市宮城 3-14-1-101	875-0121	901-2133	浦添市城間 2-8-7
福村 義信	那覇東	福村歯医院科	902-0076	那覇市与儀 343	836-7425	902-0076	那覇市与儀 343
普天間 悟	糸満	ふてんま歯科ｸﾘﾆｯｸ	901-0305	糸満市西崎 6-19-3	994-8941	901-0305	糸満市西崎 3-510-19 E-37
古堅 英信	那覇西	古堅歯科・矯正歯科医院	900-0013	那覇市牧志 1-19-15	863-7802	900-0013	那覇市牧志 1-19-15 古堅歯科ﾋﾞﾙ3F
古堅 譲	那覇東	ふるげん歯科医院	900-0025	那覇市壺川 124	834-1110	902-0062	那覇市松川 2-1-25
外間 宏正	首里	ほかま歯科ｸﾘﾆｯｸ	903-0805	那覇市首里鳥堀町 1-9	886-5122	903-0806	那覇市首里汀良町 1-55 ﾒｿﾞﾝS&K B202
前川 一彦	糸満	ﾌｧﾐﾘｰ歯科ｸﾘﾆｯｸ	901-0305	糸満市西崎 3-493 花城ハイム2F	992-1818	901-0411	東風平町字友寄 855-83
前川 清春	島尻	ﾊﾟﾆｰ歯科ｸﾘﾆｯｸ	901-1111	南風原町字兼城 298	888-1184	901-1111	南風原町字兼城 298
前川 雅春	糸満	ﾌﾚﾝﾄﾞ歯科医院	901-0303	糸満市兼城 369-1	994-4618	901-0361	糸満市糸満 1325-2

氏名	支部名	医院名	〒(職)	住所(職)	TEL(職)	〒(自)	住所(自)
前城 康一	真和志	前城歯科医院	902-0067	那覇市安里 2-8-5	861-8822	902-0066	那覇市大道 138
真栄城 正弘	島尻	なんぶ歯科医院	901-0405	東風平町伊覇 3	998-5371	902-0065	那覇市壺屋 2-3-7
真座 孝	島尻	マザ歯科クリニック	901-1302	与那原町字上与那原 390-1 2F	944-1000	901-1302	与那原町字上与那原 390-1 2F
真境名 真吾	真和志	まじきな歯科医院	900-0003	那覇市安謝 188-1	862-2472	901-0146	那覇市具志 1-21-11
真境名 勉	首里	まじきな歯科クリニック	903-0805	那覇市首里鳥堀 4-107 アーバンヒルKファースト	884-5066	903-0812	覇市首里当蔵町1-48
真境名 由守	浦添	浦添歯科クリニック	901-2114	浦添市安波茶 3-7-7	879-2812	901-2114	浦添市安波茶 3-7-7
又吉 達雄	那覇西	又吉歯科医院	900-0013	那覇市牧志 1-12-5	861-0648	900-0012	那覇市泊 2-20-4
又吉 盛弘	島尻	又吉歯科クリニック	901-1204	大里村稲嶺 98-1	946-8313	902-0075	那覇市国場 1176-1
松本 真志	真和志	松本歯科クリニック	902-0073	那覇市上間 559-1 ドンフェアリー毎日 1F	835-2021	903-0125	西原町字上原 163-5
嶺井 勢子	浦添					901-2113	浦添市大平 466
嶺井 浩	那覇東	嶺井歯科医院	900-0013	那覇市牧志 3-13-17 丸十ビル3F	863-0957	903-0812	那覇市首里当蔵町 2-15-4
宮城 智恵子	那覇東	みやぎ歯科医院	900-0021	那覇市泉崎 2-2-2	832-3012	900-0021	那覇市泉崎 2-11-4
宮城 嗣典	那覇西	みやぎ歯科クリニック	900-0032	那覇市松山 2-23-13	864-0239	901-0146	那覇市具志 3-8-28
宮城 トシ	浦添	宮城歯科医院	901-2134	浦添市港川 2-28-8	879-1487	901-2134	浦添市港川 2-28-8
宮城 正照	真和志	宮城歯科クリニック	902-0075	那覇市国場 541	832-0008	900-0014	那覇市松尾 2-7-7 グランシャル松尾 1301
宮城 正廣	那覇東	みやぎ歯科医院	900-0021	那覇市泉崎 2-2-2	832-3012	900-0021	那覇市泉崎 2-19-4
宮里 修	真和志	寄宮歯科医院	902-0077	那覇市長田 1-12-3	854-8766	902-0077	那覇市長田 1-12-3
宮里 正	小禄	小禄歯科クリニック	901-0156	那覇市田原 240-7	858-2635	901-0152	那覇市小禄 1701-1
宮里 良雄	那覇東	宮里歯科医院	900-0021	那覇市泉崎 1-19-17	863-4769	900-0021	那覇市泉崎 1-19-17
宮良 修	真和志	みやら歯科医院	902-0073	那覇市上間 236 大徳産業ビル2F	855-0982	901-2133	浦添市城間 3-12-12
村田 恵一	島尻	(医)尚歯一日橋会 むらた歯科医院	901-1111	南風原町字兼城 516-1	889-6480	900-0036	那覇市西 1-4-11 マンションかんな 2-A
村田 芳子	那覇東	村田歯科医院	900-0022	那覇市樋川 1-4-15	832-2875	900-0012	那覇市泊 1-17-6
銘苅 清	那覇西	銘苅歯科医院	900-0033	那覇市久米 2-16-22	862-0502	900-0033	那覇市久米 2-16-22
本永 尚司	浦添	本永歯科クリニック	901-2121	浦添市内間 4-26-11 玉寄産業ビル	878-1181	900-0012	那覇市泊 1-29-16

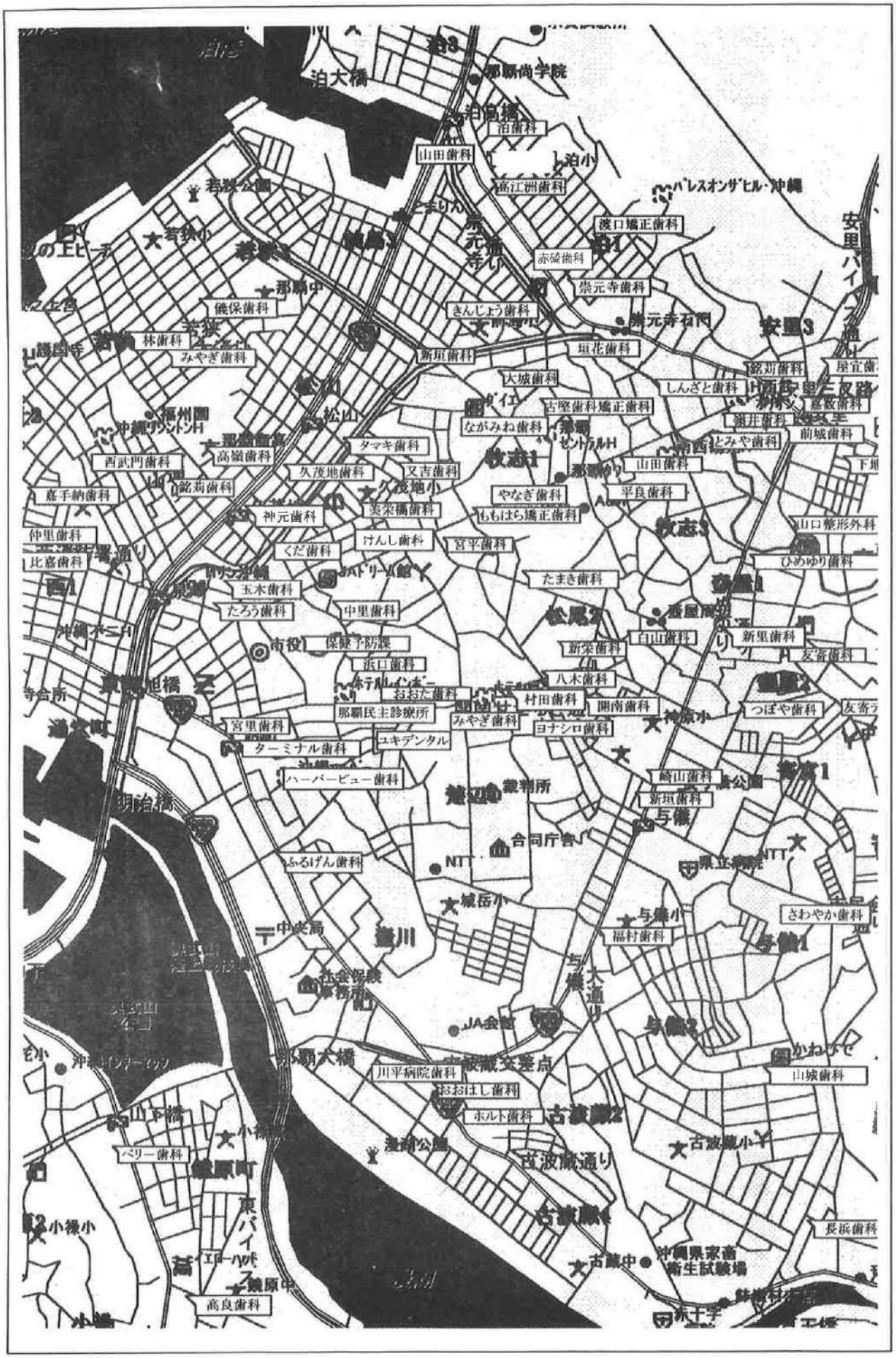
氏名	支部名	医院名	〒(職)	住所(職)	TEL(職)	〒(自)	住所(自)
諸見里 亮	島尻	和み歯科ｸﾘﾆｯｸ	901-1303	与那原町与那原 383-2	945-7714	902-0064	那覇市寄宮 1-23-15 LM寄宮第3 502号
八木 茂	那覇東	八木歯科医院	900-0014	那覇市松尾 2-23-24	863-0296	902-0061	那覇市古島 116-4
屋宜 優	真和志	屋宜歯科医院	902-0067	那覇市安里 1-4-13	863-7449	902-0065	那覇市壺屋 2-16-18
屋宜 裕子	島尻	おおざと歯科医院	901-1202	大里村大里 2505-1	945-410	900-0021	那覇市泉崎 2-9-4
安村 庸	那覇東	ﾊｰﾊﾞｰﾋﾞｭｰ歯科医院	900-0021	那覇市泉崎 2-14-7	834-097	901-0152	那覇市金城 1-2-4
山内 忠	浦添	やまうち歯科	901-2132	浦添市伊祖 2-2-5 ｻﾝﾁｬｲﾙﾄﾞめぐみ 201号	875-2848	901-2132	浦添市伊祖 2-2-5 ｻﾝﾁｬｲﾙﾄﾞめぐみ 303号
山内 秀子	浦添	(医)八重瀬会 理事長山内朝秀	901-2133	浦添市城間 2606876-2212	901-2126		浦添市宮城 4-21-2
山川 修	首里	山川ﾃﾞﾝﾀﾙｸﾘﾆｯｸ	902-0068	那覇市真嘉比 252-2 真嘉比ﾏﾝｼｮﾝ302	884-8846	902-0068	那覇市真嘉比 252-2 真嘉比ﾏﾝｼｮﾝ408
山川 景康	那覇東	ひめゆり歯科医院	902-0065	那覇市壺屋 2-8-1 第2ひめゆりM. 2F	855-3966	903-0801	那覇市首里末吉町1 -175-11
山口 悦子	真和志	山口整形外科 歯科医院	902-0063	那覇市三原 1-14-17	855-8181	902-0063	那覇市三原 1-14-17
山城 ひとみ	小禄	むらやま歯科医院	901-0146	那覇市具志 2-3-13	857-1164	901-0145	那覇市高良 2-18-15
山城 正裕	那覇東	山城歯科医院	902-0076	那覇市与儀 373-7 ﾒｿﾞﾝ城間 1F	854-0018	902-0075	那覇市字国場 1163-13 名嘉方 201
山田 勲	那覇西	山田歯科医院	900-0012	那覇市泊 2-5-6	867-0883	900-0012	那覇市泊 2-5-6
山田 芳宏	那覇東	山田歯科医院	900-0013	那覇市牧志 3-12-1	61-6743	900-0012	那覇市泊 1-12-16
与儀 實篤	真和志	真和志歯科ｸﾘﾆｯｸ	902-0063	那覇市三原 3-18-27	831-8780	902-0067	那覇市安里 1-1-45 ﾒｿﾞﾝ高倉 505
与那城 勇	小禄					901-0242	豊見城村高安 734-2
与那城 智	那覇東	歯科ﾖﾅｼﾛ医院	900-0023	那覇市楚辺 1-2-71	855-5511	901-0242	豊見城村高安 734-1
与那嶺 貞子	真和志		902-0067	那覇市安里 2-6-4		902-0067	那覇市安里 2-6-4

Ⅱ.南部地区歯科医師会会員の医院地図

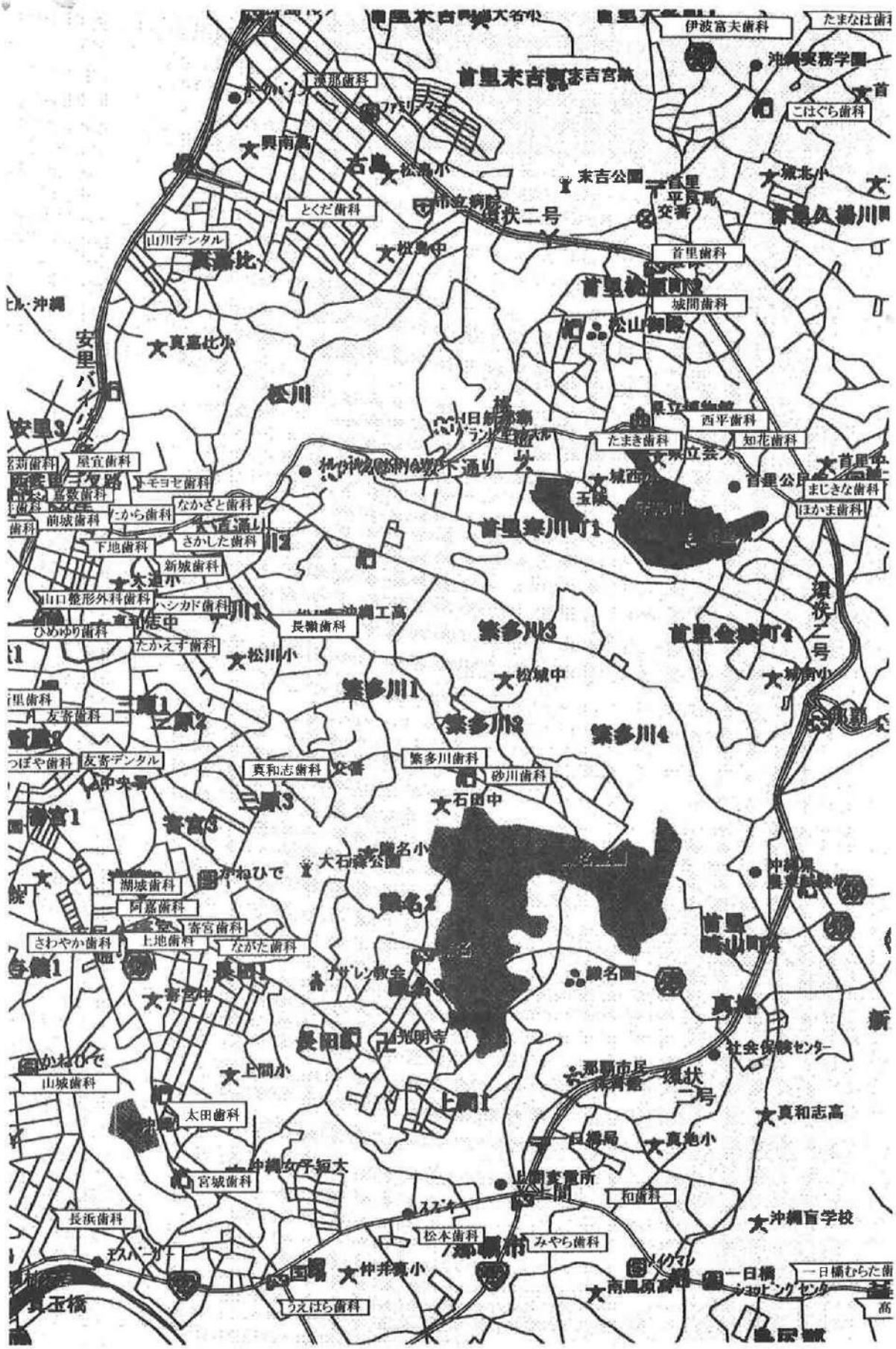


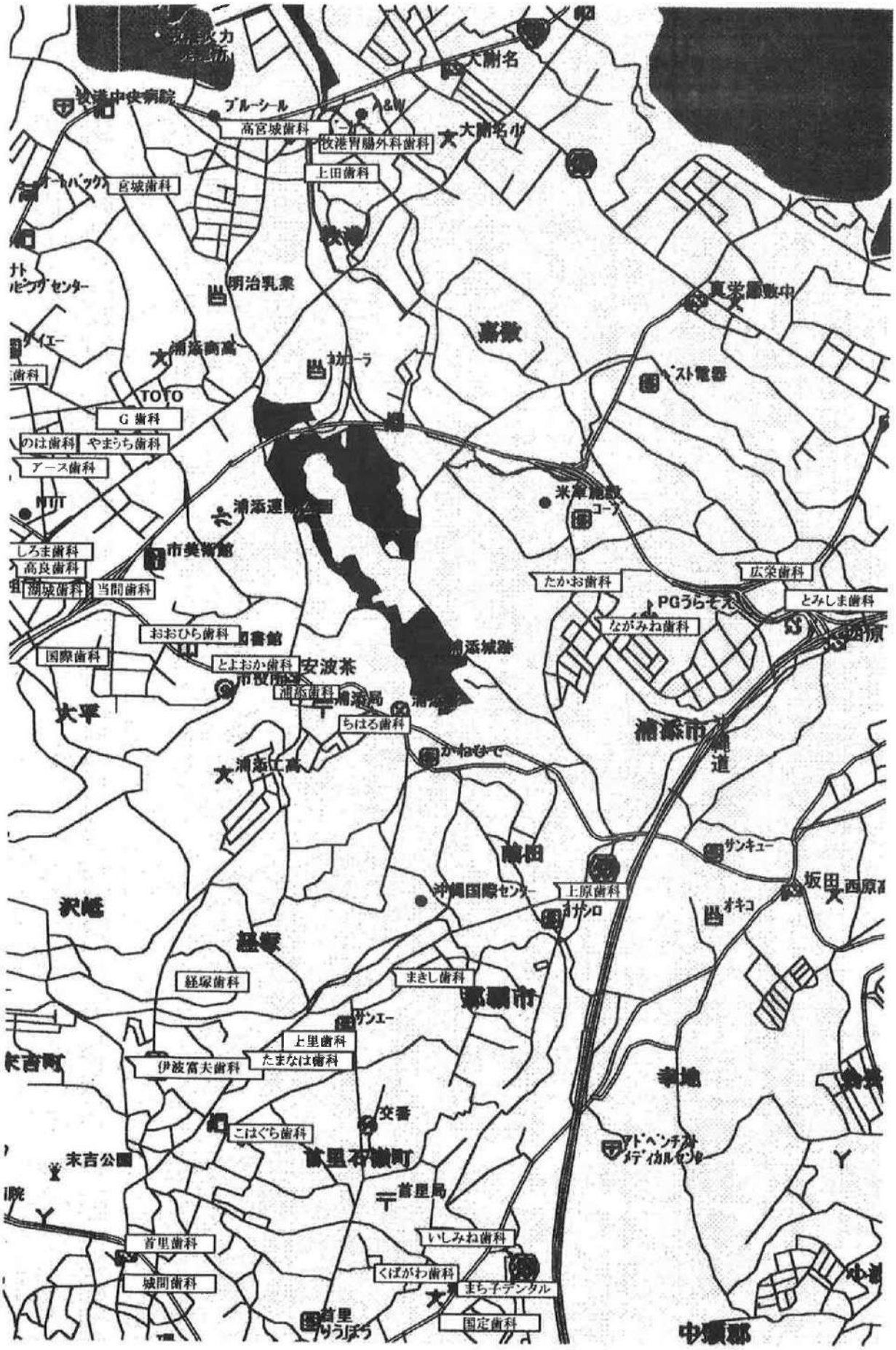
社団法人 南部地区歯科医師会会員数
総数234名(平成11年10月30日現在)

那覇東支部	35名	浦添支部	36名
那覇西支部	38名	島尻支部	20名
真和志支部	42名	糸満支部	11名
首里支部	23名	豊見城支部	11名
小禄支部	18名		

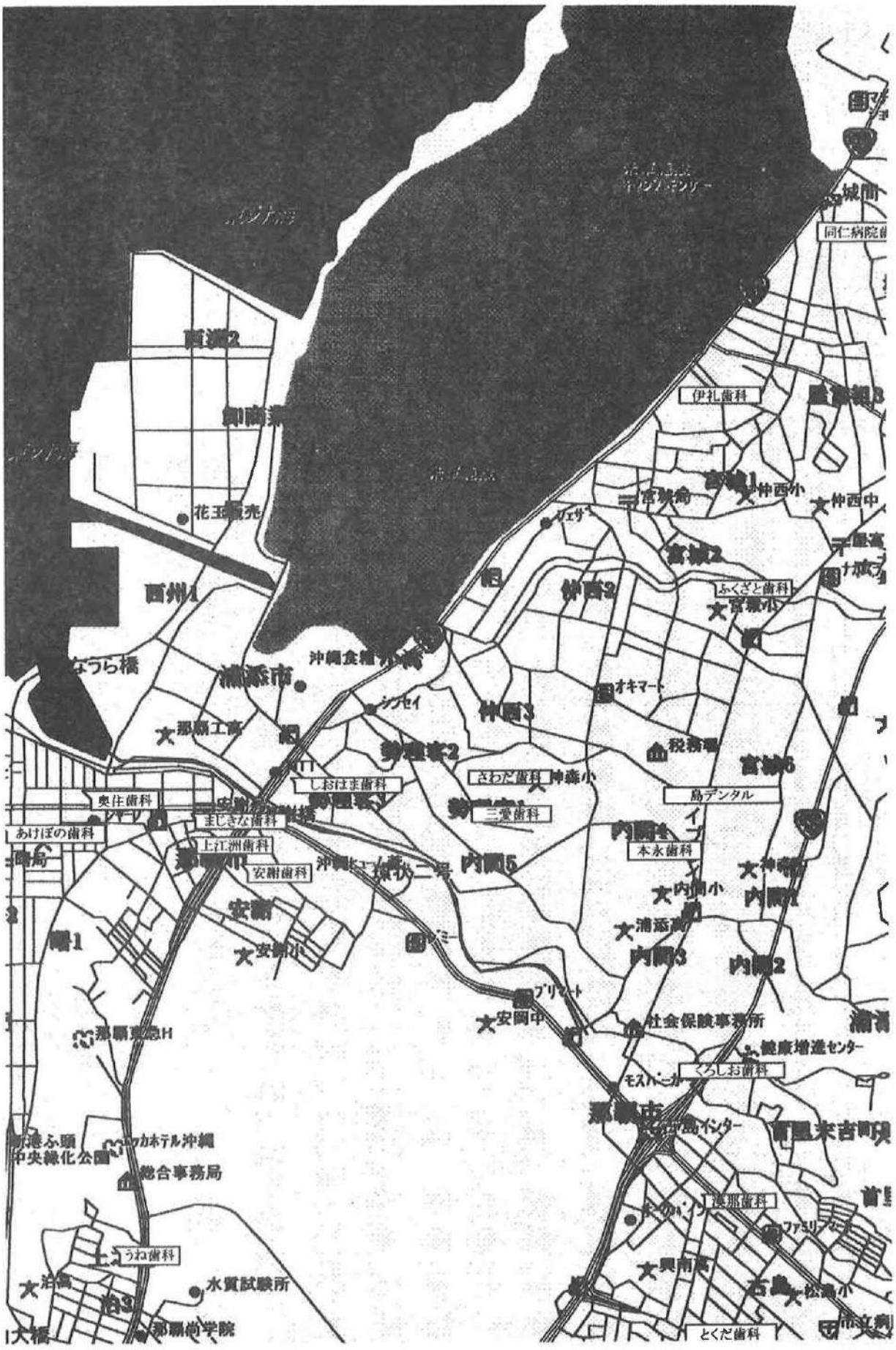


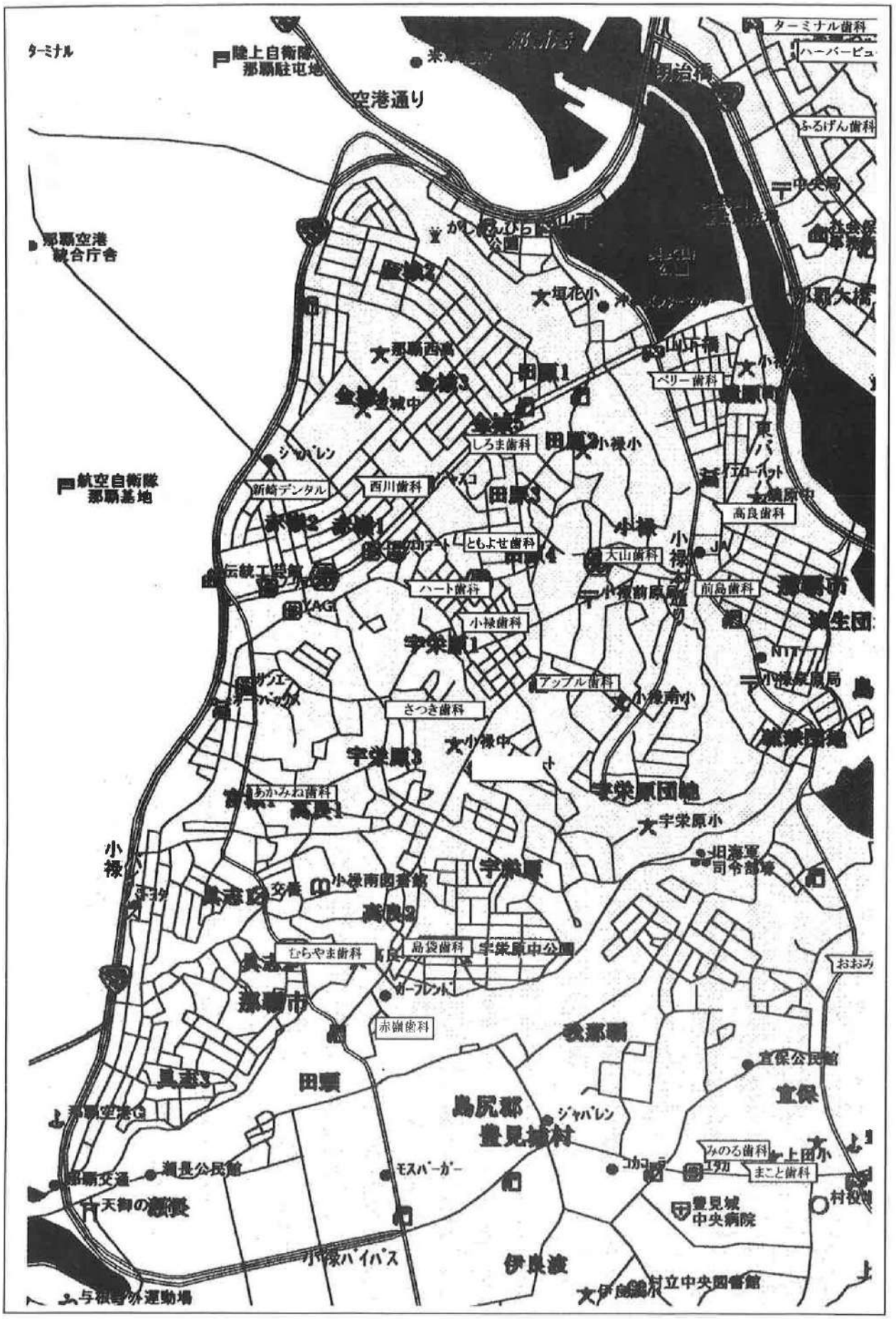
泊大橋
那覇尚学院
泊高橋
泊歯科
山田歯科
泊小
高江洲歯科
パレスオンザヒル・沖縄
渡口矯正歯科
赤碕歯科
崇元寺歯科
崇元寺石門
安里3
若狭公園
若狭小
那覇中
儀保歯科
きんじょう歯科
林歯科
みやぎ歯科
新垣歯科
垣花歯科
大城歯科
しんざと歯科
銘苅歯科
屋宜歯
古堅歯科矯正歯科
ながみね歯科
福州園
松山
タマキ歯科
高嶺歯科
西武門歯科
久茂地歯科
又吉歯科
牧志1
とみや歯科
前城歯科
山田歯科
嘉手納歯科
銘苅歯科
久茂地小
やなぎ歯科
平良歯科
神元歯科
美栄橋歯科
ももはら矯正歯科
仲里歯科
けんし歯科
宮平歯科
山口整形外科
比嘉歯科
くだ歯科
ひめゆり歯科
玉木歯科
たまき歯科
たろう歯科
中里歯科
松尾2
白山歯科
新里歯科
市役
保健予防課
新栄歯科
友寄歯科
浜口歯科
八木歯科
おおた歯科
村田歯科
開南歯科
つぼや歯科
那覇民主診療所
みやぎ歯科
宮里歯科
ヨナシロ歯科
ユキデンタル
ターミナル歯科
ハーバービュー歯科
崎山歯科
新垣歯科
与儀
合同庁舎
ふるげん歯科
NTT
県立病院
城岳小
与儀小
さわやか歯科
中央局
福村歯科
与儀1
社会保険事務所
与儀2
JA会館
那覇大橋
川平病院歯科
おおはし歯科
山城歯科
ホルト歯科
古波蔵2
古波蔵小
ベリー歯科
古波蔵通り
古波蔵4
長浜歯科
古蔵中
沖縄県家畜衛生試験場
高良歯科

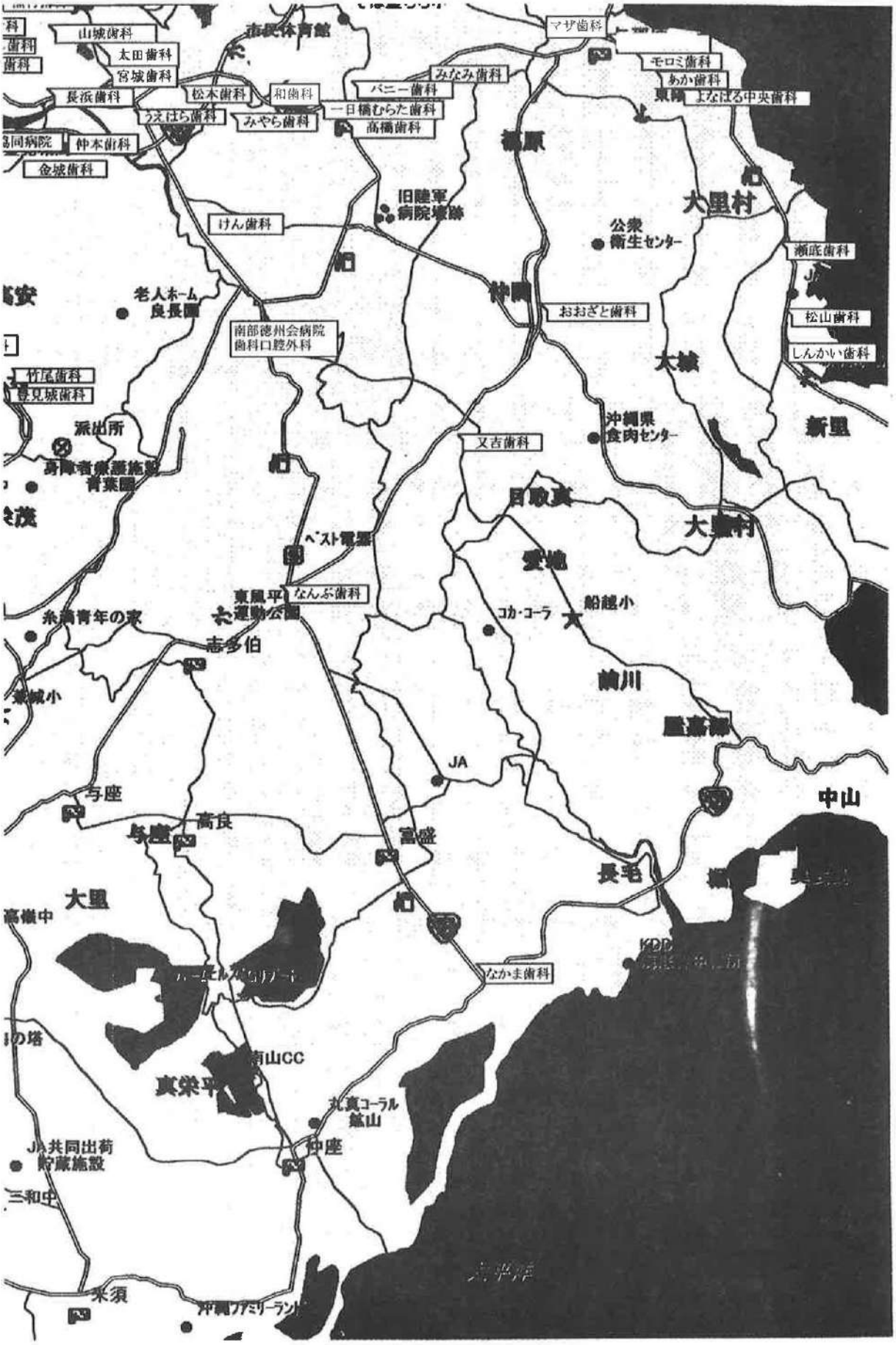

伊波富夫歯科
たまなは歯
沖縄実務学園
首里末吉町
末吉宮跡
漢那歯科
ファミリーマート
こはぐら歯科
興南高
古島
松島小
末吉公園
首里
平良局
城北小
とくだ歯科
市立病院
環状二号
交番
首里久場川町
山川デンタル
松島中
首里歯科
首里桃原町
城間歯科
松山御殿
真嘉比小
安里バイパス
松川
西平歯科
たまき歯科
知花歯科
屋宜歯科
トモヨセ歯科
嘉数歯科
なかざと歯科
まじきな歯科
ほかま歯科
前城歯科
たから歯科
首里寒川町1
下地歯科
さかした歯科
新城歯科
大道小
山口整形外科歯科
ハシカド歯科
沖縄工高
長嶺歯科
ひめゆり歯科
たかえず歯科
松川小
繁多川3
首里金城町4
環状二号
松城中
繁多川1
繁多川2
繁多川4
友寄歯科
友寄デンタル
真和志歯科
繁多川歯科
砂川歯科
石田中
寄宮1
寄宮3
大石森公園
湖城歯科
阿嘉歯科
寄宮歯科
さわやか歯科
上地歯科
ながた歯科
首里
長田1
ナザレン教会
真地
社会保険センター
上間小
山城歯科
那覇市民
環状二号
太田歯科
上間1
真和志高
日橋局
真地小
沖縄女子短大
宮城歯科
上間変電所
和歯科
長浜歯科
沖縄盲学校
松本歯科
みやら歯科
那覇市
仲井真小
一日橋
一日橋むらた歯
南風原高
うえはら歯科
真玉橋

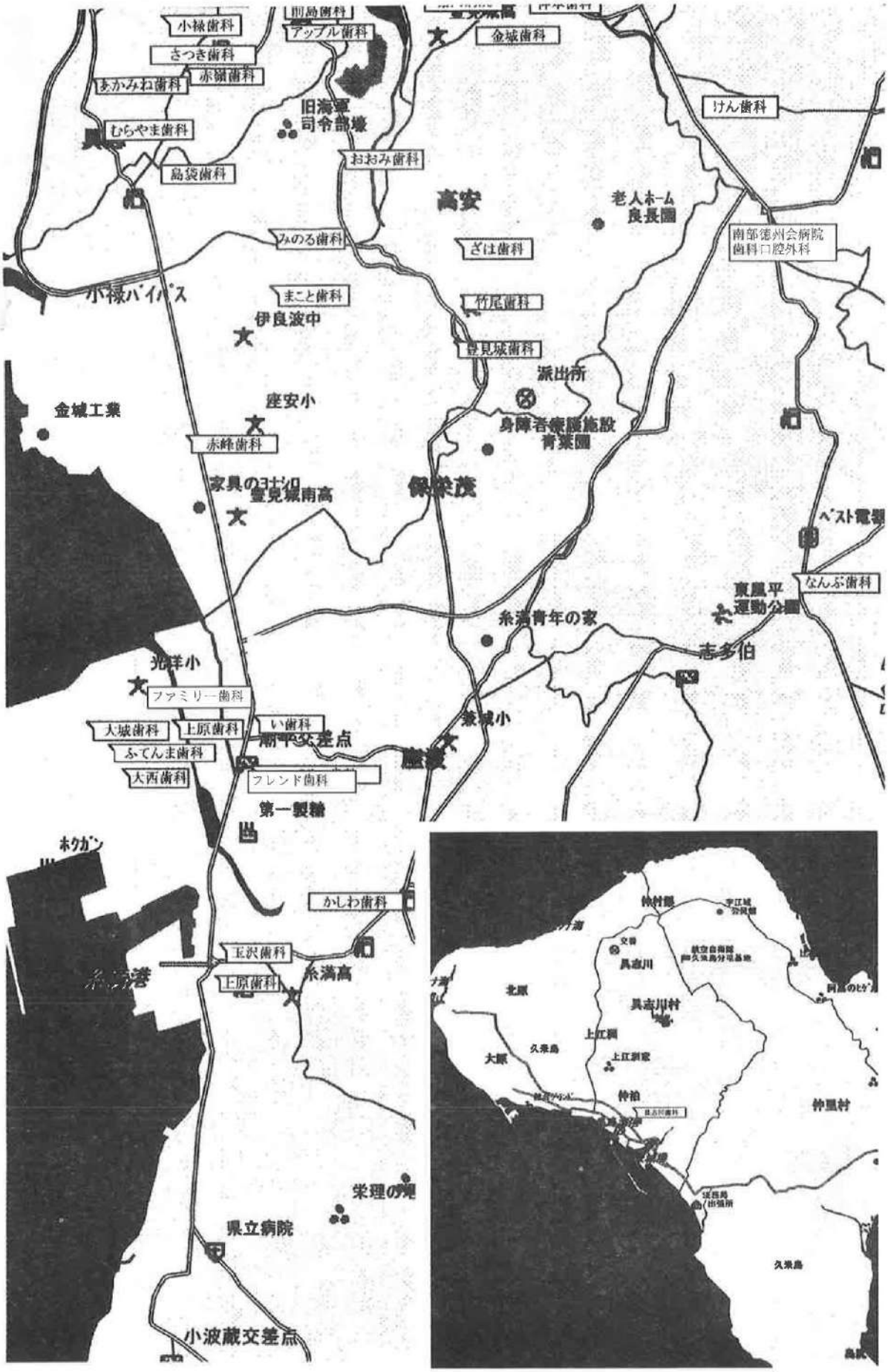


大謝名
高宮城歯科
牧港胃腸外科歯科
上田歯科
宮城歯科
明治乳業
浦添商高
TOTO
G 歯科
のは歯科
やまうち歯科
アース歯科
NTT
しろま歯科
高良歯科
湖城歯科
当間歯科
おおひら歯科
国際歯科
とよおか歯科
安波茶
浦添歯科
浦添局
ちはる歯科
大平
浦添工高
浦添城跡
たかお歯科
広栄歯科
とみしま歯科
ながみね歯科
PGうらそえ
浦添市
サンキュー
上原歯科
沖縄国際センター
オキコ
坂田
経塚
経塚歯科
まきし歯科
サンエー
上里歯科
伊波富夫歯科
たまなは歯科
交番
こはぐら歯科
末吉公園
首里石嶺町
首里局
首里歯科
いしみね歯科
くばがわ歯科
城間歯科
まち子デンタル
国定歯科
中頭郡


城間
同仁病院
伊礼歯科
仲西小
仲西中
ふくざと歯科
沖縄食糧
オキマート
税務署
島デンタル
本永歯科
しおはま歯科
さわだ歯科
三愛歯科
奥仕歯科
まじまな歯科
あけぼの歯科
上江洲歯科
安謝歯科
安謝小
安岡中
社会保険事務所
健康増進センター
くろしお歯科
モスバーガー
うね歯科
水質試験所
那覇商学院
とくだ歯科
ファミリーマート
ドン・キホーテ
ホテル沖縄
総合事務局
中央緑化公園
那覇東急H
浦添市
那覇市
那覇工高
内間小
内間中
松島小
興南高
古島
大橋
泊高
安謝
内間1
内間2
内間3
内間4
内間5
内間6
仲西1
仲西2
仲西3
宮城1
宮城2
宮城3
宮城5
西洲1
西洲2
浦1
浦2
浦3
浦4
浦5
浦6
泊1
泊2
泊3
泊4
泊5
泊6
松山1
松山2
松山3
松山4
松山5
松山6
松山7
松山8
松山9
松山10
松山11
松山12
松山13
松山14
松山15
松山16
松山17
松山18
松山19
松山20
松山21
松山22
松山23
松山24
松山25
松山26
松山27
松山28
松山29
松山30
松山31
松山32
松山33
松山34
松山35
松山36
松山37
松山38
松山39
松山40
松山41
松山42
松山43
松山44
松山45
松山46
松山47
松山48
松山49
松山50
松山51
松山52
松山53
松山54
松山55
松山56
松山57
松山58
松山59
松山60
松山61
松山62
松山63
松山64
松山65
松山66
松山67
松山68
松山69
松山70
松山71
松山72
松山73
松山74
松山75
松山76
松山77
松山78
松山79
松山80
松山81
松山82
松山83
松山84
松山85
松山86
松山87
松山88
松山89
松山90
松山91
松山92
松山93
松山94
松山95
松山96
松山97
松山98
松山99
松山100
松山101
松山102
松山103
松山104
松山105
松山106
松山107
松山108
松山109
松山110
松山111
松山112
松山113
松山114
松山115
松山116
松山117
松山118
松山119
松山120
松山121
松山122
松山123
松山124
松山125
松山126
松山127
松山128
松山129
松山130
松山131
松山132
松山133
松山134
松山135
松山136
松山137
松山138
松山139
松山140
松山141
松山142
松山143
松山144
松山145
松山146
松山147
松山148
松山149
松山150
松山151
松山152
松山153
松山154
松山155
松山156
松山157
松山158
松山159
松山160
松山161
松山162
松山163
松山164
松山165
松山166
松山167
松山168
松山169
松山170
松山171
松山172
松山173
松山174
松山175
松山176
松山177
松山178
松山179
松山180
松山181
松山182
松山183
松山184
松山185
松山186
松山187
松山188
松山189
松山190
松山191
松山192
松山193
松山194
松山195
松山196
松山197
松山198
松山199
松山200
松山201
松山202
松山203
松山204
松山205
松山206
松山207
松山208
松山209
松山210
松山211
松山212
松山213
松山214
松山215
松山216
松山217
松山218
松山219
松山220
松山221
松山222
松山223
松山224
松山225
松山226
松山227
松山228
松山229
松山230
松山231
松山232
松山233
松山234
松山235
松山236
松山237
松山238
松山239
松山240
松山241
松山242
松山243
松山244
松山245
松山246
松山247
松山248
松山249
松山250
松山251
松山252
松山253
松山254
松山255
松山256
松山257
松山258
松山259
松山260
松山261
松山262
松山263
松山264
松山265
松山266
松山267
松山268
松山269
松山270
松山271
松山272
松山273
松山274
松山275
松山276
松山277
松山278
松山279
松山280
松山281
松山282
松山283
松山284
松山285
松山286
松山287
松山288
松山289
松山290
松山291
松山292
松山293
松山294
松山295
松山296
松山297
松山298
松山299
松山300
松山301
松山302
松山303
松山304
松山305
松山306
松山307
松山308
松山309
松山310
松山311
松山312
松山313
松山314
松山315
松山316
松山317
松山318
松山319
松山320
松山321
松山322
松山323
松山324
松山325
松山326
松山327
松山328
松山329
松山330
松山331
松山332
松山333
松山334
松山335
松山336
松山337
松山338
松山339
松山340
松山341
松山342
松山343
松山344
松山345
松山346
松山347
松山348
松山349
松山350
松山351
松山352
松山353
松山354
松山355
松山356
松山357
松山358
松山359
松山360
松山361
松山362
松山363
松山364
松山365
松山366
松山367
松山368
松山369
松山370
松山371
松山372
松山373
松山374
松山375
松山376
松山377
松山378
松山379
松山380
松山381
松山382
松山383
松山384
松山385
松山386
松山387
松山388
松山389
松山390
松山391
松山392
松山393
松山394
松山395
松山396
松山397
松山398
松山399
松山400
松山401
松山402
松山403
松山404
松山405
松山406
松山407
松山408
松山409
松山410
松山411
松山412
松山413
松山414
松山415
松山416
松山417
松山418
松山419
松山420
松山421
松山422
松山423
松山424
松山425
松山426
松山427
松山428
松山429
松山430
松山431
松山432
松山433
松山434
松山435
松山436
松山437
松山438
松山439
松山440
松山441
松山442
松山443
松山444
松山445
松山446
松山447
松山448
松山449
松山450
松山451
松山452
松山453
松山454
松山455
松山456
松山457
松山458
松山459
松山460
松山461
松山462
松山463
松山464
松山465
松山466
松山467
松山468
松山469
松山470
松山471
松山472
松山473
松山474
松山475
松山476
松山477
松山478
松山479
松山480
松山481
松山482
松山483
松山484
松山485
松山486
松山487
松山488
松山489
松山490
松山491
松山492
松山493
松山494
松山495
松山496
松山497
松山498
松山499
松山500
松山501
松山502
松山503
松山504
松山505
松山506
松山507
松山508
松山509
松山510
松山511
松山512
松山513
松山514
松山515
松山516
松山517
松山518
松山519
松山520
松山521
松山522
松山523
松山524
松山525
松山526
松山527
松山528
松山529
松山530
松山531
松山532
松山533
松山534
松山535
松山536
松山537
松山538
松山539
松山540
松山541
松山542
松山543
松山544
松山545
松山546
松山547
松山548
松山549
松山550
松山551
松山552
松山553
松山554
松山555
松山556
松山557
松山558
松山559
松山560
松山561
松山562
松山563
松山564
松山565
松山566
松山567
松山568
松山569
松山570
松山571
松山572
松山573
松山574
松山575
松山576
松山577
松山578
松山579
松山580
松山581
松山582
松山583
松山584
松山585
松山586
松山587
松山588
松山589
松山590
松山591
松山592
松山593
松山594
松山595
松山596
松山597
松山598
松山599
松山600
松山601
松山602
松山603
松山604
松山605
松山606
松山607
松山608
松山609
松山610
松山611
松山612
松山613
松山614
松山615
松山616
松山617
松山618
松山619
松山620
松山621
松山622
松山623
松山624
松山625
松山626
松山627
松山628
松山629
松山630
松山631
松山632
松山633
松山634
松山635
松山636
松山637
松山638
松山639
松山640
松山641
松山642
松山643
松山644
松山645
松山646
松山647
松山648
松山649
松山650
松山651
松山652
松山653
松山654
松山655
松山656
松山657
松山658
松山659
松山660
松山661
松山662
松山663
松山664
松山665
松山666
松山667
松山668
松山669
松山670
松山671
松山672
松山673
松山674
松山675
松山676
松山677
松山678
松山679
松山680
松山681
松山682
松山683
松山684
松山685
松山686
松山687
松山688
松山689
松山690
松山691
松山692
松山693
松山694
松山695
松山696
松山697
松山698
松山699
松山700
松山701
松山702
松山703
松山704
松山705
松山706
松山707
松山708
松山709
松山710
松山711
松山712
松山713
松山714
松山715
松山716
松山717
松山718
松山719
松山720
松山721
松山722
松山723
松山724
松山725
松山726
松山727
松山728
松山729
松山730
松山731
松山732
松山733
松山734
松山735
松山736
松山737
松山738
松山739
松山740
松山741
松山742
松山743
松山744
松山745
松山746
松山747
松山748
松山749
松山750
松山751
松山752
松山753
松山754
松山755
松山756
松山757
松山758
松山759
松山760
松山761
松山762
松山763
松山764
松山765
松山766
松山767
松山768
松山769
松山770
松山771
松山772
松山773
松山774
松山775
松山776
松山777
松山778
松山779
松山780
松山781
松山782
松山783
松山784
松山785
松山786
松山787
松山788
松山789
松山790
松山791
松山792
松山793
松山794
松山795
松山796
松山797
松山798
松山799
松山800
松山801
松山802
松山803
松山804
松山805
松山806
松山807
松山808
松山809
松山810
松山811
松山812
松山813
松山814
松山815
松山816
松山817
松山818
松山819
松山820
松山821
松山822
松山823
松山824
松山825
松山826
松山827
松山828
松山829
松山830
松山831
松山832
松山833
松山834
松山835
松山836
松山837
松山838
松山839
松山840
松山841
松山842
松山843
松山844
松山845
松山846
松山847
松山848
松山849
松山850
松山851
松山852
松山853
松山854
松山855
松山856
松山857
松山858
松山859
松山860
松山861
松山862
松山863
松山864
松山865
松山866
松山867
松山868
松山869
松山870
松山871
松山872
松山873
松山874
松山875
松山876
松山877
松山878
松山879
松山880
松山881
松山882
松山883
松山884
松山885
松山886
松山887
松山888
松山889
松山890
松山891
松山892
松山893
松山894
松山895
松山896
松山897
松山898
松山899
松山900
松山901
松山902
松山903
松山904
松山905
松山906
松山907
松山908
松山909
松山910
松山911
松山912
松山913
松山914
松山915
松山916
松山917
松山918
松山919
松山920
松山921
松山922
松山923
松山924
松山925
松山926
松山927
松山928
松山929
松山930
松山931
松山932
松山933
松山934
松山935
松山936
松山937
松山938
松山939
松山940
松山941
松山942
松山943
松山944
松山945
松山946
松山947
松山948
松山949
松山950
松山951
松山952
松山953
松山954
松山955
松山956
松山957
松山958
松山959
松山960
松山961
松山962
松山963
松山964
松山965
松山966
松山967
松山968
松山969
松山970
松山971
松山972
松山973
松山974
松山975
松山976
松山977
松山978
松山979
松山980
松山981
松山982
松山983
松山984
松山985
松山986
松山987
松山988
松山989
松山990
松山991
松山992
松山993
松山994
松山995
松山996
松山997
松山998
松山999
松山1000


ターミナル
陸上自衛隊
那覇駐屯地
空港通り
ターミナル歯科
ハーバービュ
ふるげん歯科
中央局
那覇空港
統合庁舎
垣花小
那覇大橋
那覇西高
田原1
ペリー歯科
金城3
金城中
しろま歯科
田原2
小禄小
ジャパレン
航空自衛隊
那覇基地
新崎デンタル
西川歯科
田原3
高良歯科
赤嶺2
赤嶺1
ともよせ歯科
大山歯科
小禄
伝統工芸館
ハート歯科
前島歯科
小禄前原局
YAGI
小禄歯科
宇栄原1
NTT
アップル歯科
小禄南小
さつき歯科
小禄中
宇栄原3
あかみね歯科
高良1
宇栄原団地
宇栄原小
旧海軍
司令部壕
小禄
小禄南図書館
宇栄原
高良2
むらやま歯科
島袋歯科
宇栄原中公園
おおみ
那覇市
赤嶺歯科
我那覇
宣保公民館
宣保
田頭
島尻郡
ジャパレン
豊見城村
みのる歯科
上田小
まこと歯科
瀬長公民館
モスバーガー
豊見城
中央病院
天御の
小禄バイパス
伊良波
村立中央図書館
与根野外運動場


山城歯科
太田歯科
宮城歯科
長浜歯科
松本歯科
和歯科
うえはら歯科
みやら歯科
バニー歯科
一日橋むらた歯科
高橋歯科
みなみ歯科
マザ歯科
モロミ歯科
あか歯科
よなはる中央歯科
仲本歯科
金城歯科
けん歯科
旧陸軍病院壕跡
公衆衛生センター
瀬底歯科
松山歯科
しんかい歯科
老人ホーム良長園
南部徳洲会病院歯科口腔外科
おおざと歯科
竹尾歯科
豊見城歯科
派出所
沖縄県食肉センター
又吉歯科
青葉園
ベスト電器
なんぶ歯科
東風平運動公園
糸満青年の家
志多伯
コカ・コーラ
船越小
JA
与座
高良
与座
富盛
大里
長毛
なかま歯科
南山CC
真栄平
丸真コーラル鉱山
JA共同出荷貯蔵施設
米須
沖縄ファミリーランド



小禄歯科
さつき歯科
あかみね歯科
赤嶺歯科
アップル歯科
金城歯科
けん歯科
旧海軍
司令部壕
むらやま歯科
島袋歯科
おおみ歯科
高安
老人ホーム
良長園
南部徳州会病院
歯科口腔外科
みのる歯科
ざは歯科
小禄バイパス
まこと歯科
竹尾歯科
伊良波中
豊見城歯科
派出所
金城工業
座安小
身障者療護施設
青葉園
赤峰歯科
家具のヨナシロ
豊見城南高
保栄茂
ベスト電器
なんぶ歯科
東風平
運動公園
糸満青年の家
志多伯
光洋小
ファミリー歯科
大城歯科
上原歯科
い歯科
潮平交差点
ふてんま歯科
大西歯科
フレンド歯科
兼城小
第一製糖
ホクガン
かしわ歯科
玉沢歯科
上原歯科
糸満高
糸満港
栄理の塔
県立病院
小波蔵交差点
仲村銀
宇江城
公民館
交番
具志川
北原
具志川村
上江洲
久米島
大原
上江洲家
仲泊
仲里村
久米島

C. 各支部の変遷と活動状況

南部地区歯科医師会の基盤である支部会活動は、今から30年近く前に産声を上げた。昭和45年（1970年）7月18日の南部支部総会で会の名称を「南部地区歯科医師会」と改め、初代会長には与那城勇先生がなられた。この執行部で南部地区歯科医師会に分会を設置する案が提出され、翌年の昭和46年1月21日に分会組織が作られた。これが後の支部会の基礎となった。分会は第一から第三まであり、それぞれに担当委員が置かれた。また各分会は二つの班からなり、班長が任命された。その頃の会員数は70人前後であった。この分会組織は1年半ほど続き、昭和47年6月5日には支部会が設置された。会員を地域単位で六つの支部に振り分け、それぞれに支部長をおいた。支部は城南・崇元寺・牧志・松尾・開南・南とした。2年後の昭和49年（1974年）には高良政利先生が会長になり、支部構成は変わらなかったが、二つの支部を一人の理事が担当するシステムにした。よって当時は通常の会務のかたわら支部会を担当する理事が3人いた。昭和51年からの嶺井浩会長の時には、会員数が100人近くになっており、10の支部に会員を分けた。首里・泊・糸満・浦添・松尾・南・若狭・安里・牧志・開南である。この支部組織は昭和53年からの高江洲旭会長の時代まで続いた。

昭和55年の玉木史朗会長の時に、幾つかの支部をまとめて支部会を開催し、それらの会に名称がつけられた。それは十日会（首里・泊・糸満・浦添）、15日会（松尾・南・若狭）、三水会（安里・牧志・開南）であった。玉木会長の2期目の昭和57年には会員が120名を越えており、支部数を12にして、3支部ずつまとめて支部会を開催するようになった。三水会（首里・松川・浦添）、15日会（与儀・泉崎・寄宮）、十日会（安里・牧志・松尾）、一日会（若狭・小禄・糸満）であった。これは次期の友利政三会長の時代にも引き継がれた。

支部会では識者を呼んでの講演等も行われ、なかなか活発な支部活動が展開されていた。また、これまで親睦を目的としてもたれていた支部会では模合いが行われるのが常であったが、この頃から模合いなしの支部会が開催され出した。そして支部会の目的が親睦のみではなくなってきた。最新の医療情報の伝達、適正な保険請求の指導、患者の動向情報伝達等が行われる歯科医師の会合に模合いは馴染まないとの意見が多数を占めてきたためである。つまりこのような会合に模合いがなければ出席しないというも如何なものかという事であった。

友利会長の2期目の昭和61年には、会員数が170人を超えたため、支部編成が行われ、九つの支部となった。那覇東・那覇西・真和志・小禄・首里・浦添・糸満・豊見城・島尻である。糸満・豊見城島尻の三支部は島尻地区としてまとまって支部会を開催するのが通例となった。今回から会員数の多い真和志支部には、支部長を補佐する班長が置かれた。また地区担当理事をおき、那覇・浦添・島尻を担当するようになった。これは昭和49年の高良政利会長時代の二つずつの支部の世話をする理事を置いて以来である。以前と違うのは一般会務との兼任ではなく、支部会専任の理事という事である。これは将来各地区の独立を想定しての理事配置でもあった。この時の支部構成は高江洲正勝執行部、新城啓和執行部、新垣元洋執行部と引き継がれた。班長は昭和63年から那覇東・那覇西にもおかれ、平成3年には浦添にもおかれるようになった。平成9年からの太田執行部では、支部構成は同じであったが、地区担当理事は浦添地区を残して那覇地区、島尻地区は廃止した。那覇地区のような複数の支部がある地区においては、各支部の意見を調整して地区としてまとめる事ができず、地区担当理事の職務が遂行困難になったことや、新たな専門担当理事の誕生を期待する声が出てきたためであった。しかし浦添支部からは地区担当理事の存続を要望する意見が強く、浦添担当理事だけは浦添支部長を兼ねる事となり、また浦添支部のみ班長に加えて支部長補佐をおいた。この時の会員数は230人余であった。

支部会は、元来組織の充実・機能強化を目的に編成されたものであるが、会員相互の親睦を図り、近くの会員同士が反目することなく、地域医療に取り組むために作られた経緯もある。しかしそればかりでなく、医院経営に必要な多くの情報を得たり、地域歯科保健を展開するための議論の場であり、ただの飲み食いの場ではない。特に保険に関する情報は支部会で詳細な説明と質疑応答が行われるため、会員にとっては支部会に参加することは、診療を遅滞なく進めるためには必要不可欠なものになっている。これまで南部地区歯科医師会の会務運営の基盤である支部会活動には、各支部長が創意工夫を凝らして取り組んできた。歴代の支部長のご苦労なくしては、今の南部地区歯科医師会はあり得なかったであろう。ここでは各支部の現状を中心に、支部会活動を紹介していただく。

東支部

支部長　小場幸夫



現在、東支部は34名の先生方が属し、南部地区歯科医師会において、真和志支部、西支部に次いで3番目の大所帯であります。

昭和55年から15日会として支部活動を行っていますが、昭和61年より現在の東支部の姿が確立されました。それ以前は松尾支部、南支部、若狭支部、与儀支部、泉崎支部、寄宮支部等があり、それらが統合されて15日会が結成されていました。

現在は東支部会として月一回の会合をもっていますが、15日会と呼ばれるほうが親しみを感じる先生方も少なくないようです。支部長は、昭和55年からの15日会から数えると私で8代目です。支部会はおおよそその月の15日前後に行われ、保険委員による保険関係の質疑応答、会務報告等を中心に進められるが、基本的には先生方の親睦の場という姿勢を目指しているため、本当に和気藹々とした雰囲気の中で会が進行していきます。出席状況は、残念ながら毎月全員出席というには至りませんが、宮里良雄先生、与那城智先生、八木茂先生などは支部会を本当に楽しみにされている様子で、毎月必ず出席され、会を盛り上げてくれます。また、我が東支部には、歯科医師でありながら芸術家である金城一史先生がおられます。先生はしばらく闘病生活を余儀なくされましたが、現在では病気も回復され、よく支部会にもお顔をみせられるようになりました。

毎月、場所を代えて食事がしてみたいという先生方の要望があり、会場を毎月移しその場その場の食事を味わいながら会員同士の情報交換をするのも楽しみのひとつになっています。(といっても年2、3回は同じ場所になることはありますが……。)平成10年度においては、金城一史先生の取り計らいによって、カデナベース内レストランにおける食事会やシーメンズクラブでの支部会等、他の支部ではなかなか味わえない(と思われる)支部会も行ってきました。カデナベース内での食事会の後、買い物をしたり、スロットマシン等に興じたりして楽しかった思い出が多くあります。また、平成9年度には、宮城正廣先生の取り計らいにより、先生所有の大型クルーザーにてサンセットクルージング支部会なるものを敢行し、船上にて沈む夕日を見ながら飲むビールは格別でした。飲みすぎて翌日の診療に大いに差つかえた先生が2名程いました。

本当に楽しい思い出の多い我が支部会ですが、デンタルフェアや那覇市成人歯科検診等の事業に対する惜しみない協力も忘れません。また、嶺井浩先生が病気で診療が困難の際には、隣で開業されている上原慎司先生が自分の診療の合間をみて、代診を勤められ、レセプト事務等も手伝われました。これぞ正しい助け合いの精神と思われます。

近年の活動やエピソードを中心に書きました。最後になりましたが、南部地区歯科医師会支部活動を昔の資料より振り返ってみると、昭和41年頃から始まり、随分多くの先生方が頑張ってこられて現在に至っていることを痛感させられました。南部地区歯科医師会ならびにその支部活動のますますの発展を祈念します。

西支部の歩み

支部長　金城清一郎



西支部のルーツをたどると、現在も矍鑠としてご活躍中の永井長秀先生のご尊父楊長積先生（第2章：南歯誕生までに至るよもやま話の項参照）が、1902年に首里鳥掘から那覇区上之蔵に移転し、その後天妃の善興寺付近に落ちついたのがおそらく始まりではないかと考えられます（大門通りを中心とした戦前の那覇の市街区は現在の西支部に含まれます）。その後1920年に沖縄県歯科医師会が誕生してからも、西支部の先輩たちは、戦前の沖縄県歯科医師会、琉球歯科医師会、南部地区歯科医師会の流れの中で絶えずその中心的役割を果たしてきましたし、逆にそれが県都那覇で開業するものの使命であると自負しておられたことと推察できます。この伝統は現在でも脈々と受け継がれており、県歯科医師会、南部地区歯科医師会の執行部でご活躍されている先生方も大勢いらっしゃいます。

南部地区歯科医師会30年の歴史の中でも、設立時に弱冠31才で専務の重責を務められた山田勲先生を始め、西支部は会長職だけでも高江洲旭先生、玉木史朗先生、友利政三先生、新垣元洋先生と多くのリーダー達を輩出してきましたし、その功績はあらためてここで紹介するまでもなく、本会史を読んでいただければ明白なことであります。

もう一つ西支部が他支部に誇れる（？）特徴の一つに、保険診療報酬の低さがあります。那覇市近郊への人口流出と、歯科医師数の爆発的な増加とあいまって、著しい患者の減少と、経営努力を余儀なくされてきています。1980年の大城正雄先生のレポートによりますと、診療報酬の少ないトップ3として1位若狭支部（162,850点/月）、2位牧志支部（172,450点/月）、3位泊支部（199,100点/月）。同じく件数の少ない順として1位泊支部（165件/月）、2位牧志支部（171件/月）、3位若狭支部（174件/月）となっています。皮肉なことに、後にこの上位3支部が何度かの再編の後、整理統合され、新しく生まれ変わったのが現在の西支部であります。今でこそ歯科医師の定数是正の問題や、保険診療における出来高払いの弊害がとりざたされていますが、西支部では20数年来あくまでも支部単位ではありますが、これらの問題に直面してきましたし、良きにつけ、悪しきにつけその時代の先端を担ってきたものと言えるのではないでしょうか。

現在西支部の会員数は38人、平均年齢51歳と他支部に比べてやや高齢かもしれませんが、これもいわゆる老舗が多いことを表しており、すでに二代目に代替わりしている医院もいくつかあります。年齢を年代別に見ると、30代9人、40代8人、50代12人、60代7人、70歳以上2人と若手、中堅、熟年組のバランスもよく、毎月第3水曜日に行われている支部会でも世代を越えて忌憚なく意見を交換できる恵まれた環境にあります。

真和志支部

支部長　松本真志



真和志支部は、南風原町との境界に近い上間、仲井間、寄宮などの旧真和志地区から松川、安里を通り、浦添市との境界の安謝までと広範囲にわたり、那覇の中心部を懐に抱くかのような形をしております。会員数は、休業閉院しておられる呉渓順先生、与那嶺貞子先生をふくめて42名で、南部地区歯科医師会の支部のなかでは最大の支部であります。

昭和61年度から現在の形に確立されました支部会活動の中の真和志支部は、前述いたしましたように鰻の寝床のように細長く広範囲にわたりますので、それ以前の3水会の松川支部、15日会から与儀支部、寄宮支部、10日会の安里支部などか整理投合され現在に至ったものと思われます。

真和志支部としての最初の支部長の屋宜優先生からは、「昔は模合いをかねて開催していたんだよ」というお話や、高江洲正勝先生が会長をしていらっしゃったときの支部長友寄景淳先生、班長仲間正武先生からは「2年間だった任期が私達の時から3年任期となったり、当時FAX等がなかったので葉書で連絡をとるのが大変だったよ」などというお話をききます。また新城啓和先生の執行部での支部長上原修先生・班長嘉数武男先生からは、支部長・班長を引き受けた時に感じた責任の大きさによる重圧感や、任期中に下地規一先生がご逝去された時の深い悲しみと無念さを感じ、今でも下地先生のことを想うと、命の大切さを痛感しますといったことをお聞きします。さらに前任の支部長城間健先生・班長宮良修先生には、まるで副支部長・副班長のように支部会を支えていただいております。

さて真和志支部には、現在支部長・班長の他になんと9名もの南部地区歯科医師会役員がおり、役員人口比率？の高い支部となっています。顧問の高江洲正勝先生・新城啓和先生、監事の宮里修先生、専務の長濱正先生、各委員会理事の先生方が4名、そして現会長の太田正昭先生と、まるで南部地区歯科医師会の中枢を担うかのような支部を構成しております。ですから支部会の内容も自然と濃いものとなり、終了時間を超えてしまうこともしばしばです。

その支部会ですが、毎月第3水曜日を定例とし、南部地区歯科医師会からの連絡事項を会員に報告し、また会員からの質問や意見要望を取りまとめることを主な目的として運営しております。さらに会員の先生方の親睦も重要な目的の一つと考えますので、いろいろと場所を変えおいしい食事とたしなむ程度のお酒を用意しまして、先輩後輩の垣根を越えて交わり気さくにお話ができますよう工夫を凝らして開催しております。

沖縄をはじめ日本社会が、かつて経験したことがない国際化へ進展することが予想されるなかで、明日の歯科医療に前向きの視点をお持ちの先生方に支えられ、21世紀に向かい南部地区歯科医師会とともに発展していくことと信じております。

小禄支部

支部長　赤嶺勝哉



昭和57年から一日会に属していた小禄支部は、初代の支部長の赤嶺裕也先生より現在で7代を数えるのに至っております。会員は16名を数え、他の支部に比べ小所帯でありますが、その分お互いの意思の疎通がとれ、アットホームな支部会を毎月行い、高良政利、大山日出男、友寄喜樹先生を中心に、大変和気藹々と活動しております。

平成3年の赤嶺秀紀支部長の時代には、これまで他の支部と合同で行っていたデンタルフェアを、地域により貢献し密着してゆきたいとの理念により、支部会員による手作りのデンタルフェアを那覇市保健センターにて行いました。「お友達チケット」を配る等宣伝活動に努めた結果、予想以上の反響により大変多くの人々が訪れ、会場が大混乱になったのが思い出されます。この成功により自信を深め、より広い所、より多く効率よく地域住民にアピールしようではないかとなり、会場を「ジャスコ」へ移すことになりました。移転の際の交渉には多分にご苦労したとの事です。また支部会員同士の結束を固めるため、会費の一括徴収を行い積立し、年一回忘年会を兼ね無料食事会も行っております。

平成6年の高良政憲支部長の時代には，小禄地域住民を主体とした保健活動，包括医療「予防と治療」を行うためにどうしたら良いのであろうかと話が持ち上がりました。同じ医療に携わる者として，医科歯科の垣根を取り外しお互いをもっと身近な存在として考え、医科の先生方とのコミュニケーションを計る必要があるのでは，と言う事になりました。この意見を当時の医科の班長である稲福先生に提案したところ，賛同を得られ、平成8年1月ハーバービューホテルにて第1回小禄地区医科歯科合同新年会が開かれました。年頭の挨拶として歯科の大山日出男先生、医科の内原栄輝先生が行い、その後は食事懇親会へと進行しましてたいへん和やかな雰囲気にて行われました。西川謙先生によるボサノバ、照喜名重順先生（医科）によるクラシックギター演奏、カラオケによる芭蕉布は全員で合唱しました。このように医科歯科の諸先生方との意思の疎通を図ることは、地域医療にたいへん役立ち、今では患者さんのことで気軽に相談できる間柄になっております。

私共小禄支部は、これからも所先輩先生方を中心として、アグレッシブに地域保健歯科医療に取り組んでいきたいと思います。

首里支部の活動(この10年の歩み)

支部長　佐久川正明



この10年の首里支部会を、当時の支部長を務められた3人の先生(古波蔵信泉、加藤進作、護得久朝保)に綴って頂きました。

古波蔵信泉先生(1988年4月～1991年3月)、当時は会員が少なく，また支部には知花朝敏先生，西平守廣先生など会務に詳しい先生方がほとんどで，会務報告にこられた地区理事，支部長もいつも聞き役に回っていました。また地元首里が好きな先生が多く、支部会の場所を首里以外にすると極端に出席者が少なくなるという、現在も続く伝統が出来上がった時期でもありました。任期の後半頃から若い先生の入会が続き、現在のような噛みあわせの良い支部会になってきた様に想います。

加藤進作先生(1991年4月～1994年3月)、記念すべき第1回目の支部会で、いきなり2万円の大赤字を出すという苦難の船出でした。毎回いろいろと場所を変えて開催しても結局アシが出てしまう始末，そこへ西平守廣先生の口利きで「いちのいち」という琉球料理店を紹介して頂き、常宿にしてからは、参加人数の増減にもわりと融通がきくのが魅力で、次ぎの支部長の護得久先生の時まで続きました。しかしその常宿も昨年店を閉じ，今では灯のついてない店の前を通るたびに、当時を懐かしく思い出します。

護得久朝保先生(1994年4月～1997年3月)、首里支部はこじんまりした支部です。しかし自分の意見をはっきり言う個性豊かな先生が多く，いろいろな意見が出てくるものの最終的には首里支部としての意見がまとまるところは支部長にとって、とても嬉しい事でした。厳しくも優しい先生方に今でも感謝しています。支部長の負担を軽くすることと，経験者が再度就任することで更なる充実が得られるということを意図して，支部長の3年の任期の短縮について支部で話し合い，拡大理事会に提案したことが最初の大きな仕事でした。しかし、共に仕事をし、共に仕事を成し終えたいという、当時の新垣元洋会長の当然ともいえる意思を受け、今まで通りの3年任期を決定しました。他にも難しい問題が幾つかありましたが、私にとって、これらの経験は財産であり、成長させて頂いた3年間と考えています。

以上3名の先生方の当時の思い出をまとめさせて頂きました。現在、首里支部は会員21名の小規模な支部です。地域柄、会員数の大幅な増加は望めませんが、ここまで発展してこれたのも首里支部の基礎を築いて頂いたベテランの先生方や、歴代の支部長の先生、そして会員の先生方のご協力の賜であり、そのご尽力に対し心より敬意を表したいと思います。そして我が首里支部が、ひいては南部地区歯科医師会がその団結力と、和気藹々とした雰囲気を持って、今後とも益々発展していくことを願ってやみません。

浦添支部の活動

支部長　湖城秀久



浦添支部は，南部支部の中で独特の支部活動を展開していますが，当初は安謝に開業の先生方も浦添支部に所属していたそうです。

現在会員は34名で，通常は毎月第3火曜日に歯科医師会館で飲食なしの支部会を行い，デンタルフェアの慰労会、観月会や新年会など会員相互の親睦を図っています。

支部の役員は，当初支部長のみでしたが，平成3年より班長が設けられ，平成9年からは浦添理事兼支部長、班長と補佐（会計）の3人体制で支部活動を運営しています。また浦添支部独自の支部会慶弔費規約を平成10年に設定し，互助会的な活動も行っています。支部活動は，当初より浦添市の保健行政と密にコンタクトを取り，1才半、2歳児、3歳児、市立保育園児ならびに成人の歯科検診を中心に浦添市民の歯科保健に取り組み，口腔疾患の早期発見および予防を行っています。また昭和62年から第1回デンタルフェア浦添をマチナトシッピングセンターにて開催し（第7回より浦添市保健センターにて開催）、「良い歯の表彰」で浦添市長賞、浦添市議会議長賞、浦添市教育委員会教育長賞、南部地区歯科医師会会長賞を設け表彰しています。その他、浦添市保健計画策定委員，健康づくり推進協議会の一員として加わり浦添市の保健行政にも参画し、かつ浦添市学校保健会の理事としての活動も行っています。加えて地域健康講演会の講師派遣，広報「うらそえ」への寄稿や，市内の病院・医院・歯科医院利用案内パンフレットならびに市在住外国人向けガイドブックの作成協力なども行っています。また浦添市医師会や薬剤師会浦添支部との交流もあり、医療関係者間の横のつながりで浦添市民の健康維持増進に努めています。

一方、市民憲章推進協議会および青少年健全育成市民会議への参加、浦添市てだこ祭りやライトアップへの寄付金など歯科保健以外の市民社会活動も行っています。

この様に浦添支部で多方面の活動が展開されているのは、一行政一支部の特色であり、その基礎、軌道を作り確立していただいた諸先輩の先生方に支部役員として感謝すると共に、これからも支部会員の協力のもと浦添支部の活動を推進していく所存です。これからもご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

島尻支部

支部長　諸見里亮



島尻支部は、南風原町、東風平町、与那原町、佐敷町、大里村、玉城村、具志頭村、知念村の8町村で開業されている会員で構成されています。私は与那原町で開業しているので、島尻支部を代表して少し与那原町の歴史について紹介したいと思います。与那原町は、人口15000人程、世帯数4332戸、面積426k㎡、沖縄本島東海岸南部にあり、東南は雨乞森に、北面は運玉森に抱かれ、知念半島と勝連半島に囲まれ、中城湾をいただいた海岸線の平坦部にある町です。戦前は山原船のつく港町であり、本島東海岸側の国頭村、東村、旧久志村、金武町などから、建築材や薪炭を買い受け、それらの地域へ酒、味噌、瓦など生活必需品を運ぶ物資の集散地でもありました。陸路においても、那覇間に軽便鉄道、中南部へ軽便鉄道馬車や荷馬車などか行き来する交通の要所であり、与那原付近は東海岸の中心でした。我々の先輩の先生方が現在もこの地で活躍しています。

島尻支部の会員数は20名です。活動が本格的に始動したのが昭和61年頃からで、糸満、豊見城、島尻の3支部合同で毎月第3水曜日に島尻三水会と称し支部会を行っております。糸満支部10人、豊見城支部11人、島尻支部20人、総数41人で、支部会の出席人数は毎月25人から30人程です。大所帯でもあるため、人数の確認、会場の確保その他を3人の支部長で役割分担し、いろいろ苦労の多い中、支部会を開催しております。

支部活動としては、南風原町の歯の健康フェアーへの歯科医の派遣と検診を行い、活動を通しての地域への貢献ができるよう努力しています。支部会では、拡大理事会報告、各委員会報告等お互いのコミュニケーションをとると共に連絡事項の徹底も計っています。また会員の先生方から特に外傷(骨折)、炎症、腫瘍などの症例報告をしてもらい、診断や治療方針についてお互いに検討し幅広い研修会も行っているのも特徴で、各先生方の楽しみの一つになっています。

最後になりましたが、支部長の任期は3年です。力まず、緩めすぎず、他の支部長や会員の先生方の力を借りながら、一生懸命任務を務めて行きたいと思っています。

豊見城支部

支部長　金城秀男



豊見城村は、本島南部の東シナ海側に位置し、北西部は県都那覇市、東北部は南風原町と東風平町、南東は糸満市と隣接しています。面積は17.78k㎡で県下34番目の大きさです。戦前約9500人だった村人口は、昭和47年の本土復帰を境に人口が急激に増加する中、都市化現象も著しく進展し、現在では49000人余の人口を有する日本でも一番人口の多い村として有名です。市昇格人口50000人まであと一歩という所まできています。産業としては、昔から肥沃な泥炭岩土壌(ジャーガル)と豊かな水資源に恵まれ、野菜とサトウキビ産地の純農村として栄えてきました。現在では、県都那覇市に近い立地条件を生かした都市近郊型農業を取り入れ、野菜の生産量は県内一、熱帯果樹マンゴー、花卉園芸においても県内有数の生産量を誇っています。

豊見城支部の会員数は11名で、紅一点として垣花博子先生がいらっしゃいます。平均年齢43.9歳で歯科医としては脂がのっている年齢です。支部の活動が本格的に開始されたのが昭和61年からで、当時の支部長は竹尾孝明先生(南歯理事を昭和63年4月から平成2年3月まで担当)、昭和63年4月より高江洲實先生(平成9年4月より県医療管理担当理事として活躍中)、平成6年4月より小禄真先生、平成9年4月より私が支部長を担当している次第です。他の先生方としては、赤峯悦生先生(県歯広報担当理事として昭和63年4月から平成6年3月まで担当)、仲本友久先生(県学校歯科医会運営委員及び南歯広報委員)、大見謝健先生(県公衆衛生委員)、一番ヤングな上原徳夫先生、唯一の勤務医である新垣繁信先生(沖縄協同病院)がいらっしゃいます。

支部会は、糸満支部と島尻支部との3支部合同で行い、毎月第3水曜日に開催するため名称を島尻三水会と呼んでいます。支部会では拡大理事会及び県理事会、県歯南歯各委員会報告をはじめ、お互いのコミュニケーションを図りながら、また金城孝先生(島尻支部)による徳洲会病院口腔外科外来症例報告など多岐にわたっています。地域参加事業としては、校医校の検診をはじめ、1才半検診、3歳児検診、就学前検診、年一回の豊見城健康まつりへの参加があります。また行政の接点としては、年一回の村教育委員会との懇談会があります。このような活動を通して地域の人々の口腔衛生状態の把握と歯科医療の啓蒙に努め、さらなる地域への貢献ができるように支部会員一同がんばる所存であります。

糸満支部

支部長　前川一彦



糸満市は面積45.84k㎡、人口55537人（1998年12月1日現在）です。95年の人口が53496人、96年の人口が54859人ですから人口は増加傾向です。市内には幼稚園10校（696人）、小学校10校（5649人）、中学校5校（2757人）、高校2校（1793人）があり、高校進学率は約90%となっておりす。

糸満支部の会員数は11人で、非会員の診療所が6件ほどあります。糸満支部としての活動は、昭和50年の高良政利会長の頃から始まり、支部長は前川清春、大浜当宗先生と続き、玉木史朗会長の昭和55年の支部編成では十日会に属し、首里、泊、浦添支部と合同で支部会を開催していました。昭和57年の支部再編の時には一日会に属し、若狭、小禄支部と合同で支部会を開催し当時の支部長は大城則安先生でした。友利政三会長の昭和61年の支部編成で現在の様に糸満、豊見城、島尻の3支部合同で支部会を開催し、島尻三水会と称しています。支部長も玉澤吉弘、前川雅春、玉城英人、上原智也先生と続いてきています。

糸満支部単独の活動としては、糸満市保健予防課や教育委員会などの行政側と懇親会を行い、お互いの交流を深めて、糸満市健康福祉まつりなどの歯科検診を通して歯科保健事業を遂行していく上での協力関係を築く様にしています。また糸満市医師会ともゴルフコンペや懇親会を通して情報交換や協力関係を築く様にしています。



1994年　合同支部会



1996年　合同支部会



1996年　支部活動における保険講習会



1997年　三役支部まわり



総会における支部報告

第 5 章

南部地区歯科医師会の資料編

A. 南部地区歯科医師会の財務について

Ⅰ.南歯財務の歩み

沖縄歯科医師会の南部支部として存続していた組織を昭和45年(1970年)沖縄南部地区歯科医師会に改称した。昭和45年度から昭和47年度までの決算は米ドルの使われていた頃である。この決算書により当時の組織のボリュームがある程度、推察できる。しかし組織としての形が整って来た時期であるので、組織の決算としては未整備な所もある。昭和45年度から昭和48年度にかけては初代会長の与那城勇であった。沖縄の社会情勢を見ると、激動の時代であり、祖国復帰運動が一番ピークに達し、沖縄県として第一歩をあゆみだした頃で、また通貨もドルから円に変わった頃である。また此の頃は現在の保険制度の導入を如何にして円滑に導入して行くかも組織にとって大きな問題の一つだった。このドルの頃はグラフでは割愛してあるが、この数字を見ながら推定できれば幸いである。高校検診が昭和52年から始まった。那覇市学校歯科保健大会を契機にデンタルフェア等の補助金が平成5年度までは増加していたが、財政事情の悪化に伴い最近では減少の傾向にある。昭和61年度の11月までは社団法人前の会計決算であり、12月から翌年の3月までは社団法人設立後の決算になっており、昭和61年度はそのため年2回の決算が生じた。

福祉共済基金会計は当初余ったお金を積み立てておく極僅かな金額であったが、1才半の健診収入の積立金、入会金等の制度が整ってくる事によりこの特別会計のボリュームが大きくなり社団法人南部地区歯科医師会の実現の一つの要素となった。1才半健診料の繰入は昭和59年度から始まり昭和61年度の社団法人南部歯科医師会の発足と共に無くなり、それにかわる共済負担金2000円ができた。昭和62年度から年金基金の一部原資が融資事業として使われ始めた。平成2年からは従来の福祉共済積立金(繰入金)、福祉共済基金積立金の項目を廃止し、前期繰越金に編入して現在に至っている。また負債に積立金があったが、これを今後問題にしないためにもこれを廃止し資本の方へ変更した。また一会員当たりの会費は十何年も据え置きのままである。事業の拡大はあったもののこの様に出来たのは新入会員の絶え間ない入会に財政上支えられた結果である。今後厳しい社会情勢に於いて過去同様には対処出来ない処まできている。この資料から今後如何にすべきか考える事ができれば、この資料もそれなりに価値がでて来るであろう。

Ⅱ.一般会計決算

	会長名	与那城勇	与那城勇	与那城勇	与那城勇	高良政利	高良政利	嶺井浩	嶺井浩
	科目　会計年度	1970年度	1971年度	1972年度	1973年度	1974年度	1975年度	1976年度	1977年度
	収入	昭和45年	昭和46年	昭和47年	昭和48年	昭和49年	昭和50年	昭和51年	昭和52年
1	会費収入	$1,446.00	$1,505.00	$4,380.00	1,347,000	2,362,500	2,626,250	2,610,000	2,665,000
2	入会金収入	$100.00	$90.00	$20.00	60,000	900,000	500,000	900,000	300,000
3	検診収入					0	0	0	1,016,725
4	補助金等収入	$50.00	$50.00	$50.00	70,000	0	0	0	155,448
5	寄付金収入	$0.00	$150.00	$1.00	200,000	0	0	120,000	0
6	期間外収入	$22.00	$141.00	$121.00	0	0	0	0	0
7	雑収入	$0.00	$86.52	$2.00	6,592	12,605	17,842	27,557	11,862
当期収入合計(A)		$1,618.00	$2,022.52	$4,574.00	1,683,592	3,275,105	3,144,092	3,657,557	4,149,035
前期繰越収支差額		$73.23	$774.06	$210.92	607,710	337,398	527,656	912,662	514,941
収入合計　(B)		$1,691.23	$2,796.58	$4,784.92	2,291,302	3,612,503	3,671,748	4,570,219	4,663,976
	支出	昭和45年	昭和46年	昭和47年	昭和48年	昭和49年	昭和50年	昭和51年	昭和52年
1	運営費	$ 604.90	$1, 016.50	$2,347.00	1,057,070	1,429,887	1,844,626	2,469,229	2,882,743
2	固定資産取得支出			$50.00			73,050	0	0
3	積立金支出		$100.00	$100.00	180,000	930,000	578,000	974,000	754,000
4	事業費	$312.27	$1,243.10	$1,800.00	716,834	248,460	263,040	428,075	539,150
5	予備費	$0.00	$226.06	$587.92	0	476,500	370	203,974	0
当期支出合計(C)		$917.17	$2,585.66	$4,884.92	1,953,904	3,084,847	2,759,086	4,055,278	4,175,893
当期収支差額(A)−(C)		$700.83	−$563.14	−$310.92	−270,312	190,258	950,790	950,791	−26,858
次期繰越収支差額(B)−(C)		$774.06	$210.92	−$100.00	337,398	527,656	912,662	514,941	488,083

	会長名	高江洲旭	高江洲旭	玉木史朗	玉木史朗	玉木史朗	玉木史朗	友利政三	友利政三	友利政三
	科目　会計年度	1978年度	1979年度	1980年度	1981年度	1982年度	1983年度	1984年度	1985年度	1986年度
	収入	昭和53年	昭和54年	昭和55年	昭和56年	昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年	昭和61年
1	会費収入	3,849,500	4,175,500	4,530,750	4,950,750	5,131,000	7,422,750	7,886,250	8,177,000	5,013,000
2	入会金収入	350,000	600,000	1,000,000	1,500,000	1,725,000	2,325,000	1,750,000	1,650,000	1,275,000
3	検診収入	560,850	2,749,425	4,766,400	4,945,430	6,102,860	5,546,113	5,829,580	5,686,140	2,420,000
4	補助金等収入	155,079	705,200	705,064	706,896	707,588	1,001,512	797,644	1,043,672	1,589,148
5	寄付金収入	20,000	0	0	0	0	0	100,000	0	0
6	期間外収入	181,825	73,920	46,875	83,755	35,620	21,000	0	0	0
7	雑収入	10,193	27,615	73,513	60,224	50,229	49,976	49,203	74,738	3,207
当期収入合計(A)		5,127,447	8,331,660	11,122,602	12,247,055	13,752,297	16,366,351	16,412,677	16,631,550	10,300,355
前期繰越収支差額		488,083	1,275,036	566,494	551,363	1,473,039	1,583,681	2,250,346	1,879,066	1,494,567
収入合計(B)		5,615,530	9,606,696	11,689,096	12,798,418	15,225,336	17,950,032	18,663,023	18,510,616	11,794,922
	支出	昭和53年	昭和54年	昭和55年	昭和56年	昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年	昭和61年
1	運営費	3,036,254	3,510,000	3,799,476	3,974,729	4,615,227	5,571,946	6,785,352	7,131,686	3,876,372
2	積立金支出	30,000	1,055,000	2,025,000	4,319,000	5,079,000	4,510,000	4,782,000	4,610,000	2,420,000
3	事業費	1,274,240	1,968,820	2,361,257	2,531,650	2,827,500	4,688,740	5,176,345	5,274,363	1,775,623
4	雑支出	0	50,000	0	0	0	0	40,260	0	0
5	予備費	0	294,382	0	0	319,928	0	0	0	0
当期支出合計(C)		4,340,494	6,878,202	8,185,733	10,825,379	12,841,655	14,770,686	16,783,957	17,016,049	8,071,995
当期収支差額(A)−(C)		786,953	1,453,458	2,936,869	1,421,676	910,642	1,595,665	−371,280	−384,499	2,228,360
次期繰越収支差額(B)−(C)		1,275,036	2,728,494	3,503,363	1,973,039	2,383,681	3,179,346	1,879,066	1,494,567	3,722,927

	会長名	友利政三	友利政三	高江洲正勝	高江洲正勝	高江洲正勝	新城啓和	新城啓和	新城啓和
	科目　会計年度	1986年度	1987年度	1988年度	1989年度	1990年度	1991年度	1992年度	1993年度
	収入	昭和61年	昭和62年	昭和63年	平成元年	平成2年	平成3年	平成4年	平成5年
1	会費収入	5,423,000	12,769,500	13,510,250	13,728,500	14,192,750	14,300,000	14,602,250	15,525,250
2	入会金収入	600,000	2,800,000	2,025,000	3,600,000	3,425,000	350,000	6,925,000	2,100,000
3	検診収入	1,120,370	1,400,880	1,344,120	1,387,934	1,614,560	1,608,160	1,700,000	1,700,000
4	補助金等収入	0	2,444,508	3,049,016	3,603,844	3,801,063	4,133,332	4,081,048	5,323,684
5	寄付金収入	3,722,927	0	0	0	0	0	0	0
6	期間外収入	0	109,000	0	0	0	0	0	0
7	雑収入	13,586	636,659	1,186,750	328,401	403,728	584,135	506,700	377,995
当期収入合計(A)		10,879,883	20,160,547	21,115,136	22,648,679	23,437,101	20,975,627	27,814,998	25,026,929
前期繰越収支差額		0	2,816,385	4,373,598	5,324,401	6,953,274	7,771,342	4,031,603	8,021,118
収入合計(B)		10,879,883	22,976,932	25,488,734	27,973,080	30,390,375	28,746,969	31,846,601	33,048,047
	支出	昭和61年	昭和62年	昭和63年	平成元年	平成2年	平成3年	平成4年	平成5年
1	運営費	4,365,753	11,464,178	11,922,930	12,453,694	13,248,651	13,553,340	13,807,067	14,578,747
2	固定資産取得支出	50,000	667,800	360,000	285,000	36,800	1,009,000	0	0
3	積立金支出	10,000	20,000	20,000	20,000	20,000	234,171	358,497	1,928,663
4	事業費	3,637,745	6,449,556	7,823,083	8,162,338	9,191,765	9,788,783	9,528,790	12,817,691
5	雑支出	0	1,800	38,320	98,774	121,817	130,072	131,129	180,506
当期支出合計(C)		8,063,498	18,603,334	20,164,333	21,019,806	22,619,033	24,715,366	23,825,483	29,505,607
当期収支差額(A)-(C)		2,816,385	1,557,213	950,803	1,628,873	818,068	-3,739,739	3,989,515	-4,478,678
次期繰越収支差額(B)-(C)		2,816,385	4,373,598	5,324,401	6,953,274	7,771,342	4,031,603	8,021,118	3,542,440

	会長名	新垣元洋	新垣元洋	新垣元洋	太田正昭
	科目　会計年度	1994年度	1995年度	1996年度	1997年度
	収入	平成6年	平成7年	平成8年	平成9年
1	会費収入	15,879,500	15,889,250	16,373,500	16,779,378
2	入会金収入	2,625,000	1,750,000	3,150,000	1,575,000
3	検診収入	1,700,000	1,700,000	1,700,000	1,700,000
4	補助金等収入	4,929,632	4,475,480	4,574,708	4,384,734
7	雑収入	831,677	427,269	270,746	391,003
8	特定預金取崩収入	0	152,440	0	630,000
当期収入合計(A)		25,965,809	24,394,439	26,068,954	25,460,115
前期繰越収支差額		3,542,440	3,316,116	2,071,326	2,945,146
収入合計(B)		29,508,249	27,710,555	28,140,280	28,405,261
	支出	平成6年度	平成7年度	平成8年度	平成9年
1	運営費	14,655,978	14,449,239	14,845,535	15,572,489
2	固定資産取得支出	117,000	152,440	0	0
3	積立預金支出	20,000	555,405	20,000	638,715
4	事業費	11,291,207	10,376,711	10,189,246	9,944,148
5	雑支出	107,948	105,434	140,353	198,263
当期支出合計(C)		26,192,133	25,639,229	25,195,134	26,353,615
当期収支差額(A)-(C)		-226,324	-1,244,790	873,820	-893,500
次期繰越収支差額(B)-(C)		3,316,116	2,071,326	2,945,146	2,051,646

南部地区歯科医師会

法人認可される

関係者を招き祝賀会

これまで任意団体だった南部地区歯科医師会は、県から社団法人としての認可が下り、九日、那覇市内のグランドキャッスルで設立祝賀会を開いた。歯科医師会は県内に五支部あるが、初めての社団法人となる。

この日の祝賀会には会員はじめ、新垣副知事（知事代理）、宜保好彦県医師会会長、西平守広県歯科医師会会長ら多数が出席した。南部歯科医師会は糸満市から那覇市、南部糸満市まで百七十四人の会員を抱え、全体の六割を占めている。

三役は留任したが、友利政三会長は「県民の健康維持や社会福祉の向上に今後も努めていきたい。地域の要請にこたえられるような態勢をとっていくのが社会的使命」と抱負を語っていた。

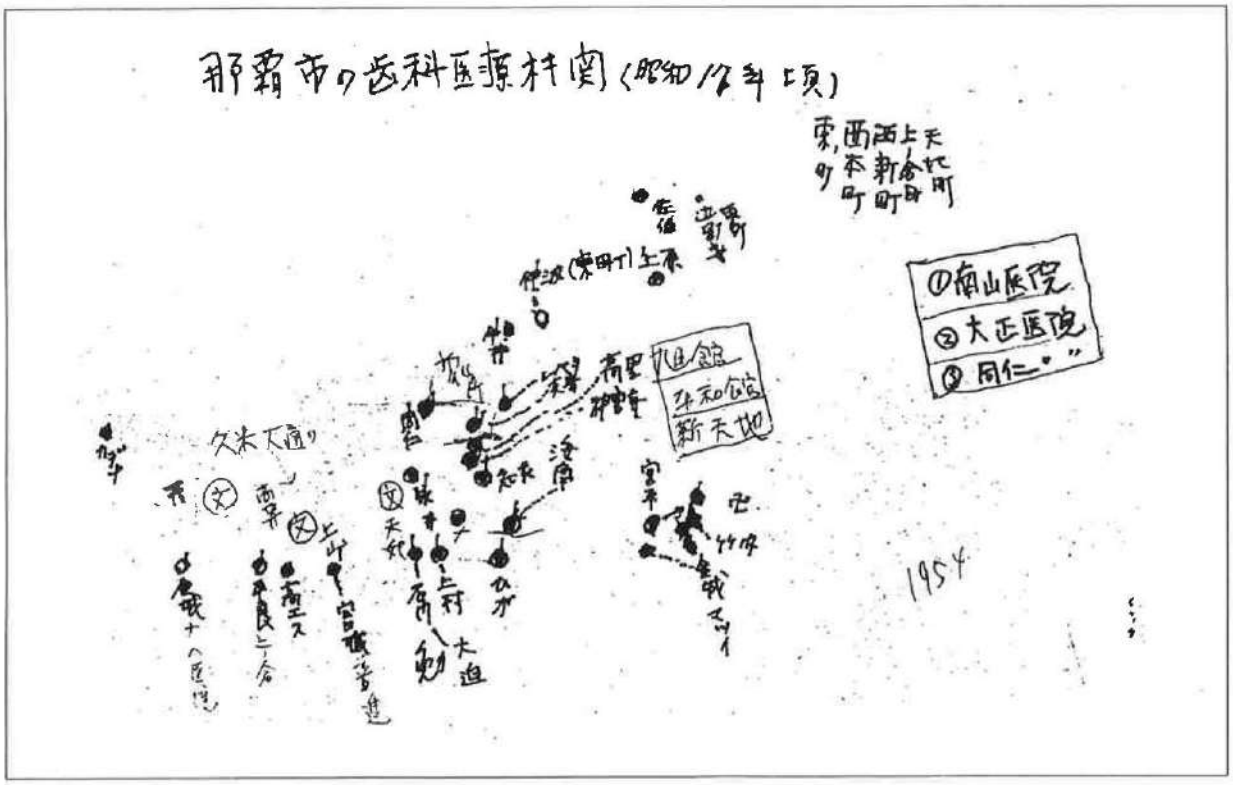
昭和62年2月10日琉球新報（夕刊）

B. 年代別執行部の役員等の変遷

組織に於いては役員のつながりでその組織の中身がある程度理解できる。ここでは明治、大正、昭和の最初の頃の沖縄における歯科医師会活動をしてきた役員を取り挙げてみたい。最初に歯科医師会結成の時、13名で発足しているが、実際には人数が足らず歯科兼業の医師にもお願いして、どうにか歯科医師会が発足出来た。その頃はまだまだ人材が不足しており、役員の変化もない状態が続いていた。また自力で現在のような事務員を置き、会務運営を行うことはなかった。第二次大戦前に行政等の政策で歯科医師会に事務員が居た時もあったようであるが、極めて一時期であった。沖縄における歯科医師会の活動は終戦後から昭和45年前後までは、沖縄独特の敗戦後の社会状況で他府県同様に活動ができる状態ではなかったのである。

そのような時期の沖縄県の歯科医師会の役員の概要を一覧表にしてみた。又昭和45年、南部支部から沖縄南部地区歯科医師会に昇格した。昭和62年には社団法人南部地区歯科医師会を発足し、現在に至っている。この時期から組織としての役職が次第に充実して年代と共に役員が多くなり、それに伴って事業が拡大していった。ここでは歴代の会長をはじめ各役員を年代に沿って一覧表にしてある。役職はその時々の執行部により改廃が見られ、事業に対する姿勢に違いが伺われる。現在は理事の元で委員会等があるが、この委員会も資料からははっきりしてない点もあり割愛してある。

初期の総会及び代議員等の資料がはっきりしてないが、これは今とは違い、組織の執行部を如何に確立するかで精一杯だったためか総会、代議員等の資料が確認出きない。また記録が定かでない項目もあり多少不備な点もあるかと思うが、御勘弁いただきたい。



Ⅰ.沖縄県歯科医師会の歴代会長一覧表

明治 6 年	1873 年		外務省出張所医局設置後右記の名称の変更があった。沖縄県医局→沖縄県医院→沖縄県病院
明治 34 年	1901 年		沖縄県病院那覇区松下町に移転
明治 35 年	1902 年		楊長積(永井長積)首里区鳥堀にて歯科医院開業
大正 9 年	1920 年	会長	佐々木義一　初期の沖縄県歯科医師会発足(会員 13 名)
			副会長:楊長積、　理事:山城正忠・久高将旺
			評議員:今井小四郎・杏文徳・真喜屋実淋・伊波孫衛兵
大正 12 年	1923 年	会長	山城正忠、　副会長:今井小四郎、　理事:久高将旺・山本恵喜
			評議員:佐々木義一・伊波孫衛兵・真喜屋実淋・杏文徳・友寄英傑
大正 14 年	1925 年	会長	楊長積
			歯科医師法改正で道府県に歯科医師会設立義務
大正 15 年	1926 年		改めて沖縄県歯科医師会設立
昭和 3 年	1928 年	会長	今井小四郎
昭和 4 年	1929 年	会長	永井長積
昭和 22 年	1947 年	会長	平良進　　沖縄歯科医学会設立
昭和 26 年	1951 年		沖縄歯科医師会設立
昭和 27 年	1952 年	会長	喜納宏　　沖縄群島歯科医師会
		会長	平良進　　琉球歯科医師会設立(72 名自由開業許可)
昭和 29 年	1954 年		沖縄歯科医師会設立(奄美群島日本復帰)
昭和 33 年	1958 年	会長	高江洲義光
昭和 35 年	1960 年	会長	小那覇善孝
昭和 37 年	1962 年	会長	高江洲義光
昭和 38 年	1963 年	会長	山川文雄
昭和 42 年	1967 年	会長	平良進
昭和 45 年	1970 年	会長	登川正樹
昭和 51 年	1976 年	会長	玉城信徳
昭和 55 年	1980 年	会長	比嘉良有
昭和 61 年	1986 年	会長	西平守廣
平成 3 年	1991 年	会長	又吉達雄
平成 9 年	1997 年	会長	喜屋武満

Ⅱ.南部支部の歴代役員一覧表

南部支部の頃の役員の仕事は、沖縄歯科医師会の会費の徴収や組織の伝達等の役目であり、支部事態の事業計画等の発想がないのどかな時代であった。またアメリカに占領された特異な時代でもあったため、日本の保険医療制度とは異なる制度があり、そのため昭和 47 年本土復帰時には制度の修正に多くの時間と労力を要した。

和歴	南部支部長	副支部長	備考	和歴	南部支部長	副支部長	備考
昭和 16 年度			(1941 年)	昭和 31 年度	上原信雄		(1956 年)
昭和 17 年度	知花朝申		(1942 年)	昭和 32 年度	上原信雄		(1957 年)
昭和 18 年度			(1943 年)	昭和 33 年度	友寄英彦	富本盛弘	(1958 年)
昭和 19 年度			(1944 年)	昭和 34 年度	友寄英彦	富本盛弘	(1959 年)
昭和 20 年度	嘉手納憑計	玉澤孝夫	(1945 年)	昭和 35 年度	富本盛弘		(1960 年)
昭和 21 年度			(1946 年)	昭和 36 年度	富本盛弘		(1961 年)
昭和 22 年度	沖縄歯科医学会設立		(1947 年)	昭和 37 年度	仲地庸之	阿嘉宗淳	(1962 年)
昭和 23 年度			(1948 年)	昭和 38 年度	阿嘉宗惇	西平守廣	(1963 年)
昭和 24 年度			(1949 年)	昭和 39 年度	阿嘉宗惇	西平守廣	専務
昭和 25 年度			(1950 年)	昭和 40 年度	村田精太郎	中村義宣	宮城智恵子
昭和 26 年度	沖縄歯科医師会設立		(1951 年)	昭和 41 年度	村田精太郎	中村義宣	宮城智恵子
昭和 27 年度			(1952 年)	昭和 42 年度	金城一史	山田勲	富本盛弘
昭和 28 年度			(1953 年)	昭和 43 年度	金城一史	山田勲	富本盛弘
昭和 29 年度	嘉手納憑計		(1954 年)	昭和 44 年度	金城一史	山田勲	富本盛弘
昭和 30 年度	嘉手納憑計		(1955 年)	昭和 45 年度	与那城勇	上原斉 富本盛弘	山田勲

Ⅲ.南部地区歯科医師会の歴代役員一覧表

和暦	昭和45年	昭和47年	昭和48年	昭和49年	昭和50年	昭和51年	昭和52年	昭和53年	昭和54年
西暦	1970	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979
役員数	4	7	7	9	9	8	8	9	9
会長	与那城勇	与那城勇	与那城勇	高良政利	高良政利	嶺井浩	嶺井浩	高江洲旭	高江洲旭
副会長	上原斉	高江洲旭	高江洲旭	中里治通	中里治通	高江洲旭	高江洲旭	古堅栄信	古堅栄信
副会長	富本盛弘 →松村政昭								
専務	山田勲	山田勲	山田勲	高良政勝	高良政勝	古堅英信	古堅英信	友利政三	友利政三
会計		兼浜政勝	兼浜政勝	上地健一	上地健一	座覇秀政	座覇秀政	新城彬明	新城彬明
監事		上原信雄	上原信雄	兼浜政勝	兼浜政勝	中村義宣	中村義宣	中村義宣	中村義宣
監事		高良政利	高良政利	当山良子	当山良子	兼浜政勝	兼浜政勝	兼浜政勝	兼浜政勝
総務		阿嘉昭宗	阿嘉昭宗	上地健一	上地健一	城間猛	城間猛	玉木史朗	玉木史朗
保険				上地健一	上地健一	座覇秀政	座覇秀政	新城彬明	新城彬明
学術				城間猛	城間猛			城間猛	城間猛

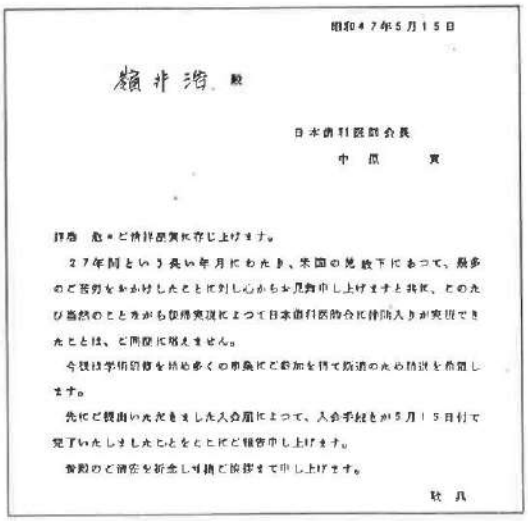
和暦	昭和55年	昭和56年	昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年	昭和61年	昭和62年
西暦	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987
役員数	13	13	13	13	13	13	13	13
会長	玉木史朗	玉木史朗	玉木史朗	玉木史朗	友利政三	友利政三	友利政三	友利政三
副会長	友利政三	友利政三	友利政三	友利政三	高江洲正勝	高江洲正勝	高江洲正勝	高江洲正勝
専務	渡口進一	渡口進一	新城啓和	新城啓和	新城啓和	新城啓和	新城啓和	新城啓和
会計	新城彬明	新城彬明	新城彬明	新城彬明	石渡研介	石渡研介	新城啓和	新城啓和
監事	中村義宣	中村義宣	中村義宣	中村義宣	宮里良雄	宮里良雄	宮里良雄	宮里良雄
監事	宮里良雄	宮里良雄	宮里良雄	宮里良雄	大城正雄	大城正雄	大城正雄	大城正雄
総務	兼浜政勝	兼浜政勝	漢那強	漢那強	新垣元洋	新垣元洋		
保険	新城彬明	新城彬明			上原淳 赤峯悦生	上原淳 赤峯悦生	新垣元洋	新垣元洋
学術	漢那強	漢那強	上原淳 宮城正廣	上原淳 宮城正廣	宮城正廣	宮城正廣	宮城正廣	宮城正廣
厚生	宮城正廣	宮城正廣	大城正雄	大城正雄	徳山清宗	徳山清宗	徳山清宗	徳山清宗
広報	大城正雄	大城正雄	饒波正太郎	饒波正太郎	仲里正博	仲里正博	仲里正博	仲里正博
学校	石渡研介	石渡研介	饒波・石渡	饒波・石渡	石渡・赤峯 伊礼昭洋	石渡・赤峯 伊礼昭洋	伊礼昭洋	伊礼昭洋
公衆衛生	高良恒己	高良恒己	饒波・石渡	饒波・石渡	新垣元洋	新垣元洋	伊礼昭洋	伊礼昭洋
医療管理			漢那強	漢那強	上原・宮城 仲里正博	上原・宮城 仲里正博	新垣元洋	新垣元洋
調査			大城正雄	大城正雄	徳山清宗	徳山清宗	徳山清宗	徳山清宗
那覇地区							宮里修	宮里修
浦添地区							伊野波盛功	伊野波盛功
島尻地区							大城則安	大城則安

和暦	昭和63年	平成1年	平成2年	平成3年	平成4年	平成5年
西暦	1988	1989	1990	1991	1992	1993
役員数	14	14	14	14	14	14
会長	高江洲正勝	高江洲正勝	高江洲正勝	新城啓和	新城啓和	新城啓和
副会長	新城啓和	新城啓和	新城啓和	新垣元洋	新垣元洋	新垣元洋
専務	太田正昭	太田正昭	太田正昭	太田正昭	太田正昭	太田正昭
会計	安村庸	安村庸	安村庸	長濱正	長濱正	長濱正
監事	大城正雄	大城正雄	大城正雄	大城正雄	大城正雄	大城正雄
監事	仲里治通	仲里治通	仲里治通	宮里修	宮里修	宮里修
保険	屋宜優	屋宜優	屋宜優	屋宜優	屋宜優	屋宜優
学術	真境名由守	真境名由守	真境名由守	真境名由守	真境名由守	真境名由守
厚生	金城光也	金城光也	金城光也	照屋均	照屋均	照屋均
広報	新里叡	新里叡	新里叡	玉城生夫	玉城生夫	玉城生夫
学校	山川修	山川修	山川修	山川修	山川修	山川修
公衆衛生	山川修	山川修	山川修	山川修	山川修	山川修
那覇地区	玉城生夫	玉城生夫	玉城生夫	友寄清順	友寄清順	友寄清順
浦添地区	高宮城實之	高宮城實之	高宮城實之	塩浜康良	塩浜康良	塩浜康良
島尻地区	竹尾孝明	竹尾孝明	竹尾孝明	上地智博	上地智博	上地智博

和暦	平成6年	平成7年	平成8年	平成9年	平成10年	平成11年
西暦	1994	1995	1996	1997	1998	1999
役員数	14	14	14	13	13	13
会長	新垣元洋	新垣元洋	新垣元洋	太田正昭	太田正昭	太田正昭
副会長	太田正昭	太田正昭	太田正昭	山川修	山川修	山川修
専務	山川修	山川修	山川修	長濱正	長濱正	長濱正
会計	長濱正	長濱正	長濱正	友寄景淳	友寄景淳	友寄景淳
監事	宮里修	宮里修	宮里修	宮里修	宮里修	宮里修
監事	大城則安	大城則安	大城則安	安村庸	安村庸	安村庸
保険	屋宜優	屋宜優	屋宜優	屋宜優	屋宜優	屋宜優
学術	友利隆俊	友利隆俊	友利隆俊	嘉手納一彦	嘉手納一彦	嘉手納一彦
厚生	照屋均	照屋均	照屋均	大西満	大西満	大西満
広報	友寄清順	友寄清順	友寄清順	友寄清順	友寄清順	友寄清順
学校	友利隆俊	友利隆俊	友利隆俊	友利隆俊	友利隆俊	友利隆俊
公衆衛生	玉城均	玉城均	玉城均			
那覇地区	砂川英樹	砂川英樹	砂川英樹			
浦添地区	富島修	富島修	富島修	湖城秀久	湖城秀久	湖城秀久
島尻地区	玉城英人	玉城英人	玉城英人			
地域歯科保険				玉城均	玉城均	玉城均
健康づくり推進				平良浩	平良浩	平良浩

IV.南部支部時代の会員の動向

	琉球歯科医師会登録者		琉球歯科医師会登録者			南部支部長	南部支部長	南部支部長	南部支部長
				南部支部長	村田精太郎	金城一史	金城一史	金城一史
	昭和 26 年度		昭和 27 年度	昭和 41 年	昭和 42 年	昭和 43 年	昭和 44 年	昭和45年度
	1951		1952	年度	1967	1968	1969	1970
				事務局				
1	久高将旺	玉城信徳	高木勝秀	久保泰司	阿嘉宗惇	富本盛弘	瀬底正雄	山田芳宏
2	玉沢孝夫	瀬底政俊	高里盛期	福山清定	伊礼迅	永井長秀		大山日出男
3	知花朝申	渡名喜吉	柴田米三	勇 次市	伊嘉吉子	中村義宣		与那城智
4	真喜屋実義	金城茂子	大久保光亮	林 哲雄	上原信雄	西平守廣		山口悦子
5	嘉手納憑計	識名博子	林 光徳	中江実吉	上原亀次	林 香吟		
6	上村誠之	松岡和利	林 香吟	恵 平治	上原利子	比嘉良有		
7	上原信雄	中村ヒロ	寺山宗良	岩倉政男	大嶺信三郎	比嘉良導		
8	小那覇全孝	上原利子	長山福蔵	前田清好	嘉納宏	比嘉初子		
9	嘉納宏	宮城トシ	阿嘉宗淳		嘉手納憑一	福岡米穂		
10	金城清栄	玉城正雄	池 礼夫		金城清栄	古堅英信		
11	仲地庸之		伊波清子		金城一史	真境名由喜		
12	高江洲義光				久高将旺	真境名由光		
13	川原保		福本 馨		呉渓順	又吉達雄		
14	知花英夫		永井長秀		崎山厚	宮城トシ		
15	神元繁弘		伊礼 迅		城間猛	宮城智恵子		
16	平良進		友利清勝		志田義則	村田哲雄		
17	神元初子		高嶺長二		瀬底正俊	村田芳子		
18	山川文雄		真境名由光		平良進	村田精太郎		
19	宮城秀男		赤地忠明		高良政利	山川文雄		
20	名嘉真武治		山内秀子		高良實	山崎友太郎		
21	登川正樹		重村幹夫		高木勝秀	山田勲		
22	高良実		与倉一也		高江洲勲	八木政秀		
23	当山良子		重信 貞		高江洲旭	与那城勇		
24	福本千枝		比嘉良有		知花朝申	中里治通		
25	与那嶺貞子		高良政利		知花朝敏	松村正昭		
26	村田哲雄		崎山 厚		当山良子	嶺井浩		
27	村田芳子		西里道子		當山正昭	兼浜政勝		
28	知花朝敏		久保泰司					



昭和47年5月15日

嶺井浩 殿

日本歯科医師会長
中 原 實

拝啓 益々ご清祥慶賀に存じ上げます。

27年間という長い年月にわたり、米国の統治下にあって、数多のご苦労をおかけしたことに対し心から御見舞申し上げますと共に、このたび当然のことながら復帰実現によって日本歯科医師会に併合入りが実現できたことは、ご同慶に堪えません。

今後は学術研修を始め多くの事業にご参加を得て協調のため精進を希望します。

先にご提出いただきました入会届によって、入会手続きが5月15日付で完了いたしましたことをここにご報告申し上げます。

貴殿のご清栄を新金しご精励ご旅御まで申し上げます。

敬具

V.南部地区歯科医師会の会員の動向

	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979
会長	与那城勇	与那城勇	与那城勇	高良政利	高良政利	嶺井浩	嶺井浩	高江洲旭	高江洲旭
年度	昭和46年	昭和47年	昭和48年	昭和49年	昭和50年	昭和51年	昭和52年	昭和53年	昭和54年
事務局					伊泊シズ子	伊泊シズ子	伊泊シズ子	伊泊シズ子	伊泊シズ子
一般会員		71	75				88	91	101
5年2項会員		1	2				6	8	11
準会員							2	2	2
終身会員									
合計		72	77	88	91	97	97	102	115
入会員数	13	12	6	9	5	9	3	9	14
入会者名	前川清子	友寄英彦	新垣義勝	渡口進一	青柳明	新垣繁信	高良恒巳	漢那強	島袋進
	高江洲義寛	小禄護	K.ウェンデル	幸地政雄	友利時野	真栄城正弘	赤嶺裕也	林昭治	安里幸子
	高江洲敏子	新城啓和	登川悠児	下地勲	垣花幸子	伊波徹	平沢孝敏	林房子	与那原エツ子
	与那城資子	松田芳樹	又吉盛弘	大城正雄	宮里修	八木茂		新垣元洋	宜志富哲昭
	宮里良雄	高良政勝	宮城正廣	鳩波正太郎	久高将成	井上弘善		徳山清宗	垣花博子
	福村義信	友利政三	国仲匡	八木正明		石渡研介		伊礼昭洋	下地規一
	下地恒代	新城彬明		玉木史朗		照屋正信		赤峯悦生	上原淳
	上地健一	阿嘉昭宗		前川清春		伊礼兼治		千葉章規	高橋学
	銘苅清	与那嶺貞子		新城茂夫		吉田稔		知花朝敏	赤崎栄
	上江洲紀子	高江洲正勝							国定剛
	座覇秀政	金城竹治							赤峯和昭
	嶺井勢子	上原斉							平良敏彦
	伊波富夫								阿嘉宗三
									屋宜優
退会会員			八木政秀		真喜屋恒代	屋宜政明	青柳明	平沢孝敏	
			池原正彦			金城輝夫	幸地正雄	井上弘善	
								小禄護	
逝去会員		喜納宏				久高将成	平良進		山川文雄

戦後の高良政利歯科医師資格証明書

歯科醫師免許證

高良政利

一九二六年十一月三日生

一九五一年民政布令第三十三號第三條

第三項により歯科醫師の免許を與える

よってこの證を交付する

一九五二年八月一日

行政主席　比嘉秀平 ㊞

本免許は第三八號をもって琉球歯科醫師籍に登録した

厚生局長　原屋善助 ㊞

高良政利個人開業許可証

許可證

歯科醫師　高良政利

大正十五年十一月三日生

民政布令第三十一號に依り糸満

醫療地區に於て個人開業を許可す

る

一九五二年一月廿六日

沖縄群島知事　平良辰雄 ㊞

高良政利歯科医師免許証

歯科醫師資格證明書

氏名　高良政利

大正十五年十一月三日生

右者合衆琉球民政布令第三十三号発布

以前琉球に於て二ケ年以上歯科醫業に携れ

る歯科醫師なることを證明す

一九五一年四月一日

厚生部長 ㊞

	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988
会長	玉木史朗	玉木史朗	玉木史朗	玉木史朗	友利政三	友利政三	友利政三	友利政三	高江洲正勝
年度	昭和55年	昭和56年	昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年	昭和61年	昭和62年	昭和63年
事務局	伊泊シズ子	伊泊シズ子	伊泊シズ子	伊泊シズ子	大屋照子	大屋照子	大屋照子	大屋照子	大屋照子
								大城リリ	大城リリ
一般会員	109	113	121	138	146	154	161	166	169
5条2項会員	9	12	14	8	6	4	7	7	6
準会員	1	1	1	1	1	1	1	1	1
終身会員	2	3	4	4	4	3	4	4	4
合計	121	129	140	151	157	162	173	178	180
入会員数	7	12	13	15	12	10	14	8	5
入会者名	大城則安	玉城民雄	新里正武	長濱正	長嶺将秀	神元憲和	上原智也	川平昌彦	高良政憲
	阿嘉徳真	玉城生夫	玉沢吉弘	平良恵信	比嘉民子	国仲徳貞	宮里正	塩浜康良	藤岡敏一
	玉城英人	仲里正博	太田正昭	当間淳司	儀保邦秦	比嘉千春	高良兼次	友利隆俊	山城政裕
	安村庸	金城朝和	友寄喜樹	外間宏正	赤峯雅和	玉城道子	比嘉良喬	黒潮武嗣	西平栄次郎
	島袋泰弘	新里叡	板倉繁巳	上原みどり	座覇守弘	奥住守彦	山川景康	村山ひとみ	砂川英樹
	真境名由守	兼城繁	城間吉弘	高宮城實之	大城玲子	金城康夫	宮良修	嘉数武男	
	友寄清順	伊野波盛功	金城賢治	照屋均	友利清一	砂川貴	上原修	玉城均	
		前川雅春	金城光也	上里和美	高嶺昭彦	上里忠昭	本永玲子	赤嶺秀紀	
		高良恭子	湖城秀仁	友寄景淳	當山邑子	新谷美稚子	瀬底正司		
		志村圭子	根間英人	仲間正武	石川寛	上地智博	富山慎司		
		村田道夫	安里博	高江洲實	村山正光		玉城斉		
		山川修	杉浦勝美	真境名勉	長嶺和弘		勝連厚雄		
			儀間清師	栖原英仁			玉城吉康		
				竹尾孝明			山内秀子		
				古波蔵信泉					
退会会員	千葉章規	高江洲敏子	福岡米穂	村田精太郎	平良恵信	松田芳樹		砂川貴	吉田稔
		与那原エツ子	伊波徹	高良恭子	下地勲	長嶺清子			
		登川悠児		金城正和	照屋正信	根間英人			
						新城茂夫			
						石川寛			
逝去会員				伊礼迅	山崎友太郎	金城清栄	上原みどり	村山正光	
				真境名由光	当山良子		上原信雄	比嘉良導	


第四五九號
學說合格承認證
沖繩縣士族
嘉手納憑計
右大正十年十二月東京ニ於テ施行シタル
齒科醫術開業學說試驗ニ合格シタルコ
トヲ承認ス
大正十一年三月八日
齒科醫師試驗委員長
文部次官正四位勲二等 南 弘


齒科醫師試驗合格證書
沖繩縣士族
嘉手納憑計
明治二十七年一月生
大正十四年第一回齒科醫師試
驗ニ合格ス仍テ此ノ證ヲ與フ
大正十四年五月八日
齒科醫師試驗委員長
文部次官正四位勲二等松浦鎮次郎
第八八號

	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
会長	高江洲正勝	高江洲正勝	新城啓和	新城啓和	新城啓和	新垣元洋	新垣元洋	新垣元洋	太田正昭
年度	平成元年	平成2年	平成3年	平成4年	平成5年	平成6年	平成7年	平成8年	平成9年
事務局	大屋照子	大屋照子	大屋照子	大屋照子	大屋照子	大屋照子	大屋照子	大屋照子	大屋照子
	大城リリ	大城リリ	玉城良枝	玉城良枝	玉城良枝	玉城良枝	玉城良枝	玉城良枝	玉城良枝
一般会員	177	182	181	193	197	203	206	212	211
5条2項会員	7	6	6	9	7	8	9	8	8
準会員	1	1	1	1	1	1	1	1	1
終身会員	4	8	8	10	10	10	10	13	14
合計	189	197	196	213	215	222	226	234	234
入会員数	11	9	1	20	6	8	4	10	4
入会者名	桜田速雄	普天間悟	平良浩	金城敏	川畑剛	真座孝	山内忠	宮城嗣典	濱口茂雄
	加藤進作	金城清一郎		宮城正照	上原かんな	澤田泰治	高良宗男	乾太郎	伊計真智子
	村田恵一	富島修		佐久川正明	仲本友久	福里英彦	上原徳夫	上田隆一郎	照屋健
	前川一彦	新崎裕子		下地隆之	大見謝健	玉那覇哲	西川謙	久田誠一郎	桃原均
	北原寛	新垣秀也		本永尚司	前城康一	宇根良		徳田安成	
	小禄真	城間三男		嘉手納一彦	小場幸夫	東盛靖		太田恭子	
	大西満	城間健		金城秀男		赤峯健		井出隆一郎	
	古堅譲	長堂忍		赤嶺勝哉		長堂芳子		洪柏青	
	真境名真吾	長嶺尚子		林清佐				長嶺恭正	
	仲村将健			湖城秀久				金城孝	
	譜得久朝保			豊岡幹世	屋宜裕子				
				諸見里亮	福本肇				
				上原和人	友寄清喜				
				松本真志	金城史明				
				仲里雅則	比嘉隆夫				
退会会員	藤岡敏一	伊野波盛功	勝連厚雄	赤嶺和昭	北原寛	大城玲子		国仲徳貞	徳山清宗
	桜田速雄		松村正昭	石渡研介	村田道夫				林清佐
					福本肇				新谷美稚子
逝去会員				下地規一	大浜当宗			上原亀次	阿嘉宗惇

	1998
会長	太田正昭
年度	平成10年
事務局	中村誠
	前原良枝
一般会員	209
5条2項会員	7
準会員	1
終身会員	14
合計	231
入会員数	1
入会者名	与儀實篤
退会会員	棚原英仁
	志村圭子
	宜志富哲昭
逝去会員	中村義宣

	1999
会長	太田正昭
	平成11年 10月現在
一般会員	207
5条2項会員	8
準会員	1
終身会員	16
合計	232
入会者名	西平守昭
	林秀樹
	西平三喜男
	上地栄作
退会会員	新城彬明



太田執行部(1997年4月～2000年3月)

VI.支部会(支部長)及び委員の変遷

1.支部会(支部長)の変遷

S46/1/21～	S47/6/5～	S49/4/1～		S51/4/1～	S53/4/1～
第一分会担当委員：松村政昭	城南支部長　：城間猛	☆上地健一理事担当	首里支部長	小禄護	座覇秀政
第一班班長：兼浜政勝	崇元寺支部長：上地健一	城南支部長　：座覇秀政	泊支部長	友利政三	渡口進一
第二班班長：高江洲旭	牧志支部長　：高江洲勲	崇元寺支部長：高江洲正勝	糸満支部長	前川清春	大浜当宗（代理）
	松尾支部長　：嶺井勢子	☆高良政勝理事担当	浦添支部長	新城彬明	伊礼兼治
第二分会担当委員：与那城勇	開南支部長　：高良政利	牧志支部長　：銘苅清			
第三班班長：嶺井浩	南支部長　：伊波富夫	松尾支部長　：金城正和	松尾支部長	与那城智	宮城正廣
第四班班長：当山良子		☆城間猛理事担当	南支部長	宮里良雄	又吉盛弘
		開南支部長　：友利政三	若狭支部長	登川悠児	当山正昭
第三分会担当委員：上原斉		南支部長　：伊波富夫			
第五班班長：高良政利			安里支部長	宮里修	照屋正信
第六班班長：八木政秀			牧志支部長	大城正雄	大城正雄
			開南市部長	仲村義宣	八木茂

		S55/4/1～			S57/4/1～	S59/4/1～	S61/4/1～		S63/4/1～	H3/4/1～	H6/4/1～	H9/4/1～
十日会	首里支部長	新城喜和	三水会	首里支部長	下地勲	国定剛	那覇東支部長	友寄順	山川景康	玉城斉	山城正裕	小湯幸夫
	泊支部長	赤嶺悦生		松川支部長	山川修	長濱正	班長	赤嶺雅和	玉城斉	富山慎司	古堅譲	井出隆一郎
	糸満支部長	大浜当宗(1年)→大城則安		浦添支部長	真境名由守	伊野波盛功	那覇西支部長	玉城生夫	高嶺明彦	比嘉良喬	玉城吉康	金城清一郎
							班長	板倉繁巳	長嶺和弘	神元憲和	金城健夫	新垣秀也
	浦添支部長	徳山清宗	15日会	与儀支部長	阿嘉徳真	新里敏	真和志支部長	屋宜優	友寄景淳	上原修	城間建	松本真志
15日会	松尾支部長	伊礼昭洋		泉崎支部長	安村肅	金城朋和	班長	湖城秀仁	仲間正武	嘉数武男	宮良修	長堂忍
	南支部長	新垣義勝		寄宮支部長	高橋学	太田正昭	小禄支部長	兼城繁	宮里正	赤嶺秀紀	高良政憲	赤嶺勝哉
	若狭支部長	当山正昭(代理)					首里支部長	桃原英仁	古波蔵信泉	加藤進作	護得久朝保	佐久川正明
			十日会	安里支部長	下地規一	赤崎栄	浦添支部長	安里博	當間淳司	上里忠昭	島袋進	湖城秀久
三水会	安里支部長	真栄城正弘		牧志支部長	平良敏彦	平良敏彦	班長			友利清一	本永尚司	豊岡静世
	牧志支部長	饒波正太郎		松尾支部長	島袋泰弘	當間淳司→真境名勉						金城敦
	開南支部長	八木茂					糸満支部長	玉澤吉弘	前川雅春	玉城英人	上原智也	前川一彦
			一日会	若狭支部長	仲里正博	村田道夫	豊見城支部長	竹尾孝明	座波守弘	高江洲實	小禄真	金城秀男
				小禄支部長	赤嶺裕也	宜志富哲昭	島尻支部長	照屋均	上地盛博	瀬底正司	村田恵一	諸見里亮
				糸満支部長	大城則安	大城則安						



平成九年度～十一年度の支部役員

2.各種委員会の変遷

和暦	昭和55年～	昭和57年～	昭和59年～	昭和61年～	昭和63年～	平成3年～	和暦	平成6年～
西暦	1980年～	1982年～	1984年～	1986年～	1988年～	1991年～	西暦	1994年～
会長	玉木史朗	玉木史朗	友利政三	友利政三	高江洲正勝	新城啓和	会長	新垣元洋
選挙管理	富本盛弘 与那城智 宮城智恵子 上江洲紀子	富本盛弘 与那城智 宮城智恵子 上江洲紀子	富本盛弘 与那城智 宮城智恵子 上江洲紀子	富本盛弘 与那城智 宮城智恵子 上江洲紀子	与那城智 宮里修 宮城智恵子 上江洲紀子	与那城智 宮里良雄 宮城智恵子 上江洲紀子	選挙管理	与那城智 宮里良雄 宮城智恵子 上江洲紀子
財務				石渡研介 国定剛 上原亀次 中村義宣 赤嶺雅和	赤嶺雅和 友寄景淳	安村庸 友寄景淳 赤嶺雅和	財務	安村庸 友寄景淳 赤嶺雅和
公衆衛生 学校歯科				山川修 平良敏彦 島袋泰弘 友寄清順	島袋泰弘 友寄清順 奥住守彦	赤嶺秀紀 友利清一 神元憲和 →玉城均 前川一彦 加藤進作 平良浩	公衆衛生	赤嶺秀紀 平良浩 前川一彦 加藤進作 新垣秀也 本永尚司
学術				下地規一 真境名由守	友寄景淳 玉城斉 長濱正	友寄景淳 玉城斉 友利隆俊	学術 学校歯科	護得久朝保 玉城斉 嘉手納一彦
厚生				大山日出男 上原亀次 赤嶺和昭 長濱正 太田正昭	儀保邦康 →上原修 玉城吉康	玉城吉康 大西満 上原修	厚生	玉城吉康 宮良修 村田恵一
広報				安村庸 金城朝和 友寄景淳 村田道夫	湖城秀仁 比嘉良喬 藤岡敏一	高嶺明彦 宮里正 小禄真	広報	仲本友久 上原慎司 小場幸夫
保険				赤峯悦生 大山日出男 友寄清順 屋宜優 棚原英仁 安里博 玉澤吉弘 竹尾孝明 照屋均	仲里治通 高嶺明彦 湖城秀仁 大山日出男 伊礼兼治 瀬底正司 前川雅春 高江洲實 古波蔵信泉			
開業相談	永井長秀 与那城勇 上原亀次 西平守廣 林昭治 城間猛 中村義宣 友利政三 新城彬明 渡口進一 兼浜政勝	永井長秀 与那城勇 上原亀次 高江洲旭 友利政三 新城彬明 新城啓和 大城正雄 中村義宣						
諸規則				嶺井浩 玉木史朗 宮里修 大城則安 伊野波盛功				
特別				玉木史朗 大山日出男 赤嶺和昭 上原亀次 新垣元洋 徳山清宗				

和暦	平成9年～
西暦	1997年～
会長	太田正昭
選挙管理	与那城智 宮里良雄 宮城智恵子 上江洲紀子
財務	砂川英樹 本永尚司 讃得久朝保
地域歯科保健	城間健 豊岡幹世 友寄清喜
健康づくり推進	赤嶺秀紀 新垣秀也 佐久川正明
学術	玉城斉 徳田安成
学校歯科保健	小禄真
厚生	村田恵一 嘉数武男 赤嶺勝哉
広報	仲本友久 上原慎司 小嶺幸夫
保険	金城康夫 玉城斉 宮良修 城間三男 安里博 村田恵一 加藤進作

和暦	昭和49年4月 ～51年3月
西暦	1974年4月 ～1976年3月
会長	高良政利
公衆衛生	上原亀次 上原斉 岡嘉昭宗
福祉	新垣義勝 金城征夫 高良政利 中里治通 高良政勝

和暦	昭和60年8月23日～昭和62年3月13日	
西暦	1985年8月23日～1987年3月13日	
会長	友利政三	
法人設立準備委員会	定款部会	高江洲正勝 永井長秀 林昭治 嶺井浩 玉木史朗 中村義宣 宮里修 伊野波盛功 玉城生夫
	会計部会	新城啓和 宮里良雄 大城正雄 伊礼昭洋 石渡研介 赤峯悦生 兼城繁 屋宜優 新里叡 国定剛 棚原英仁
	資料作成部会	仲里正博 宮城正廣 大城則安 山川修 太田正昭 安村庸 村田道夫 友寄清順 玉澤吉弘 安里博
	共済部会	徳山清宗 大山日出男 上原亀次 赤嶺和昭 赤崎栄 金城朝和 長濱正 照屋均 竹尾孝明
	組織部会	新垣元洋

C. 南部地区歯科医師会の各種事業一覧表

Ⅰ.那覇市学校歯科保健大会

回	開催年月日 会場	演者 演題	大会テーマ	入場者数 (内訳)	南歯会長 那覇市教育長 担当理事
1	S60.10.11.(木) 労働福祉会館	東京大学医学部助教授:井上 直彦 『今、子供の口の中で何が起こっているか』 東京都立母子保健院院長:二木 武 『かむ子は育つ』	かむことは、なぜ大切なのでしょう	1150人 歯科関係 550人 学校保育園400人 一般招待 200人	友利 政三 稲嶺 盛国 宮城 正廣
2	S61.11.20(木) 那覇市民会館	大阪大学名誉教授:河村 洋二郎 『人間らしく生きるために(全身の健康のために口の健康を)』 会員講演:南部地区歯科医師会:高良政勝 『今沖縄の子どもの口の中に何が起こっているのか?』 養護教諭による講演:識名小学校養護教諭 仲本鈴子『識名小学校における歯みがき実践』	君のあごは大丈夫? かむことは、なぜ大切なのでしょう	1100人 歯科関係500人 学校関係400人 保育関係100人 一般 100人	友利 政三 山田 義良 宮城 正廣
3	S62.12.17(木) 那覇市民会館	鹿児島大学矯正学教授:伊藤 学而 『噛むことと口の発達』 会員講演:南部地区歯科医師会:高良政勝 『今沖縄の子どもの口の中に何が起こっているのか?』 PartⅡ 養護教諭による研究発表 :真和志小学校養護教諭:仲間 ヨシ子 『むし歯を予防するための指導と実践』	考えよう子どもの未来を!! かむことは、なぜ大切なのでしょう	900人 歯科関係 500人 学校関係 300人 一般・保育300人	友利 政三 山田 義良 宮城 正廣
4	S63.11.24(木) 那覇東町会館	日本大学医学部小児科教授:大国 真彦 『子供の成人病と食生活』 会員講演:南部地区歯科医師会:宮城 正廣 『噛めない子噛まない子の将来はどうなるのでしょう』 母親による体験発表:繞波 房枝 『ニンジン運動のすすめ』	かめない子 !かまない子 ! 子どもをむしばむ現代食	1100人 歯科関係 500人 学校関係 500人 一般・保育300人	高江洲 正勝 山田 義良 真境名 由守
5	H1.11.18(土) 那覇市民会館	神奈川歯科大学教授:斉藤 滋 『噛み回数と子供の健康(メカノサイトロジーとは)』 会員講演:南部地区歯科医師会:宮城 正廣 『口の健康と全身のかかわり』 学校長による指導実践発表 :沖縄市室川小学校校長:嘉手刈 喜郎 『お母さん方に望む子供の歯の保健指導』	『子どもの口の中が見えていますか』 噛む力と子どもの健康	1050人 歯科関係 650人 学校関係200人 一般・保育200人	高江洲 正勝 山田 義良 真境名 由守
6	H2.9.20(木) 那覇市民会館	朝日大学歯学部教授:船越 正也 『噛むことと脳のはたらき』 会員講演:南部地区歯科医師会:渡口 進一 『顔を見よう・口の中を見よう―歯列がおりなす表情―』 栄養士による研究発表 :泊小学校栄養士:仲宗根 房子 『何を食べると歯が丈夫になるの』	噛めば伸びるの?子どもの知能	1100人 歯科関係 500人 学校関係 300人 一般・保育300人	高江洲 正勝 嘉手納 是敏 真境名 由守
7	H3.11.22(木) パレット市民劇場	参議院議員:堂本 暁子 『良い歯がつくる元気な子ども』 会員講演:南部地区歯科医師会:渡口 進一 『顔を見よう・口の中を見よう―歯列がおりなす表情―』 PartⅡ 一般講演:松本 完正(84歳残存歯27本) 『良い歯と健康』 一般講演:新 洋子(平成3年度親と子の良い歯の表彰優勝者) 『むし歯予防―我が家の場合―』	GO!GO!8020 =食べる楽しみいつまでも=	500人(会場定員) 歯科関係 350人 学校関係 75人 一般・保育75人	新城 啓和 嘉手納 是敏 真境名 由守
8	H4.11.19(木) 那覇市民会館	鹿児島大学予防歯科教室:坂下 玲子 『咀嚼器官の初期発達』 会員講演:(社)南部地区歯科医師会:玉城 民雄 『学校歯科医として10年間子ども達をみつめて』 一般講演:那覇市立神原小学校PTA副会長 座安 英明 『学校と地域の連携の中で』	今、間いなおそう…哺乳の大切さ =0才から8020に向かって=	800人 歯科関係 500人 学校関係 150人 一般・保育150人	新城 啓和 嘉手納 是敏 真境名 由守

回	開催年月日 会場	演者 演題	大会テーマ	入場者数 （内訳）	南歯会長 那覇市教育長 担当理事
9	H5.10.14(木) 那覇市民会館	藤田保健衛生大学医学部 歯科口腔外科助教授：桑原 未代子 『噛むことと歯科保健』 会員講演：(社)南部地区歯科医師会：山川 修 『歯科健康相談をふりかえって』 一般講演：久米島小学校養護教諭 糸数啓子 『フッ素でむし歯予防』	かしこく食べよう よく噛んで ＝8020ぼくらの未来＝	750人 歯科関係 500人 学校関係 150人 一般・保育100人	新城 啓和 嘉手納 是敏 真境名 由守
10	H7.1.26(木) 那覇市民会館 (シンポジウム)	元東京大学助教授：井上 直彦 『かむことを考えて10年間』 日本大学総合科学研究所教授：大国 真彦 『小児成人病と噛まない子』 神奈川歯科大学口腔生化学教室教授：斉藤 滋 『食べる喜び噛みしめる幸せ』 沖縄県学校歯科医会理事：宮城 正慶 『顎関節症―患者の体験談』 コーディネーター南部地区歯科医師会：高良 政勝	かむことは、なぜ大切なのでしょう	730人 歯科関係 450人 学校関係 180人 一般・保育100人	新垣 元洋 嘉手納 是敏 友利 隆俊
11	H7.12.14(木) 那覇市民会館	食生活健康ジャーナリスト：砂田 登志子 『噛む子、みがく子、元気な子～丈夫な歯は一生の宝』 歯科医師講演：沖縄県学校歯科医会理事 宮城 正慶 『あごの関節の病気と全身への影響』 一般講演：那覇市立城西小学校栄養士 幸喜 市子 『さとうきびと歯の健康』 アトラクション 神原小学校(合唱)	かむことは、なぜ大切なのでしょう 標語 「よくかむと あごのきんにくいいきもち」	800人 歯科関係 450人 学校関係200人 一般・保育150人	新垣 元洋 嘉手納 是敏 友利 隆俊
12	H8.11.28(木) 那覇市民会館	料理研究家・エッセイスト：小林 カツ代 『元気と料理と噛むこと』 エッセイスト：ゆたかはじめ 『こわくない歯医者さん』 アトラクション 真和志小学校 真和志幼稚園(合唱)	かむことは、なぜ大切なのでしょう 標語「よくかんで、今からここからガンジュウ人生」	750人 歯科関係400人 学校関係160人 一般・保育190人	新垣 元洋 嘉手納 是敏 友利 隆俊
13	H9.11.27(木) 那覇市民会館	高知県立総合看護専門学校講師 (虫歯説法師)沖 義郎 『かむ子 つよい子 かしこい子～幼児期、学童期に「なぜ」かまねばならないか』 アトラクション 神原中学校(合唱)	かむことは、なぜ大切なのでしょう 標語「かむほどに、輝く笑顔きれいな歯」	830人 歯科関係540人 学校関係160人 一般・保育130人	太田 正昭 嘉手納 是敏 嘉手納 一彦
14	H11.2.4(木)	北海道医療大学歯学部歯科補綴学第1講座 助教授 石島 勉 『スポーツ選手は歯が命』 (社)南部地区歯科医師会会員 玉城 斉 『かみかみ育児法』 アトラクション 首里中学校首里汀良町子供獅子	かむことは、なぜ大切なのでしょう 標語「よくかむ子、強い体とじょうぶな歯」	498人 歯科関係301人 学校関係132人 一般・PTA65人	太田 正昭 渡久地 政吉 嘉手納 一彦



Ⅱ.家族忘年会

呼称	回	年月日	会場	参加者		会長	備考
				大人	子供		
家族慰安会	1	S53.12.23(土)	ハーバービュー H.	80		高江洲 旭	会費¥7,000
	2	S54.12.22(土)	グランドキャッスル	111		〃	会費¥6,000 夫人同伴¥8,000
	3	S55.12.20(土)	〃	141		玉木 史朗	会費¥8,000 夫人同伴¥12,000
	4	S56.12.19(土)	〃	150	84	〃	会費¥9,000 夫人同伴¥14,000
	5	S57.12.18(土)	〃	150	80	〃	会費¥10,000 家族同伴¥15,000
	6	S58.12.22(木)	〃	197	87	〃	以後無料(前納)
	7	S59.12.21(金)	〃	240	135	友利 政三	
	8	S60.12.21(土)	〃	248	140	〃	
	9	S61.12.27(土)	〃	240	130	〃	
家族忘年会	10	S62.12.25(金)	〃	250	170	〃	
	11	S63.12.8(木)	〃	265	170	高江洲正勝	
	12	H 1.12.21(木)	パシフィック H.	290	150	〃	
	13	H 2.12.20(木)	〃	300	150	〃	
	14	H 3.12.19(木)	〃	310	130	新城 啓和	琉球アユを蘇生させる会に12万円寄付(テレカ販売)、ビッグバンド
	15	H 4.12.22(火)	〃	310	150	〃	エイサー(執行部)、ビッグバンド
	16	H 5.12.16(木)	〃	310	200	〃	ビッグバンド
	17	H 6.12.22(木)	〃	305	200	新垣 元洋	シーウォーク
	18	H 7.12.22(木)	〃	300	200	〃	シーウォーク
	19	H 8.12.21(土)	〃	300	200	〃	踊ろうマカレナを(執行部)、シーウォーク
	20	H 9.12.18(木)	〃	300	200	太田 正昭	マミドーマ(執行部)、シーウォーク
	21	H10.12.17(木)	〃	250	200	〃	エイサー(執行部)



平成4年　屋台も大繁盛



平成9年　先輩方も にこやかに



平成4年　勇ましいエイサーも披露



昭和56年　当時よりサンタクロースも登場

Ⅲ.デンタルフェア

回	年月日(日数)	会場	来場者数(人) 南部	来場者数(人) 全県	県歯 担当理事	南歯 担当理事	備考
1	1977年(s52) 6/2～6/6 (5)	リウボウ	8,566 計 8,566	8,566	高良 政勝		
2	1978年(s53) 6/1～6/4 (4)	リウボウ	5,158 計 5,158	5,158	大山 日出男		北部地区第1回
3	1979年(s54) 6/1～6/4 (4)	リウボウ	5,460 計 5,460	6,410	大山 日出男		八重山地区第1回
4	1980年(s55) 6/4～6/8 (5)	リウボウ	2,503 計 2,503	6,524	崎原 日出男	高良 恒己	
5	1981年(s56) 6/4～6/7 (4)	リウボウ	2,512 計 2,512	6,076	崎原 日出男	高良 恒己	
6	1982年(s57) 6/4～6/7 (4)	リウボウ	2,067 計 2,067	4,628	渡口 進一	石渡 研介	
7	1983年(s58) 6/4～6/6 (3)	リウボウ	1,788 計 1,788	3,868	渡口 進一	石渡 研介	
8	1984年(s59) 6/2～6/4 (3)	リウボウ	1,741 計 1,741	3,856	渡口 進一	新垣 元洋	
9	1985年(s60) 6/2～6/4 (3)	リウボウ	3,801 計 3,801	6,840	渡口 進一	新垣 元洋	中部地区第1回 宮古地区第1回
10	1986年(s61) 6/4～6/6 (3)	リウボウ	3,612 計 3,612	7,182	渡口 進一	伊礼 昭洋	
11	1987年(s62) 6/3～6/5(3) 6/7 (1)	リウボウ マチナトS・C	2,607 1,329 計 3,936	6,941	下地 規一	伊礼昭洋	南歯法人化 浦添会場新設 地区移行テスト
12	1988年(s63) 6/4～6/5(2) 6/7 (1)	リウボウ マチナトS・C	2,688 1,649 計 4,337	7,988	伊礼 昭洋	山川 修	役員任期3年となる デンタルフェアが地区の主管事業となる
13	1989年(H1) 6/3～6/4 (2) 6/4 (1)	リウボウ マチナトS・C	2,830 1,287 計 4,117	8,115	伊礼 昭洋	山川 修	
14	1990年(H2) 6/3～6/4 (2) 6/10 (1) 6/4 (1)	リウボウ 首里りうぼう マチナトS・C	1,517 1,022 1,510 計 4,049	6,920	伊礼 昭洋	山川 修	首里会場新設 D・Fオリエンテーション
15	1991年(H3) 6/7～6/9 (3) 6/2 (1) 6/2 (1)	リウボウ 首里りうぼう マチナトS・C	2,676 782 1,356 計 4,814	7,970	仲里 正博	山川 修	那覇市補助25万増額 リウボウがパレット久茂地に移転(6階催事場)
16	1992年(H4) 6/4～6/7 (2) 6/7 (1) 6/7 (1)	リウボウ 首里りうぼう マチナトS・C	2,645 1,046 1,251 計 4,942	7,993	仲里 正博	山川 修	
17	1993年(H5) 6/4～6/6 (3) 6/6 (1) 6/6 (1) 6/6 (1)	リウボウ 首里りうぼう 那覇市保健C 浦添市保健相談C	2,946 1,222 687 1,870 計 6,725	10,033	仲里 正博	山川 修	小禄会場新設 浦添会場移設

回	年月日(日数)	会場	来場者数(人) 南部	来場者数(人) 全県	県歯担当理事	南歯担当理事	備考
18	1994年(H6) 6/4～6/5 (2) 6/4～6/5 (2) 6/4～6/5 (2) 6/5 (1)	パレット久茂地 首里りうぼう ジャスコ 浦添市保健相談C	1,355 1,785 2,610 621 計 6,371	9,413	真境名 由守	玉城 均	小禄会場移設 リウボウ6階からパレット久茂地2階に移設 那覇市3会場同日開催 那覇市補助金25万増額
19	1995年(H7) 6/3～6/4 (2) 6/3～6/4 (2) 6/3～6/4 (2) 6/4	とまりん 首里りうぼう ジャスコ 浦添市保健相談C	2,163 1,551 2,958 490 計 7,162	10,999	真境名 由守	玉城 均	那覇会場をとまりんに移設
20	1996年(H8) 6/8～6/9 (2) 6/8～6/9 (2) 6/8～6/9 (2) 6/9 (1)	とまりん コープ首里 ジャスコ 浦添市保健相談C	2,376 1,886 4,324 578 計 9,164	12,813	真境名 由守	玉城 均	首里会場をコープ首里に移設
21	1997年(H9) 6/8 (1) 6/8 (1) 6/8 (1) 6/8 (1)	とまりん コープ首里 ジャスコ 浦添市保健相談C	1,607 1,441 2,118 390 計 5,556	9,174	真境名 由守	平良 浩	1日開催となる ともだちチケット配布(会場近郊小学校) 那覇市補助金10万減額(一律10%)
22	1998年(H10) 6/7 (1) 6/7 (1) 6/7 (1) 6/7 (1)	とまりん コープ首里 ジャスコ 浦添市保健相談C	2,195 1,331 2,678 881 計 7,085	10,556	真境名 由守	平良 浩	ともだちチケット配布(那覇市内小学校) 那覇市補助金減額され765,000円となる



栄養士会による栄養相談コーナー



位相差顕微鏡による口内細菌観察



良い歯の表彰「いいなー…」

Ⅳ.その他

沖縄県に学校ができたのは1880年(明治13年)で、当時は島尻に10校、首里4校、伊江島に1校、計15校でスタートした。その後各地区に学校が増設するに従い健康問題が指摘され、明治31年に学校医制度が施行された。しかし、専門の歯科医師でなく学校医が歯牙検査も行っていたので、不満足な検診であった。齲蝕の蔓延する中、各地の小学校では歯科校医を委嘱する傾向が出始めた。明治39年になると医師法と同様に学校における歯科医師法が制定された。大正時代になると学校歯科医制の活動も活発になり、昭和6年6月23日ようやく学校歯科医及び幼稚園歯科医令が公布された。

昭和10年(歯科医師会会員31人)の沖縄県の学校歯科医の普及をみると、学校歯科医設置校は幼稚園2校、小学校14校になっていた。昭和18年の那覇市内の歯科医の状況は、20名前後の歯科医が、那覇市民や周囲の住民の診療にあたっており、学校検診も同様に各学校長の依頼を受け、検診していたことがうかがわれる。

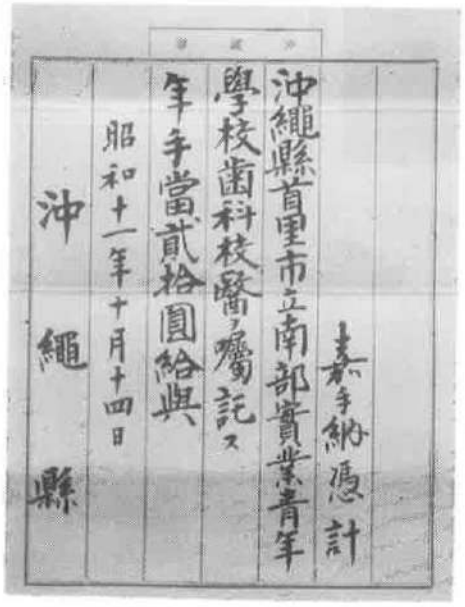
歯科医師の県民への歯の啓蒙にふれてみると、大正5年に開催された衛生展覧会で6万人の入場者に対し、すでに当時の歯科医師達が歯の衛生思想の啓発を行なっていた記録がある。大正11年には那覇市公会堂で歯科医師会の4名の先生方が講演会を行なっている。

昭和3年日本歯科医師会は口腔衛生思想を普及させる為、毎年6月4日をむし歯予防デーと決め、その後これは今日まで国民の中に歯の衛生週間として浸透して行く事になる。戦前・戦後を通し、我々の先輩の歯科医師は、地域における保健活動にたゆまない努力をした。現在も伝統を受け継ぎ、医療人として県民の啓蒙活動に従事しており、学校検診も同様に現在まで継続され、昭和50年から高校検診も実施されている。

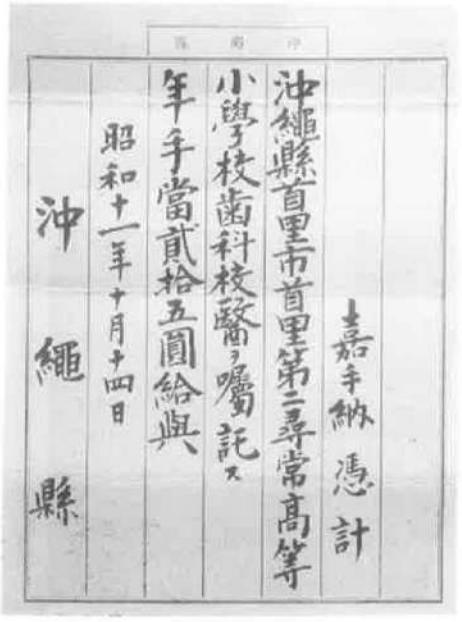
1才半の健診については、昭和52年厚生省児童家庭局通知により、各市町村に実施が通達された為、その後、南部地区歯科医師会として健診を引き継ぐ事になる。

昭和52年歯の衛生週間の中で沖縄県歯科医師会がデンタルフェアをスタートさせた。その後各地区歯科医師会が主管となり、現在22回(平成10年)になっている。その他、2才児健診、各市町村の健康まつり、成人健診等も行ない、8020運動に貢献している。

このように我々南部地区歯科医師会会員は、歴史の中で現在も過去から未来へと絶える事無く全会員が一体となって、住民の為に積極的に健康管理を推進している。ここでは、平成10年度の現会員の配置等の数例を記載し、今後の参考になればと願うものである。



昭和十一年当時の実業青年学校歯科校医辞令書



昭和十一年当時の小学校歯科校医辞令書

1. 平成10年度小学校歯科校医配置

	学校名	設置者	歯科校医名
1	安　謝	那覇市	金城 賢治
2	城　東	〃	国定 剛
3	城　北	〃	古波蔵信泉
4	城　西	〃	西平 守廣
5	城　南	〃	護得久朝保
6	真嘉比	〃	嘉数 武男
7	泊	〃	金城清一郎
8	大　道	〃	富本 盛弘
9	松　川	〃	新城 啓和
10	識　名	〃	屋宜 優
11	壺　屋	〃	高良 政勝
12	若　狭	〃	長嶺 和弘
13	前　島	〃	新垣 元洋
14	久茂地	〃	古堅 美信
15	神　原	〃	新城 徹
16	真和志	〃	宮里 修
17	与　儀	〃	山川 景康
18	城　岳	〃	宮城智恵子
19	天　妃	〃	比嘉 良馨
20	開　南	〃	又吉 達雄
21	垣　花	〃	赤嶺 勝哉
22	小　禄	〃	友寄 喜樹
23	高　良	〃	西川 謙
24	宇栄原	〃	赤嶺 裕也
25	松　島	〃	山川 修
26	古　蔵	〃	西平栄次郎
27	上　間	〃	玉城 均
28	大　名	〃	伊波 富夫

	学校名	設置者	歯科校医名
29	石　嶺	〃	上里 和美
30	仲井真	〃	上原 修
31	金　城	〃	金城 朝和
32	曙	〃	長堂 忍
33	小禄南	〃	高良兼次
34	真　地	〃	宮良 修
35	前　田	浦添市	上原 淳
36	沢　岻	〃	座覇 秀政
37	浦　城	〃	高良 恒己
38	牧　港	〃	友利 時野
39	当　山	〃	長嶺 尚子
40	浦　添	〃	真境名由守
41	内　間	〃	本永 尚司
42	宮　城	〃	湖城 秀久
43	神　森	〃	澤田 泰治
44	仲　西	〃	福里 英彦
45	港　川	〃	上田隆一郎
46	米　須	糸満市	上原 智也
47	西　崎	〃	大城 則安
48	高　嶺	〃	大西 満
49	兼　城	〃	玉城 英人
50	糸　満	〃	玉澤 吉弘
51	喜屋武	〃	普天間 悟
52	光　洋	〃	前川 一彦
53	潮　平	〃	前川,雅春
54	糸満南	〃	上原かんな
55	真　壁	〃	洪 柏青
56	南風原	南風原町	高橋 学

	学校名	設置者	歯科校医名
57	翔　南	〃	比嘉 民子
58	北　丘	〃	前川 清春
59	津嘉山	〃	上原 和人
60	東風平	東風平町	新垣 義勝
61	白　川	〃	金城 史明
62	佐　敷	佐敷町	瀬底 正男
63	馬　天	〃	〃
64	与那原	与那原町	照屋 均
65	与那原東	〃	〃
66	伊良波	豊見城村	新垣 繁信
67	長　嶺	〃	城間 健
68	座　安	〃	高江洲 實
69	豊見城	〃	竹尾 孝明
70	とよみ	〃	仲本 友久
71	上　田	〃	上原 徳夫
72	船　越	玉城村	渡口 進一
73	百　名	〃	又吉 盛弘
74	玉　城	〃	〃
75	久　高	知念村	瀬底 正俊
76	知　念	〃	諸見里 亮
77	大里北	大里村	友寄 景淳
78	大里南	〃	屋宜 裕子
79	具志頭	具志頭村	赤崎 栄
80	新　城	〃	仲間 正武
81	大　里	具志川村	玉城 民雄
82	清　水	〃	〃
83	粟　国	粟国村	座覇 守弘



1987年　体育館での学校検診



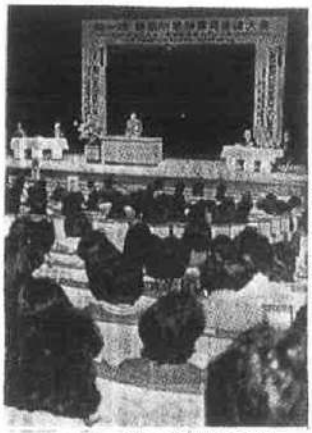
1987年　食後の歯磨き

2. 平成 10 年度中学校歯科校医配置

	学校名	設置者	歯科校医名
1	安岡	那覇市	高良 宗男
2	首里	〃	外間 宏正
3	真和志	〃	仲里 雅則
4	石田	〃	山城 正裕
5	那覇	〃	新垣 秀也
6	上山	〃	嘉手納一彦
7	神原	〃	友寄 清順
8	寄宮	〃	太田 正昭
9	古蔵	〃	安村 庸
10	小禄	〃	兼城 繁
11	松島	〃	徳田 安成
12	城北	〃	佐久川正明
13	鏡原	〃	高良 政憲
14	松城	〃	長濱 正
15	仲井真	〃	友利 隆俊

	学校名	設置者	歯科校医名
16	金城	〃	金城 光也
17	石嶺	〃	加藤 進作
18	浦添	浦添市	伊礼 兼治
19	港川	〃	高宮城實之
20	仲西	〃	当間 淳司
21	浦西	〃	富島 修
22	神森	〃	下地 隆之
23	糸満	糸満市	上原 智也
24	兼城	〃	大西 満
25	西崎	〃	普天間 悟
26	高嶺	〃	前川 一彦
27	三和	〃	洪 柏青
28	南風原	南風原町	前川 清春
29	南星	〃	村田 恵一
30	東風平	東風平町	真栄城正弘

	学校名	設置者	歯科校医名
31	佐敷	佐敷町	瀬底 正司
32	与那原	与那原町	阿嘉 徳真
33	豊見城	豊見城村	小禄 真
34	伊良波	〃	座覇 守弘
35	長嶺	〃	金城 秀男
36	玉城	玉城村	真座 孝
37	久高	知念村	瀬底 正俊
38	知念	〃	諸見里 亮
39	大里	大里村	赤峯 健
40	具志頭	具志頭村	上地 智博
41	具志川	具志川村	玉城 民雄
42	粟国	粟国村	座覇 守弘
43	尚学	私立	湖城 秀仁



かまない子、かめない子が増えていると問題提起が行われた歯科保健大会

かまない子は一種の〝文明病〟

あごの発育不全 増える

那覇市学校歯科保健大会で指摘

「かむ」ことはなぜ大切なの「八日目」物語から学ぶ歯科保健大会開く

「かむ」ことはなぜ大切なのか、子どもたちに考えてもらう「八日目」物語から学ぶ歯科保健大会が二十四日、那覇市教育会館で開かれ、二人余りの父母や教師、歯科医師関係者らが参加した。これは、那覇市歯科医師会（…）

主催者を代表して友利教三（…）

立教子保健統計調査が配布された。（…）

3. 平成 10 年度高校歯科検診担当表

高校名	人数	校医名	検診班										
浦添高校	1,398	友利 清一	上里 忠昭	島袋 進	當間 淳司	潮城 秀久	山内 忠	本永 尚司	上田隆一郎	澤田 泰治	新城 彬明		
浦添商業	963	饒波正太郎	友利 時野	長嶺 尚子	高宮城實之	安里 博	城間 吉弘	福里 英彦					
陽明高校	736	金城 敬	上原 淳	伊礼 兼治	下地 玲子	下地 隆之							
浦添工業	832	豊岡 幹世	座覇 秀政	真境名由守	比嘉 千春	富島 修	川畑 剛						
首里高校	1,470	當山 邑子	八木 茂	玉城 生夫	外間 宏正	玉城 直子	佐久川正明	懸得久朝保	仲村 将健	長堂 芳子	伊計真智子		
首里東高校	1,102	玉那覇 哲	伊波 富夫	安里 幸子	黒潮 武嗣	古波蔵信泉	棚原 英仁	上里 和美	長嶺 恭正				
開邦高校	735	真境名 勉	漢那 強	国定 剛	阿嘉 宗三	加藤 進作							
真和志高校	867	長嶺 将秀	新里 徹	長嶺 和弘	上原 修	嘉数 武男	友利 隆俊						
豊見城高校	1,258	城間 三男	垣花 博子	金城 朝和	赤嶺 雅和	座覇 守弘	金城 秀男	小禄 貞	久田誠一郎				
豊見城南	1,049	宜志富哲昭	与那城 智	赤峯 悦生	竹尾 孝明	平良 浩	城間 健	赤嶺 勝哉					
小禄高校	1,316	小場 幸夫	友寄 喜樹	金城 竹治	兼城 繁	赤嶺 裕也	友寄 清順	高良 兼次	山城ひとみ				
那覇西高校	1,116	宮里 正	金城 光也	島袋 泰弘	高良 政憲	新崎 裕子	赤嶺 秀紀	西川 謙					
知念高校	1,195	瀬底 正司	瀬底 正男	阿嘉 徳真	儀間 清師	照屋 均	普天間 悟	諸見里 亮	棚原 均				
糸満高校	1,312	大城 則安	前川 雅春	玉澤 吉弘	玉城 英人	大西 満	上原 智也	前川 一彦	上原かんな				
南風原高校	1,178	松本 真志	前川 清春	徳田 安成	宮良 修	山川 景康	宮城 正照	金城 史明					
那覇高校	1,700	宮城 正廣	中里 治通	大城 正雄	伊礼 昭洋	垣花 幸子	安村 剛	比嘉 民子	前城 康一	東盛 靖	濱口 茂雄	友寄 清吉	
那覇工業	1,086	塩浜 康良	濱口 進一	赤崎 栄	平良 敏彦	比嘉 良喬	真境名真吾						
沖縄工業	1,468	玉城 斉	上地 健一	高江洲 勲	山田 芳宏	友寄 景淳	川平 昌彦	西平栄次郎	仲里 雅則	井出隆一郎			
南部工業	505	砂川 英樹	新垣 秀也	真栄 孝									
那覇商業	1,335	高嶺 明彦	銘苅 清	上江洲裕子	仲里 正博	屋宜 優	新里 正武	儀保 邦泰	板倉 繁巳	嘉手納一彦			
南部商業	739	大見謝 健	上地 智博	高江洲 實	宮城 嗣典	村田 恵一							
南部農林	611	上原 慎司	高橋 学	仲本 友久	上原 徳夫								
沖縄水産	632	新垣 義勝	新垣 繁信	洪 柏青									
浦高校	1,286	宇根 良	高良 宗男	比嘉 隆夫	玉城 吉康	奥住 守彦	乾 太郎						
尚学中校	770	潮城 秀仁	宮里 修	古堅 譲	玉城 均	長堂 忍							
尚学高校	1,200	高良 政勝	山口 悦子	宮城智恵子	宮里 良雄	太田 恭子	山城 正裕	金城清一郎	上原 和人				
向陽高校	661	真栄城正弘	又吉 盛弘	仲間 正武	赤峯 健	照屋 健							
久米島高校	310	玉城 民雄											
那覇国際	360	金城 康夫	金城 賢治	當山 正昭									



一九六一年六月四日（日）久高島検診

4. 平成10年度 1才半児・2才児歯科健診日程表

☆ 那覇市（41回）

	月	日	曜	担当医	医院名	電話番号	担当医	医院名	電話番号	場所
1	4	2	木	儀保 邦泰	儀保歯科	862-6991	赤嶺 秀紀	あかみね歯科クリニック	858-0648	保健センター
2		9	〃	山口 悦子	山口整形外科歯科	855-8181	長嶺 将秀	長嶺歯科	854-3939	ＪＡ真和志
3		16	〃	島袋 泰弘	島袋歯科	858-4141	高良 政憲	高良歯科	857-3030	保健センター
4		23	〃	嘉手納一彦	嘉手納歯科	867-1580	金城清一郎	泊歯科クリニック	866-8470	ＪＡ真和志
5	5	14	〃	伊波 富夫	伊波富夫歯科	886-1057	安里 幸子	銘苅歯科	862-1419	首里公民館
6		21	〃	宮里 修	寄宮歯科	854-8766	當山 正昭	西武門歯科	868-7024	保健センター
7		28	〃	赤崎 栄	赤崎歯科	867-7077	宇根 良	うね歯科	858-3773	ＪＡ真和志
8	6	4	〃	兼城 繁	ハート歯科	859-1220	久田誠一郎	くだ歯科クリニック	862-6480	保健センター
9		11	〃	上原 修	うえはら歯科	833-2233	平良 敏彦	平良歯科	867-4485	ＪＡ真和志
10		18	〃	高良 宗男	あけぼの歯科	869-2772	黒潮 武嗣	くろしお歯科	862-8388	保健センター
11		25	〃	山田 芳宏	山田歯科	861-6743	西平栄次郎	さかした歯科クリニック	886-1212	ＪＡ真和志
12	7	2	〃	玉那覇 哲	たまなは歯科	887-3331	東盛 靖	那覇民主診療所	835-3035	首里公民館
13		9	〃	高良 兼次	ペリー歯科クリニック	858-4182	新崎 裕子	新崎デンタルクリニック	854-0018	保健センター
14		16	〃	小場 幸夫	ユキデンタルオフィス	836-6661	友寄 清順	友寄歯科	832-1509	ＪＡ真和志
15		30	〃	山川 景康	ひめゆり歯科	855-3966	山城 正裕	山城歯科	857-7660	保健センター
16	8	6	〃	垣花 幸子	垣花歯科	866-0200	板倉 繁巳	美栄橋歯科クリニック	862-9133	ＪＡ真和志
17		13	〃	城間 三男	しろま歯科クリニック	859-1119	山城ひとみ	むらやま歯科	857-1164	保健センター
18		20	〃	前城 康一	前城歯科	861-8822	護得久朝保	知花歯科	884-2216	ＪＡ真和志
19		27	〃	比嘉 民子	ホルト歯科	834-2932	金城 康夫	きんじょう歯科	864-2800	保健センター
20	9	10	〃	棚原 英仁	たなはら歯科	886-1232	加藤 進作	くばがわ歯科	887-6480	首里公民館
21		17	〃	中里 治通	中里歯科	867-4319	真境名真吾	まじきな歯科	862-2472	ＪＡ真和志
22		24	〃	西川 謙	西川歯科	859-4700	宮里 正	小緑歯科クリニック	866-0648	保健センター
23	10	1	〃	銘苅 清	銘苅歯科	862-0502	長堂 芳子	長堂歯科	835-1088	ＪＡ真和志
24		15	〃	湖城 秀仁	湖城歯科	832-1246	伊礼 昭洋	けんし歯科	867-3638	保健センター
25		22	〃	仲村 将健	下地歯科	885-6115	新里 叡	新里歯科	855-5212	ＪＡ真和志
26		29	〃	宮城 正廣	みやぎ歯科	832-3012	仲里 正博	仲里歯科	862-8241	保健センター
27	11	5	〃	玉城 均	ながた歯科	854-1182	上江洲紀子	上江洲歯科	861-2832	首里公民館
28		12	〃	真境名 勉	まじきな歯科クリニック	884-5066	外間 宏正	ほかま歯科クリニック	886-5122	ＪＡ真和志
29		19	〃	長嶺 和弘	ながみね歯科	863-1141	玉城 斉	たまき歯科	868-0736	保健センター
30		26	〃	安村 壽	ハーバービュー歯科	834-0975	阿嘉 宗三	いしみね歯科	886-1214	ＪＡ真和志
31	12	3	〃	赤嶺 勝哉	アップル歯科	859-1160	金城 光也	さつき歯科クリニック	837-6480	保健センター
32		10	〃	屋宜 優	屋宜歯科	863-7449	川平 昌彦	かわひら歯科	864-1816	ＪＡ真和志
33		17	〃	金城 朝和	おおはし歯科	834-1891	古堅 誠	ふるげん歯科	834-1110	保健センター
34	1	7	〃	比嘉 良喬	比嘉歯科	868-0355	奥住 守彦	おくずみ歯科クリニック	861-7678	ＪＡ真和志
35		14	〃	當山 邑子	宮平歯科	863-1776	新里 正武	しんざと歯科	868-2217	首里公民館
36		28	〃	友寄 喜樹	ともよせ歯科	858-8151	玉城 生夫	タマキ歯科	863-0350	保健センター
37	2	4	〃	玉城 吉康	まきし歯科	885-1182	漢那 強	漢那歯科	887-7694	ＪＡ真和志
38		18	〃	上地 健一	上地歯科	855-5202	宮里 良雄	宮里歯科	863-4769	保健センター
39		25	〃	新垣 秀也	久茂地歯科クリニック	866-7622	仲里 雅則	なかざと歯科	887-6408	ＪＡ真和志
40	3	4	〃	赤嶺 雅和	白山歯科クリニック	867-0306	宮城智恵子	みやぎ歯科	832-3012	首里公民館
41		11	〃	金城 竹治	前島歯科	857-3710	赤嶺 裕也	赤嶺歯科	858-0155	保健センター

☆ 浦添市(36回)

	月	日	曜	担当医	医院名	電話番号		月	日	曜	担当医	医院名	電話番号
1	4	9	木	当間 淳司	当間歯科医院	876-1290	19	10	8	〃	湖城 秀久	湖城歯科クリニック	874-1256
2		16	〃	友利 時野	牧港胃腸科外科歯科医院	876-5641	20		15	〃	福里 英彦	ふくざと歯科医院	875-0121
3		23	〃	上原 淳	上原歯科クリニック	879-1555	21		22	〃	新城 彬明	新城歯科医院	877-5293
4	5	14	〃	上里 忠昭	三愛歯科医院	876-1203	22	11	5	〃	伊礼 兼治	伊礼歯科医院	877-9039
5		21	〃	友利 清一	G歯科クリニック	878-2535	23		12	〃	上田隆一郎	上田歯科医院	876-0032
6		28	〃	饒波正太郎	のは歯科医院	877-9217	24		19	〃	長嶺 恭正	ながみね歯科医院	876-6096
7	6	4	〃	座覇 秀政	経家歯科クリニック	876-1102	25	12	3	〃	安里 博	広栄歯科医院	879-0766
8		11	〃	本永 尚司	本永歯科クリニック	878-1181	26		10	〃	城間 吉弘	しろま歯科医院	878-6121
9		18	〃	比嘉 千春	ちはる歯科クリニック	877-6480	27		17	〃	高宮城實之	高宮城歯科医院	877-3621
10	7	2	〃	塩浜 康良	しおはま歯科医院	876-8244	28	1	7	〃	島袋 進	島デンタルクリニック	878-3034
11		9	〃	富島 修	とみしま歯科	879-8889	29		14	〃	真境名由守	浦添歯科クリニック	879-2812
12		16	〃	長嶺 尚子	アース歯科クリニック	875-4780	30		28	〃	当間 淳司	当間歯科医院	876-1290
13	8	6	〃	金城 敏	大平歯科クリニック	875-0648	31	2	4	〃	友利 時野	牧港胃腸科外科歯科医院	876-5641
14		13	〃	比嘉 隆夫	たかお歯科	879-6804	32		18	〃	上原 淳	上原歯科クリニック	879-1555
15		20	〃	山内 忠	やまうち歯科	875-2948	33		25	〃	上里 忠昭	三愛歯科医院	876-1203
16	9	3	〃	下地 隆之	国際歯科クリニック	879-6070	34	3	11	〃	友利 清一	G歯科クリニック	878-2535
17		10	〃	豊岡 幹世	とよおか歯科医院	877-1661	35		18	〃	饒波正太郎	のは歯科医院	877-9217
18		17	〃	澤田 泰治	さわだ歯科	876-4555	36		25	〃	座覇 秀政	経家歯科クリニック	876-1102

☆ 糸満市

	月	日	曜	担当医	医院名	電話番号		月	日	曜	担当医	医院名	電話番号
1	4	16	木	上原 かん	上原歯科医院	994-2066	12	10	1	〃	玉城 英人	い歯科医院	994-1827
2	5	7	〃	玉城 英人	い歯科医院	994-1827	13		8	〃	上原 智也	上原歯科クリニック	992-2888
3		21	〃	上原 智也	上原歯科クリニック	992-2888	14	11	5	〃	洪 柏青	かしわ歯科	992-4171
4	6	4	〃	洪 柏青	かしわ歯科	992-4171	15	12	3	〃	前川 一彦	ファミリー歯科クリニック	992-1818
5		18	〃	前川 一彦	ファミリー歯科クリニック	992-1818	16		17	〃	大西 潤	大西歯科クリニック	994-1450
6	7	9	〃	大西 潤	大西歯科クリニック	994-1450	17	1	7	〃	大城 則安	大城歯科	994-7808
7		23	〃	大城 則安	大城歯科	994-7808	18		28	〃	玉澤 吉弘	玉沢歯科	992-3841
8	8	6	〃	玉澤 吉弘	玉沢歯科	992-3841	19	2	4	〃	前川 雅春	フレンド歯科	994-4618
9		20	〃	前川 雅春	フレンド歯科	994-4618	20		18	〃	菅天間 悟	ふてんま歯科	994-8941
10	9	10	〃	菅天間 悟	ふてんま歯科	994-8941	21	3	4	〃	上原 かん	上原歯科医院	994-2066
11		24	〃	上原 かん	上原歯科医院	994-2066	22		11	〃	玉城 英人	い歯科医院	994-1827

☆ 南風原町

	月	日	曜	担当医	医院名	電話番号		月	日	曜	担当医	医院名	電話番号
1	4	9	木	金城 史明	みなみ歯科	888-1482	8	10	8	〃	宮良 修	みやら歯科	855-0982
2		30	〃	長堂 忍	長堂歯科医院	835-1088	9	11	12	〃	宮城 正照	宮城歯科クリニック	832-0008
3	5	14	〃	高橋 学	高橋歯科	889-5655	10	12	10	〃	友寄 景淳	トモヨセ歯科	886-1515
4	6	11	〃	友寄 清喜	友寄デンタルクリニック	836-5418	11	1	14	〃	村田 恵一	一日橋むらた歯科医院	889-6480
5	7	9	〃	佐久川 正	首里歯科医院	885-5597	12	2	18	〃	砂川 英樹	砂川歯科医院	832-2727
6	8	13	〃	宜志富 哲	宜志富歯科	889-8516	13	3	11	〃	照屋 健	上地歯科医院	998-2355
7	9	10	〃	赤峯 健	けん歯科クリニック	889-0011							

☆ 与那原町

	月	日	曜	担当医	医院名	電話番号		月	日	曜	担当医	医院名	電話番号
1	4	30	木	阿嘉 徳真	あか歯科	945-8097	5	12	10	〃	国定 剛	国定歯科	884-9025
2	6	25	〃	照屋 均	よなばる中央歯科	945-5588	6	1	28	〃	諸見里 亮	モロミ歯科クリニック	945-7714
3	8	27	〃	古波蔵 信	こはぐら歯科	886-1156	7	3	25	〃	真座 孝	真座歯科クリニック	944-1000
4	10	8	〃	上地 智博	上地歯科	998-2355							

☆ 豊見城村

	月	日	曜	担当医	医院名	電話番号		月	日	曜	担当医	医院名	電話番号
1	4	23	木	垣花 博子	垣花整形外科歯科	850-4160	11	10	1	〃	嘉数 武男	嘉数歯科	862-0010
2		30	〃	高江洲 勲	新栄歯科	861-4712	12		29	〃	赤峯 悦生	赤嶺歯科	850-0333
3	5	28	〃	松本 真志	松本歯科クリニック	835-2021	13	11	5	〃	上原 徳夫	豊見城歯科クリニック	850-1077
4	6	11	〃	金城 秀男	金城歯科クリニック	856-0136	14	12	17	〃	上原 和人	和歯科	855-5864
5		18	〃	上原 慎司	とみや歯科クリニック	864-1038	15		24	〃	小禄 真	まこと歯科	850-9009
6	7	16	〃	座覇 守弘	ざは歯科クリニック	850-5048	16	1	28	〃	新垣 繁信	沖縄協同病院	850-7951
7		23	〃	竹尾 孝明	竹尾歯科	856-3569	17	2	18	〃	仲本 友久	仲本歯科医院	856-0161
8	8	13	〃	城間 健	さわやか歯科クリニック	854-8211	18		25	〃	大見謝 健	おおみ歯科医院	856-5187
9		20	〃	高江洲 實	みのる歯科	850-6064	19	3	4	〃	平良 浩	つぼや歯科医院	853-5568
10	9	17	〃	宮城 嗣典	みやぎ歯科クリニック	864-0239	20		11	〃	与那城 智	歯科ヨナシロ医院	855-5511

☆ 玉城村

	月	日	曜	担当医	医院名	電話番号
1	4	30	木	八木 茂	八木歯科	863-0296
2	7	30	〃	大城 正雄	大城歯科	861-4879
3	10	1	〃	又吉 盛弘	又吉歯科クリニック	946-8313
4	1	14	〃	仲間 正武	なかま歯科	998-1234

☆ 浦添市2才児歯科健診(11月26日木)

担当医	医院名	電話番号
上原 淳	上原歯科クリニック	879-1555
島袋 進	島デンタルクリニック	878-3034
高宮城實之	高宮城歯科医院	877-3621
富島 修	とみしま歯科クリニック	879-8889
友利 清一	G歯科クリニック	878-2535
豊岡 幹世	とよおか歯科医院	877-1661



浦添市2才児歯科健診

☆ 与那原町2才児歯科健診

	月	日	曜	担当医	医院名	電話番号
1	5	7	木	金城 孝	南部徳洲会病院歯科口腔外科	998-3221
2	8	6	〃	徳田 安成	とくだ歯科クリニック	885-6688
3	11	5	〃	上里 和美	上里歯科医院	887-0093
4	2	4	〃	井出 隆一	ターミナル歯科医院	831-6215

5. 第22回（平成10年度）南部地区デンタルフェア　担当医配置表

	那覇会場（とまりん）		
当日管理者	新垣　秀也		
	1班	2班	3班
	9：15～13：00	12：30～16：	15：30～19：
顕微鏡	長堂　忍	城間　健	金城　朝和
大人相談	宮里　修	伊礼　昭洋	安村　庸
子供健診相談	大見謝　健	乾　太郎	仲村　将健
	高良　宗男	友寄　清喜	松本　真志
	長嶺　和弘	屋宜　優	宮城　正照
	古堅　譲	玉城　均	井出隆一郎
	山川　景康	奥住　守彦	山城　正裕
	赤嶺　雅和	嘉数　武男	久田誠一郎
歯磨きフッ素	金城清一郎	比嘉　良香	宇根　良
表彰写真	小場　幸夫	嘉手納一彦	友利　隆俊

	小禄会場		
	前川　一彦	高良政憲	
	1班	2班	3班
	9：15～13：00	12：30～16：	15：30～19：
	照屋　健	村田　恵一	諸見里　亮
	赤嶺　勝哉	西川　謙	山城ひとみ
	高良　兼次	城間　三男	宮里　正
	新崎　裕子	菅天間　悟	島袋　泰弘
	金城　光也	赤嶺　裕也	兼城　繁
	金城　竹治	友寄　喜樹	座覇　守弘
	上原　智也	上原かんな	洪　柏青
	金城　秀男	高江洲　實	上原　徳夫
	仲本　友久	小禄　真	大西　満

	首里会場（コープ首里）		
当日管理者	佐久川　正明		
	1班	2班	3班
	9：15～13：00	12：30～16：	15：30～19：
顕微鏡			
大人相談			
子供健診相談	玉名覇　哲	棚原　英仁	古波蔵 信泉
	玉城　吉康	呉境名　勉	阿嘉　宗三
	玉城　直子	上里　和美	外間　宏正
	黒潮　武嗣	西平　栄次郎	国定　剛
	金城　史明	真座　孝	伊波　富夫
		伊計　真智子	
歯磨きフッ素			
表彰写真	上原　慎司	加藤　進作	徳田　安成

	浦添会場（保健相談センタ	
	湖城秀久・豊岡幹世・金城敬	
	1班	2班
	9：00～12：30	12：30～16：
	安里　博	塩浜　康良
	伊礼　謙治	島袋　進
	比嘉　千春	高宮城實之
	福里　英彦	当間　淳司
	川畑　剛	上田　隆一郎
	長嶺　尚子	澤田　泰治
	比嘉　隆夫	城間　吉弘
	本永　尚可	富島　修
	山内　忠	長嶺　恭正
	友利　清一	下地　隆之
	金城　敬	豊岡　幹世



小禄会場　人・人・人

D. 歯科医師数の変遷

Ⅰ.南部地区歯科医師会会員数の変遷

南部地区歯科医師会の発足当初は今日の様にデータが揃っていない時期もあったが、表の様にある程度推察ができるのではないかと思う。

また沖縄県全体の歯科医数と比較しながら見ると新入会員の数は歯科医師増加の割に少ないようである。

和暦	昭和48年	昭和49年	昭和50年	昭和51年	昭和52年	昭和53年	昭和54年	昭和55年
西暦	73	74	75	76	77	78	79	80
一般会員	75				88	91	101	109
5条2項会員	2				6	8	11	9
終身会員					2	2	2	1
準会員					1	1	1	2
南歯会員数	77	88	91	97	97	102	115	121

和暦	昭和56年	昭和57年	昭和58年	昭和59年	昭和60年	昭和61年	昭和62年	昭和63年
西暦	81	82	83	84	85	86	87	88
一般会員	113	121	138	146	154	161	166	169
5条2項会員	12	14	8	6	4	7	7	6
終身会員	1	1	1	1	1	1	1	1
準会員	3	4	4	4	3	4	4	4
南歯会員数	129	140	151	157	162	173	178	180

和暦	平成1年	平成2年	平成3年	平成4年	平成5年	平成6年	平成7年	平成8年
西暦	89	90	91	92	93	94	95	96
一般会員	177	182	181	193	197	203	206	212
5条2項会員	7	6	6	9	7	8	9	8
終身会員	1	1	1	1	1	1	1	1
準会員	4	8	8	10	10	10	10	13
南歯会員数	189	197	196	213	215	222	226	234

和暦	平成9年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年
西暦	97	98	99	2000	2001	2002	2003	2004
一般会員	211	209						
5条2項会員	8	7						
終身会員	1	1						
準会員	14	14						
南歯会員数	234	231						

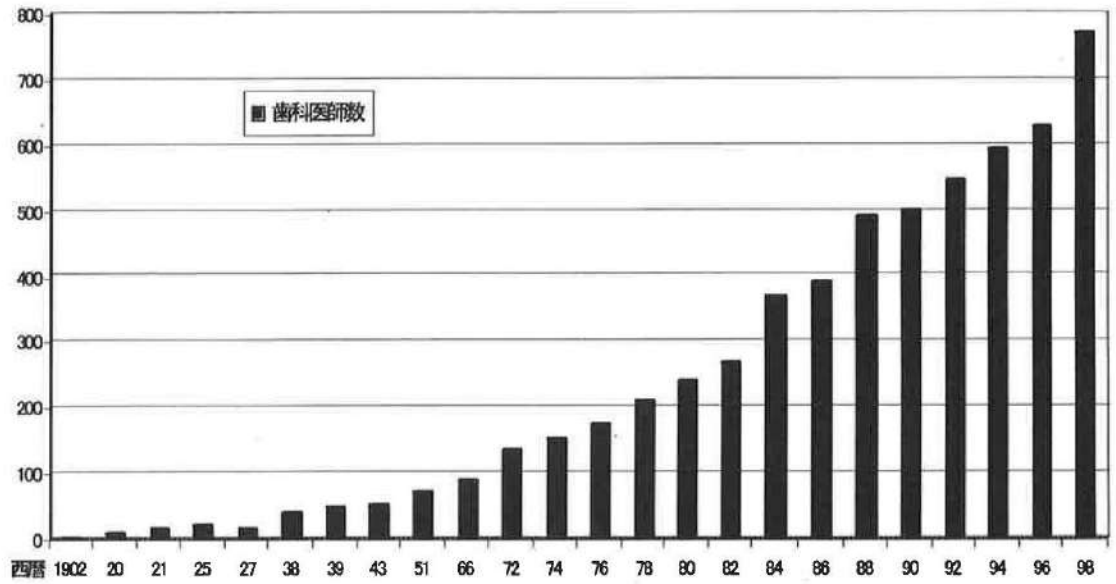
Ⅱ.沖縄県の歯科医師数の変遷

1902年楊長積から現在に至る歯科医師数を過去の文献を参考にして表にした。祖国復帰までは統計資料が見当たらないので文献にある資料を参考にした。1972年以降は2年毎に厚生省『衛生行政業務報告書』の歯科医師調査を主に参考にしてあるが、他の統計資料とは多少の時間的ずれがあり数字が違う所もある。

和暦	明治35年	大正9年	大正10年	大正14年	昭和2年	昭和13年	昭和14年	昭和17年
西暦	1902	1920	1921	1925	1927	1938	1939	1943
歯科医師数	2	9	16	20	16	40	48	51
前年比増加	2	7	7	4	-4	24	8	3

和暦	昭和26年	昭和41年	昭和47年	昭和49年	昭和51年	昭和53年	昭和55年	昭和57年
西暦	1951	1966	1972	1974	1976	1978	1980	1982
歯科医師数	72	88	135	152	174	208	240	268
前年比増加	21	16	47	154	22	34	32	28

和暦	昭和59年	昭和61年	昭和63年	平成2年	平成4年	平成6年	平成8年	平成10年
西暦	1984	1986	1988	1990	1992	1994	1996	1998
歯科医師数	369	391	491	499	545	594	629	771
前年比増加	101	22	100	8	46	49	35	142



医療従事者の年次別推移

種類 / 年次	医　師	歯科医師	薬剤師	介輔	歯科介輔	保健婦(士)	助産婦	看護婦(士)	准看護婦(士)	歯　科衛生士	歯　科技工士
昭和48年	555	151	623	49	16	179	188	892	460	10	160
49	579	152	656	49	16	184	213	902	557	26	145
50	621	165	719	45	16	176	168	1089	740	31	129
51	635	174	756	44	16	186	160	1204	828	53	126
52	737	184	768	40	15	190	142	1359	889	80	146
53	751	208	805	39	15	182	134	1495	1015	98	136
54	795	226	856	37	8	199	148	1689	1073	124	143
55	903	240	928	36	8	185	173	1997	1286	163	182
56	1,002	258	933	35	6	203	161	2184	1594	187	195
57	1,081	268	958	33	6	210	209	2369	1760	223	205
59	1,251	369	1,071	27	6	233	219	2707	2269	261	272
61	1,381	391	1,102	25	7	257	228	3264	2636	306	285
63	1,665	491	1,154	25	1	261	254	3917	3304	377	296
平成2年	1,835	499	1,171	21	1	266	242	4282	3441	345	267
4	1,972	545	1,205	16	1	321	244	4627	3650	391	279
6	2,076	594	1,332	12	1	349	281	5098	4168	434	275
8	2,189	629	1,368	11	0	353	255	5863	4382	499	303

資料:厚生省「医師、歯科医師、薬剤師調査」、「衛生行政業務報告」、介輔、歯科介輔は医務課調べ

保健所別医療従事者数並びに全国及び類似県との比較(平成8年末現在)

	医　師	歯科医師	薬剤師	保健婦(士)	助産婦	看護婦(士)	準看護婦(士)	歯　科衛生士	歯　科技工士	介輔	歯科介輔
沖縄県	2,189	629	1368	353	255	5,863	4,382	499	303	11	0
(人口10万対)	170.6	49.0	106.6	27.5	19.9	457.0	341.5	38.9	23.6		
名護保健所	137	37	68	35	22	452	367	17	27	4	
石川保健所	209	56	89	36	24	619	384	29	23	2	
コザ保健所	360	136	284	62	31	1,185	983	130	72	1	
中央保健所	496	201	481	66	72	1,271	979	168	94		
南部保健所	864	149	376	111	92	1,917	1,463	124	54		
宮古保健所	70	27	40	20	2	237	140	15	15	2	
八重山保健所	53	23	30	23	12	182	66	16	18		
全国実数	240,908	85,518	194,300	31,581	23,615	544,829	383,907	56,466	36,652		
全国平均	5,126	1,820	4,134	671.9	502.4	11,594	8,169	1201	780		
(人口10万対)	191.4	67.9	154.4	25.1	18.8	433.0	305.1	44.9	29.1		
類似県平均	1,973	532	1,368	330	169	5,143	4,834	646	347		
(人口10万対)	223.4	59.8	189.7	37.6	19.3	577.7	534.7	72.4	39.4		
島根県	1,715	359	768	358	194	4,327	3,236	516	333		
徳島県	2,132	733	2,236	295	213	5,103	4,289	717	403		
高知県	2,014	448	1,302	352	131	5,036	5,096	592	303		
佐賀県	1,810	515	1,343	290	117	4,990	4,698	587	309		
宮崎県	2,194	605	1,193	357	191	6,263	6,854	820	390		

資料:1.厚生省「医師、歯科医師、薬剤師調査」、「衛生行政業務報告」及び医務課調べ
:2. 介輔、歯科介輔は、医務課調べ

Ⅲ.明治・大正生まれの歯科医師一覧表

1.沖縄の明治生まれの歯科医師

	登録者名	生年	出身校	役職等その他	出身
1	楊長積	明治9年(1876)	東歯医専	県歯3代目会長(1925年)	鹿児島
2	松本和三郎			久茂地にて開業	大阪
3	佐々木義一			県歯初代会長(1920年)	鳥取
4	山城正忠	明治17年(1884)	東歯医専	県歯2代目会長(1923年)	
5	今井小四郎			県歯4代目会長(1928年)	
6	杏　文徳			兼業医、県歯理事(1923年)	
7	高江洲康亮			兼業医(友寄英彦回顧談)、大正医院	北谷
8	山本恵厚			県歯副会長(1925年)	
9	渡口三郎			医生教習所 9期生(明治31年卒)	
10	宮城普喜			医生教習所10期生(明治32年卒)	
11	吉田安盛			医生教習所11期生(明治33年卒)	
12	伊礼正次			医生教習所11期生(明治33年卒)	
13	大城孝之一			医生教習所11期生(明治33年卒)	
14	伊波孫兵衛			医生教習所12期生(明治34年卒)兼業医、県歯初代理事	
15	村田清成			医生教習所14期生(明治36年卒)	
16	平良　正			医生教習所15期生(明治37年卒)	
17	高良慎成			医生教習所16期生(明治38年卒)	
18	大嶺　信			医生教習所18期生(明治40年卒)	
19	名嘉真武光			医生教習所18期生(明治40年卒)	
20	神元繁種			医生教習所18期生(明治40年卒)	
21	友寄英傑			医生教習所19期生(明治41年卒)兼業医、県歯初代理事	糸満
22	高木勝秀	明治17年(1884)			
23	久高将旺	明治19年(1886)		前原地区病院(戦後自由開業前)県歯初代理事	八重山
24	高里盛期	明治19年(1886)			
25	柴田米三	明治23年(1890)	東歯医専	1925年宮古、1937年八重山開業、八重山初代会長	佐賀
26	玉沢孝夫	明治23年(1890)		糸満地区病院(戦後自由開業前)南部支部長	糸満
27	知花朝申	明治24年(1891)	日歯医専	首里地区病院(戦後自由開業前)県歯副会長	首里
28	真喜屋実義	明治26年(1893)	日歯医専	名護診療所　(戦後自由開業前)	那覇
29	嘉手納憑計	明治27年(1894)		与那原診療所(戦後自由開業前)南部支部長	那覇
30	上村誠之	明治29年(1896)		みなと診療所(戦後自由開業前)県歯副会長.第二次大戦戦死	
31	上原信雄	明治30年(1897)	東歯医学校	壷屋診療所　(戦後自由開業前)県歯理事(官選理事)	
32	小那覇全孝	明治30年(1897)	日歯医専	石川地区病院(戦後自由開業前)県歯会長.乙姫劇団.ブーテン	
33	喜名　宏	明治32年(1899)		知念地区病院(戦後自由開業前)沖縄群島歯科医師会会長	
34	金城清栄	明治35年(1902)	日歯医専	恩納診療所　(戦後自由開業前)	那覇
35	仲地庸之	明治36年(1903)		沖縄中央病院(戦後自由開業前)県歯副会長.理事	
36	高江洲義光	明治38年(1905)	日歯医専	平良川診療所(戦後自由開業前)県歯会長	具志川
37	川原　保	明治39年(1906)	日大専門部歯科	楚辺診療所　(戦後自由開業前)県歯監事	
38	林　光徳	明治39年(1906)			
39	林　香吟	明治40年(1907)			八重山
40	寺山宗良	明治41年(1908)			
41	長山福蔵	明治42年(1909)			
42	知花英夫	明治42年(1909)	九歯医専	北谷診療所(戦後自由開業前)沖縄県会議長.県歯理事	
43	神元繁弘	明治42年(1909)	九歯医専	謝花診療所(戦後自由開業前)本部に開業.長老的存在	
44	阿嘉宗惇	明治43年(1910)	歯医検定	県歯理事	那覇
45	呉　渓順	明治43年(1910)	京北歯科	国際通りで開業	那覇
46	吉田　実	明治43年(1910)	日大歯科医学校		与那原
47	池　礼夫	明治44年(1911)			
48	平良　進	明治44年(1911)	日歯医専	沖縄中央病院(戦後自由開業前)県歯会長2回	
49	神元初子	明治44年(1911)	東女歯医専	大見診療所　(戦後自由開業前)	
50	山川文雄	明治45年(1912)	日歯医専	田井等診療所(戦後自由開業前)県歯会長	
51	宮城秀男	明治45年(1912)	日歯医専	名護地区病院(戦後自由開業前)	
52	真喜屋実彬			兼業医(友寄英彦回顧談)第二次大戦戦死	嘉手納
53	金城嘉恒			県歯副会長.官選歯科医師会、第二次大戦戦死	
54	佐々木節雄			県歯専務理事.官選歯科医師会、第二次大戦戦死	

55	安里宗徳			第二次大戦戦死	
56	竹内勇次郎			第二次大戦戦死	
57	瑞慶覧朝敏			第二次大戦戦死	
58	富田幸吉			第二次大戦戦死	
59	山川伝明			第二次大戦戦死	
60	広永友輔			第二次大戦戦死	
61	玉城多恵			第二次大戦戦死	
62	吉田安徳			第二次大戦戦死	
63	大迫　亘				
64	吉田安茂				
65	徳森ミツ				屋慶名
66	篠原国彬				鹿児島
67	西村　？				広島県
68	久保泰司				
69	福山清定				
70	勇　次市				
71	林　哲雄				
72	中江実吉				
73	恵　平治				
74	岩倉政男				
75	前田清好				

沖縄は戦前から医師・歯科医師が少なかったが、沖縄戦で医療界はますます人材不足になった。
医療界の人材養成という事で、1949 年、伊礼迅先生と比嘉良有先生を第 1 回留学生として送った。
その後、契約学生、国費学生と名称は変わった。
当時の比嘉良有先生のパスポート。

琉球列島
米國軍政本部
旅行證明書

CERTIFICATE OF IDENTITY

HEADQUARTERS
RYUKYUS COMMAND
MILITARY GOVERNMENT OF
THE RYUKYUS

NO. 0098

The Deputy Commander for Military Government, Ryukyus Command requests all authorities of Foreign States, both Civil and Military, to Permit Mister Higa Ryun a Ryukyuan national enroute to Japan for the purpose of study

to travel freely and without hindrance, and in case of necessity to afford every possible aid and protection.

February 26 1949

For the Deputy Commander:

Signature

George J. McCiary
Actg Asst Adj Gen

比嘉良有ハ留學ノ爲日本ヘ旅行スルニ付琉球列島軍政府副長官ハ外國ノ其筋ノ諸機関ニ対シ通路故障ナク旅行セシメ且必要ナル保護援助ヲ與ヘラレン事ヲ要請ス

February 26 1949

副長官代理

George J. McCiary
Actg Asst. Adj. Gen

2. 沖縄の大正生まれの歯科医師

	登録者名	生年	出身校	役職等その他	出身
1	伊波清子	大正 2年(1913)			石川
2	名嘉真武治	大正 2年(1913)	日歯医専	屋部診療所(戦後自由開業前)	名護
3	玉城正雄	大正 3年(1914)			
4	大仲重雄	大正 3年(1914)	歯医検定		与那国
5	池村恒正	大正 3年(1914)	京城歯医専		宮古
6	蔡　篤泳	大正 3年(1914)			宮古
7	登川正樹	大正 4年(1915)	九歯医専	平安名診療所(戦後自由開業前)県歯会長,法人,会館建設	美里
8	福元　肇	大正 4年(1915)			
9	永井長秀	大正 4年(1915)	東歯医専	県歯監事	那覇
10	山崎友太郎	大正 4年(1915)	日歯医専	沖縄県学校歯科医会会長	宜野湾
11	伊礼　迅	大正 5年(1916)	日大専門部歯科	名護地区病院(戦後自由開業前)県歯理事,同好会設立	
12	呉　紹欽	大正 5年(1916)			宮古
13	与那城勇	大正 5年(1916)	歯医検定	南部地区歯科医師会初代会長	粟国
14	高良　実	大正 6年(1917)	日歯医専	豊見城診療所(戦後自由開業前)県歯理事	宜野湾
15	友利清勝	大正 6年(1917)	日歯医専		宮古
16	高嶺長二	大正 6年(1917)	日大歯科医学校	宮古地区会長	宮古
17	真境名由光	大正 6年(1917)	日大歯科医学校		那覇
18	大嶺信三郎	大正 7年(1918)	日歯医専		
19	当山良子	大正 7年(1918)	東女歯医専	宜野座診療所(戦後自由開業前)南部地区監事	那覇
20	福元千枝	大正 7年(1918)		大井川診療所(戦後自由開業前)	
21	赤地忠明	大正 7年(1918)	日大歯科医学校		嘉手納
22	与那嶺貞子	大正 8年(1919)	東女歯医専	大井川診療所　(戦後自由開業前)	那覇
23	村田哲雄	大正 8年(1919)		南風原診療所　(戦後自由開業前)県歯副会長	那覇
24	村田芳子	大正 9年(1920)	東女歯医専	大里診療所　(戦後自由開業前)	那覇
25	知花朝敏	大正 9年(1920)	東高歯医	真和志村診療所(戦後自由開業前)県歯専務理事	那覇
26	山内秀子	大正 9年(1920)	日女歯医専		宮古
27	友利恵亮	大正 9年(1920)	歯医検定	県歯代議員	宮古
28	重村幹夫	大正 9年(1920)			
29	玉城信徳	大正10年(1921)	京城歯医専	金武診療所　(戦後自由開業前)県歯会長	沖縄市
30	瀬底政俊	大正10年(1921)	大歯医専	佐敷診療所　(戦後自由開業前)県歯監事	佐敷
31	渡名喜吉子	大正10年(1921)	東女歯医専	糸満地区病院(戦後自由開業前)	糸満
32	金城茂子	大正10年(1921)	東女歯医専	野嵩診療所　(戦後自由開業前)	
33	与倉一也	大正10年(1921)			
34	中川智晴	大正11年(1922)	大歯医専	沖縄保護司連盟会長	与那城
35	嵩原　正	大正11年(1922)		学校歯科医会監事	
36	大浜当宗	大正11年(1922)	日大専門部歯科	市議(石垣市)	八重山
37	福岡米穂	大正11年(1922)			那覇
38	村田精太郎	大正12年(1923)	日歯大	県歯専務理事	今帰仁
39	識名博子	大正12年(1923)	日女歯医専	美里診療所　(戦後自由開業前)	宜野湾
40	重信　貢	大正12年(1923)			
41	松岡和利	大正13年(1924)			宮里
42	比嘉良有	大正13年(1924)	日歯医専	沖縄中央病院(戦後自由開業前)県歯会長	那覇
43	中村ヒロ子	大正15年(1926)		西原診療所　(戦後自由開業前)	西原
44	上原利子	大正15年(1926)	日女歯医専		那覇
45	宮城トシ	大正15年(1926)	日女歯医専		
46	高良政利	大正15年(1926)	日歯医専	沖縄中央病院(戦後自由開業前)南歯2代目会長	那覇
47	崎山　厚	大正15年(1926)	日大専門部歯科		那覇
48	池原　浩	不明			
49	宮本盛弘	不明			那覇
50	比嘉良導	大正15年(1926)	日歯大		那覇
51	東郷公雄	不明		県歯専務理事	

3.明治・大正生まれ出身校別一覧(出身校判明者のみ)

	略　称	正 式 名 称	明治生まれ	大正生まれ	合　計
1	東歯医専	東京歯科医学専門学校	3	1	4
2	日歯医専	日本歯科医学専門学校	8	8	16
3	日歯大	日本歯科大学	1	2	3
4	東高歯医	東京高等歯科医学校	0	1	1
5	日大専門部歯科	日大専門部歯科	1	3	4
6	日大歯科医学校	日大歯科医学校	1	3	4
7	日女歯医専	日本女子歯科医学専門学校	0	4	4
8	大歯医専	大阪歯科医学専門学校	0	2	2
9	九歯医専	九州歯科医学専門学校	2	1	3
10	東女歯医専	東洋女子歯科医学専門学校	1	5	6
11	京城歯医専	京城歯科医学専門学校	0	2	2
12	京北歯科	京北歯科	1	0	1
13	歯医検定	歯科医師検定試験	1	3	4
14	医生教習所	医生教習所	13	0	13
		合　計	32	35	67



識名博子先生結婚式(1956年12月7日)

当山良子
与那嶺貞子
神元初子
福井千枝

金城茂子
伊波清子
村田芳子

付録　南部地区歯科医師会会史編纂委員会の概要

a.会史編纂の経緯及び委員会メンバー

「社団法人南部地区歯科医師会の会史を」と言う気運が実際に公の場に出てきたのは新城啓和南部地区会長時代の通常総会の時でした。学校歯科保健大会の10年目の節目という事もあり学術編纂委員を中心にゲストの先生方の講演集を作り学校歯科保険大会の事業総括を行いました。　その後、一般会員からの発言で「前々から気になっていた南部地区歯科医師会の歴史について徐々に若い世代から解らなくなっていく状態であります。現在年輩の先生方も健在でそれなりに資料の収集が可能な時期です。この時期を逃がしてしまうと南部地区歯科医師会の歴史編纂は詳しく出来なくなる可能性があります」という上記の主旨の提言がありました。その答弁としては今後前向きに善処するということで執行部に一つの事業がここに芽をだしてきました。

次の新垣元洋会長の時、当時の副会長太田正昭を中心に年輩の先生方に聞き取り調査をしていましたが、現実には中々骨が折れる事で、時の会長新垣元洋は社団法人南部地区歯科医師会の会史編纂の委員長に、なけなしの予算で渡口進一を任命し委員はできるだけパソコンが扱える委員をと云う事で委員会を発足しました。　当時は予備的委員会でしたので７名でスタート、調査資料等の収集の準備に時間を費やしました。この際改めて会史の困難性を痛感し、現太田会長に事業が引き継がれた際本格的会史編纂委員会を発足新たに与那城智、山川修、友寄清順を委員に加え活動が進められてきました。また、友寄景淳、赤嶺雅和を平成１０年度にデータ・ファイルの編集で新たに参加していただき、この会史が完成できた事は委員会としては大変喜ばしい事です。　これも偏に会員の先生方の御協力の賜だと痛感しこの会史が心の糧として歯科医師として次世代へ受け継いで行く事を希望します。

委員会メンバー

１）委員長	渡口進一（渡口矯正歯科）	７）委員	友寄清順（友寄歯科医院）
２）委員	与那城智（歯科ヨナシロ医院）	８）委員	玉城英人（い歯科医院）
３）委員	安村庸（ハーバービュー歯科医院）	９）委員	金城清一郎（泊歯科クリニック）
４）委員	金城朝和（おおはし歯科医院）	10）委員	金城史明（みなみ歯科医院）
５）委員	山川修（山川デンタルクリニック）	11）特別委員	友寄景淳（トモヨセ歯科医院）
６）委員	砂川英樹（砂川歯科医院）	12）特別委員	赤嶺雅和（白山歯科クリニック）



会　史　編　纂　委　員

b.会史編纂の委員活動及び編集後記

沖縄県は第2次世界大戦でほとんど資料が紛失している中、昭和61年に発刊した沖縄県歯科医師会史に目を通してみると、素晴らしい内容に敬意を表さずにはいられません。はたして南部地区でどれ程の会史を作ることができるのだろうか？　不安と緊張の中において次の三点を基本にしようと考えました。

一つ目として南部地区歯科医師会は地区としての歴史は浅いけれど、南部地区歯科医師会会員は県歯の大多数を占め、戦前・戦後の苦労は他府県に見られない特異性を抱えているので20世紀の終わりに際し、今のうちに歴史を忠実に残したい。

二つ目は地区の会史の中でその特徴を表す為、大義名分は別にしてできるだけ読み易く楽しい内容にする事

三つ目は全会員ができるだけ会史の中に登場するよう、全員参加に努力する事

以上の三点を基本に委員を構成しました。以下は各委員の活動です。

与那城智委員は第2章「南歯誕生までに至るよもやま話」を執筆してもらった。彼は歯科医療及びその時々の社会状況を踏まえて、沖縄の歯科の歴史を中心に先輩の調査だけでなく、会員以外の方々からも聞き取り調査をし、本業そっちのけで各資料を収集し読みやすく書いてある。

安村庸委員には、委員長補佐役として目次の設定から全体的に目を通してもらった。彼は現在南歯の監事の役職にあるため、会計財務、別冊として会計決算の一覧表だけでなく日本の歯科歴史の概要、社団法人の成立定款資料編等を担当した。

金城朝和委員は第4章の比較年表を担当した。この項目は先輩から新入会員までできるだけ会員としての連携を保つ為のページである。明治の世相から現在まですべての会員が関係する年表の作成を、金城史明委員と二人三脚で行なった。

友寄景淳委員はデータのコンバートを担当、各委員が持っているコンピューターをより高度に指導し、写真等のデータへの入力、いわゆる画像処理を各委員に教え印刷に至る前までの方向に努力した。

山川修委員は現在南歯の副会長で、その範囲は会史全体を把握している為、第1章の事業内容だけでなく、現役員や会員とのパイプ役としてできるだけ会員の声を反映させた。かつ膨大な資料の中から簡潔明瞭に会史を整理した。

砂川英樹委員は直接会員の声を聞くため、写真等の資料収集をしてもらった。特に戦前・戦後の古い写真はこの沖縄戦でほとんど紛失している為、文献等からも応用し、四方八方奔走し先輩と個々に接触し集まった写真等を玉城英人委員と共にページに合わせ配置した。

赤嶺雅和委員は医院地図と会員名簿を担当した。医院地図においてはデータ処理の方法がかなり困難をきたし、彼は那覇市の情報課を訪ねて白地図を求め、コンピューターに入力する方法を考え、何度となく試行錯誤しながら開業地の地図と会員名簿を完成した。

友寄清順委員は現在南歯の広報担当理事なので、第3章「あの日あの時」を中心に諸先輩から聞き取り調査を行なった。特に歴代会長の座談会では全体的に総括をし、わかりやすく忠実にまとめた。

玉城英人委員は女性会員の座談会を担当し、他府県にない貴重な体験をまとめた。今後、会員が増えていく現状では良きアドバイスになると思う。砂川委員と写真も担当し、その選別、配置を行なった。

金城清一郎委員は最初先輩の聞き取り調査から始めた。特に第3章「あの日あの時」を全面的に担当し、パソコンを用いてデータ加工等を行ない、砂川、玉城委員らと共に最終的校正まで完成させた。

金城史明委員は仕事の第一歩から主に第4章の年表を分担した。膨大な資料の中から一つ一つ抽出し整理して

行く為、年表の作成はパソコンでも異なった面があり、金城朝和委員と共に年表の形作りをして完成させた。

会史編纂に携わった委員はいずれもこのような仕事の専門家ではなく、診療の合間を縫っての仕事である為、不十分な箇所や、不備な面を免れる事はできないと思うが、微力の致すところと寛容をお願いします。

ただ私達は、この会史が常に手元にあり、時には読まれ、歴史とお互いの親睦に役立ててもらえたらと願うものです。我々の先輩が如何に歯科医療に取り組み、戦前戦後を通して社会に奉仕してきたか、また我々はどのように進むべきか、という道筋の小さな灯になれば、会史編纂委員としてこんな幸せなことはありません。

終わりにこの会史編纂に力をお貸しくださった関係者の方々に重ねて深甚の謝意を捧げます。

会史編纂委員長　渡口進一

1999年10月30日

「南歯の歩み」参考文献

1）沖縄県歯科医師会史	29）沖縄タイムス
2）沖縄県歯科医師会誌	30）沖縄グラフ
3）日本歯科医師会史	31）沖縄民政府（嘉陽安男、久米書房）
4）南部地区歯科医師会誌	32）琉球年刊歌集（琉球狩社、小那覇全孝）
5）南部地区歯科医師会たより	33）むかし沖縄
6）「あしあと」沖縄県学校歯科15年史	34）昭和の沖縄（琉球新報社）
7）総会資料（県歯科医師会・南部地区歯科医師会）	35）終戦後の沖縄文化行政史（川平朝申）
8）那覇市学校歯科保健大会講演録	36）ことばに見る沖縄戦後史（1）（2）
9）日本歯科医籍年鑑	37）写真集沖縄戦
10）日本学校歯科医会五十周年記念誌	38）地方自治七周年記念誌（沖縄市町村長編1955）
11）歯科医師数を考える厚生省歯科衛生課	39）沖縄年鑑
12）東京医科歯科大学50年の回顧	40）沖縄から琉球へ（仲宗根源和）
13）50年の回想東京医科歯科大学歯科同窓会	41）沖縄歴史
14）福岡県歯科医師会史	42）沖縄戦後史（沖縄タイムス）
15）社会保険事業年報	43）沖縄戦後50年のあゆみ（沖縄県）
16）沖縄県衛生総計年報（金城清松　長田紀秀）	44）沖縄大百科辞典（沖縄タイムス社）
17）世界各国の歯科医療制度（イギリス総合歯科医療委員会編）	45）写真集沖縄（那覇出版社）
18）一筋の歯学への道普請	46）写真集沖縄戦後史（那覇出版社）
19)沖縄の歴史と医療史琉球大学医学部附属地域医療研究センター（九州大学出版会）	47）那覇100年のあゆみ（沖縄県）
20）那覇地区医師会史	48）那覇市史
21）沖縄県の福祉（沖縄県生活福祉部）	49）沖縄事始め世相史事典（山城善三、佐久田繁編）
22）長寿のあしあと（沖縄県）	50）写真でつづる那覇戦後50年（那覇市）
23）沖縄に於ける社会福祉の形成と展開（我喜屋良一）	51）紙銭を焼く（山城正忠）
24）阿檀の國の秘話、沖縄救らい史．沖縄救らいの歩み（上原信夫）	52）銛を打たれた男（花城真貴）
25）日録20世紀（講談社）	53）庶民がつづる沖縄戦後生活史(沖縄タイムス)
26）戦後50年（毎日新聞社）	54）県史シリーズ47沖縄県の歴史（山川出版社）
27）日本最後の闘い（月刊沖縄）	55）毎日ムック戦後50年（毎日新聞社）
28）琉球新報	

南 歯 の 歩 み

発行日　平成12年2月

編集 発行　社団法人 南部地区歯科医師会

〒901-2134　沖縄県浦添市港川 1-36-3

TEL 098-876-7364　FAX 098-876-6085

印刷　(有) マルサン印刷

〒901-2121　沖縄県浦添市内間 3-15-3

TEL 098-875-3176　FAX 098-875-0501